

みなみなこんだい あらく
市原市南中台遺跡・荒久遺跡A地点



2009

市原市教育委員会

序 文

市原市は、市内を南北に貫流する養老川がもたらした肥沃な平野と、緑豊かな山間部など恵まれた自然環境の中にあり、先史からの貴重な遺跡が多数残されています。特に、「国分寺台」は、その名のとおり、奈良時代に上総国分寺、国分尼寺が建立された場所であり、国分寺以外にも、縄文時代の大貝塚である祇園原貝塚、東日本最古の古墳である神門古墳群、我が国最古の文字資料である王賜銘鉄剣を出土した稲荷台1号墳など、各時代にわたって、全国的に話題を集めた遺跡が数多く所在します。

現在、国分寺台には閑静な住宅街が広がっていますが、国の史跡に指定された上総国分尼寺跡には、回廊及び中門が復元され、市民の憩いの場や児童生徒の郷土を学ぶ場として広く活用されています。

この一帯に土地区画整理事業が計画されたのは昭和45年のことであり、昭和46年から63年までの18年間にわたって発掘調査が行われました。今回報告する荒久遺跡A地点は昭和46年、南中台遺跡は昭和48年に発掘調査が行われました。

整理作業は、遺跡群が広大であることや数千年に及ぶ複合遺跡等の特殊性から、発掘調査から37年余りを経て、各方面からのご助力を賜り、今回ようやく報告書の刊行の運びとなりました。発掘調査によって得られた貴重な成果は、記録として将来に伝えると同時に、今日、市民の地域歴史研究に対する学習意欲が年々高まりを見せる中、本書の刊行がその一助となれば幸甚に存じます。

最後に、発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、多大なご尽力をいただきました、文化庁記念物課、千葉県教育庁文化財課、旧市原市国分寺台土地区画整理組合、旧上総国分寺台遺跡調査団及び旧財団法人市原市文化財センター並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

市原市教育委員会
教育長 山崎正夫

例 言

- 1 本報告書は、千葉縣市原市国分寺台中央1丁目5・6番地、7～9番地の一部に所在した南中台（みなみなこんだい）遺跡と、惣社1丁目1番地の一部に所在した荒久（あらく）遺跡A地点の発掘調査調査報告書である。調査段階の旧代表地番は、南中台遺跡が惣社字南中ノ台1064・1065番地、荒久遺跡A地点が惣社字下アラク1027-1番地である。
- 2 発掘調査は、国分寺台区画整理事業にともない、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導にもとづき、上総国分寺台遺跡調査団、下アラク遺跡発掘調査団が行った。南中台遺跡は、上総国分寺台遺跡調査団（団長滝口宏）のもと、当時同調査団副団長であった平野元三郎が代表を務めていた平野考古学研究所が中心となって実施した。荒久遺跡A地点は、上総国分寺台遺跡調査団発足以前であり、市原市下アラク遺跡発掘調査団が設置され、滝口宏顧問以下、平野元三郎団長が中心となって行った。
- 3 整理作業については、財団法人市原市文化財センターが行い、平成18年3月の財団法人の廃止以後は、市原市教育委員会が業務を引き継いだ。
- 4 遺跡名は、上総国分寺台遺跡調査団『東間部多古墳群 上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ』（第2章 国分寺台周辺の環境および遺跡）1974年、市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図 北部編』1988年、千葉県教育委員会『千葉県埋蔵文化財分布地図（3） 千葉市・市原市・長生地区（改訂版）』1999年にもとづく。
- 5 調査面積は、南中台遺跡が18,250 m²、荒久遺跡A地点が4,380 m²である。これは、全体図からの再測値である。
- 6 発掘調査、整理作業は、以下のとおりに行った。

荒久遺跡A地点 発掘調査 昭和46年12月1日～昭和47年3月20日
担当 平野元三郎、石井則孝

南中台遺跡 発掘調査 昭和48年5月～12月
担当 平野元三郎、谷島一馬、對島郁夫

整理作業

平成16年度 担当 櫻井敦史

平成18(12月～)・19・20年度 担当 大村直
- 7 整理作業は、荒久遺跡A地点が櫻井、南中台遺跡が大村を中心に行い、全体を大村がまとめた。貝類等については、鶴岡英一が担当した。
- 8 本書の執筆編集は主に大村が行ったが、鶴岡（第2章第3節2）が執筆を分担した。
- 9 施釉陶器については、大阪大学文学部準教授高橋照彦氏にご指導頂いた。荒久遺跡の須恵器の分類は、櫻井敦史、小橋健司が行った。
- 10 石質肉眼同定については、パリノ・サーヴェイ会社（同定：石岡智武氏）に委託した。
- 11 遺構図は1/80を基本とし、挿図平面図上の北は真北を指す。
- 12 土器観察表等については、添付のDVD-ROMのみの収録とした。DVD-ROMのフォーマットはWindows、Macに対応する。ファイル形式は、XLS、CSV、TXT（タブ区切り）形式であり、ファイル形式ごとにフォルダに格納している。表目次を参照のこと。本編についても、PDF形式で収録した。PDF設定は、Adobe Acrobat7.0による「標準」を基本としている。閲覧のためには、Adobe Acrobat Reader5.0以降（無償版）、ないしAdobe Acrobat（製品版）が必要である。また、遺物写真図版についてはRGBカラー版のPDFを追加した。詳細は巻末を参照のこと。
- 13 遺構略号は、「千葉県埋蔵文化財発掘調査標準」（千葉県教育委員会、平成16年4月）に従い、竪穴建物：SI、掘立柱建物：SB、土坑：SK、溝：SD、その他：SX、を使用した。
- 14 遺構番号およびグリッド番号は、本書作成の段階で変更している。遺物注記等については調査段階の遺構番号を使用しており、その対照は遺構一覧表に明記した。
- 15 本書に収録した出土遺物および調査記録は、市原市教育委員会埋蔵文化財調査センターで収蔵、保管している。

本文目次

序 文

例 言

第 1 章 調査の経緯と概要	1
第 1 節 調査にいたる経緯	1
第 2 節 遺跡の立地と概要	1
(1) 南中台遺跡	4
(2) 荒久遺跡 A 地点	13
第 2 章 南中台遺跡	17
第 1 節 竪穴建物	18
(1) 縄文時代	18
(2) 弥生・古墳時代	32
(3) 奈良・平安時代	111
(4) 時期不明	180
第 2 節 その他の遺構	181
第 3 節 貝塚	185
(1) 貝塚と出土土器	185
(2) 南中台遺跡出土の動物遺存体	189
第 4 節 縄文土器	197
第 5 節 その他の遺物	240
第 3 章 荒久遺跡 A 地点	244
第 1 節 竪穴建物	245
第 2 節 掘立柱建物	286
第 3 節 溝	289
第 4 節 その他の遺物	293
第 4 章 総 括	299
第 1 節 南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年	299
第 2 節 国分寺台地区における弥生時代後期から古墳時代前期の動態	335

挿 図 目 次

Fig. 1	南中台遺跡・荒久遺跡A地点位置図	2	Fig. 42	SI17(3) 遺物	54
Fig. 2	南中台遺跡・荒久遺跡A地点現状位置図	3	Fig. 43	SI18(1) 遺構・調査状況	57
Fig. 3	南中台遺跡調査区(新旧グリッド対照)	4	Fig. 44	SI18(2) 遺物、SI19(1) 遺構	58
Fig. 4	国分寺台地区と周辺の遺跡群	5・6	Fig. 45	SI19(2) 遺物・調査状況、SI20 遺構遺物・調査状況	59
Fig. 5	南中台遺跡・荒久遺跡A地点と周辺遺跡全体図	7・8	Fig. 46	SI21 遺構遺物・調査状況	60
Fig. 6	南中台遺跡周辺地形図	10	Fig. 47	SI22(1) 遺構遺物・調査状況	61
Fig. 7	南中台遺跡全体図	11・12	Fig. 48	SI22(2) 遺物、SI23 遺構遺物	62
Fig. 8	荒久遺跡A地点調査区	14	Fig. 49	SI24(1) 遺構・調査状況	64
Fig. 9	荒久遺跡A地点全体図	15	Fig. 50	SI24(2) 遺物・調査状況	65
Fig. 10	南中台遺跡遺構配置図(縄文時代)	17	Fig. 51	SI24(3) 遺物	66
Fig. 11	SI01(1) 遺構・調査状況	19	Fig. 52	SI24(4) 遺物	67
Fig. 12	SI01(2) 遺物	20	Fig. 53	SI25 遺構遺物・調査状況	68
Fig. 13	SI02 遺構・調査状況	21	Fig. 54	SI26 遺構遺物、SI27(1) 遺構・調査状況	69
Fig. 14	SI03(1) 遺構	23	Fig. 55	SI27(2) 調査状況	70
Fig. 15	SI03(2) 遺物・調査状況	24	Fig. 56	SI27(3) 遺物	71
Fig. 16	SI03(3) 遺物	25	Fig. 57	SI27(4) 遺物	72
Fig. 17	SI03(4) 遺物、SI04(1) 遺構・調査状況、SK02 遺構	26	Fig. 58	SI28 遺構遺物・調査状況	74
Fig. 18	SI04(2) 遺物	27	Fig. 59	SI29(1) 遺構遺物	76
Fig. 19	SI05(1) 遺構、SI06(1) 遺構、SK03 遺構	28	Fig. 60	SI29(2) 調査状況、SI30 遺構遺物	77
Fig. 20	SI05(2) 遺物・調査状況	29	Fig. 61	SI31 遺構遺物、SI32(1) 遺構	78
Fig. 21	SI05(3) 遺物、SI06(2) 遺物	30	Fig. 62	SI32(2) 遺物・調査状況	79
Fig. 22	SI06(3) 遺物・調査状況	31	Fig. 63	SI32(3) 遺物	80
Fig. 23	南中台遺跡遺構配置図(弥生・古墳時代)	32	Fig. 64	SI32(4) 遺物	81
Fig. 24	SI07 遺構遺物・調査状況	33	Fig. 65	SI33(1) 遺構・調査状況、SI34(1) 遺構	83
Fig. 25	SI08 遺構遺物	34	Fig. 66	SI33(2) 遺物	84
Fig. 26	SI09(1) 遺構・調査状況	36	Fig. 67	SI33(3) 遺物、SI34(2) 遺物	85
Fig. 27	SI09(2) 遺物	37	Fig. 68	SI34(3) 遺物、SI35(1) 遺構	86
Fig. 28	SI10 遺構遺物、SI11 遺構遺物	38	Fig. 69	SI35(2) 遺物・調査状況	87
Fig. 29	SI12(1) 遺構遺物・調査状況	40	Fig. 70	SI35(3) 遺物	88
Fig. 30	SI12(2) 遺物	41	Fig. 71	SI36(1) 遺構・調査状況	90
Fig. 31	SI13(1) 遺構	43	Fig. 72	SI36(2) 遺物	91
Fig. 32	SI13(2) 調査状況	44	Fig. 73	SI36(3) 遺物	92
Fig. 33	SI13(3) 遺物	45	Fig. 74	SI37 遺構遺物、SI38 遺構遺物、SI39(1) 遺構	94
Fig. 34	SI13(4) 遺物	46	Fig. 75	SI39(2) 遺物・調査状況	95
Fig. 35	SI14(1) 遺構・調査状況	47	Fig. 76	SI39(3) 遺物	96
Fig. 36	SI14(2) 遺物	48	Fig. 77	SI40 遺構遺物・調査状況	97
Fig. 37	SI15(1) 遺構・調査状況、SI16(1) 遺構・調査状況	49	Fig. 78	SI41 遺構遺物、SI42(1) 遺構遺物	99
Fig. 38	SI15(2) 遺物	50	Fig. 79	SI42(2) 遺物、SI43(1) 遺構遺物	100
Fig. 39	SI16(2) 遺物	51	Fig. 80	SI43(2) 遺物、SI44 遺構遺物	101
Fig. 40	SI17(1) 遺構・調査状況	52	Fig. 81	SI46 遺構遺物・調査状況	103
Fig. 41	SI17(2) 遺物・調査状況	53	Fig. 82	SI45(1) 遺構・調査状況	104
			Fig. 83	SI45(2) 遺物	105

Fig. 84	SI45(3) 遺物、SI47(1) 遺構遺物、SI48(1) 遺構	106	Fig.128	SI72(1) 遺構遺物・調査状況	157
Fig. 85	SI47(2) 遺物	107	Fig.129	SI72(2) 遺物	158
Fig. 86	SI48(2) 遺物、SI49 遺構遺物	109	Fig.130	SI73(1) 遺構遺物・調査状況	160
Fig. 87	SI50 遺構	110	Fig.131	SI73(2) 遺物	161
Fig. 88	南中台遺跡遺構配置図(奈良・平安時代、中世)	111	Fig.132	SI74 遺構遺物	162
Fig. 89	SI51(1) 遺構遺物・調査状況	112	Fig.133	SI75 遺構遺物	163
Fig. 90	SI51(2) 遺物、SI52 遺構遺物・調査状況	113	Fig.134	SI76(1) 遺構遺物	164
Fig. 91	SI53(1) 遺構遺物・調査状況	115	Fig.135	SI76(2) 遺物	165
Fig. 92	SI53(2) 遺物	116	Fig.136	SI76(3) 遺物	166
Fig. 93	SI53(3) 遺物	117	Fig.137	SI77(1) 遺構遺物・調査状況	168
Fig. 94	SI54(1) 遺構遺物・調査状況	118	Fig.138	SI77(2) 遺物	169
Fig. 95	SI54(2) 遺物	119	Fig.139	SI77(3) 遺物	170
Fig. 96	SI54(3) 遺物	120	Fig.140	SI78 遺構遺物	171
Fig. 97	SI55(1) 遺構遺物・調査状況	121	Fig.141	SI79 遺構遺物・調査状況	172
Fig. 98	SI55(2) 遺物	122	Fig.142	SI80 遺構遺物、SI81(1) 遺構	174
Fig. 99	SI55(3) 遺物、SI56 遺構	123	Fig.143	SI81(2) 遺物・出土状況	175
Fig.100	SI57 遺構遺物	124	Fig.144	SI81(3) 遺物	176
Fig.101	SI58(1) 遺構遺物、SI59(1) 遺構遺物	126	Fig.145	SI81(4) 遺物	177
Fig.102	SI58(2) 遺物、SI59(2) 遺物	127	Fig.146	SI81(5) 遺物、SI82(1) 遺構	178
Fig.103	SI60(1) 遺構遺物・調査状況	129	Fig.147	SI82(2) 遺物、SI83 遺構	179
Fig.104	SI60(2) 遺物	130	Fig.148	SI84 遺物、SI85 遺物、SI86 遺物	180
Fig.105	SI61(1) 遺構遺物・調査状況	131	Fig.149	SK01 遺構	181
Fig.106	SI61(2) 遺物	132	Fig.150	SK04 遺構遺物・調査状況、SK05 遺構遺物、SX01(1) 遺構・調査状況、SX02 遺構	182
Fig.107	SI62(1) 遺構・調査状況、SI63(1) 遺構・調査状況	134	Fig.151	SX01(2) 遺物	183
Fig.108	SI62(2) 遺物、SI63(2) 遺物	135	Fig.152	南中台遺跡縄文時代貝塚、遺構配置図	185
Fig.109	SI63(3) 遺物	136	Fig.153	貝塚周辺出土縄文土器(1)	186
Fig.110	SI63(4) 遺物	137	Fig.154	貝塚周辺出土縄文土器(2)	187
Fig.111	SI63(5) 遺物	138	Fig.155	貝塚周辺出土縄文土器(3)	188
Fig.112	SI63(6) 遺物・調査状況	139	Fig.156	貝層サンプル出土遺物	189
Fig.113	SI64 遺構遺物・調査状況	140	Fig.157	貝類組成と主要貝類計測値	193
Fig.114	SI65(1) 遺構遺物・調査状況	141	Fig.158	グリッド・竪穴別縄文土器出土重量	199
Fig.115	SI65(2) 遺物	142	Fig.159	出土地不明縄文土器(1)	200
Fig.116	SI65(3) 遺物	143	Fig.160	出土地不明縄文土器(2)	201
Fig.117	SI65(4) 遺物	144	Fig.161	出土地不明縄文土器(3)	202
Fig.118	SI66 遺構遺物・調査状況	146	Fig.162	出土地不明縄文土器(4)	203
Fig.119	SI67 遺構遺物・調査状況	147	Fig.163	出土地不明縄文土器(5)	204
Fig.120	SI68(1) 遺構遺物・調査状況	148	Fig.164	出土地不明縄文土器(6)	205
Fig.121	SI68(2) 遺物	149	Fig.165	出土地不明縄文土器(7)	206
Fig.122	SI69(1) 遺構遺物・調査状況	150	Fig.166	出土地不明縄文土器(8)	207
Fig.123	SI69(2) 遺物	151	Fig.167	出土地不明縄文土器(9)	208
Fig.124	SI70(1) 遺構遺物・調査状況	153	Fig.168	出土地不明縄文土器(10)	209
Fig.125	SI70(2) 遺物	154	Fig.169	出土地不明縄文土器(11)	210
Fig.126	SI71(1) 遺構遺物・調査状況	155	Fig.170	グリッド等出土縄文土器(1)	211
Fig.127	SI71(2) 遺物	156	Fig.171	グリッド等出土縄文土器(2)	212
			Fig.172	グリッド等出土縄文土器(2)	213

Fig.173	グリッド等出土縄文土器(4) ……………	214	Fig.219	SI10(2) 遺物 ……………	264
Fig.174	グリッド等出土縄文土器(5) ……………	215	Fig.220	SI11(1) 遺構遺物 ……………	266
Fig.175	グリッド等出土縄文土器(6) ……………	216	Fig.221	SI11(2) 遺物 ……………	267
Fig.176	グリッド等出土縄文土器(7) ……………	217	Fig.222	SI11(3) 遺物 ……………	268
Fig.177	グリッド等出土縄文土器(8) ……………	218	Fig.223	SI12(1) 遺構遺物 ……………	270
Fig.178	グリッド等出土縄文土器(9) ……………	219	Fig.224	SI12(2) 遺物 ……………	271
Fig.179	グリッド等出土縄文土器(10) ……………	220	Fig.225	SI12(3) 遺物、SI13 遺構遺物・調査状況 ……	272
Fig.180	グリッド等出土縄文土器(11) ……………	221	Fig.226	SI14 遺構遺物 ……………	273
Fig.181	グリッド等出土縄文土器(12) ……………	222	Fig.227	SI15(1) 遺構遺物 ……………	274
Fig.182	グリッド等出土縄文土器(13) ……………	223	Fig.228	SI15(2) 遺物 ……………	275
Fig.183	グリッド等出土縄文土器(14) ……………	224	Fig.229	SI16 遺構遺物、SI17 遺構遺物、SI18 遺構遺物 ……………	277
Fig.184	グリッド等出土縄文土器(15) ……………	225	Fig.230	SI19 遺構遺物・調査状況 ……………	278
Fig.185	出土石器(1) ……………	226	Fig.231	SI20 遺構遺物・調査状況、SI21 遺構遺物 ……………	280
Fig.186	出土石器(2) ……………	227	Fig.232	SI22 遺構遺物 ……………	281
Fig.187	出土石器(3) ……………	228	Fig.233	SI23 遺構遺物、SI24 遺構遺物、SI25 遺構遺物 ……………	283
Fig.188	出土石器(4) ……………	229	Fig.234	SI26(1) 遺物 ……………	284
Fig.189	出土石器(5) ……………	230	Fig.235	SI26(2) 遺物 ……………	285
Fig.190	出土石器(6) ……………	231	Fig.236	SI27 遺物 ……………	286
Fig.191	出土石器(7) ……………	232	Fig.237	SB01 遺構遺物、SB02 遺構遺物 ……………	287
Fig.192	出土石器(8) ……………	233	Fig.238	SB03 遺構 ……………	288
Fig.193	出土石器(9) ……………	234	Fig.239	不明掘立柱建物跡 遺物 ……………	289
Fig.194	出土石器(10) ……………	235	Fig.240	SD01 遺物、SD02(1) 遺物 ……………	290
Fig.195	出土石器(11) ……………	236	Fig.241	SD02(2) 遺物 ……………	291
Fig.196	出土石器(12) ……………	237	Fig.242	SD02(3) 遺物 ……………	292
Fig.197	出土石器(13) ……………	238	Fig.243	遺構外出土弥生土器・縄文土器 ……………	293
Fig.198	出土石器(14) ……………	239	Fig.244	土師器・須恵器・陶磁器 ……………	294
Fig.199	出土石器(15) ……………	240	Fig.245	遺構外出土石器類・金属品・土製品 ……………	295
Fig.200	遺構外出土土製品 ……………	241	Fig.246	遺構外出土瓦類(1) ……………	296
Fig.201	遺構外出土弥生土器・土師器 ……………	242	Fig.247	遺構外出土瓦類(2) ……………	297
Fig.202	遺構外出土瓦類・石器類・金属器 ……………	243	Fig.248	遺構外出土瓦類(3) ……………	298
Fig.203	荒久遺跡A地点遺構配置図 ……………	244	Fig.249	蛇谷遺跡甕形土器口縁部 ……………	303
Fig.204	SI01 遺構遺物・調査状況 ……………	246	Fig.250	編年略図(1) ……………	304
Fig.205	SI02(1) 遺構遺物、SI03(1) 遺構 ……………	248	Fig.251	編年略図(2) ……………	305
Fig.206	SI02(2) 遺物・調査状況 ……………	249	Fig.252	編年略図(3) ……………	306
Fig.207	SI02(3) 遺物 ……………	250	Fig.253	編年略図(4) ……………	307
Fig.208	SI02(4) 遺物、SI03(2) 遺物 ……………	251	Fig.254	編年略図(5) ……………	308
Fig.209	SI03(3) 遺物 ……………	252	Fig.255	編年略図(6) ……………	309
Fig.210	SI04(1) 遺構遺物、SI05 遺構 ……………	254	Fig.256	編年略図(7) ……………	310
Fig.211	SI04(2) 遺物、SI06(1) 遺構遺物 ……………	255	Fig.257	編年略図(8) ……………	311
Fig.212	SI06(2) 遺物 ……………	256	Fig.258	編年略図(9) ……………	312
Fig.213	SI06・12 遺物、SI06・13 遺物 ……………	257	Fig.259	南中台遺跡変遷 ……………	335
Fig.214	SI07(1) 遺構遺物 ……………	258	Fig.260	南中台遺跡周辺の遺跡群(1) ……………	336
Fig.215	SI07(2) 遺物 ……………	259	Fig.261	南中台遺跡周辺の遺跡群(2) ……………	337・338
Fig.216	SI08 遺構遺物・調査状況 ……………	260			
Fig.217	SI09 遺構遺物 ……………	262			
Fig.218	SI10(1) 遺構遺物 ……………	263			

写真図版目次

PL. 1	南中台遺跡・荒久遺跡A地点	全景	周辺空中垂直写真
PL. 2	南中台遺跡	全景	周辺空中垂直写真(1)
PL. 3	南中台遺跡	全景	周辺空中垂直写真(2)
PL. 4	南中台遺跡	全景	空中垂直写真 中心部空中垂直写真
PL. 5	南中台遺跡	全景	市原市庁舎と南中台遺跡 荒久遺跡B地点と南中台遺跡
PL. 6	南中台遺跡	調査状況	
PL. 7	南中台遺跡	遺構	SI01 SI02 SI03 SI68
PL. 8	南中台遺跡	遺構	SI03 SI04 SI05 SI07 SI09 SK03 SD01 SD02
PL. 9	南中台遺跡	遺構	SI09 SI10 SI11 SI12
PL.10	南中台遺跡	遺構	SI12 SI13
PL.11	南中台遺跡	遺構	SI13 SI14 SI15
PL.12	南中台遺跡	遺構	SI15 SI16 SI17 SI18
PL.13	南中台遺跡	遺構	SI18 SI19 SI20 SI21 SI22
PL.14	南中台遺跡	遺構	SI24 SI25
PL.15	南中台遺跡	遺構	SI25 SI26 SI27
PL.16	南中台遺跡	遺構	SI27 SI28 SI29
PL.17	南中台遺跡	遺構	SI29 SI30 SI31 SI32 SI33
PL.18	南中台遺跡	遺構	SI33
PL.19	南中台遺跡	遺構	SI33 SI34 SI35 SI36 SD21
PL.20	南中台遺跡	遺構	SI36 SI37 SI38 SI39
PL.21	南中台遺跡	遺構	SI39 SI40 SI45
PL.22	南中台遺跡	遺構	SI45 SI46 SI49 SI51
PL.23	南中台遺跡	遺構	SI51 SI52 SI53
PL.24	南中台遺跡	遺構	SI53 SI54 SI55
PL.25	南中台遺跡	遺構	SI55 SI60 SI61 SI63
PL.26	南中台遺跡	遺構	SI63 SI64
PL.27	南中台遺跡	遺構	SI65 SI66 SI67
PL.28	南中台遺跡	遺構	SI02 SI08 SI67 SI68 SI69
PL.29	南中台遺跡	遺構	SI70 SI72 SI73 SI75 SD03
PL.30	南中台遺跡	遺構	SI75 SI76 SI77 SI79
PL.31	南中台遺跡	遺構	SI79 SI80 SI81
PL.32	南中台遺跡	遺構	SI04 SI83 SK04 SK05 SX01 SX02
PL.33	荒久遺跡A地点	全景	
PL.34	荒久遺跡A地点	調査状況	
PL.35	荒久遺跡A地点	遺構	SI01 SI02 SB01 SD01
PL.36	荒久遺跡A地点	遺構	SI02 SI03 SI04 SB01
PL.37	荒久遺跡A地点	遺構	SI05 SI06 SI07 SI08
PL.38	荒久遺跡A地点	遺構	SI09 SI10 SI11
PL.39	荒久遺跡A地点	遺構	SI11 SI12 SI13
PL.40	荒久遺跡A地点	遺構	SI14 SI15 SI16 SI17
PL.41	荒久遺跡A地点	遺構	SI17 SI18 SI19 SI20 SB03
PL.42	荒久遺跡A地点	遺構	SI20 SI21
PL.43	荒久遺跡A地点	遺構	SI21 SI22 SD04
PL.44	荒久遺跡A地点	遺構	SI22 SI23 SI24 SI25 SD04

PL.45	荒久遺跡A地点	遺構	SI01	SB01	SB02	SB03	SD01		
PL.46	荒久遺跡A地点	遺構	SD01	SD02	SD03	SD04			
PL.47	南中台遺跡	土器集合写真	甕形土器	北陸系土器					
PL.48	南中台遺跡	土器集合写真	壺形土器	高杯形土器・器台形土器・椀形土器					
PL.49	南中台遺跡	遺構・遺構外出土縄文土器	SI03	SI06	一括	グリッド			
PL.50	南中台遺跡	遺構出土土器	SI07	SI09	SI11				
PL.51	南中台遺跡	遺構出土土器	SI11	SI12					
PL.52	南中台遺跡	遺構出土土器	SI12	SI13					
PL.53	南中台遺跡	遺構出土土器	SI13	SI14					
PL.54	南中台遺跡	遺構出土土器	SI14	SI15	SI16	SI17			
PL.55	南中台遺跡	遺構出土土器	SI17						
PL.56	南中台遺跡	遺構出土土器	SI17	SI18	SI19				
PL.57	南中台遺跡	遺構出土土器	SI21	SI22	SI23	SI24			
PL.58	南中台遺跡	遺構出土土器	SI24						
PL.59	南中台遺跡	遺構出土土器	SI24	SI25	SI27				
PL.60	南中台遺跡	遺構出土土器	SI27						
PL.61	南中台遺跡	遺構出土土器	SI27	SI28	SI29				
PL.62	南中台遺跡	遺構出土土器	SI29	SI30					
PL.63	南中台遺跡	遺構出土土器	SI30	SI32					
PL.64	南中台遺跡	遺構出土土器	SI32	SI33					
PL.65	南中台遺跡	遺構出土土器	SI33						
PL.66	南中台遺跡	遺構出土土器	SI33	SI34	SI35				
PL.67	南中台遺跡	遺構出土土器	SI35	SI36					
PL.68	南中台遺跡	遺構出土土器	SI36						
PL.69	南中台遺跡	遺構出土土器	SI36	SI39					
PL.70	南中台遺跡	遺構出土土器	SI39						
PL.71	南中台遺跡	遺構出土土器	SI39	SI40	SI41	SI42	SI43		
PL.72	南中台遺跡	遺構出土土器	SI43	SI44	SI45				
PL.73	南中台遺跡	遺構出土土器	SI45	SI46	SI47				
PL.74	南中台遺跡	遺構出土土器	SI47	SI51	SI52				
PL.75	南中台遺跡	遺構出土土器	SI52	SI53	SI54	SI55			
PL.76	南中台遺跡	遺構出土土器	SI55	SI57	SI58・59	SI60			
PL.77	南中台遺跡	遺構出土土器	SI60	SI61	SI62	SI63			
PL.78	南中台遺跡	遺構出土土器	SI63	SI64	SI65	SI66	SI67	SI68	
PL.79	南中台遺跡	遺構出土土器	SI68	SI69	SI70	SI71	SI72	SI73	SI74
PL.80	南中台遺跡	遺構出土土器	SI74	SI75	SI77	SI78	SI79	SI80	SI81
PL.81	南中台遺跡	遺構出土土器	SI81	SI82					
PL.82	南中台遺跡	遺構・遺構外出土土器	SI82	SI84	SK04	SK05	SX01	一括	SI04内不明
PL.83	南中台遺跡	土器詳細	SI09	SI12	SI13				
PL.84	南中台遺跡	土器詳細	SI13	SI14					
PL.85	南中台遺跡	土器詳細	SI14	SI15	SI17	SI18			
PL.86	南中台遺跡	土器詳細	SI18	SI21	SI23	SI24	SI25		
PL.87	南中台遺跡	土器詳細	SI27	SI28	SI29	SI32			
PL.88	南中台遺跡	土器詳細	SI33	SI35					
PL.89	南中台遺跡	土器詳細	SI35	SI36	SI39				
PL.90	南中台遺跡	土器詳細	SI39	SI40	SI42	SI43	SI45		

PL.91	南中台遺跡	土器詳細	SI45	SI47	SI65	SI70	SI78	SX01										
PL.92	南中台遺跡	墨書・線刻土器	SI54	SI57	SI63	SI73	SI81											
PL.93	南中台遺跡	遺構出土土器	SI01	SI02	SI03													
PL.94	南中台遺跡	遺構出土土器	SI03	SI04	SI05													
PL.95	南中台遺跡	遺構出土土器	SI05	SI06	SI08	SI09												
PL.96	南中台遺跡	遺構出土土器	SI10	SI11	SI12	SI13	SI14	SI15										
PL.97	南中台遺跡	遺構出土土器	SI16	SI17	SI18	SI20	SI21	SI22	SI23	SI24								
PL.98	南中台遺跡	遺構出土土器	SI24	SI25	SI26	SI27	SI28	SI29	SI30	SI31	SI32							
PL.99	南中台遺跡	遺構出土土器	SI32	SI33	SI34	SI35	SI36											
PL.100	南中台遺跡	遺構出土土器	SI37	SI38	SI39	SI40	SI41	SI42	SI43									
PL.101	南中台遺跡	遺構出土土器	SI45	SI47	SI48	SI49	SI51	SI52	SI53	SI54	SI55	SI57	SI58・59					
		SI60																
PL.102	南中台遺跡	遺構出土土器	SI60	SI61	SI62	SI63	SI64											
PL.103	南中台遺跡	遺構出土土器	SI65	SI66	SI67	SI69	SI70	SI71										
PL.104	南中台遺跡	遺構出土土器	SI71	SI72	SI73	SI74	SI75	SI76										
PL.105	南中台遺跡	遺構出土土器	SI77	SI78	SI79	SI80	SI81											
PL.106	南中台遺跡	遺構出土土器・遺構外出土縄文土器	SI82	SI85	貝塚													
PL.107	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	貝塚	サンプル	一括													
PL.108	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	一括															
PL.109	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	一括															
PL.110	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	一括															
PL.111	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	一括															
PL.112	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	一括															
PL.113	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	一括	グリッド														
PL.114	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	グリッド															
PL.115	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	グリッド															
PL.116	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	グリッド															
PL.117	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	グリッド															
PL.118	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	グリッド															
PL.119	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	グリッド															
PL.120	南中台遺跡	遺構外出土縄文土器	グリッド、土製品・石器類	SI01	SI03	SI04	SI13	SI60	SI72	サ								
		サンプル																
PL.121	南中台遺跡	石器類	SI05	SI06	SI16	SI21	SI30	SI33	SI35	SI42	SI55	SI63	SI65	SI69				
		SI72	SI81	SK04	SX01													
PL.122	南中台遺跡	石器類	SI14	SI17	SI18	SI20	SI21	SI22	SI23	SI24	SI25	SI27	SI29	SI32				
		SI33	SI35	SI46	SI48	SI54	SI55	SI72										
PL.123	南中台遺跡	石器類	SI54	SI64	SI65	SI71	SI72	SI76	SI77	グリッド								
PL.124	南中台遺跡	石器類	SI13	SI17	SI18	SI22	SI25	SI31	SI35	SI36	SI54	SI55	SI63	SI68				
		SI71	SI80	グリッド														
PL.125	南中台遺跡	石器類	SI13	SI26	SI27	SI35	SI45	SI77	SI79	SI81	グリッド							
PL.126	南中台遺跡	石器類	SI18	SI19・51	SI29	SI45	SI72	SI79	一括	グリッド								
PL.127	南中台遺跡	石器類	SI09	SI14	SI18	SI20	SI21	SI27	SI51	SI52	SI54	SI55	SI69	SI77				
		一括	グリッド															
PL.128	南中台遺跡	石器類	SI08	SI10	SI14	SI17	SI20	SI40	グリッド、遺構外出土土器・石製品	一括								
PL.129	南中台遺跡	瓦類	SI51	SI53														
PL.130	南中台遺跡	瓦類	SI54	SI55														

PL.131 南中台遺跡 瓦類 SI55 SI57 SI58・59 SI60
 PL.132 南中台遺跡 瓦類 SI61 SI62 SI63
 PL.133 南中台遺跡 瓦類 SI63 SI65
 PL.134 南中台遺跡 瓦類 SI65
 PL.135 南中台遺跡 瓦類 SI65 SI67 SI69 SI70
 PL.136 南中台遺跡 瓦類 SI70 SI72 SI73
 PL.137 南中台遺跡 瓦類 SI76
 PL.138 南中台遺跡 瓦類・埴 SI76 SI77
 PL.139 南中台遺跡 瓦類 SI81 一括
 PL.140 南中台遺跡 金属関係 SI10 SI14 SI17 SI19 SI34 SI43 SI51 SI54 SI60 SI61 SI63 SI64
 SI65 SI68 SI72 SI77
 PL.141 南中台遺跡 金属関係 SI14 SI77 SI78 SI81 SX01 SD01、自然遺物
 PL.142 南中台遺跡 自然遺物
 PL.143 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI01 SI02
 PL.144 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI03 SI04 SI06 SI06・12 SI06・13 SI07
 PL.145 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI07 SI08 SI09 SI10 SI11
 PL.146 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI11 SI12 SI14 SI15
 PL.147 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI15 SI16 SI19 SI20 SI21 SI22
 PL.148 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI22 SI24 SI25 SI26 SI27 SB不明 SD02
 PL.149 荒久遺跡A地点 遺構・遺構外出土土器・墨書土器 SI04 SI06・12 SI25 SD02 一括
 PL.150 荒久遺跡A地点 墨書土器 SI26 SB02 一括
 PL.151 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI01 SI02 SI03
 PL.152 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI03 SI04 SI06 SI06・12 SI06・13 SI07
 PL.153 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI08 SI09 SI10
 PL.154 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI11 SI12 SI13 SI14 SI15 SI16
 PL.155 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI17 SI18 SI19 SI20 SI22 SI24 SI25 SI26
 PL.156 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SI26 SI27 SB不明
 PL.157 荒久遺跡A地点 遺構出土土器 SB01 SB02 SB不明 SD01 SD02
 PL.158 荒久遺跡A地点 遺構外出土土器
 PL.159 荒久遺跡A地点 土製品 SD02 一括、石器類 SI02 SI03 SI04 SI10 SI15 SD01 SD02 一括
 PL.160 荒久遺跡A地点 石器類 SI02 SI06、瓦類 一括
 PL.161 荒久遺跡A地点 瓦類 SI06 SI07 SI08
 PL.162 荒久遺跡A地点 瓦類 SI10 SI11
 PL.163 荒久遺跡A地点 瓦類 SI11 SI12 SI15
 PL.164 荒久遺跡A地点 瓦類 SI15 SI22 一括
 PL.165 荒久遺跡A地点 瓦類 一括、金属関係 SI01 SI02 SI03
 PL.166 荒久遺跡A地点 金属関係 SI04 SI09 SI10 SI12 SI16 SI23 SI25 SI26 SI27 SD01 SD02
 一括

表 目 次

Tab. 1	南中台遺跡遺構一覧	xi
Tab. 2	荒久遺跡 A 地点遺構一覧	xiii
Tab. 3	出土動物遺存体種名表	190
Tab. 4	貝層サンプル一覧	191
Tab. 5	出土貝類一覧	192
Tab. 6	微小貝類出土量一覧	194
Tab. 7	出土魚類骨一覧	195
Tab. 8	出土獣骨一覧	196
Tab. 9	形態分類一覧	300
Tab.10	小形器台形態素組み合わせ	326
Tab.11	主要形式・型式の消長	330
Tab.12	編年対照表	332
Tab.13	南中台遺跡土器観察表	(DVD-ROM 収録)
Tab.14	南中台遺跡石器観察表	(DVD-ROM 収録)
Tab.15	南中台遺跡土製品・石製品観察表	(DVD-ROM 収録)
Tab.16	南中台遺跡金属器観察表	(DVD-ROM 収録)
Tab.17	南中台遺跡瓦観察表	(DVD-ROM 収録)
Tab.18	荒久遺跡土器観察表	(DVD-ROM 収録)
Tab.19	荒久遺跡石器観察表	(DVD-ROM 収録)
Tab.20	荒久遺跡土製品観察表	(DVD-ROM 収録)
Tab.21	荒久遺跡金属器観察表	(DVD-ROM 収録)
Tab.22	荒久遺跡瓦観察表	(DVD-ROM 収録)

南中台遺跡遺構一覧 (Tab.1)

遺構 No.	遺構種別	本文	挿図	遺構図版	時 代	調査 No.	Grid	旧 Grid
SI01	竪穴建物	18	11	7	縄文時代後期	H10	H10-c	113-c
SI02	竪穴建物	18	13	7	縄文時代中期	H72	I4-c	102-c
SI03	竪穴建物	22	14	7	縄文時代後期	H83	L8-c	48-c
SI04	竪穴建物	22	17	8	縄文時代後期	H74	D15-b	170-b
SI05	竪穴建物	22	19	8	縄文時代後期	H75	G17-c	133-c
SI06	竪穴建物	31	19		縄文時代後期	H80	G17-d	133-d
SI07	竪穴建物	32	24	8	弥生終末期 (古墳早期)	H29	G7-c	123-c
SI08	竪穴建物	33	25		弥生終末期 (古墳早期)	H27	I7-a	99-a
SI09	竪穴建物	35	26	8	弥生終末期 (古墳早期)	H11	I12-a	94-a
SI10	竪穴建物	35	28	9	弥生終末期 (古墳早期)	H17	J14-c	83-c
SI11	竪穴建物	35	28	9	弥生終末期 (古墳早期)	H61	J15-b	84-b
SI12	竪穴建物	37	29	9	弥生終末期 (古墳早期)	H14	J13-b	82-b
SI13	竪穴建物	39	31	10	弥生終末期 (古墳早期)	H13	J11-d	80-d
SI14	竪穴建物	42	35	11	弥生終末期 (古墳早期)	H08	I10-d	96-d
SI15	竪穴建物	42	37	11	弥生終末期 (古墳早期)	H15	K11-d	63-d
SI16	竪穴建物	48	37	12	弥生終末期 (古墳早期)	H19	K11-d	63-d
SI17	竪穴建物	51	40	12	弥生終末期 (古墳早期)	H20	L11-c	51-c
SI18	竪穴建物	55	43	12	弥生終末期 (古墳早期)	H01	J9-b	78-b
SI19	竪穴建物	55	44	13	弥生終末期 (古墳早期)	H09	K9-d	65-d
SI20	竪穴建物	56	45	13	弥生終末期 (古墳早期)	H22	L10-c	50-c
SI21	竪穴建物	56	46	13	弥生終末期 (古墳早期)	H23	L10-b	50-b
SI22	竪穴建物	56	47	13	弥生終末期 (古墳早期)	H24	M9-c	39-c

遺構No.	遺構種別	本文	挿図	遺構図版	時 代	調査No.	Grid	旧Grid
SI23	竪穴建物	63	48		弥生終末期（古墳早期）	H25	M9-c	39-c
SI24	竪穴建物	63	49	14	弥生終末期（古墳早期）	H21	K12-d	62-d
SI25	竪穴建物	63	53	14	弥生終末期（古墳早期）	H50	L12-d	52-d
SI26	竪穴建物	67	54	15	弥生終末期（古墳早期）	H60	M10-c	38-c
SI27	竪穴建物	72	54	15	弥生終末期（古墳早期）	H59	N10-c	28-c
SI28	竪穴建物	73	58	16	弥生終末期（古墳早期）	H58	N9-d	27-d
SI29	竪穴建物	73	59	16	弥生終末期（古墳早期）	H38	M14-c	34-c
SI30	竪穴建物	75	60	17	弥生終末期（古墳早期）	H51	M13-b	35-b
SI31	竪穴建物	75	61	17	弥生終末期（古墳早期）	H52	M12-d	36-d
SI32	竪穴建物	75	61	17	弥生終末期（古墳早期）	H54	M11-d	37-d
SI33	竪穴建物	82	65	17	弥生終末期（古墳早期）	H56	N10-d	28-d
SI34	竪穴建物	82	65	19	弥生終末期（古墳早期）	H55	N11-b	29-b
SI35	竪穴建物	89	68	19	弥生終末期（古墳早期）	H57	O10-a	25-a
SI36	竪穴建物	89	71	20	弥生終末期（古墳早期）	H53	N12-b	30-b
SI37	竪穴建物	92	74	20	弥生終末期（古墳早期）	H39	N14-a	32-a
SI38	竪穴建物	93	74	20	弥生終末期（古墳早期）	H40	N14-a	32-a
SI39	竪穴建物	93	74	20	弥生終末期（古墳早期）	H41	N13-d	31-d
SI40	竪穴建物	93	77	21	弥生終末期（古墳早期）	H42	N13-d	31-d
SI41	竪穴建物	96	78		弥生終末期（古墳早期）	H43	O14-a	21-a
SI42	竪穴建物	98	78		弥生終末期（古墳早期）	H48	P12-d	18-d
SI43	竪穴建物	98	79		弥生終末期（古墳早期）	H46	P11-a	17-a
SI44	竪穴建物	98	80		弥生終末期（古墳早期）	H47	P11-a	17-a
SI45	竪穴建物	102	82	21	弥生終末期（古墳早期）	H62	P10-b	16-b
SI46	竪穴建物	102	81	22	弥生終末期（古墳早期）	H45	Q11-c	12-c
SI47	竪穴建物	108	84		弥生終末期（古墳早期）	H49	Q12-d	11-d
SI48	竪穴建物	108	84		弥生終末期（古墳早期）	H44	Q12-b	11-b
SI49	竪穴建物	108	86	22	弥生終末期（古墳早期）	H64	R11-b	8-b
SI50	竪穴建物	110	87		弥生終末期（古墳早期）	H84	T9-d	1-d
SI51	竪穴建物	111	89	22	平安時代	H07	C8-d	181-d
SI52	竪穴建物	114	90	23	平安時代	H06	C10-b	183-b
SI53	竪穴建物	114	91	23	平安時代	H05	D9-d	176-d
SI54	竪穴建物	114	94	24	平安時代	H03	E11-a	158-a
SI55	竪穴建物	117	97	24	平安時代	H04	F10-a	147-a
SI56	竪穴建物	124	99		奈良・平安時代	H35	E7-c	154-c
SI57	竪穴建物	125	100		奈良・平安時代	H36	E7-d	154-d
SI58	竪穴建物	125	101		平安時代	H81B	E7-b	154-b
SI59	竪穴建物	125	101		平安時代	H81A	E7-b	154-b
SI60	竪穴建物	128	103	25	平安時代	H34	F6-b	151-b
SI61	竪穴建物	128	105	25	平安時代	H33	F6-d	151-d
SI62	竪穴建物	128	107		平安時代	H31	G7-a	123-a
SI63	竪穴建物	132	107	25	奈良・平安時代	H30	G7-a	123-a
SI64	竪穴建物	133	113	26	奈良・平安時代	H67	G7-b	123-b
SI65	竪穴建物	133	114	27	平安時代	H32	G6-c	122-c
SI66	竪穴建物	145	118	27	平安時代	H68	G6-d	122-d
SI67	竪穴建物	145	119	27	奈良・平安時代	H70	H5-d	118-d
SI68	竪穴建物	145	120	28	平安時代	H71	I5-a	101-a
SI69	竪穴建物	149	122	28	奈良・平安時代	H26	I7-a	99-a
SI70	竪穴建物	152	124	29	奈良・平安時代	H28	I6-c	100-c
SI71	竪穴建物	152	126		平安時代	H69	F12-d	145-d
SI72	竪穴建物	154	128	29	平安時代	H63	G13-d	129-d
SI73	竪穴建物	156	130	29	平安時代	H12	H13-c	110-c
SI74	竪穴建物	159	132		平安時代	H77	G15-d	131-d
SI75	竪穴建物	159	133	29	平安時代	H18	H15-d	108-d
SI76	竪穴建物	159	134	30	奈良・平安時代	H16	I13-a	93-a
SI77	竪穴建物	163	137	30	平安時代	H78	I9-d	97-d
SI78	竪穴建物	167	140		平安時代	H66	I9-b	97-b
SI79	竪穴建物	167	141	30	奈良・平安時代	H79	J9-c	78-c
SI80	竪穴建物	173	142	31	奈良時代	H02	J9-a	78-a

遺構No.	遺構種別	本文	挿図	遺構図版	時 代	調査No.	Grid	旧Grid
SI81	竪穴建物	173	142	31	平安時代	H37	L15-a	55-a
SI82	竪穴建物	180	146		奈良時代	H65	R11-d	8-d
SI83	竪穴建物	180	147	32	時期不明	H73	D15-d	170-d
SI84	(竪穴建物)	181	148			H87		
SI85	(竪穴建物)	181	148			H88		
SI86	(竪穴建物)	181	148			H89		
SK01	土坑	181	149		縄文時代後期	H82	O10-b	25-b
SK02	土坑	181	17		縄文時代後期	H74	E15-a	163-a
SK03	土坑	181	19	8	時期不明	H76	G17-c	133-c
SK04	土坑(墓)	183	150	32	中世(13世紀)	H74	D15-b	170-b
SK05	土坑(墓)	184	150	32	中世(13世紀)	H74	D15-d	170-b
SX01	常滑甕埋納	184	150	32	中世(13世紀)	H74	E15-a	163-a
SX02	鉄釘集中	184	150	32	中世(13世紀)	H74	D15-b	170-b

荒久遺跡A地点遺構一覧(Tab.2)

遺構No.	遺構種別	本文	挿図	遺構図版	時 代	調査No.	Grid	旧Grid
SI01	竪穴建物	245	204	35	平安時代	1号住居	LR-77	
SI02	竪穴建物	245	205	35	平安時代	4号住居	LS-53	
SI03A	竪穴建物	247	205	36	奈良・平安時代	3号住居	LS-64	
SI03B	竪穴建物	247	205	36	奈良・平安時代	3号住居	LS-65	
SI04	竪穴建物	247	210	36	奈良・平安時代	5号住居	LS-93	
SI05	竪穴建物	247	210	37	奈良・平安時代	H住居	KS-08	
SI06	竪穴建物	253	211	37	平安時代	6号住居(G住居)	LS-88	
SI07A	竪穴建物	253	214	37	平安時代	15号住居(F住居)	LS-68	
SI07B	竪穴建物	253	214	37	平安時代	15号住居(F住居)	LS-58	
SI08	竪穴建物	257	216	37	平安時代	14号住居(E住居)	LS-70	
SI09A	竪穴建物	259	217	38	平安時代	16号住居	LS-100	
SI09B	竪穴建物	259	217	38	平安時代	16号住居	LT-81	
SI10A	竪穴建物	261	218	38	平安時代	17号住居	LS-100	
SI10B	竪穴建物	261	218	38	平安時代	17号住居	KS-10	
SI11A	竪穴建物	265	220	38	平安時代	10号住居	KT-03	
SI11B	竪穴建物	265	220	38	平安時代	10号住居	KT-14	
SI12	竪穴建物	265	223	39	平安時代	7号住居	LT-86	
SI13a	竪穴建物	269	225	39	平安時代	8号住居	LT-87	
SI13b	竪穴建物	269	225	39	平安時代	8号住居	LT-87	
SI14	竪穴建物	269	226	40	平安時代	9号住居(A住居)	LT-99	
SI15	竪穴建物	273	227	40	平安時代	11号住居(E住居)	LT-64	
SI16A	竪穴建物	273	229	40	平安時代	12号住居	LT-44	
SI16B	竪穴建物	273	229	40	平安時代	12号住居	LT-54	
SI17	竪穴建物	275	229	40	平安時代	13号住居(B住居)	LT-44	
SI18	竪穴建物	276	229	41	平安時代	25号住居	LS-18	
SI19	竪穴建物	276	230	41	平安時代	23号住居(D住居)	LT-21	
SI20	竪穴建物	276	231	41	平安時代	19号住居(C住居)	LT-16	
SI21A	竪穴建物	276	231	42	平安時代	24号住居	LT-38	
SI21B	竪穴建物	276	231	42	平安時代	24号住居	LT-38	
SI22A	竪穴建物	279	232	43	平安時代	21号住居	MS-56	
SI22B	竪穴建物	279	232	43	平安時代	21号住居	MS-45	
SI22C	竪穴建物	279	232	43	平安時代	21号住居	MS-35	
SI23	竪穴建物	282	233	44	平安時代	20号住居	MS-60	
SI24	竪穴建物	282	233	44	平安時代	18号住居	MS-70	
SI25	竪穴建物	282	233	44	平安時代	22号住居	MS-80	
SI26	(竪穴建物)	286	234		平安時代	2号住居		
SI27	(竪穴建物)	286	236		平安時代	26号住居		

遺構No.	遺構種別	本文	挿図	遺構図版	時 代	調査No.	Grid	旧Grid
SB01	掘立柱建物	286	237	45	奈良・平安時代	1号倉庫	LR-69	
SB02Aa	掘立柱建物	288	237	45	奈良・平安時代～	2号倉庫（小屋）	LS-34	
SB02Ab	掘立柱建物	288	237	45	奈良・平安時代～	2号倉庫（小屋）	LS-34	
SB02B	掘立柱建物	288	237	45	奈良・平安時代～	2号倉庫（小屋）	LS-24	
SB03	掘立柱建物	288	238	45	奈良・平安時代	3号倉庫	LS-10	
SD01A	溝	289	240	46	奈良・平安時代	H1西溝	LR-76	
SD01B	溝	289	240	46	奈良・平安時代	H1西溝	LR-46	
SD02	溝	289	240	46		2号東西溝（EW溝）	MS-81	
SD03	溝	292	9	46			KR-07	
SD04	溝	293	9	46			MS-68	
SX01	貝土坑		9				LS-40	



市原市役所本庁から南中台遺跡（南東方向）を望む。調査前か。

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査にいたる経緯

昭和30年代後半から昭和40年代前半の高度成長期において、首都圏外縁に位置する市原市では、海岸部の京葉工業地帯とともに、内陸部でも大規模な宅地造成が行われるようになった。こうした状況の中で、現市原市庁舎のある国分寺台地区約380ヘクタールに対する区画整理が計画され、1970(昭和45)年に、市原市国分寺台土地区画整理組合が設立された。これに対応する発掘調査体制として、1971(昭和46)年に市原市国分寺台埋蔵文化財調査会がつくられ、実際に調査を担当する機関として、1972(昭和47)年度に上総国分寺台遺跡調査団が結成された。

国分寺台の発掘調査は、当初、1972(昭和47)年から3か年で完了する計画で進められたが、遺跡の把握が不十分であったことなどから大幅に計画が変更され、結果として1988(昭和63)年までの17年間にわたり実施することとなった。調査遺跡数は、上総国分僧寺・尼寺跡を含む43遺跡、調査面積は、現状集計で537,270㎡である。この間、調査団は1985(昭和60)年3月に解散し、その後の業務は、財団法人市原市文化財センターが、さらに平成18年3月31日付けで財団法人が廃止となり、平成18年度以降は、市原市教育委員会埋蔵文化財調査センターが引き継ぐこととなった。

整理報告作業は、費用負担の問題から一時期進捗をみななかったが、文化庁文化財部記念物課、千葉県教育庁教育振興部文化財課の配慮により、補助事業として発掘調査を実施した遺跡を対象として、1994(平成6)年度から補助事業として整理作業を行うこととなった。さらに、1995(平成7)年には、市原市と土地区画整理組合との協議で費用負担の問題等について合意に至り、1997(平成9)年度から本格的に整理作業を開始することとなった。

今回報告する荒久遺跡A地点は、上総国分寺台遺跡調査団発足に先立つ1971(昭和46)年12月に着手した、国分寺台区画整理にともなう最初の発掘調査である。発掘調査にあたっては、経過措置として市原市下アラク遺跡発掘調査団が設置され、団員には、滝口宏顧問、平野元三郎団長以下、市毛勲、石井則孝、内野美三夫、柿沼宏、亀井秋男、谷島一馬、高野亜男各氏が名を連ねている。南中台遺跡は、1973(昭和48)年に、上総国分寺台遺跡調査団(団長滝口宏)のもと、平野元三郎同調査団副団長が代表を務めていた平野考古学研究所が中心となって実施した。

第2節 遺跡の立地と概要

南中台遺跡は、市原市国分寺台中央1丁目5～9番地、旧地番は惣社字南中ノ台1064・1065番地である。また、荒久遺跡A地点は、千葉県市原市惣社1丁目1番地に所在する。調査段階の旧代表地番は惣社字下アラク1021番地である。

市原市は、房総半島のほぼ中央部から東京湾岸にいたる南北約35kmの細長い市域をもち、その中央を養老川が貫流する。東京湾岸低地に接する台地は、養老川流域を境界とし、養老川右岸(東岸)から千葉市域境の村田川までが「市原台地」、養老川左岸(西岸)から袖ヶ浦市小櫃川までが「袖ヶ浦台地」と呼称されている。市原台地は、東京湾岸の低地をのぞむ北東-南西方向の海食崖で終わるが、台地内部は、養老川、村田川の支流および直接東京湾に流入する小河川によって樹枝状に開析されている。

調査の経緯と概要

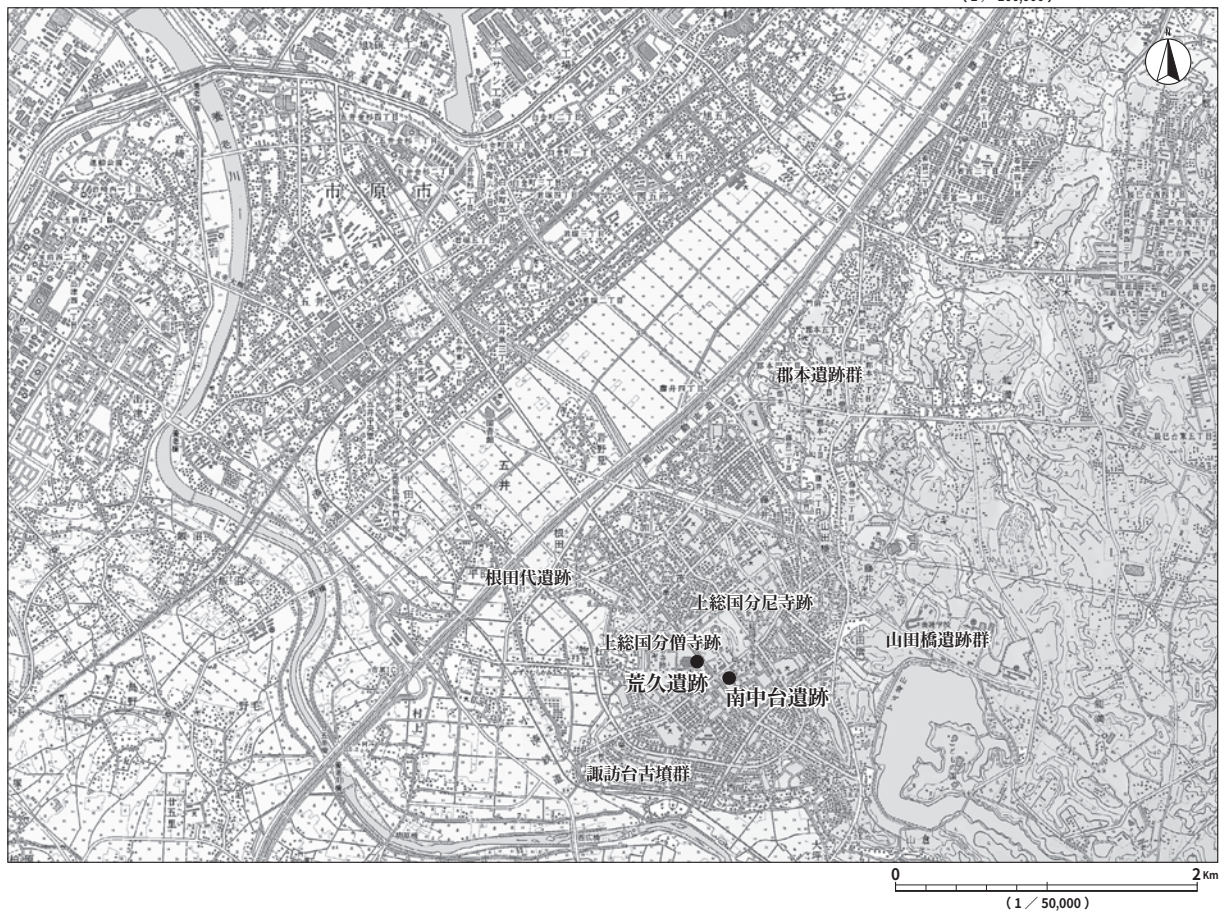
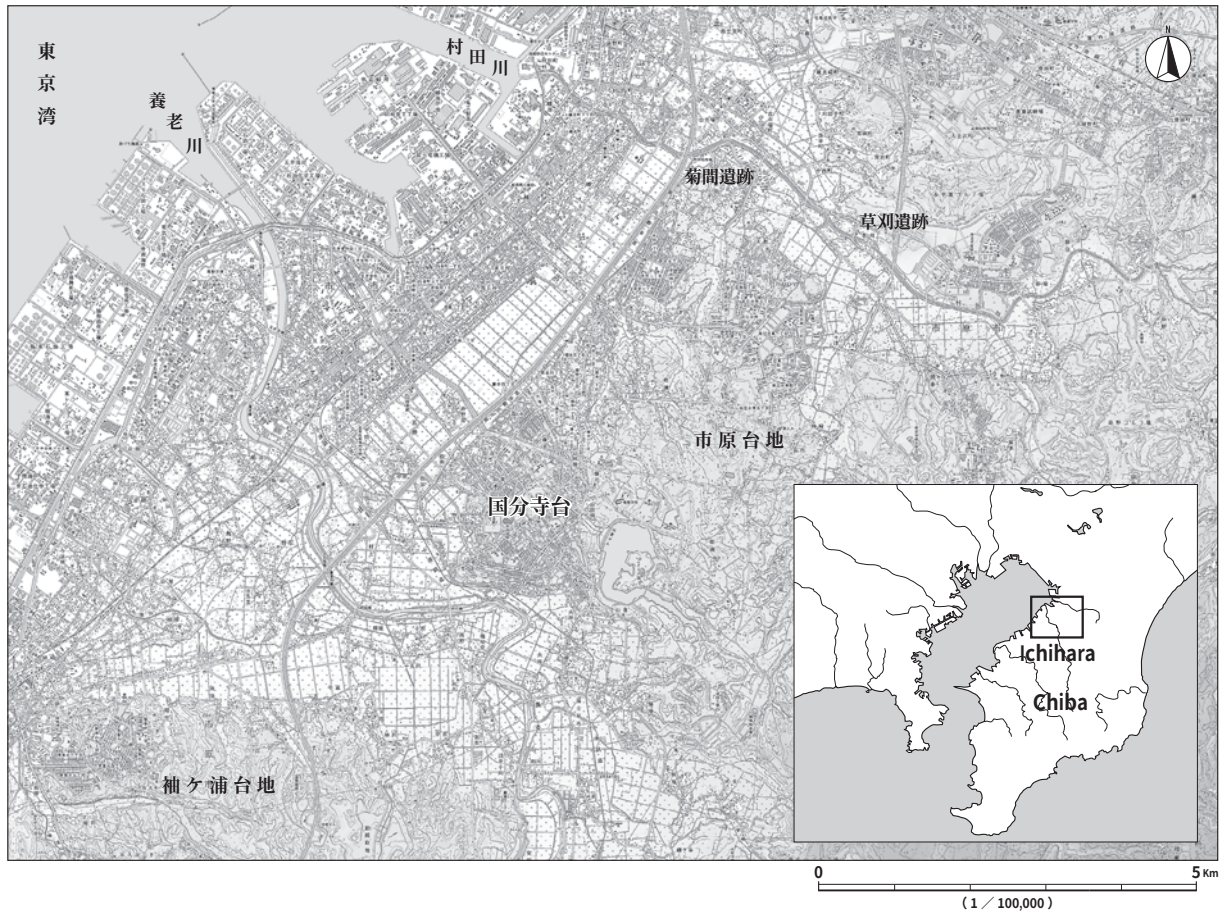
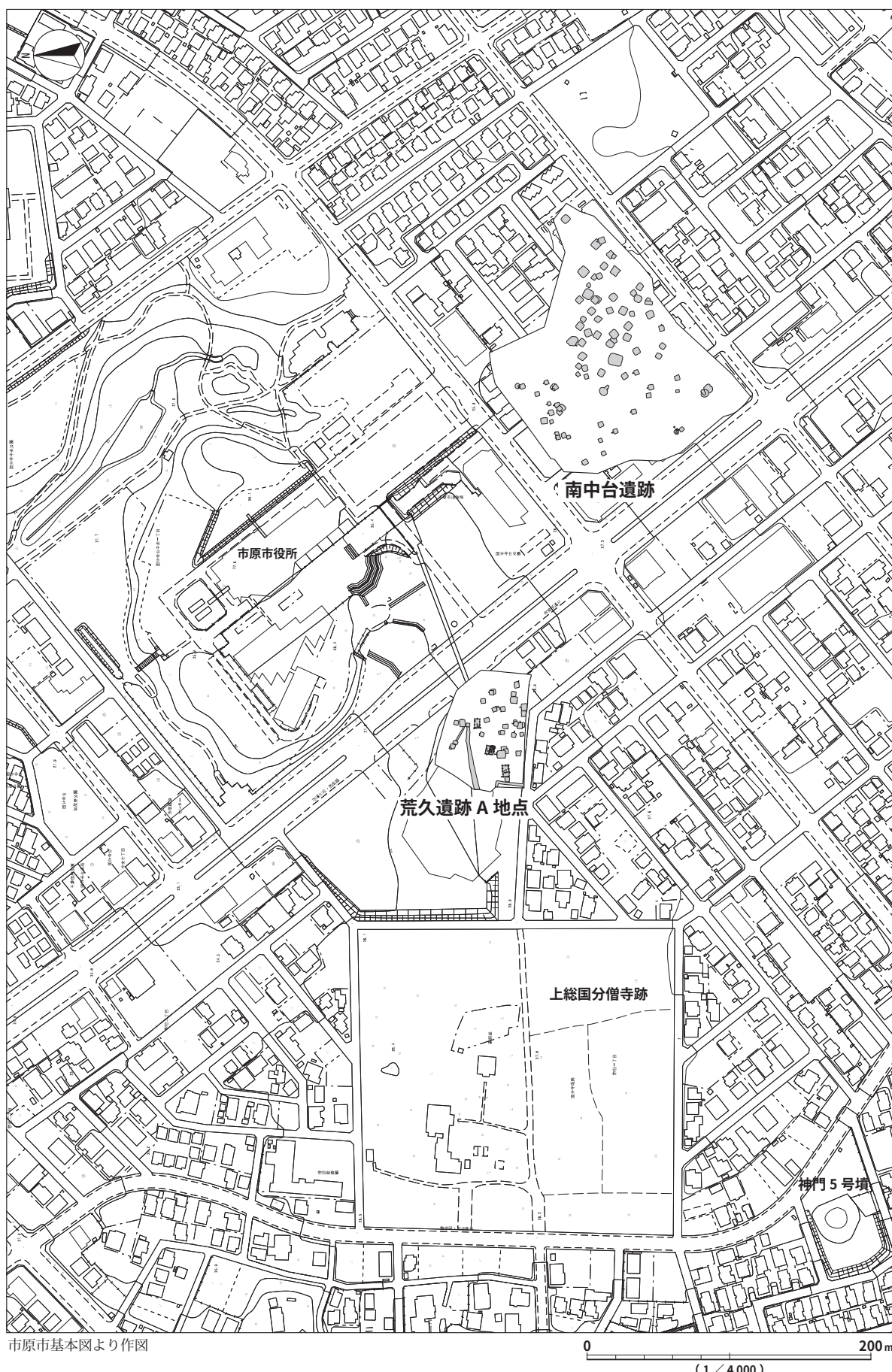


Fig.1 南中台遺跡・荒久遺跡A地点位置図



市原市基本図より作図

Fig.2 南中台遺跡・荒久遺跡A地点現状位置図

調査の経緯と概要

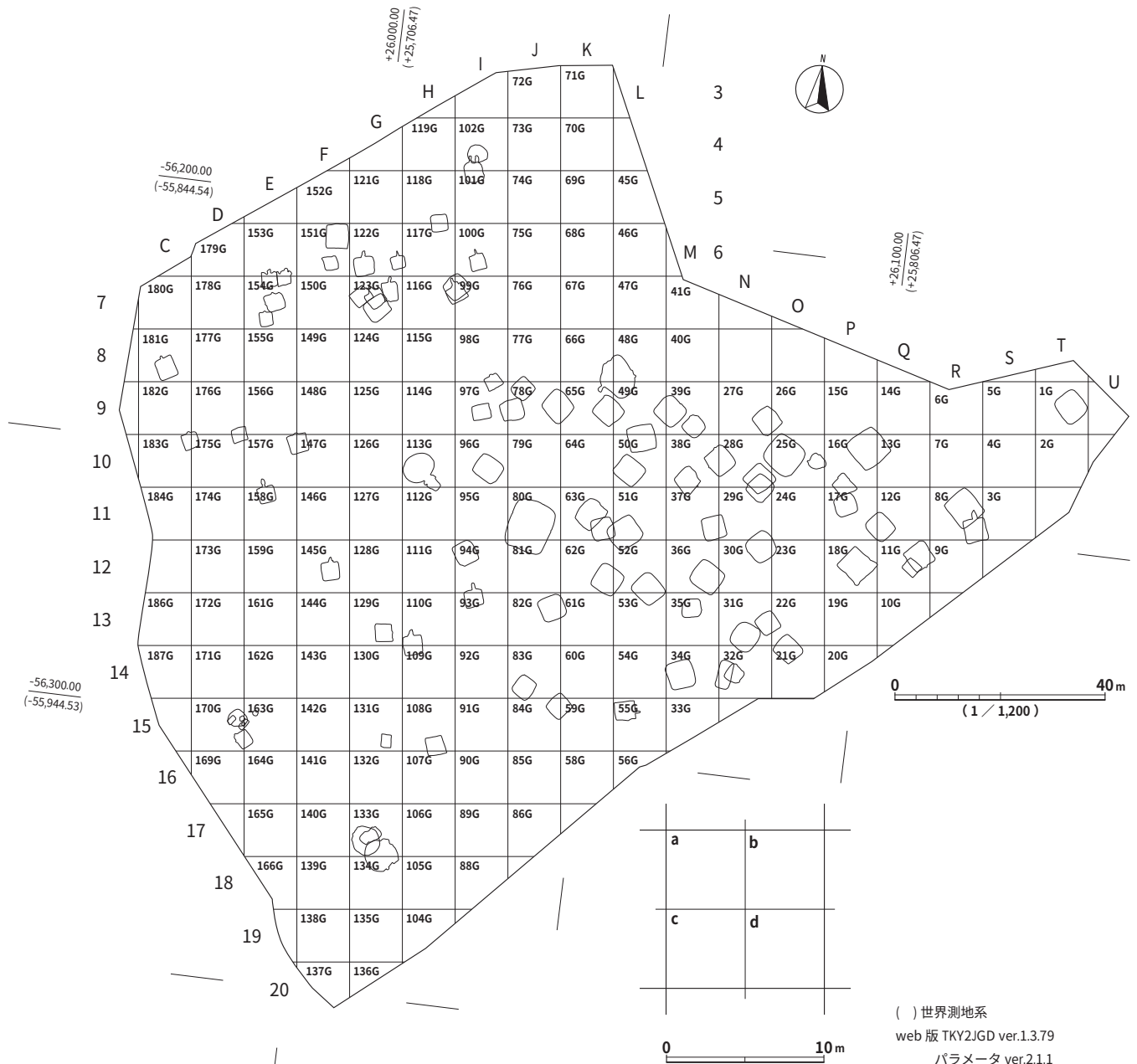


Fig.3 南中台遺跡調査区(新旧グリッド対照)

国分寺台地区は、養老川右岸の市原台地北西端に位置し、北面に東京湾岸低地、西・南に養老川低地をのぞむ。地形的には3筋の谷（仮称A・B・C谷）によって区分されるが、荒久遺跡A地点、南中台遺跡は、ともにB谷奥の台地上に位置する。

(1) 南中台遺跡

南中台遺跡は、B谷奥右又の左岸台地上に立地する（ここでの左右表記は、すべて上流側からとする）。遺跡の立地する台地上の標高は29.0～31.0mであり、南北方向にゆるやかな傾斜をもつ。B谷の谷底の標高は19.8～20.2m、谷底幅は28.5～42.0mを測る。また、遺跡西側には、B谷左又の埋没谷があり、対岸の荒久遺跡との境界になっている。B谷奥右又対岸には南祇園原遺跡がある。南中台遺跡は、縄文時代の貝塚と、弥生時代終末期（古墳時代早期）～古墳時代前期初頭を中心とする遺跡



Fig.4 国分寺台地区と周辺の遺跡群



土地区画整理事業現況図 (1:500) 昭和44年3月測図より作成

Fig.5 南中台遺跡・荒久遺跡A地点と周辺遺跡全体図

0 150m
(1/3,000)

であるが、B谷下流右岸には祇園原貝塚が、神門墳丘墓（古墳）群の母村である中台（なかで）遺跡はB谷左又左岸、国分僧寺跡下層に展開する。

本遺跡の調査開始段階の遺跡名は「南中ノ台遺跡」である。また、調査時の台帳や遺物注記には「北中台遺跡」の名称があり、調査当時ないし調査後一時期「北中台遺跡」と呼ばれていたようであるが、周辺小字名に「北中台」はない。上総国分寺台遺跡調査団『東間部多古墳群 上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ』（第2章 国分寺台周辺の環境および遺跡）1974年刊では、貝塚部分を「南中ノ台貝塚」、集落部分を「南中台遺跡」として併記している。ここでは、市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図 北部編』1988年刊、千葉県教育委員会『千葉県埋蔵文化財分布地図（3）千葉市・市原市・長生地区（改訂版）』1999年刊にもとづき、「南中台（みなみなこんだい）遺跡」として報告する。

発掘調査は、1973年5月から12月の間行われた。調査面積は当初予定が10,000㎡、全体図からの再測値では18,250㎡を測る。

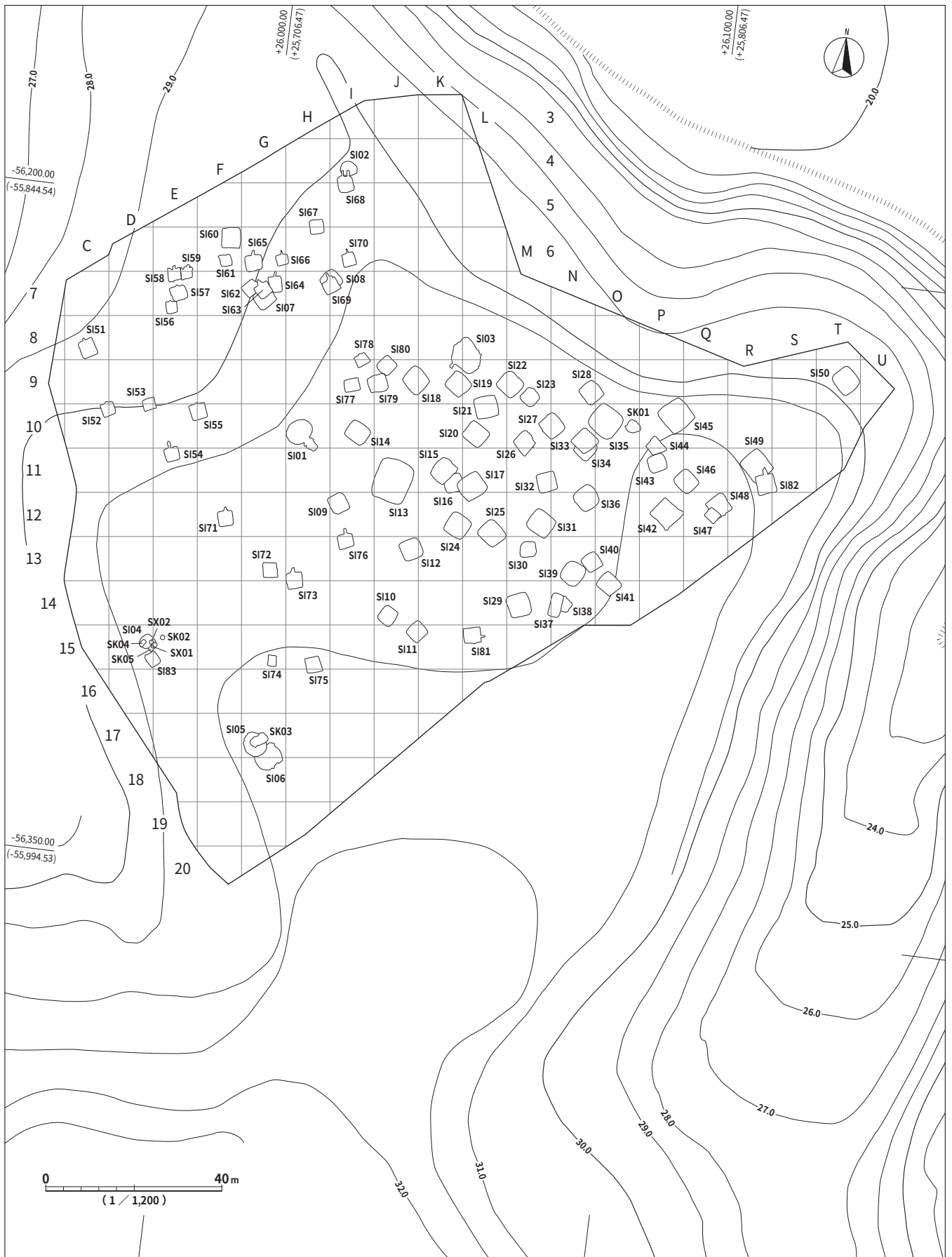
検出遺構数は、竪穴建物83棟、土坑5基、常滑産大甕埋納遺構1基、鉄釘集中地点1基、溝22条である。竪穴建物の時期は、縄文時代6棟、弥生時代終末期（古墳時代早期）～古墳時代前期初頭44棟、奈良・平安時代32棟、不明1棟である。縄文時代は阿玉台Ⅲ式期1棟、堀之内1式期が5棟である。土坑は、縄文時代後期堀之内式期2基、中世2基、不明1基である。棺ないし蔵骨器として再利用された常滑産大甕は13世紀後半代であり、近接する鉄釘集中地点、中世土坑2基もほぼ同時期の可能性が高い。溝については、近現代と推定するが確証はない。調査図面は、一部詳細図があるものの、基本的に1/300の平面図のみであり、遺物の取り上げもごく一部に限られていることから、報告対象とはしなかった。

竪穴建物については、調査時番号で、H(houseの略)1からH89まであり、H89A・Bを含め計90棟であった。本報告では、このうちH76・82を土坑としたが、H85・86は遺構遺物とも認められず、H87(SI84)・88(SI84)・89(SI84)については、遺物のみ存在し、遺構は特定できなかった。これらは、前記検出遺構数には含めていない。今回、遺構番号はすべて振り直している。旧遺構番号との対照はTab.1にある。

なお、本遺跡は、貝塚遺跡でもあり、SI01・03・79で竪穴内貝層が確認されている。ただし、過去に指摘があるように（鷹野1991）、貝塚自体調査らしい調査が行われた形跡がない。

調査区は、任意座標にもとづく10m×10mの方眼網を設定している。調査時のグリッド番号は、南北千鳥に配置されていたが、本報告ではこれを改めた（Fig.3）。また、10m方眼では、各遺構図に網点を表示できない場合があるため、これを4分してa・b・c・d区とした。これは、あくまでも本報告時の仮設グリッドである。水準については、基本的には任意で行われており、絶対高は明示できない。図面では、竪穴床面中央を0値とする+-cm整数値が記入されており、おそらく機械高ではない。公共座標との関係は、垂直写真（PL.3）をもとに、遺跡全体図（1/300）と土地区画整理事業現況図（1/500）を照合した。調査網は真北に対してN-7.0°-Wである。

本報告での全体図は、個別遺構図に磁北以外位置関係をしめすものがなかったため、全体図を拡大して各遺構図に基準となる網点を与え、再度組み立てたものである。したがってある程度の誤差をもつ。全体図自体も、垂直写真との比較では遺構の相対的な関係にややばらつきが認められた。本来垂直写真から図化すべきであったが、垂直写真の発見が整理作業終盤であったため行うことができなかった。



土地区画整理事業現況図 (1:500) 昭和44年3月測図より作成

Fig.6 南中台遺跡周辺地形図

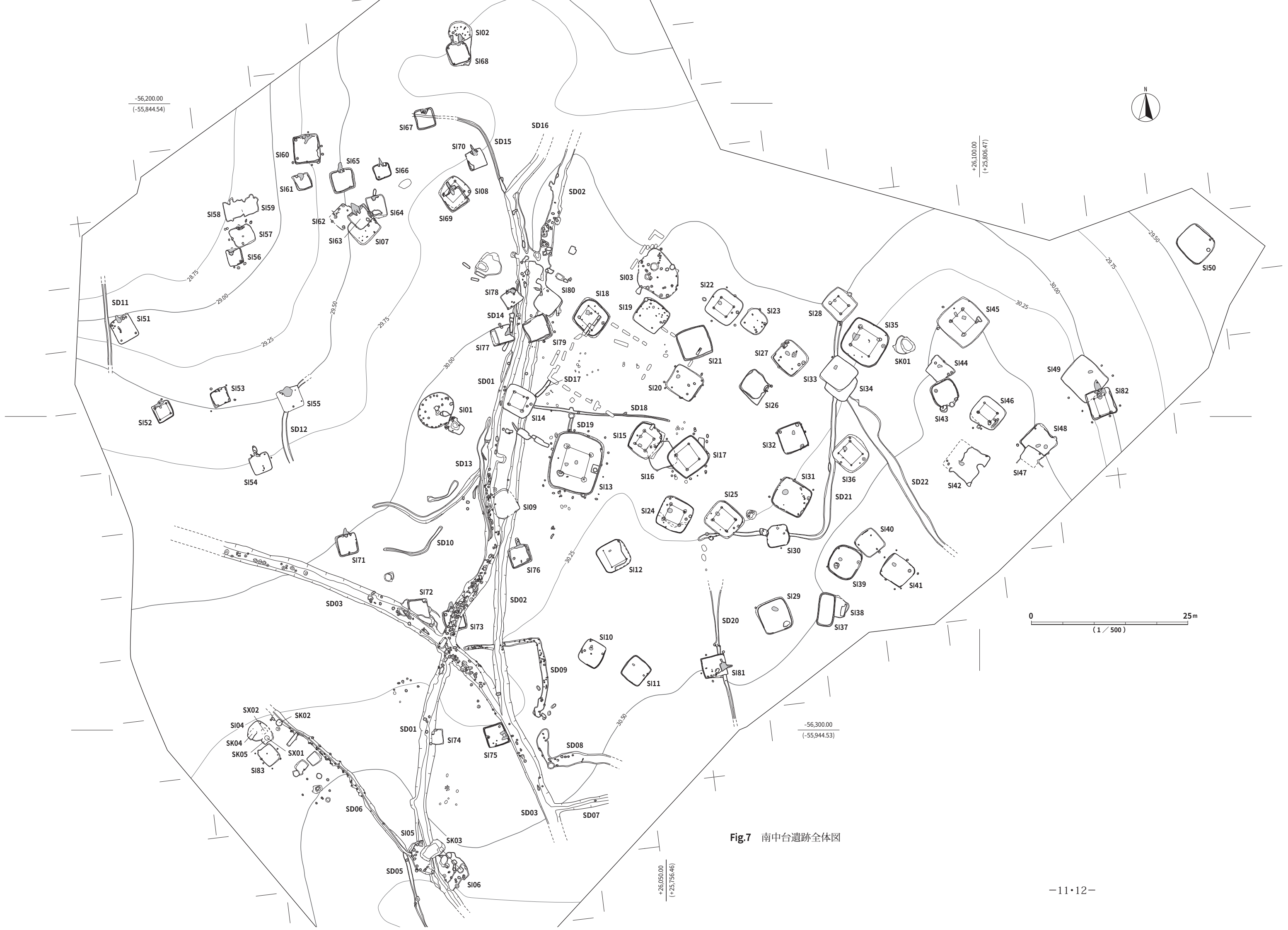


Fig.7 南中台遺跡全体図

った。

個々の遺構図のうち竪穴建物の平面図については、すべての調査原図が確認できた。ただし、報告書を利用するにあたっては、いくつかの留意すべき点がある。

出土遺物については、比較的図化されているが、遺物番号が図面には記入されず、ノートにメモ書きとして残されていた。これは、おそらく平面図の作成と遺物の取り上げが、別班ないし時期が異なることによると思われるが、遺物量が多い遺構については、同定が困難であった。最大限写真での照合を行ったが、本報告書でも、できるだけ遺物出土状況写真を掲載することとした。遺構図については、最終的な掘り上がり状況をしめす図が存在しない。カマドはほとんどが粘土範囲までであり、焼土や炭化物層についてもその下部の状況が明らかではない。掘り上がり状況の写真も存在しない。掘形面の状況も不明であり、建て替えの有無は判断できない。また、炉が図化されていない竪穴が比較的多数あり、調査写真でほぼ確実と判断したものについては描き写した。これについては、破線での表示としている。土層断面図は基本的に作成されていない。

(2) 荒久遺跡A地点

荒久遺跡A地点は、B谷奥左又のさらに支谷が分岐する地点の台地上に立地する。遺跡の立地する台地上の標高は26.0～27.0mであり、谷底との比高は約6.0mを測る。

荒久遺跡A地点は上総国分僧寺跡関連遺跡であり、僧寺跡東側に隣接する。本調査区内で僧寺寺院地外郭溝の北東隅部が検出されている。僧寺の東側に展開する荒久遺跡は、僧寺の造営・運営にかかわる集落として周知されており、A地点もその一面を占める。本地点調査区は、荒久遺跡本体部分とはやや離れ独立しており、調査段階の遺跡名は「下アラク遺跡(下あらく)」である。また、「荒久A遺跡」の名称も見える。本報告では、上総国分寺台遺跡調査団『東間部多古墳群 上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ』(第2章 国分寺台周辺の環境および遺跡)1974年刊、市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図 北部編』1988年刊、千葉県教育委員会『千葉県埋蔵文化財分布地図(3) 千葉市・市原市・長生地区(改訂版)』1999年刊にもとづき、荒久遺跡に含めることとし、そのA地点とする。荒久遺跡本体とは地形的にも連続しており、遺跡内容からしても、一連の遺跡とすることが妥当であろう。従来の荒久遺跡調査区をB地点、北アラク遺跡調査区をC地点とし、上総国分僧寺跡寺域内は僧寺跡に含め報告することとしたい(櫻井2009)。

発掘調査は、1971年12月1日から1972年3月20日の間行われた。発掘調査区は、市民会館建設予定地であり、1972年度に発足した上総国分寺台遺跡調査団に先立つ、国分寺台区画整理にともなう発掘調査の端緒となった。調査面積は、当初予定が2,700㎡、全体図からの再測値では4,380㎡を測る。

検出遺構数は、竪穴建物34棟(建て替えを含め35棟)、掘立柱建物4棟(建て替えを含め5棟以上)、溝5条、貝ブロックないし貝層をとまなう土坑1基である。竪穴建物はすべて奈良・平安時代の所産であり、掘立柱建物についてもその可能性が高い。溝は、僧寺寺院地外郭溝2条、他は時期不明。貝土坑については、記録、遺物が確認できなかった。なお、竪穴建物では、遺物のみ存在し、遺構が特定できないものが2棟あり、これを含めると36棟になる。

発掘調査基準は、任意座標で行われている。調査区網は、表土除去後の写真に、紐で方眼を組んだ

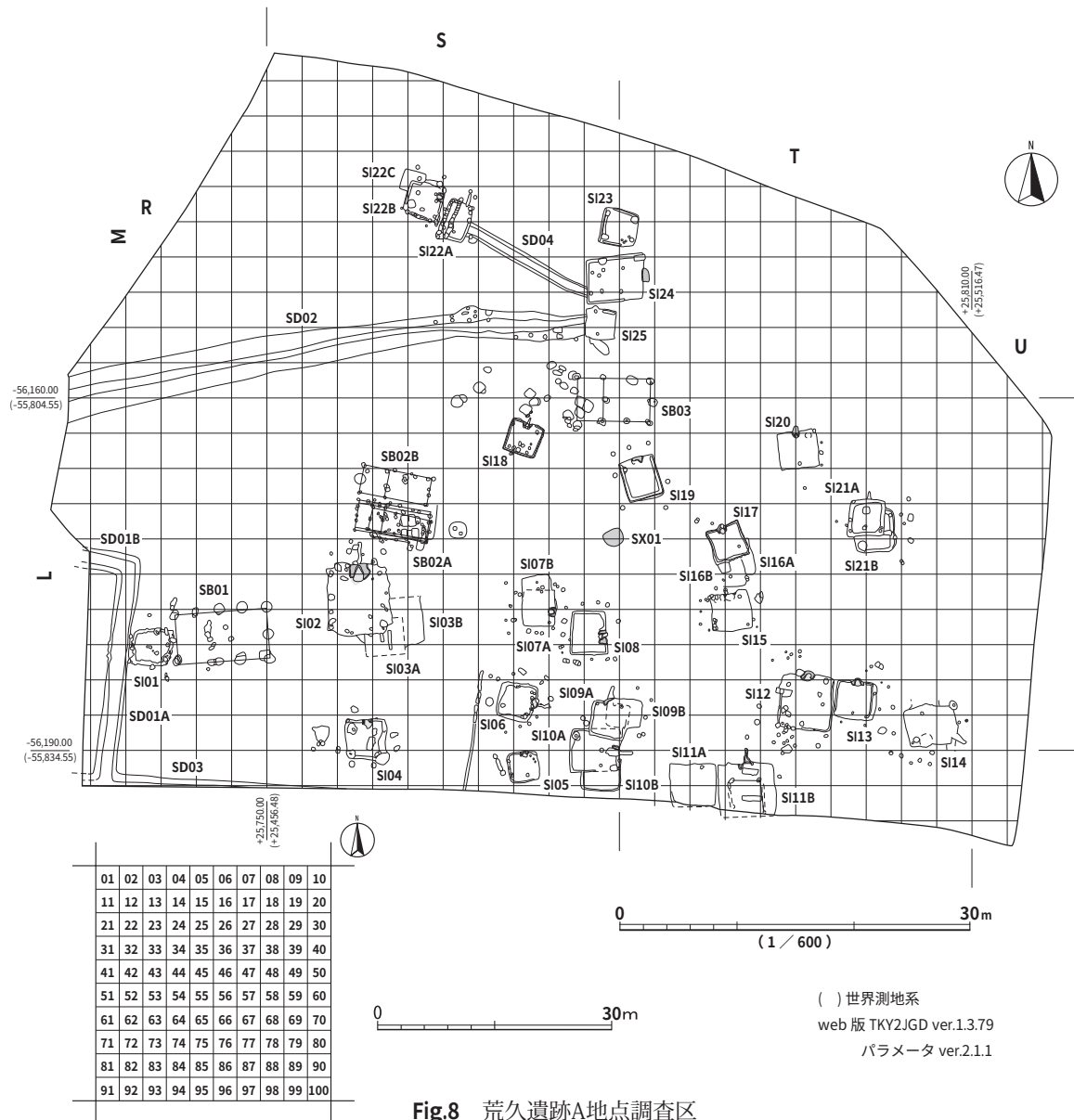


Fig.8 荒久遺跡A地点調査区

状態のものがあり、図面の一部にもグリッドを表記したのがみえるが、遺構図面には基準点の記載が一切なく、調査グリッドにあわせた遺物の注記、ラベル類、台帳も認められなかった。本報告で利用した方眼網は、公共座標にもとづく僧寺の調査区を延長したものであり、あくまでも机上での合成であって、各遺構に対して絶対値とはならない。その照合は、土地区画整理事業現況図(1/500)を基本図とし、南側の隣接道路と、僧寺外郭溝を基準とした。水準についても、基本的には任意で行われていたようであり、絶対高は明示できない。

個々の遺構図について、調査原図が存在する遺構は竪穴建物15棟分のみであった。スケッチに近い簡略図のみ存在する遺構があり、全遺構に対して、同レベルの作図が行われていなかった可能性が高い。土層断面図は一切存在しない。

全体図についても、現存するものは1/200の青焼き図とトレース図のみである。現場で平板測量した図にもとづくと思われるが、基図は確認できなかった。また、各遺構の形状や主軸方向、各遺構の位置関係が、記録写真と見た目と異なる部分もあり、明らかに不自然な部分については修正を加え

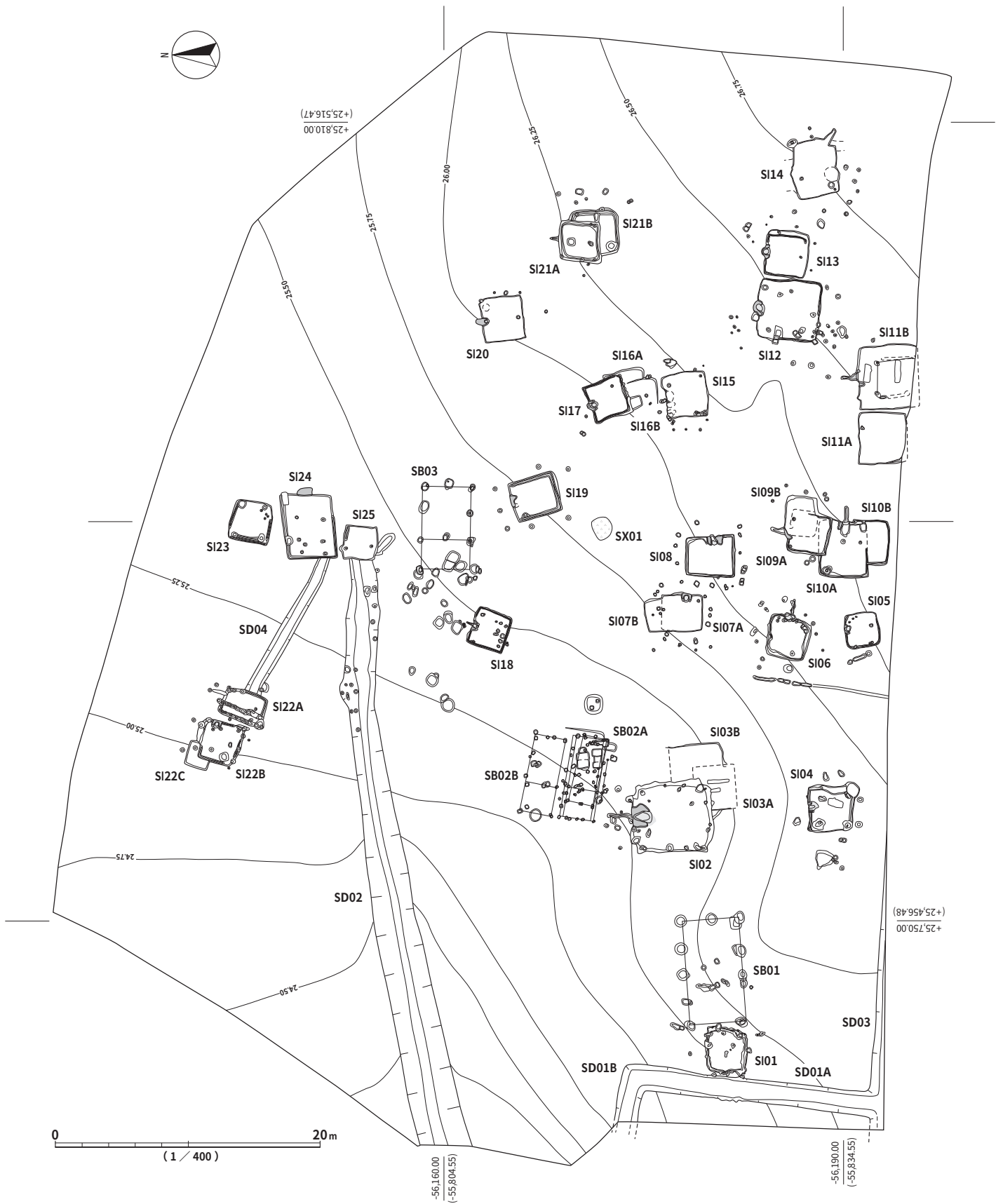


Fig.9 荒久遺跡A地点全体図

ている。

本報告での全体図は、個別遺構図に位置関係をしめすものがないため、修正全体図を拡大して各遺構図に基準点を与え、修正遺構図をもとに再度組み立てたものである。以上の経緯から、本調査区には絶対的な精度はないが、各遺構の相対的な位置関係について少なくとも大きな矛盾はないと考えている。

旧全体図には、すべての遺構番号が記載されていなかった。調査原図のないものについては、調査写真の写し込みなどで照合を進めたが、確実とはいえない状況がある。遺構番号は、調査当初アルファベット表記でAからH号まで振られていたようであるが、その後変更されている。調査図面、全体図、調査写真、遺物で確認できる竪穴建物は第1号から第26号住居跡までであり、他に「H号」が存在する。このうち、第2号住居跡(SI26)、第26号住居跡(SI27)については、遺物以外確認できなかった。一方、H号(SI05)は、新番号から漏れている可能性があり、遺物も存在しない。また、SI06・12(第6・7号住居跡)、SI06・13(第6・8号住居跡)のように、重複関係もないのに、遺物が一括して取り上げられている例、SI11A・Bなど、重複関係もないのに同じ遺構番号が付され(第10号住居跡)、遺物も一括されている例などがある。また、本遺跡では、遺物の出土状況写真が少なく、遺構と遺物の対応についても、問題がないとはいえない。

今回、遺構番号は再度すべて振り直している。旧遺構番号との対照はTab.1にある。本調査区では、重複関係をもつもの、重複関係がなくても、旧遺構番号が同一で、遺物が区分できないものについては、「A・B・C」の呼称とし、このうち、建て替えと考えるものについて「a・b」で区別した。

本報告にあたって、問題点は問題点として明示したが、荒久遺跡A地点、南中台遺跡の調査は、ともに国分寺台区画整理事業にともなう発掘調査の黎明期にあたり、とくに、荒久遺跡A地点は、組織体制の未整備を背景とした事情もあると推察する。ただし、同時に、調査後四半世紀の間の、度重なる引っ越しなどによる経年劣化によるところも多いと思われる。所在不明遺物や新たな記録類に発見があった場合は、何らかの機会をみて早期に公にしていかなければならないであろう。

文 献

- 平野元三郎 1973 「下あらく遺跡」『日本考古学年報24(1971年度)』日本考古学協会
- 田中新史・宮本敬一 1974 「国分寺台周辺の環境および遺跡」『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ 早稲田大学出版部
- 鷹野光行 1991 「千葉県市原市西広貝塚・南中台貝塚採集の土器をめぐって」『縄文時代』第2号 縄文時代文化研究会
- 田中新史 2000 『上総市原台の光芒 市原古墳群調査と上総国分寺台遺跡調査団』市原古墳群刊行会
- 櫻井敦史 2009 『上総国分僧寺跡Ⅰ』上総国分寺台調査報告Ⅸ 市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第8集 市原市教育委員会

第2章 南中台遺跡

南中台遺跡の検出遺構数は、竪穴建物83軒、土坑5基、常滑産大甕埋納遺構1基、鉄釘集中地点1基、溝22条である。竪穴建物の時期は、縄文時代6棟、弥生時代終末期（古墳時代早期）～古墳時代前期初頭44棟、奈良・平安時代32棟、不明1棟である。他に、遺物のみ存在し、遺構自体が確認できなかった竪穴が3棟分あるが、遺構番号の混乱などによる可能性もあり、3棟分が実在したかどうかは明らかではない。

縄文時代の遺構は、中期阿玉台Ⅲ式期1棟、堀之内1式期が5棟である。土坑は、縄文時代後期堀之内式期2基である。なお、本遺跡は貝塚遺跡であり、縄文時代ではSI01・03で竪穴内貝層が確認されている。ただし、別に調査区北西側で地点貝層が点在していた可能性がある。出土土器は、後期堀之内1・2式を主体とし、それ以降晩期安行3d式、前浦式の間、ほぼ連続的に認められる。それ後期以前についても、中期阿玉台式、加曽利E式などが散見できる。

弥生・古墳時代の遺構は、すべて弥生時代終末期（古墳時代早期）～古墳時代前期初頭の竪穴建物である。出土土器は、中期宮ノ台式がSI08・16・34・40・60など、後期山田橋式がSI15、古墳時代鬼高式がSI17・30・32・36・43・70などからある程度まとまって出土している。鬼高式にも幅があるが、終末期を中心とする。これらの時期の確実な遺構は検出されていないが、SI08・16・34につ

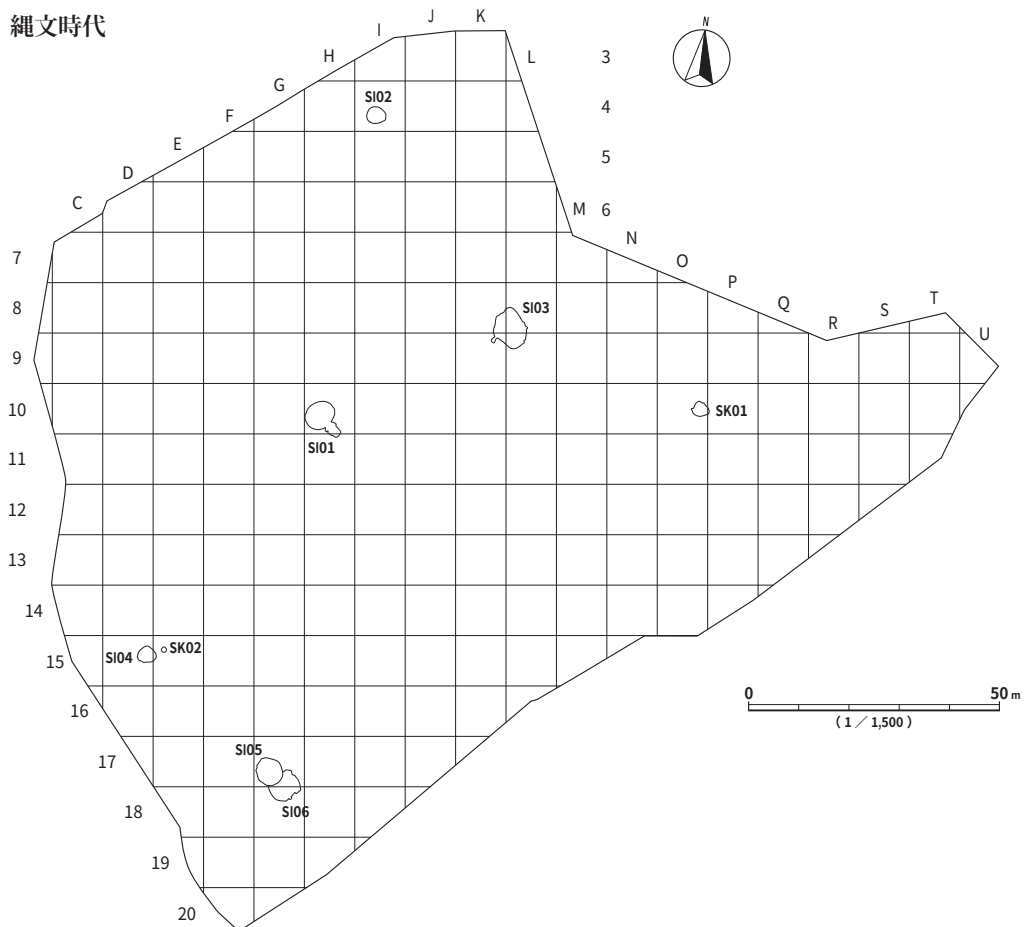


Fig.10 南中台遺跡遺構配置図（縄文時代）

いては、宮ノ台式期の可能性もある。

奈良・平安時代は竪穴建物32棟であり、9世紀代を中心とする。緑釉・灰釉は黒笹90号窯式が目立つ。

中世は、SX01の常滑産大甕が13世紀後半代であり、近接する鉄釘集中地点、中世土坑2基もほぼ同時期の可能性が高い。

弥生時代以降の竪穴出土の石器については、縄文時代の石器とは考えにくいもののみ竪穴単位で掲載し、磨石類など、時代時期の識別が基本的に難しいものは、第5節で一括掲載してある。

なお、「貯蔵穴」、「出入口施設」は、一般的な呼称として使用しているが、機能として具体的に証明されているわけではない。

第1節 竪穴建物

(1) 縄文時代

SI01 (Fig.11・12、PL.7・93・120)

SI01は、H10・H11区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は柄鏡形であり、張出部を含む主軸全長は8.07m、本体部5.26m(主軸)×6.12m、張出部2.81m(主軸)×2.43m、確認面掘形面積は30.75m²、確認面からの深さは0.1~0.18m程度を測る。主軸方位はN-51.0°-Wである。P4・5は炉と推定する。ただし、焼土や灰の有無などに関して調査図面、調査メモに記載がない。柱穴は、深さ0.4~0.7mのしっかりした壁柱穴が巡る。ただし、東辺側が未検出である。入口部Pitは、やや不揃いではあるが対になると推定する。張出部土坑は、平面規模1.38×1.16m、深さ0.71mである。

竪穴中央付近2か所で貝ブロックを検出している。断面図はないが、調査時の写真によるならば、破砕貝層で、ほぼ床面近くに堆積があるように見える。貝サンプルが残されていないため内容物は明らかではない。竪穴東辺部には、焼土の堆積が認められる。これも断面図がないため、焼土が床面に達していたかどうかの判断はできない。なお、焼土は不定形土坑P8・27上にもある。P8・27が本遺構にともなうものではないとすれば、焼土自体も後出する可能性がある。他に、北辺部壁際から粘土ブロックが出土している。

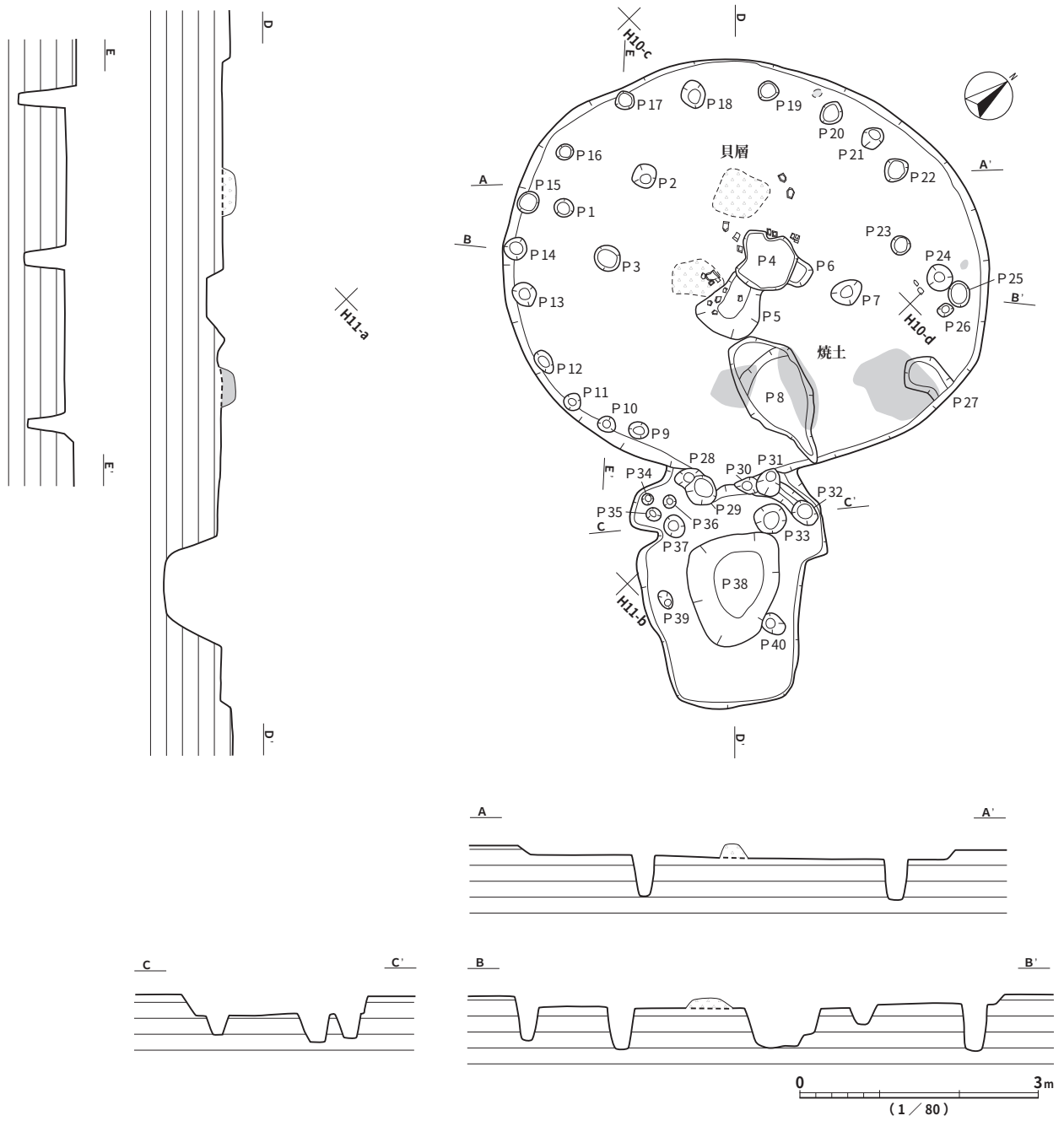
出土遺物は、総重量14,018.3gであり、土器は13,030.0g、このうち縄文土器は12,369.9gであった。出土土器は、堀之内1式を主体とする(1~6)。8は称名寺式系であり、一定量存在する。9・10は三十稲場式であろうか。11・12は加曽利E2-3式、13は堀之内2式末から加曽利B式の紐線文土器、14は晩期安行式の条線文土器である。これらは混在と考える。土器以外では、15が磨石、16が敲石類、17が頭部ないし抉り部をもつ不明石器である。実測遺物の出土位置は特定できなかった。

SI02 (Fig.13、PL.7・28・93)

SI02は、I4区に所在する。竪穴南側でSI68と重複する。新旧関係は本遺構が古い。

竪穴平面形態は円形と推定するが、南側がSI68によって破壊されている。竪穴規模は、遺存部で径3.34~3.76m、確認面掘形面積は推定で9.77m²、確認面からの深さは0.45~0.53m程度を測る。主軸方位は特定できない。炉は竪穴中央部に位置する。調査時平面図に記載がなかったが、調査メモと写真からおおよその範囲をしめした。P1~3は主柱穴と考えられ、深さ0.64m前後を測る。位置関係から、SI68内に残りの主柱穴が推定できるが、SI68は掘形面の記録一切がない。

SI01



ph.1 調査状況



ph.2 調査状況

Fig.11 SI01(1) 遺構・調査状況

SI01

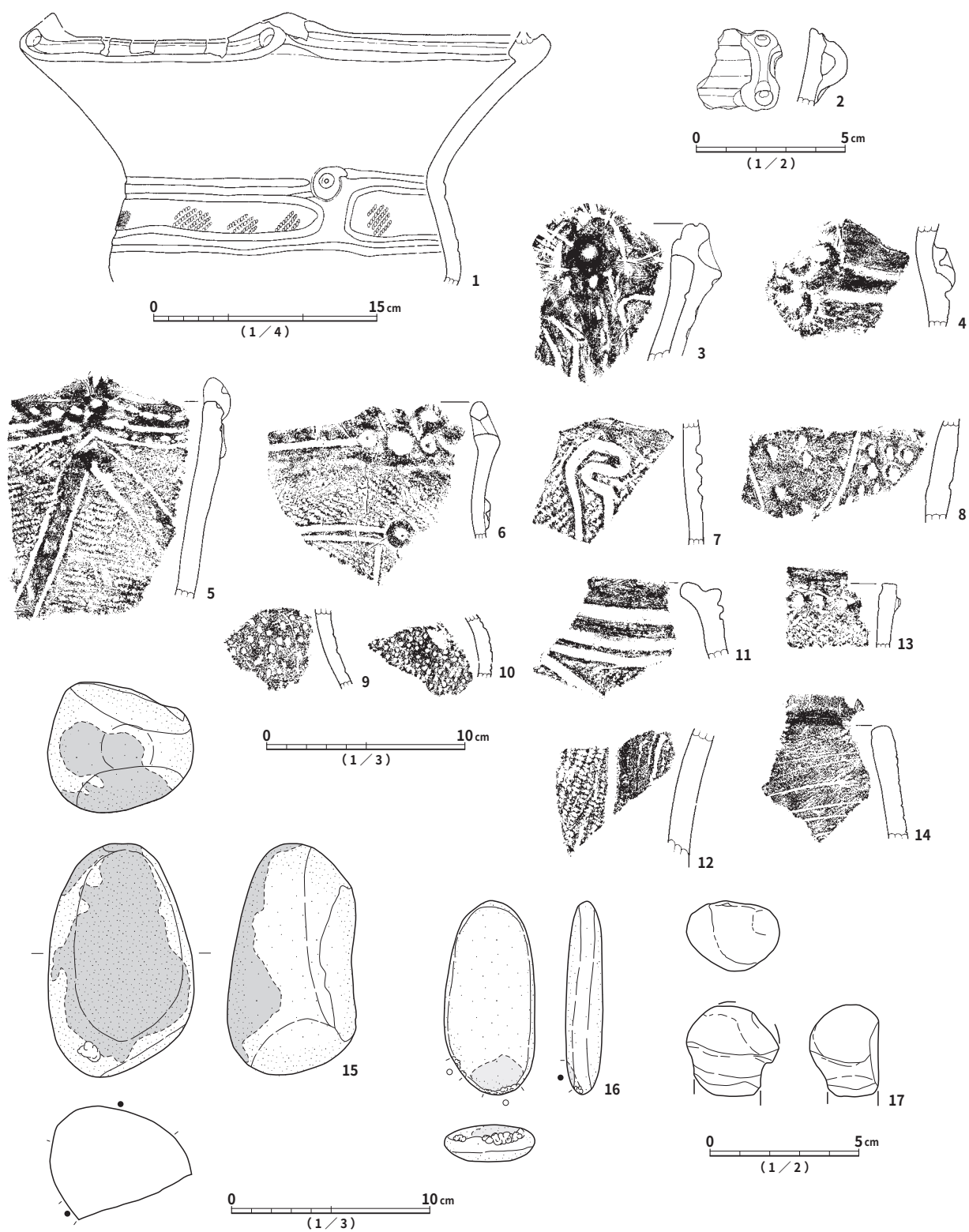
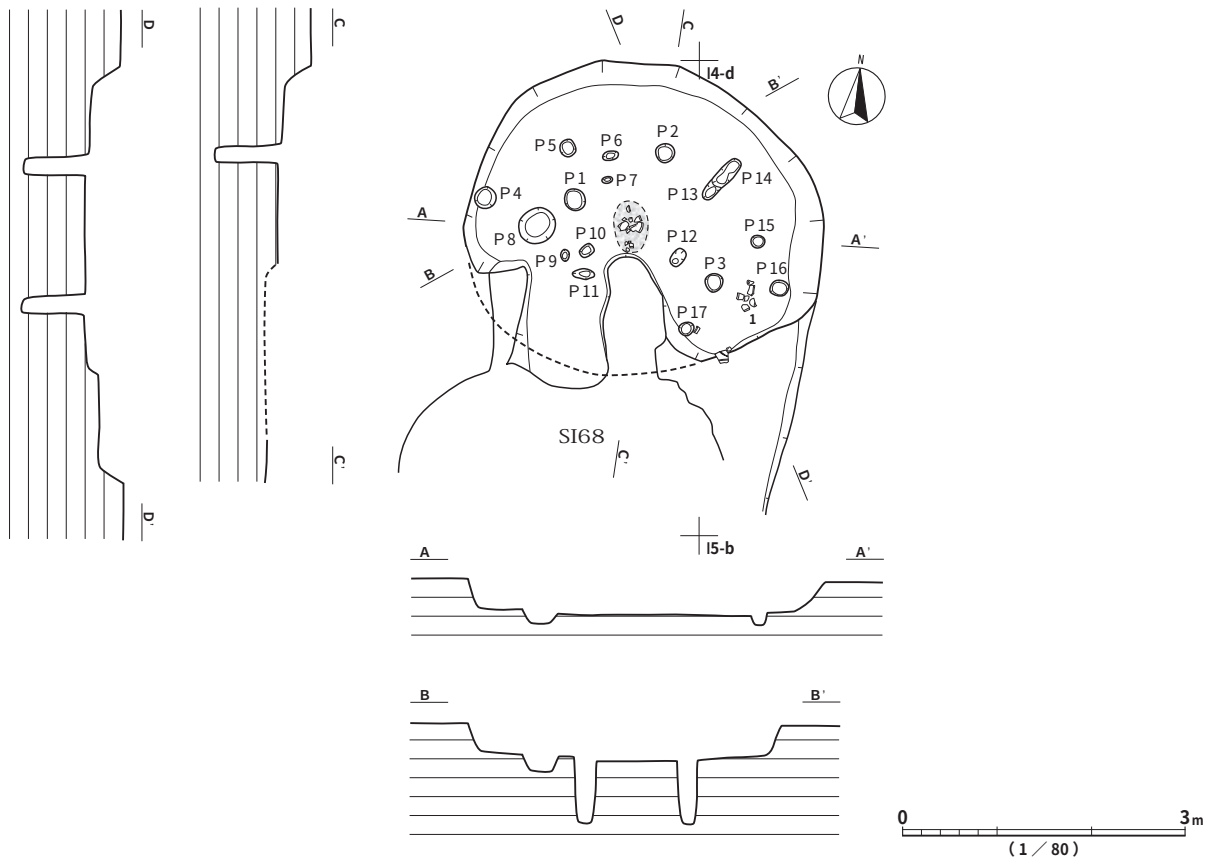


Fig.12 SI01(2) 遺物

SI02



ph.1 全景



ph.2 全景、出土状況 1

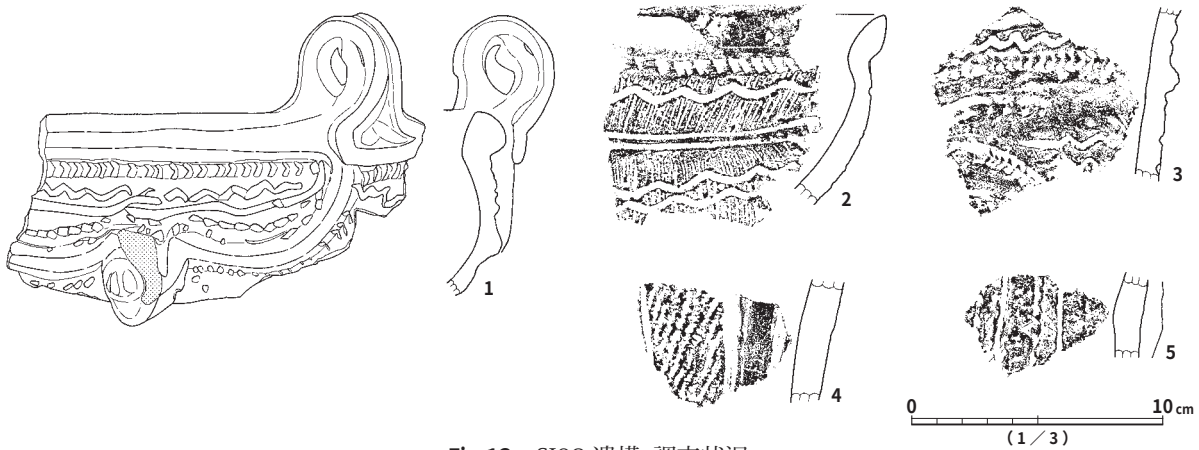


Fig.13 SI02 遺構・調査状況

出土遺物は、総重量 1,017.8g であり、このうち縄文土器は 1,007.8g であった。出土土器は阿玉台 3 式を主体とする。5 は加曽利 E2-3 式あるが、これは混在であろう。実測遺物のうち 1 は、竪穴南東側床面付近から出土している。他の出土位置は特定できなかった。

SI03 (Fig.14~17, PL.7・8・49・93・94・120)

SI03 は、K8・K9・L8・L9 区に所在する。単独で存在するが、現状竪穴範囲は不定形であり、建て替えや重複を含む可能性がある。

竪穴全体規模は、現状で 8.12m(長軸)×6.71m、確認面掘形面積は 37.71 m² である。確認面からの深さは 0.02~0.32m を測る。長軸方位は N-14.0°-W である。炉は検出されていない。中央土坑 P1 は、調査メモによると「貝混じりの粘土がはってある」とのことであるが、詳細は明らかでない。貝サンプルが残されていないため、内容物も不明。深さは、調査図面によると「-35」cm であるが、写真から判断すると、このレベルは貝層上面の可能性が高い。P1 は、別遺構の可能性もある。

主柱穴の組み合わせも明確ではない。Pit のうち、P4・8~10・12・14~16・25・33 が深さ 0.5m 以上を測るが、規則的な配列は認められない。ただし、写真から判断すると、検出した Pit すべてが図面化されていないように見える。壁際 3 か所で灰混じりの焼土を検出している。断面図がないため、堆積状況は明らかではない。

出土遺物は、総重量 41,199.8g であり、このうち縄文土器は 38,816.6g であった。出土土器は堀之内 1 式(1~9)、2 式(10~23)に大別できる。このうち、出土位置が特定できたものは、1・5 が竪穴南西辺壁際、18 が P1 内である。24・25 は加曽利 E2-3 式である。土器以外では、26~28 が土器片錘、29 が打製石斧、30 が磨石、32 が敲石類、31・33 が砥石である。

SI04 (Fig.17・18, PL.8・32・94・120)

SI04 は、D15・E15 区に所在する。SK04・05、SX01・02 と重複する。SX01 は常滑産大甕を棺ないし蔵骨器とする遺構、SX02 は鉄釘の集中地点、SK04・05 は中世の長方形土坑であり、これらによって竪穴範囲の大部分が破壊されている。また、SX01・02 取り上げ後の図面、写真が残されていないため、その下部の状況が明らかではない。

竪穴平面形態はほぼ円形と推定する。現状竪穴規模は 4.08m×3.42m を測る。確認面からの深さは 0.12~0.23m 程度である。主軸方位は不明。炉・主柱穴などの屋内施設は検出されていない。縄文時代の竪穴としての根拠は、ほぼ床面レベルからまとも掘之内 1 式が出土していることによる。

出土遺物は、総重量 37,019.5g であり、このうち土器は 36,103.6g、縄文土器は 34,965.3g であった。出土遺物は堀之内 1 式後半を主体とする。4 は称名寺式系か。なお、Fig.17-ph.2 の完形土器は所在が明らかではない。朝顔形の深鉢であり、集合沈線を充填する。土器以外では 16 が打製石斧、17 が砥石である。

SI05 (Fig.19~21, PL.8・94・95・121)

SI05 は、G17 区に所在する。竪穴中央部を SK03、東側を SD01 によって破壊されている。また、SD01 を挟んで SI06 と対峙し、西側でも SD06 と重複する。SI06 との新旧関係は明確ではないが、その他の遺構との関係は、本遺構が最も古いと推定しておく。ただし、断面図などが残されていないため、遺構検出状況から判断することはできない。なお、SI06 床面との比高は、SI06 の床面が安定していないため確実ではないが、0.1m 程度本遺構が深いと思われる。この場合、SD01 東側に本遺構の

SI03

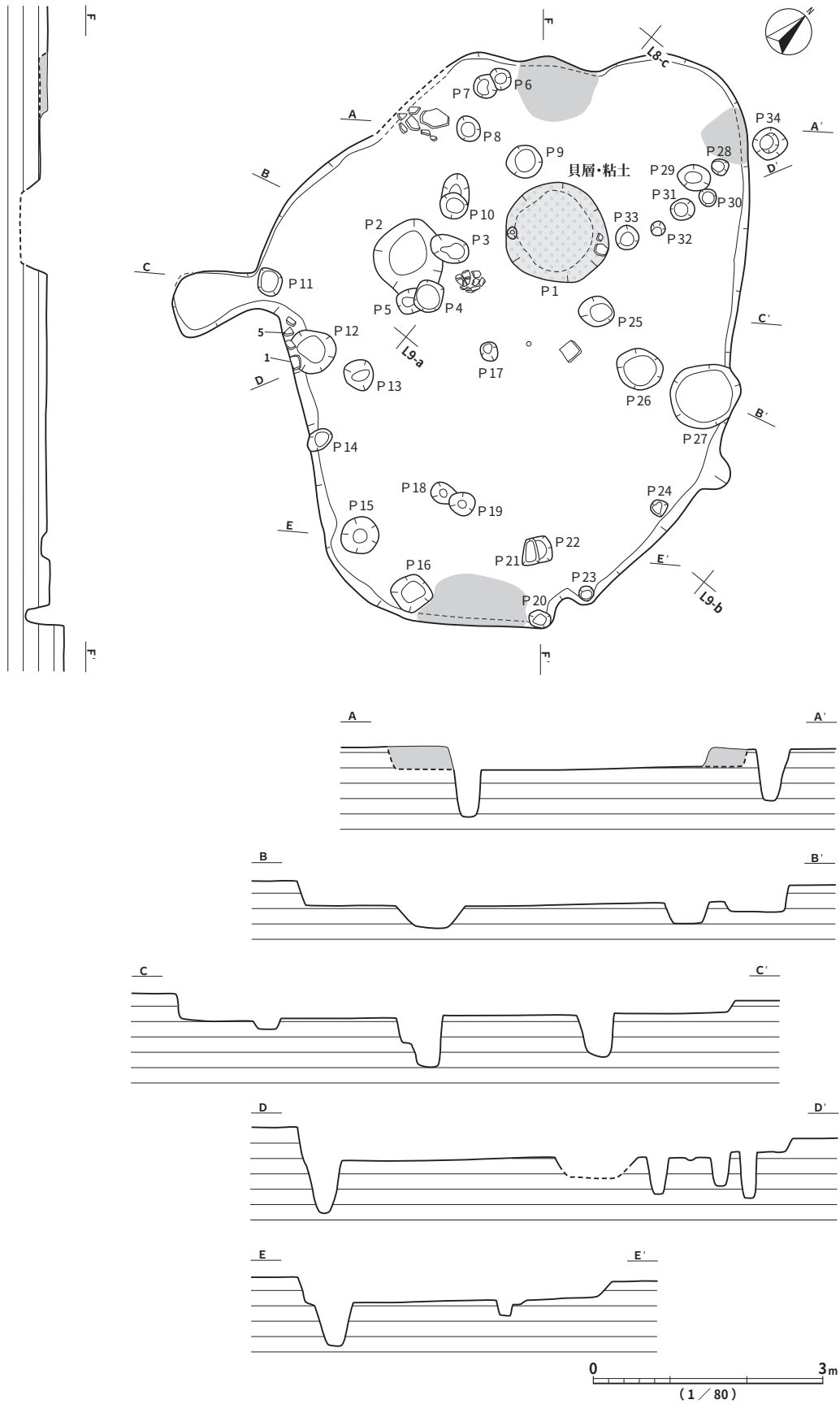


Fig.14 SI03(1) 遺構



ph.1 調査状況 P1



ph.2 出土状況 18

SI03

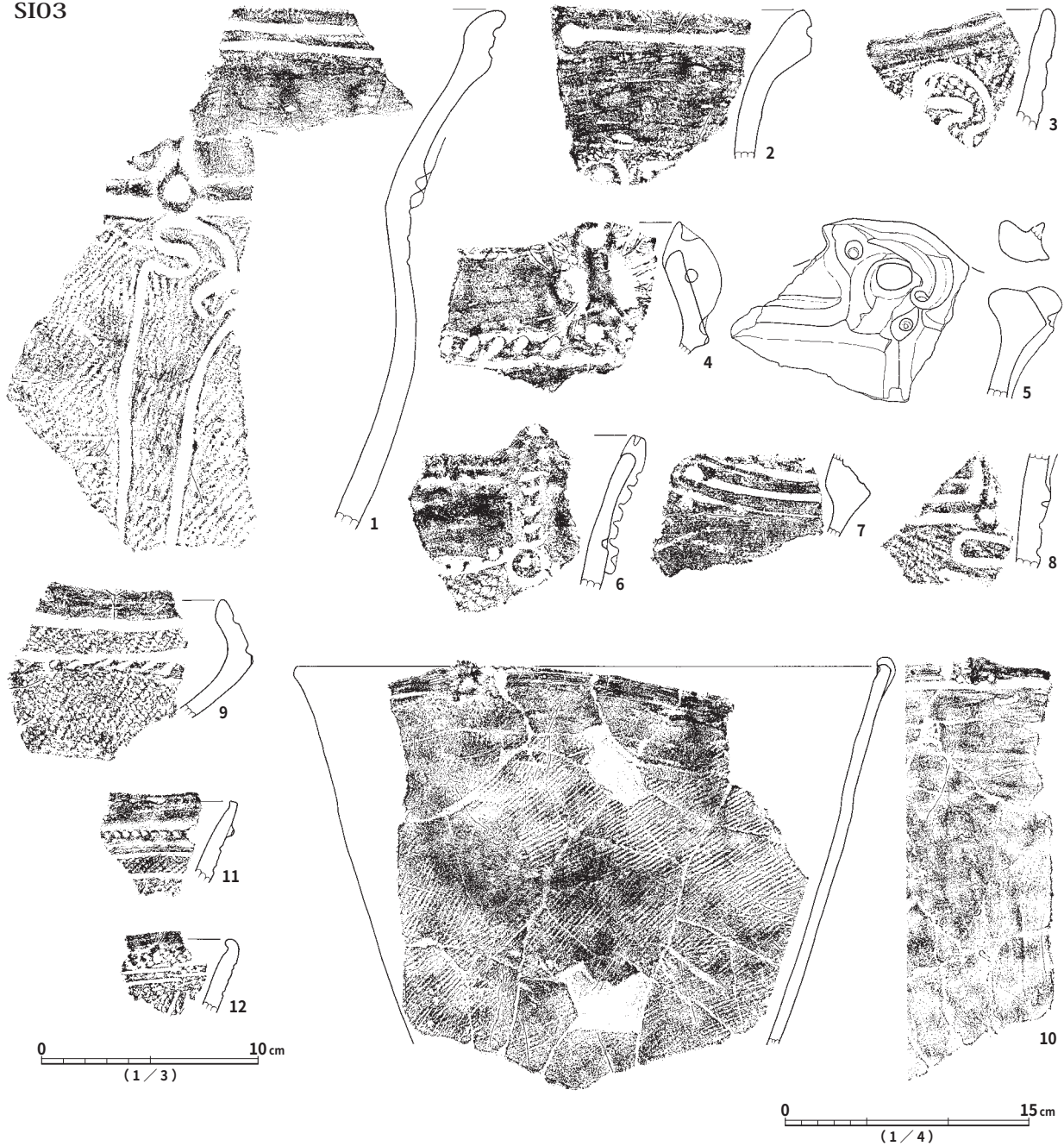


Fig.15 SI03(2) 遺物・調査状況

SI03

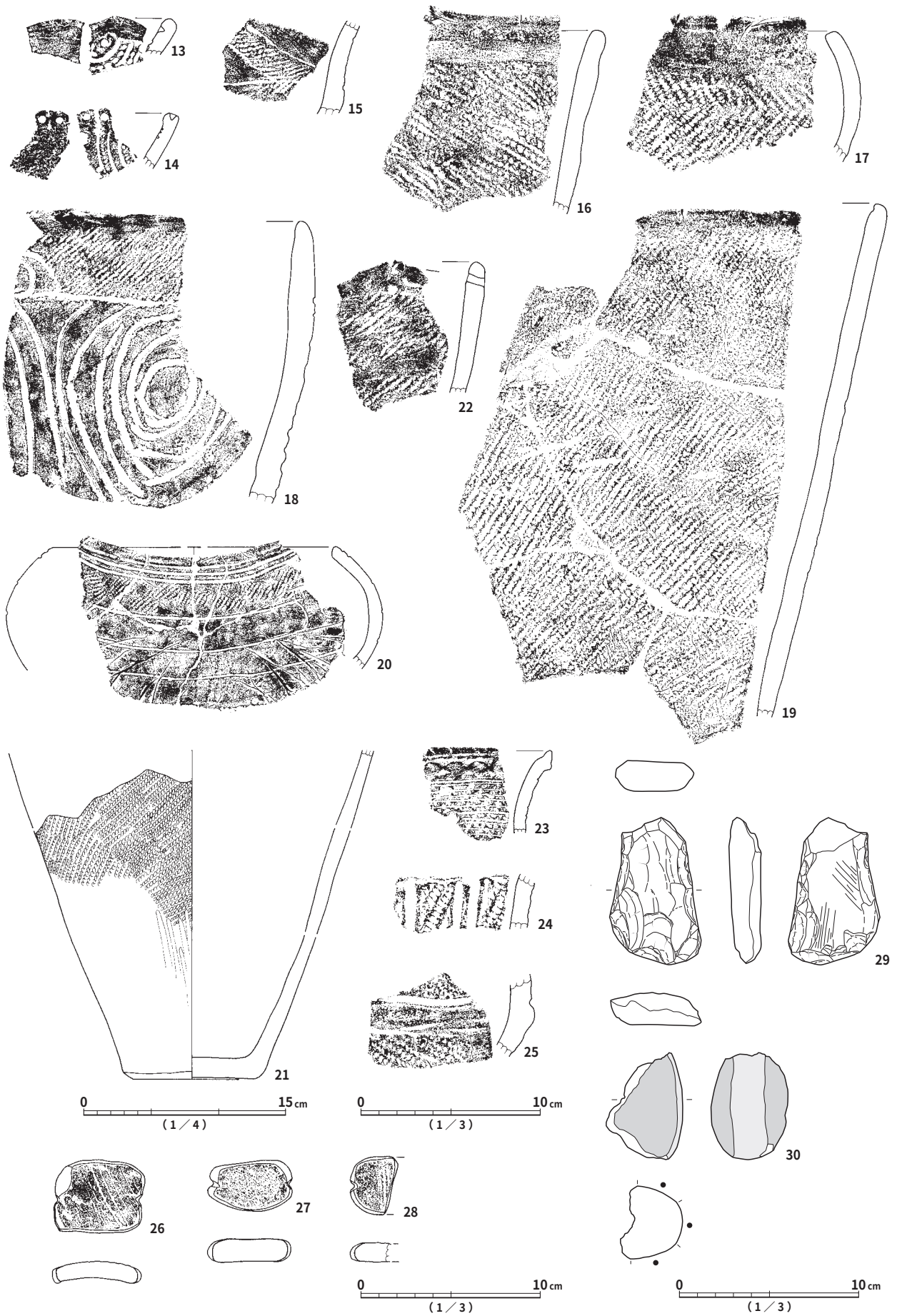
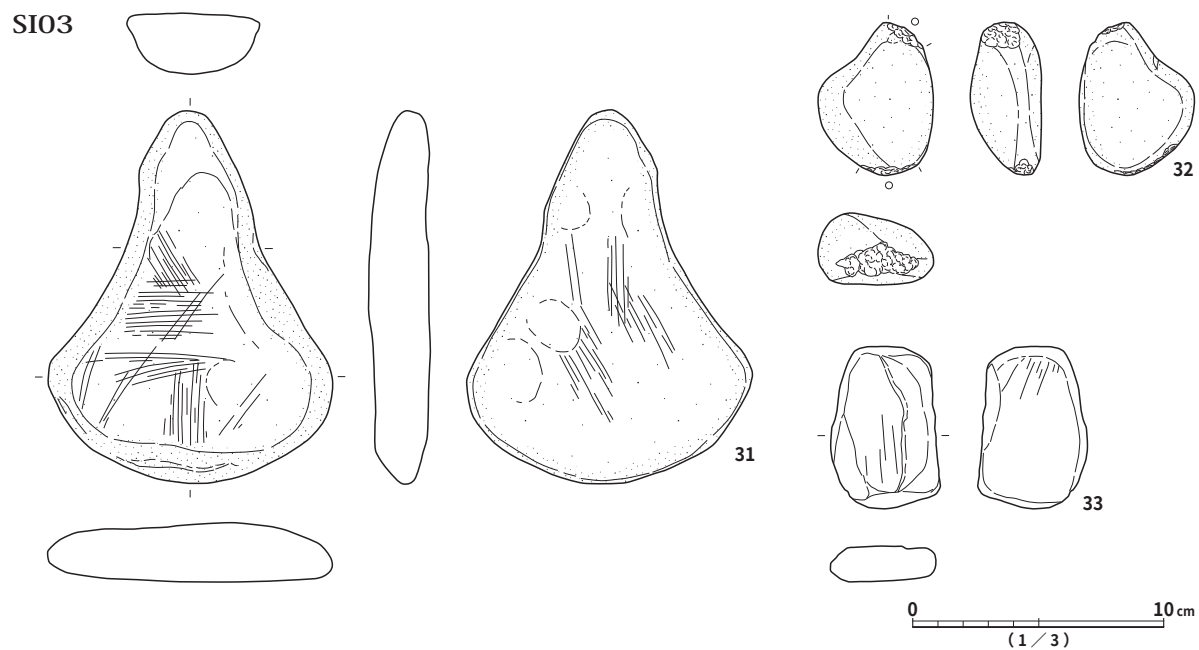
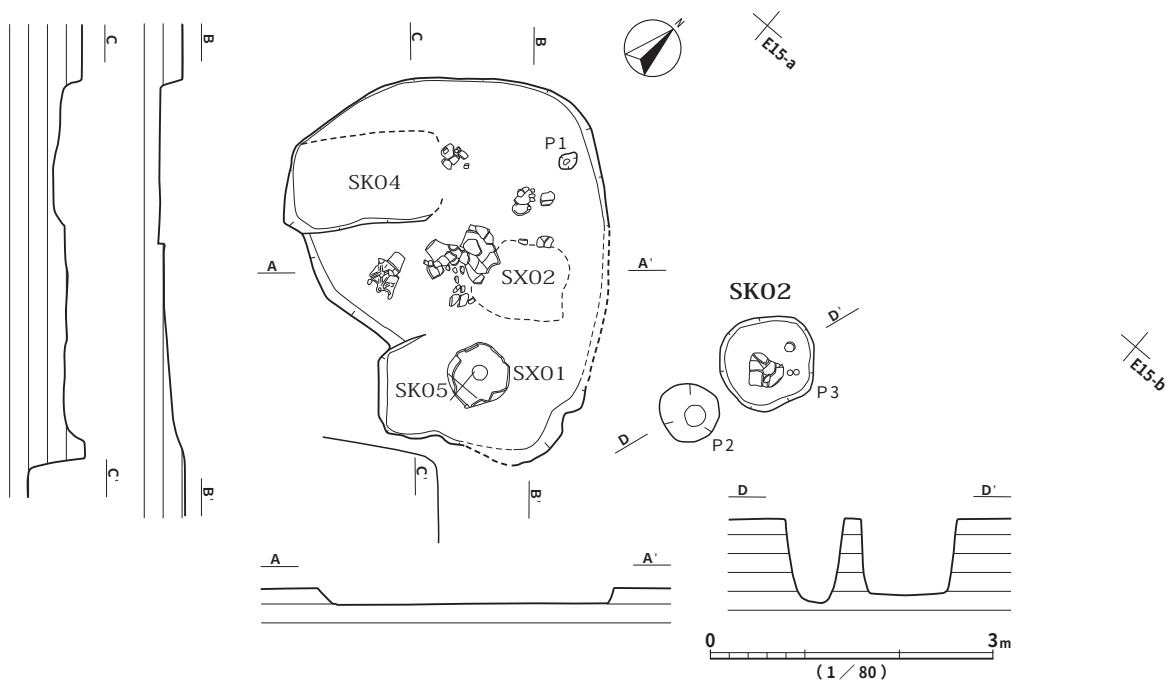


Fig.16 SI03(3) 遺物



SI04・SK02



ph.1 出土状況



ph.2 出土状況 不明土器

Fig.17 SI03(4) 遺物、SI04(1) 遺構・調査状況、SK02 遺構

SI04

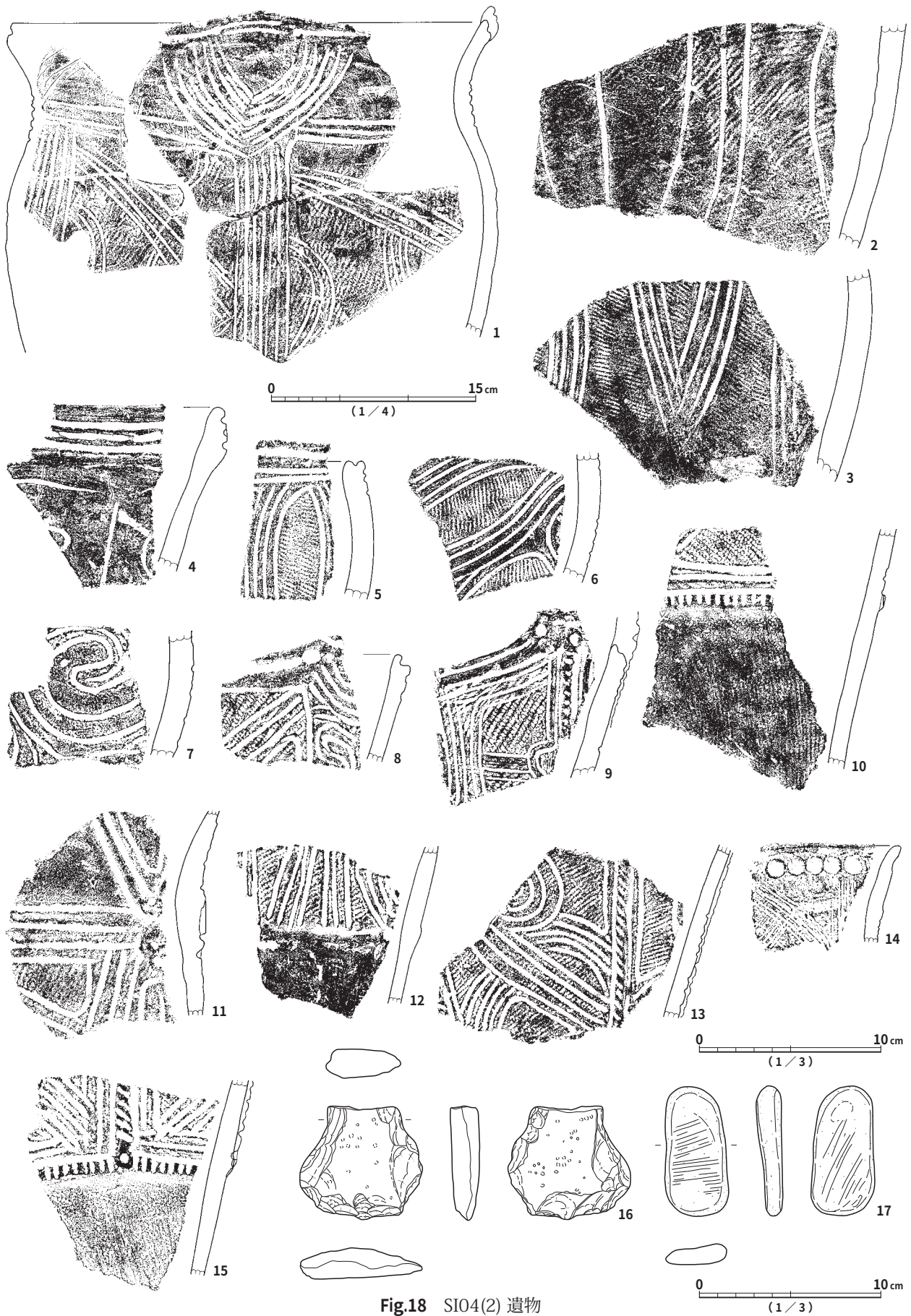


Fig.18 SI04(2) 遺物

SI05・06・SK03

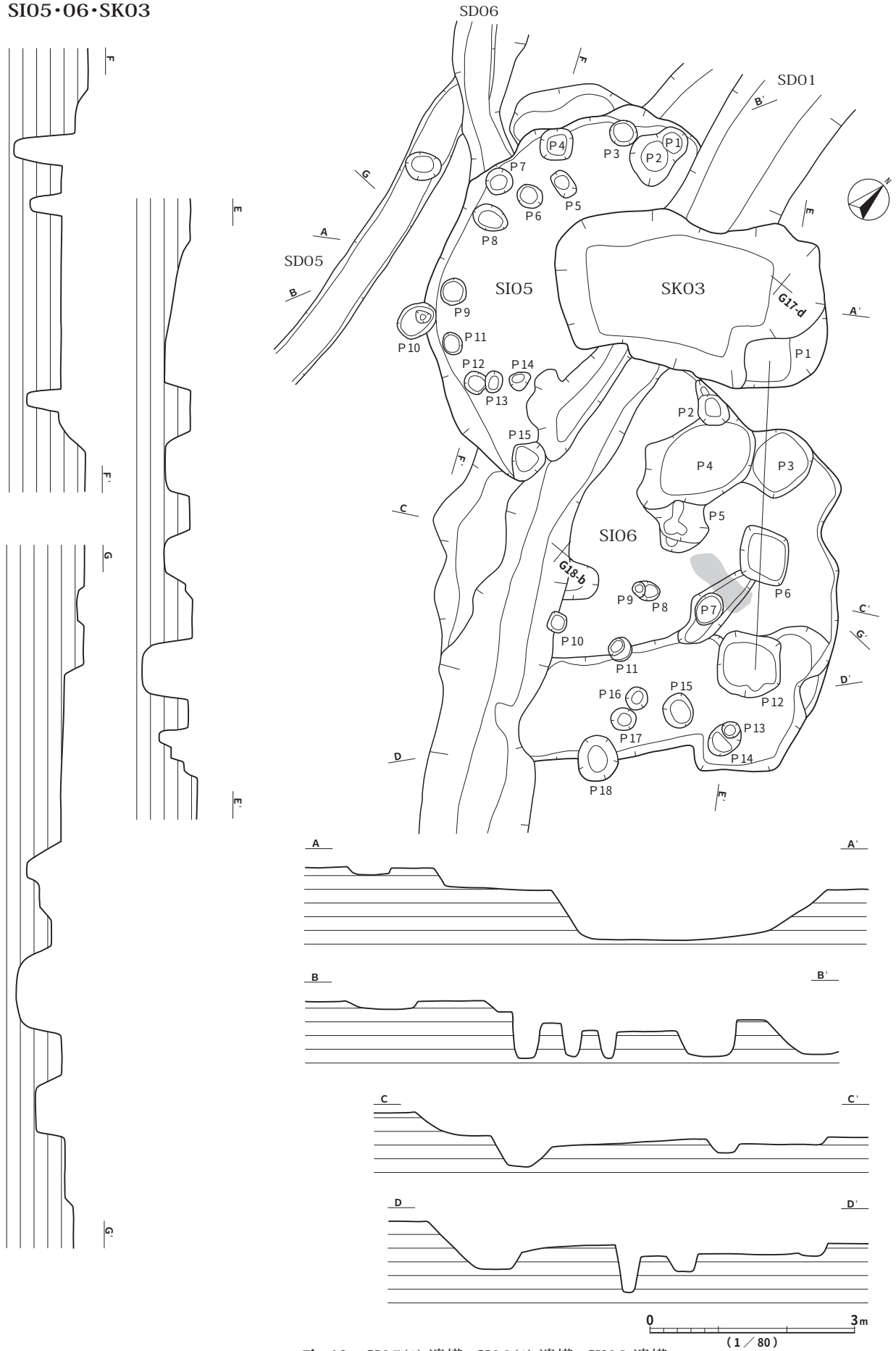


Fig.19 SI05(1) 遺構、SI06(1) 遺構、SK03 遺構



ph.1 全景



ph.2 出土状況 6

SI05

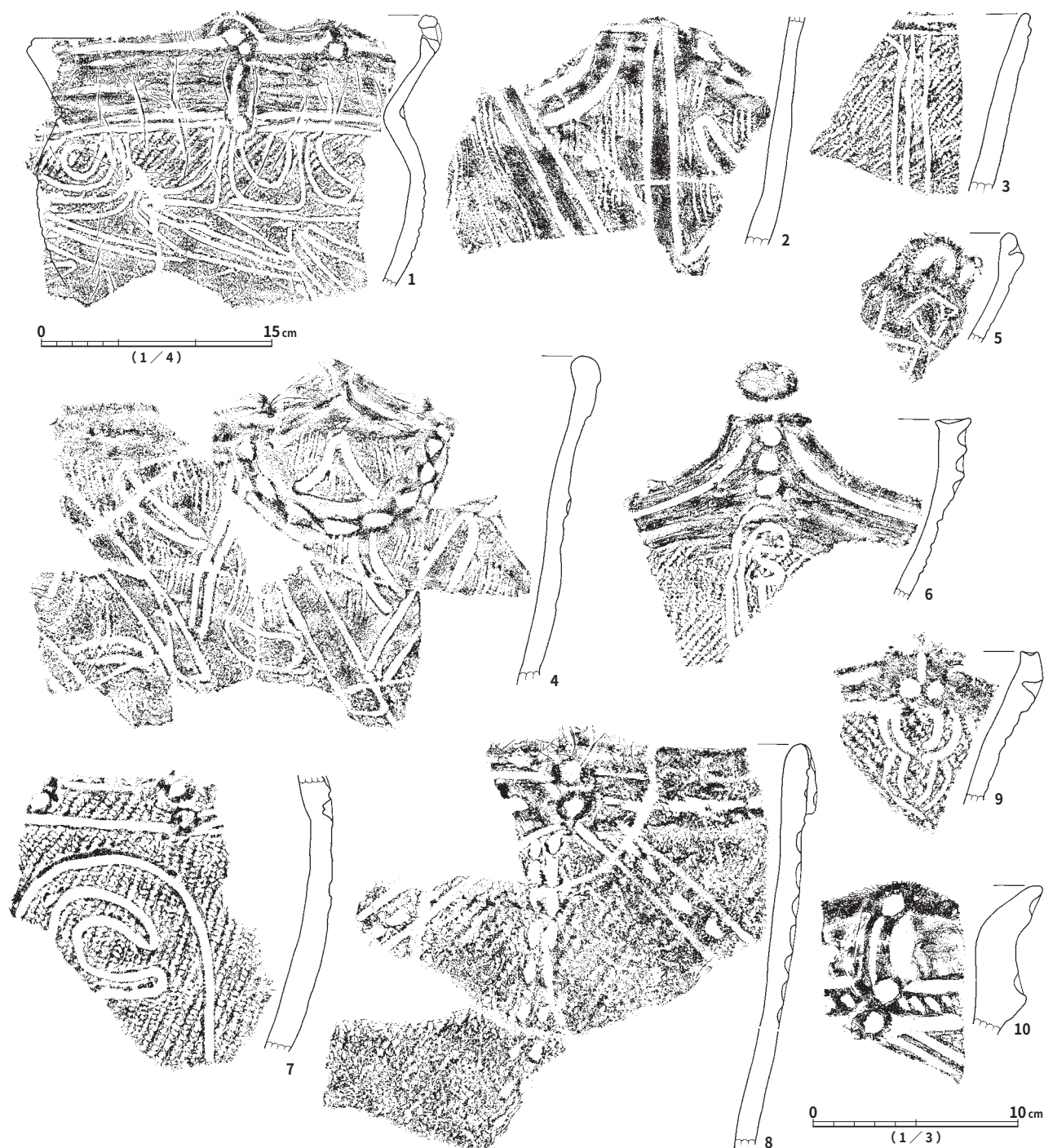
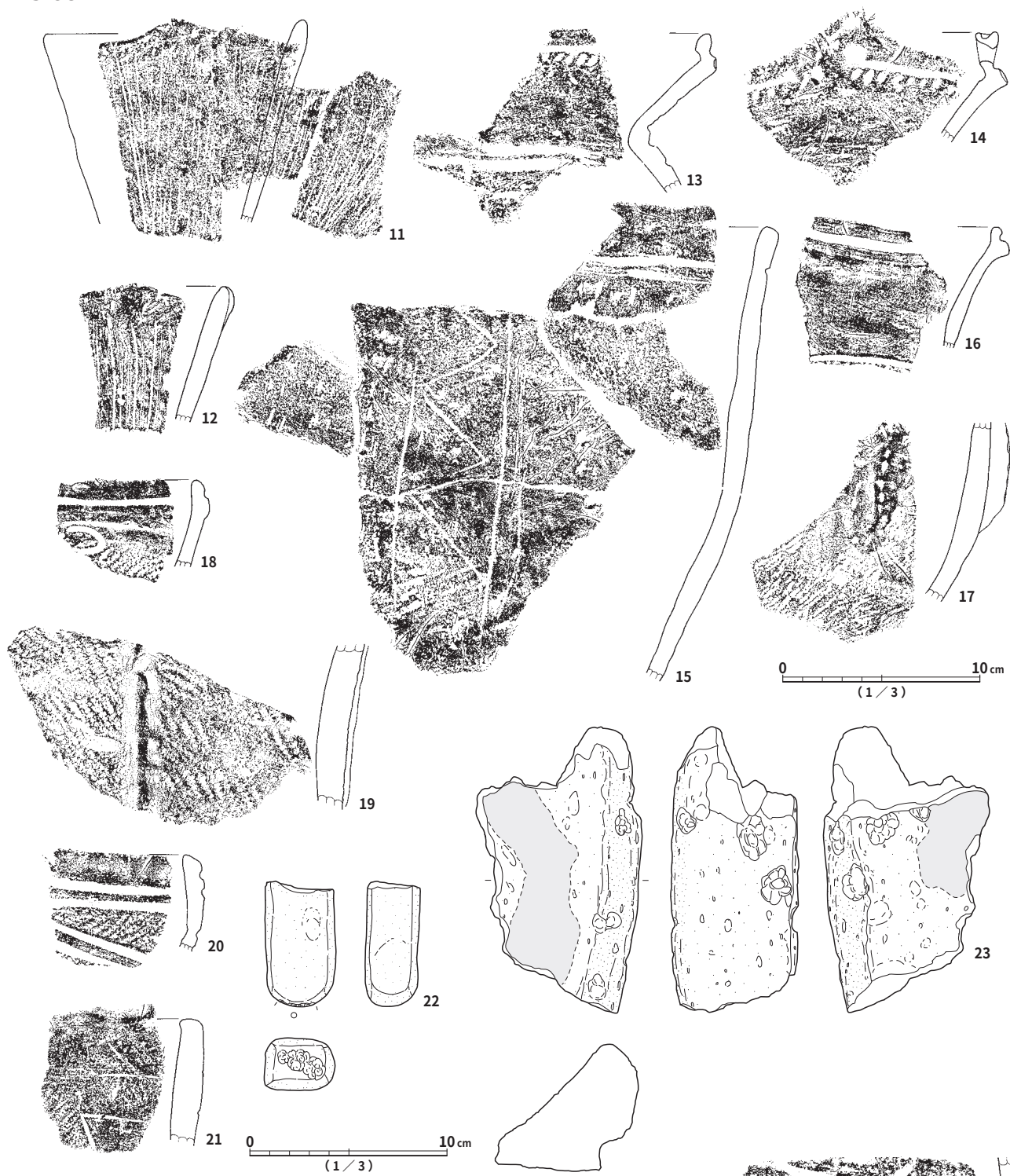


Fig.20 SI05(2) 遺物・調査状況

SI05



SI06

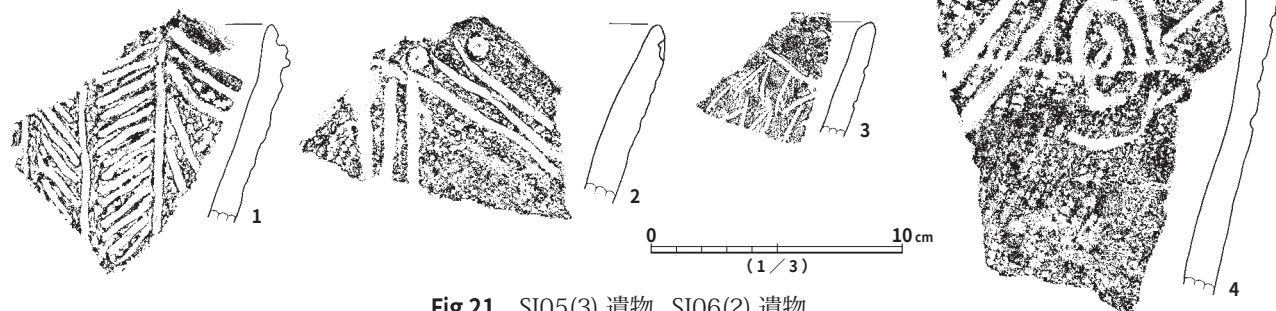


Fig.21 SI05(3) 遺物、SI06(2) 遺物

SI06

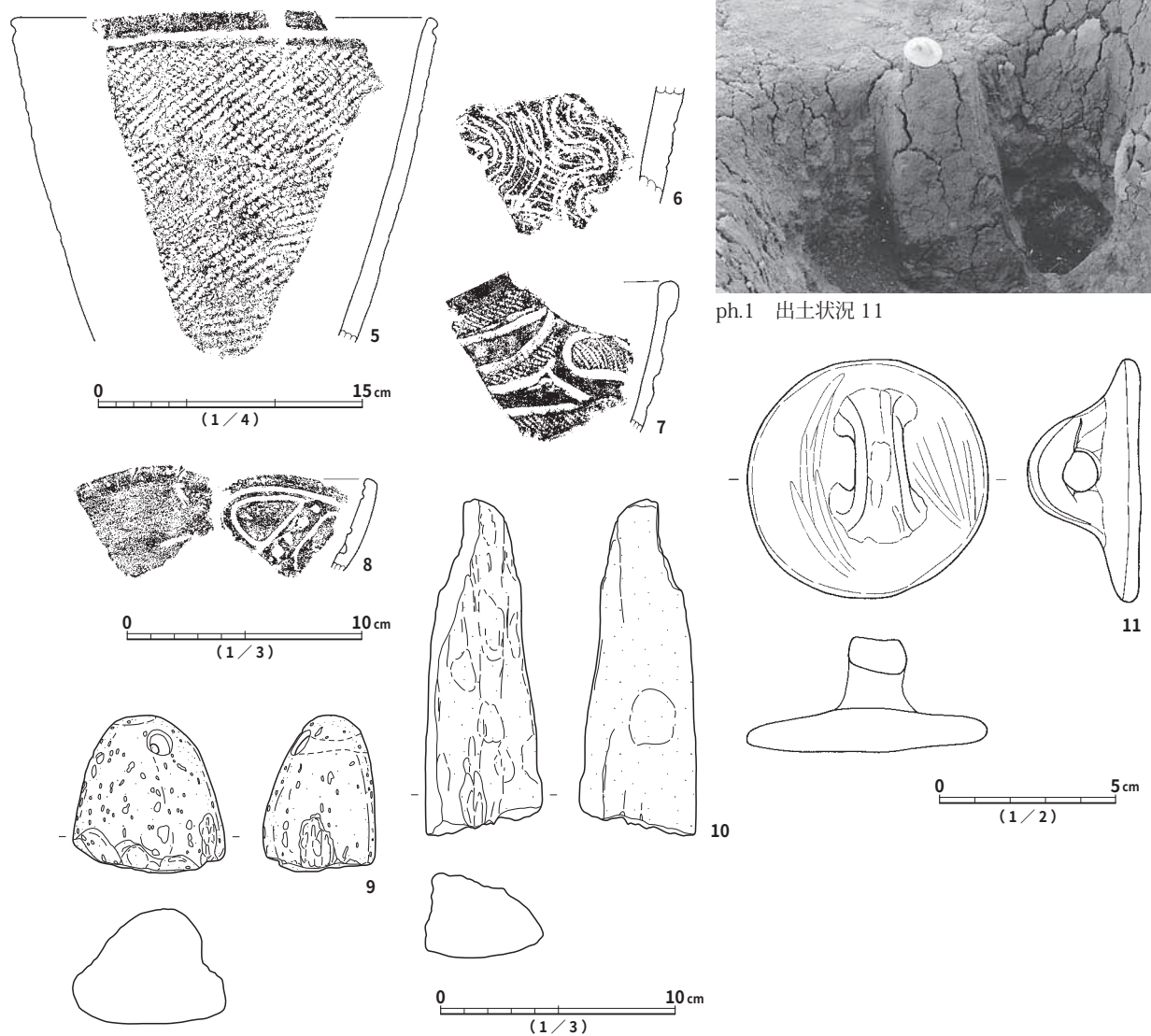


Fig.22 SI06(3) 遺物・調査状況

範囲がなければならないが、SI06-P4西側が若干深くなっていることから、P4付近に東辺範囲を推定しておく。

竪穴平面形態はおおむね円形と推定する。竪穴規模は遺存部で径5.62mを測る。確認面掘形面積は推定で23.20㎡、確認面からの深さは0.17～0.05m程度を測る。主軸方位は特定できない。炉は検出されていない。柱穴は、深さ0.50～0.70mのしっかりした壁柱穴が巡る。

出土遺物は、総重量5,545.1gであり、このうち縄文土器は3,929.8gであった。出土土器は堀之内1式を主体とする。19・20が加曽利E式、21は称名寺式系である。土器以外では、22が敲石類、23が石皿である。出土位置はいずれも特定できないが、調査時の写真によれば、6がP11脇覆土から出土している。

SI06 (Fig.19・21・22、PL.49・95・121)

SI06は、G17・G18区に所在する。SI05・SD01・SK03と重複し、SD01によって竪穴西側が破壊されている。また、P1・3・6・7の柱掘形列は、別遺構の可能性が高い。P1・3・6・7の深さは、確認面

から0.5m程度を測る。

竪穴平面形態は不明。竪穴規模は遺存部南北で6.10m、確認面からの深さは0.00～0.18mを測る。主軸方位は特定できない。炉は検出されていない。遺存部中央に焼土の記録があるが、炉かどうかは判断できない。Pit深度は、P4が1.94m、P11が0.75m、P13が0.57m、P17が0.70mを測る。ただし、規則的な配列は認められない。また、床面レベルも安定していない。SI05と同じ遺構である可能性も否定できない。

出土遺物は、総重量10,429.1gであり、土器は9,045.3g、うち縄文土器は8,982.2gである。出土土器は堀之内1式を主体とするが、6の擦痕状の蛇行垂下文は堀之内2式、7は安行3a式と考える。11は堀之内式の蓋形土製品である。P12内より出土している。土器以外では、9が軽石製品、10が不明石器である。

(2) 弥生・古墳時代

SI07 (Fig.24、PL.8・50)

SI07は、G7区に所在する。竪穴北隅側でSI63・64と重複する。竪穴範囲が不確実なSI62とも重複する可能性がある。新旧関係は本遺構が最も古く、北隅部約1/3が破壊されている。

竪穴平面形態は隅丸横長方形を呈し、竪穴全体規模は4.18m(主軸)×4.52m、確認面掘形面積は

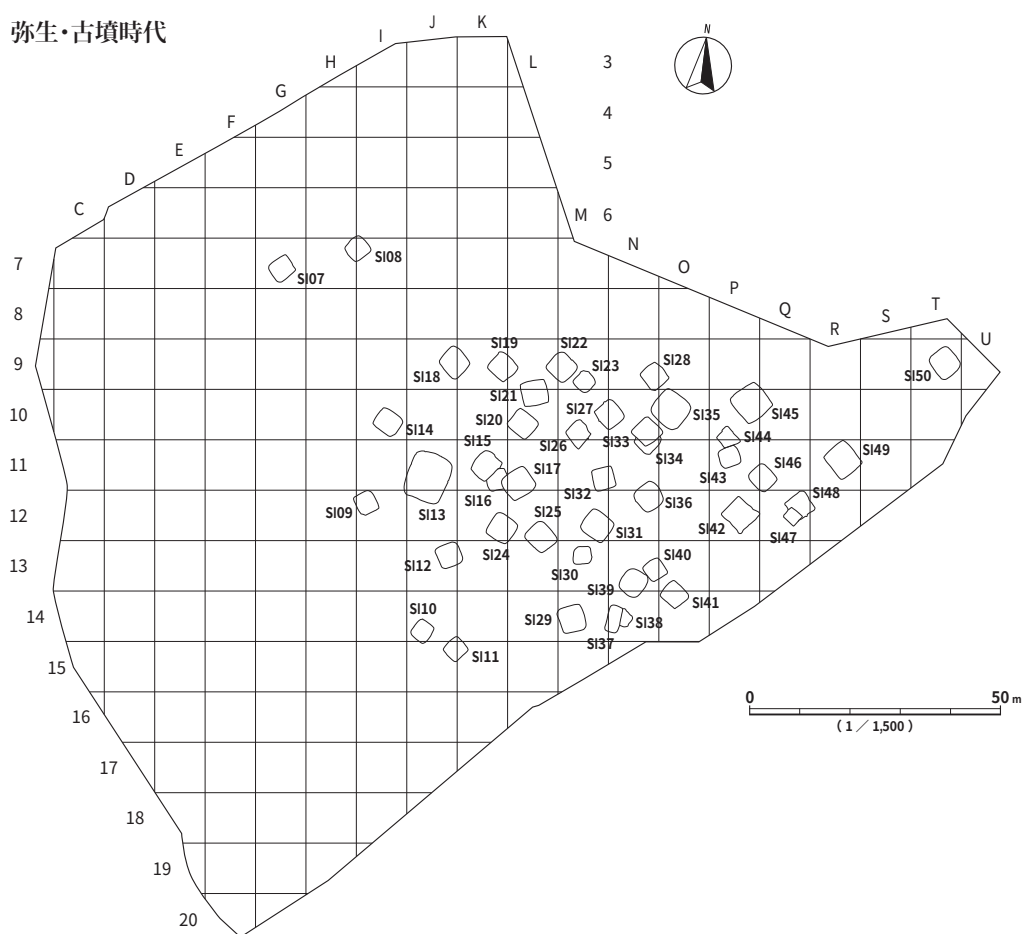
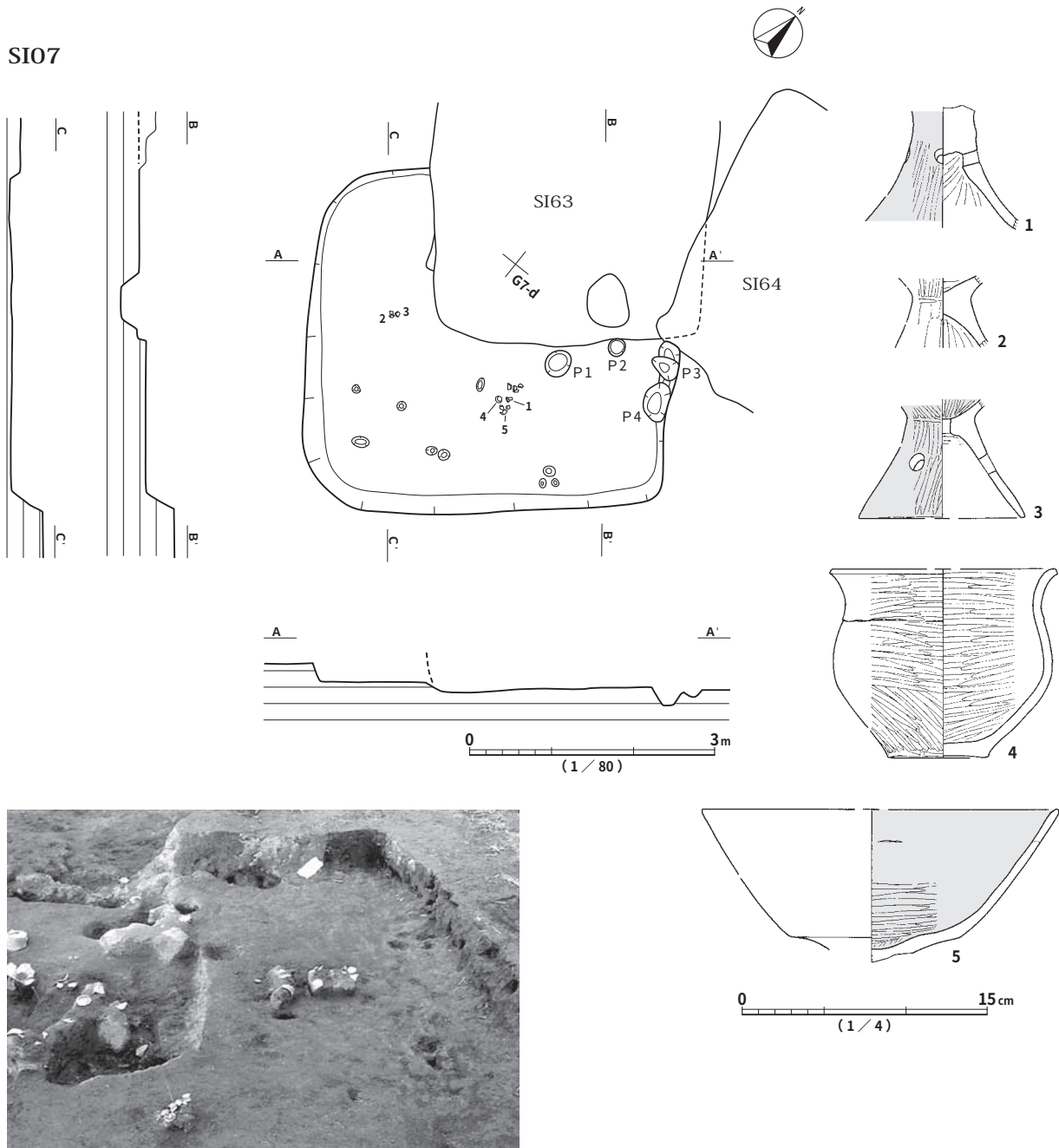


Fig.23 南中台遺跡遺構配置図(弥生・古墳時代)

SI07



ph.1 出土状況

Fig.24 SI07 遺構遺物・調査状況

推定で17.64㎡、確認面からの深さは最大で0.38mを測る。北西－南東方向を主軸とした場合の方位はN-45.0°-Wである。炉・支柱穴・貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。炉は、SI63によって破壊された可能性が高い。

出土遺物は、総重量6,351.8gであり、このうち土器は6,271.8g、縄文土器をのぞく重量は1,591.8gであった。実測可能遺物は、1・2・5が高杯形土器、3が器台形土器、4が小形甕形土器である。いずれも覆土から出土している。

SI08 (Fig.25・199、PL.28・95・128)

SI08は、H7・I7区に所在する。ほぼ同位置でSI69と重複する。新旧関係は本遺構が古い。床面高はSI69が約0.08～0.13m程度深く、本遺構竪穴範囲の1/2以上を破壊している。

SI08

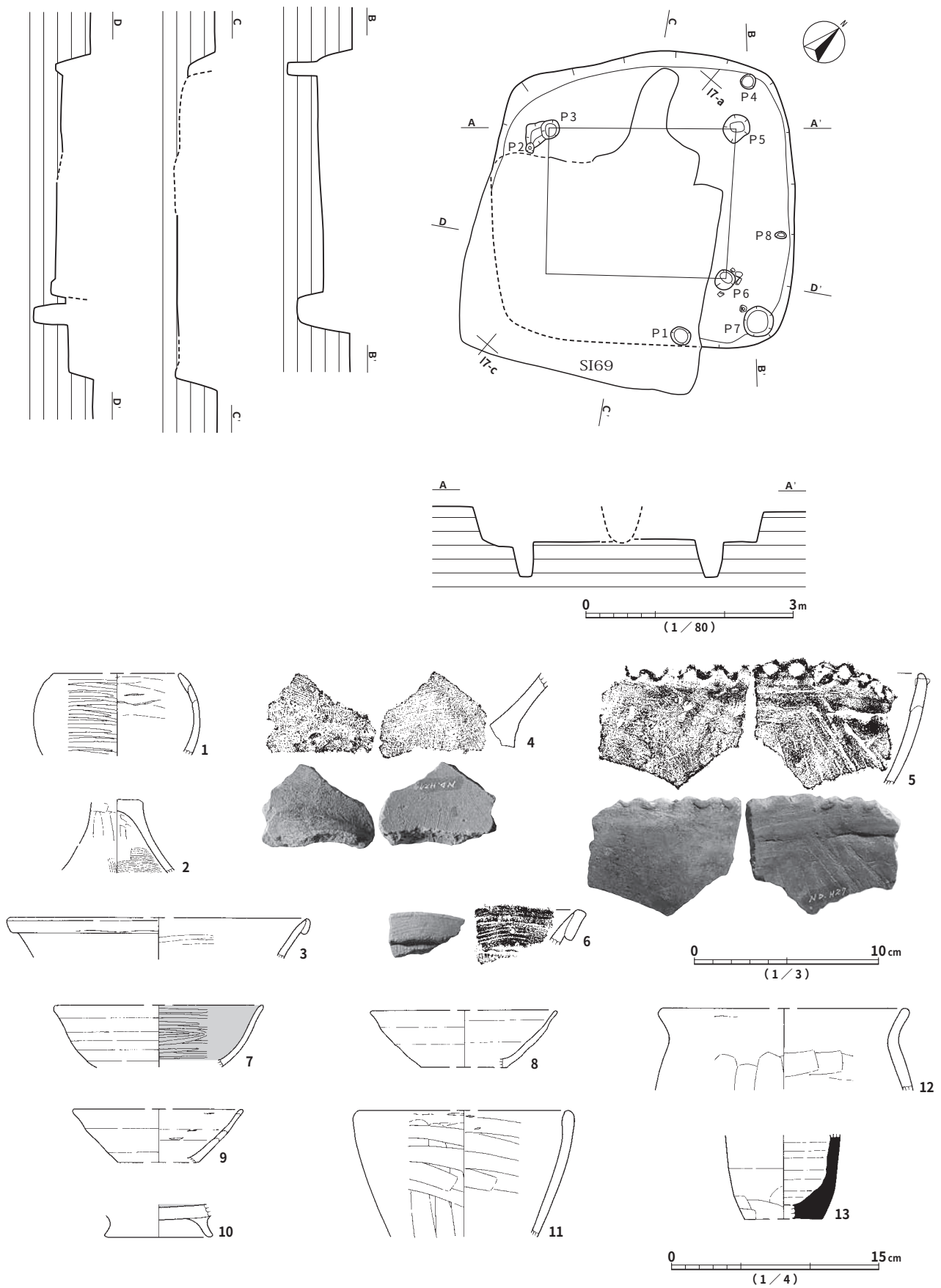


Fig.25 SI08 遺構遺物

竪穴平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は4.23m(主軸)×4.39m、確認面掘形面積は推定で16.84㎡、確認面からの深さは0.47～0.58m程度を測る。主軸方位はN-44.0°-Wである。炉は検出されていないが、SI69カマドによって破壊された可能性が高い。P3・5・6は主柱穴であり、柱間は2.17m(主軸)×2.70mを測る。南西隅部主柱穴は、SI69床下に遺存した可能性もあるが、SI69完掘時の記録がない。P7は貯蔵穴である。深さは0.33m程度であった。

出土遺物は、総重量9,616.9gであり、このうち土器は9,577.0g、縄文土器をのぞく重量は6,777.3gであった。実測遺物のうち、6～13はSI69に関連する可能性が高い。1が椀形土器、2が高杯形土器、3が壺形土器、4・5が甕形土器である。5は宮ノ台式である。図上P6脇に土器が図化されているが、特定できない。他に軽石製品が(Fig.199-128)が出土している。

SI09 (Fig.26・27・198、PL.8・9・50・83・95・127)

SI09は、I12区に所在する。竪穴東西両側をSD01・02によって大きく破壊されている。新旧関係は、本遺構が古いと推定する。

竪穴平面形態は隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は推定で4.33m(主軸)×4.00m、確認面掘形面積は推定で16.23㎡、確認面からの深さは0.32m程度を測る。北西-南東方向を主軸とした場合の方位はN-34.0°-Wである。炉・主柱穴・貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。調査時の写真では、南隅部が別の掘り込みのようにも見えるが確証はない。また、竪穴中央付近床面上に、炭化材を確認することができる。

出土遺物は、総重量9,709.1gであり、このうち土器は9,544.4g、縄文土器をのぞく重量は4,469.0gであった。実測遺物は、1・2が甕形土器、3が大形の椀形土器、4～7が高杯形土器、8が小形壺形土器である。9は混在である。これらのうち、1・2・4・5・7・8について出土状況を図面・写真で照合することで可能であり、5以外はおおむね床面付近から出土している。他に、石棒が出土しているが(Fig.198-118)、調査時の出土状況写真(Fig.26-ph.2)に写る円礫については、現物を確認することができなかった。

SI10 (Fig.28・199、PL.9・96・128・140)

SI10は、J14・J15区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は、辺によってやや胴の張る隅丸横長方形を呈し、竪穴全体規模は3.76m(主軸)×4.00m、確認面掘形面積は13.84㎡、確認面からの深さは0.14～0.29mを測る。主軸方位はN-39.0°-Wである。炉は、主軸からやや北東側に偏している。調査図面に漏れていたため、調査メモと写真から描いた。主柱穴は検出されていない。P2は貯蔵穴であろうか。壁溝は北隅側で検出している。

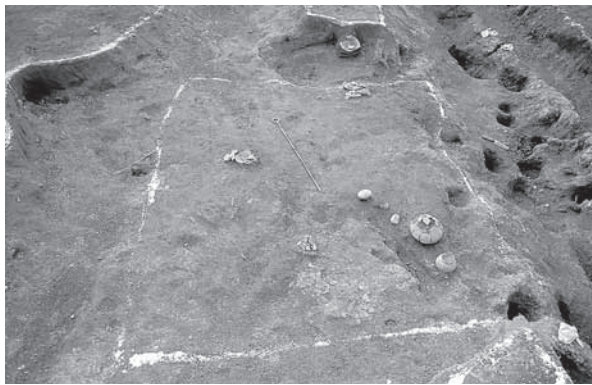
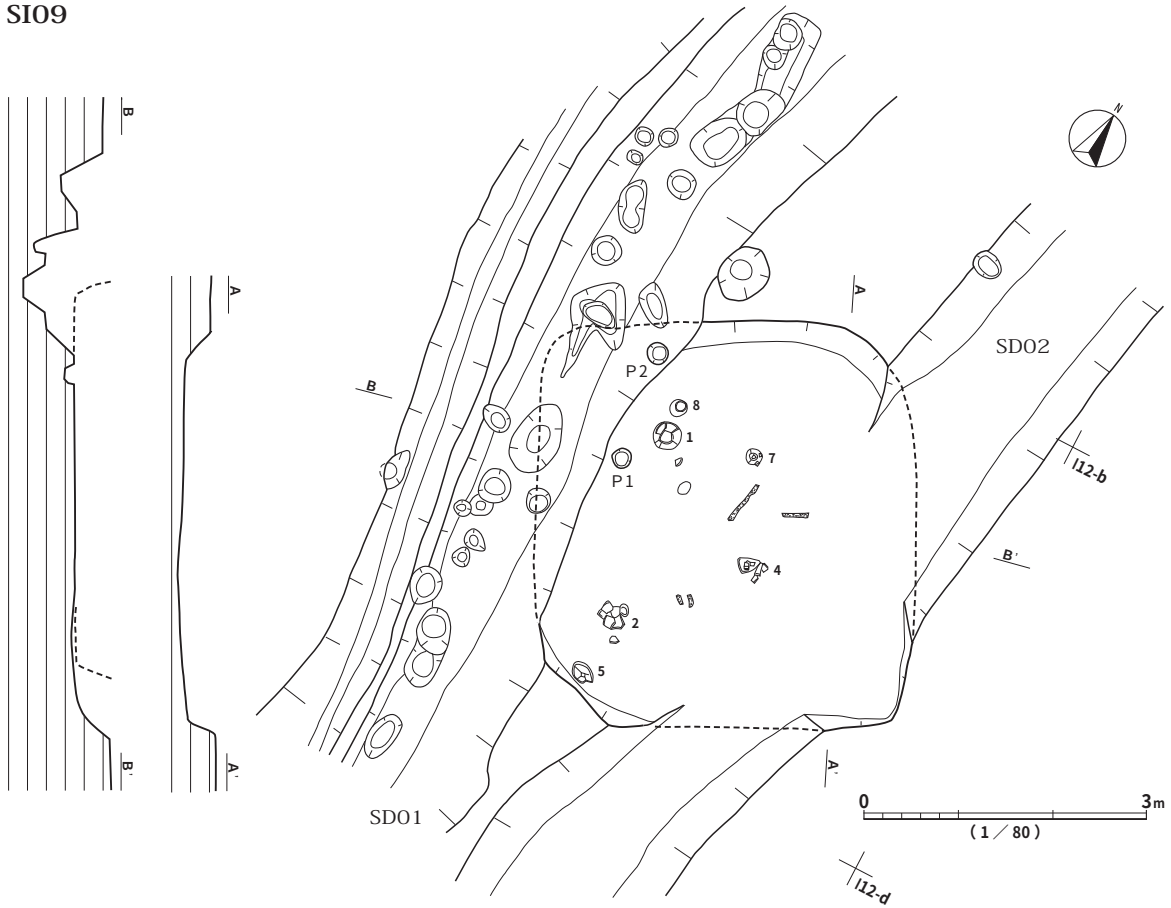
出土遺物は、総重量1,102.5gであり、このうち土器は1,050.9g、縄文土器をのぞく重さは491.8gであった。実測可能遺物は、1が壺形土器、2・4が高杯形土器、3・5が甕形土器である。5はタタキ整形甕である。土器以外では6が鉄製刀子であり、他に石剣(Fig.199-124)が出土している。6の刀子は、関部形状などから奈良時代以降の所産である。

実測遺物の出土位置は特定できなかった。P2内出土土器は、調査メモに底部との記載があるため、1の可能性はある。

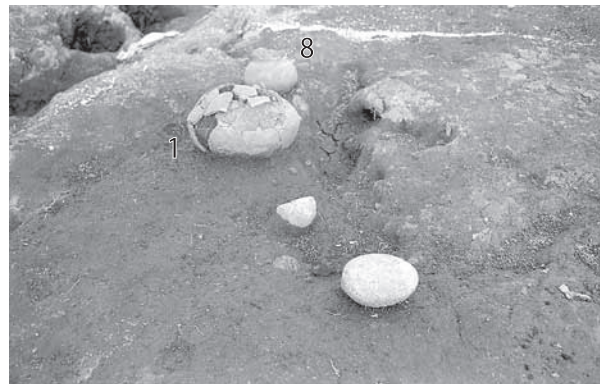
SI11 (Fig.28、PL.9・50・51・96)

SI11は、J15・K15・J14・K14区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

SI09



ph.1 全景



ph.2 出土状況 1・8



ph.3 出土状況 1・8



ph.4 出土状況 7

Fig.26 SI09(1) 遺構・調査状況

SI09

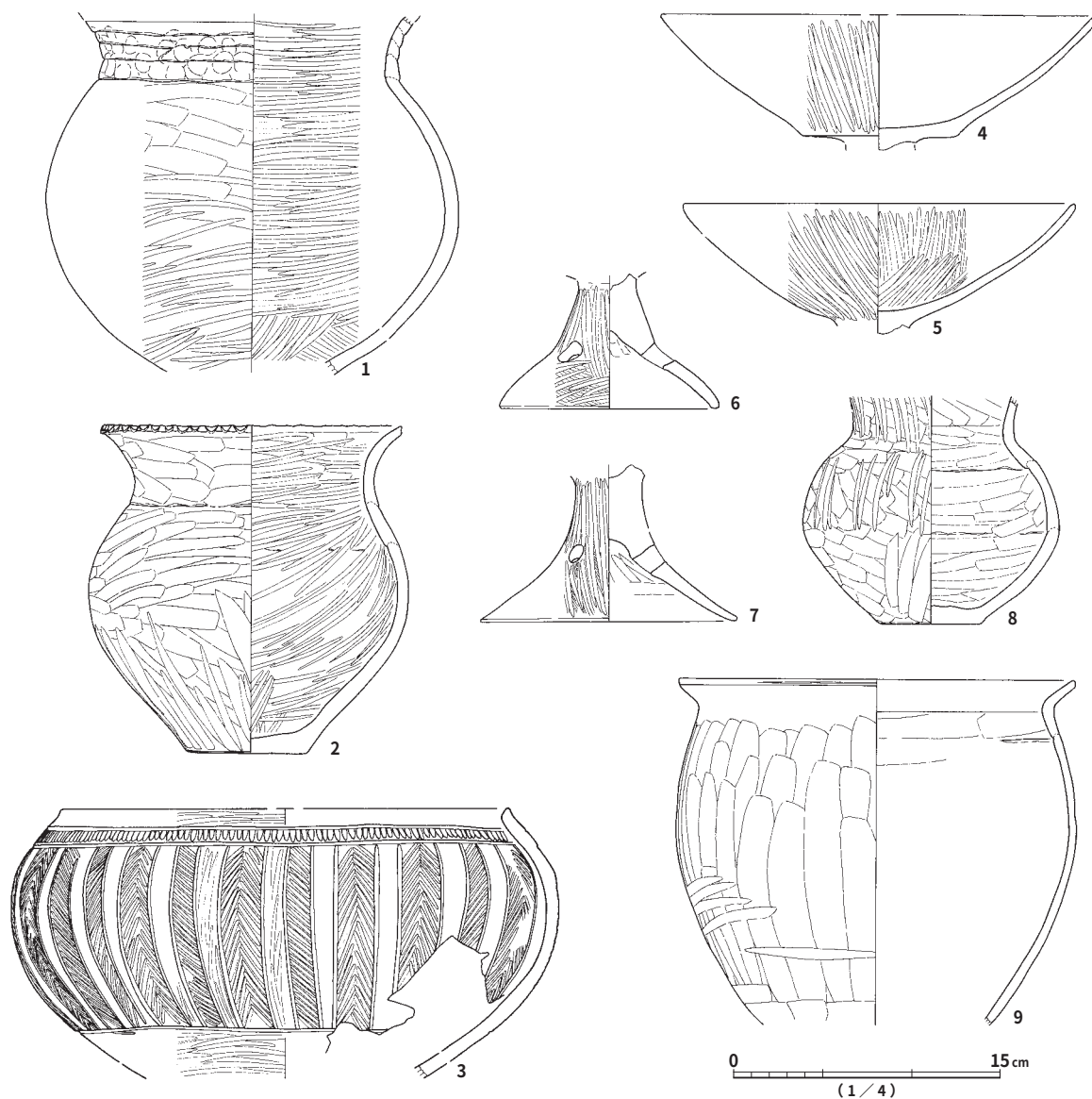


Fig.27 SI09(2) 遺物

竪穴平面形態はやや胴の張る隅丸横長方形を呈し、竪穴全体規模は3.83m(主軸)×4.03m、確認面掘形面積は14.46㎡、確認面からの深さは0.10～0.30mを測る。主軸方位はN-50.0°-Wである。炉は、主軸からやや北東側に偏している。P1・2は、貯蔵穴ないし出入口施設であろうか。壁溝はほぼ全周する。

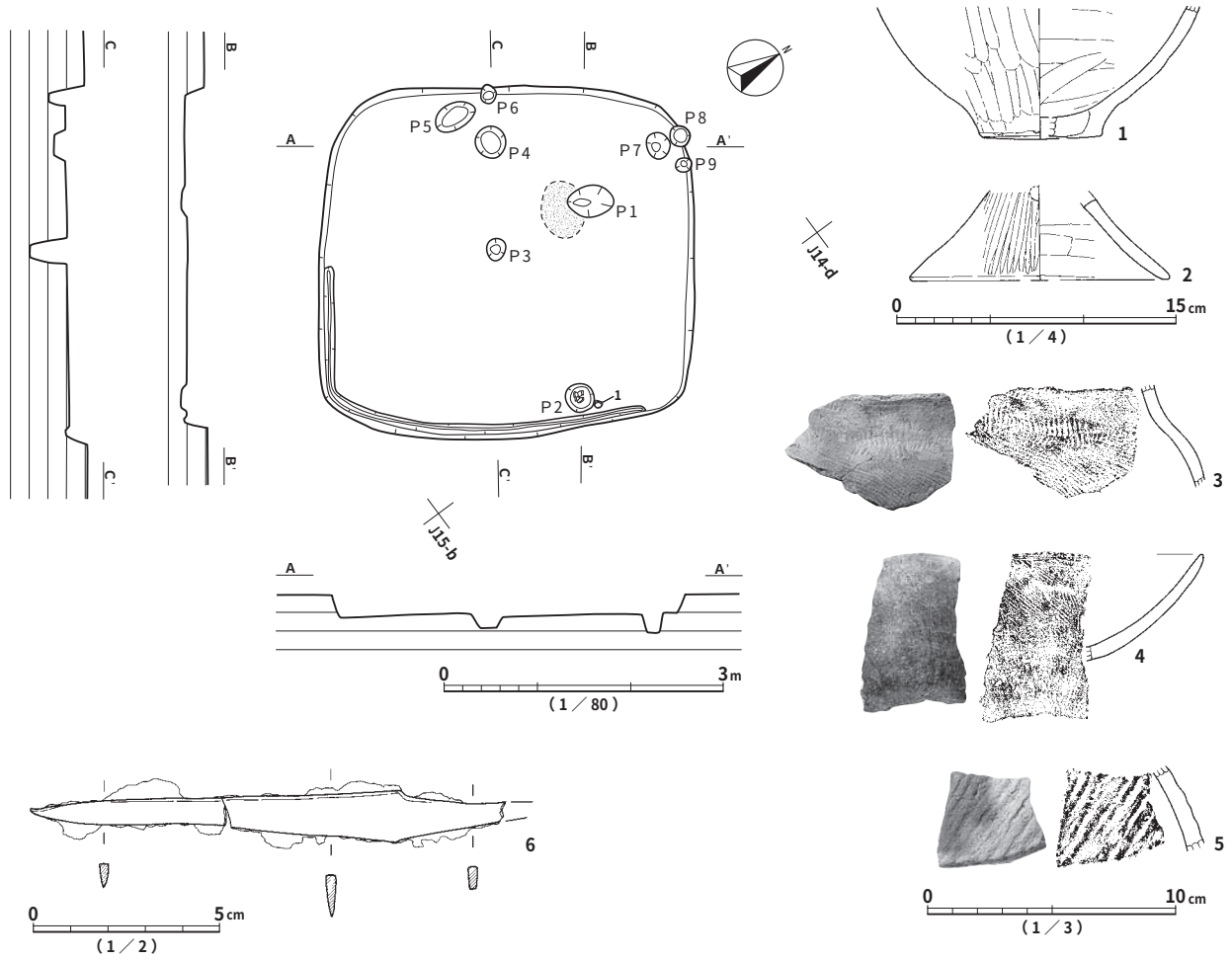
出土遺物は、総重量806.0gであり、このうち土器は806.0g、縄文土器をのぞく重さは781.0gであった。実測可能遺物は、1～3が甕形土器、4が台付甕形土器である。実測遺物は、おおむね床付近から出土している。

SI12 (Fig.29・30、PL.9・10・51・52・83・96)

SI12は、J13・K13区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は4.58m(主軸)×4.61m、確認面掘形面積は19.94㎡、確認面からの深さは0.20～0.30mを測る。主軸方位はN-29.0°-Wである。炉は、主軸方位北西寄

SI10



SI11

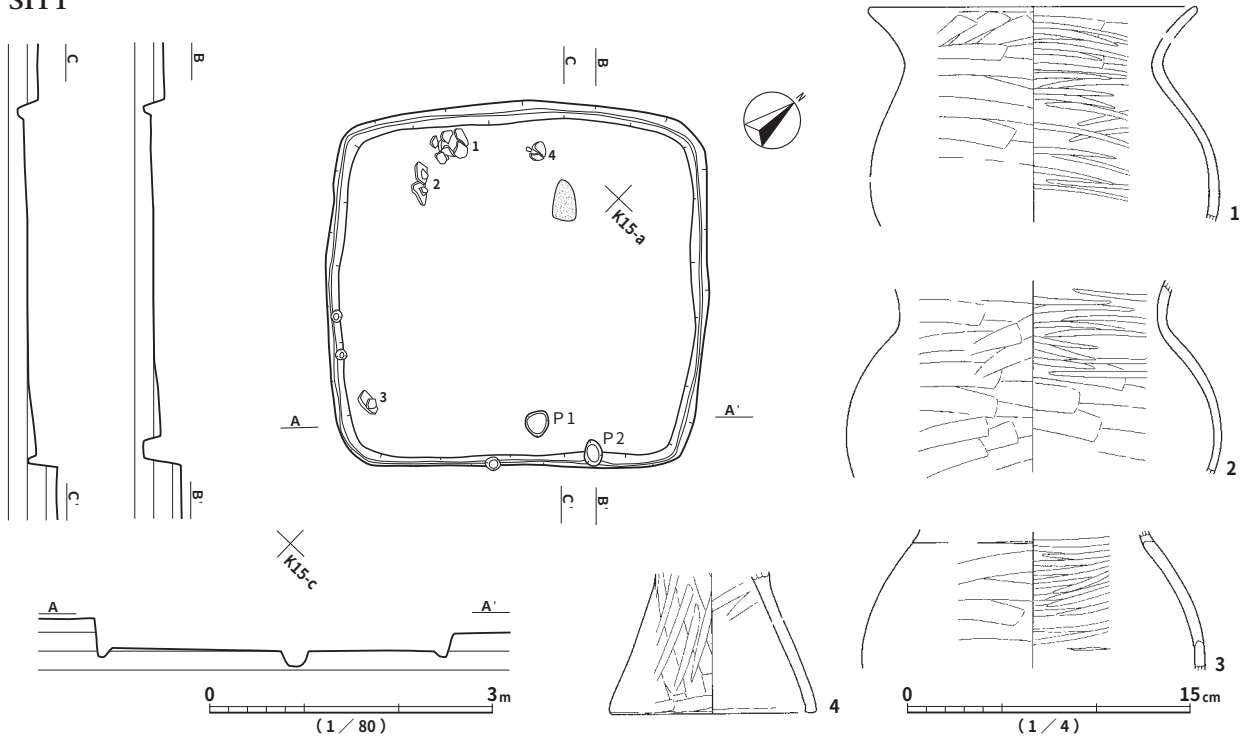


Fig.28 SI10 遺構遺物、SI11 遺構遺物

りに1か所確認できる。Pitは、P1が深さ0.65m、P2が0.51mであり、主柱穴と推定する。ただし、P3は0.25mであり、北東隅部については焼土下の記録がない。主柱穴の柱間は、主軸方向P1-P2間で2.94mを測る。P4は貯蔵穴の可能性もあるが明確ではない。深さは0.21mである。北東、南東辺壁際が一段深くなるが、これは掘形面に達しているとみられる。竪穴中央から北西辺側で焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。ただし、堆積状況の記録はない。

出土遺物は、総重量9,546.4gであり、このうち土器は9,546.4g、縄文土器をのぞく重さは8,576.4gであった。実測可能遺物は、1・3・5・8・12・16・18が甕形土器、4・13が小形壺形土器、9・10が台付甕形土器、11が器台形土器、14・15が壺形土器である。1・4・16・17は北陸系である。確実に搬入品とみられるものは存在しない。南東隅部出土の1は、注記がH41(SI39)であったが、出土状況写真(Fig.29-ph.3)から本遺構にともなうものと判断した。2・3・9・14・15が床面から、5は床面やや上であるが、正立した出土状況から本竪穴にともなうと推定する。

本竪穴の土器は過去に公表されているが(比田井克仁 1987「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号 早稲田大学考古学会)、若干混乱した状態にある。比田井論文第3図15~20(掲載遺構番号14号住居跡)のうち、15は本報告2、16は3、17は不明、18は14、19はSI39-3、20は15、21は12、22は不明、23は不明、24は10、25は5に該当すると思われる。SI39-3については、出土状況写真から間違いのないと思われるが、写真確認ができないものについては検証が難しい。今回現物が確認できなかった17・22・23については、同論文から掲載しておく(本報告19~21)。

SI13 (Fig.31~34・191・193、PL.10・11・52・53・83・84・96・120・124・125)

SI13は、I11・I12・J11・J12区に所在する。本遺跡最大規模の竪穴建物である。時期不明のSD19と重複するが、SD19底面は本竪穴床面には達していない。

竪穴平面形態は部分的に胴が張る隅丸横長方形を呈し、竪穴全体規模は8.03m(主軸)×9.53m、確認面掘形面積は70.86㎡、確認面からの深さは0.56~0.75mを測る。貯蔵穴位置を主軸とした場合の方位はN-75.0°-Wである。炉は、調査メモによると竪穴中央部に所在するが、調査図面には記録がない。調査写真では、竪穴中央部に浅い掘り込みが認められることから(PL.10)、垂直写真(PL.4)を拡大して図化した。規模詳細については不確実である。P1~4は主柱穴であり、主柱穴の柱間は3.87m(主軸)×4.14mを測る。深さは、P1が0.73m、P2が0.65m、P3が0.50m、P4が0.55mである。壁外Pitについても、深さが0.50mをこえるものがあるが、本竪穴への帰属は確証がない。P5は貯蔵穴であり、蓋受け状の段部をもつ。上段は1.32m×1.07m、深さ0.05m、下段は径0.69m、深さは0.30mである。壁溝は全周する。壁際付近を中心に焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。ただし、堆積状況の記録はない。本竪穴は、貯蔵穴位置に対して横長の平面形態をとること、竪穴中央部に炉をもつこと、主軸線上に貯蔵穴をもつことが、当該地域の一般的な竪穴と異なる。

出土遺物は、総重量30,468.4gであり、このうち土器は29,263.6g、縄文土器をのぞく重さは13,602.6gであった。実測可能遺物は、1・2・4・8~11・13・18・19・33・35・36が甕形土器、7・15~17が台付甕形土器、12・28が鉢形土器、3・5・6・14が小形甕形土器、20・26・27・31・34が壺形土器、21・22が器台形土器、23・24高杯形土器、25が椀形土器である。このうち、1~7の甕形土器、21の器台形土器は北陸系である。他に、28が北陸系の高杯、26が複合口縁の可能性もある。ただし、

SI12

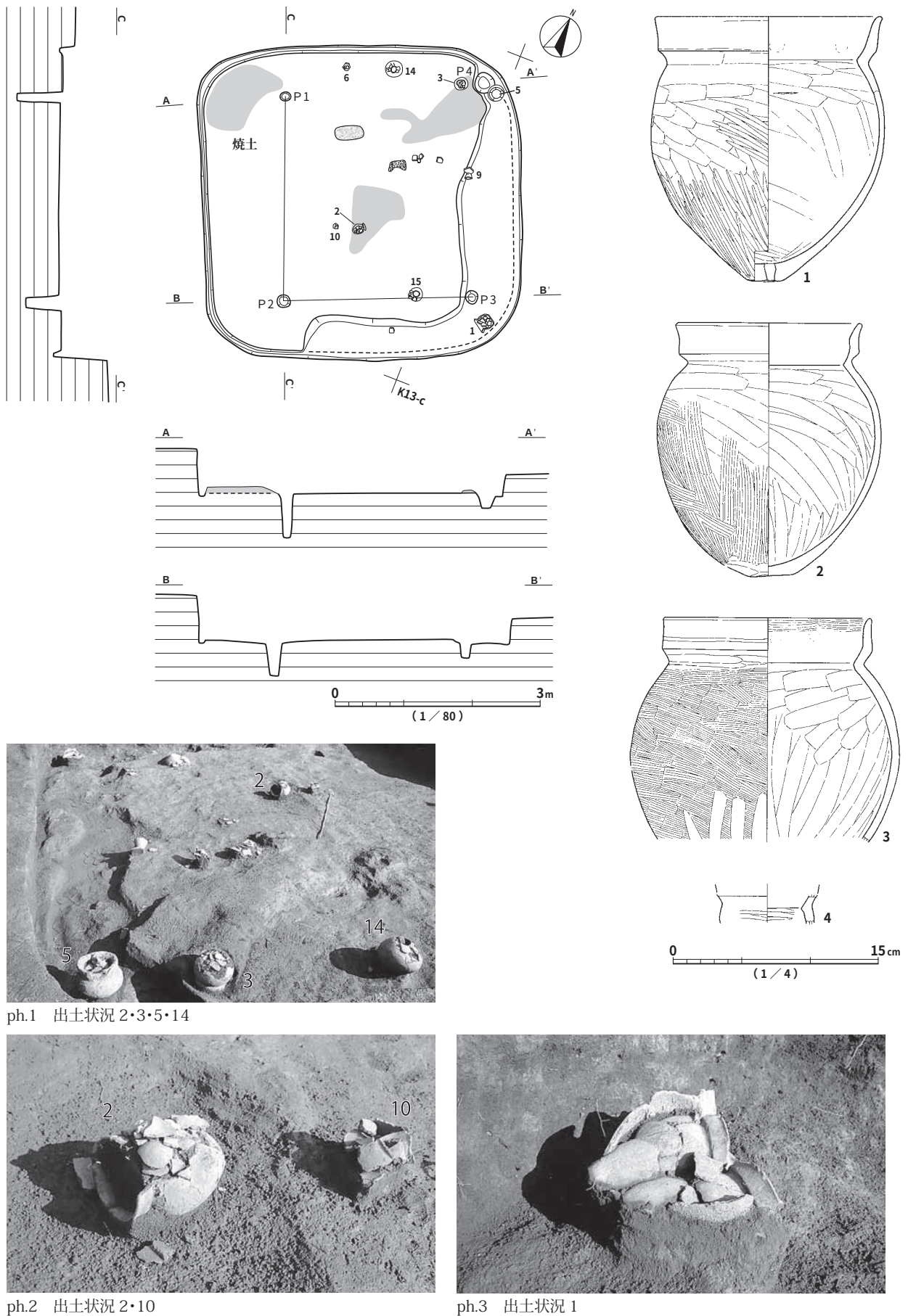


Fig.29 SI12 (1) 遺構遺物・調査状況

SI12

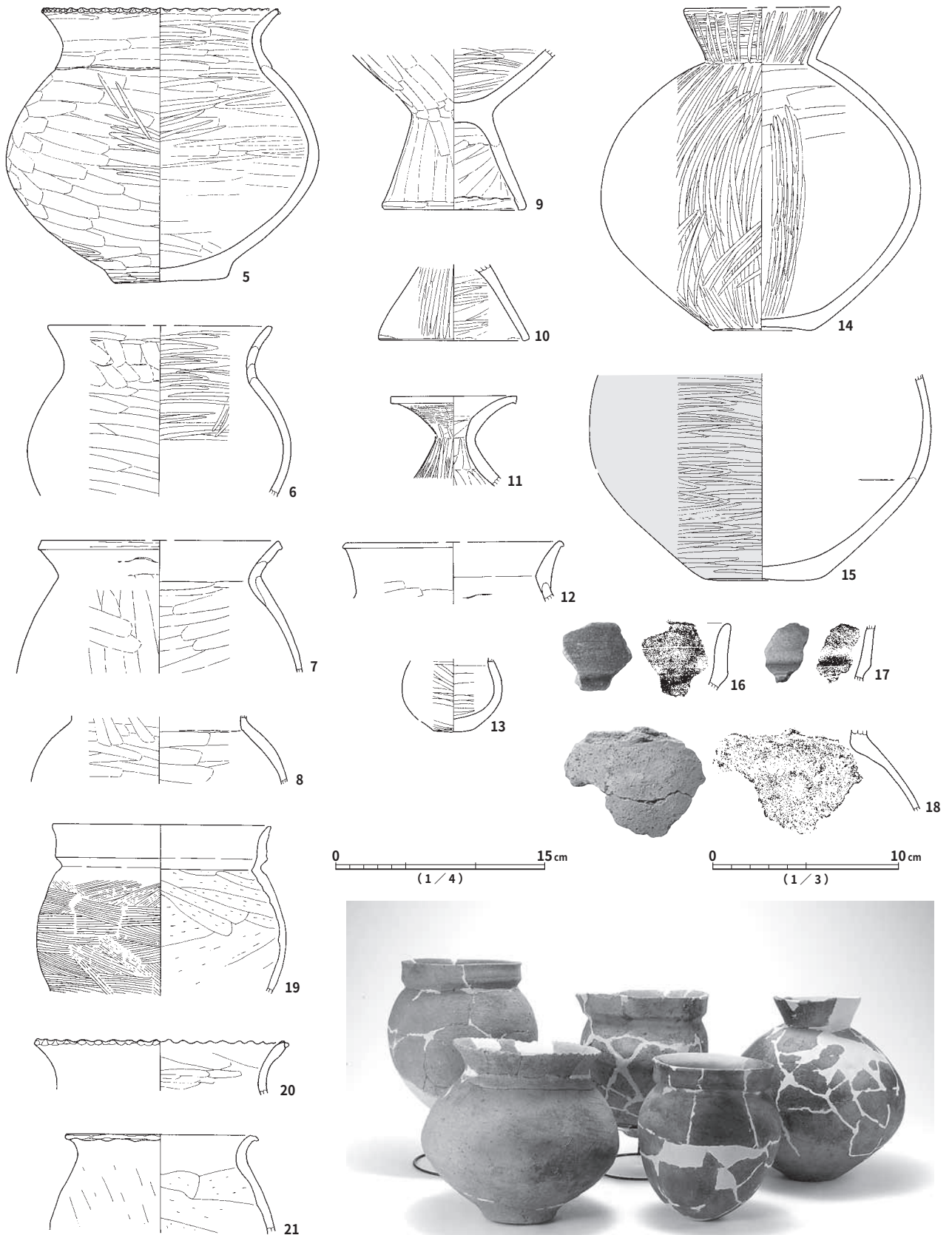


Fig.30 SI12(2) 遺物

26は段部ないし頸部に刻みをもつ。確実に搬入品とみられるものは存在しない。32は平安時代の高台付杯である。

土器以外では、37が土製円盤である。他に凹石 (Fig.191-65)・石皿 (Fig.193-75) が出土している。1~6・9・21・22が床面から出土している。

本竪穴の土器も過去に公表されているが (比田井克仁 1987「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号 早稲田大学考古学会)、やはり若干混乱した状態にある。比田井論文第2図1~14 (掲載遺構番号13号住居跡) のうち、1は本報告2、2は3、3はSI12-1、4は1、5は6、6は5、7は21、8は9、9は不明、10は25、11は不明、12は26、13は22、14はSI12-11に該当すると思われる。SI12-1については、出土状況写真から間違いのないと思われるが、SI12-11は確認がとれてはいない。不明の9・11については、今回再録していない。

SI14 (Fig.35・36・185・197・199、PL.11・53・54・84・85・96・122・127・128・140・141)

SI14は、I10区に所在する。SD01・02・17・18と重複する。遺構検出状況の詳細は明らかでないが、新旧関係は本竪穴が最も古いと推定しておく。SD02・17・18は竪穴床面まで達していないが、SD01は西辺部を破壊している。

竪穴平面形態はやや胴の張る隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は5.08m (主軸) × 4.45m、確認面掘形面積は推定で20.99m²、確認面からの深さは0.25~0.53mを測る。主軸方位はN-62.0°-Wである。炉は不明。調査メモにも記載はないが、本来存在しなかったかどうかの確証はない。P1~4は主柱穴であり、主柱穴の柱間は2.47m (主軸) × 2.21mを測る。P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。深さは、P4・5とも0.21mである。

出土遺物は、総重量25,798.7gであり、このうち土器は24,389.2g、縄文土器をのぞく重さは4,680.0gであった。実測可能遺物は、1・2が壺形土器、3・4が甕形土器、5・6が台付甕形土器、7が小形台付甕形土器、8が椀形土器、9が高杯形土器である。9は東海系の高杯であるが、3の内湾く字口縁甕も同系列とみられる。土器以外では、10が鉄製穂摘具であり、他に磨石 (Fig.185-1)、砥石 (Fig.197-107)、不明石器 (Fig.199-129)、古銭 (PL.141-11) が出土している。穂摘具は、時期的に本竪穴にともなうものではない。出土位置は、1・3・7・8が床面付近、2がP4内、6がP1内である。

SI15 (Fig.37・38、PL.11・12・54・85・96)

SI15は、K11区に所在する。竪穴南東側でSI16と重複する。新旧関係は明らかではない。床面高は、本竪穴が0.07mほど深い。北東辺の長方形土坑は、近年の芋穴である。

竪穴平面形態はやや胴張りの隅丸横長方形を呈し、竪穴全体規模は推定で4.49m (主軸) × 5.22m、確認面掘形面積は推定で22.32m²、確認面からの深さは0.36~0.45mを測る。北西-南東方向を主軸とした場合の方位はN-51.0°-Wである。炉は、主軸線上と南西側に偏して2か所検出した。どちらが本来の炉位置かは判断が難しい。P1~4は主柱穴であり、主柱穴の柱間は2.00m (主軸) × 2.44mを測る。P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。P6の深さは0.30mである。壁溝は南西隅部以外で検出している。

出土遺物は、総重量7,011.4gであり、このうち土器は7,011.4g、縄文土器をのぞく重さは6,706.4gであった。実測可能遺物は、1・4・15・16・18~20が甕形土器、2が小形甕形土器、3が広口壺形土器、5・6・11~14・17が壺形土器、7が高杯形土器、8が器台形土器、9・10が椀形土器である。このう

SI13

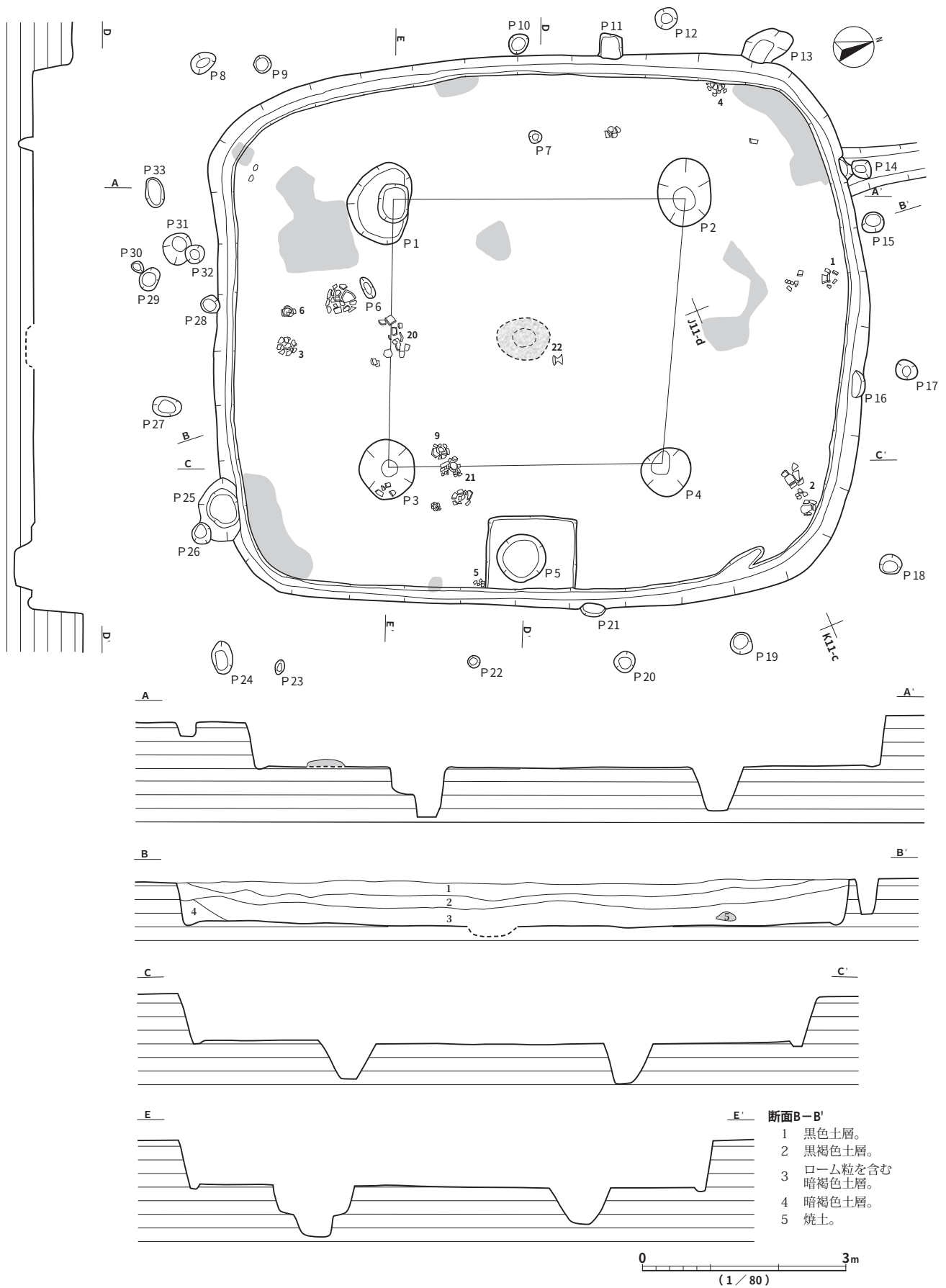


Fig.31 SI13(1) 遺構



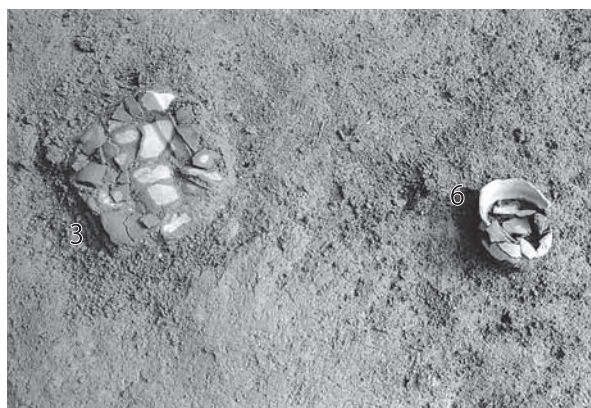
ph.1 調査状況



ph.2 出土状況



ph.3 出土状況 2



ph.4 出土状況 3・6



ph.5 出土状況 4



ph.6 出土状況 5



ph.7 出土状況 20



ph.8 出土状況 22

Fig.32 SI13(2) 調査状況



SI13

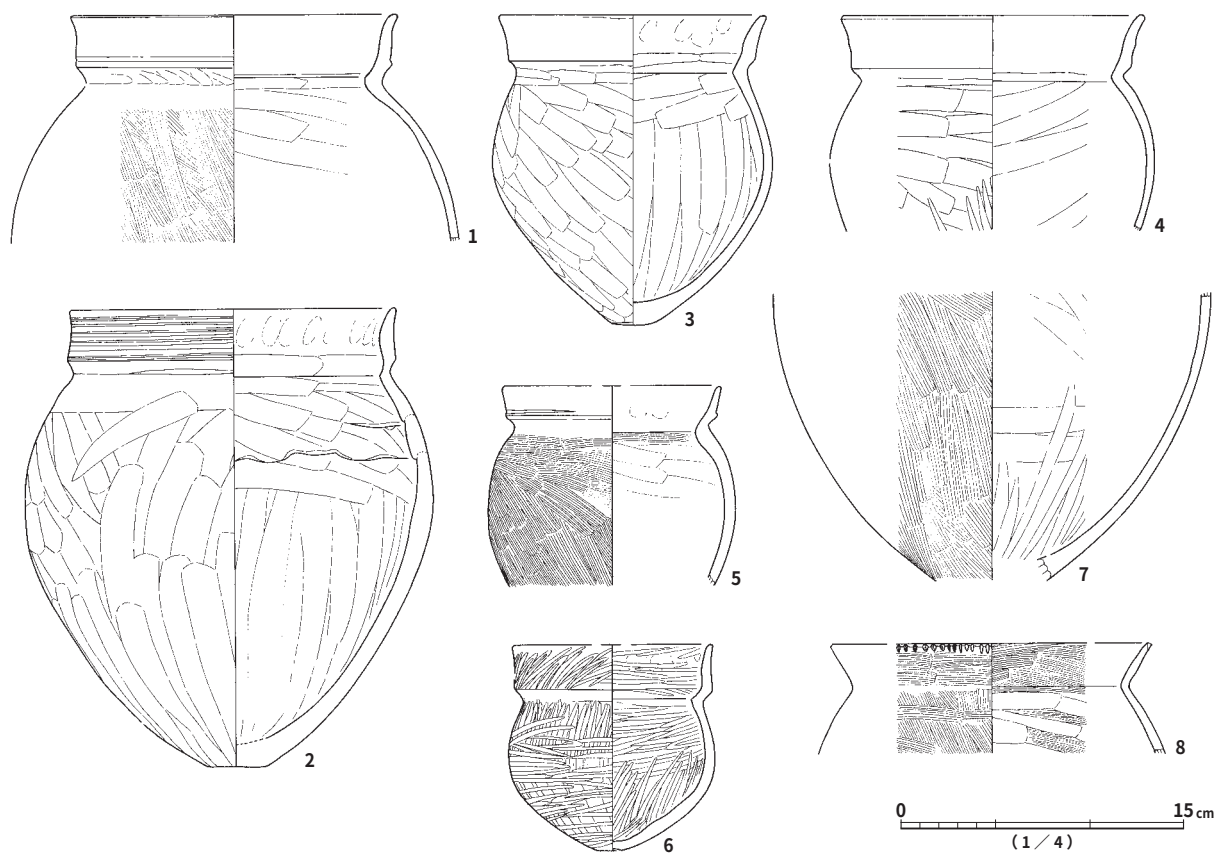


Fig.33 SI13(3) 遺物

SI13

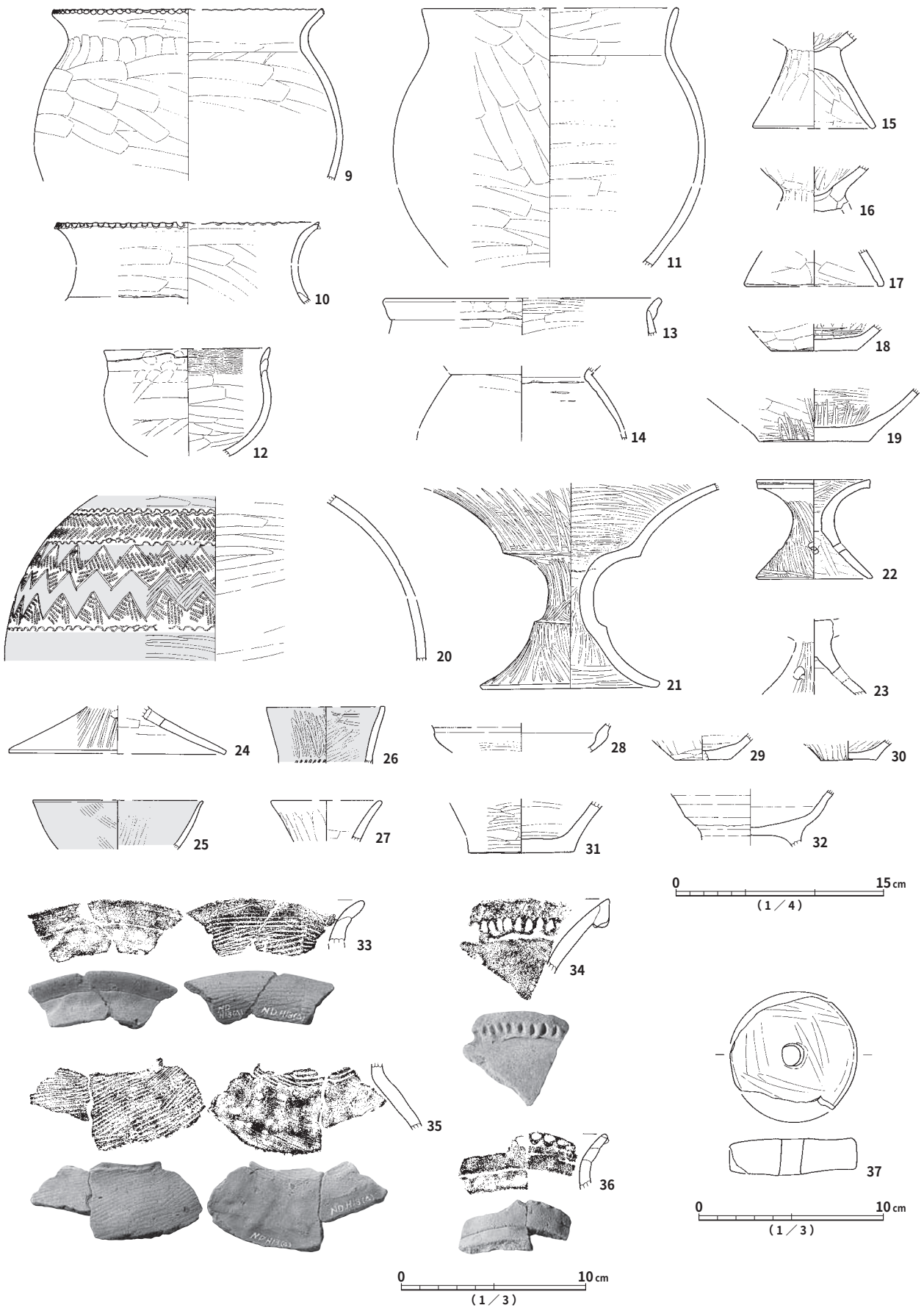
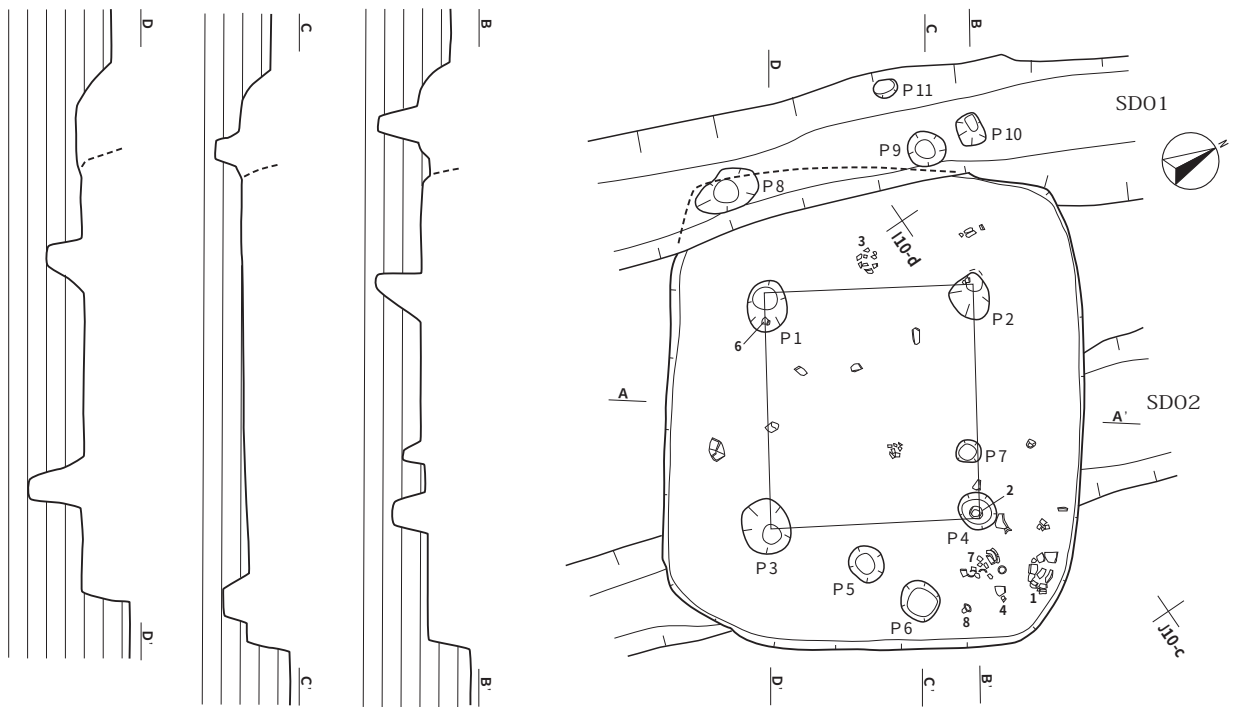


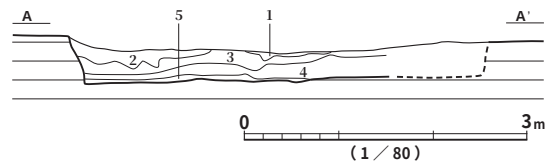
Fig.34 SI13(4) 遺物

SI14

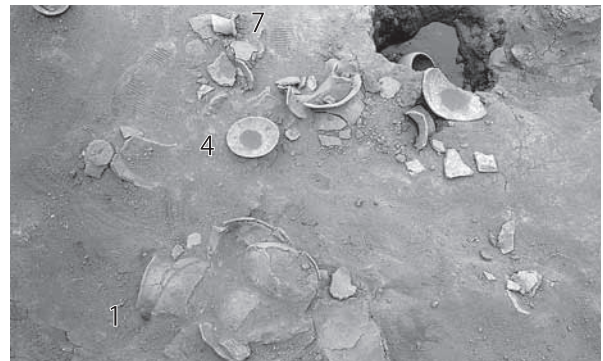


断面A-A'

- 1 微量のローム粒を含む黒褐色土層。
- 2 微量のローム粒及び焼土粒を含む褐色土層。
- 3 微量のローム粒を含む暗褐色土層。
- 4 ローム塊を含む暗黄褐色土層。
- 5 ローム塊を含む黄褐色土層、床面の漸移層。



ph.1 出土状況



ph.2 出土状況 1・4・7



ph.3 出土状況 1



ph.4 出土状況 2

Fig.35 SI14(1) 遺構・調査状況

SI14

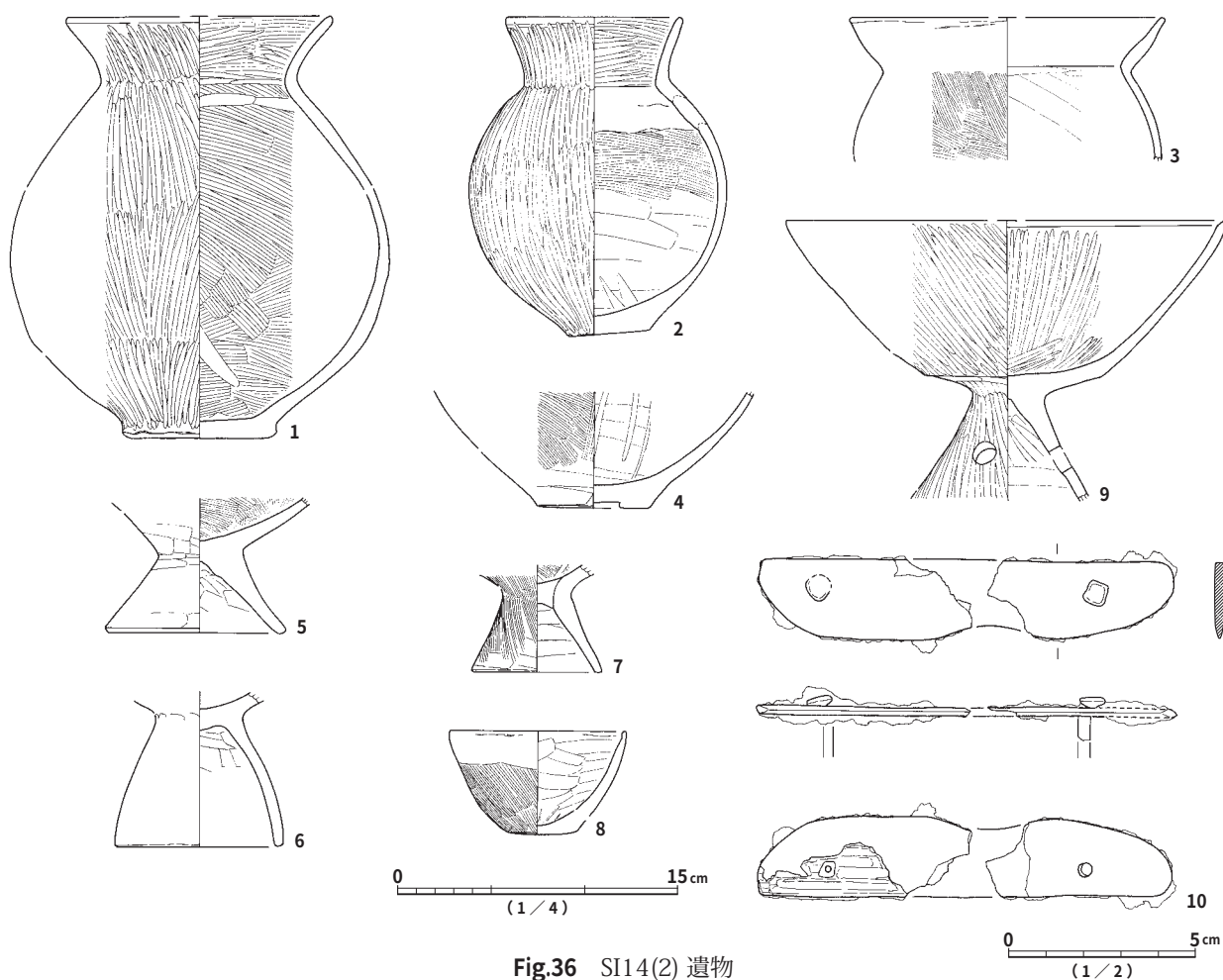


Fig.36 SI14(2) 遺物

ち13・15・16は、弥生時代後期山田橋式である。14の装飾壺は判断が難しい。出土位置は、1・7がP4内床面レベル、2～4が床面上5～10cm前後である。

SI16 (Fig.37・39、PL.12・54・97・121)

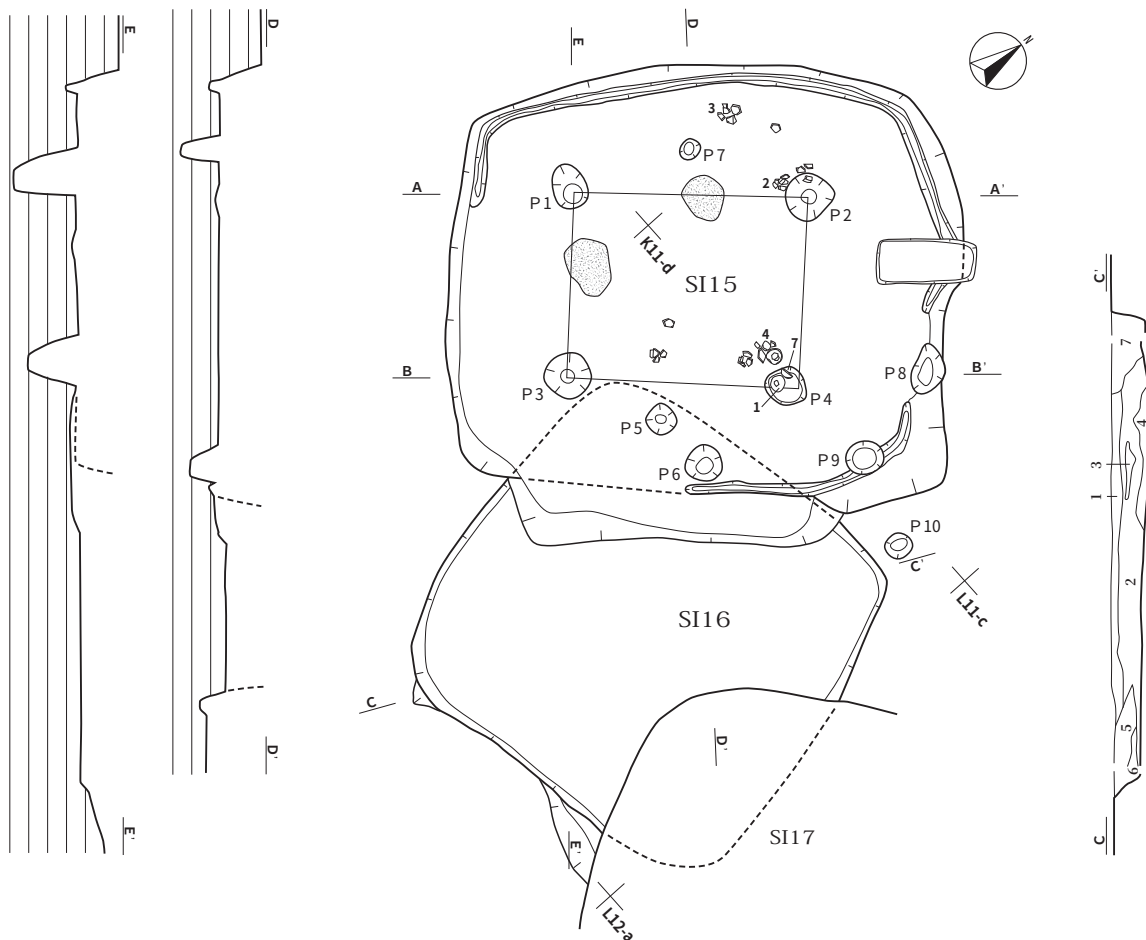
SI16は、K11・K12・L11区に所在する。北西側でSI15、南東側でSI17と重複する。床面高は、SI15に対して本竪穴が0.07mほど、SI17に対して0.17mほど高い。新旧関係は明らかではない。SI15・17覆土上での本竪穴床面の検出記録はないが、積極的な根拠とすることはできない。

竪穴平面形態は隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は推定で4.08m(主軸)×4.20m、確認面掘形面積は推定で16.13㎡、確認面からの深さは0.28～0.35mを測る。南北を主軸とした場合の方位は、N-19.0°-Wである。炉・支柱穴・周溝などの屋内施設はまったく検出されていないが、炉は、SI15によって破壊された可能性がある。

出土遺物は、総重量5,050.2gであり、このうち土器は4,623.8g、縄文土器をのぞく重さは3,435.9gであった。実測可能遺物は、1・6～8が壺形土器、2・9～12が甕形土器、3が椀形土器、5が杯形土器である。土器以外では、13が砥石である。

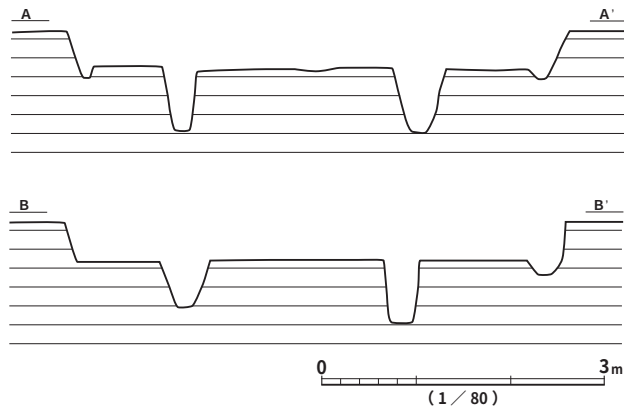
出土土器は、弥生時代終末期(1・3)と中期後半宮ノ台式(2・4・6～12)に大別できるが、本竪穴の時期を出土状況から判断することはできない。ここでは、竪穴住居形態から、弥生時代終末期と判

SI15・16



断面C-C'

- 1 暗茶褐色を呈する、ロームブロックを混入し攪乱の形跡あり。
- 2 暗茶褐色を呈する、ロームブロックを混入し攪乱の形跡あり。
- 3 黒色土層。
- 4 黄茶褐色土層でロームブロックを混入し攪乱の形跡あり。
- 5 黒褐色土層。
- 6 黒色土層。
- 7 黒褐色土層で、5層と同質。



ph.1 全景



ph.2 SI15 出土状況 1・4・7

Fig.37 SI15(1) 遺構・調査状況、SI16(1) 遺構・調査状況

SI15

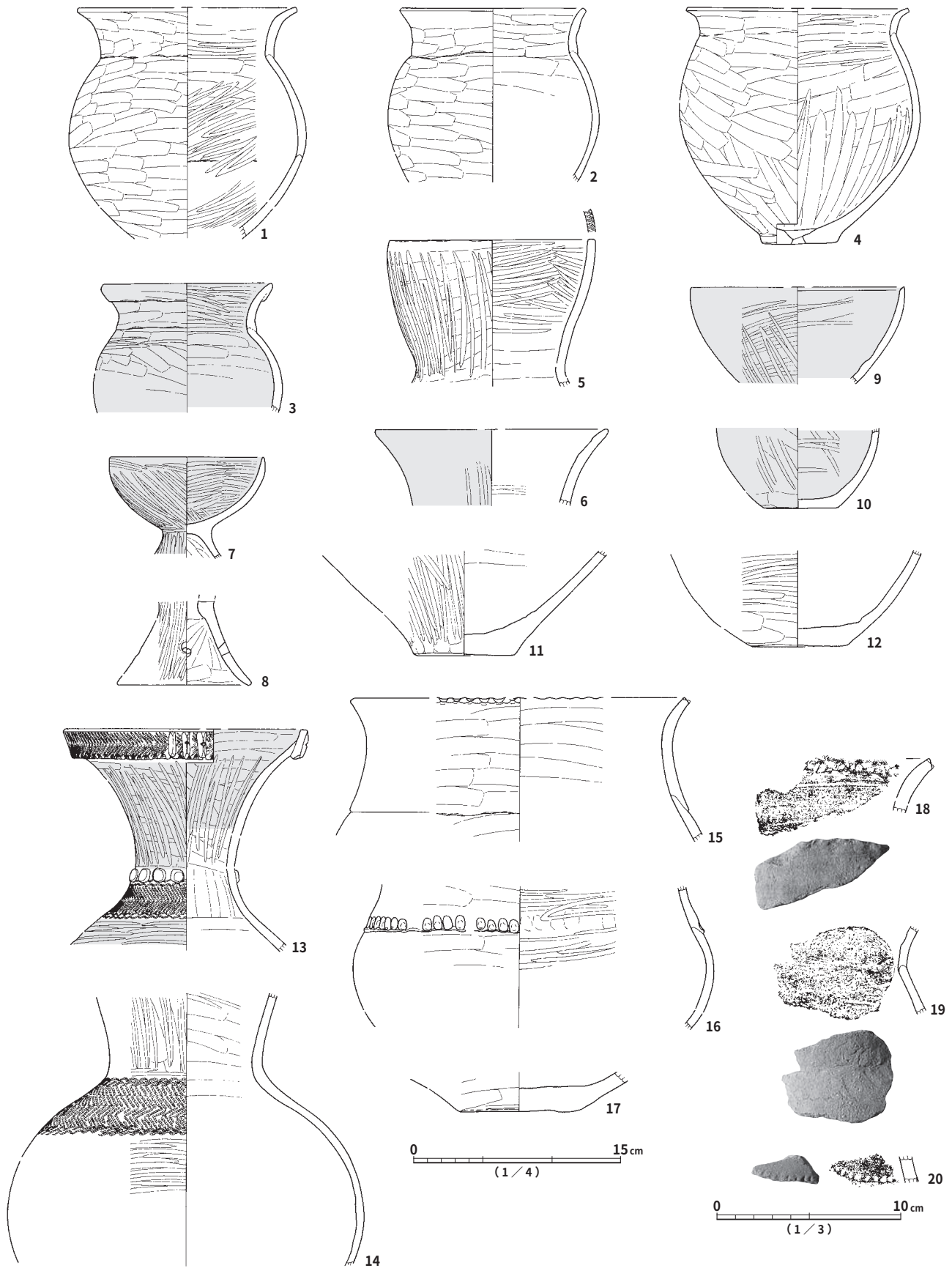


Fig.38 SI15(2) 遺物

SI16

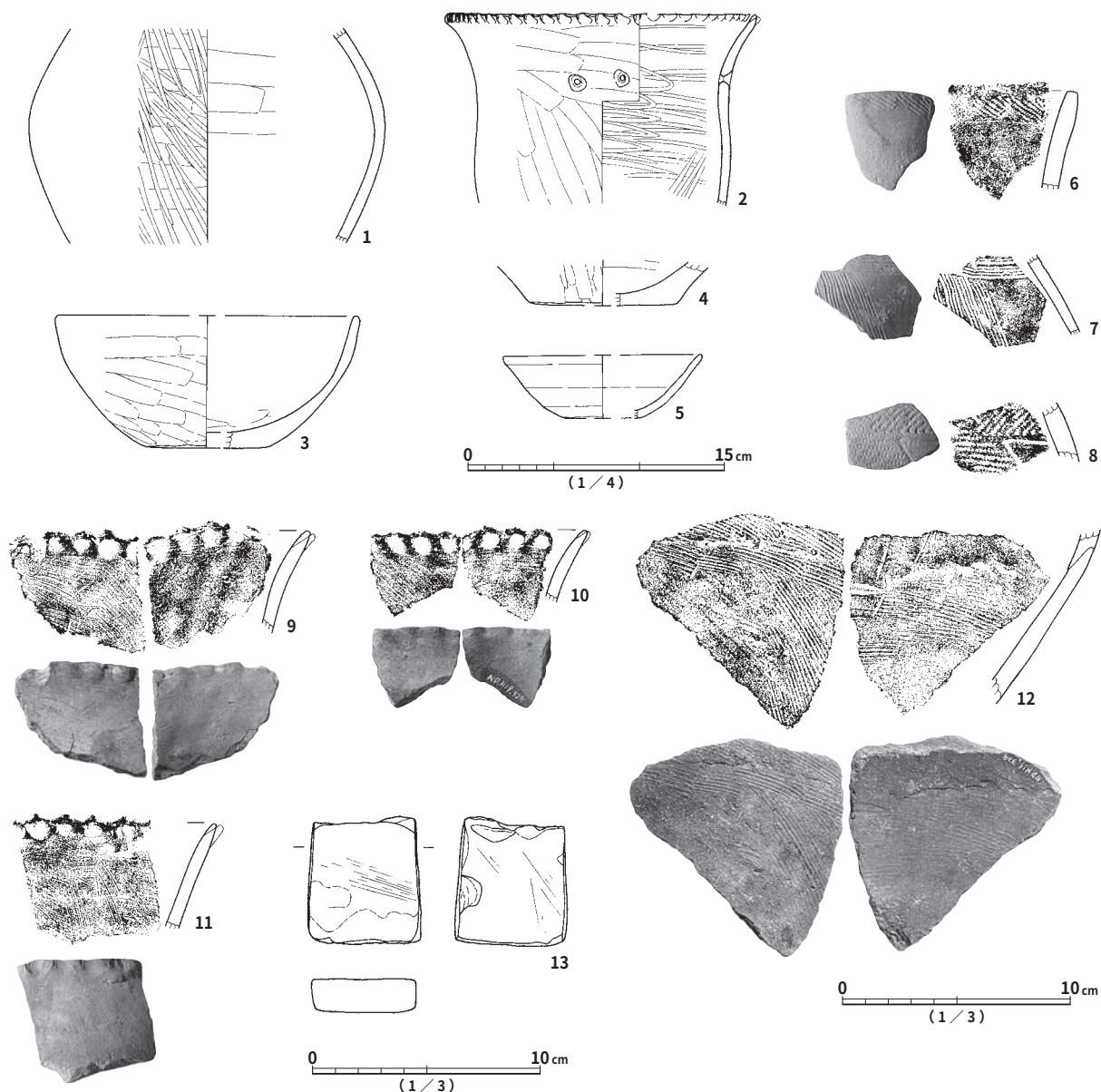


Fig.39 SI16(2) 遺物

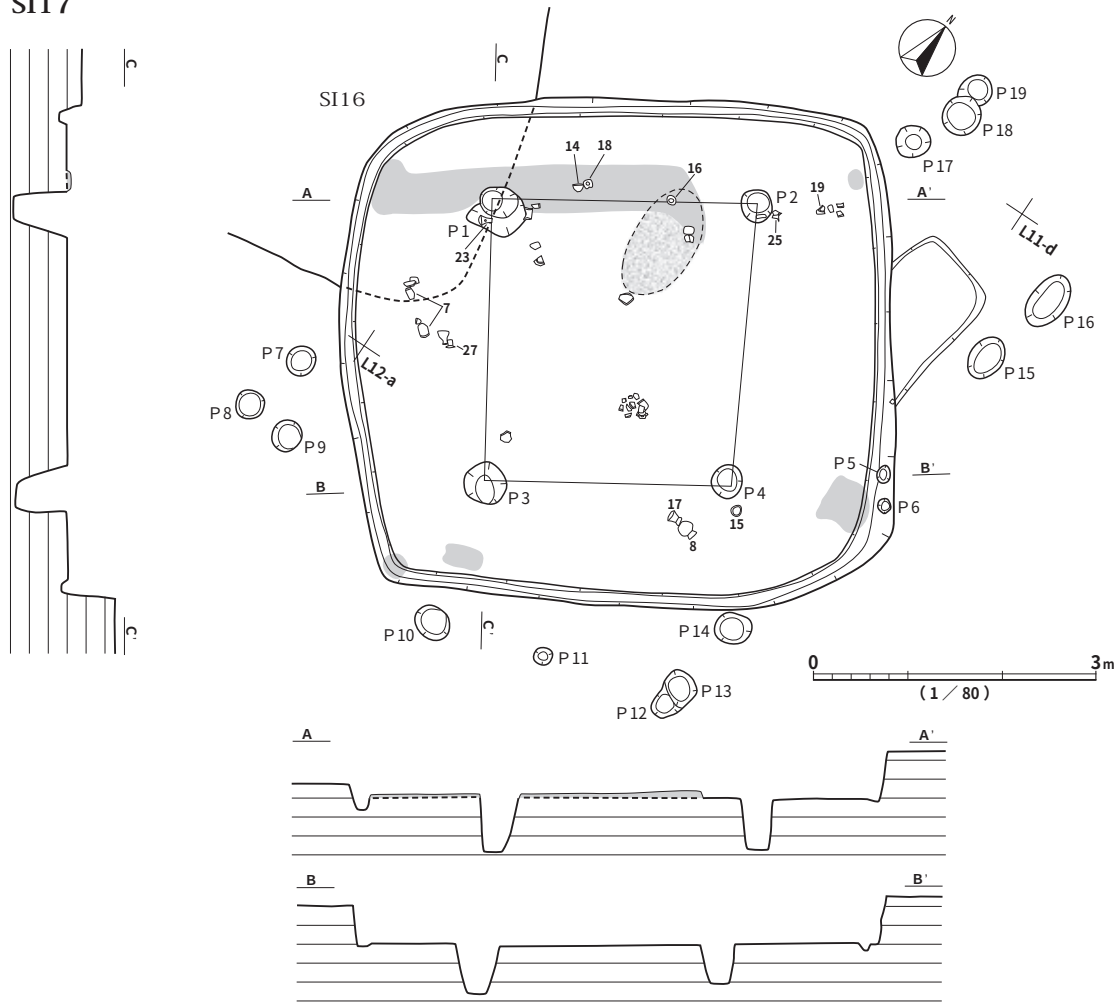
断しておくが確実ではない。

SI17 (Fig.40~42・185・190・192・199、PL.12・54~56・85・97・122・124・128・140)

SI17は、K11・K12・L11・L12区に所在する。西側でSI16重複する。新旧関係は明らかではない。床面高は、本竪穴が0.17mほど深い。北東辺の長方形土坑は、調査時に遺構としてとらえてはいない。

竪穴平面形態はやや胴の張る隅丸横長方形を呈し、竪穴全体規模は5.32m(主軸)×5.80m、確認面掘形面積は28.77㎡、確認面からの深さは0.40~0.50mを測る。主軸方位はN-40.0°-Wである。炉は、調査メモによると不明になっているが、遺構写真(PL.12)から、北西辺側に落ち込みがあることは確実であり、これを炉と判断して図示した。位置規模とも正確ではない。主柱穴は検出されていない。P1~4は主柱穴であり、主柱穴の柱間は2.97m(主軸)×2.71mを測る。貯蔵穴は不明。ただし、南東辺側遺物8・17出土位置周辺は、写真から判断すると落ち込みがあるように見える。なお、

SI17



ph.1 全景



ph.2 出土状況

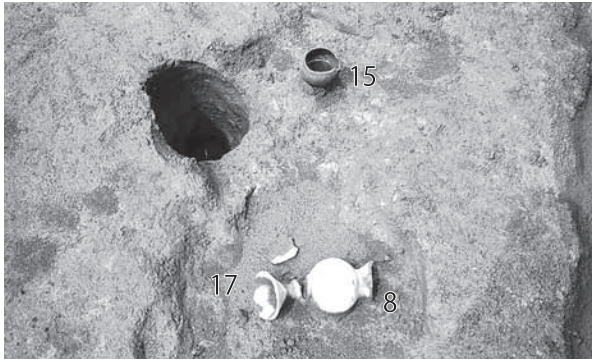


ph.3 出土状況 7・27



ph.4 出土状況 25

Fig.40 SI17(1) 遺構・調査状況



ph.1 出土状況 8・15・17



ph.2 出土状況 15

SI17

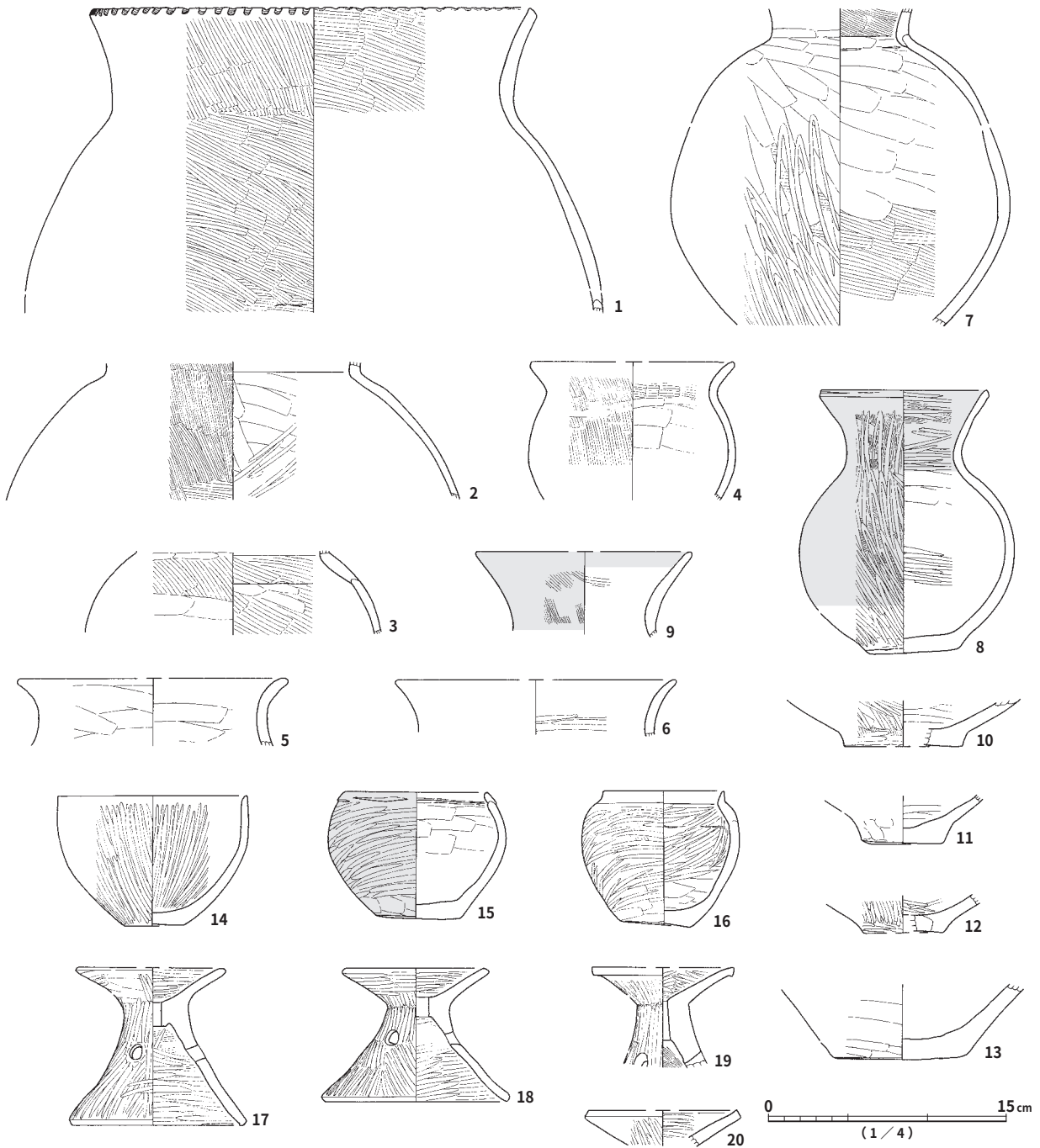


Fig.41 SI17(2) 遺物・調査状況

SI17

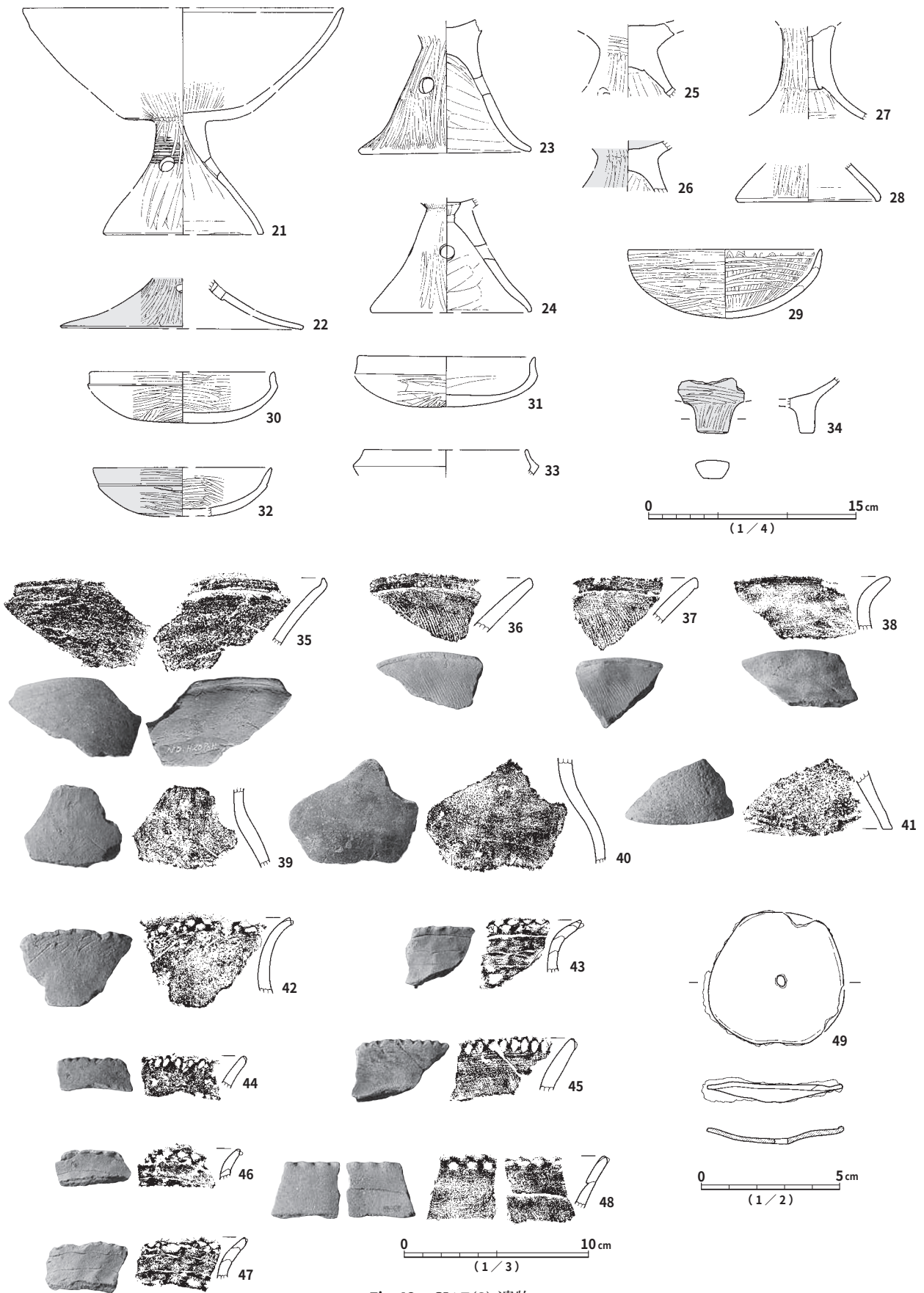


Fig.42 SI17(3) 遺物

8・17の出土位置は、調査写真から判断すると、図よりもやや壁側に近いと思われる。壁溝はほぼ全周する。各辺壁際で焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。北西辺側にはやや不自然に帯状の焼土が残されているが、詳細は不明。

出土遺物は、総重量19,934.2gであり、このうち土器は18,455.1g、縄文土器をのぞく重さは10,028.0gであった。実測可能遺物は、1～3・5・6・38～40・42～48が甕形土器、4が小形甕形土器、7・9・10・12・35が壺形土器、8が小形壺形土器、14～16が椀形土器、17～20・24・28器台形土器、21～23・25～27・36・37が高杯形土器、29～33が杯形土器、34が鉢形土器、41が台付甕形土器である。時期的には弥生時代中期宮ノ台式(34・48)、古墳時代終末期(29～33)が混在する。土器以外では、49が鉄製紡錘車であるが、類例からみて奈良・平安時代の所産であろう。他に磨石(Fig.185-2)・敲石(Fig.190-50・57)・石皿(Fig.192-73)・軽石製品(Fig.199-127)が出土している。出土位置は、7・14～16・18・19・25が床面、8・17が床面下9cmから出土している。貯蔵穴覆土の可能性が高い。

SI18 (Fig.43・44・185・190・195・197、PL.12・13・56・85・86・97・122・124・126・127)

SI18は、J9・K9区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。長方形土坑は、近年の芋穴である。

竪穴平面形態は胴張りの隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は5.53m(主軸)×5.19m、確認面掘形面積は26.66㎡、確認面からの深さは0.28～0.45mを測る。主軸方位はN-50.0°-Wである。P1～3は支柱穴であり、深さはいずれも0.5m前後、支柱穴の柱間は2.86m(主軸)×2.58mを測る。ただし、東隅部は未検出である。P6は貯蔵穴である。深さは0.60mである。炉は、主軸線上からやや東に偏して1か所認められた。炉北側床面上で焼土が、竪穴中央部で炭化材が検出されているが、火災によるものかどうかは判断できない。

出土遺物は、総重量22,495.7gであり、このうち土器は21,715.2g、縄文土器をのぞく重さは7,611.5gであった。実測可能遺物は、1～4が甕形土器、5～6・10～12が壺形土器、7・8が高杯形土器、9が椀形土器である。このうち10は宮ノ台式である。土器以外では、他に磨石(Fig.185-3・11)・敲石(Fig.190-55)・打製石斧(Fig.195-91)・砥石(Fig.197-109)が出土している。出土位置は、1・7が床面、3・4・8が床面上5cm前後である。

SI19 (Fig.44・45・195・196、PL.13・56・126・140)

SI19は、K9・L9区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はやや胴の張る隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は4.95m(主軸)×4.63m、確認面掘形面積は21.44㎡、確認面からの深さは0.18～0.32mを測る。主軸方位はN-53.0°-Wである。炉は、北隅側で2か所検出されている。Pitは、P2・5が深さ0.40m前後を測る。これ以外はいずれも浅く、支柱穴は特定できない。P3は出入口施設、P4は貯蔵穴である。P5についても、貯蔵穴の可能性はある。壁溝は、北東・北西辺で検出されている。竪穴各部で焼土・炭化物が検出されており、火災に遭った可能性が高い。南西辺側には不自然に直線的な炭化材が残されているが、詳細は不明。

出土遺物は、総重量266.5gであり、このうち土器は258.7g、縄文土器をのぞく重さは158.7gであった。実測可能遺物は、1が壺形土器、2が高杯形土器ある。土器以外では、3の鉄製刀子があるが、本竪穴にともなう可能性は低い。他に、打製石斧(Fig.195-92、196-94)が出土しているが、注記

はSI51と併記されている。

SI20 (Fig.45・185・198・199、PL.13・97・122・127・128)

SI20は、L10区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は5.13m(主軸)×4.54m、確認面掘形面積は22.05㎡、確認面からの深さは0.18～0.28mを測る。主軸方位はN-56.0°-Wである。炉は、北西辺側に寄って1か所確認している。Pitは、P2・4・5が深さ0.30m前後で、他はさらに浅い。貯蔵穴は不明。壁溝は南東辺で検出している。

出土遺物は、総重量6,497.3gであり、このうち土器は5,407.0g、縄文土器をのぞく重さは901.3gであった。実測可能遺物は、1が広口壺形土器、2が甕形土器、3が壺形土器である。1は覆土からの出土である。他に磨石(Fig.185-6)・砥石(Fig.198-110)・軽石製品(Fig.199-126)が出土している。

SI21 (Fig.46・185・197・198、PL.13・57・86・97・121・122・127)

SI21は、L9・L10区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。南辺側の長方形土坑は近年の芋穴である。

竪穴平面形態はほぼ方形を呈し、竪穴全体規模は4.95m(主軸)×5.10m、確認面掘形面積は23.99㎡、確認面からの深さは0.42～0.55mを測る。主軸方位はN-20.0°-Wである。本竪穴は、ほぼ全面に焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。ただし、焼土下の図面、写真などの記録一切がないため、炉・支柱穴などの屋内施設は明らかではない。壁溝は全周する。

出土遺物は、総重量4,237.1gであり、このうち土器は2,933.9g、縄文土器をのぞく重さは2,803.9gであった。実測可能遺物は、1～3が甕形土器、4が椀形土器、5が器台形土器、6・8が高杯形土器、7が台付甕形土器、9が小形壺形土器、10が壺形土器、11が杯形土器である。2はタタキ整形土器、11はロクロ土師器である。土器以外では、12が砥石である。他に磨石(Fig.185-4・7)・砥石(Fig.197-108、198-112)が出土している。出土位置が判明しているものは、7が床面、1・5・6が床面上3～7cmである。

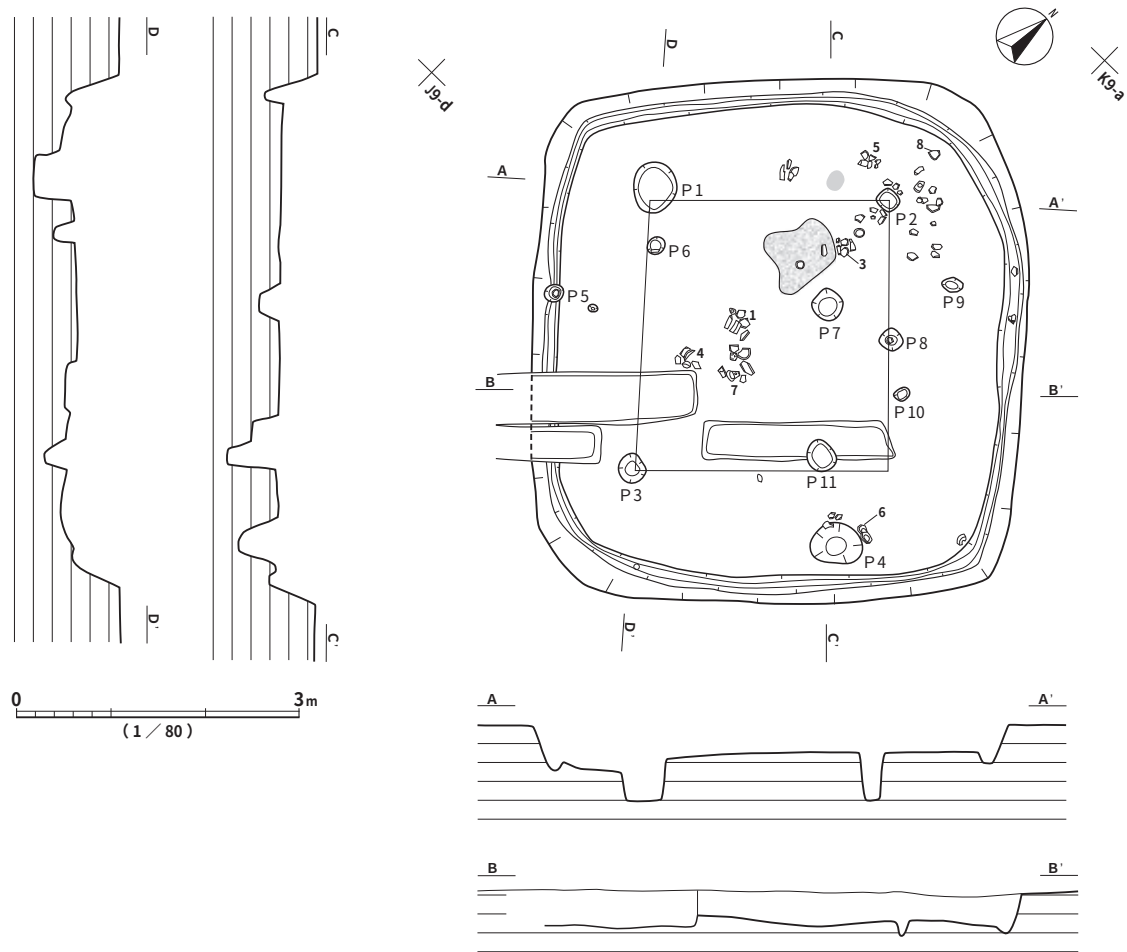
SI22 (Fig.47・48・185・190・192、PL.13・57・97・122・124)

SI22は、L9・M9区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は5.11m(主軸)×4.79m、確認面掘形面積は23.13㎡、確認面からの深さは0.37～0.51mを測る。主軸方位はN-53.0°-Wである。炉は、調査図面には記載がない。しかし、遺構写真(PL.13)によると、ほぼ主軸線上に落ち込みがあることは確実であり、これを炉と判断して図示した。位置規模とも正確ではない。P1～4は支柱穴であり、支柱穴の柱間は2.50m(主軸)×2.07mを測る。P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。深さは、P4・5とも0.26mである。P6周辺の床面高が、中央より8cmほど高くなっている。おそらく周堤帯であろう。壁溝は検出されていない。

出土遺物は、総重量11,266.1gであり、このうち土器は9,791.8g、縄文土器をのぞく重さは4,058.0gであった。実測可能遺物は、1・3・6・17が壺形土器、7・8・12～15が甕形土器、2が小形甕形土器、4・5・10が高杯形土器、9・16が椀形土器、11が広口壺形土器である。他に磨石(Fig.185-9)・敲石(Fig.190-52)・石皿(Fig.192-72)が出土している。出土位置は、1・2・9が床面上4cm、4・6・8・15が床面上9～15cmである。

SI18



ph.1 出土状況



ph.2 出土状況



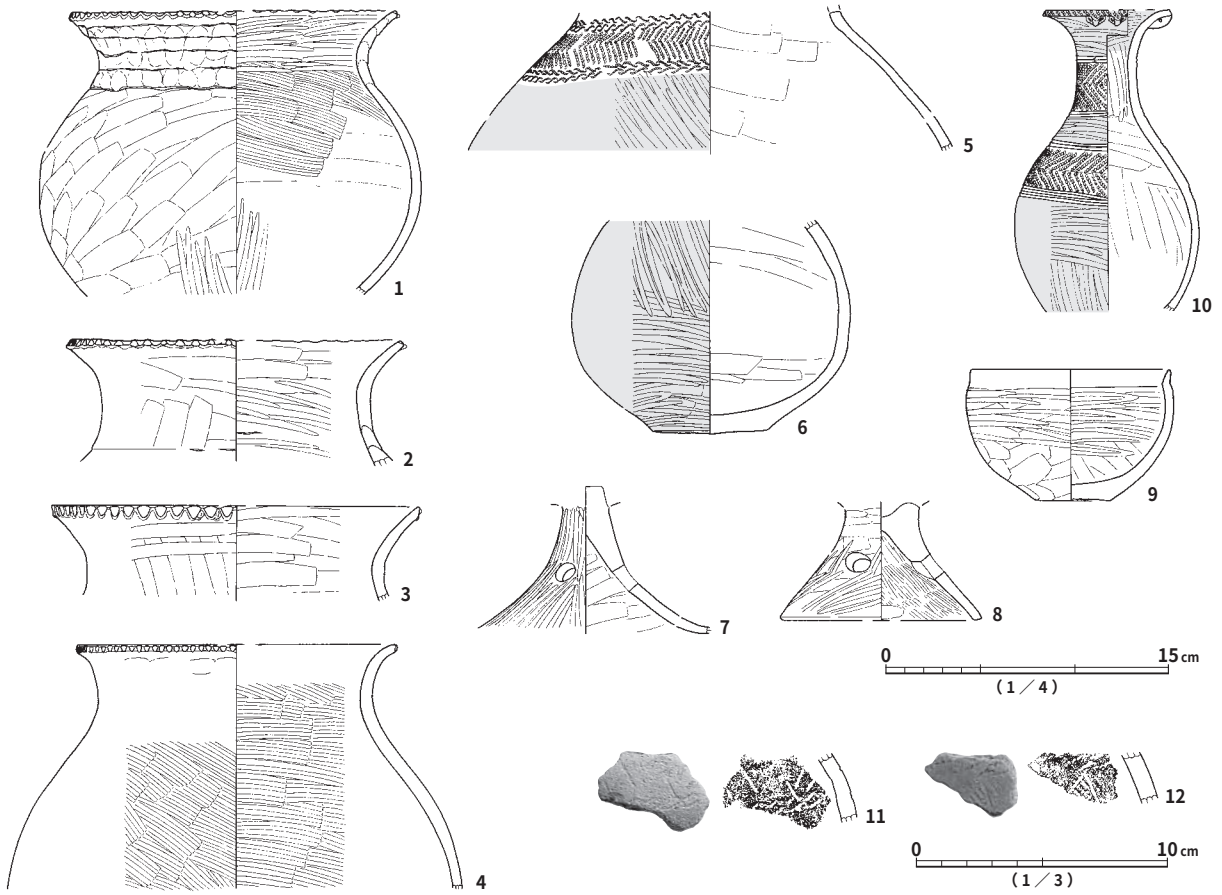
ph.3 出土状況



ph.4 出土状況

Fig.43 SI18(1) 遺構・調査状況

SI18



SI19

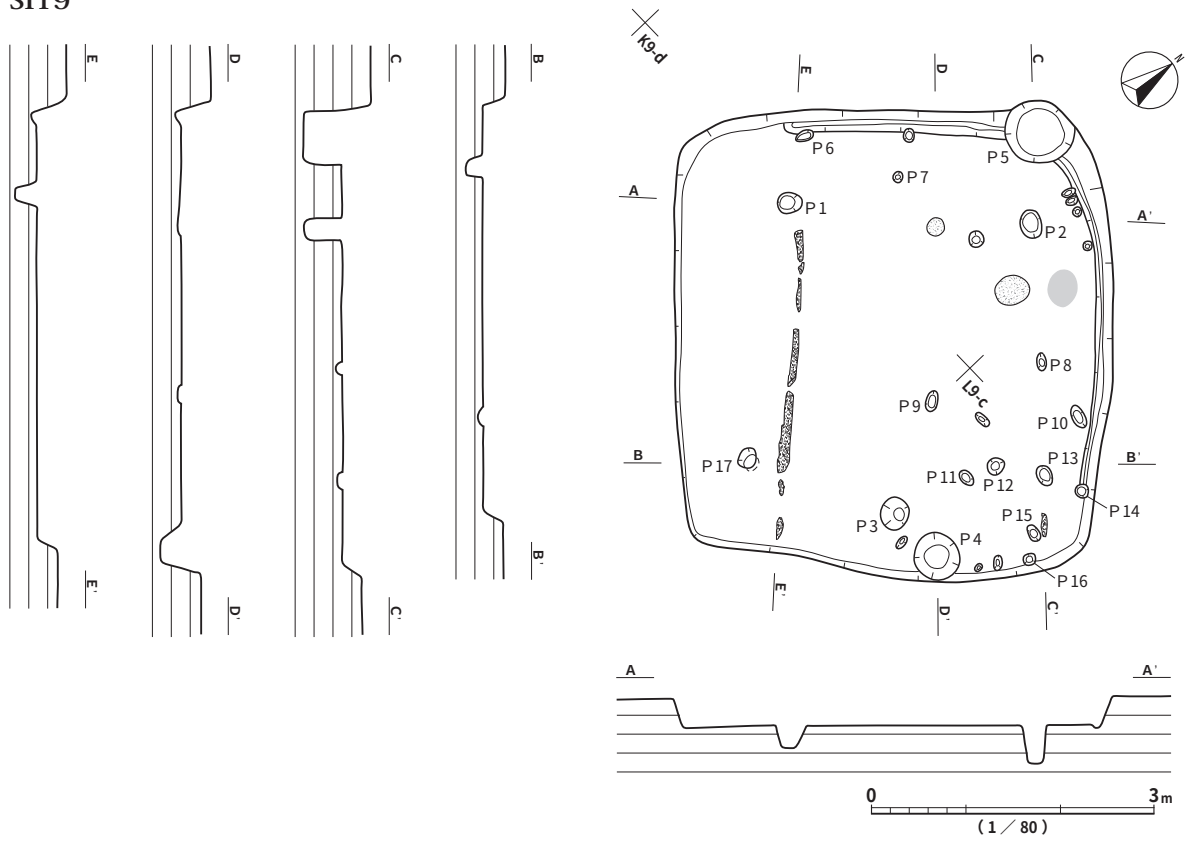
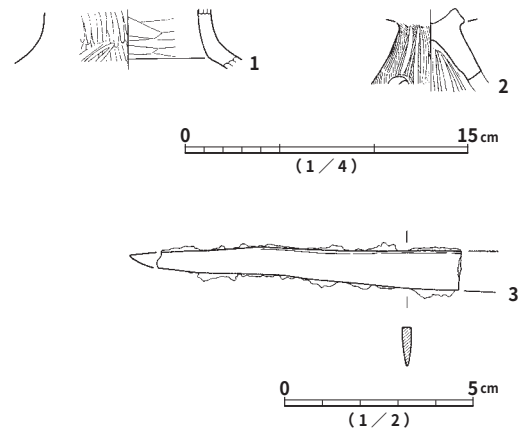


Fig.44 SI18(2) 遺物、SI19(1) 遺構

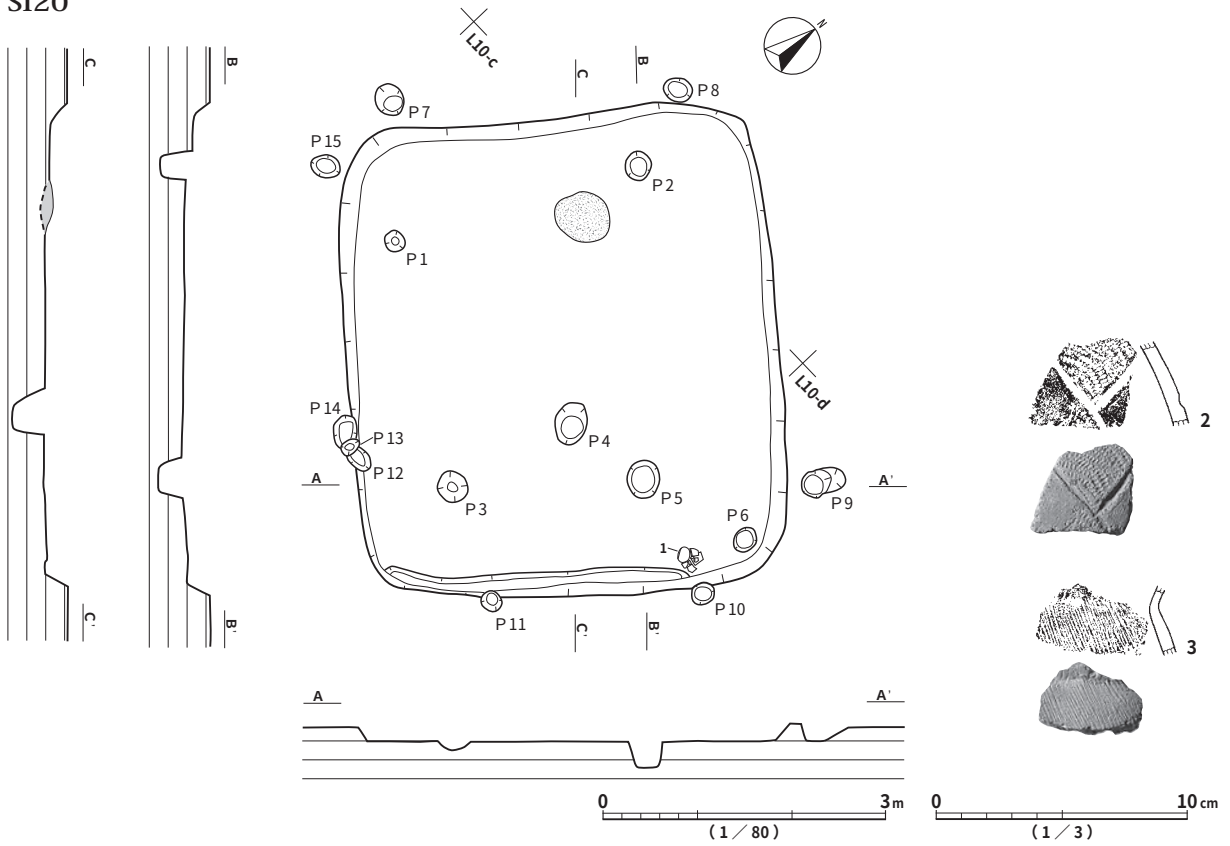


ph.1 全景

SI19



SI20



ph.2 出土状況 1

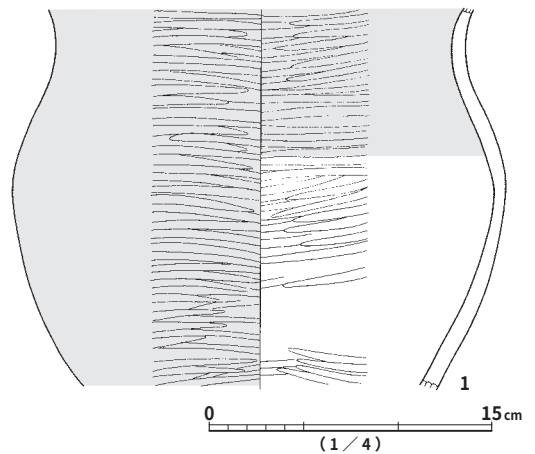
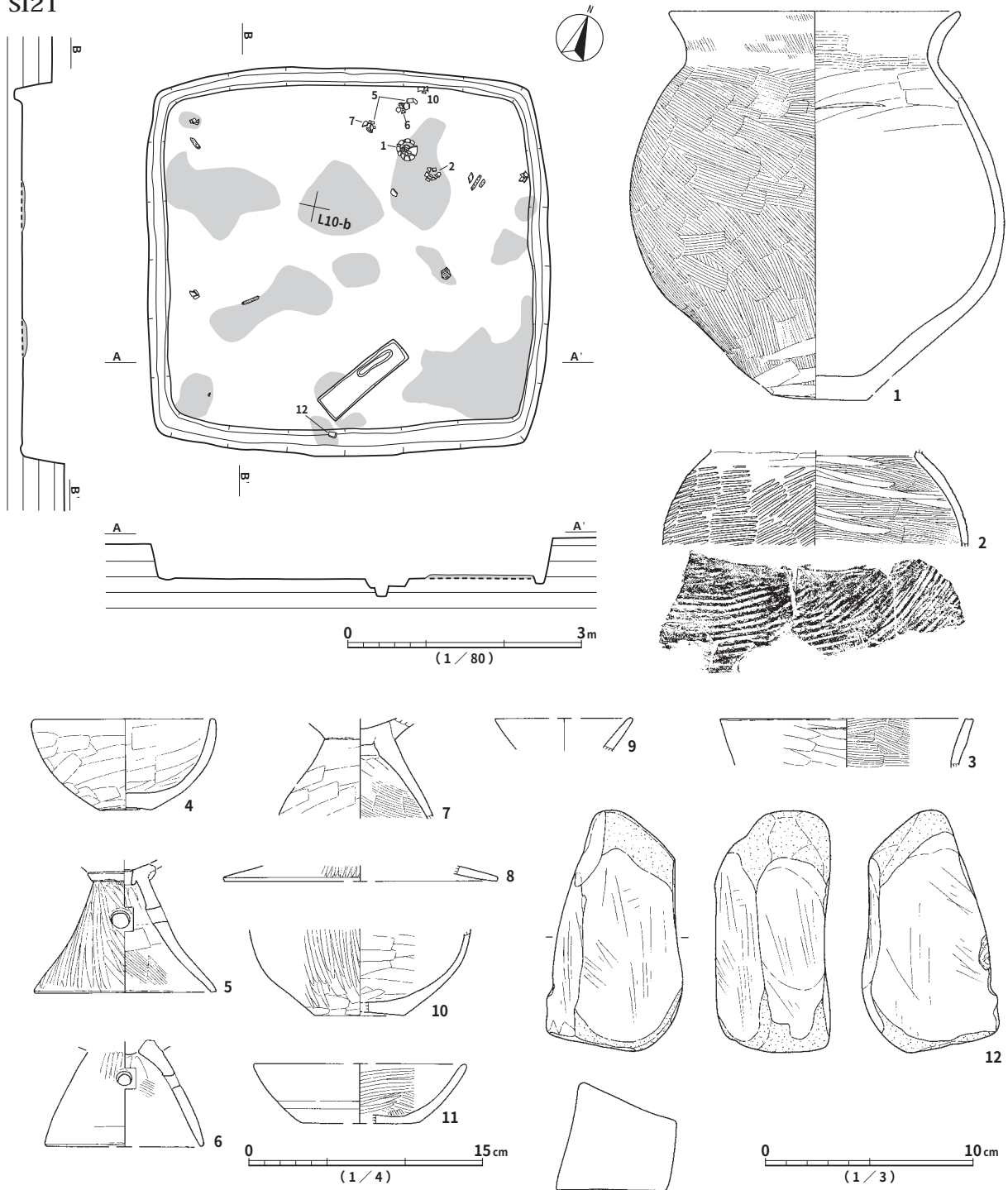


Fig.45 SI19(2) 遺物・調査状況、SI20 遺構遺物・調査状況

SI21



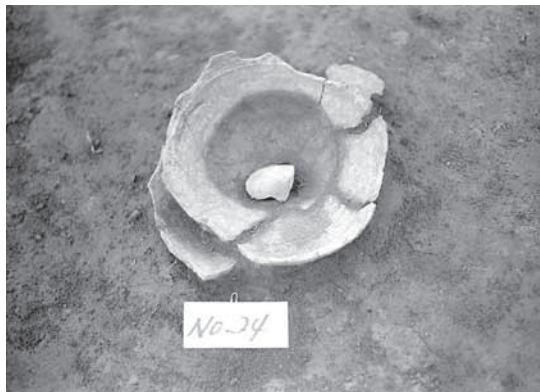
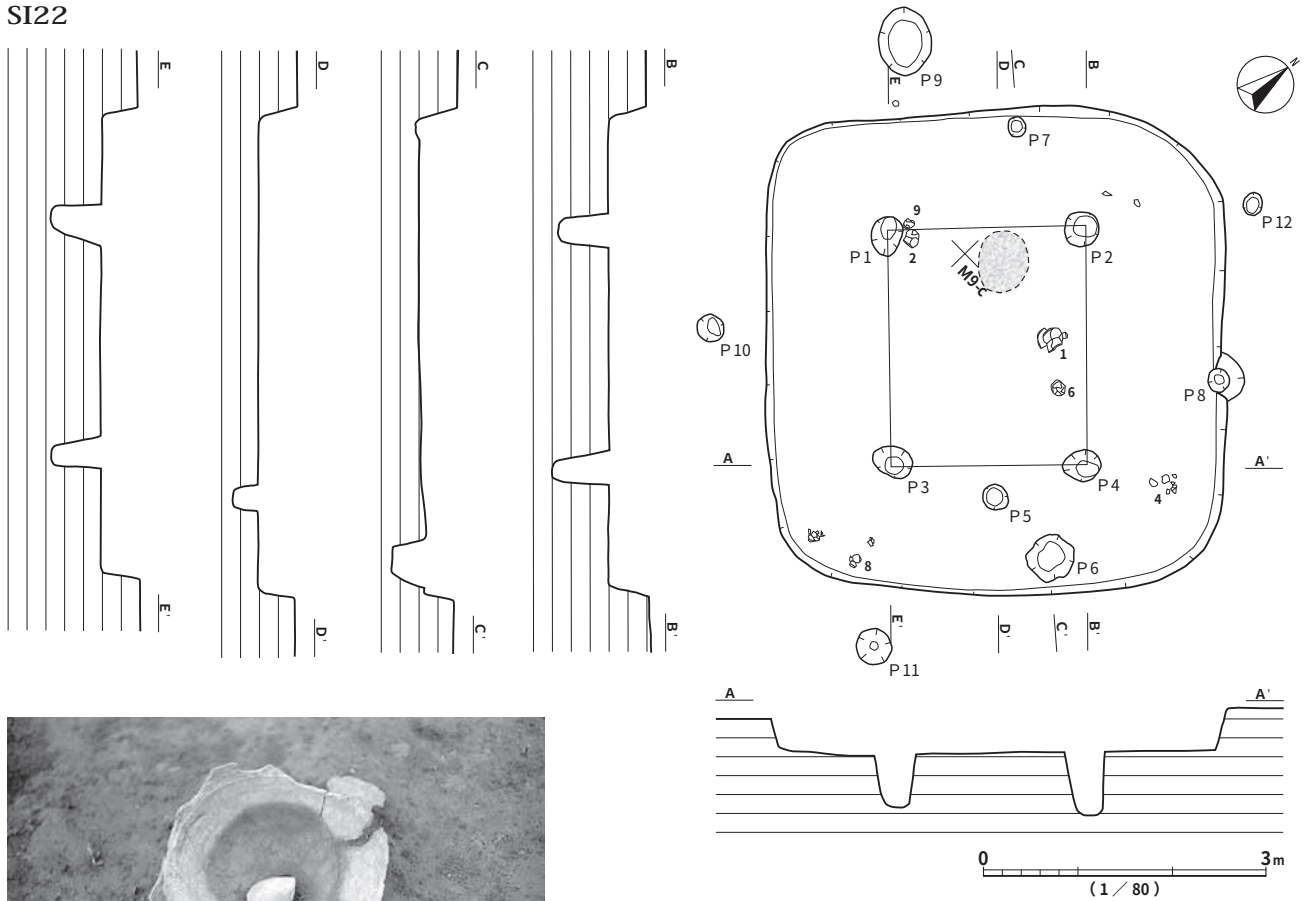
ph.1 出土状況



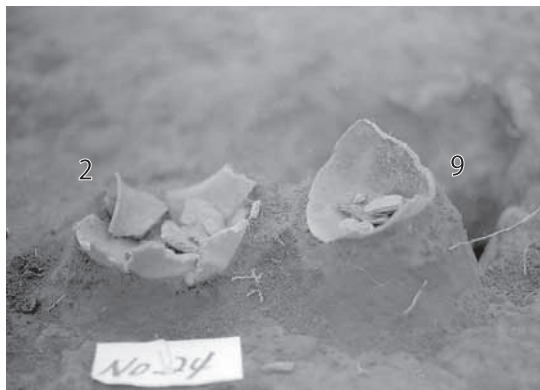
ph.2 出土状況 1

Fig.46 SI21 遺構遺物・調査状況

SI22



ph.1 出土状況 1



ph.2 出土状況 2・9

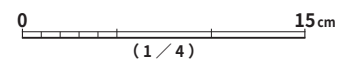
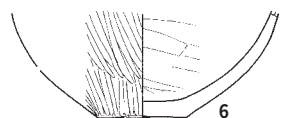
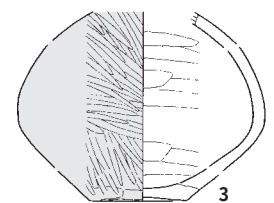
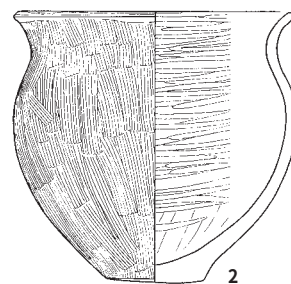
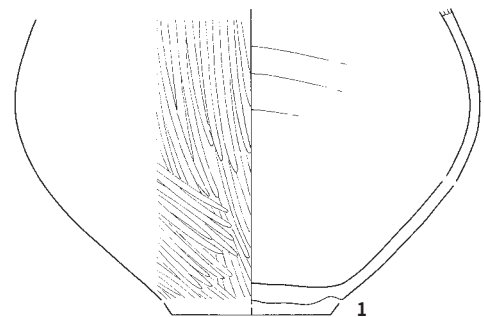
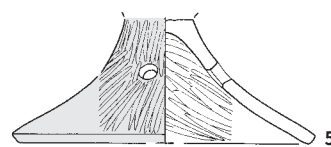
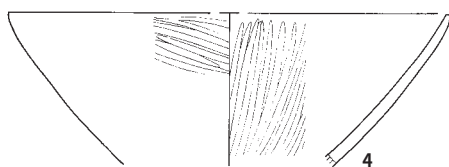
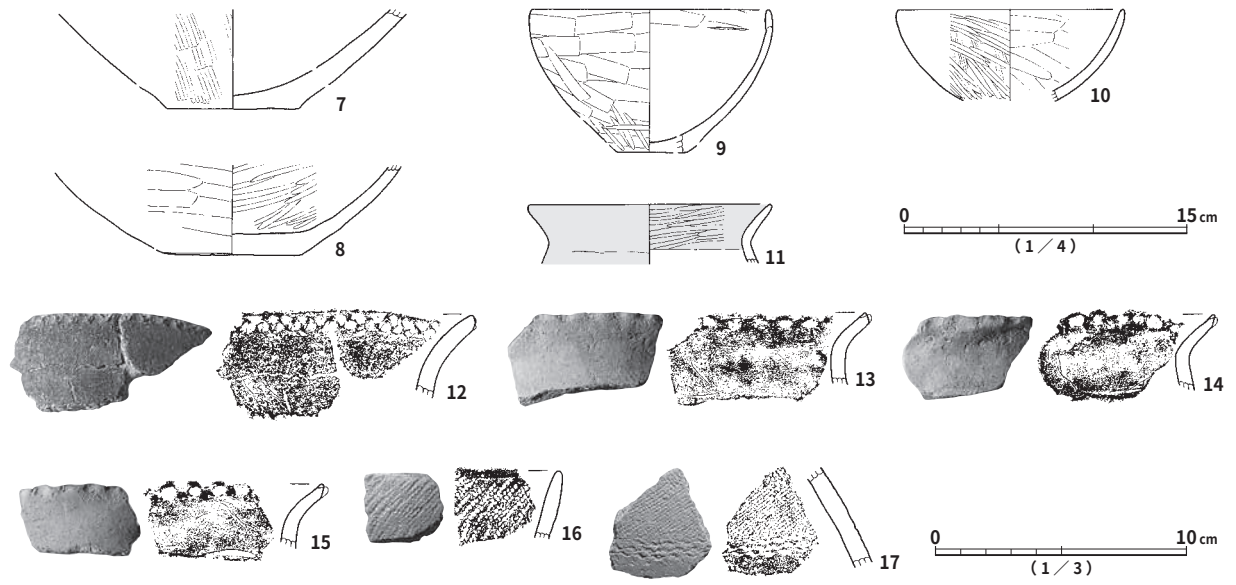


Fig.47 SI22(1) 遺構遺物・調査状況

SI22



SI23

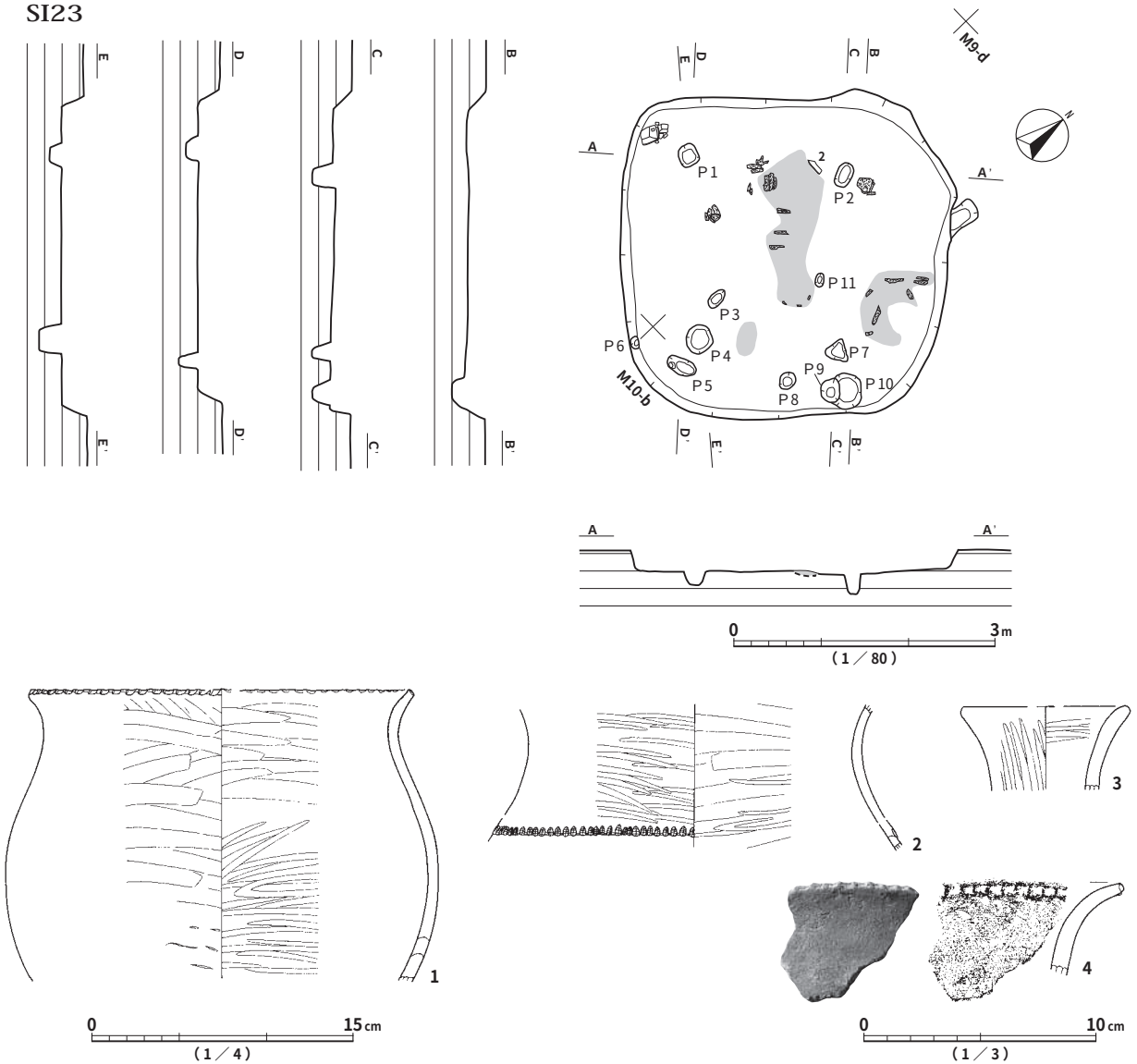


Fig.48 SI22(2) 遺物、SI23 遺構遺物

SI23 (Fig.48・185、PL.57・86・97・122)

SI23は、M9・M10区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。本竪穴は、調査時の写真がないため、図面以外での検討ができない。

竪穴平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は3.65m(主軸)×3.74m、確認面掘形面積は12.49㎡、確認面からの深さは0.15～0.30mを測る。主軸方位はN-52.0°-Wである。本竪穴は、床面中央から東側床面上に焼土の堆積があり、火災に遭った可能性が高い。ただし、焼土下の図面、写真など記録類一切がないため、主軸線上の炉の有無は確認できない。炉は、P2脇で1か所検出されている。P1・2・4・7は支柱穴の可能性もあるが、深さは0.2m程度といずれも浅い。P8は出入口施設、P10は貯蔵穴である。壁溝は検出されていない。

出土遺物は、総重量1,701.9gであり、このうち土器は1,336.9g、縄文土器をのぞく重さは756.9gであった。実測可能遺物は、1・2・4が甕形土器、3が壺形土器である。土器以外では、他に磨石(Fig.185-8)が出土している。出土位置が判明しているものは、2が床面上13cmであり、他は明らかではない。

SI24 (Fig.49～52・186、PL.14・57～59・86・97・98・122)

SI24は、K12・K13・L12・L13区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は5.12m(主軸)×5.12m、確認面掘形面積は24.57㎡、確認面からの深さは0.42～0.52mを測る。主軸方位はN-63.0°-Wである。炉は、主軸線上からやや北に偏して1か所確認できる。P1～4は支柱穴であり、深さは0.70m前後、支柱穴の柱間は2.54m(主軸)×2.39mを測る。P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。壁溝はほぼ全周する。なお、南辺側壁際床面が10～15cm程度高くなる。いわゆるベッド状遺構であるが、調査図面には図化されていないため、写真を参照して描いた。

出土遺物は、総重量10,976.9gであり、このうち土器は10,526.9g、縄文土器をのぞく重さは10,356.9gであった。実測可能遺物は、1～10・13・35が壺形土器、11・12が小形壺形土器、14が台付甕形土器、15・16が小形台付甕形土器、17・18・31～34・36が甕形土器、19・20が小形甕形土器、21～25が高杯形土器、29が器台形土器、26～28が椀形土器、30が手捏ね状の小形椀形土器である。32はタタキ目状であるが粗いハケ整形である。33・34は混在である。土器以外では、他に磨石(Fig.186-12)が出土している。

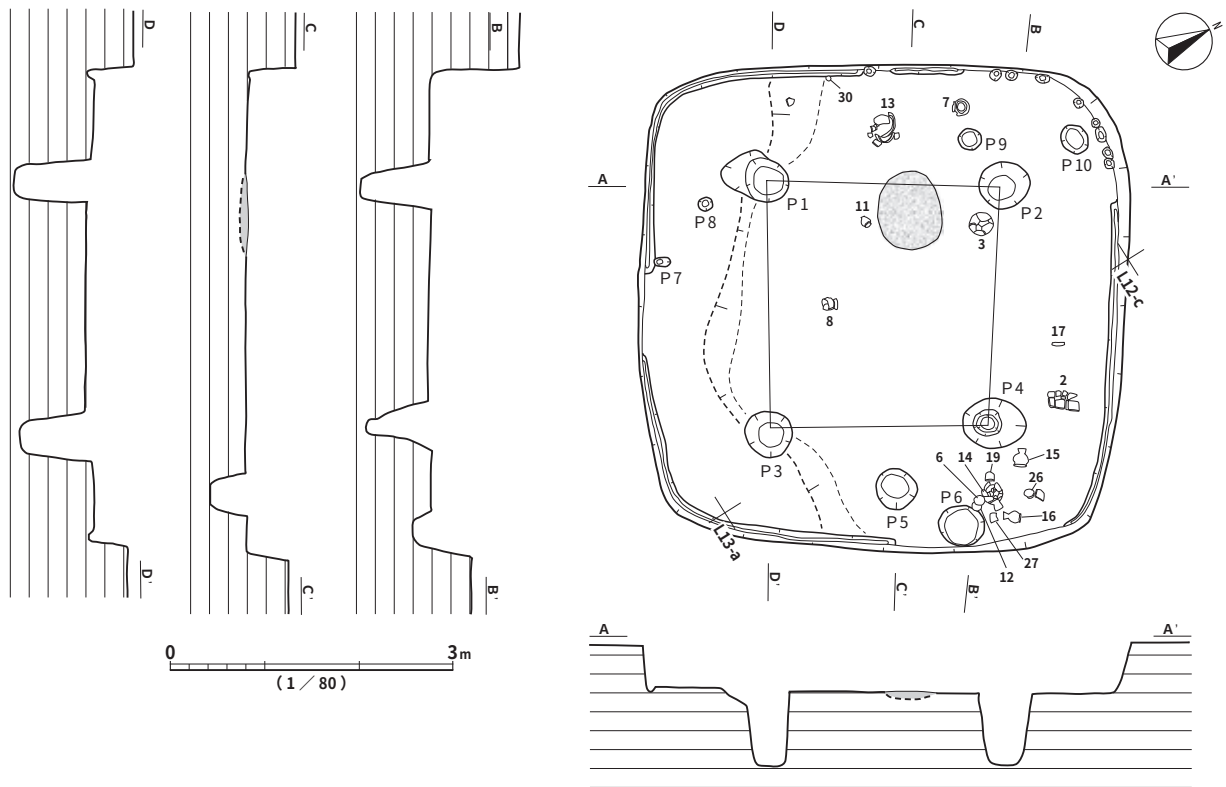
出土位置は、2・3・7・11・13～16・26・30が床面付近、6・8・12・17・19が床面上5～8cmである。

SI25 (Fig.53・185・190、PL.14・15・59・86・98・122・124)

SI25は、L12・L13区に所在する。SD21と重複する。断面図など記録上の根拠はないが、SD21が新しいと推定しておく。東側の土坑は、調査図面に記載されていたためそのまま掲載した。ただし、遺構番号、出土遺物の有無など、詳細は不明。

竪穴平面形態は隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は5.42m(主軸)×4.86m、確認面掘形面積は24.93㎡、確認面からの深さは0.35～0.42mを測る。主軸方位はN-50.0°-Wである。炉は、調査図面に図化されていないが、遺構写真(PL.14)から、ほぼ主軸線上に落ち込みがあることは確実であり、これを炉と判断して略記した。位置規模とも正確ではない。P1～4は支柱穴であり、支柱穴の柱間は3.01m(主軸)×2.42mを測る。深さは一定ではなく、0.43～0.74mである。P5は出入口施

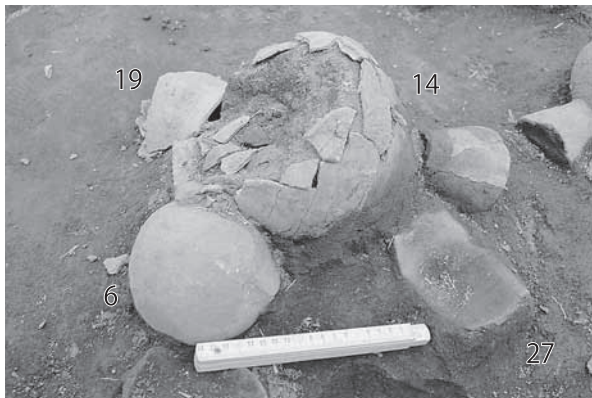
SI24



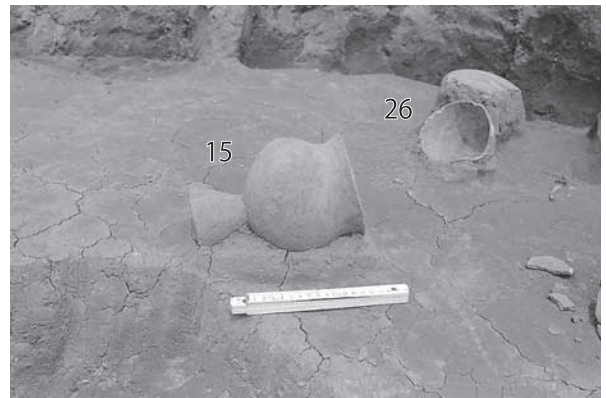
ph.1 全景



ph.2 出土状況



ph.3 出土状況 6・14・19・27



ph.4 出土状況 15・26

Fig.49 SI24(1) 遺構・調査状況



ph.1 出土状況 7



ph.2 出土状況 8



ph.3 出土状況 11



ph.4 出土状況 16



ph.5 出土状況 26



ph.6 出土状況 13

SI24

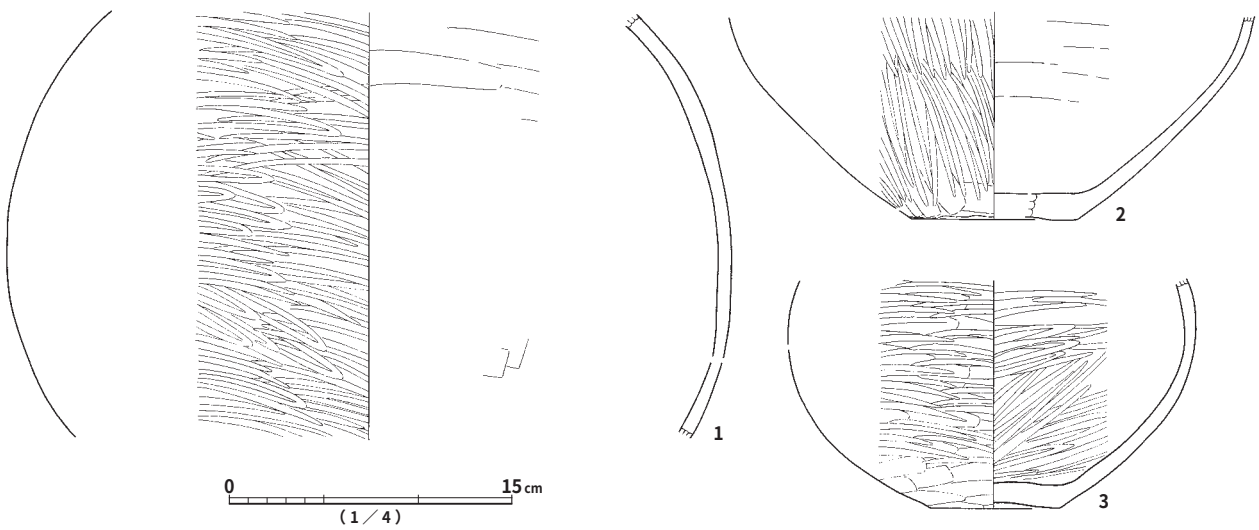


Fig.50 SI24(2) 遺物・調査状況

SI24

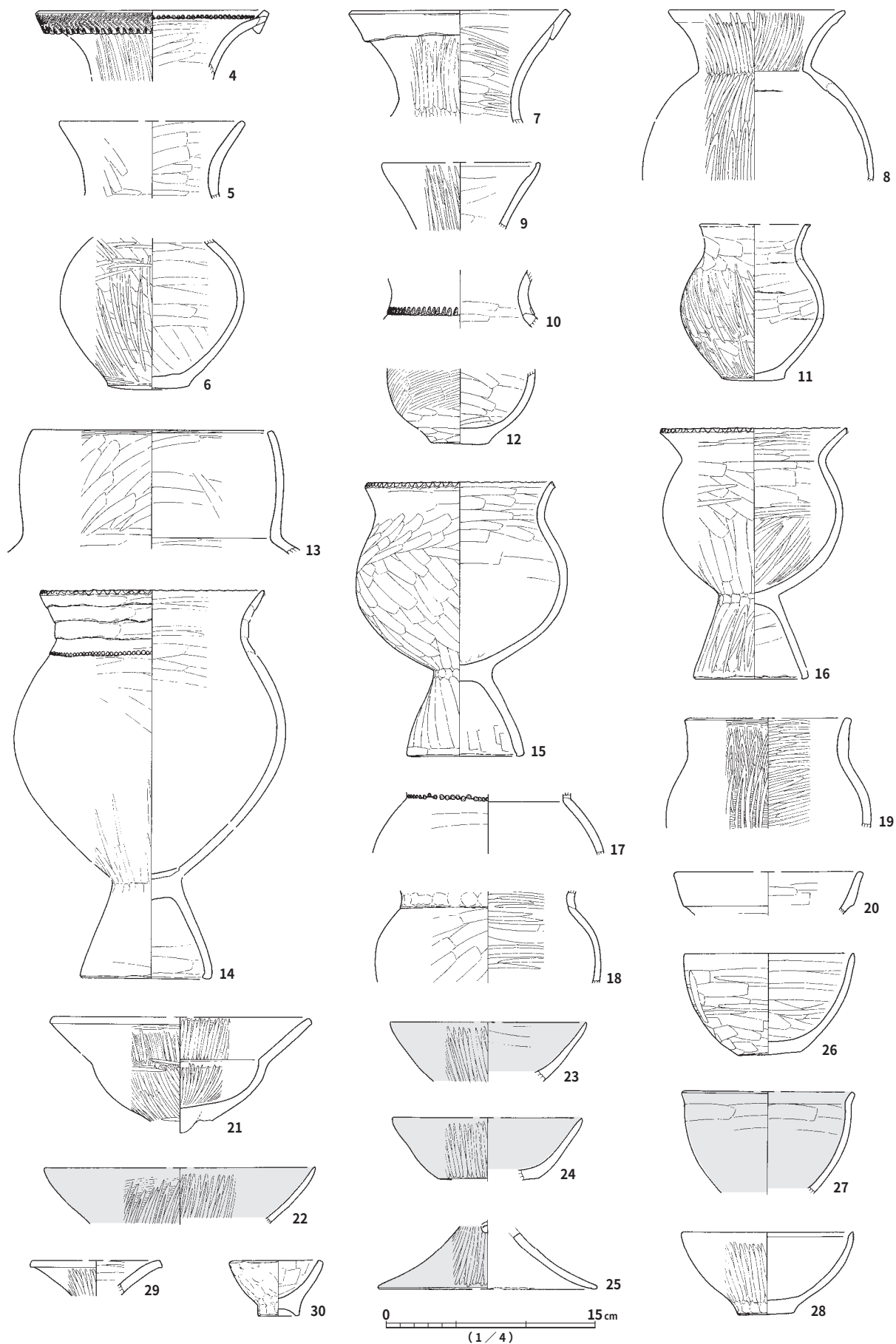


Fig.51 SI24(3) 遺物

SI24

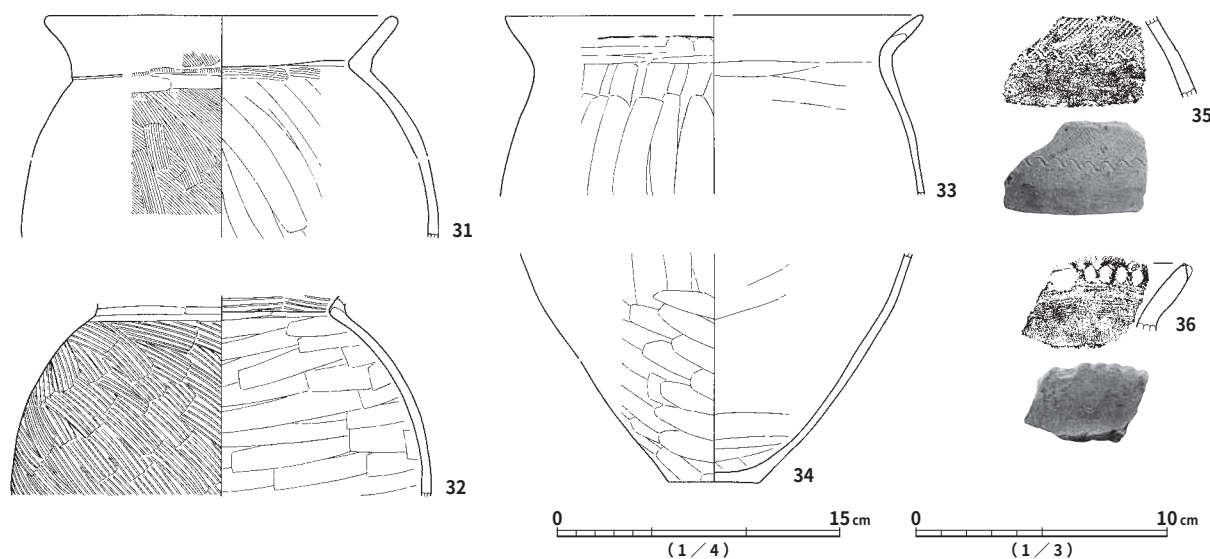


Fig.52 SI24(4) 遺物

設、P6は貯蔵穴である。P6の深さは0.16mである。壁溝は、北東辺でのみ検出されている。北隅部で焼土の堆積が確認されているが、火災によるものかどうかの判断はできない。レベルは焼土層上で床面上14cmの記載がある。他に、同じ北隅部で粘土塊が出土している。レベルは粘土塊上で床面上10cmの記載がある。

出土遺物は、総重量6,158.4gであり、このうち土器は5,395.4g、縄文土器をのぞく重さは1,941.7gであった。実測可能遺物は、1が甕形土器、2が小形甕形土器、3・5が椀形土器、4・6が小形壺形土器、7が器台形土器である。土器以外では、他に磨石 (Fig.185-10)・敲石 (Fig.190-54) が出土している。出土位置は、3が床面、4がP4内、1が床面上5cmであった。P1脇から壺形土器口縁部が出土しているが (Fig.53-ph.2)、所在を確認することができなかった。

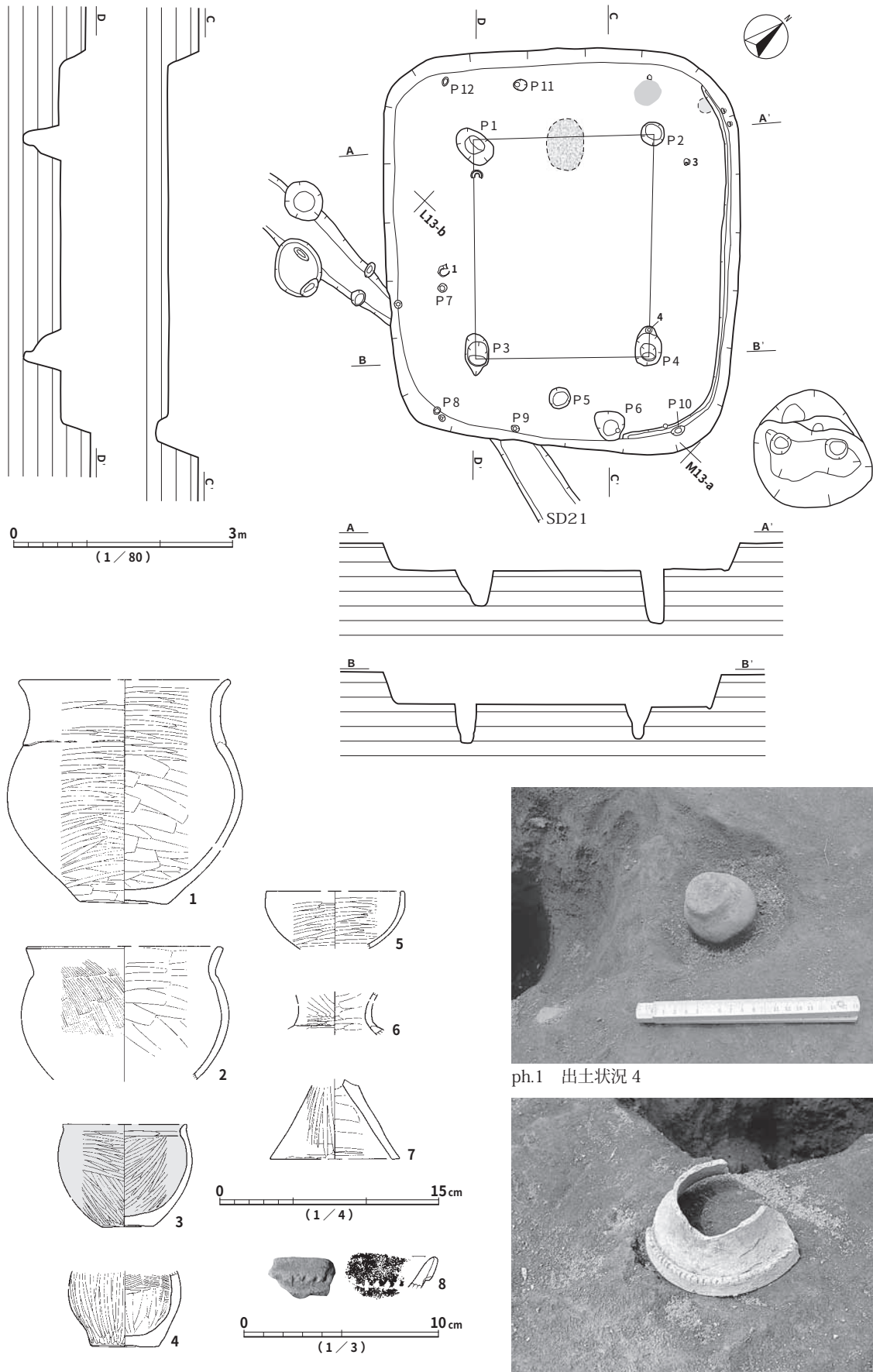
SI26 (Fig.54・193、PL.15・98・125)

SI26は、M10・M11区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。掘り込みが2段になるが、掘りすぎと判断した。

竪穴平面形態はおおむね隅丸方形になると思われる。竪穴全体規模は、3.85m(主軸)×3.80m、確認面掘形面積は13.56㎡を測る。確認面からの深さは0.16~0.29mである。北西-南東を主軸とした場合の方位はN-51.0°-Wである。炉は不明。調査メモによると、中央焼土部分に「炉」の記載があるが、焼土下の掘り上がり状態の記録がない。焼土自体はいずれも床面上にあり、その上面レベルは、中央焼土が床面上6~9cm、北東焼土が21cm、北西焼土が26cmである。調査時の写真から判断すると、竪穴周辺部の焼土は、焼土下に黒色土があるように見える。廃棄後の焼却による可能性が高い。支柱穴などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物は、総重量1,132.0gであり、このうち土器は541.0g、縄文土器をのぞく重さは311.0gであった。実測可能遺物は、1が杯形土器、2が手焙形土器、3が甕形土器である。土器以外では、他に石皿 (Fig.193-79) が出土している。

SI25



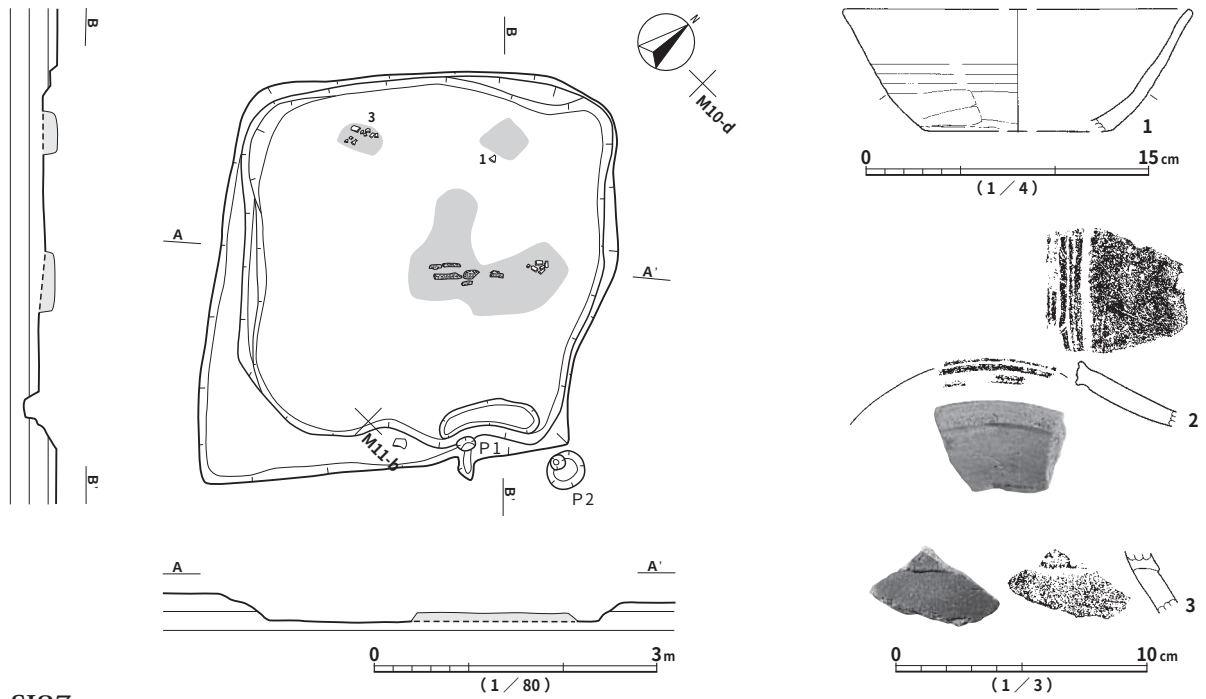
ph.1 出土状況 4



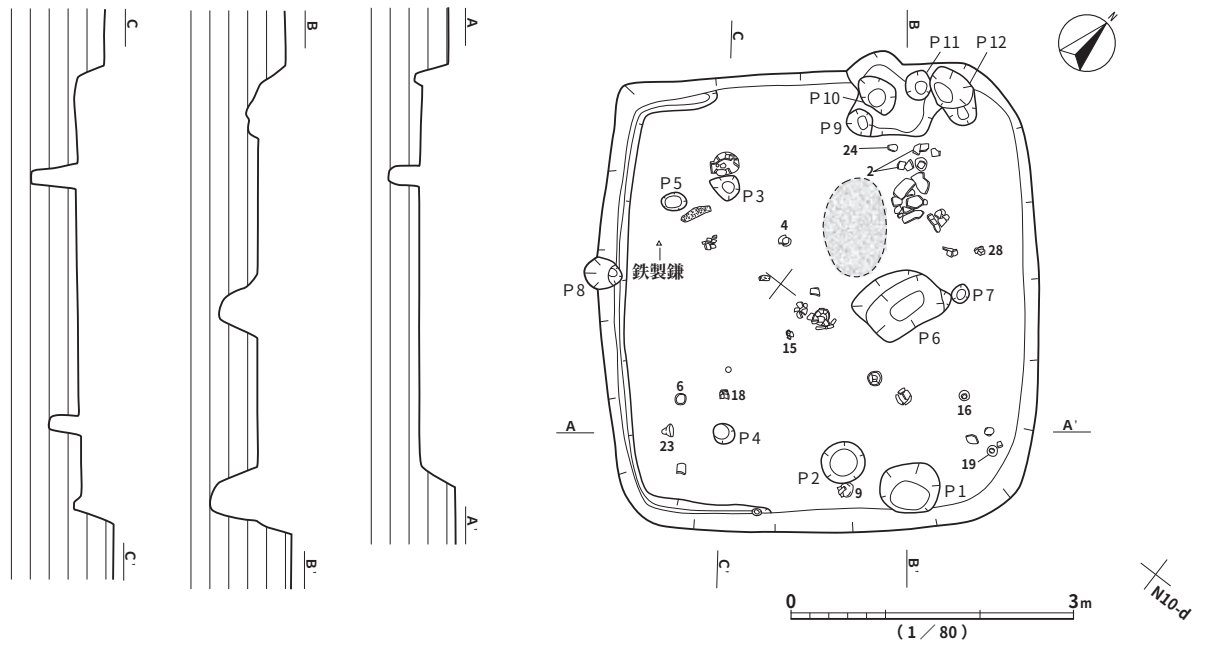
ph.2 出土状況 不明土器

Fig.53 SI25 遺構遺物・調査状況

SI26



SI27



ph.1 全景

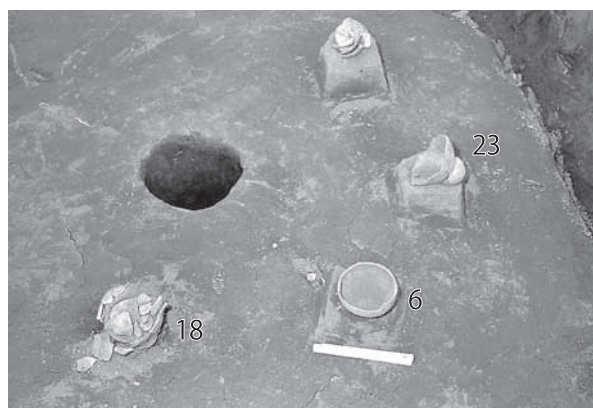


ph.2 出土状況

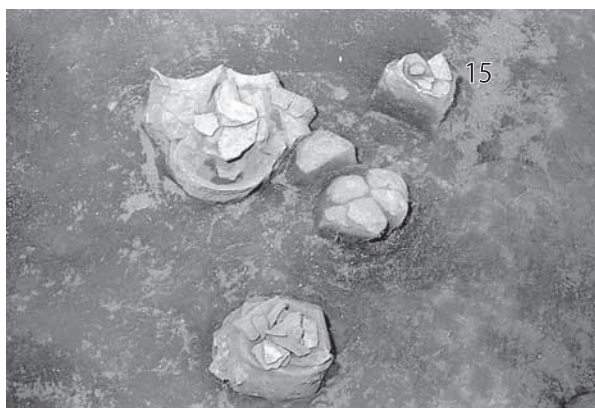
Fig.54 SI26 遺構遺物、SI27(1) 遺構・調査状況



ph.1 出土状況 2・24



ph.2 出土状況 6・18・23



ph.3 出土状況 15



ph.4 出土状況 15



ph.5 出土状況 6



ph.6 出土状況 23



ph.7 出土状況 不明土器



ph.8 出土状況 不明鉄器

Fig.55 SI27(2) 調査状況

SI27

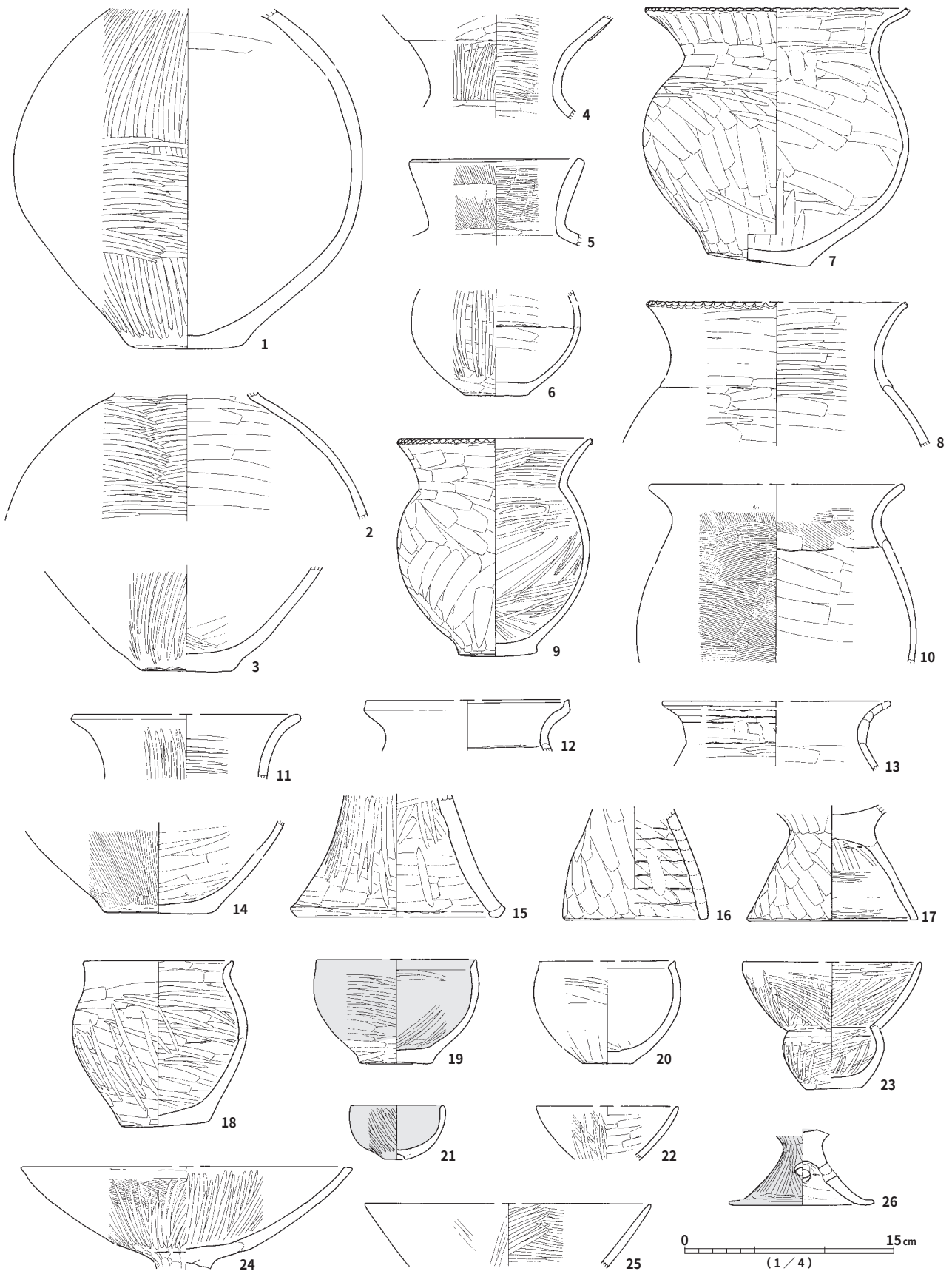


Fig.56 SI27(3) 遺物

SI27

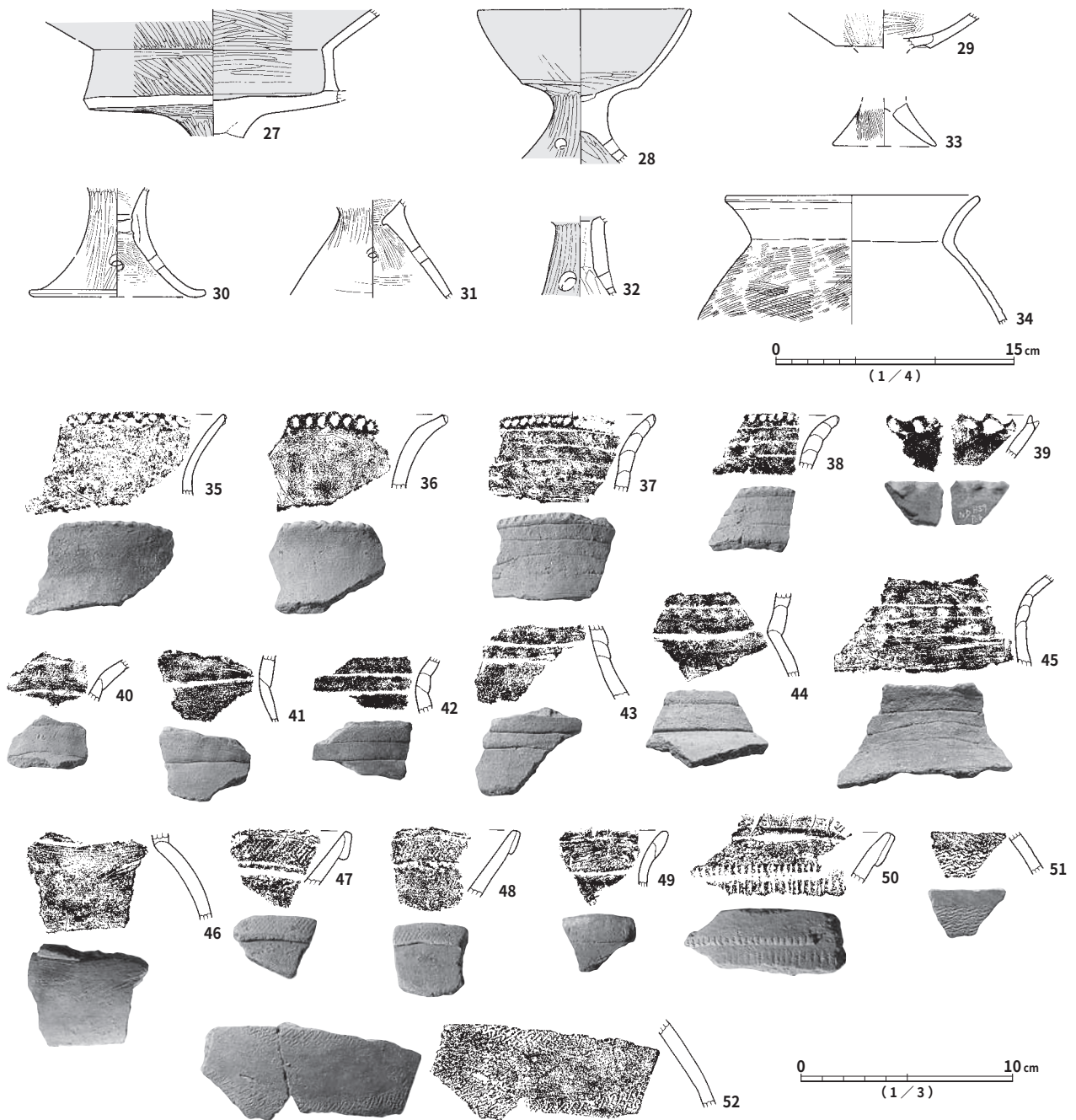


Fig.57 SI27(4) 遺物

SI27 (Fig.54～57・186・192・198、PL.15・16・59～61・87・98・122・125・127)

SI27は、M10・N10区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。北西辺部の凹凸(P9～12)、P6は攪乱であろう。

竪穴平面形態は隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は4.87m(主軸)×4.68m、確認面掘形面積は21.31㎡、確認面からの深さは0.27～0.40mを測る。主軸方位はN-46.0°-Wである。炉は、調査図面に図化されていないが、遺構写真(PL.15)から、主軸線上やや北東側に落ち込みがあり、これを炉と判断して略記した。主柱穴は明確ではない。P3・4に可能性があるが、対が検出されていない。深さは、P3

が0.49m、P4が0.38mを測る。P2は出入口施設、P1は貯蔵穴である。壁溝は、南西辺部側のみ検出されている。西隅部覆土で炭化物が確認されているが、火災によるものかどうかの判断はできない。

出土遺物は、総重量26,711.5gであり、このうち土器は24,638.5g、縄文土器をのぞく重さは18,527.8gであった。実測可能遺物は、1～6・11・47・48・51・52が壺形土器、7・8・10・12～14・34～46が甕形土器、9が小形甕形土器、15が炉器台（支脚）形土器、19～22が椀形土器、18・23・49が小形壺形土器、24・25・28・29が高杯形土器、26・30・31・33が器台形土器、27が結合器台形土器、32が小形土器、50が広口壺形土器である。このうち、34のタタキ整形土器は、過去に公表されているが（菊池健一 1990「一つの甕から」『史館』第22号 史館同人、図31-14）、現物を確認することができなかった。同論文から再録するが、掲載図を再トレースしたため詳細は正確ではない。ただし、掲載図の比較ではSI36-11に似る。土器以外では、他に磨石（Fig.186-13・15）・石皿（Fig.192-74）・砥石（Fig.198-111）が出土している。出土位置は、4・18が床面、6・9・15・16が床面付近3～4cmである。2・23・24・28は、床面から10cm以上上から出土している。調査写真によると、1・7・9などの可能性のある大形破片が床面付近から出土しているが特定できなかった。また、P3脇床面上から広口壺形土器が出土しているが（Fig.55-ph.7）、所在が明らかではない。南西辺壁際付近では、当該時期と推定する直刃の鉄製鎌が出土しているが（Fig.55-ph.8）、これも現物が確認できない。

SI28 （Fig.58、PL.16・61・87・98）

SI28は、N9・N10・O9区に所在する。SD21と重複するが、本竪穴床面には達していない。新旧関係判断する情報はないが、SD21が新しいと考えておく。竪穴との重複はない。P5の帰属は不明。

竪穴平面形態はやや隅丸の長方形を呈し、竪穴全体規模は4.67m（主軸）×4.38m、確認面掘形面積は18.93㎡、確認面からの深さは0.24～0.34mを測る。主軸方位はN-48.0°-Wである。炉は、主軸方位北西寄りで1か所確認している。P1～4は主柱穴であり、主柱穴の柱間は2.29m（主軸）×1.85m、深さは0.49～0.64mを測る。南東辺壁際の焼土は、写真で見ると床面より落ち込んでおり、貯蔵穴の可能性が高い。このことから、火災に遭った可能性も考えられるが、判断は難しい。壁溝は検出されていない。

出土遺物は、総重量1,082.9gであり、このうち土器は1,082.9g、縄文土器をのぞく重さは762.9gであった。実測可能遺物は、1が甕形土器、2が小形壺形土器、4・5が器台形土器、6が炉器台（支脚）形土器である。6は炉北側床面から出土している。

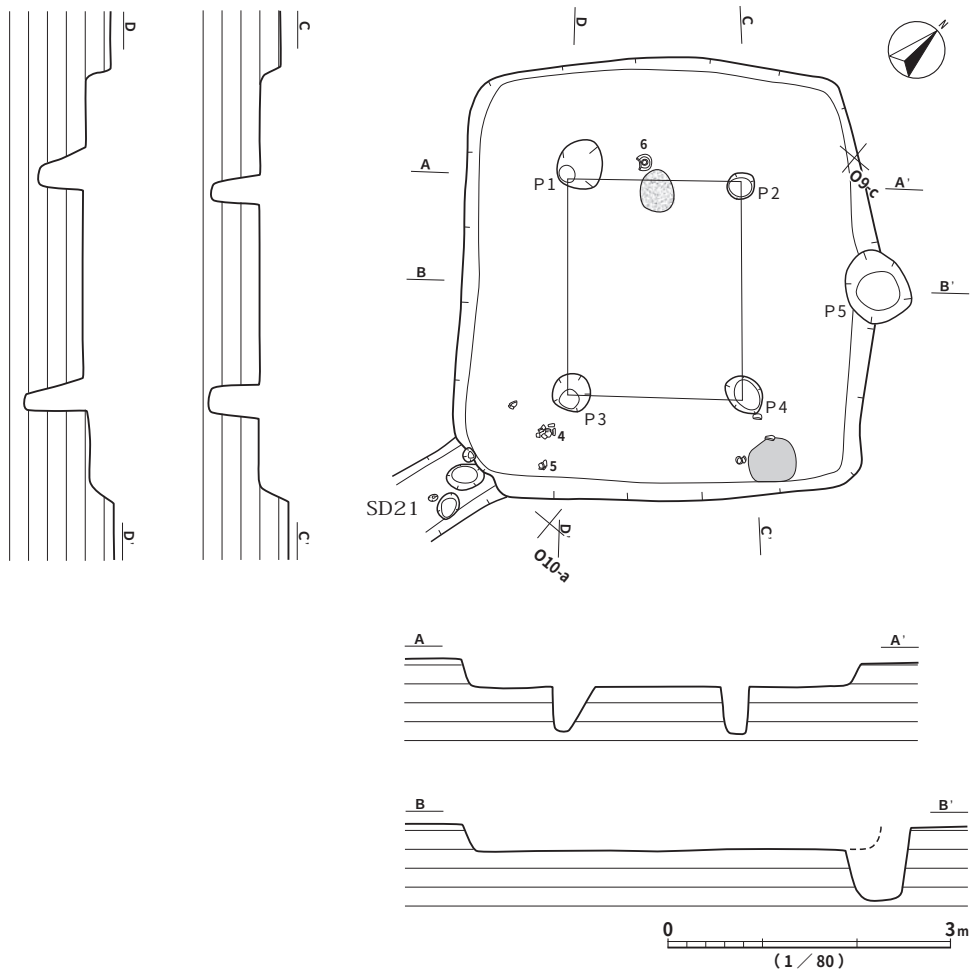
SI29 （Fig.59・60・186・195、PL.16・17・61・62・87・98・122・126）

SI29は、L14・M14区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

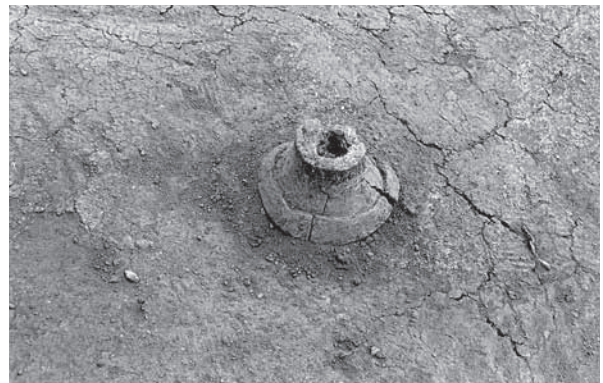
竪穴平面形態は隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は2.59m（主軸）×2.48m、確認面掘形面積は24.68㎡、確認面からの深さは0.57～0.72mを測る。主軸方位はN-23.0°-Wである。炉は、主軸線上からやや東に偏した位置である。主柱穴は検出されていない。P1は貯蔵穴である。深さは0.22mを測る。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量7,470.4gであり、このうち土器は4,800.8g、縄文土器をのぞく重さは4,097.1gであった。実測可能遺物は、1・5・13が甕形土器、2が小形台付甕形土器、3・4・6・14が壺形土器、7が小形壺形土器、8が椀形土器、9～11が高杯形土器、12が器台形土器である。土器以外では、他

SI28



ph.1 出土状況 4



ph.2 出土状況 6

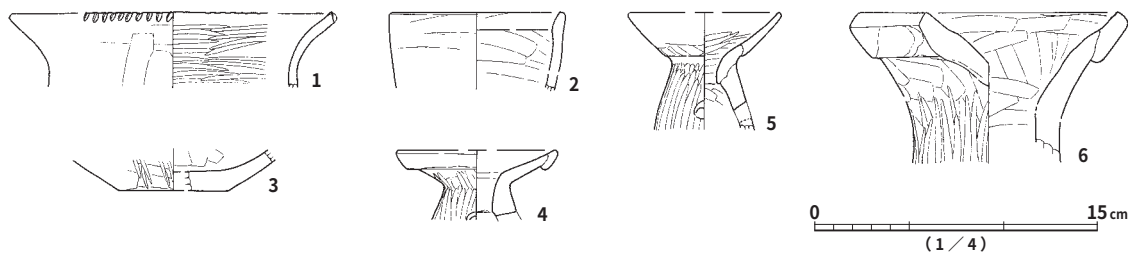


Fig.58 SI28 遺構遺物・調査状況

に磨石 (Fig.186-14・16・18)・打製石斧 (Fig.195-90) が出土している。出土位置は、6・8が床面、1・7・10が床面上3～5cmである。2は、P1脇覆土からの出土であるが、脚台部をのぞきほぼ完存する。

SI30 (Fig.60、PL.17・62・63・98・121)

SI30は、M13区に所在する。SD21と重複するが、本竪穴床面には達していない。新旧関係を判断する情報はないが、SD21が新しいと考えておく。

竪穴平面形態はやや不整の隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は3.42m(主軸)×3.75m、確認面掘形面積は11.27m²、確認面からの深さは0.07～0.25mを測る。主軸方位はN-10.0°-Wである。炉は、主軸線上北壁寄り1か所確認できる。Pitはいずれも浅く、支柱穴は検出されていない。P7は調査図面で漏れていたものを写真から描いた。位置、規模は正確ではない。深さは不明。壁溝は断続的に検出されている。

出土遺物は、総重量3,930.7gであり、このうち土器は3,902.0g、縄文土器をのぞく重さは3,902.0gであった。実測可能遺物は、1・2が台付甕形土器、3が高杯形土器、4・9が椀形土器、5・10が甕形土器、6が甗形土器、7・8が杯形土器である。このうち、4～9は鬼高式、10は宮ノ台式である。鬼高式がまとまって出土しているが、出土状況写真、調査メモなどにも記載がなく、疑問を残す。土器以外では、11の砥石が出土している。

SI31 (Fig.61・190、PL.17・98・124)

SI31は、M12・M13・N12区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は5.65m(主軸)×5.21m、確認面掘形面積は27.33m²、確認面からの深さは0.15～0.26mを測る。主軸方位はN-60.0°-Wである。炉は、主軸線上北西寄りに1か所確認できる。支柱穴は検出されていない。P2は出入口施設、P1は貯蔵穴である。深さは、P1・2とも0.11mと浅い。壁溝は、断続的に検出されている。北東隅部で焼土が、南西辺で炭化物が検出されており、火災に遭った可能性がある。焼土、炭化物ともほぼ床面上である。

出土遺物は、総重量1,301.8gであり、このうち土器は706.5g、縄文土器をのぞく重さは566.5gであった。実測可能遺物は、1・2が椀形土器である。1はほぼ床面上から出土している。土器以外では、他に敲石類 (Fig.190-58) が出土している。

SI32 (Fig.61-64・186、PL.17・63・64・87・98・99・122)

SI32は、M11・M12・N11区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はやや隅丸の方形を呈し、竪穴全体規模は4.29m(主軸)×4.20m、確認面掘形面積は17.70m²、確認面からの深さは0.54～0.63mを測る。主軸方位はN-22.0°-Wである。炉は、主軸線上からやや東に偏した位置にある。支柱穴は検出されていない。P1は貯蔵穴である。P2・3もその可能性がある。深さは、P1が0.30m、P2が0.53m、P3は0.10m程度と浅い。壁溝は、南西隅以外全周する。西辺部側で焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。

出土遺物は、総重量20,845.6gであり、このうち土器は18,517.0g、縄文土器をのぞく重さは16,161.5gであった。実測可能遺物は、1～10・15・17・61～67・69・76が壺形土器、11・12・16が小形壺形土器、13が広口壺形土器、14・28・29・31・32・34・36・45・72が椀形土器、18・19が台付甕形土器、20・22～26・68・70・71・73～75・77・78が甕形土器、21・27・41が小形甕形土器、30・33が小形鉢形土器、42～44・46～52・53・55が高杯形土器、56～58が器台形土器、59・60が

SI29

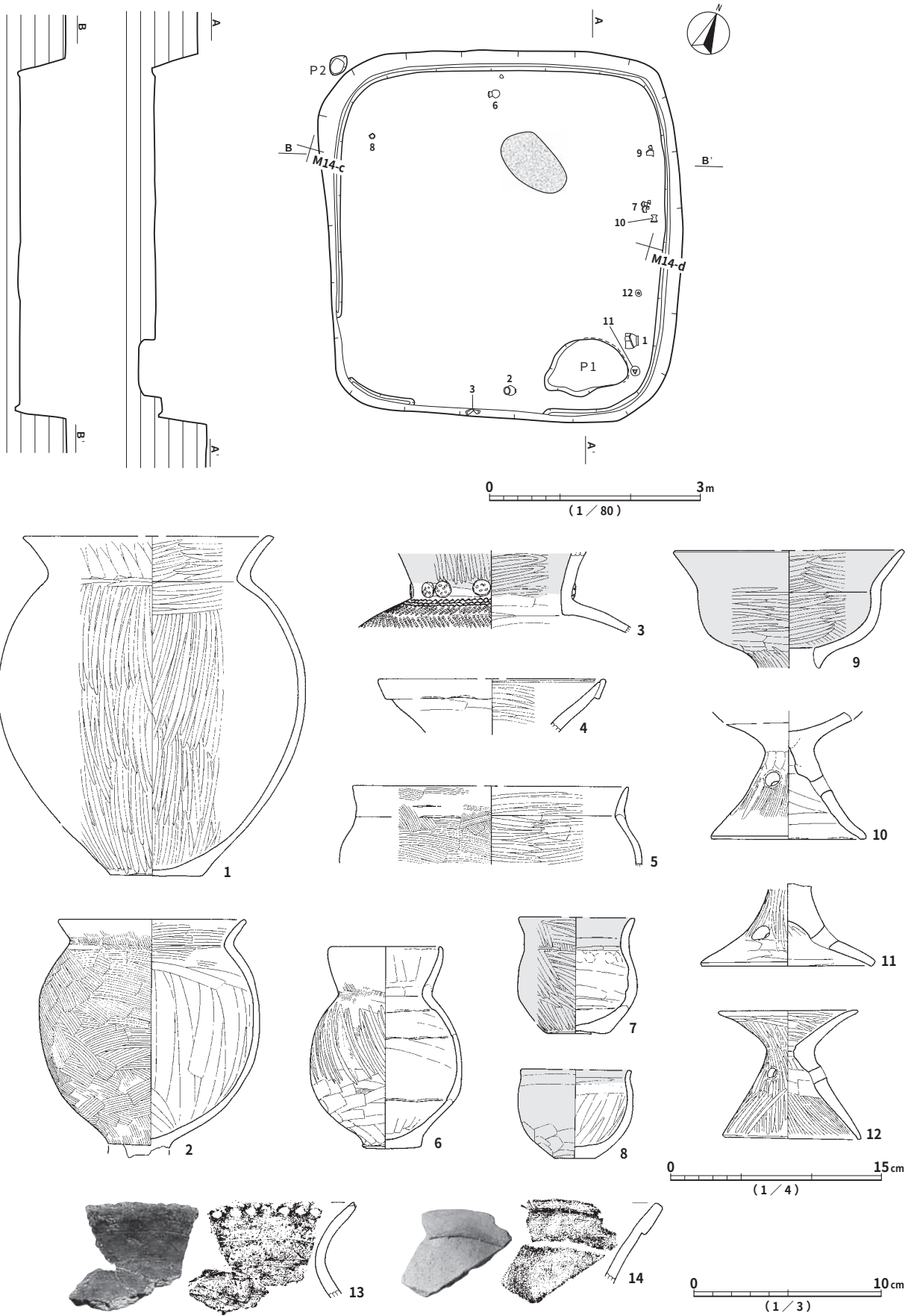


Fig.59 SI29(1) 遺構遺物



ph.1 出土状況 2



ph.2 出土状況 6

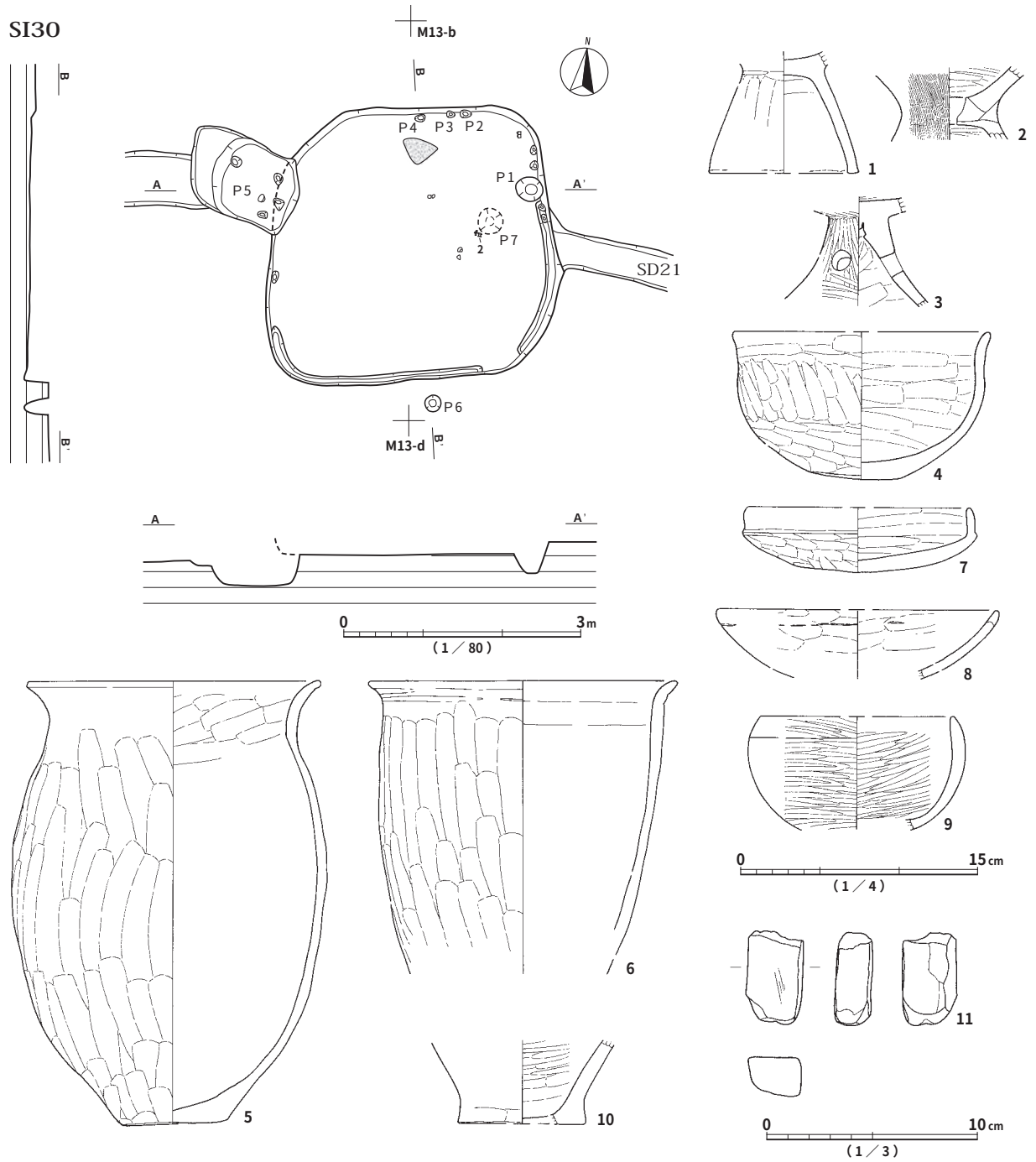
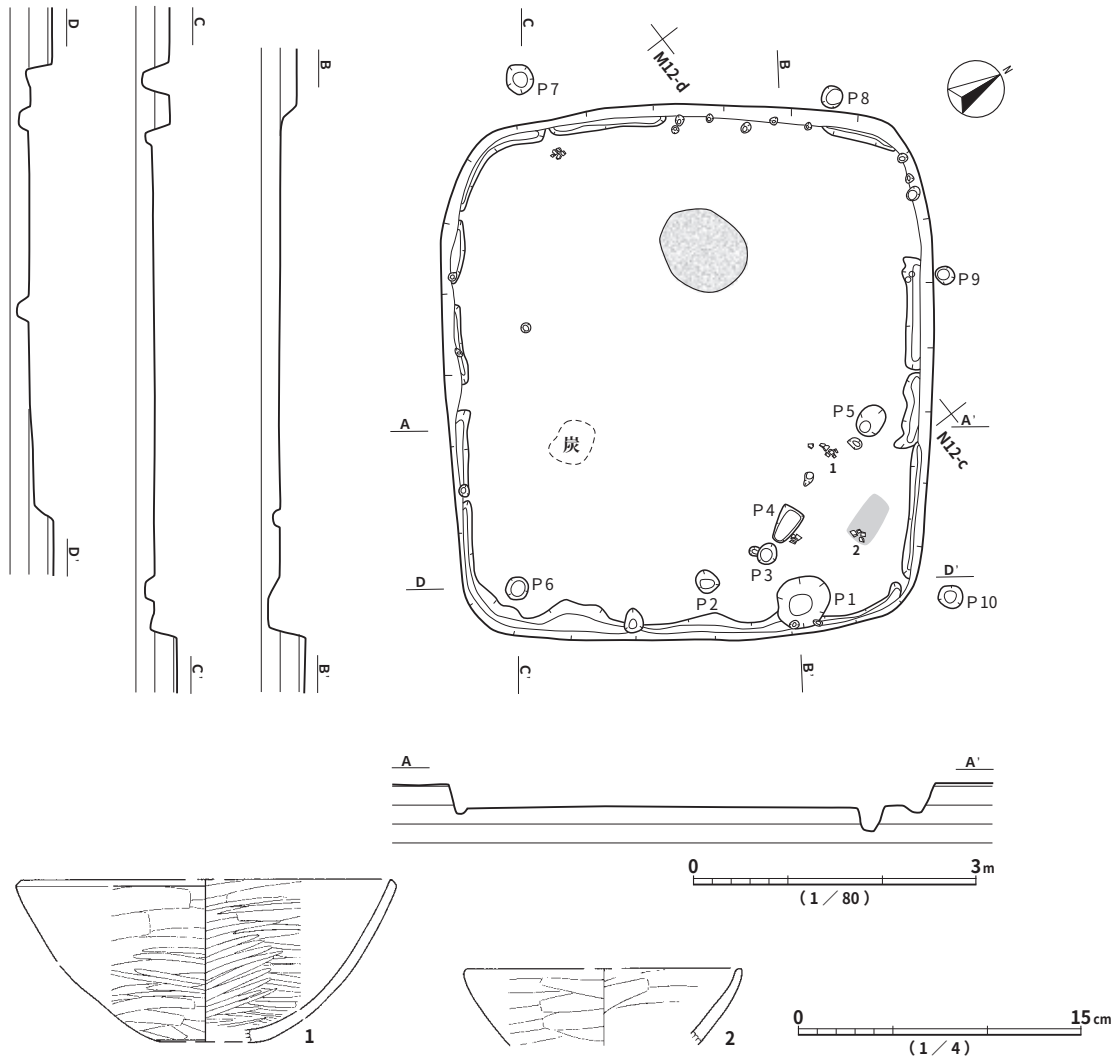


Fig.60 SI29(2) 調査状況、SI30 遺構遺物

SI31



SI32

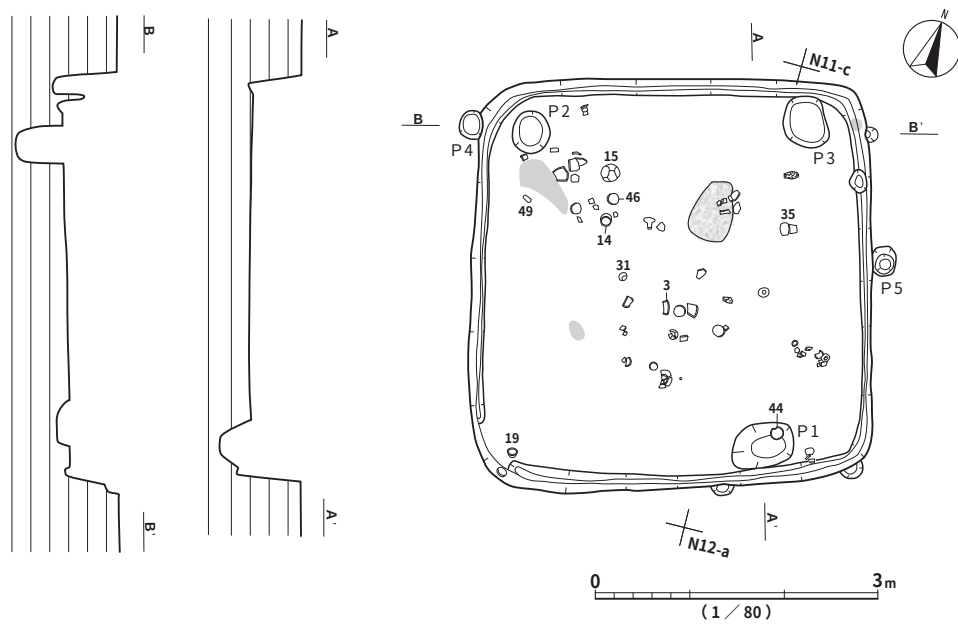


Fig.61 SI31 遺構遺物、SI32(1) 遺構



ph.1 出土状況



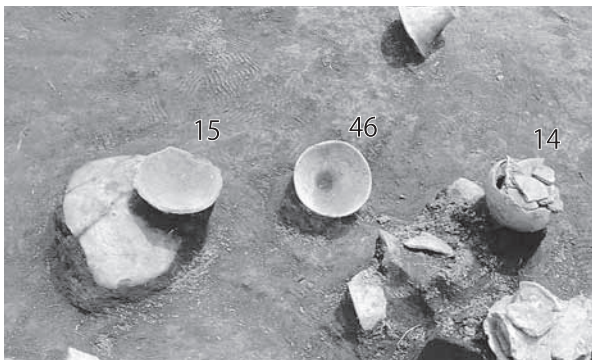
ph.2 出土状況



ph.3 出土状況 35



ph.4 出土状況 3・31



ph.5 出土状況 14・15・46



ph.6 出土状況 19

SI32

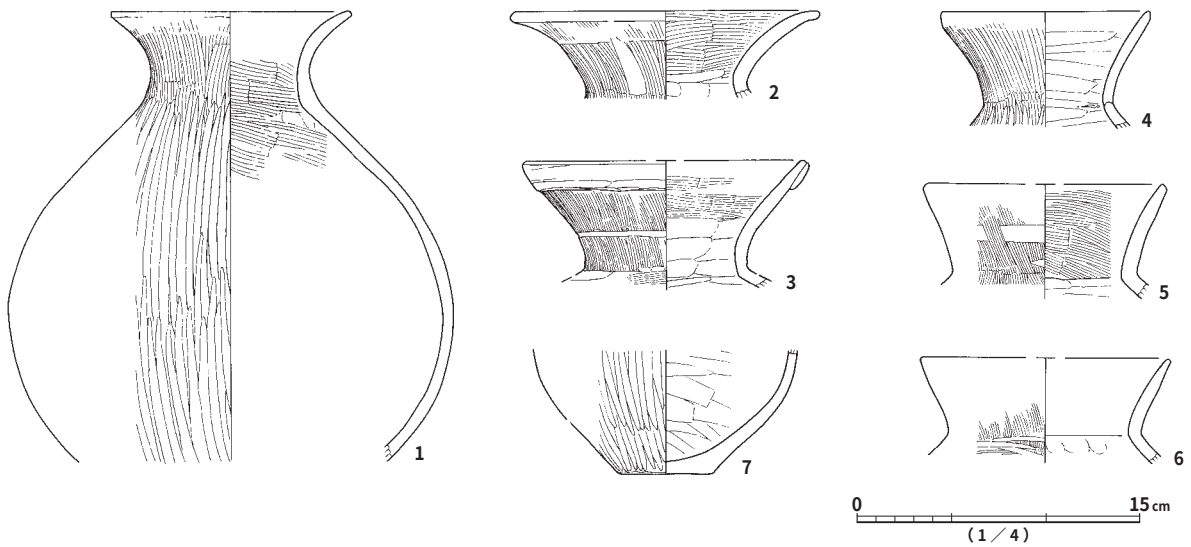


Fig.62 SI32(2) 遺物・調査状況

SI32

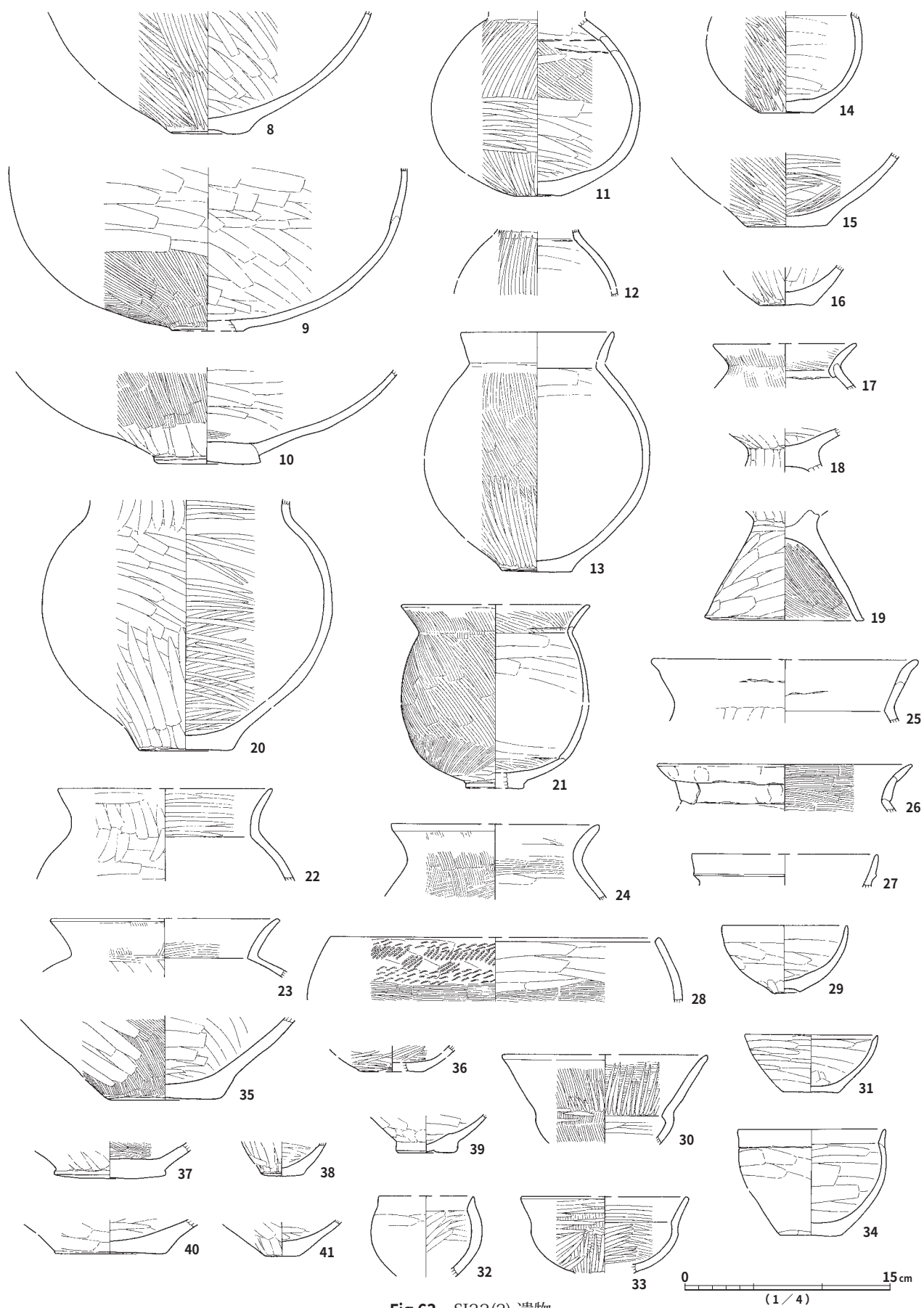


Fig.63 SI32(3) 遺物

SI32

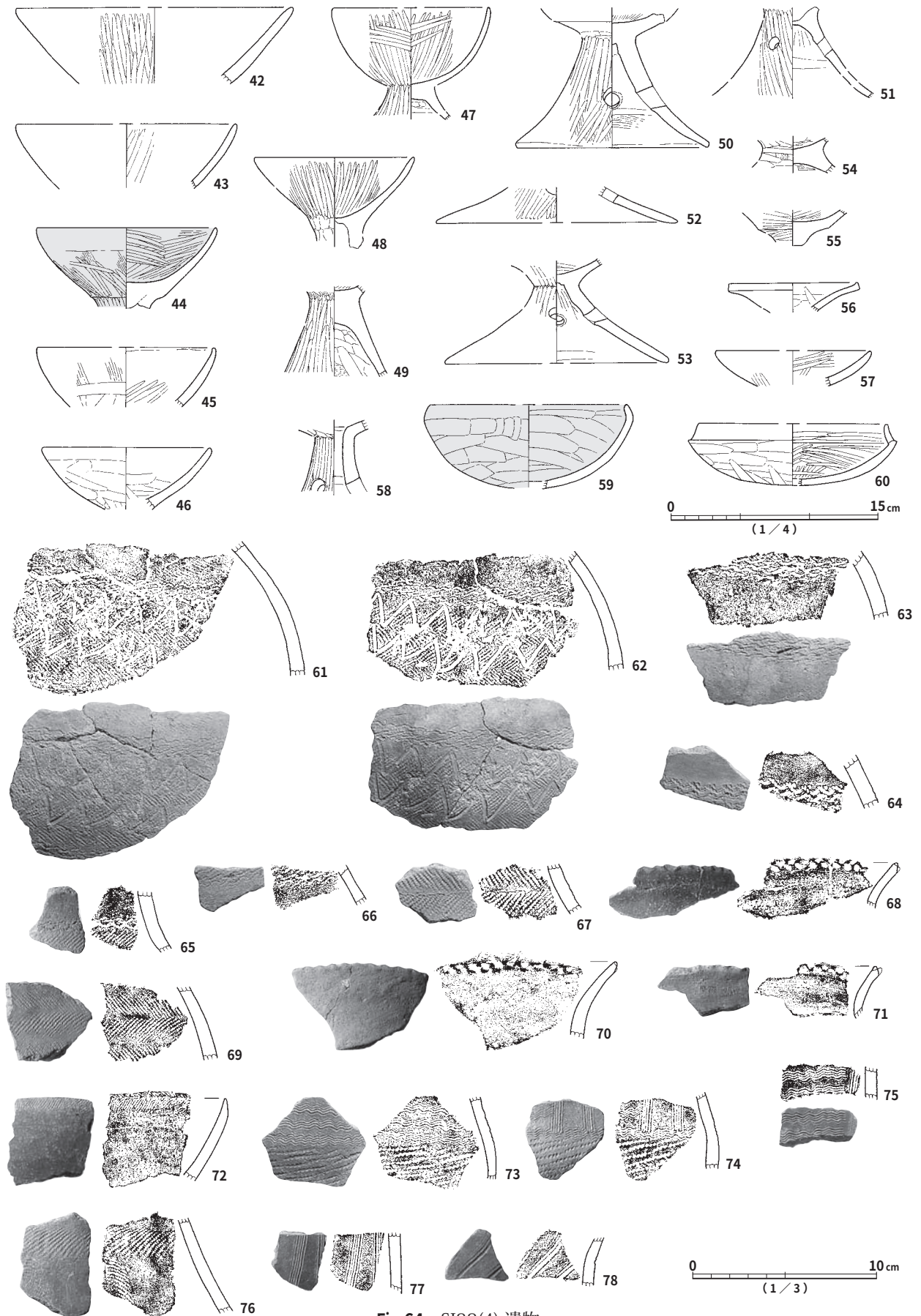


Fig.64 SI32(4) 遺物

杯形土器である。27・41は北陸系の可能性がある。74・75は縦区画充填波状文をもつ。

本竪穴は、多数の土器が残されていたが、遺物番号を記載した調査メモは錯綜し、結局写真で照合できたもの以外特定できなかった。出土位置は、46が床面、44がP1内、3・31が床面上4cm、14・15・19・35・49が床面上9～15cmである。土器以外では、他に磨石 (Fig.186-17・19) が出土している。非掲載資料には、穿孔貝巢穴痕跡泥岩の小破片がある。

SI33 (Fig.65～67・185・186、PL.17～19・64～66・88・99・121・122)

SI33は、N10・N11・O10区に所在する。SI34、SD21・22と重複する。SI34との新旧関係について、断面図などの記録は残されていない。ただし、両者の床面比高が13～20cm程度であり、SI34床面下にSI33の土器が保存されていたとは考えにくいことから、本竪穴が新しいと判断する。SD21・22については、さらに新しいと考えておく。

竪穴平面形態は隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は4.68m(主軸)×4.56m、確認面掘形面積は20.79m²、確認面からの深さは0.25～0.35mを測る。主軸方位はN-52.0°-Wである。炉は、主軸線上からやや東に偏した位置で確認されている。本竪穴は、ほぼ全面で焼土・炭化物の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。ただし、焼土下の図面、写真など記録一切がないため、主柱穴などの屋内施設は明らかではない。

出土遺物は、総重量19,303.5gであった。このうち土器は18,432.3g、縄文土器をのぞく重さは15,182.1gである。実測可能遺物は、1～8・15・24・27が壺形土器、9・10が広口壺形土器、11～13・20～22が甕形土器、14・16・17が椀形土器、18・19が炉器台(支脚)形土器、23が台付甕形土器、25・26が高杯形土器、28が砂岩製の砥石である。他に磨石 (Fig.185-5、186-20) が出土している。

炉北側には、炉器台3基が置かれていた (Fig.65-ph.4)。図面では炉範囲から外れるが、おそらく原位置をとどめていると考える。ただし、18・19の他1点の所在は不明。他に、竪穴中央部出土の壺形土器 (PL.18) も所在が明らかではない。竪穴中央部から東隅側には、壺形土器口縁部 (1～3) を逆位に据え、これを器台とし、小形甕形土器 (21・22) と椀形土器 (14) を供えていたとみられる例がある (Fig.65-ph.1・3)。また、東隅には、甕形土器 (11・20・23) と広口壺形土器 (10) がまとまっていた (Fig.65-ph.2)。出土位置は、1・2・10・14・18・19・22が床面、3・21が床面上5cm、11・20・23は床面上8cmであった。

SI34 (Fig.65・67・68、PL.19・66・99・140)

SI34は、N10・N11・O10・O11区に所在する。SI33、SD21・22と重複する。SI34との新旧関係は、SI33の項で記したとおり本竪穴が古く、SI33によって竪穴中央部から東側が破壊されたと推定する。

竪穴平面形態は隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は推定で4.20m(主軸)×4.55m、確認面掘形面積は推定で18.35m²、確認面からの深さは0.10～0.17mを測る。北西-南東を主軸とした場合の方位は、N-53.0°-Wである。炉・主柱穴などの屋内施設はまったく検出されていない。焼土ブロックが1か所みられるが、火災に遭ったかどうかは明らかではない。

出土遺物は、総重量4,364.5gであり、このうち土器は4,353.7g、縄文土器をのぞく重さは3,938.7gであった。実測可能遺物は、1・8～15・19が壺形土器、2・4～6が杯形土器、3・16～18・20～25が甕形土器、26が鉢形土器、土器以外では7が銅環である。出土土器は、弥生時代中期宮ノ台式と古

SI33・SI34

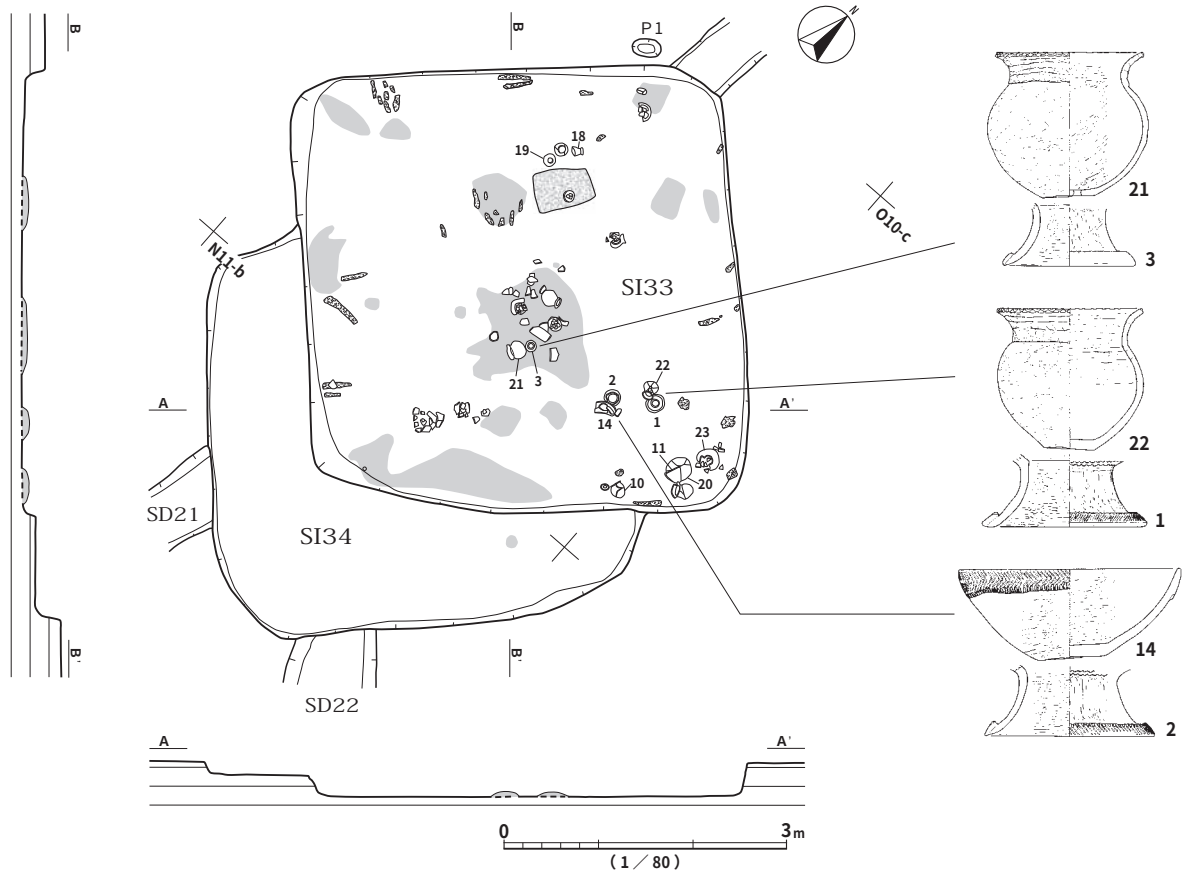


Fig.65 SI33(1) 遺構・調査状況、SI34(1) 遺構

SI33

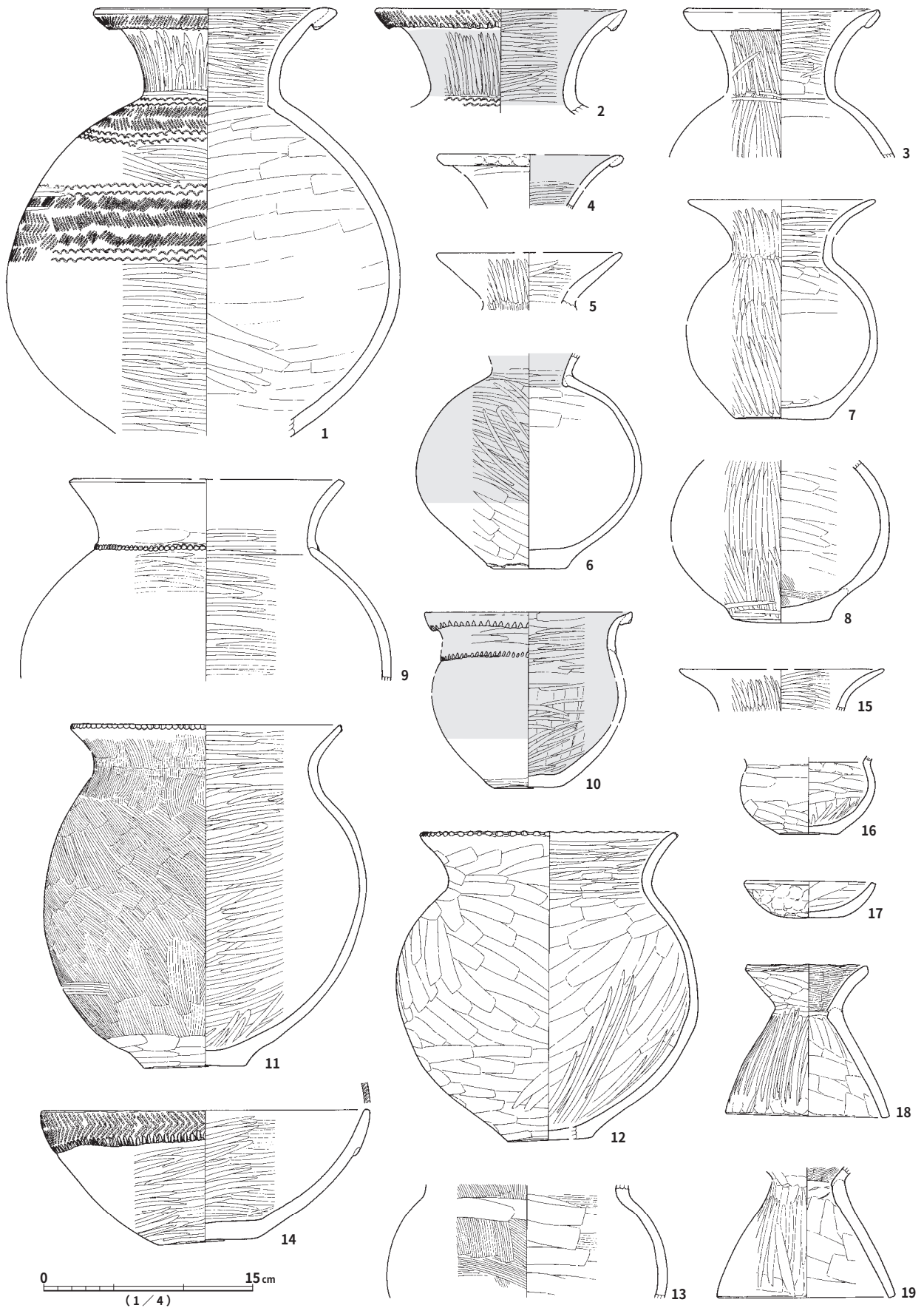
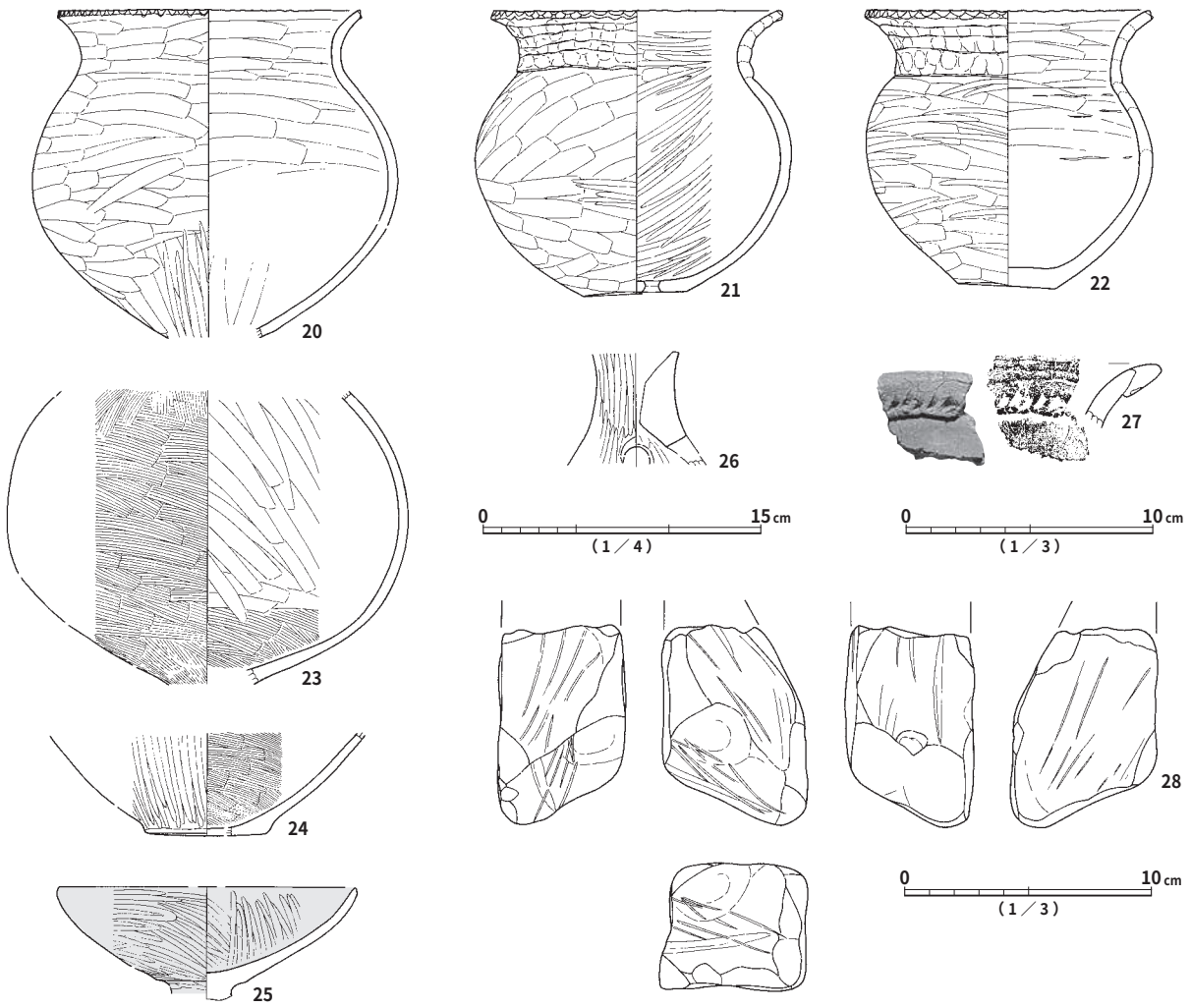


Fig.66 SI33(2) 遺物

SI33



SI34

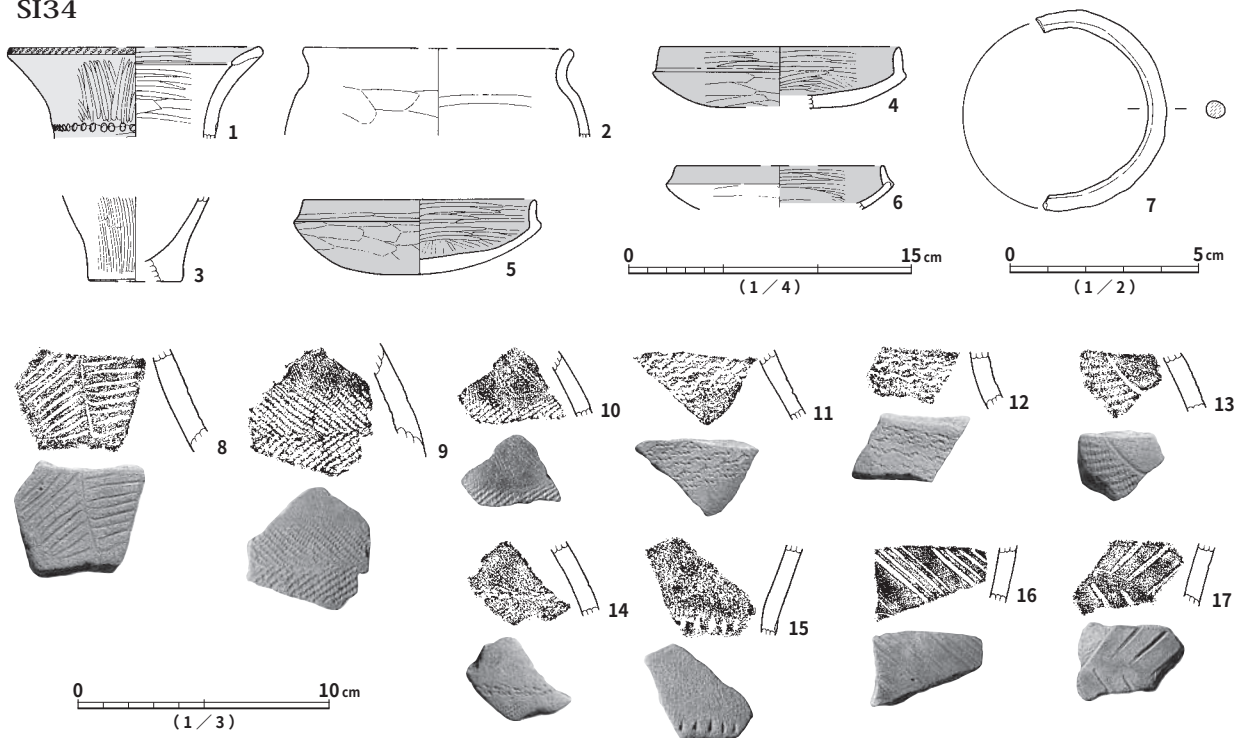
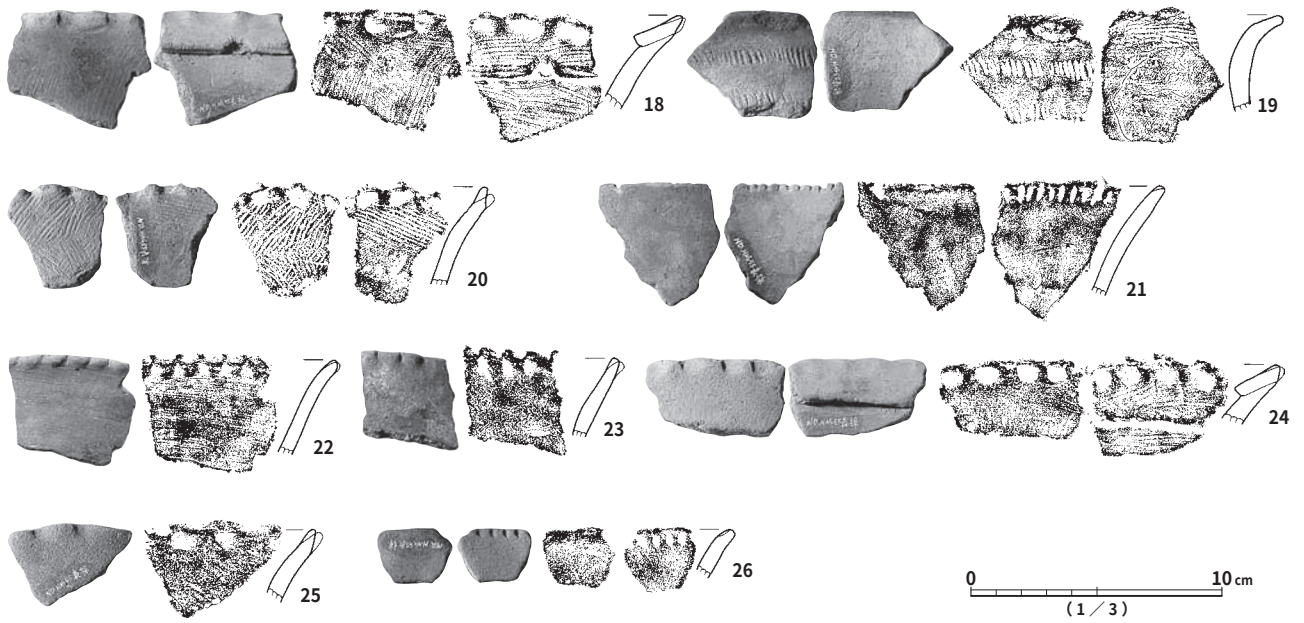


Fig.67 SI33(3) 遺物、SI34(2) 遺物

SI34



SI35

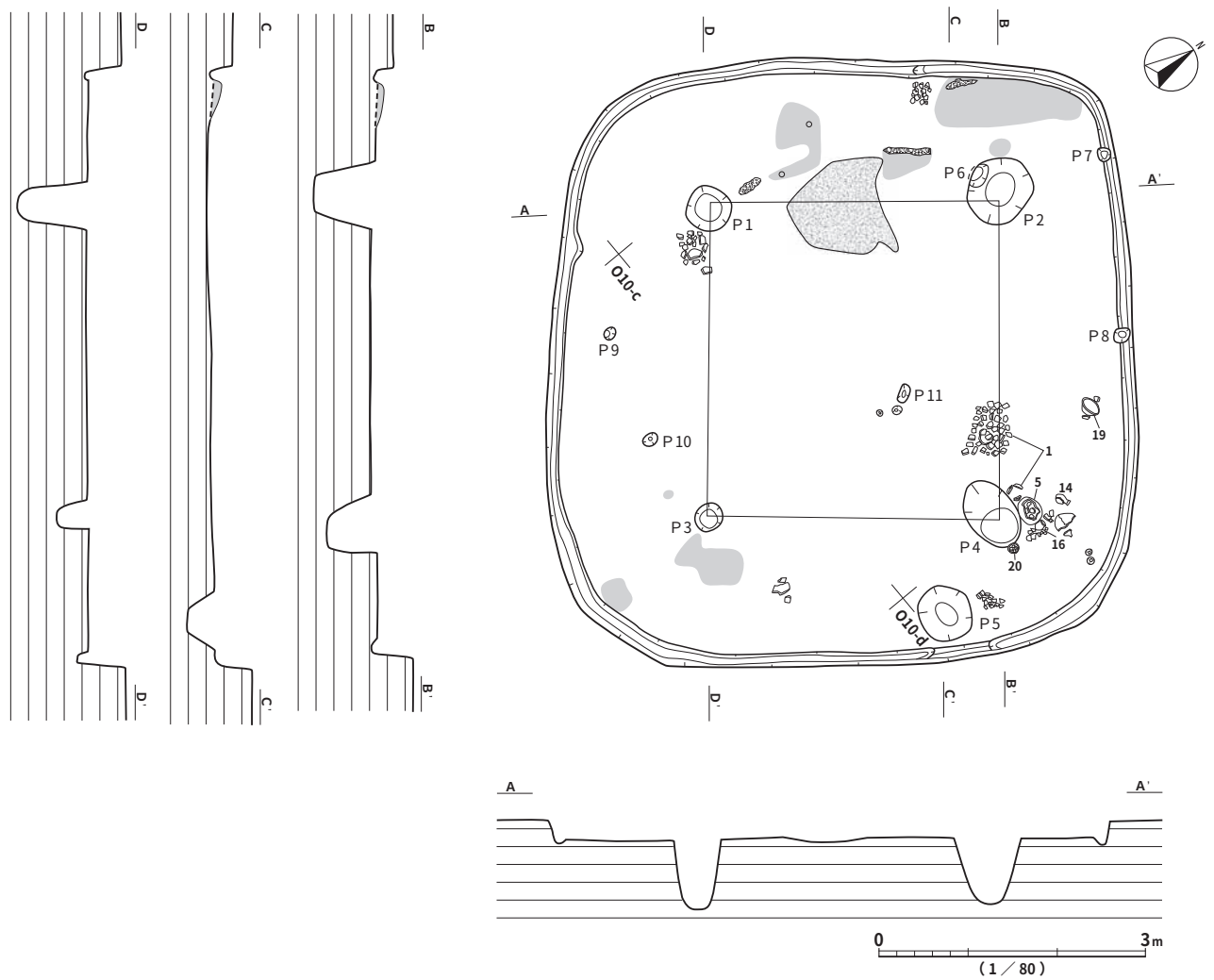
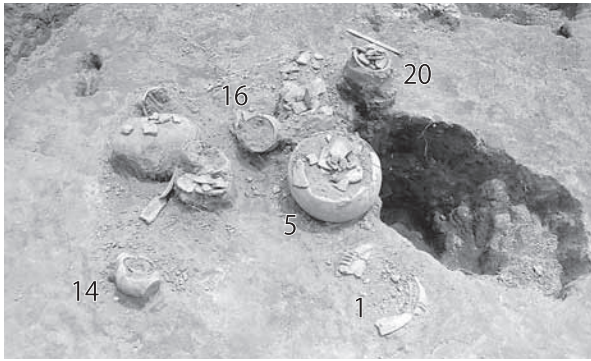
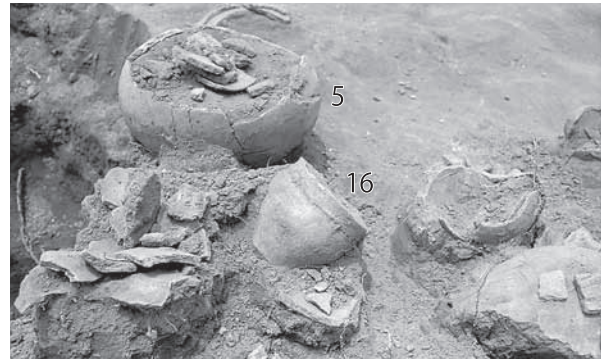


Fig.68 SI34(3) 遺物、SI35(1) 遺構



ph.1 出土状況 1・5・14・16・20



ph.2 出土状況 5・16



ph.3 出土状況 19



ph.4 出土状況 不明玉類

SI35

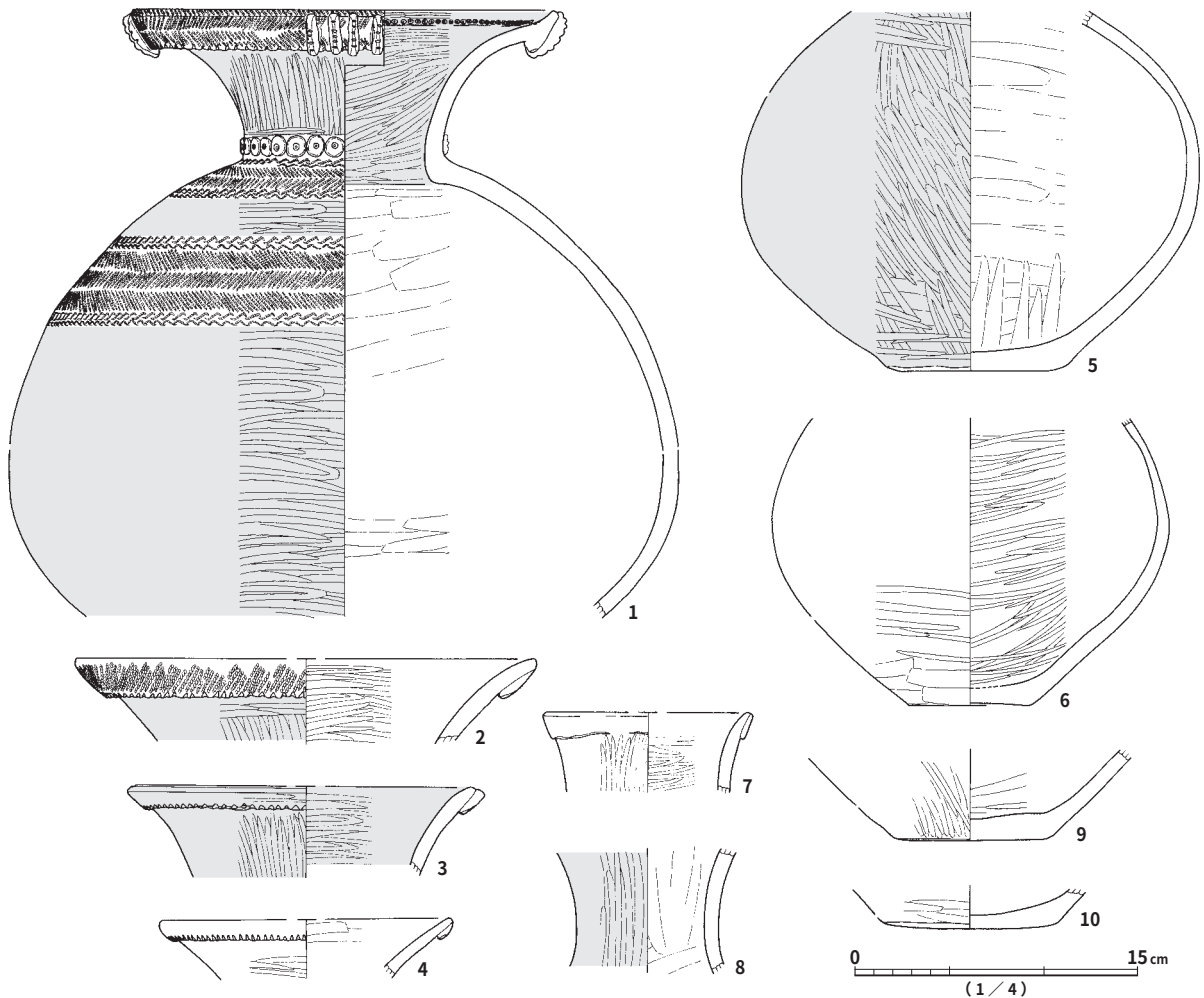


Fig.69 SI35(2) 遺物・調査状況

SI35

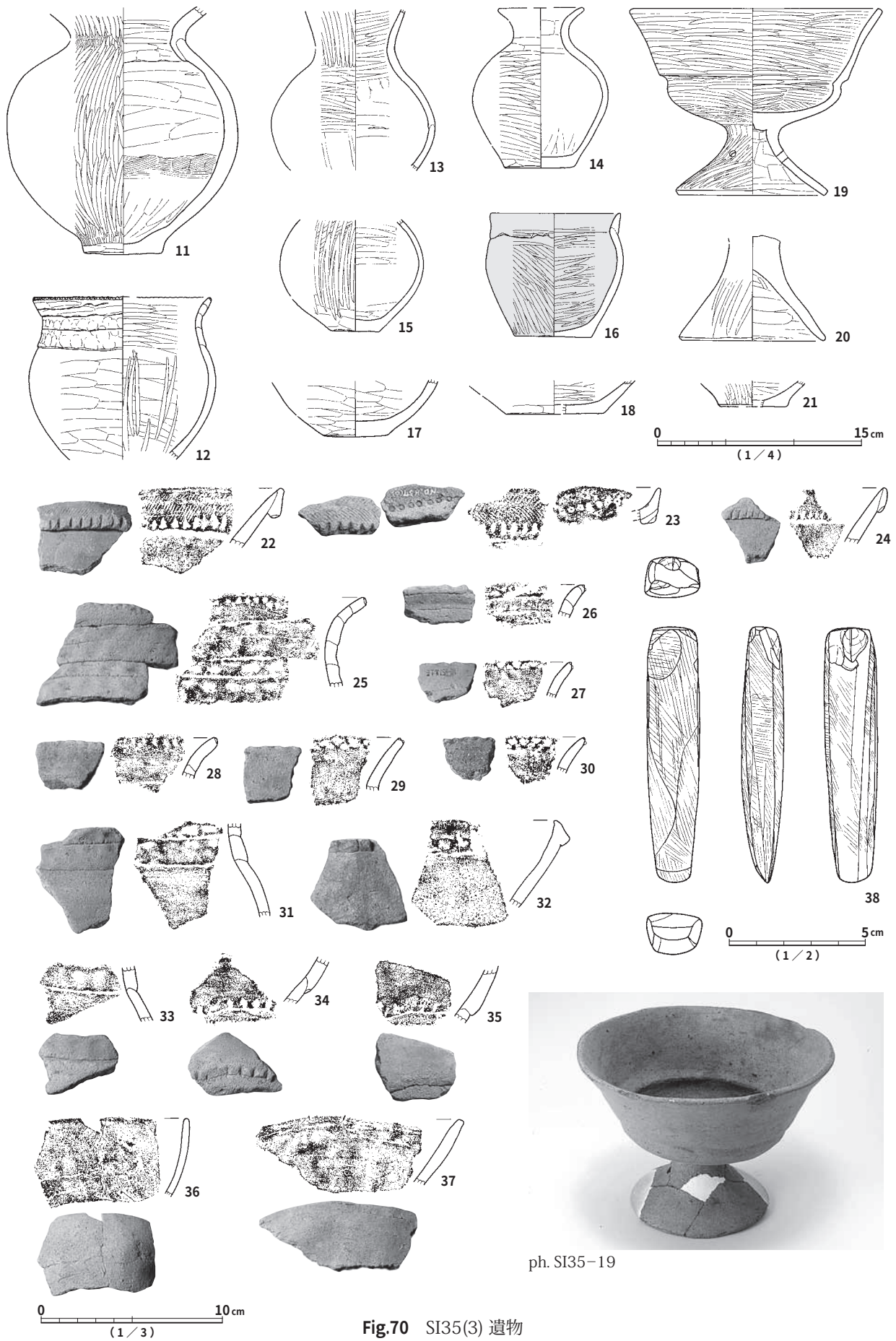


Fig.70 SI35(3) 遺物

墳時代終末期に大別されるが、竪穴形態から、ここでは弥生時代終末期から古墳時代前期初頭と考えておきたい。ただし、積極的な根拠はない。

SI35 (Fig.68~70・186・190・193、PL.19・66・67・88・89・99・121・122・124・125)

SI35は、N10・O10区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。弥生時代以降では、本遺跡で2番目に大きな竪穴建物である。

竪穴平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は6.78m(主軸)×6.56m、確認面掘形面積は41.00㎡、確認面からの深さは0.12~0.43mを測る。主軸方位はN-49.0°-Wである。炉は、主軸線上西壁寄りですく1か所確認できる。P1~4は主柱穴であり、主柱穴の柱間は3.52m(主軸)×3.25mを測る。深さは、P1が0.80m、P2が0.73m、P4が0.54mであるが、P3は0.36m程度と浅く不確実である。P5は貯蔵穴であり、深さは0.32mを測る。壁溝はほぼ全周する。西辺部壁際を中心として焼土が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

出土遺物は、総重量25,818.7gであり、このうち土器は23,711.0g、縄文土器をのぞく重さは12,572.7gであった。実測可能遺物は、1~9・11・22~24が壺形土器、12が小形甕形土器、13~15が小形壺形土器、16・32・36が椀形土器、19・20・37が高杯形土器、25~31・33が甕形土器、34・35が広口壺形土器である。19は北陸系である。土器以外では、38が柱状片刃のノミ状磨製石斧、他に磨石(Fig.186-22)・敲石(Fig.190-59)・石皿(Fig.193-81)が出土している。磨製石斧も宮ノ台式期の所産と思われるが、ここで掲載しておく。出土状況の写真はあるが、接写のため出土位置は不明。注記には「表採」とある。土器は、おもに竪穴東隅周辺から出土している。1・14・16・19が床面、5が床面上5cm、20が床面上11cmである。調査写真には、勾玉と思われるものもあるが(Fig.69-ph.4)、現物は確認できない。

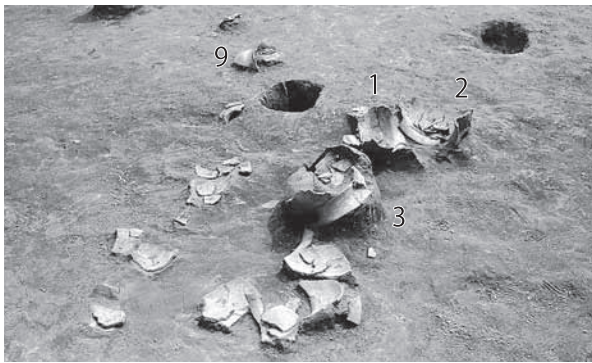
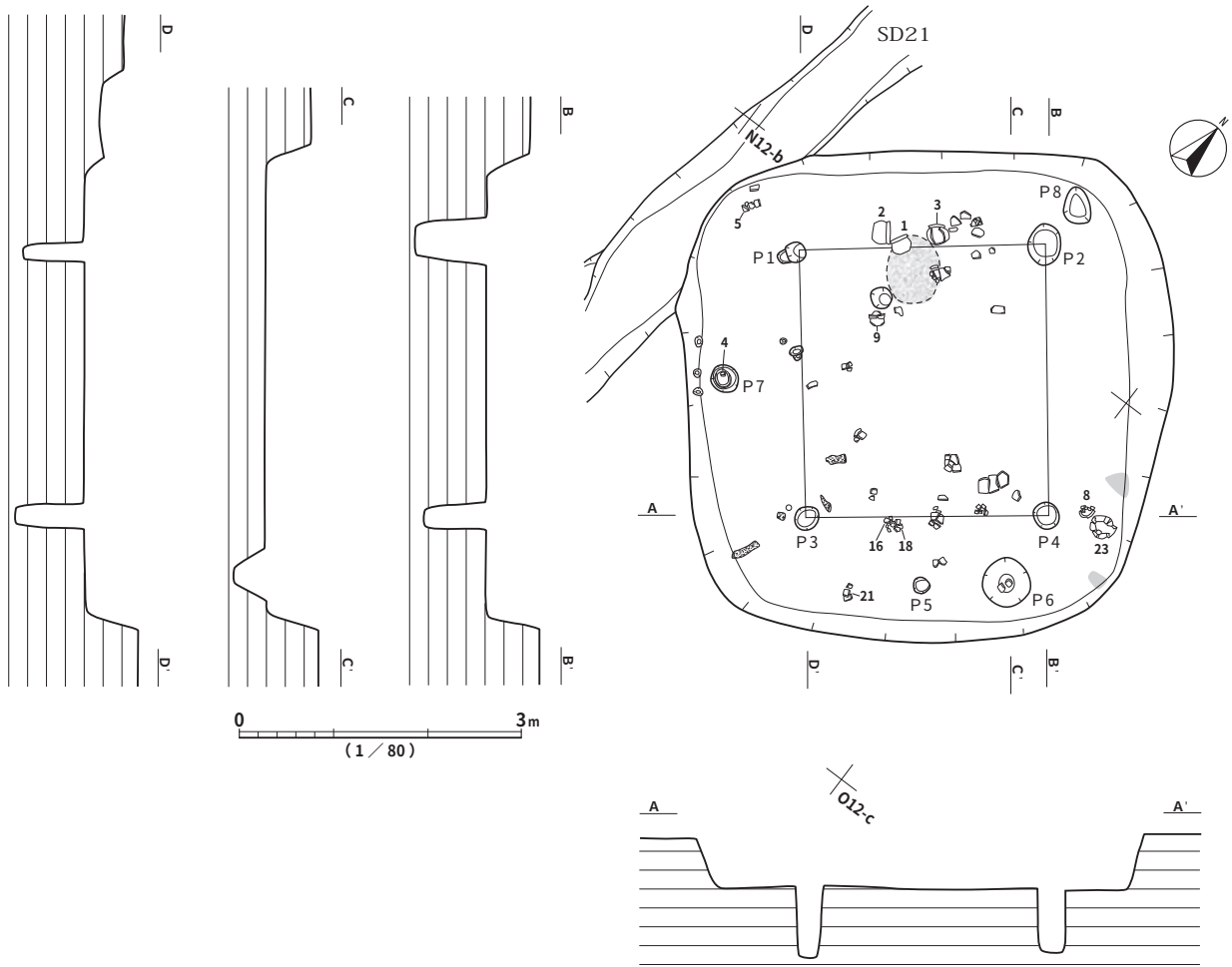
SI36 (Fig.71~73・190、PL.19・20・67~69・89・99・124)

SI36は、N11・N12・O11・O12区に所在する。SD21と重複するが、本竪穴床面には達していない。新旧関係を判断する情報はないが、SD21が新しいと考えておく。竪穴との重複はない。

竪穴平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は5.17m(主軸)×5.13m、確認面掘形面積は23.82㎡、確認面からの深さは0.43~0.59mを測る。主軸方位はN-45.0°-Wである。炉は、調査図面に図示されていないが、調査写真(PL.20)によると、主軸線上やや北西側に落ち込みがあり、これを炉と判断して略記した。P1~4は主柱穴であり、主柱穴の柱間は2.85m(主軸)×2.59mを測る。深さは0.65~0.75mである。P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。深さは、P5が0.18m、P6が0.33m程度である。P7内には、4の口縁部が埋置されていた。壁溝は検出されていない。東隅部に焼土、南隅部を中心として炭化物が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

出土遺物は、総重量15,211.6gであり、このうち土器は14,380.3g、縄文土器をのぞく重さは13,992.8gであった。実測可能遺物は、1~11・22・25・30・31・33が甕形土器、12・21・23・32・34・35が壺形土器、13が小形壺形土器、14・15・29が高杯形土器、17・18・20が椀形土器、24が甕形土器、26・27が杯形土器、28が小形甕形土器である。21の胴部には、蕨手状の線刻画がある。焼成前に描かれている。24~29は鬼高式である。土器以外では、他に敲石(Fig.190-53)が出土している。出土位置は、1~3・8・23が床面であり、炉周辺と東隅部にまとまっていた。また、4はP7内に埋置されていた。5は床面上4cm、21は10cmであった。

SI36



ph.1 出土状況 1・2・3・9



ph.2 出土状況 4



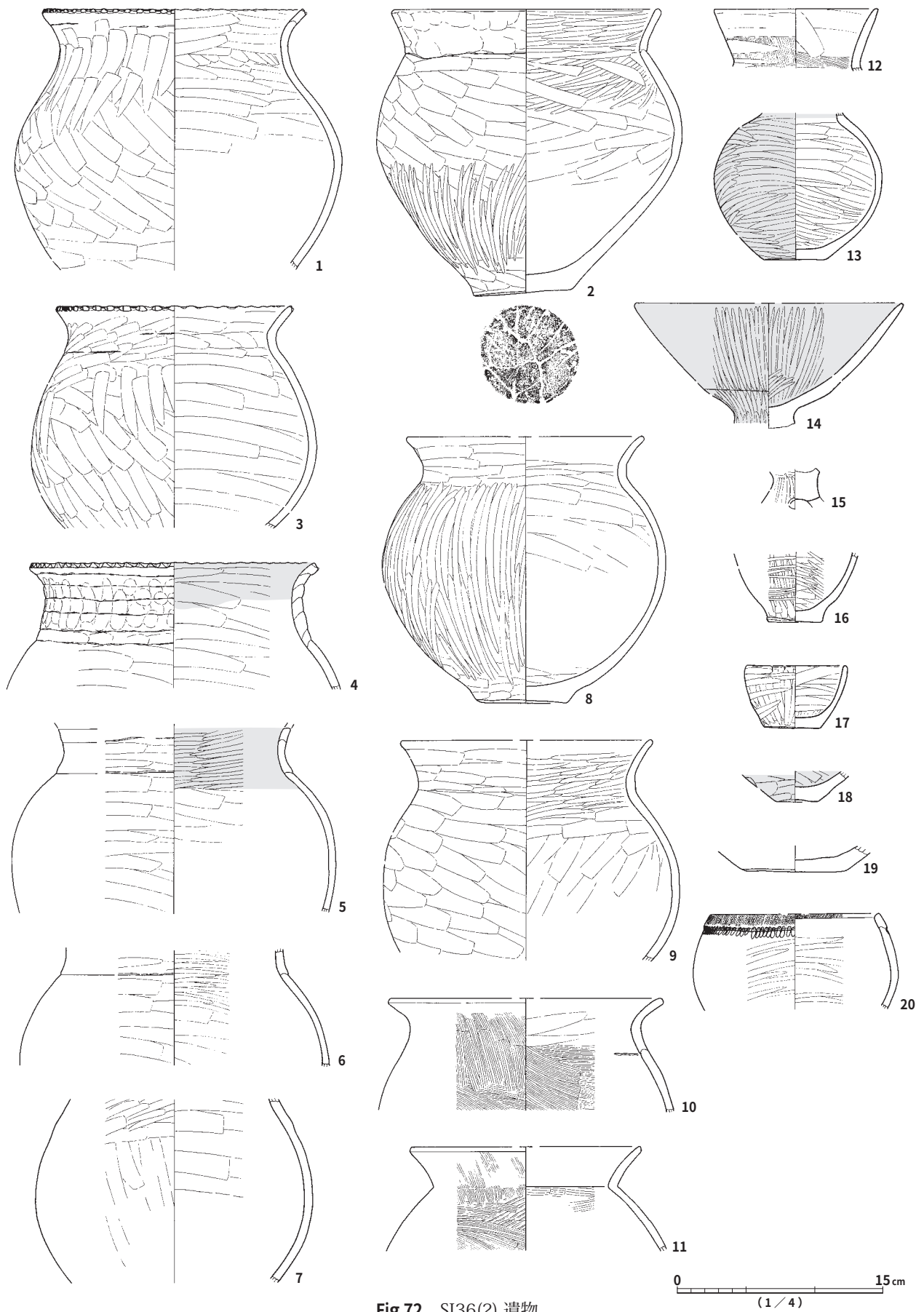
ph.3 出土状況 8・23



ph.4 出土状況 8・23

Fig.71 SI36(1) 遺構・調査状況

SI36



SI36

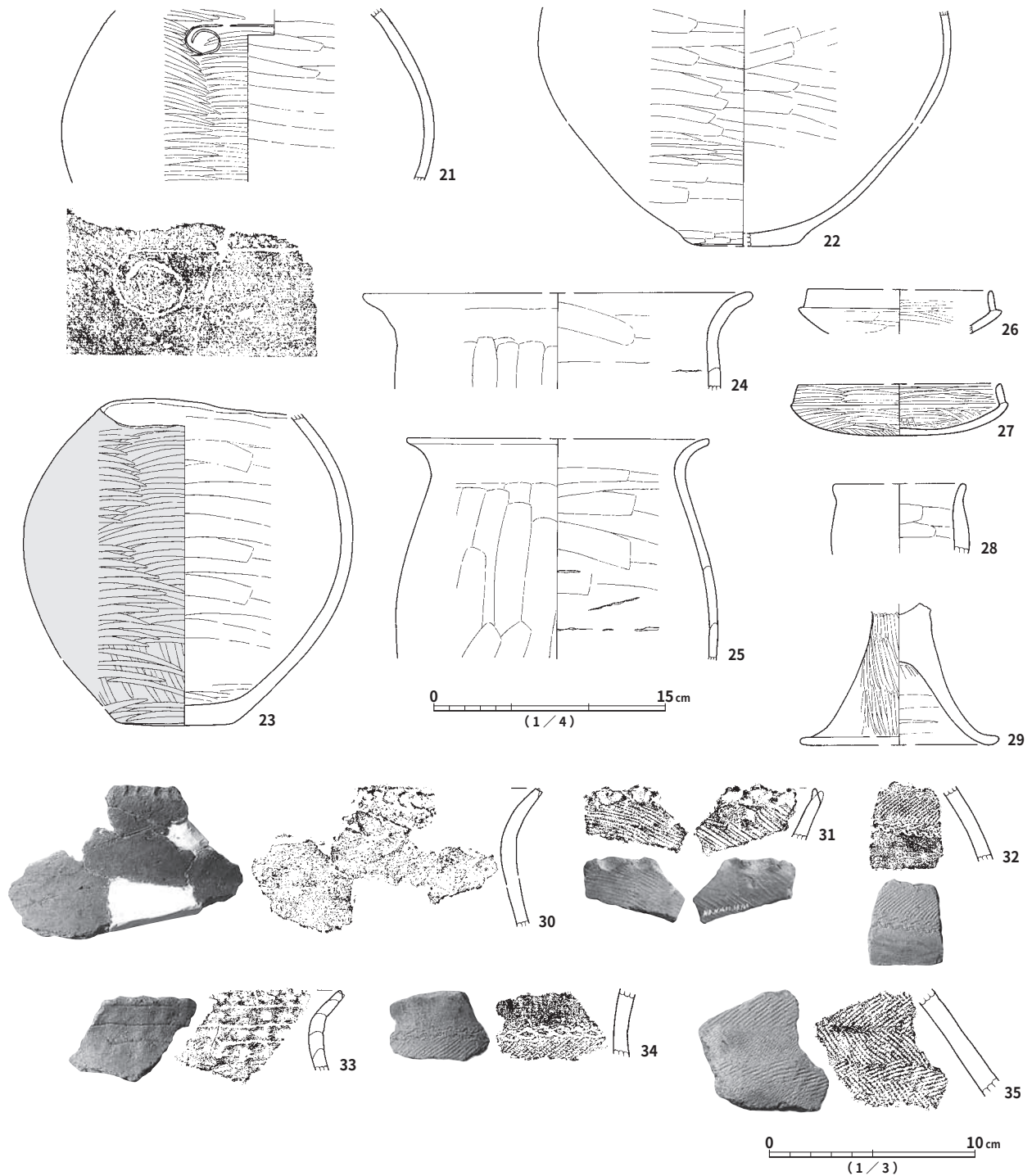


Fig.73 SI36(3) 遺物

SI37 (Fig.74、PL.20・100)

SI37は、M14・N14区に所在する。竪穴東側でSI38と重複するが、新旧関係を判断するための情報がない。床面は、14～17cmほど本竪穴が深い。

竪穴平面形態は隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は5.35m(長軸)×2.69m、確認面掘形面積は13.45m²、確認面からの深さは0.24～0.31m程度を測る。長軸方位は、N-7.0°-Eである。壁溝は全

周するが、それ以外の屋内施設は検出されていない。調査メモによれば、床は堅く踏み込まれていたようである。建物跡と考えるが、その機能・役割を推定する情報が乏しい。

出土遺物は、総重量263.1gで、すべて土器である。縄文土器をのぞく重さは149.1gであった。実測可能遺物は、1・2・3が高杯形土器である。本竪穴の時期は、一応出土遺物を根拠としておく。

SI38 (Fig.74、PL.20・100)

SI38は、N14区に所在する。竪穴西側でSI37と重複し、西辺部が破壊されている。竪穴内方形土坑は、近年の芋穴である。

竪穴平面形態は不整形であるが、隅丸方形の可能性もある。竪穴全体規模は遺存部で3.40m、確認面からの深さは0.10～0.23mを測る。炉・支柱穴などの屋内施設はまったく検出されていない。北辺部壁際に焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

出土遺物は、総重量283.0gで、すべて土器である。縄文土器をのぞく重さは73.0gであった。実測可能遺物は、1が小形壺形土器である。本竪穴の時期は、一応出土遺物を根拠としておく。

SI39 (Fig.74～76、PL.20・21・69～71・89・90・100)

SI39は、N13・N14区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。竪穴内、炉南側の落ち込みは攪乱であろう。

竪穴平面形態は胴張りの隅丸横長方形を呈し、竪穴全体規模は4.83m(主軸)×5.31m、確認面掘形面積は22.55㎡、確認面からの深さは0.18～0.30mを測る。主軸方位はN-64.0°-Wである。炉は、主軸線上西寄りですく1か所確認できる。支柱穴は検出されていない。P1は貯蔵穴である。深さは0.25mである。壁溝はほぼ全周する。北辺部壁際を中心として焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

出土遺物は、総重量19,844.2gであり、このうち土器は19,521.2g、縄文土器をのぞく重さは18,488.6gであった。実測可能遺物は、1が広口壺形土器、2～9・11が壺形土器、12・13・20が甕形土器、14が小形甕形土器、15・16が台付甕形土器、17～19が高杯形土器である。出土位置の判明している1～3・7・9・11～13・15・16・18・19は、すべて床面から出土している。遺存遺物であろう。なお、甕形と思われる土器1点の所在が明らかではない(Fig.75-ph.1右手前)。

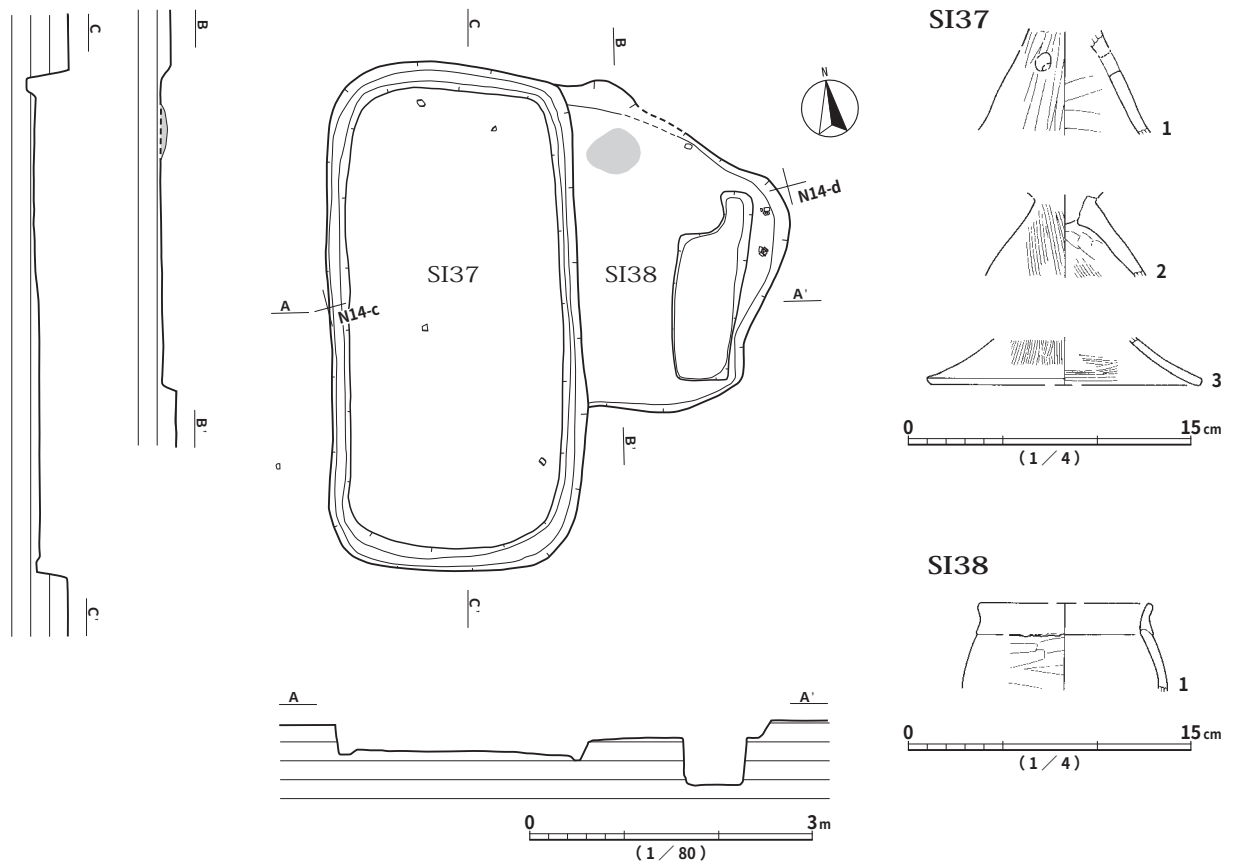
SI40 (Fig.77・199、PL.21・71・90・100・128)

SI40は、N13・O13区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はやや隅丸の方形を呈し、竪穴全体規模は3.98m(主軸)×3.85m、確認面掘形面積は14.18㎡、確認面からの深さは0.23～0.32mを測る。主軸方位はN-42.0°-Wである。炉は、調査図面に記載がない。調査写真でも明確ではない。支柱穴は検出されていない。P1は出入口施設か。壁溝は北西辺一部で検出されている。

出土遺物は、総重量6,029.3gであり、このうち土器は5,866.9g、縄文土器をのぞく重さは4,234.6gであった。実測可能遺物は、1～4・18～20・22・23が甕形土器、5・6が台付甕形土器、7が小形壺形土器、8・9が小形甕形土器、12・13が高杯形土器、10・11が器台形土器、14が壺形土器、17が椀形土器である。このうち、19～23は宮ノ台式である。土器以外では、他に石剣(Fig.199-125)が出土している。破片資料が多く、出土位置が特定できたのは14のみであった。竪穴中央部の台付甕形土器脚台部は(Fig.77-ph.1手前)、現物が確認できない。

SI37・SI38



SI39

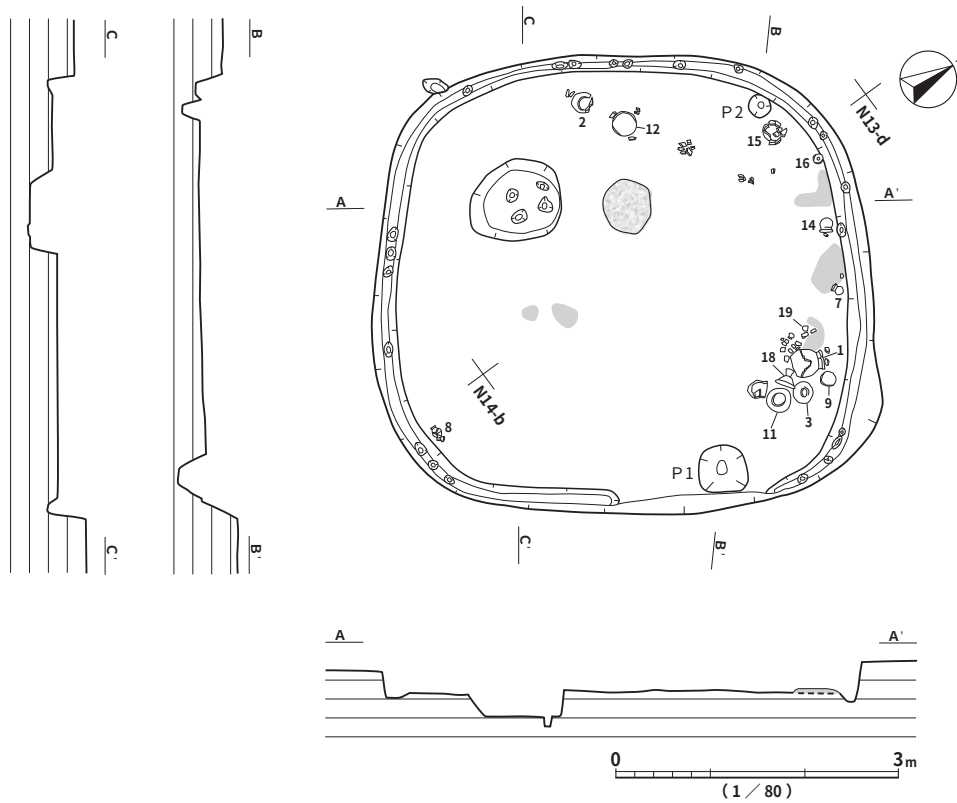
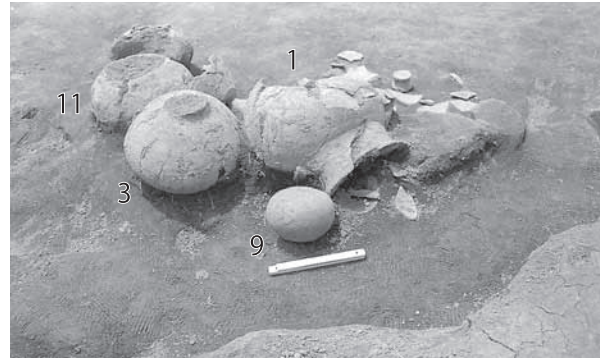


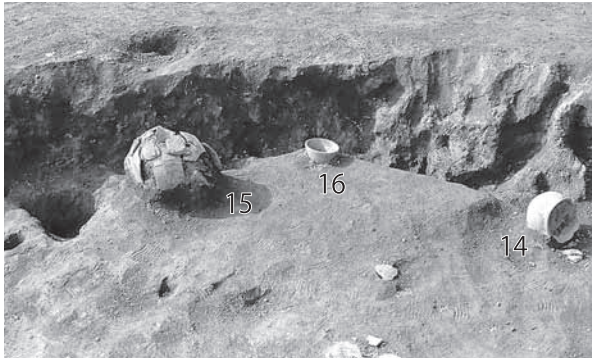
Fig.74 SI37 遺構遺物、SI38 遺構遺物、SI39(1) 遺構



ph.1 出土状況 1・3・11・18



ph.2 出土状況 1・3・9・11



ph.3 出土状況 14・15・16



ph.4 出土状況 7

SI39

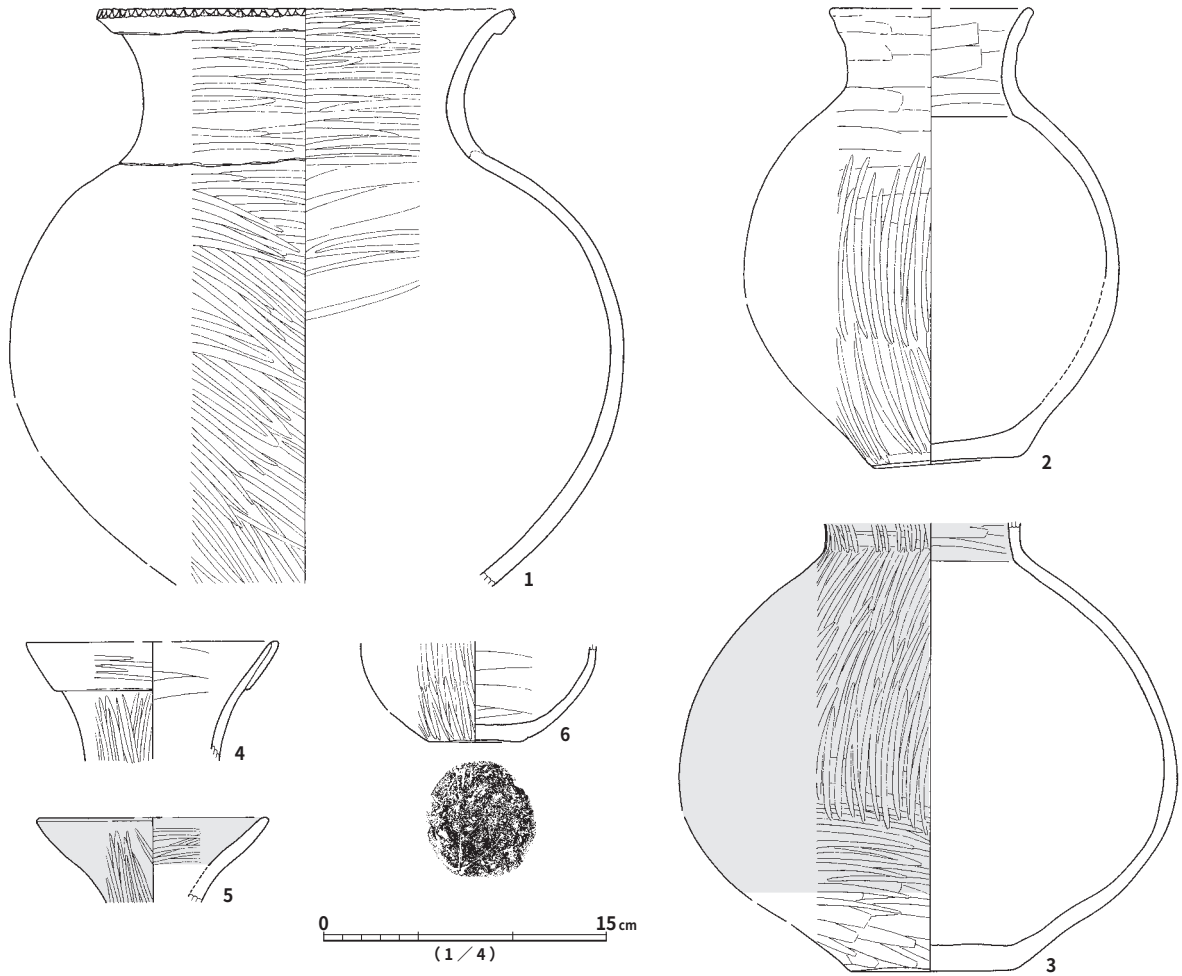


Fig.75 SI39(2) 遺物・調査状況

SI39

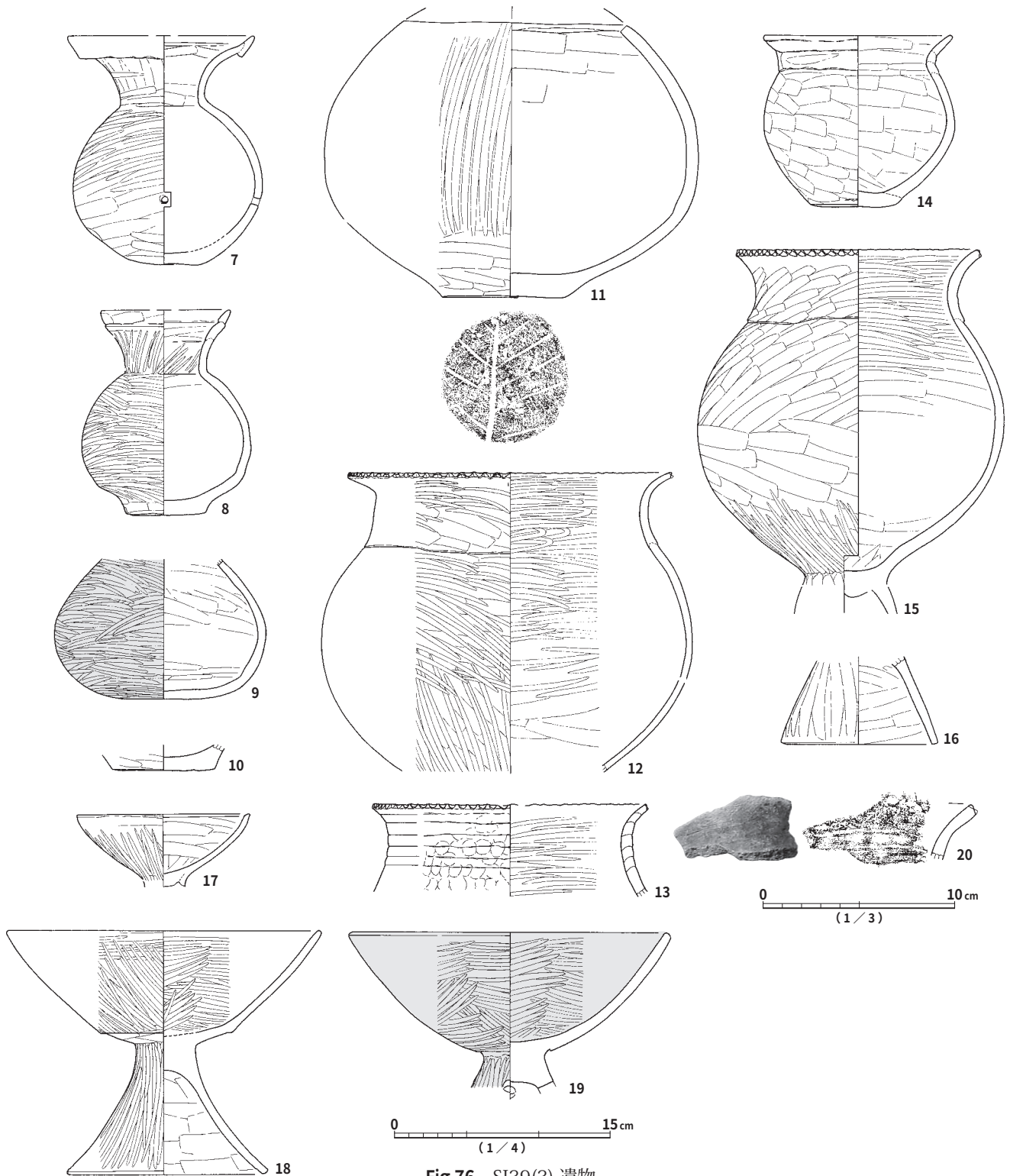


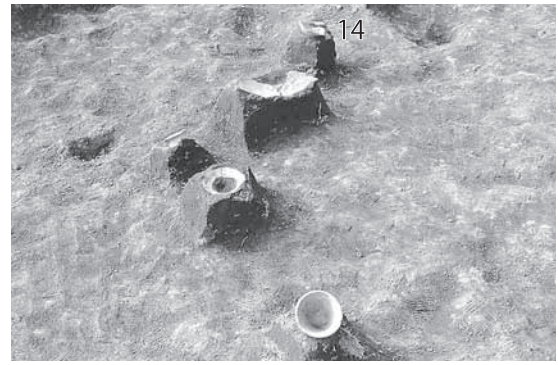
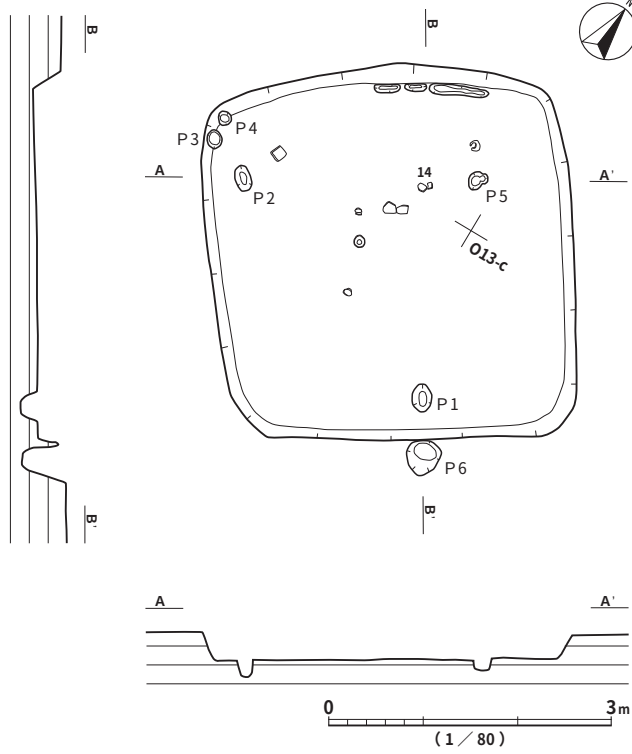
Fig.76 SI39(3) 遺物

SI41 (Fig.78、PL.71・100)

SI41は、O13・O14区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はやや不整形であるが、おそらく隅丸長方形であろう。竪穴全体規模は4.60m(主軸)×4.19m、確認面掘形面積は18.57m²、確認面からの深さは0.02～0.21mを測る。主軸方位はN-52.0

SI40



ph.1 出土状況 14・手前不明土器

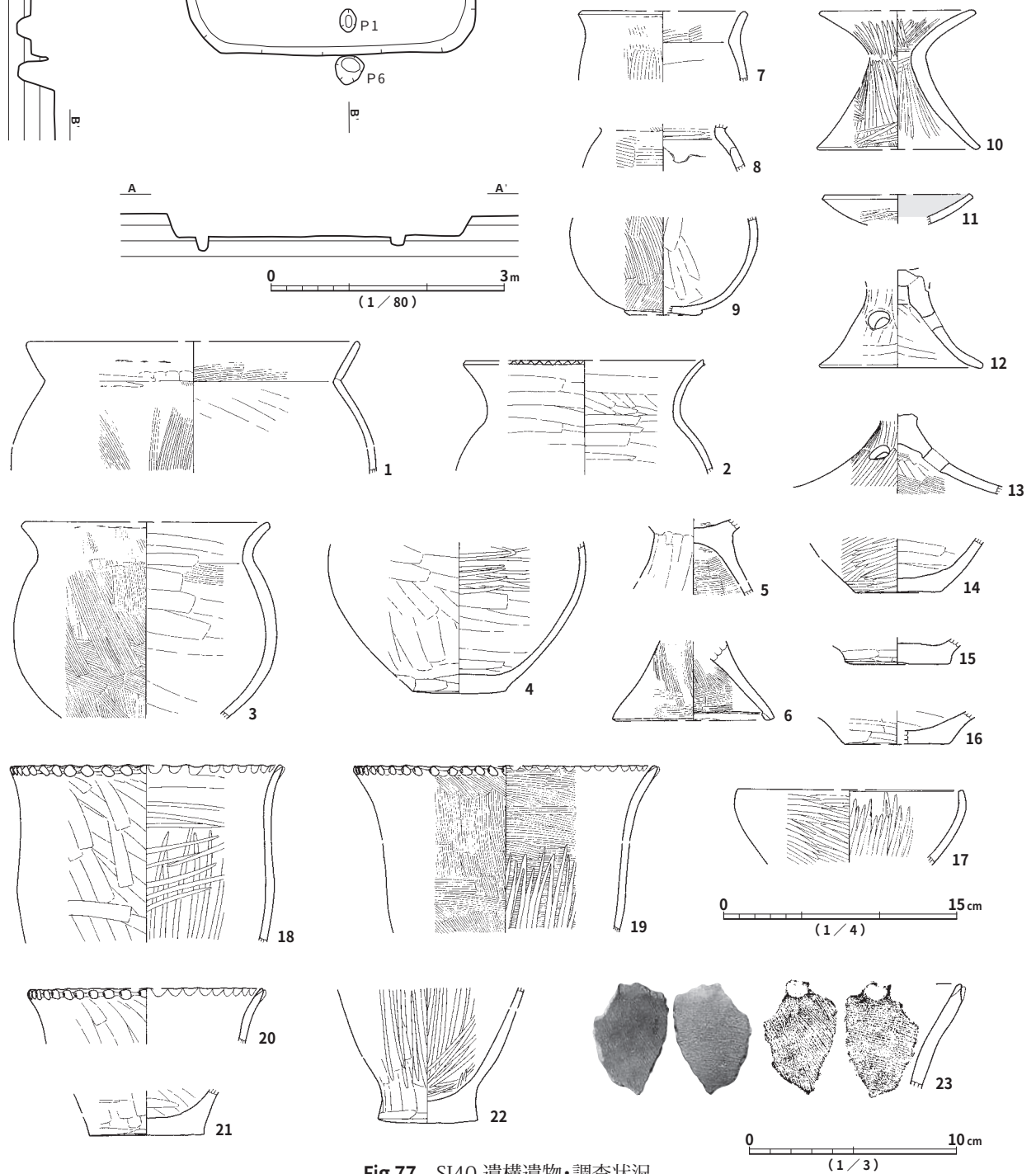


Fig.77 SI40 遺構遺物・調査状況

°-Wである。炉は、主軸線上からやや北東に偏した位置で確認されている。P1は貯蔵穴であろうか。深さは0.41mを測る。壁溝は断続的に検出されている。竪穴中央部付近床面上で焼土層が確認されており、火災に遭った可能性がある。

出土遺物は、総重量359.4gであり、すべて弥生土器、土師器であった。実測可能遺物は、1・2が甕形土器、3が高杯形土器である。1・2は近江系であり、同一個体の可能性がある。出土位置は、2・3が床面、1が床面上4cmである。

SI42 (Fig.78・79、PL.71・90・100・121)

SI42は、P12区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。調査メモによると「掘り上がっていない」とのことであり、挿図のとおり、P5北西側に推定線が引かれている。炉位置からみても、図での北西辺壁位置は、掘り上がっていないとみるべきであろう。ただし、写真がまったく残されていないため、掘り上がり状態、あるいは途中で放置されたのかどうかも不明。

竪穴規模は、現状範囲北西-南東で3.90m、北東-南西で5.79mを測る。確認面からの深さは最大で0.08mを測る。Pitはいずれも浅く、主柱穴は検出されていない。

出土遺物は、総重量3,241.1gであり、このうち土器は2,856.1g、縄文土器をのぞく重さは2,189.3gであった。実測可能遺物は、1・6が甕形土器、2・3が高杯形土器、4が器台形土器、5が壺形土器、7が椀形土器である。土器以外では8が砥石である。調査メモによると、南隅部周辺から、2・7が出土している。

SI43 (Fig.79・80、PL.71・72・90・100・140)

SI43は、P11区に所在する。竪穴北辺部でSI44と接している。新旧関係について、断面図など記録上の根拠はない。床面高は、本竪穴が6cmほど深い。また南辺側でP2・4・11と重複する。P2については、本遺構にともなう可能性もあるが、P4・11は別遺構ないし攪乱であろう。本遺構は、調査時の写真が全くないため、細部を検討することができない。

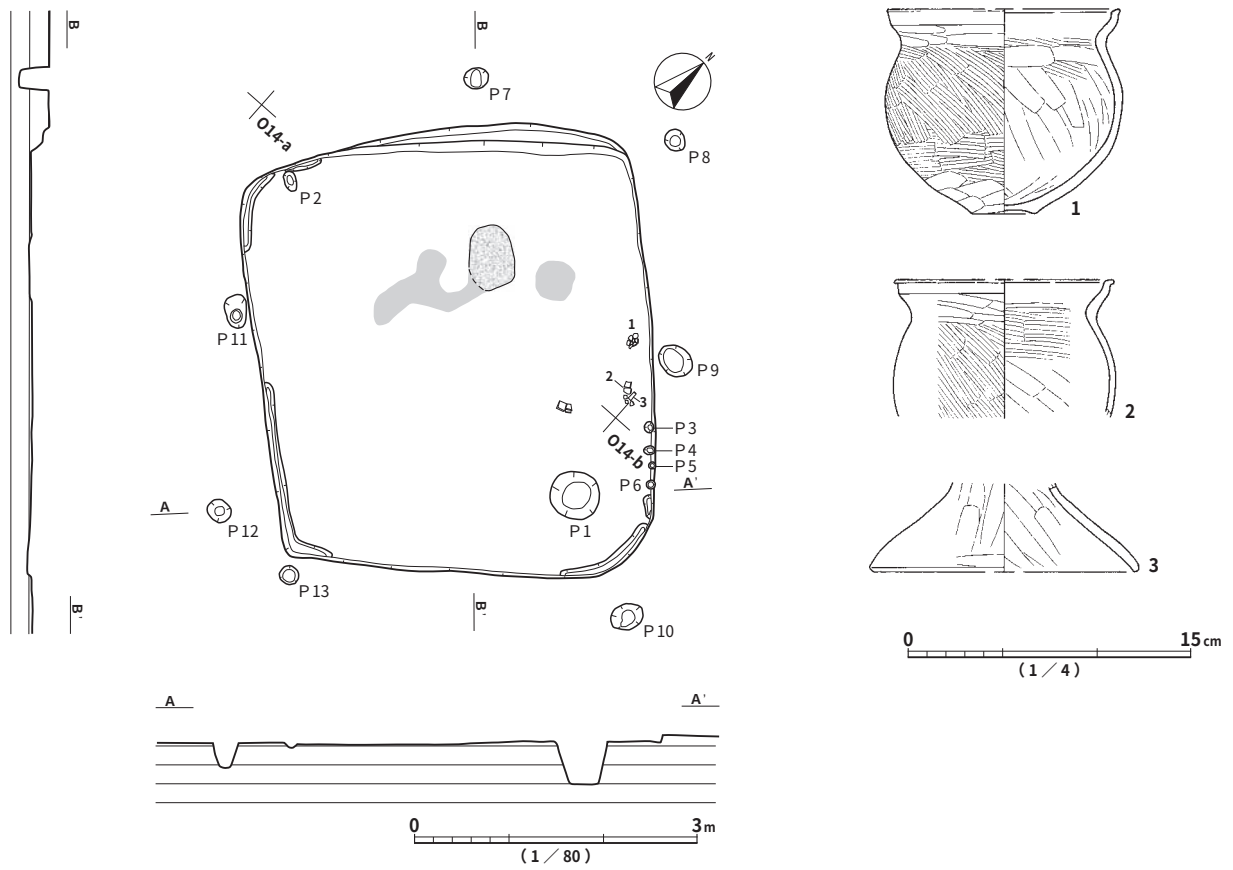
竪穴平面形態は胴張りの隅丸横長方形を呈し、竪穴全体規模は3.90m(主軸)×4.13m、確認面掘形面積は推定で14.72㎡、確認面からの深さは0.20~0.31mを測る。主軸方位はN-27.0°-Wである。竪穴中央部を中心に焼土・炭化物が確認されており、火災に遭った可能性が高い。焼土下の記録が一切ないため、炉は不明。ただし、中央焼土の床面比高は0cmであり、炉の可能性もある。主柱穴は検出されていない。Pitの深さは、P1が0.32m、P2が0.45mを測る。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量12,884.3gであり、このうち土器は12,451.2g、縄文土器をのぞく重さは3,757.1gであった。実測可能遺物は、1・2・5~7・9・10・12が壺形土器、3・17が甕形土器、4が器台形土器、8が広口壺形土器、11が転用甕、14・15が高杯形土器、16が小形椀形土器である。遺構図にある東辺中央の甕形土器風の土器は、現物を特定することができない。17は鬼高式であるが、P3から出土している。土器以外では18~21が不明鉄器である。鉄器の注記はH45(SI46)・46(SI43)となっているが、両者は重複関係にない。おそらく混入であろう。

SI44 (Fig.80、PL.72)

SI44は、P10・P11区に所在する。竪穴南東辺側でSI43と接している。新旧関係について、断面図など記録上の根拠はない。床面高は、本竪穴が6cmほど浅い。本遺構は、調査時の写真が全くないため、細部を検討することができない。

SI41



SI42

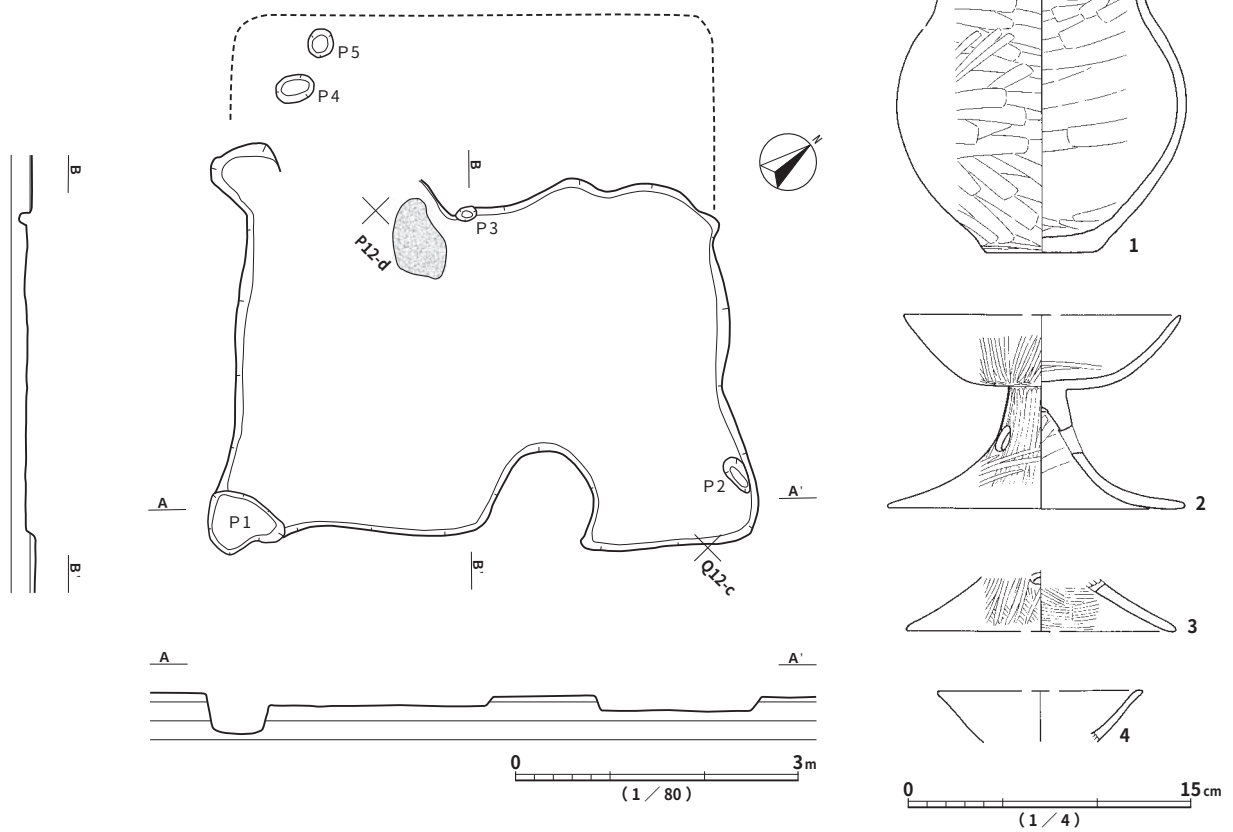
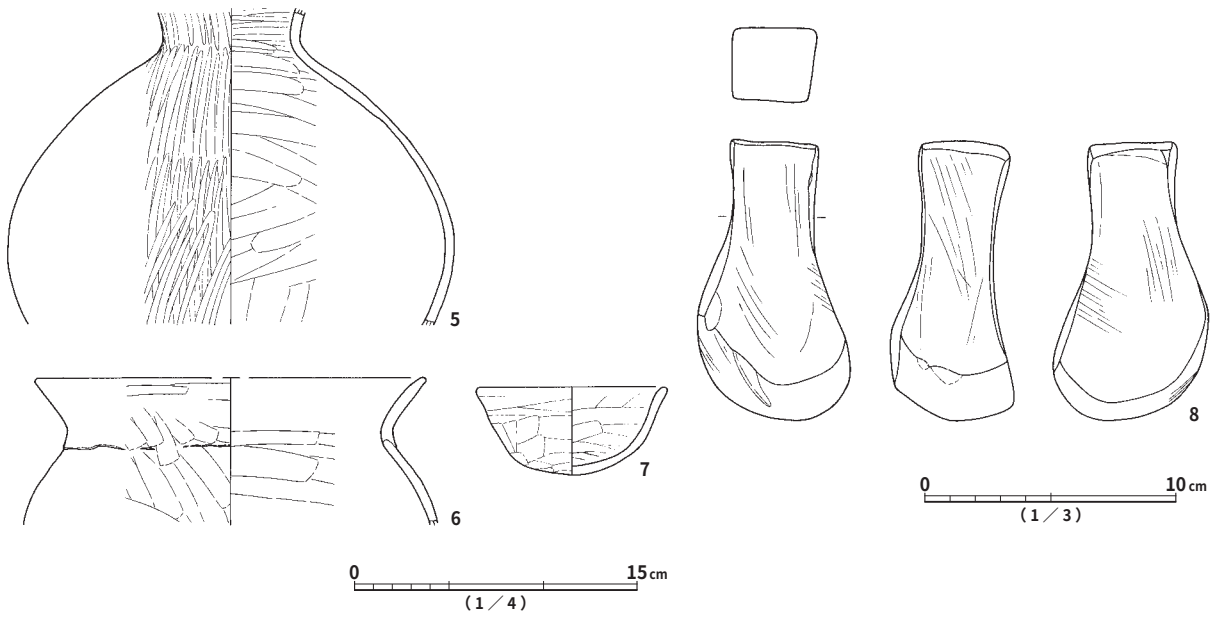


Fig.78 SI41 遺構遺物、SI42(1) 遺構遺物

SI42



SI43

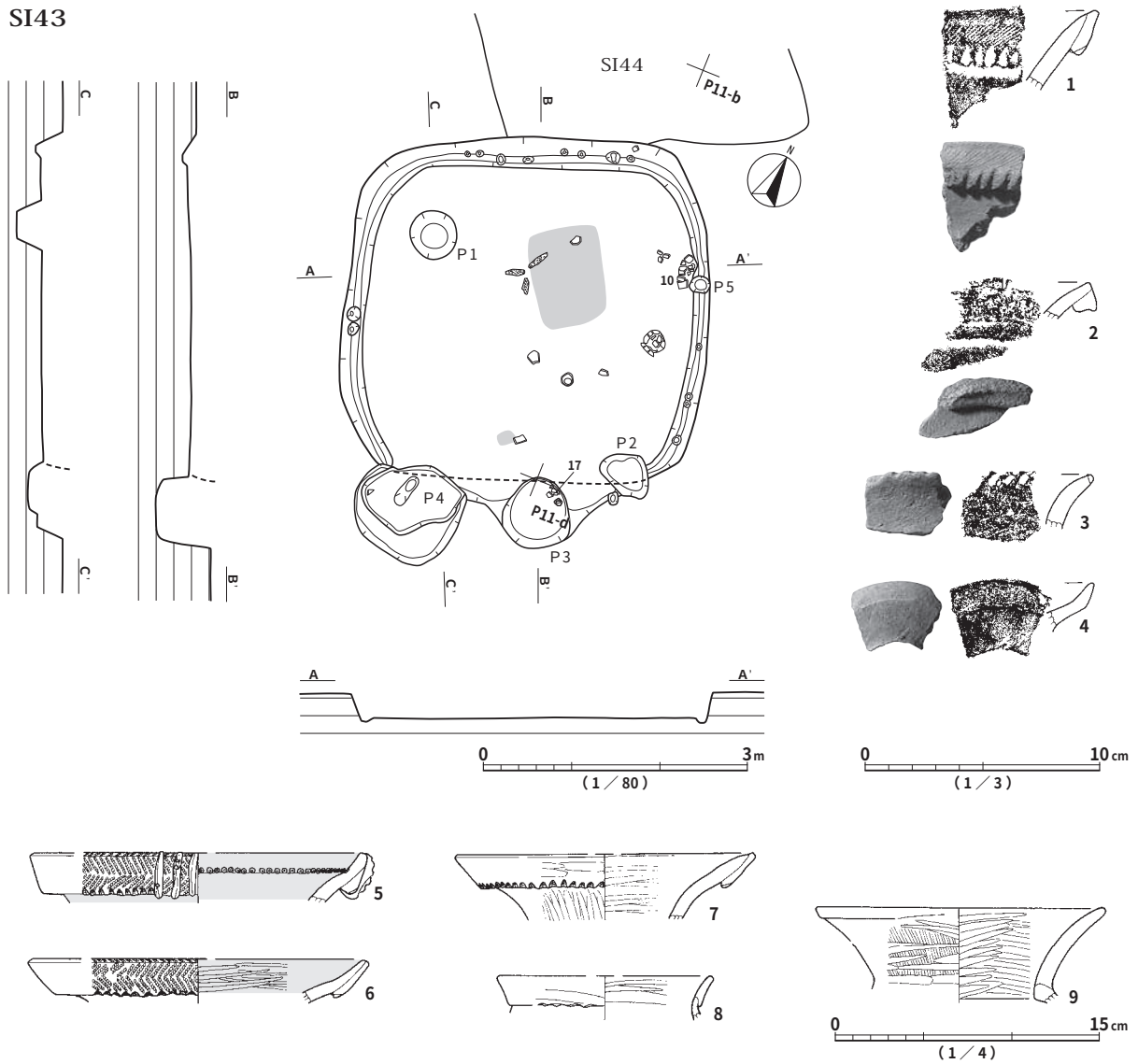
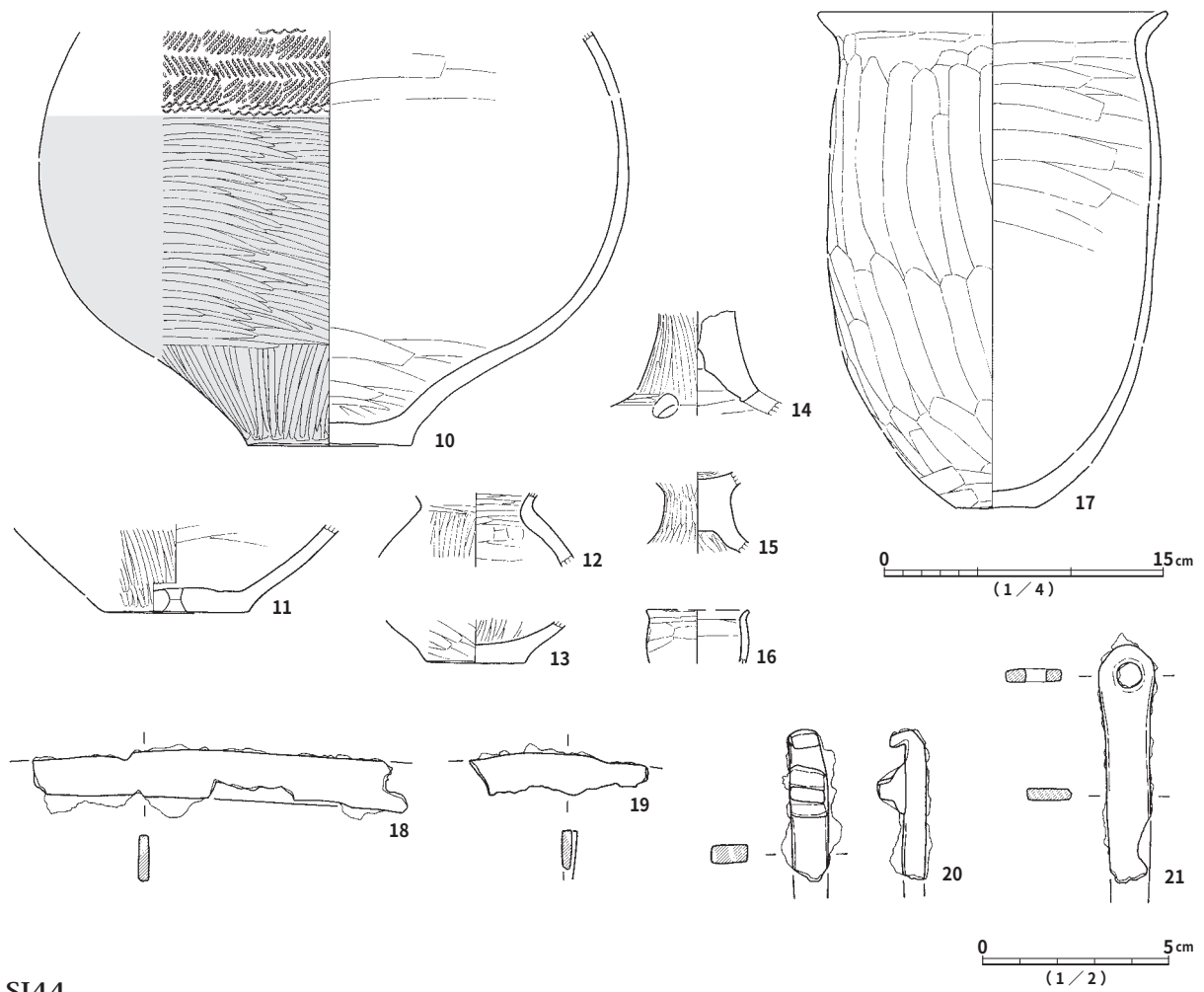


Fig.79 SI42(2) 遺物、SI43(1) 遺構遺物

SI43



SI44

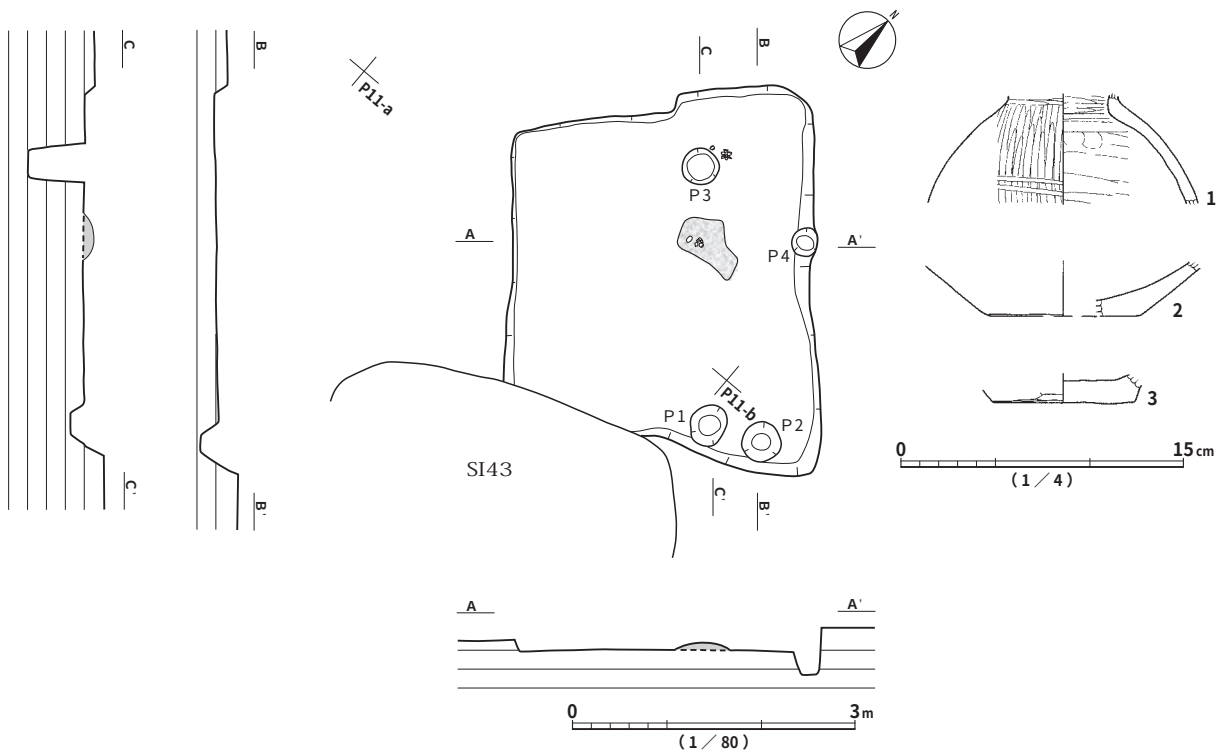


Fig.80 SI43(2) 遺物、SI44 遺構遺物

竪穴平面形態は台形を呈しているが、南隅部は、SI43との境界部分を掘り残しているようにも見える。竪穴全体規模は4.12m(主軸)×3.19m、確認面掘形面積は11.57㎡、確認面からの深さは0.11～0.21m程度を測る。主軸方位はN-49.0°-Wである。炉は、主軸線上からやや北東に偏した位置で確認されている。主柱穴は検出されていない。ただし、P3は深さ0.60mを測る。P2は貯蔵穴であろうか。壁溝は検出されていない。

出土遺物は、総重量532.0gであり、すべて土器である。縄文土器をのぞく重さは402.0gであった。実測可能遺物は、1が壺形土器である。出土土器は、いずれも小片のみであった。

SI45 (Fig.82～84・193・196、PL.21・22・72・73・90・91・101・125・126)

SI45は、P9・P10・Q9・Q10区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。弥生時代以降では、本遺跡で3番目に大きな竪穴建物である。

竪穴平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は6.71m(主軸)×6.52m、確認面掘形面積は40.35㎡、確認面からの深さは0.36～0.70m程度を測る。主軸方位はN-45.0°-Wである。炉は、主軸線上北西寄りに1か所、そのやや中央寄りに1か所確認している。P1～4は主柱穴であり、主柱穴の柱間は2.94m(主軸)×2.63mを測る。深さは、P1が0.70m、P2が0.45m、P3が0.88m、P4が0.55mである。P5は建て替えあるいは抜き取りによる可能性も考えられるが明らかではない。貯蔵穴、壁溝は検出されていない。調査メモによると、床面は堅く平坦であるという。

出土遺物は、総重量40,684.2gであり、このうち土器は39,078.6g、縄文土器をのぞく重さは11,778.4gであった。実測可能遺物は、1・5・22～24が壺形土器、2が広口甕形土器、3・4・18～21が甕形土器、6が甗形土器、7・8が小形甕形土器、9が台付甕形土器、10・11・25が椀形土器、12～15が高杯形土器、16・17が器台形土器である。このうち、18は二軒屋式である。土器以外では、他に石皿(Fig.193-76)・石斧状(Fig.196-97)が出土している。出土位置は、1・11・15・18が床面上10cm未満、7が15cm、14が21cm、16が26cmである。東隅部にまとまって出土しているものは、基本的に遺存遺物の可能性が高い。

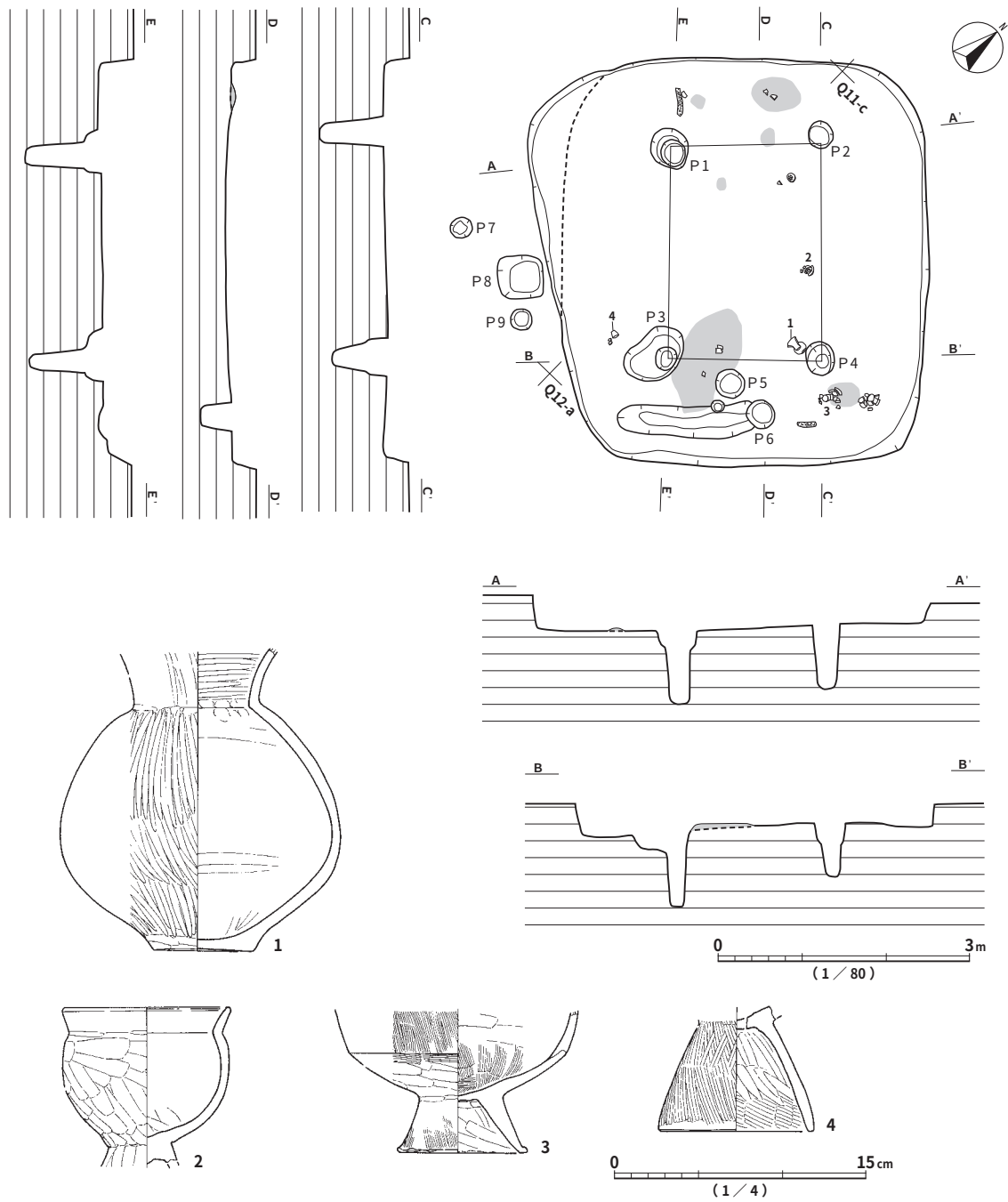
SI46 (Fig.81・186・187、PL.22・73・122)

SI46は、P11・Q11・Q12区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。南西辺はおそらく掘りすぎであろう。

竪穴平面形態はやや胴張る隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は推定で4.83m(主軸)×4.37m、確認面掘形面積は推定で19.45㎡、確認面からの深さは0.31～0.40m程度を測る。主軸方位はN-51.0°-Wである。炉は図示されていない。P1～4は、主柱穴であり、主柱穴の柱間は2.55m(主軸)×1.92mを測る。ただし、深さは不揃いであり、P1は0.89m、P2が0.70m、P3が0.87m、P3が0.55mである。P5・6は出入口施設であろうか。深さは、P5が0.40m、P6が0.30mである。壁溝は検出されていない。P6脇の溝はおそらく竪穴掘形面と思われる。北西辺、南東辺部壁際で焼土が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

出土遺物は、総重量3,341.6gであり、このうち土器は2,419.6g、縄文土器をのぞく重さは2,219.6gであった。実測可能遺物は、1が壺形土器、2が小形台付甕形土器、4が台付甕形土器である。いずれも床面上10cm程度から出土している。なお、1の壺形土器は、出土状況写真では口縁部まで遺存しているが、現状では確認できない。土器以外では、他に磨石(Fig.186-21、187-25)が出土して

SI46



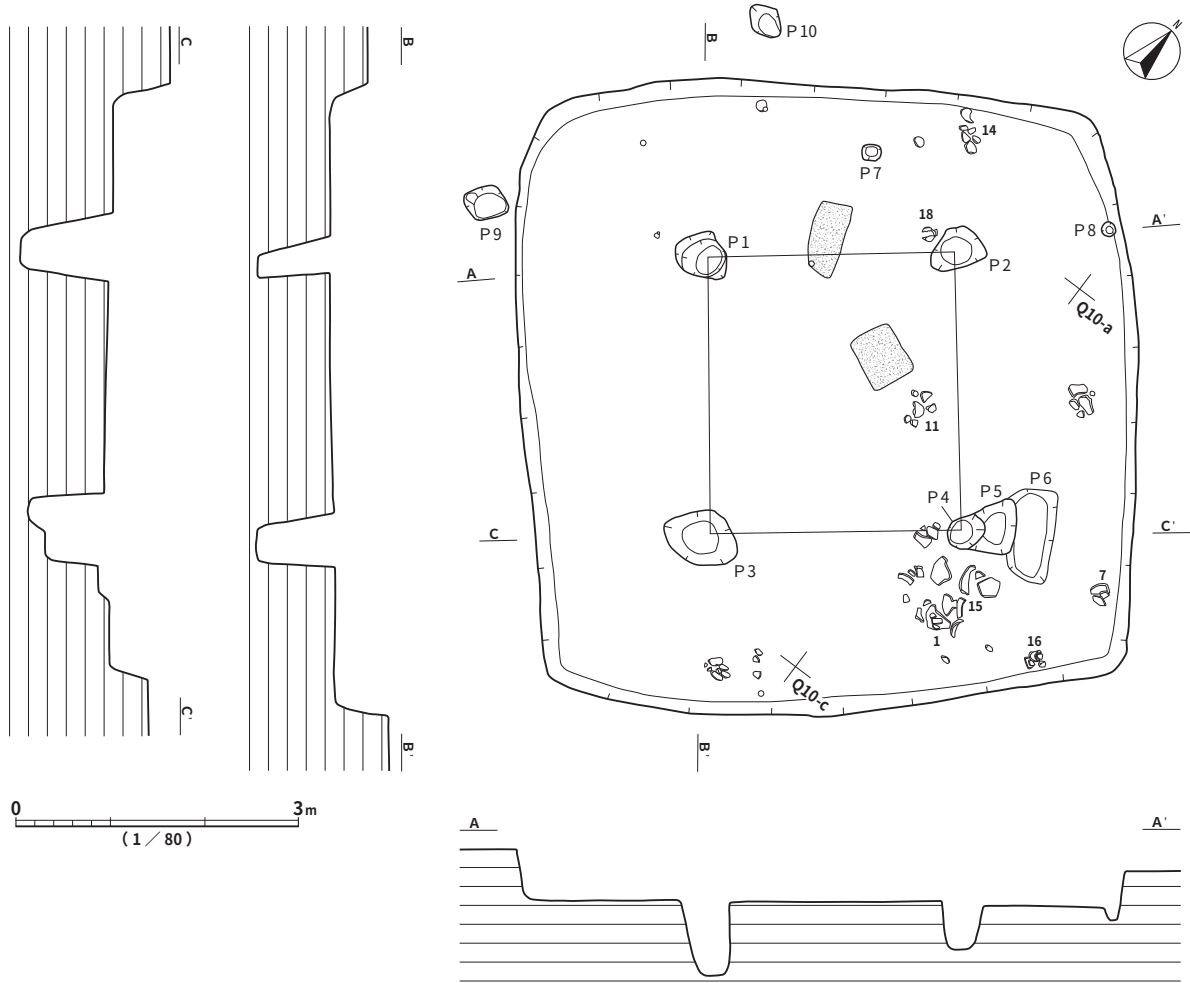
ph.1 出土状況 1



ph.2 出土状況 3

Fig.81 SI46 遺構遺物・調査状況

SI45



ph.1 全景



ph.2 調査状況



ph.3 出土状況 18



ph.4 出土状況 1・15

Fig.82 SI45(1) 遺構・調査状況

SI45

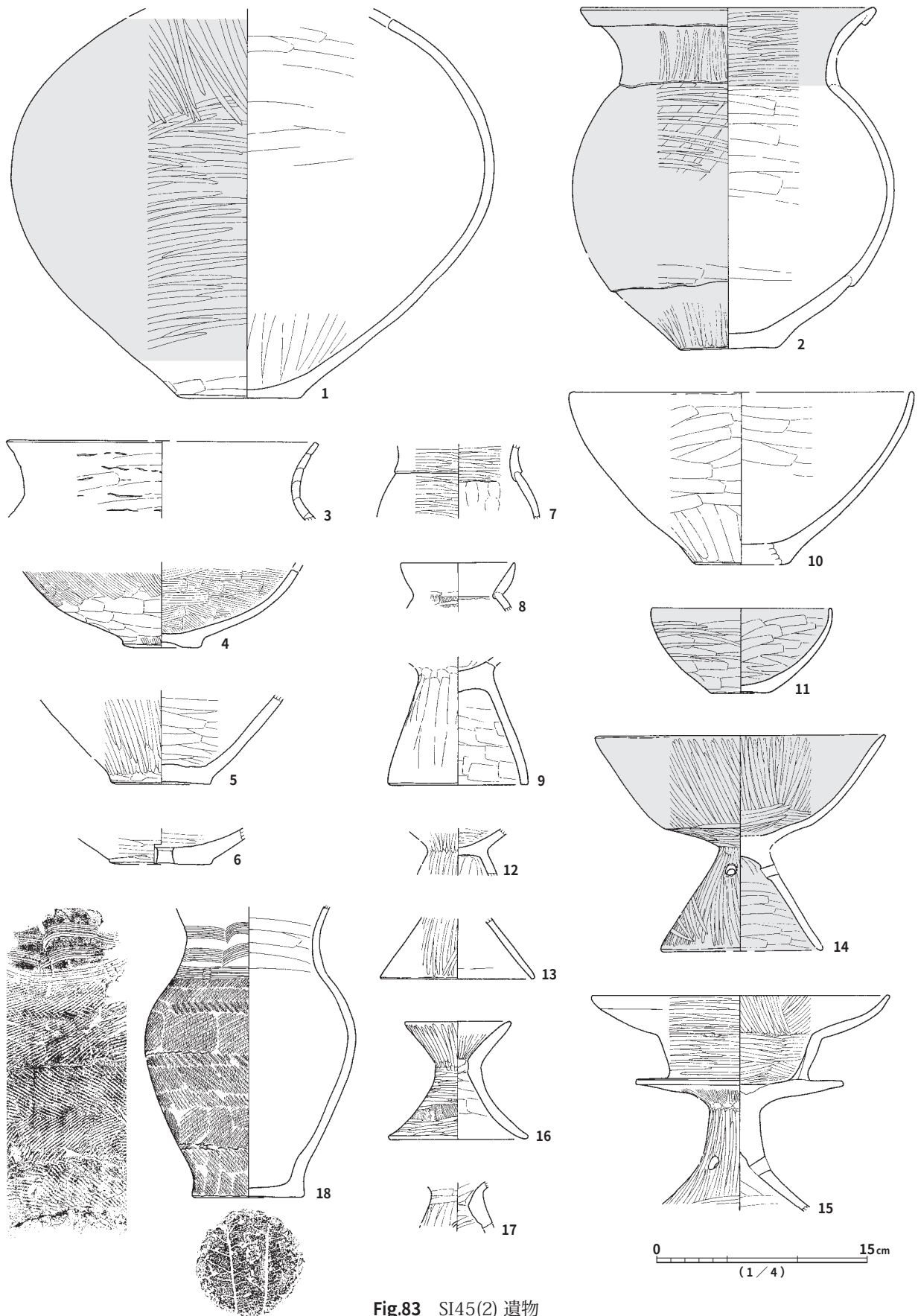
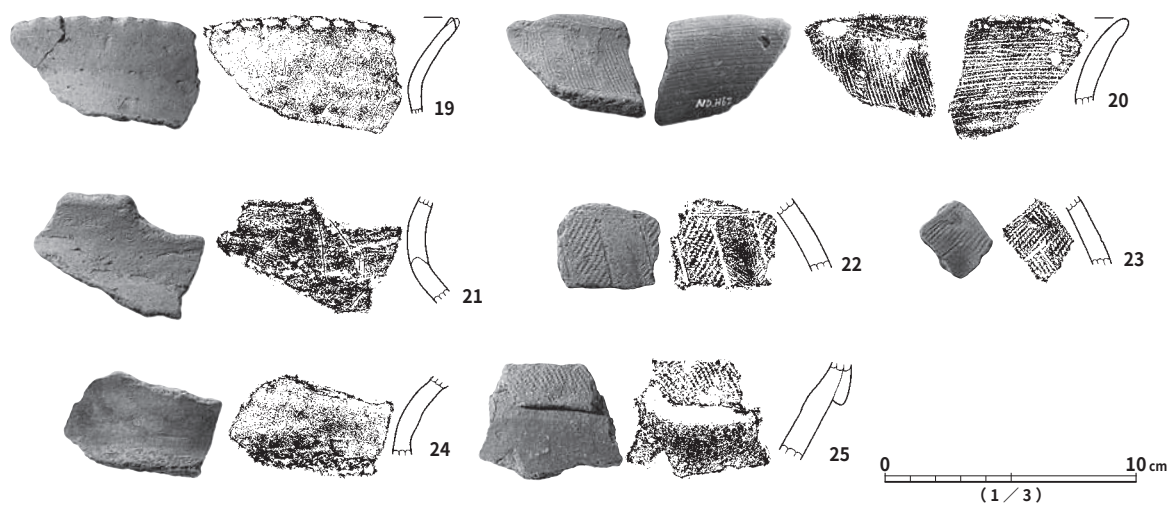
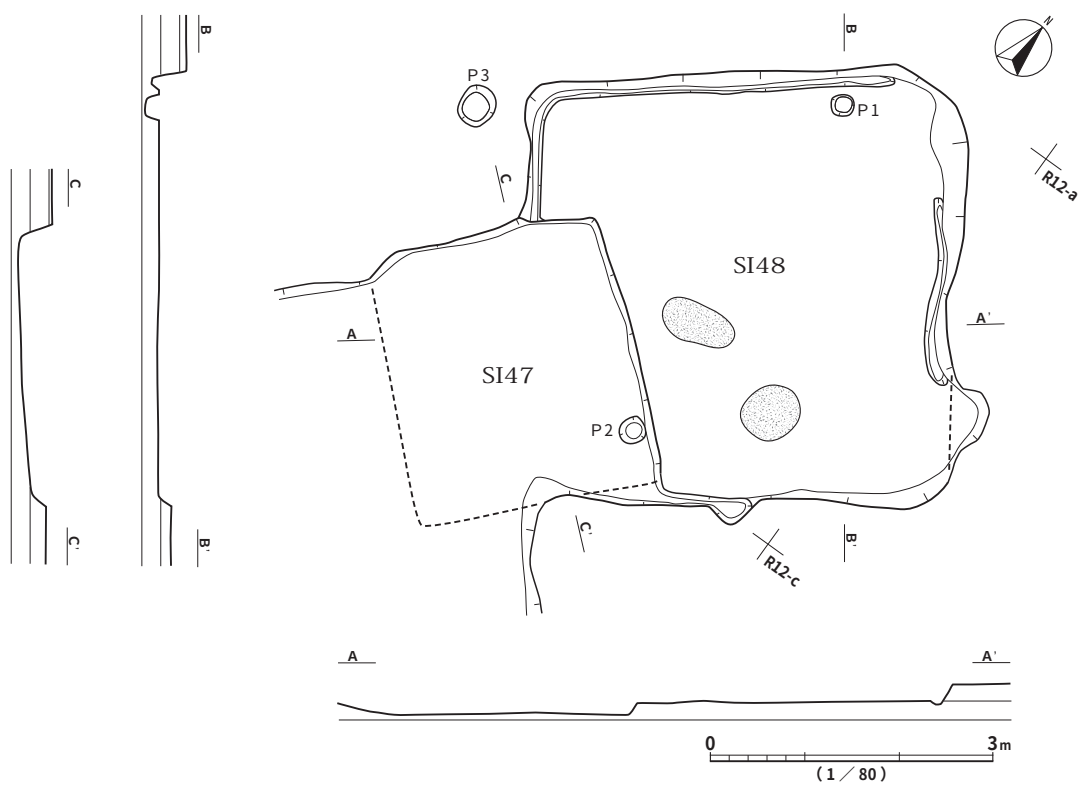


Fig.83 SI45(2) 遺物

SI45



SI47・48



SI47

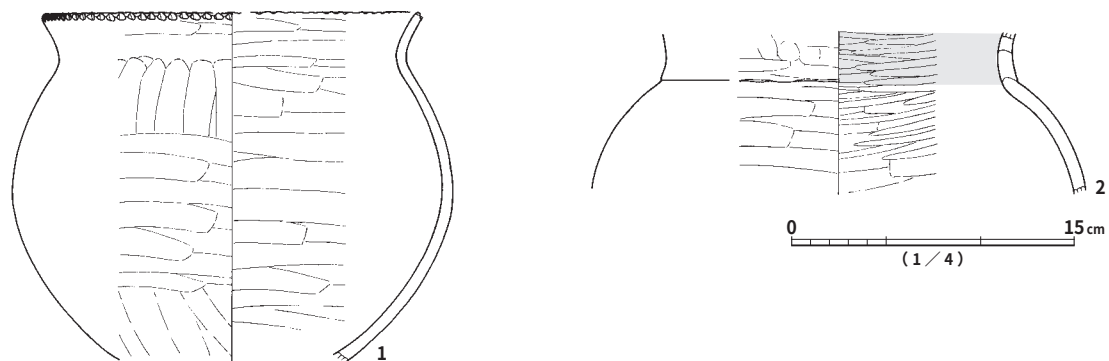


Fig.84 SI45(3) 遺物、SI47(1) 遺構遺物、SI48(1) 遺構

SI47

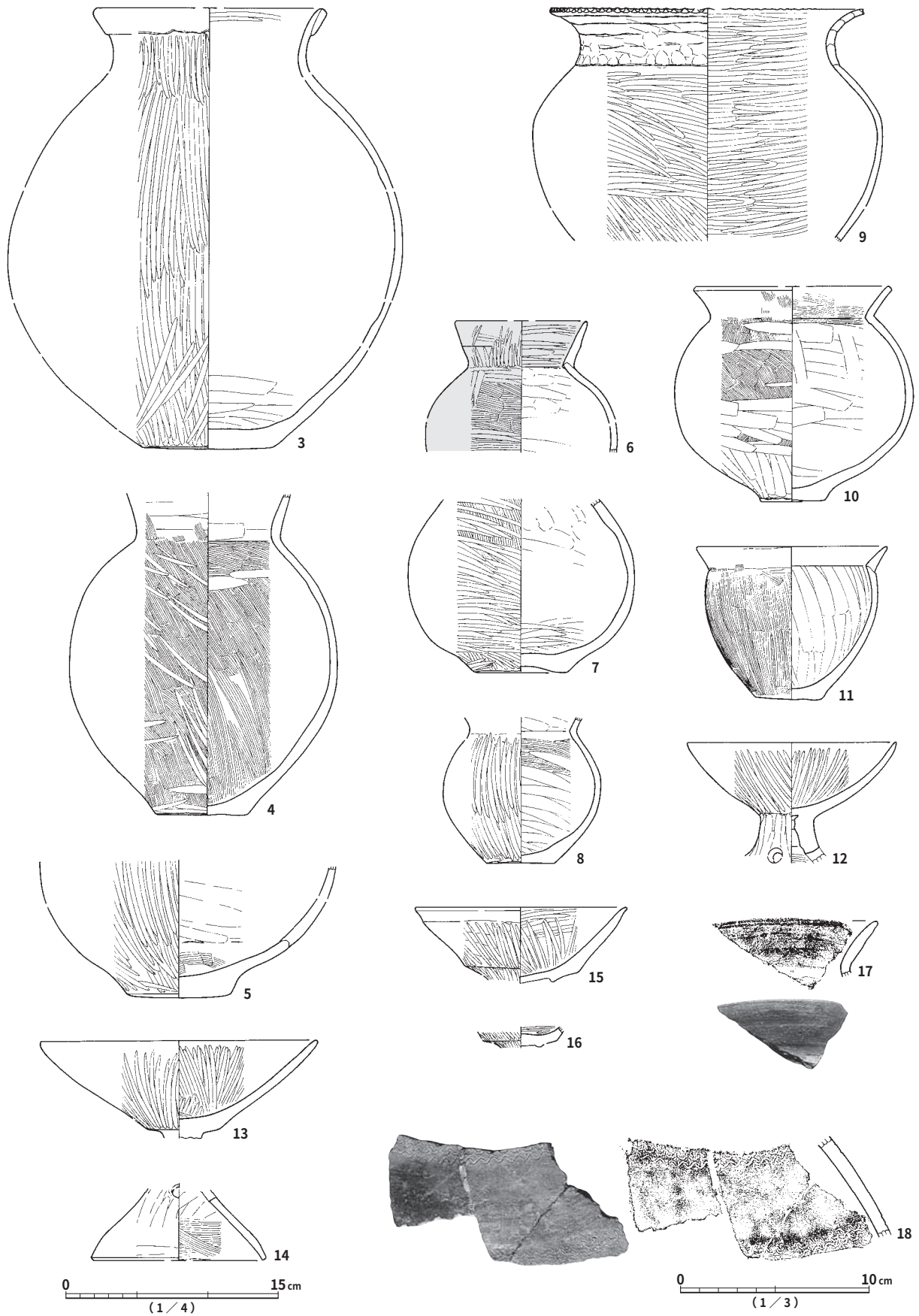


Fig.85 SI47(2) 遺物

いる。また、Fig.80-18～21の鉄製品は、注記によれば本竪穴に関係する。詳細は不明。

SI47 (Fig.84・85、PL.73・74・91・101)

SI47は、Q12区に所在する。南東側でSI48と重複する。床面高は、本竪穴が10～13cmほど深い。調査メモによると、本竪穴北東辺、SI48重複部床面付近から多量の遺物が出土している。これらが、SI48床面下に遺存していた可能性は低いと思われることから、両者の新旧関係は、本竪穴が新しいと判断する。調査メモにも、本竪穴がSI49の床面を切っているとの記載がある。ただし、遺物出土状況図、現場写真が一切ないため、改めて検証することは困難である。

竪穴範囲南側壁は遺存しない。復元線は調査図面(第2原図)を転写したものであるが、復元線外で0.12cm程度の比高があることなどから、復元範囲はおおむね妥当ではないと思われる。

竪穴平面形態は長方形を呈し、竪穴全体規模は推定で2.93m(主軸)×2.63m、確認面掘形面積は推定で7.51m²、確認面からの深さは0.15～0.35m程度を測る。主軸方位はN-55.0°-Wである。炉・支柱穴他の屋内施設は不明。P2は深さ0.21mであるが、本竪穴に帰属するものかどうか明らかではない。なお、調査メモには、炉が竪穴中央にあることを記している。調査時の写真がないため検証できない。

出土遺物は、総重量7,592.3gであり、このうち土器は7,558.6g、縄文土器をのぞく重さは6,408.6gであった。実測可能遺物は、1・9・17が甕形土器、2・3が広口壺形土器、4～7・18が壺形土器、8が小形壺形土器、10が小形甕形土器、11が鉢形土器、12・13・15が高杯形土器、14・16が器台形土器である。出土位置の詳細は不明。調査メモによれば、1・3・5～8・10～13・15が北東辺部壁際から出土している。

SI48 (Fig.84・86・187、PL.101・122)

SI48は、Q12・R12区に所在する。竪穴南西側でSI47と重複する。新旧関係は、本遺構に対してSI47が新しい。本遺構は、現場写真が一切ないため、詳細は明らかでない。

竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は推定で4.50m(長軸)×4.45m、確認面掘形面積は推定で20.45m²、確認面からの深さは0.12～0.26mを測る。北西-南東を主軸とした場合の方位は、N-42.0°-Wである。炉は、竪穴中央部からやや南側に寄った位置で2基検出されている。ただし、一般的にある位置ではない。支柱穴は検出されていない。P1は深さ0.17mである。壁溝は、断続的に検出されている。

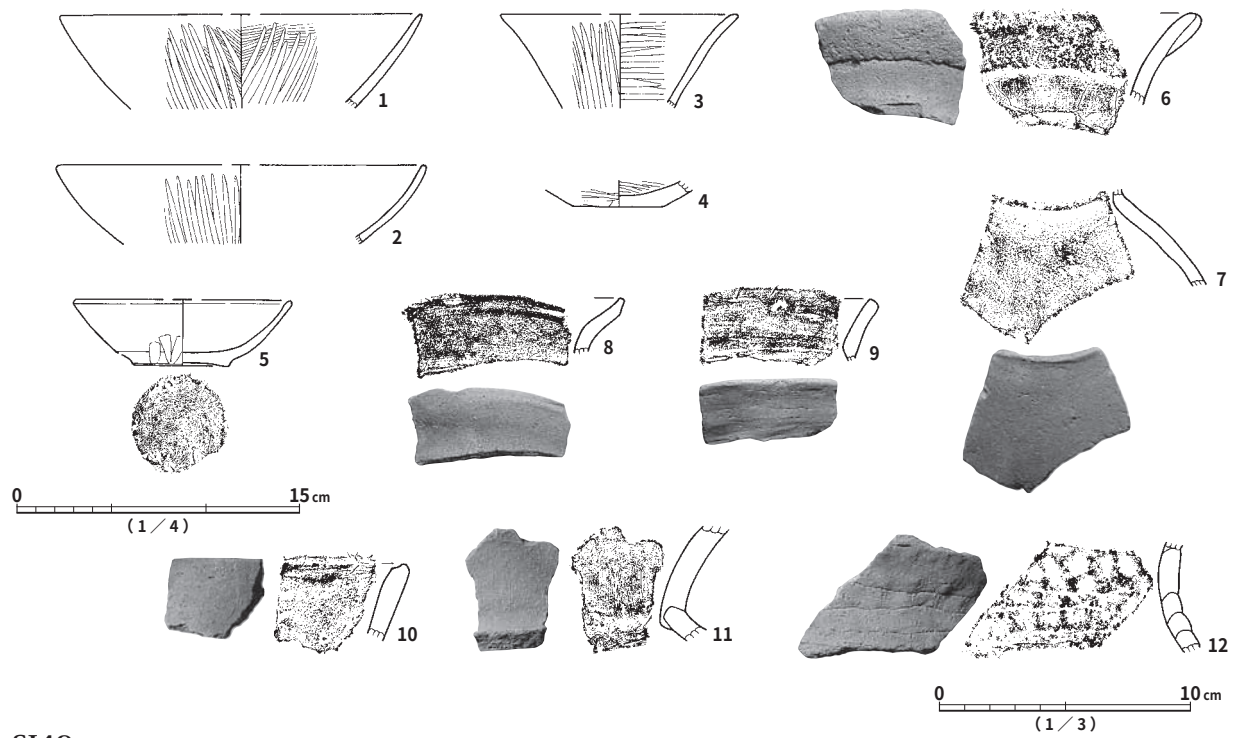
出土遺物は、総重量10,483.8gであり、このうち土器は7,499.5g、縄文土器をのぞく重さは1,669.3gであった。実測可能遺物は、1・2が高杯形土器、3・6・7・11が壺形土器、4が椀形土器、5が杯形土器、8～10・12が甕形土器である。5はロクロ土師器杯である。土器以外では、他に磨石類(Fig.187-24)が出土している。

SI49 (Fig.86、PL.22・101)

SI49は、R11・S11区に所在する。竪穴南側でSI82と重複する。新旧関係は本遺構が古い。

竪穴平面形態は横長方形を呈し、竪穴全体規模は5.54m(主軸)×6.21m、確認面掘形面積は推定で33.08m²、確認面からの深さは0.11～0.47m程度を測る。主軸方位はN-43.0°-Eである。炉は、主軸線上北東寄りに1か所確認できる。その他、柱穴などの屋内施設は検出されていない。北西辺部側で焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

SI48



SI49

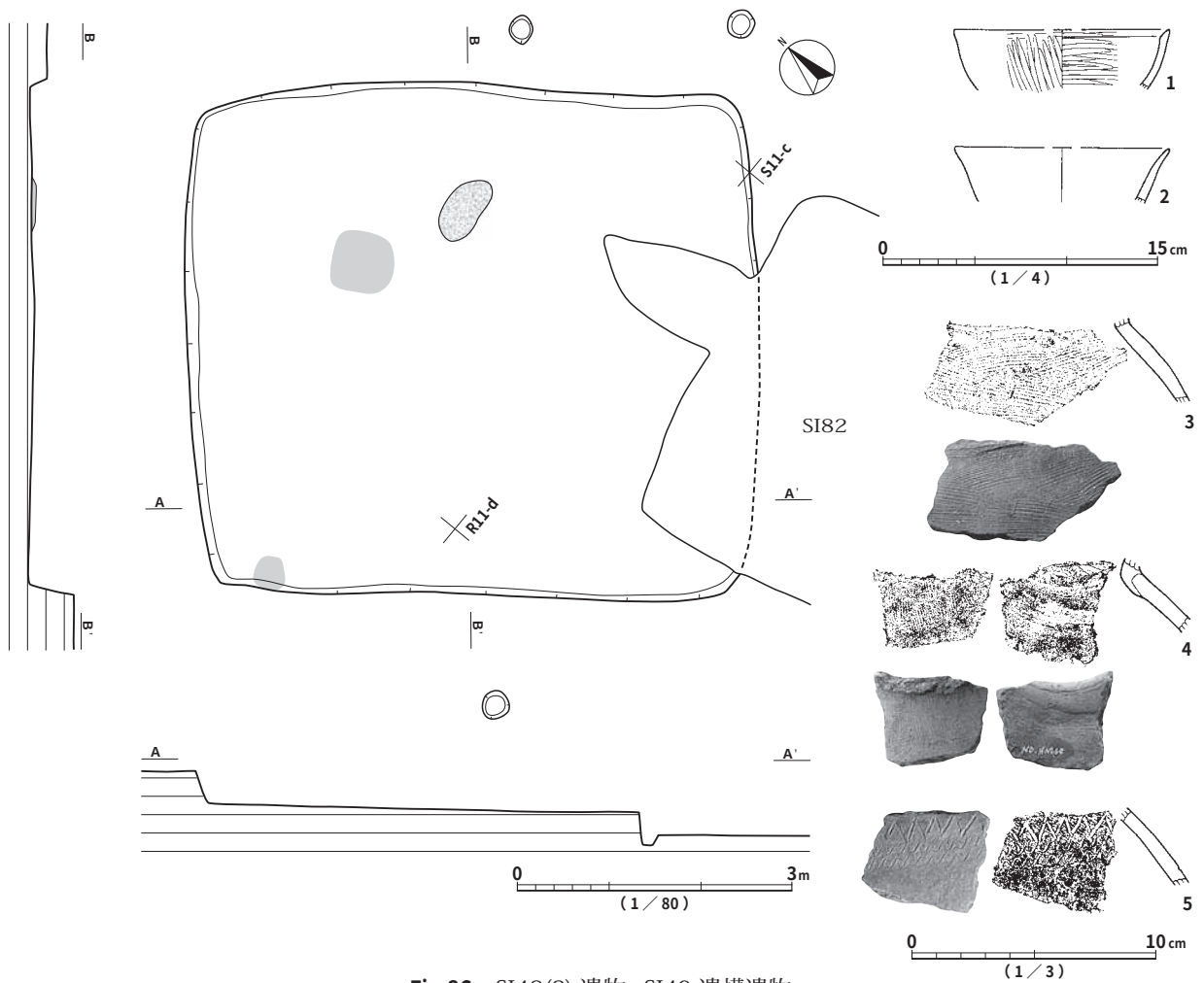


Fig.86 SI48(2) 遺物、SI49 遺構遺物

SI50

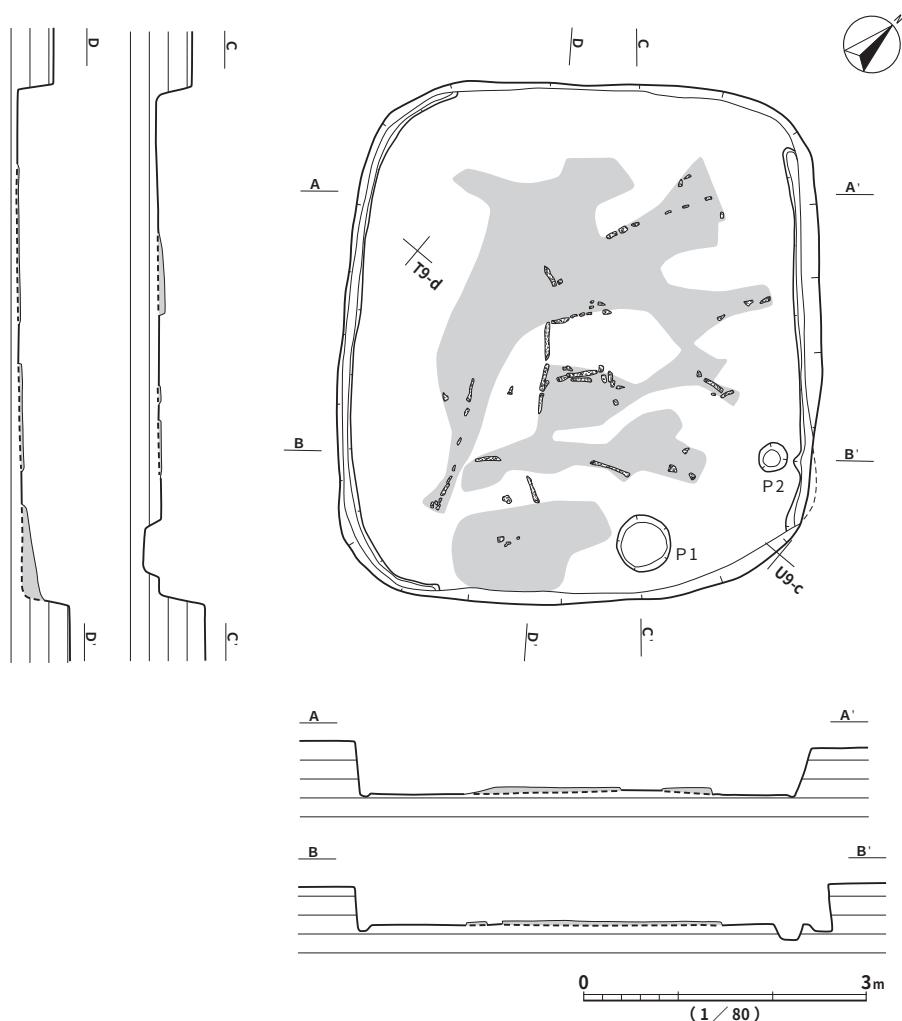


Fig.87 SI50 遺構

出土遺物は、総重量5,593.4gであり、このうち土器は5,494.7g、縄文土器をのぞく重さは540.3gであった。実測可能遺物は、1・2が椀形土器、3が甕形土器、4・5が壺形土器である。いずれも小破片であり、出土状況は不明。

SI50 (Fig.87)

SI50は、東端部T9区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

本遺構(旧遺構番号H84)は、出土遺物がまったく存在しない。調査メモによれば、少なくとも若干量の土器は出土している。遺構番号の混乱による可能性があり、調査メモでは本遺構はH81になっている。全体図に所在せず、遺構図面もないH88(SI85)などの遺物が本遺構のものである可能性もある。

竪穴平面形態はやや胴の張る隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は5.45m(主軸)×5.05m、確認面掘形面積は25.81㎡、確認面からの深さは0.32～0.55m程度を測る。主軸方位はN-45.0°-Wである。本竪穴は、ほぼ床面全面に焼土が広がっており、火災に遭った可能性が高い。ただし、焼土下の図面、写真などの記録類一切がないため、炉・支柱穴などの屋内施設は明らかではない。P1は貯蔵穴であろうか。深さは0.17mを測る。

(3) 奈良・平安時代

SI51 (Fig.89・90・195～197、PL.22・23・74・101・126・127・129・140)

SI51は、C8区に所在する。竪穴西側にSD11が走行するが重複はしていない。写真によると北隅外に半裁した土坑が存在する。これはおそらく風倒木痕であろう。

竪穴平面形態は長方形を呈し、竪穴全体規模は3.97m(主軸)×3.52m、カマド煙道部を含む主軸長は4.47m、確認面掘形面積は13.83㎡、確認面からの深さは0.18～0.37m程度を測る。主軸方位はN-30.0°-Wである。カマドは北西壁中央にある。ただし、カマド図面は粘土範囲の輪郭のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は、写真を含め記録が一切ない。P2・7～9は支柱穴の可能性もあるが確実ではない。Pit深度は、P1が0.16m、P2が0.17m、P3が0.26m、P4が0.11m、P5が0.11m、P6が0.21m、P7が0.17m、P8が0.20m、P9が0.10mと浅い。カマド前面に焼土が認められるが、火災によるものかどうかは判断できない。

出土遺物は、総重量8,511.2gであり、このうち土器は4,833.8g、縄文土器をのぞく重さは3,416.6gであった。実測可能土器は、いずれも土師器であり、1が甕、3・4が杯、2が内面黒色処理の高台付杯である。土器以外では、5が平瓦、6が丸瓦、8が鉄製刀子、9が鉄鏟、7が不明鉄器である。鉄器は錆による剥落が進んでいる。出土位置は、1・3が床面、2が床面上3cmである。また、南隅部床面上5cmから刀子が出土しているが、これが8かどうかは不明。他に、磨製石斧 (Fig.197-104)・打製

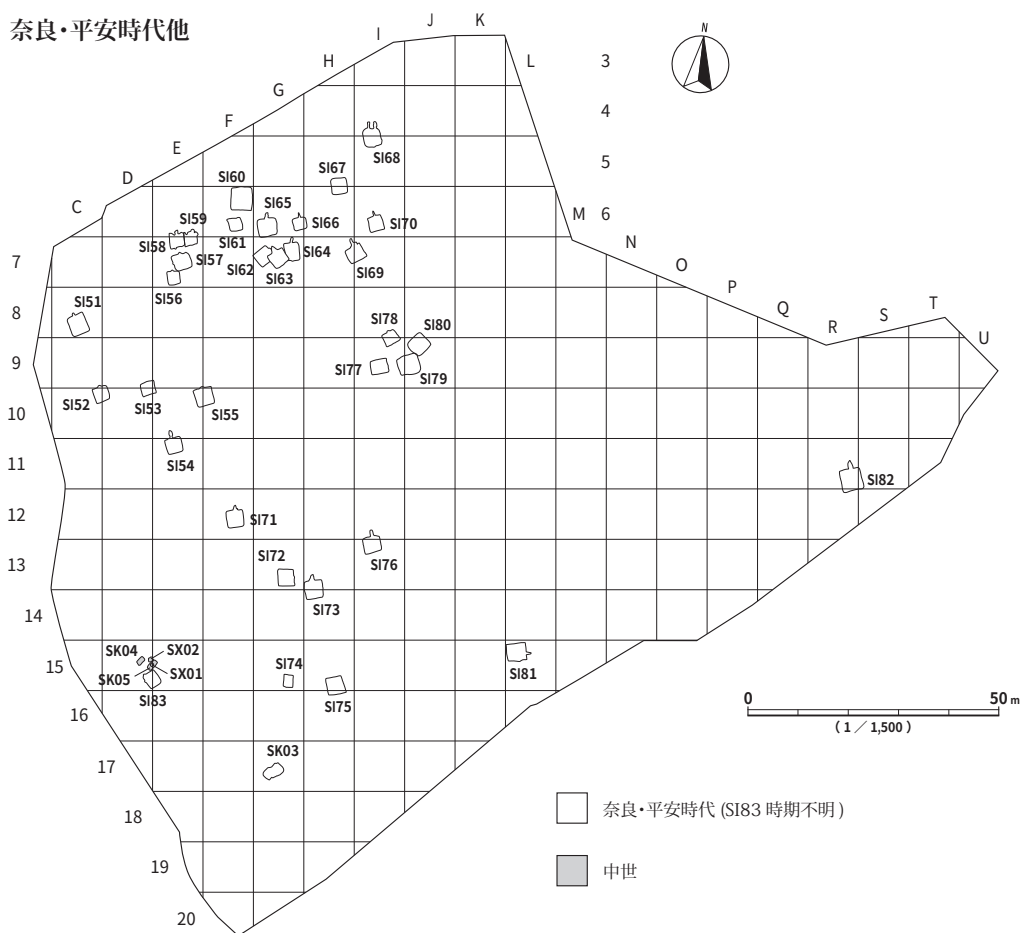


Fig.88 南中台遺跡遺構配置図 (奈良・平安時代、中世)

SI51

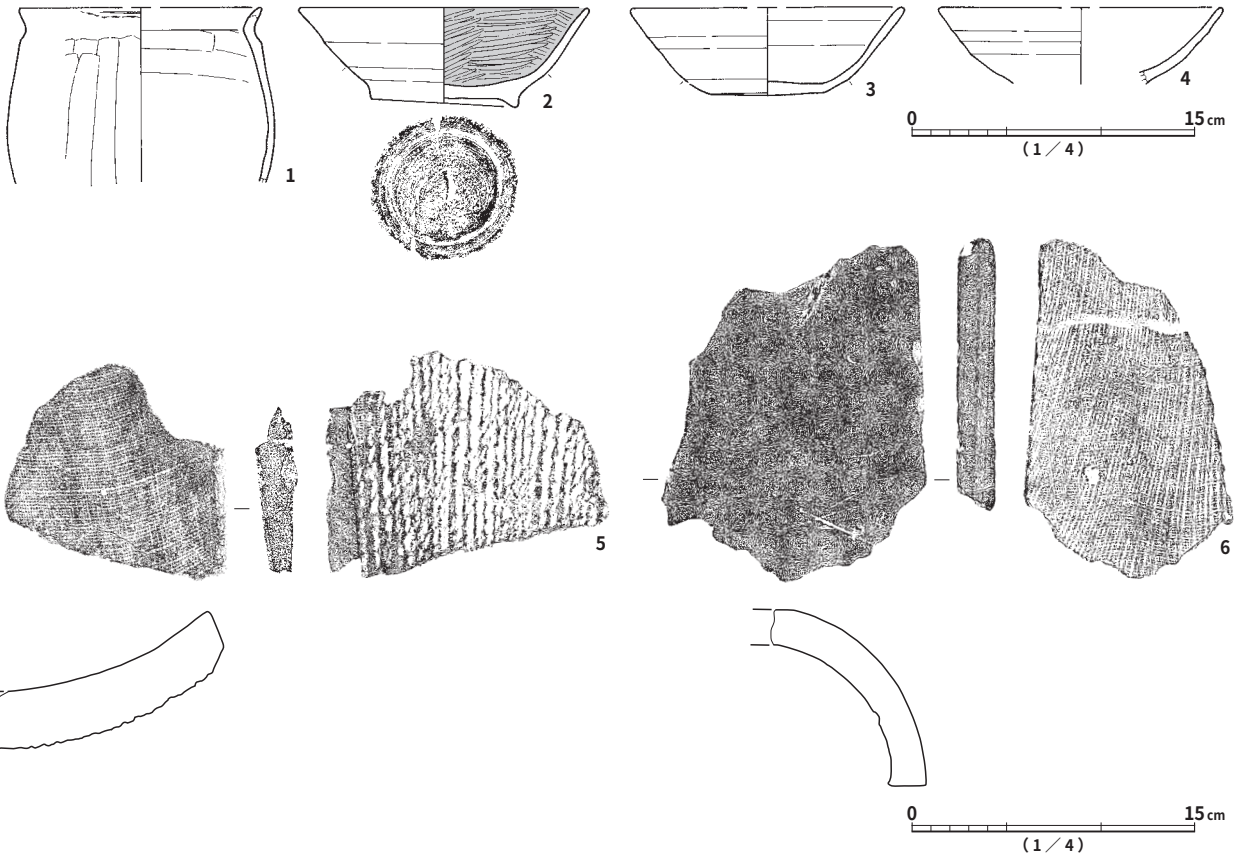
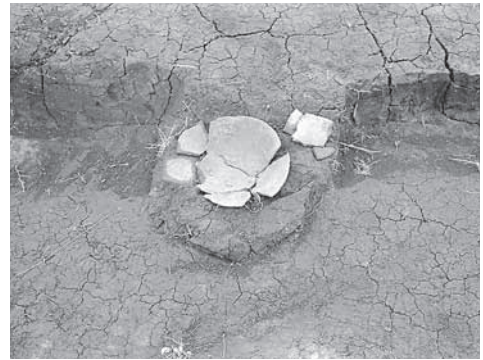
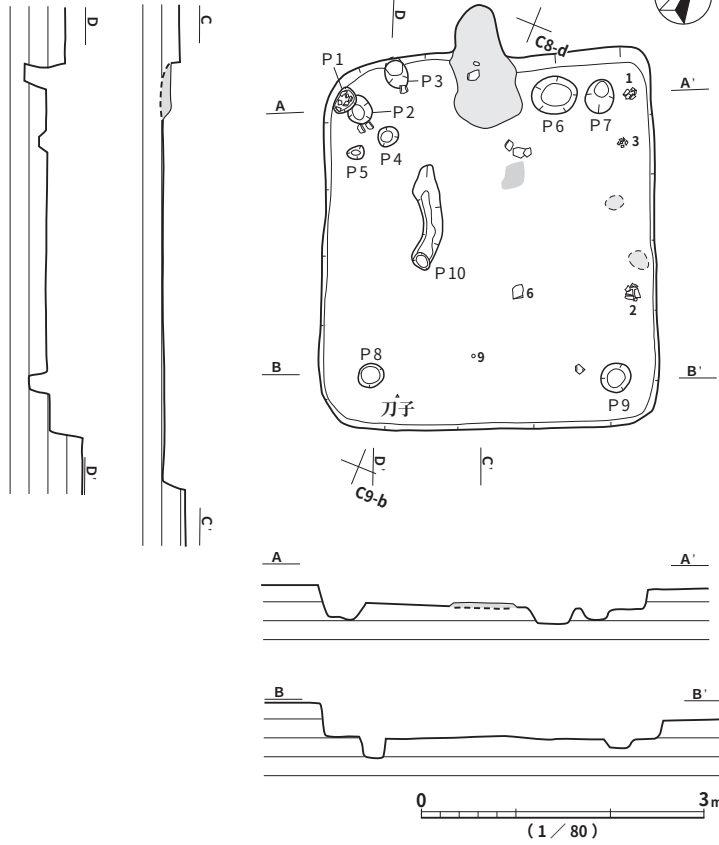
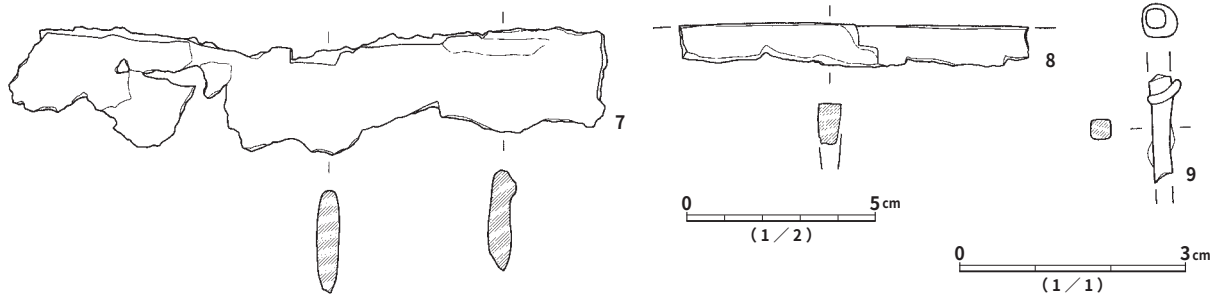
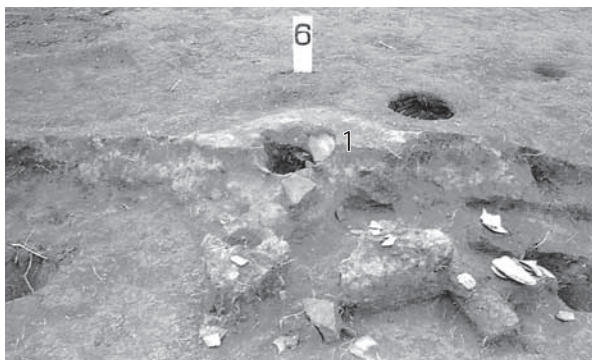
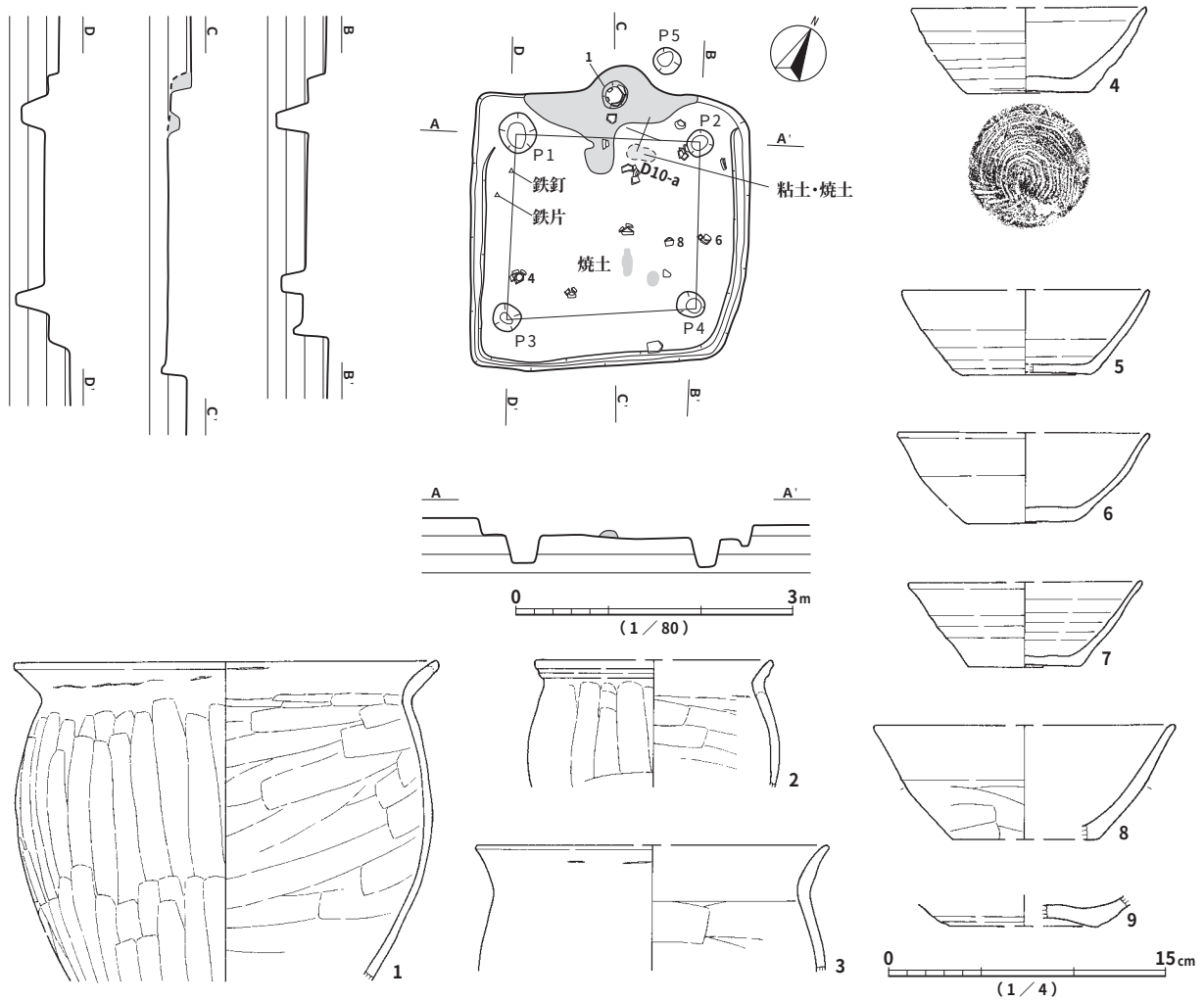


Fig.89 SI51(1) 遺構遺物・調査状況

SI51



SI52



ph.1 カマド、出土状況 1



ph.2 カマド、出土状況 1

Fig.90 SI51(2) 遺物、SI52 遺構遺物・調査状況

石斧 (Fig.195-92、196-94) が出土している。打製石斧の注記はSI19と併記されている。

SI52 (Fig.90・198、PL.23・74・75・101・127)

SI52は、C9・C10・D9・D10区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は2.98m(主軸)×3.00m、カマド煙道部を含む主軸長は3.22m、確認面掘形面積は8.68㎡、確認面からの深さは0.14～0.28m程度を測る。主軸方位はN-29.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。ただし、カマド図面は粘土範囲の輪郭のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は、写真を含め記録が一切ない。カマド中央の甕形土器1は、位置関係から、据え付け穴に置かれた状態のままと推定する。P1～4は支柱穴であり、柱間は1.90(主軸)×2.01mを測る。深さは0.25～0.32m程度と浅い。壁溝は、北辺部をのぞき全周する。竪穴内やや南東隅側で、焼土が検出されている。ただし、火災に遭ったかどうかは明確ではない。

出土遺物は、総重量7,047.6gであり、このうち土器は4,707.6g、縄文土器をのぞく重さは2,642.6gであった。実測可能遺物は、いずれも土師器であり、1～3が甕、4～7・9が杯、8が椀である。土器以外では、他に砥石 (Fig.198-113) が出土している。図面、調査によれば、西辺部壁際からは、鉄釘と鉄片が出土しているが、これについては現物を確認することができなかった。1がカマド内、4・6が床面上5～10cmから出土している。

SI53 (Fig.91～93、PL.23・24・75・101・129)

SI53は、D9・D10・E9・E10区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

本竪穴の調査写真には、おもに壁溝の有無にもとづく2パターンがある (Fig.91-ph.1・2)。また、竪穴範囲について図面と比較すると、ともに東側に拡張されている。これは、図面に反映されていないことから、掘りすぎと推定しておく。図面上、南東隅部が土坑状になっているが、調査写真から判断すると、本遺構にともなうものとは考えにくい。

竪穴平面形態は胴張りの横長方形を呈し、竪穴全体規模は2.59m(主軸)×2.79m、カマド煙道部は明らかではない。確認面掘形面積は7.07㎡、確認面からの深さは0.10～0.20mを測る。主軸方位はN-23.0°-Wである。カマドは北壁中央にあり、袖部と燃焼部が認められる。前面には、丸瓦(11)が架けてあったと思われる。Pitはいずれも浅く、確実に本遺構にともなうものは認められない。カマド右脇の土坑状の落ち込みは、深さの記録がない。壁溝は東西辺で検出している。竪穴南壁際で焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。

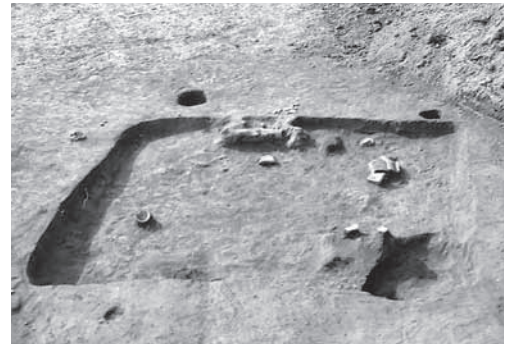
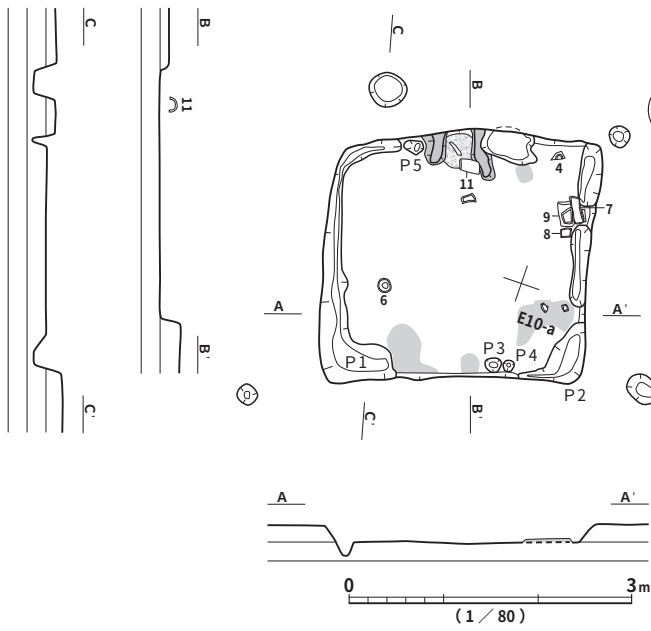
出土遺物は、総重量13,227.9gであり、このうち土器は5,532.6g、縄文土器をのぞく重さは4,757.1gであった。実測可能遺物は、1・2が土師器甕、3が土師器壺、4が灰釉皿、5が土師器皿、6が土師器杯である。土器以外では、7～9が平瓦、10・11が丸瓦である。出土位置は、4・6が床面上3cm、瓦の7～9・11は床面上7～12cmであるが、調査写真による限り、おおむね本遺構にともなう可能性が高い。

SI54 (Fig.94～96・187・192・198、PL.24・75・92・101・122～124・127・130・140)

SI54は、E10・E11区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はやや隅丸の方形を呈し、竪穴全体規模は3.04m(主軸)×3.24m、カマド煙道部を含む主軸長は4.58m、確認面掘形面積は10.34㎡、確認面からの深さは0.20～0.28m程度を測る。主軸方位はN-14.0°-Wである。カマドは北壁中央にあり、調査写真によると、右袖の一部が認めら

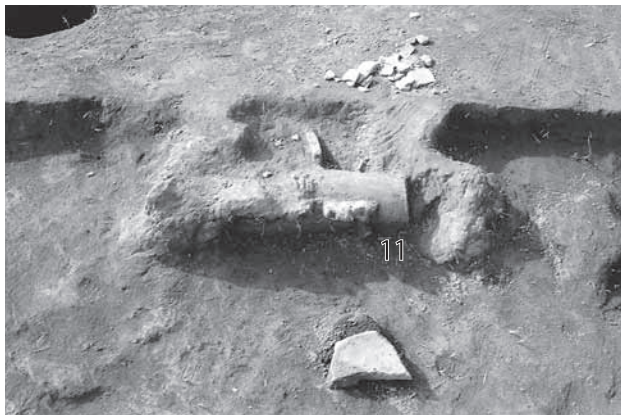
SI53



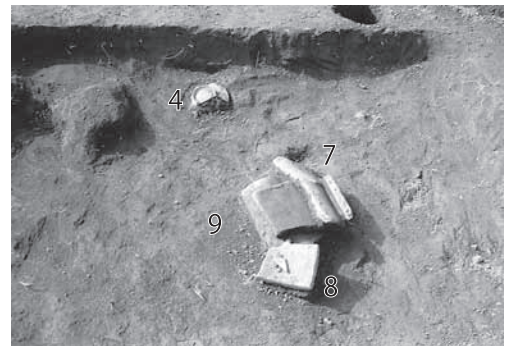
ph.1 全景



ph.2 全景



ph.3 カマド、出土状況 11



ph.4 出土状況 4・7・8・9

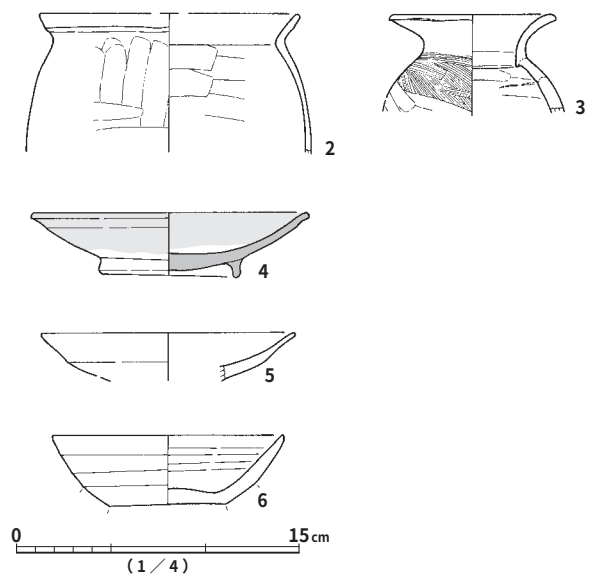
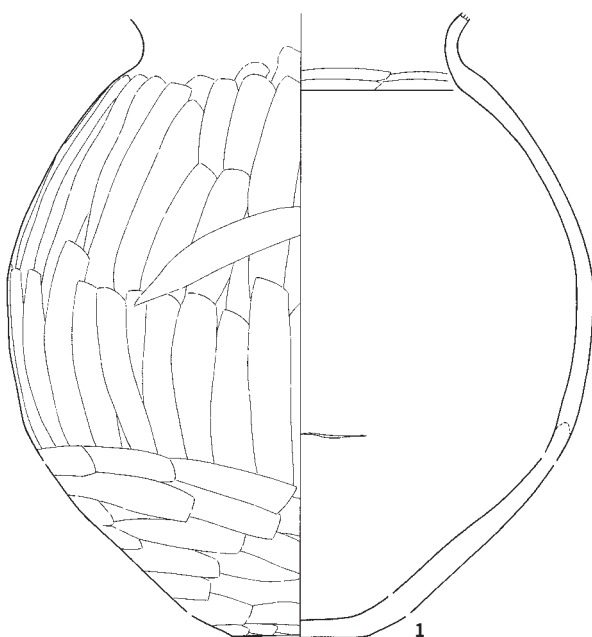


Fig.91 SI53(1) 遺構遺物・調査状況

SI53

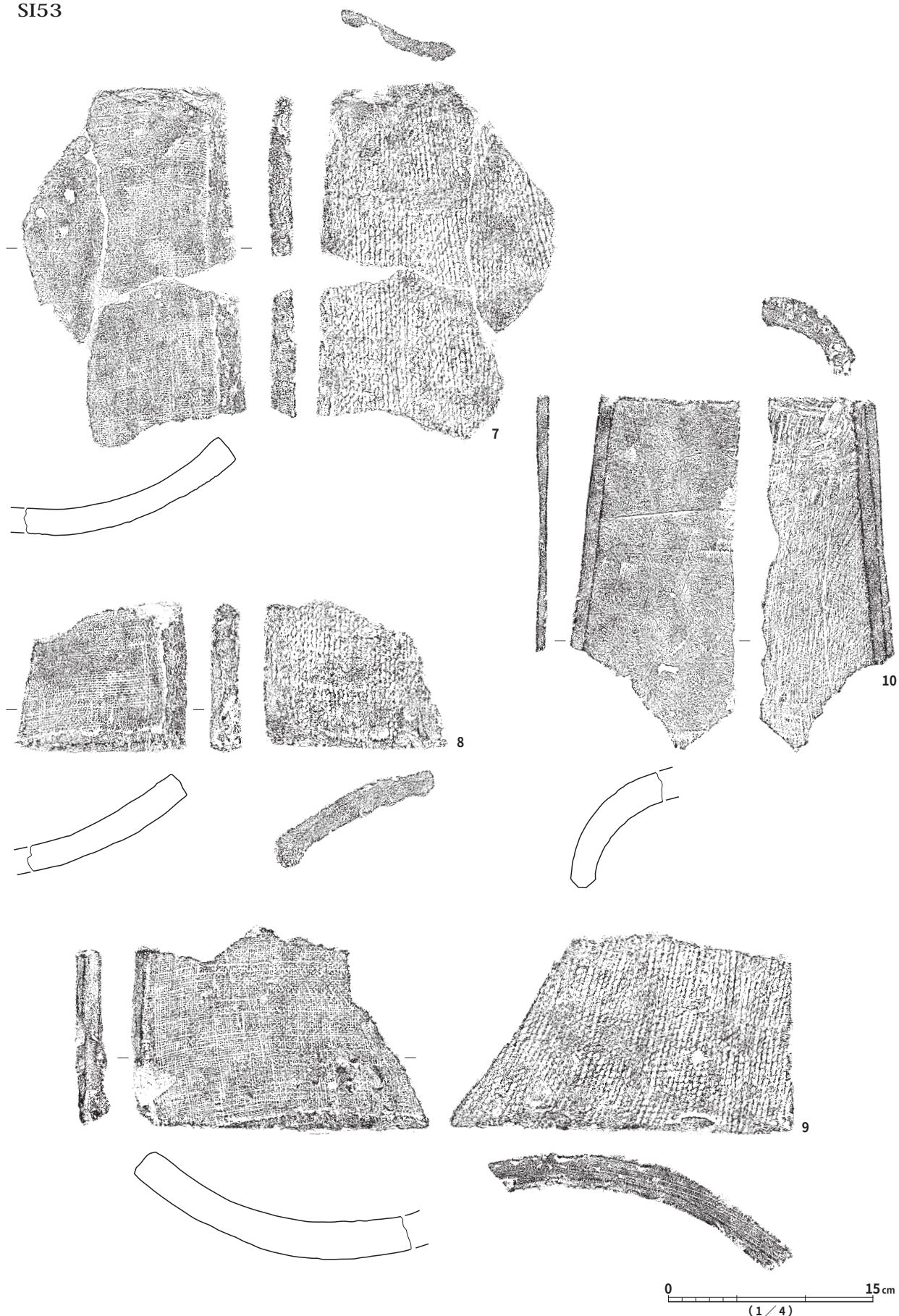


Fig.92 SI53(2) 遺物

SI53

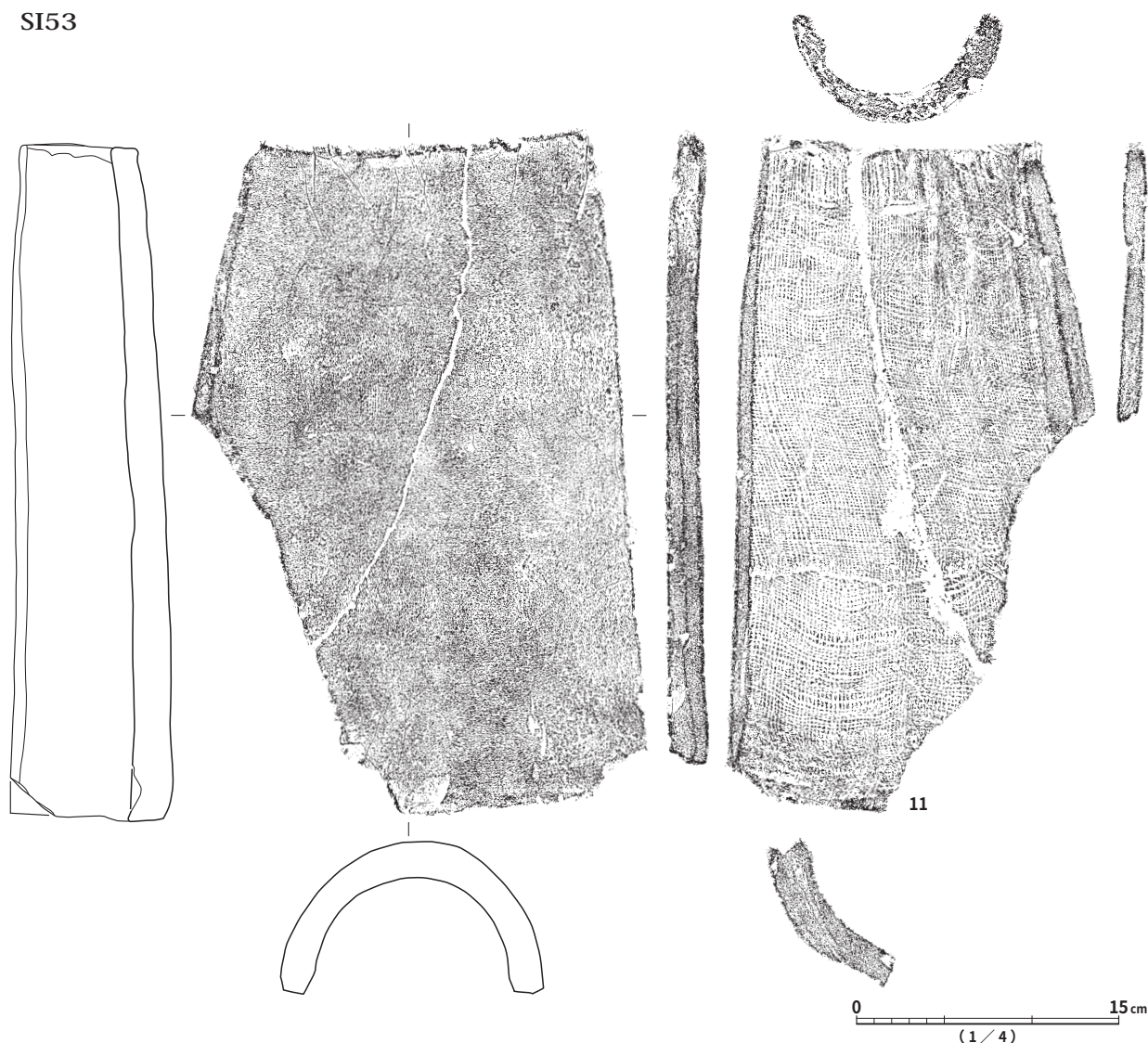


Fig.93 SI53(3) 遺物

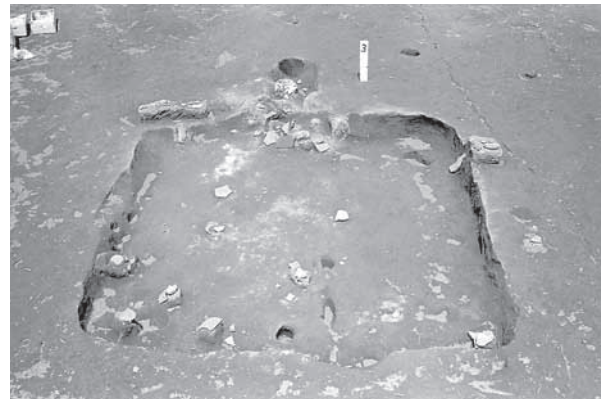
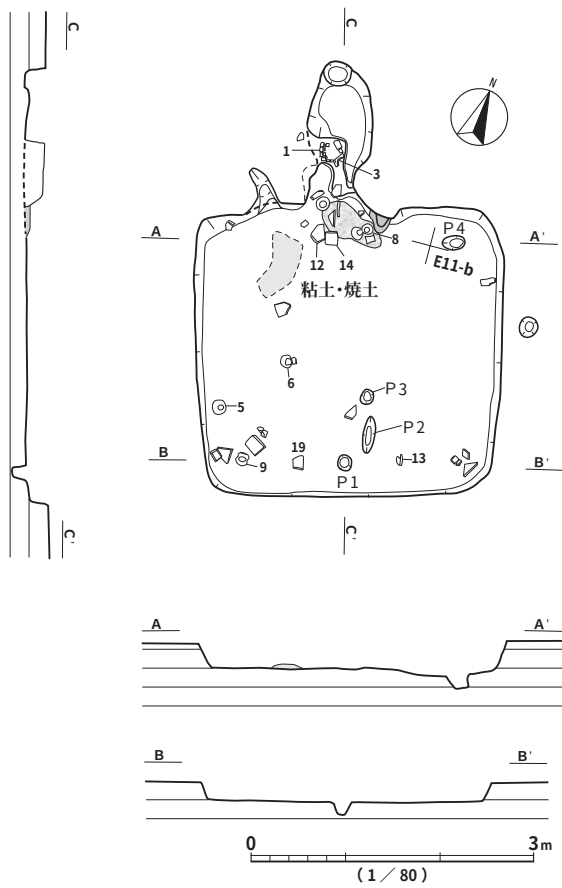
れる。左袖は、竪穴外に張り出す可能性もあるが明確ではない。カマド前面に瓦があり、調査メモには、「瓦による組みカマド」といった表現がある。燃焼部奥の掘り残しは、煙道天井部の遺存とみるよりは、遺物出土位置の保存を目的としたものと推定するが、図面ではそのまま図化されている。

出土遺物は、総重量34,269.3gであり、このうち土器は20,881.2g、縄文土器をのぞく重さは3,337.3gであった。実測可能遺物は、1が須恵器甕、2が土師器甕、3が灰釉碗、4～7・9～11が土師器杯、8が須恵器杯、12が土師器高杯である。土器以外では、13が銅椀、14～18が平瓦、19が丸瓦である。他に磨石 (Fig.187-28・30)・石皿 (Fig.192-71)・石棒 (Fig.198-119) が出土している。出土位置は、13の銅椀と14・17が床面、1・3がカマド煙道部、6・8が床面上3cm、5が9cm、19が15cm、9が18cmである。

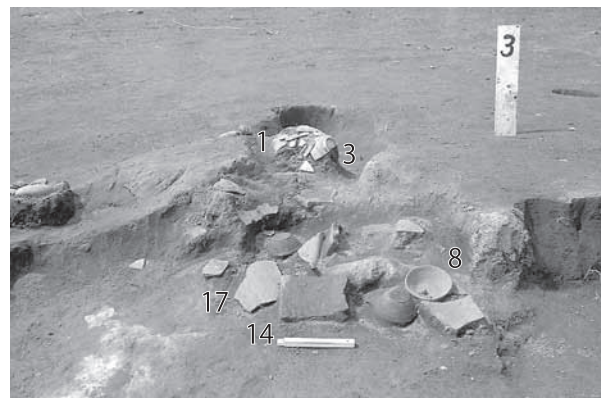
SI55 (Fig.97～99・186・187・190・192・197、PL.24・25・75・76・101・121・122・124・127・130・131)

SI55は、E9・E10・F9・F10区に所在する。SD12が竪穴対角線上に接続する。新旧関係はSD12が新しいと考えるが、確たる根拠はない。調査写真によると、SD12底面は竪穴床面とほぼ同レベルに

SI54



ph.1 全景



ph.2 カマド、出土状況 1・3・8・14・17



ph.3 出土状況 5・6・9・19



ph.4 カマド、出土状況 1・3

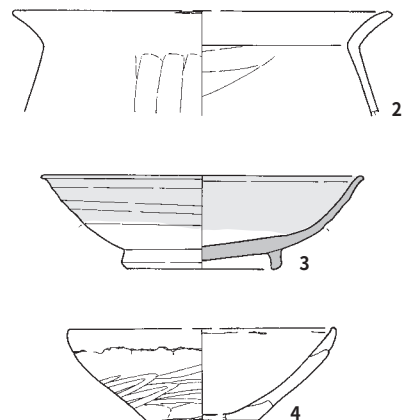
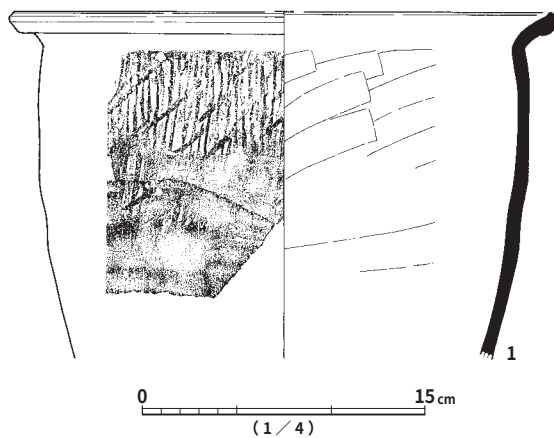


Fig.94 SI54(1) 遺構遺物・調査状況

SI54

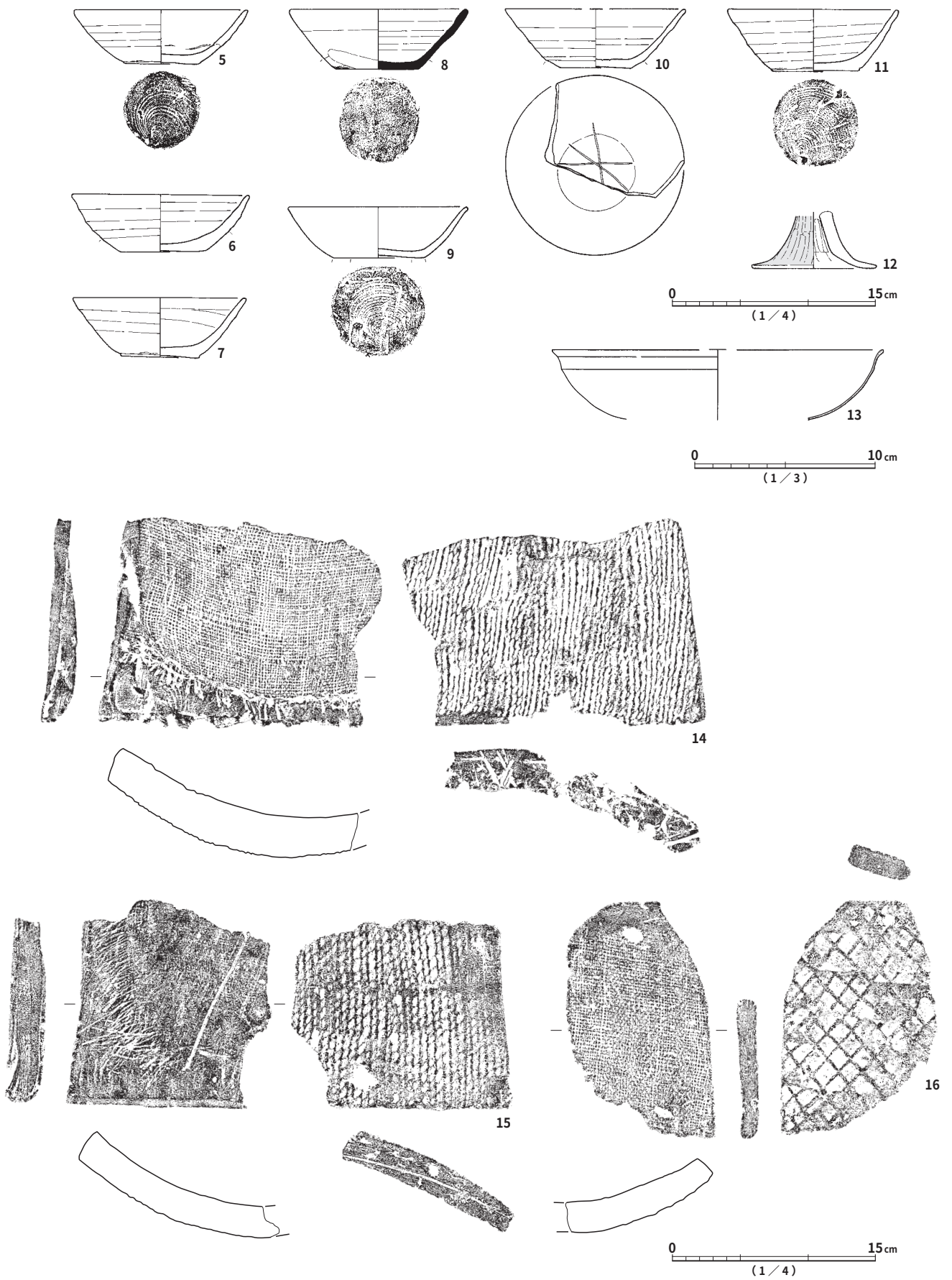


Fig.95 SI54(2) 遺物

SI54

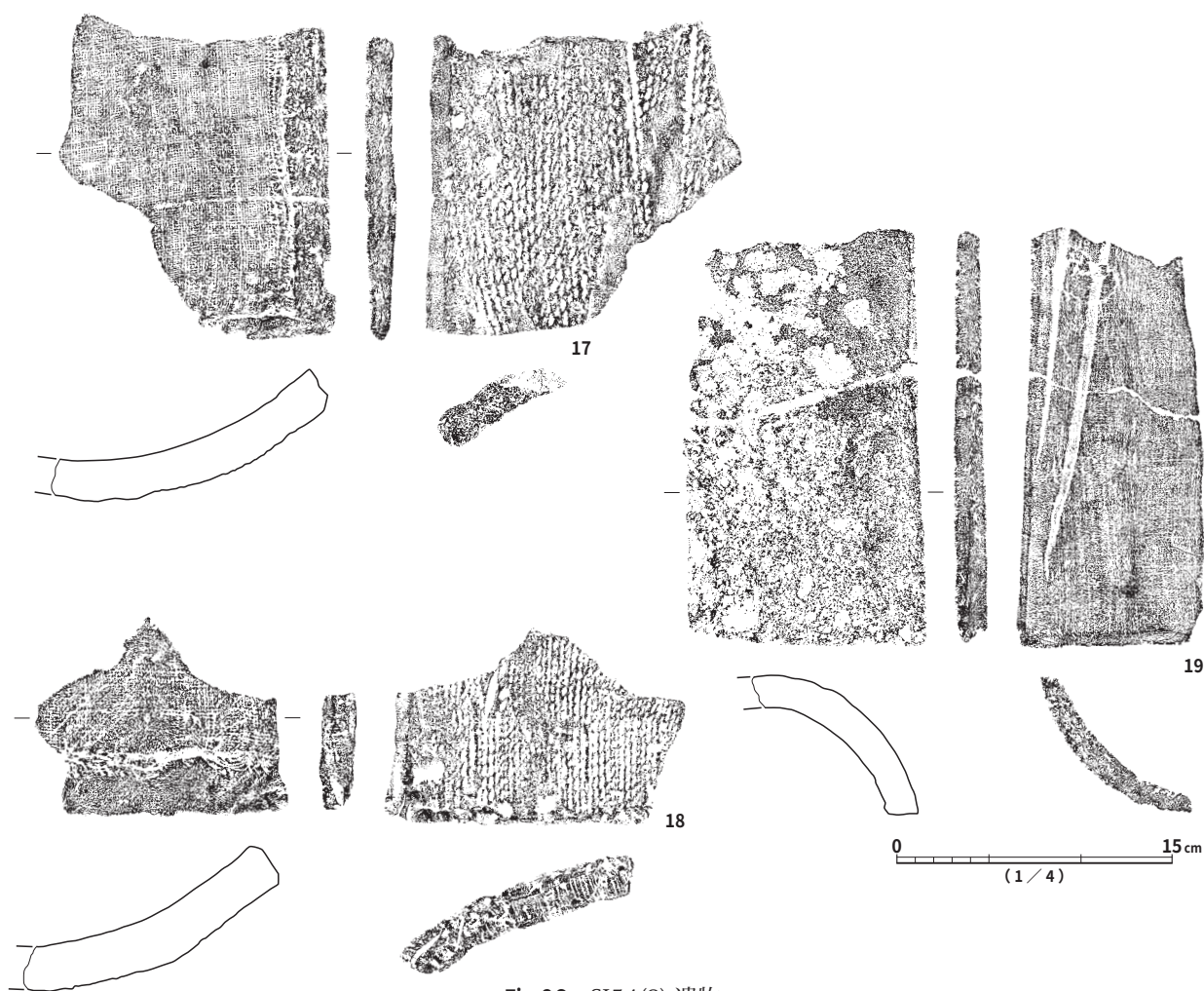


Fig.96 SI54(3) 遺物

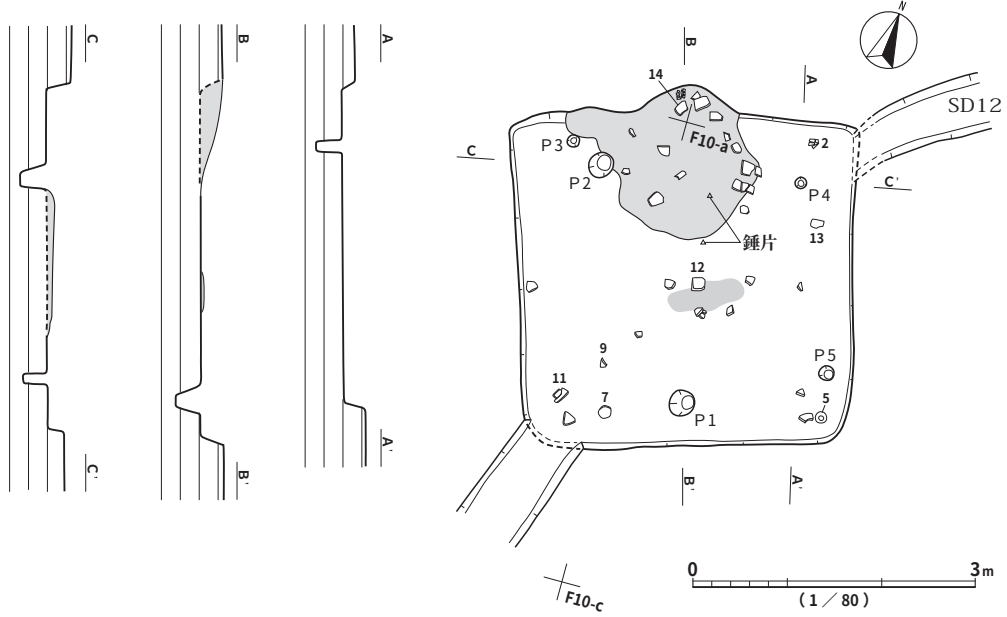
もかわらず、竪穴内の痕跡は明確ではない。いずれにせよ、溝に相当する部分の遺物の帰属には注意が必要である。

竪穴平面形態はほぼ方形を呈し、竪穴全体規模は3.48m(主軸)×3.68m、カマド煙道部を含む主軸長は3.79mを測る。確認面掘形面積は12.46㎡、確認面からの深さは0.15～0.28m程度である。主軸方位はN-22.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。ただし、カマド図面は粘土範囲の輪郭のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は、写真を含め記録一切ない。カマド正面に焼土があるが、床面との比高がほとんどないことから、炉の可能性もあると考える。

Pitは、P1が深さ0.27m、P2が0.28mであった。主柱穴は認められない。壁溝も検出されていない。

出土遺物は、総重量27,451.8gであり、このうち土器は11,881.1g、縄文土器をのぞく重さは3,389.8gであった。実測可能遺物は、1～6が土師器杯、7が土師器皿、8が灰釉碗、9が原始灰釉瓶、10が須恵器甗、11が須恵器甕である。土器以外では、12・15・16が平瓦、13・14丸瓦、17が砥石、他に磨石(Fig.186-23、187-27)・敲石(Fig.190-51)・台石(Fig.192-69)・磨製石斧(Fig.197-101)が出土している。また、現物は不明であるが、カマド付近2か所から鉄製品が出土している。出土位置は、2が床面から、5・7・9が床面上10～13cm、瓦のうち13がほぼ床面から出土している。

SI55



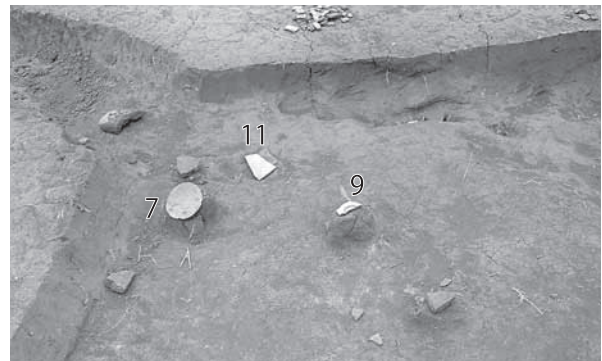
ph.1 全景



ph.2 カマド、出土状況 14



ph.3 カマド、出土状況



ph.4 出土状況 7・9・11



ph.5 出土状況 7・11



ph.6 出土状況 5

Fig.97 SI55(1) 遺構遺物・調査状況

SI55

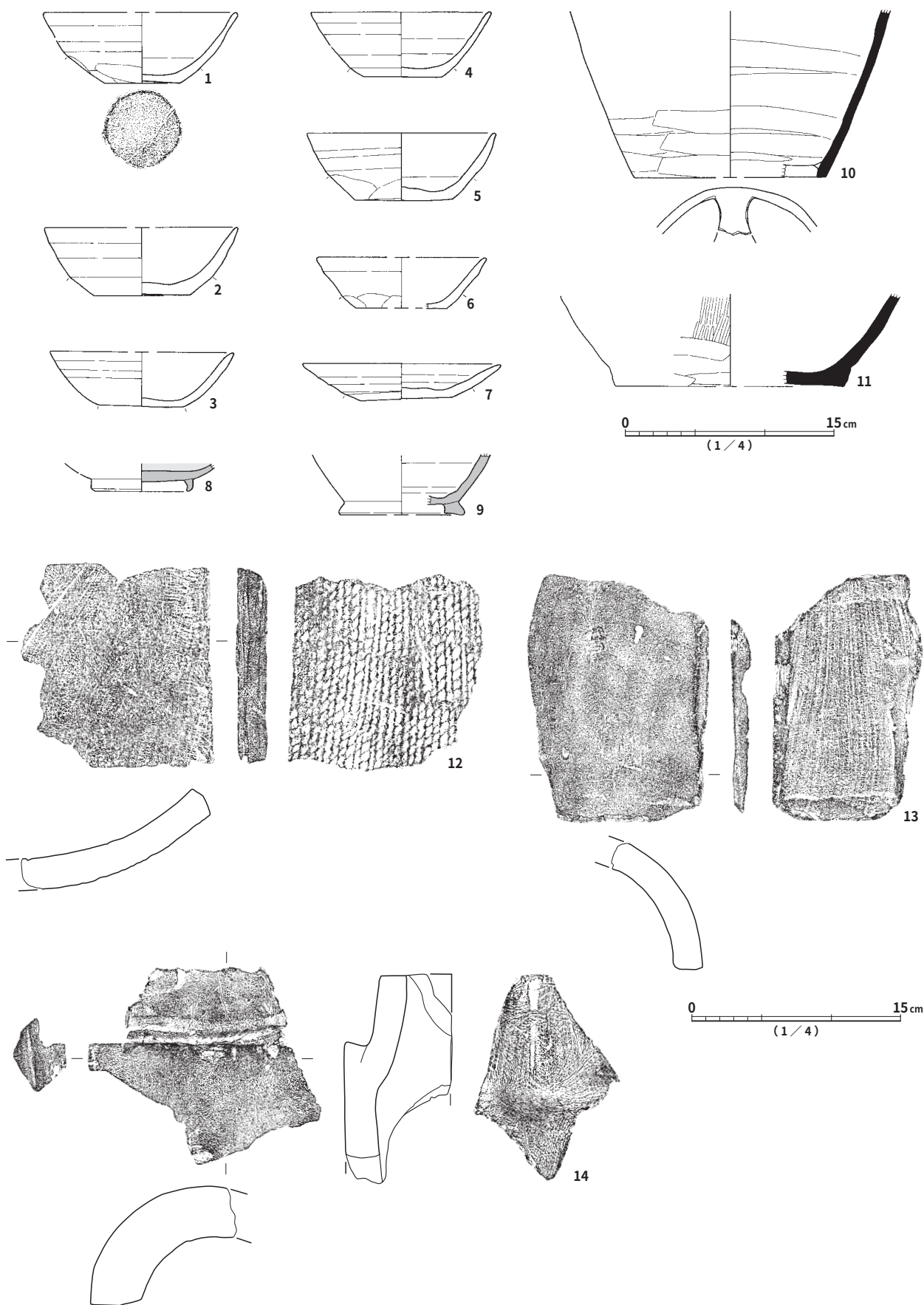
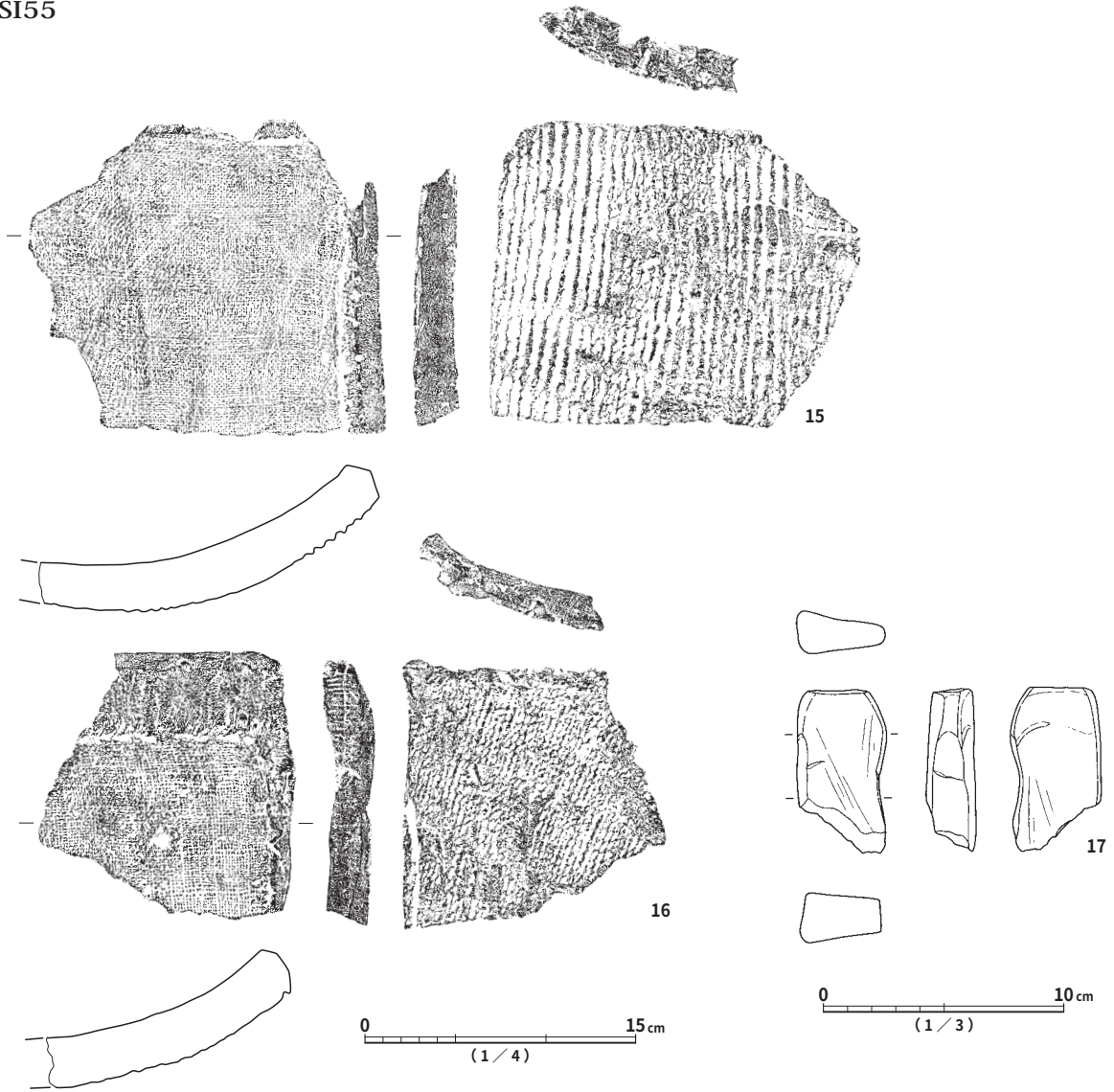


Fig.98 SI55(2) 遺物

SI55



SI56

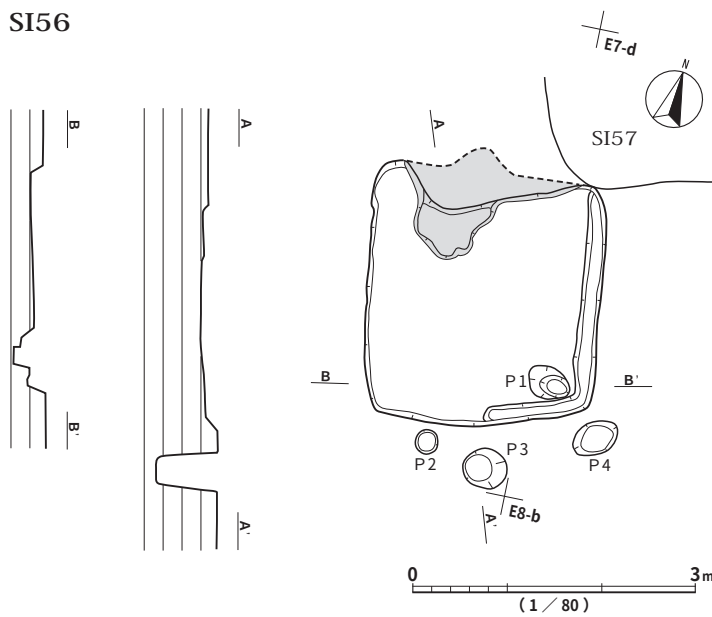


Fig.99 SI55(3) 遺物、SI56 遺構

SI57

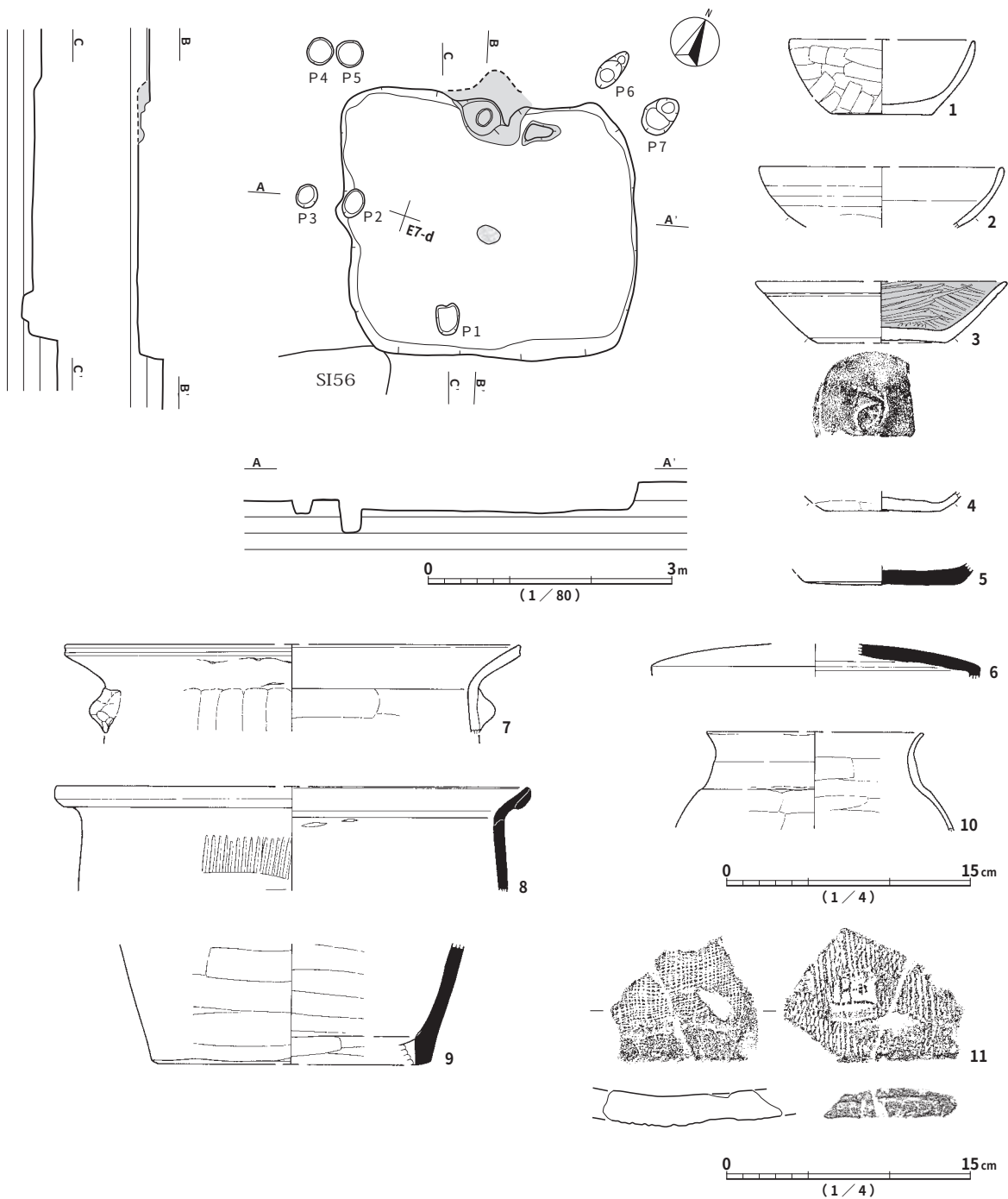


Fig.100 SI57 遺構遺物

SI56 (Fig.99)

SI56は、E7区に所在する。竪穴北東隅部でSI57と接している可能性がある。新旧関係は不明。

本竪穴平面図は、カマド部分を大きく掘り残した状態と推定するが、現場写真が一切ないため、詳細は明らかでない。煙道部側の復元線は根拠のない推定線である。

竪穴平面形態は、やや長方形になると推定する。竪穴全体規模は現状で2.78m(主軸)×2.48m、確認面掘形面積は推定で6.40m²、確認面からの深さは0.23～0.50m程度を測る。主軸方位はN-15.0

°-Wである。カマドは、北壁中央にあるが、詳細は不明。主柱穴は検出されていない。P1は貯蔵穴の可能性もあるが、深さは0.17mと浅い。壁溝は、東辺部から南東隅部で検出している。

出土遺物は、総重量687.8gであり、このうち土器は587.8gであった。実測可能遺物は出土していない。

SI57 (Fig.100、PL.76・92・101・131)

SI57は、E7区に所在する。竪穴南西隅でSI56と接している可能性がある。新旧関係は不明。本竪穴もカマド部分を掘り残していると思われるが、現場写真が一切ないため、細部の検討はできない。

竪穴平面形態は隅丸横長方形を呈し、竪穴全体規模は3.23m(主軸)×3.53m、確認面掘形面積は推定で10.92㎡、確認面からの深さは0.10～0.34m程度を測る。主軸方位はN-26.0°-Wである。カマドは北壁中央にあるが、詳細は不明。Pit状の掘り込みも意味不明。竪穴中央部、カマド正面に焼土があるが、床面との比高がほとんどないことから、炉の可能性はある。主柱穴は検出されていない。Pitの深さは、P1が0.12m、P2が0.27m程度と浅い。壁溝は検出されていない。

出土遺物は、総重量6,183.1gであり、このうち土器は5,003.1g、縄文土器をのぞく重さは2,893.1gであった。実測可能遺物は、1～4が土師器杯、5が須恵器杯、6が須恵器平瓶、7が土師器甑、8が須恵器甕、9が須恵器甑、10が土師器甕である。1は非ロクロ整形、3は内面黒色処理の杯である。土器以外では、11が平瓦である。これには「周」押印がある。出土位置はいずれ不明。

SI58・59 (Fig.101・102、PL.76・101・131)

SI58・59は、E6・E7区に所在する。調査段階ではA・B2棟にわけられているが、図面ではそれぞれの範囲が図示されていない。遺物は出土位置の記載がなく、一括遺物も分離されていない。また、竪穴外にも焼土範囲がおよんでいることから、壁際の堆積焼土やカマドを掘り残した状態で図化されたと思われる。現場写真もないことから検討の加えようもないが、一応、2棟の推定境界線を図示しておく。床面高は、おおむね推定線あたりを境界として、SI58側が12cmほど深い。ただし、現場図面では段差の表現がない。新旧関係は不明。なお、挿図で焼土とした範囲について、原図では何種類かに描き分けられている。注記凡例がないため明らかではないが、粘土などの範囲を含む可能性がある。

SI58は、左側部分にあたる。竪穴平面形態は不明。竪穴規模は、現状最大で3.67m(主軸)×2.95mを測る。北壁の焼土ないし粘土はカマドと考えられ、主軸長はカマド煙道部を含む可能性がある。確認面からの深さは0.02～0.11m程度を測る。主軸方位はおおむねN-12.0°-Wである。炉・柱穴などの屋内施設は確認できない。南辺部壁際では焼土の堆積が検出されている。火災に遭った可能性が高い。

SI59は、右側部分にあたる。竪穴平面形態は不明。竪穴規模は、現状最大で3.02m(主軸)×3.07mを測る。北壁焼土ないし粘土はカマドと推定する。確認面からの深さは0.04～0.10m程度を測る。主軸方位はN-21.0°-Wである。炉・柱穴などの屋内施設は検出されていない。竪穴中央西側に焼土がみられるが、これは、カマド崩落による粘土の可能性もある。

出土遺物は、総重量12,557.5gであり、このうち土器は4,197.5g、縄文土器をのぞく重さは3,727.5gであった。実測可能遺物は、1・4が土師器甕、2・24が須恵器甕、3が土師器小形甕、5・6が灰釉壺、7～16・19～23が土師器杯、17が土師器高台付杯、18が灰釉碗である。土器以外では、

SI58・59

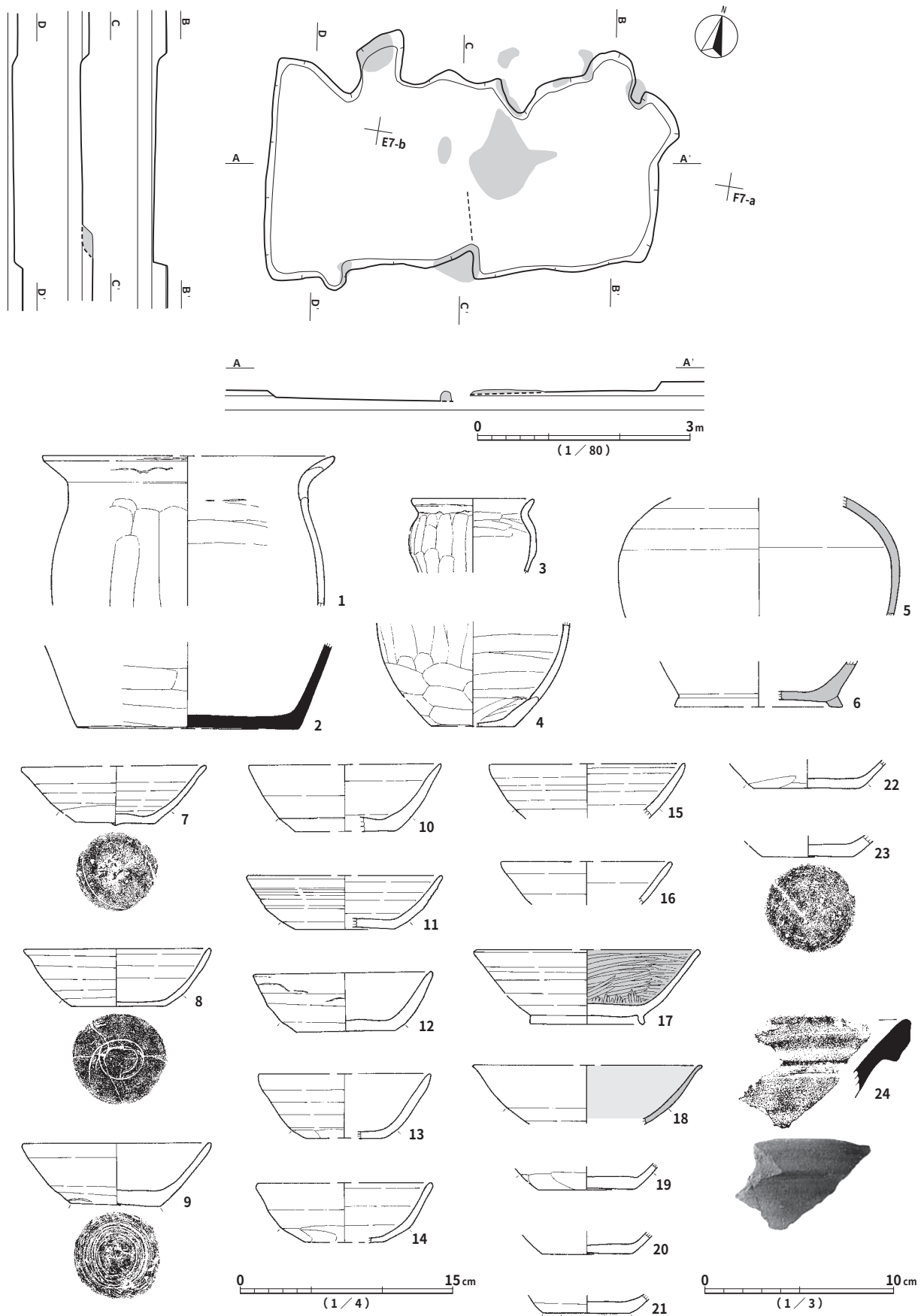


Fig.101 SI58(1) 遺構遺物、SI59(1) 遺構遺物

SI58・59

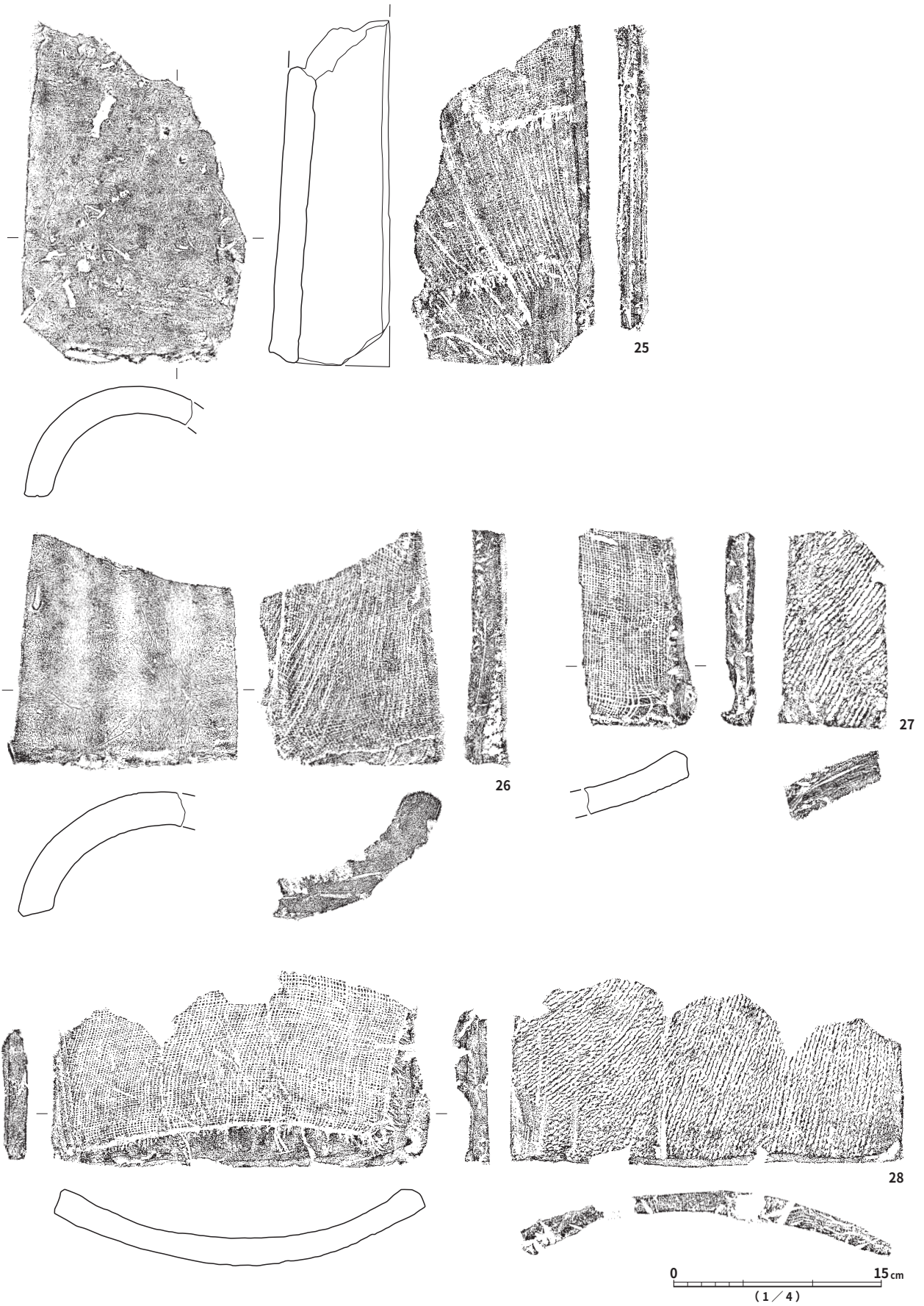


Fig.102 SI58(2) 遺物、SI59(2) 遺物

25・26が丸瓦、27・28が平瓦である。出土位置は不明であるが、調査メモに概略図がある。これによると、1・5・8・9・11・12・14・17・19・20がSI58側、3・4・7・10・13・15・16・18・21～24がSI59側から出土している。ただし、他遺構では、調査メモの番号と注記番号が一致しない場合もあり、本遺構では現場写真での照合ができないため、かならずしも確実ではない。他に、鉄製の直刀がSI59側から出土しているようであるが、現物が確認できない。

SI60 (Fig.103・104、PL.25・76・77・101・102・120・131・140)

SI60は、F6区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は長方形を呈し、竪穴全体規模は4.61m(主軸)×4.25m、確認面掘形面積は18.81㎡、確認面からの深さは0.19～0.39m程度を測る。主軸方位はN-7.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。ただし、カマド図面は粘土範囲の輪郭のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は明らかでない。Pitは、各隅のP1～3が主柱穴になると考えられ、深さは0.40～0.58mを測る。北東隅部は、遺物・焼土の除去後の図面、写真がないため確認できない。他は、P4が深さ0.40m、P5が0.19m、P6が0.30mを測る。壁溝はほぼ全周する。北東部壁際で焼土の堆積が確認されているが、火災によるものかどうかは明らかでない。

出土遺物は、総重量9,953.5gであり、このうち土器は6,902.9g、縄文土器をのぞく重さは6,102.9gであった。実測可能遺物は、1・2が土師器甕、3～5が土師器甕、6が須恵器壺、7が須恵器高台付杯、8・9が須恵器甕、10～14が土師器杯、15が灰釉碗、16が緑釉耳皿、18は置きカマドである。土器以外では、20が平瓦、19が鉄鏃である。17は宮ノ台式の広口壺形土器である。出土位置は、16が床面、2・10・18・19が覆土下層、20が壁溝内から出土している。

SI61 (Fig.105・106、PL.25・77・102・132・140)

SI61は、F6区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はやや菱形に歪む。竪穴全体規模は推定で2.53m(主軸)×2.53m、カマド煙道部を含む主軸長は2.80mを測る。確認面掘形面積は6.58㎡、確認面からの深さは0.20～0.37m程度を測る。主軸方位はN-23.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。ただし、カマド図面は粘土範囲の輪郭のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は明らかでない。主柱穴他Pitは検出されていない。壁溝はほぼ全周する。北東・北西隅部から、粘土塊が検出されている。

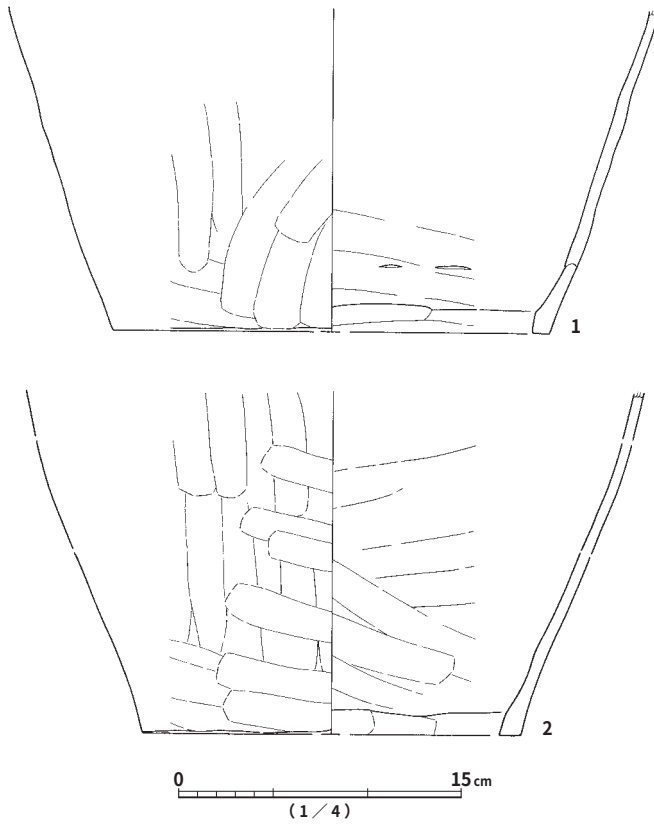
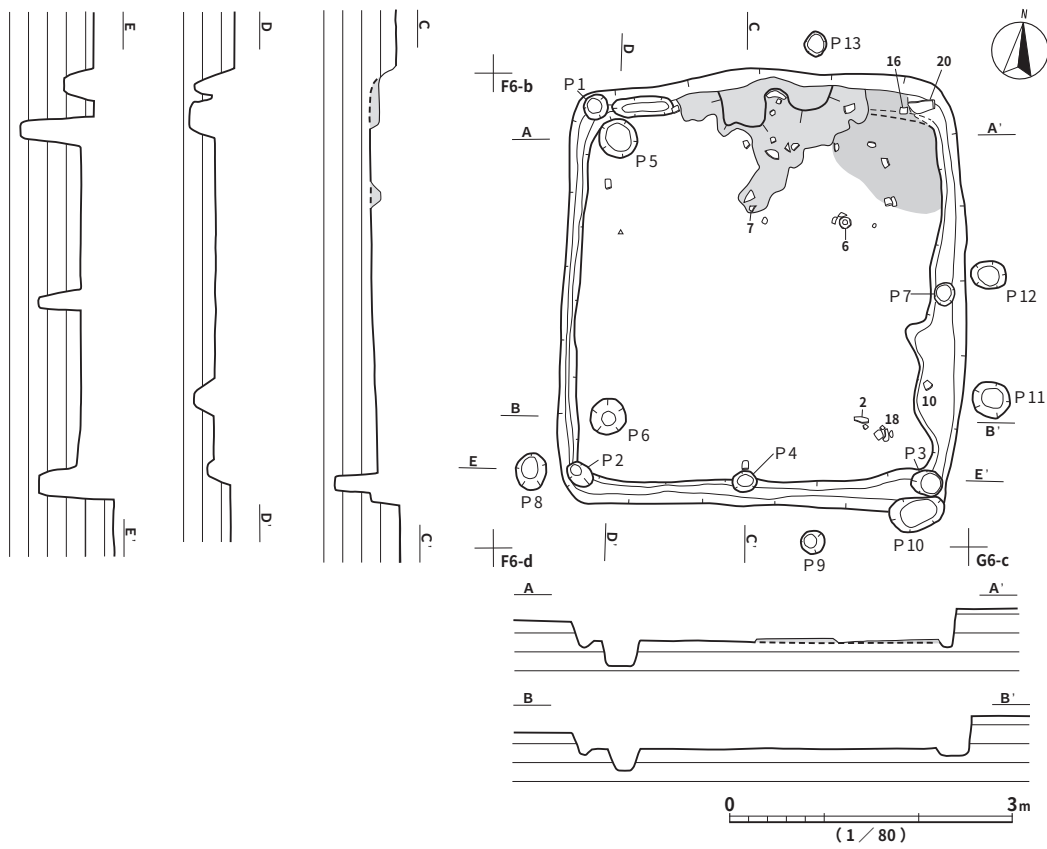
出土遺物は、総重量2,719.0gであり、このうち土器は616.3g、縄文土器をのぞく重さは616.3gであった。実測可能遺物は1～4が土師器杯、5が緑釉皿である。土器以外では、7が平瓦、8・9が丸瓦、6が不明鉄器である。出土位置は、2～4・7・9が床面上、8が壁溝内、6が床面上3cm、1が床面上17cmである。

SI62 (Fig.107・108、PL.77・102・132)

SI62は、G7区に所在する。竪穴東隅部でSI63と重複する。竪穴範囲が明確ではないが、SI07とも重なる可能性がある。新旧関係は、本遺構に対してSI63が新しい。これは、重複部分にあるSI63のカマドが根拠となる。

竪穴平面形態はおおむね方形になると思われるが、南側範囲が明確ではない。竪穴規模は推定で3.08m(主軸)×3.60m、確認面掘形面積は推定で10.78㎡、確認面からの深さは最大で0.21m程度を測る。北西-南東方向を主軸とした場合の方位はN-45.0°-Wである。カマド・炉は検出されていない。

SI60



ph.1 カマド



ph.2 カマド

Fig.103 SI60(1) 遺構遺物・調査状況

SI60

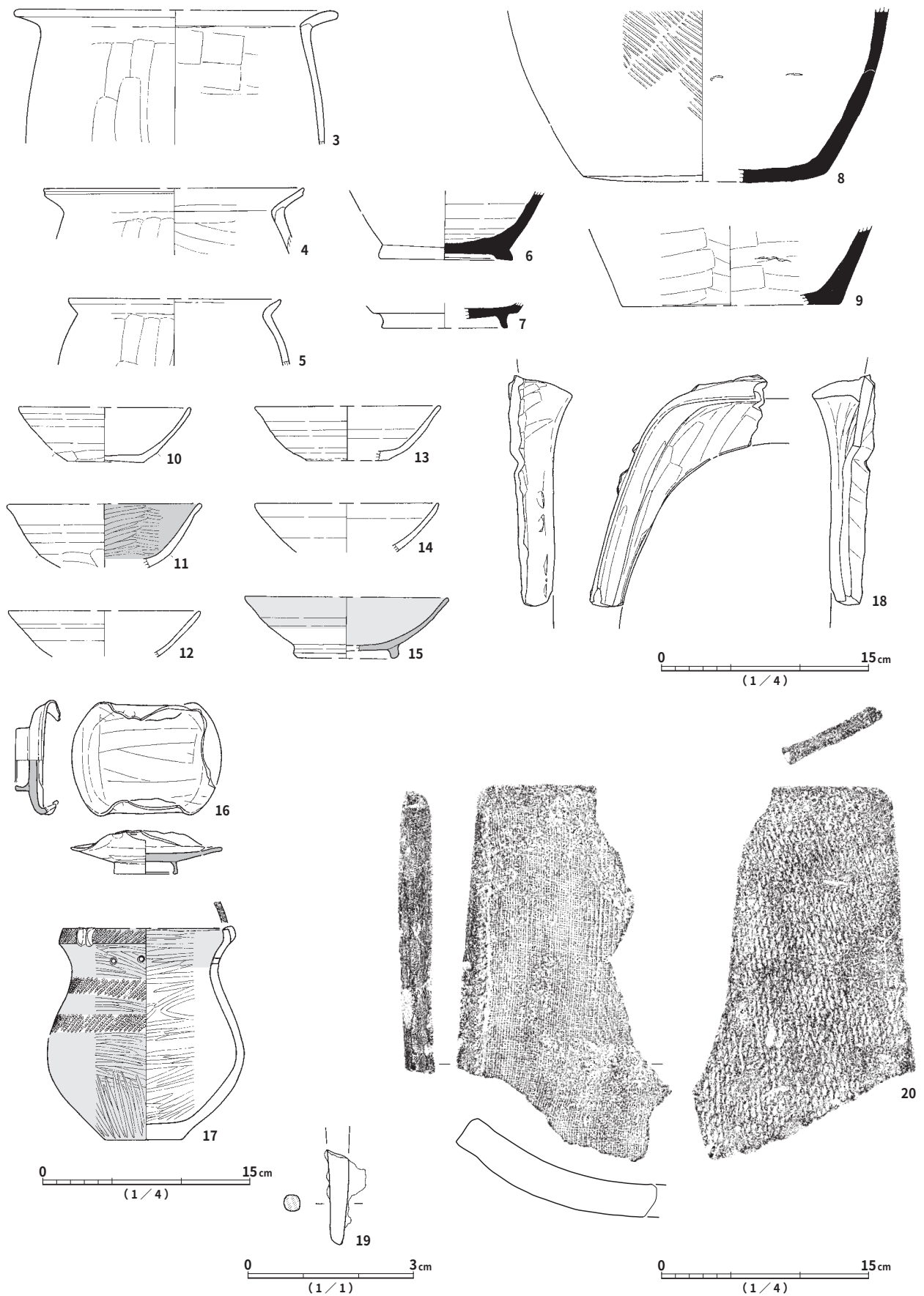
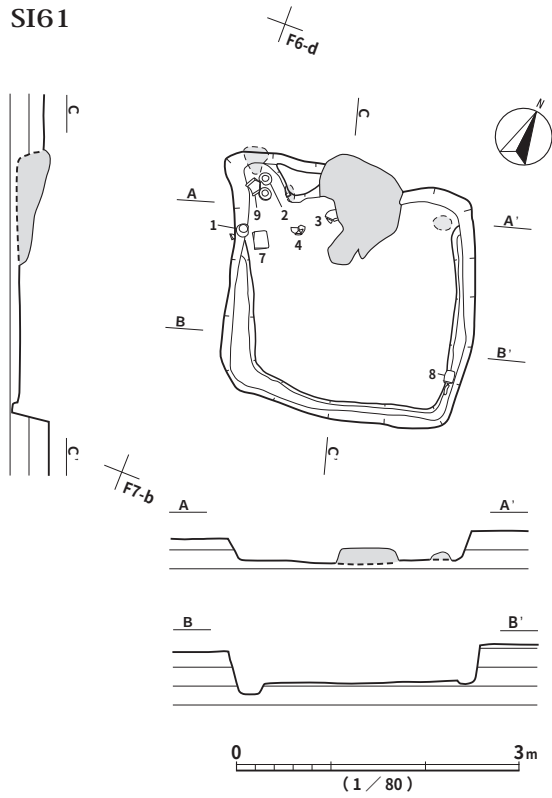


Fig.104 SI60(2) 遺物

SI61



ph.1 カマド、出土状況 1・3・4



ph.2 出土状況 1・2・4・7・9



ph.3 出土状況 2・9



ph.4 出土状況 8

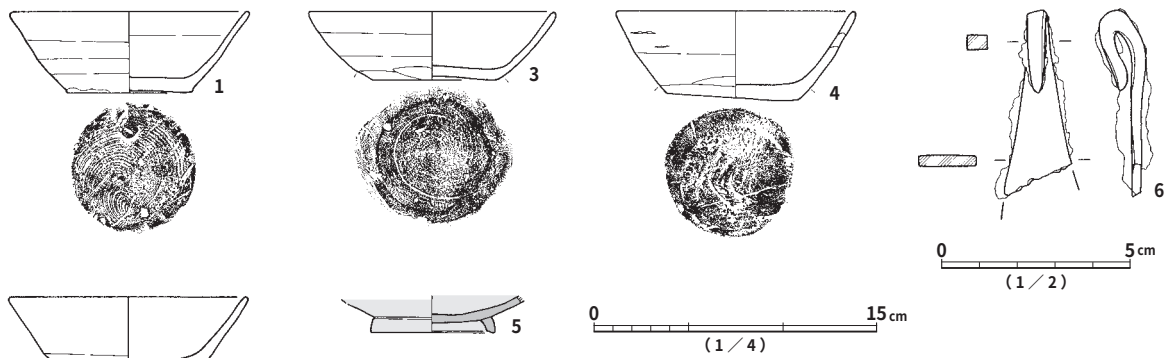


Fig.105 SI61(1) 遺構遺物・調査状況

SI61

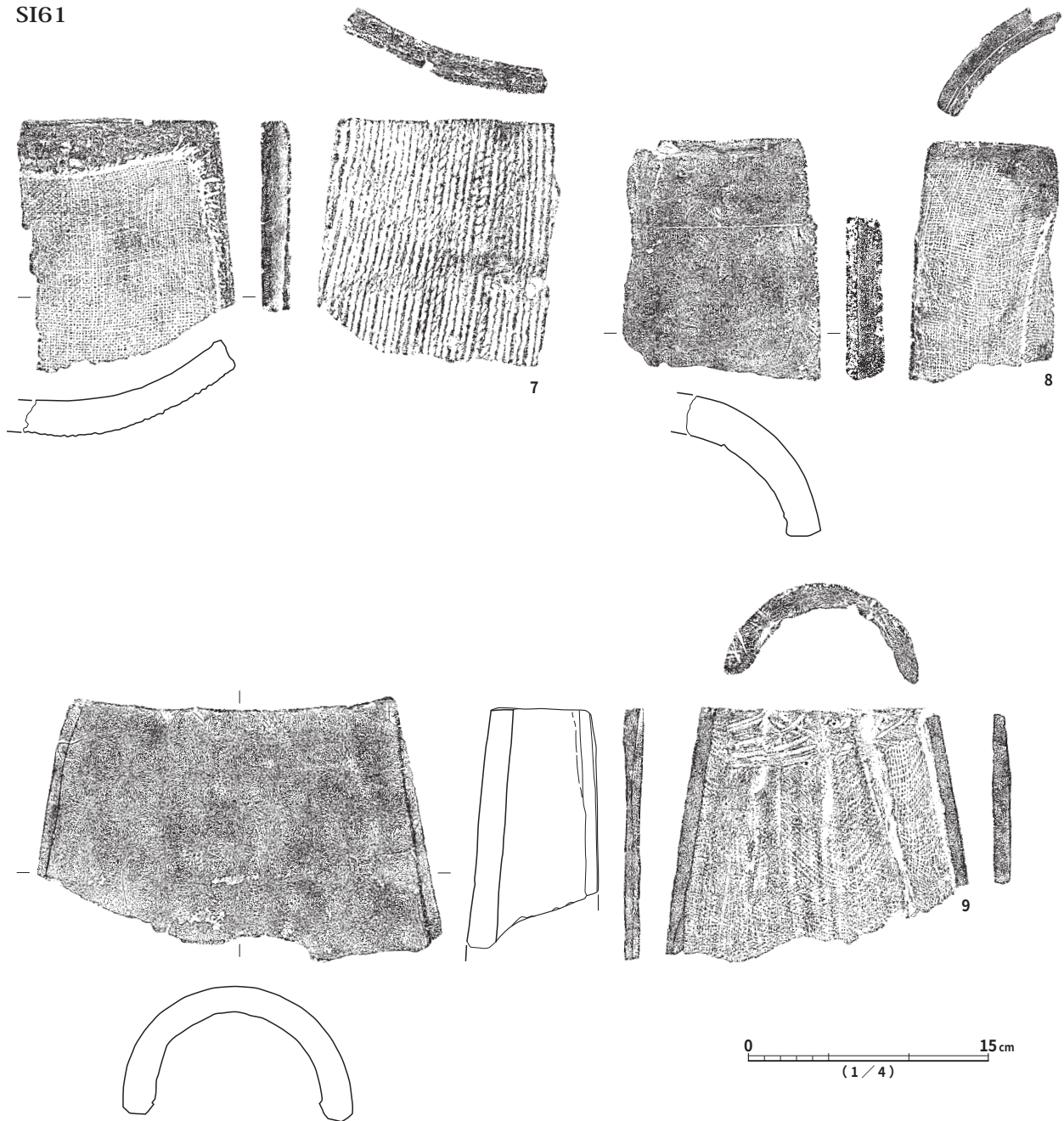


Fig.106 SI61(2) 遺物

い。中央焼土は床面からやや上にあるため炉ではない。Pit は、P5が深さ0.36mを測るが、他はいずれも0.2m程度と浅い。壁溝は検出されていない。中央焼土は、火災によるものかどうか判断できない。

出土遺物は、総重量2,057.8gであり、このうち土器は630.8g、縄文土器をのぞく重さは270.8gであった。実測可能遺物は、1・2が土師器甕である。土器以外では、3・4が平瓦である。出土位置は1が床面上である。図面ではP6脇に瓦があるが、現物と対照できない。他に、軽石の小破片が出土している。

SI63 (Fig.107~112・190、PL.25・26・77・78・92・102・121・124・132・133・140)

SI63は、G7区に所在する。SI07・62・64と重複する。遺構検出状況などから、本遺構に対してSI07・62が古い。ただし、SI64との関係は出土遺物を含め判断が難しい。床面高は、本竪穴に対して、

SI64はほぼ同レベル、SI07は約11cm、SI62は約19cm高い。

竪穴平面形態は横長方形を呈し、竪穴全体規模は3.14m(主軸)×3.45m、カマド煙道部を含む主軸長は4.23m、確認面掘形面積は10.95m²、確認面からの深さは0.18～0.42m程度を測る。主軸方位はN-40.0°-Wである。カマドは、北西壁中央にあり、カマド本体が壁から大きく張り出している。詳細は明らかでないが、右袖に瓦を立て(Fig.107-ph.4)、煙道部も瓦を合わせ筒状にしている(Fig.107-ph.2)。主柱穴は検出されていない。P1は深さ0.19mである。壁溝は、北東・南東辺で検出している。現場写真によると、西側が全体的に掘り下げられているが、これは竪穴掘形であろう。南東壁際には灰層が分布する。

出土遺物は、総重量26,472.3gであり、このうち土器は15,059.1g、縄文土器をのぞく重さは11,591.3gであった。実測可能遺物は、1～11・17・18が土師器甕、12・44が須恵器甕、13～16が須恵器壺、19～21・23～25・27・29～32・43が土師器杯、22・26・36～40が須恵器杯、28・33が土師器皿、34・35が土師器高台付杯、41が須恵器杯蓋である。42は須恵器転用硯であり、底面内面には十字の墨書がある。また、27の体部外面には「田□子」、31の底部外面には「四院」の墨書がある。土器以外では51～54が平瓦、55・56が丸瓦、45が鉄製穂摘具、46が筒金具、47が鉄製紡錘車、48が鉄製釘、49が鉄滓、50が砥石である。他に敲石(Fig.190-56)が出土している。出土位置が確定できた遺物は少ない。7が床面、37が床面下9cm、15・51・53が床面上3～5cm、14・52・56がカマド、12・42が床面上17cmから出土している。カマド材の瓦の大半は所在が明らかではない。

SI64 (Fig.113・187・188、PL.26・78・102・123・140)

SI64は、G7区に所在する。南西隅部がSI07・63と接している。遺構検出状況から新旧関係を判断することは難しい。

竪穴平面形態は長方形を呈し、竪穴全体規模は3.57m(主軸)×2.99m、カマド煙道部を含む主軸長は4.68m、確認面掘形面積は10.39m²、確認面からの深さは0.38～0.49m程度を測る。主軸方位はN-11.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。カマド図面は粘土範囲の輪郭のみであり、袖や燃烧部、カマド掘形などは明らかでない。ただし、本竪穴の調査写真として、カマドの掘りが進んだ段階のものがある(Fig.113-ph.2)。右袖の瓦など、図面以上の詳細を見ることが可能であり、煙道部の出土土器は実測図1に対応する。しかし、この写真が、本当にSI64のものかどうか確証をもてない。1の甕形土器は、前段の写真(Fig.113-ph.1)の右端のようにも見えるが確実ではない。

主柱穴・壁溝は検出されていない。南辺側の掘り込みは竪穴掘形と推定しておく。カマド前面に焼土があるが、灰混じりとの注記があることから、カマド崩落によるものであろう。

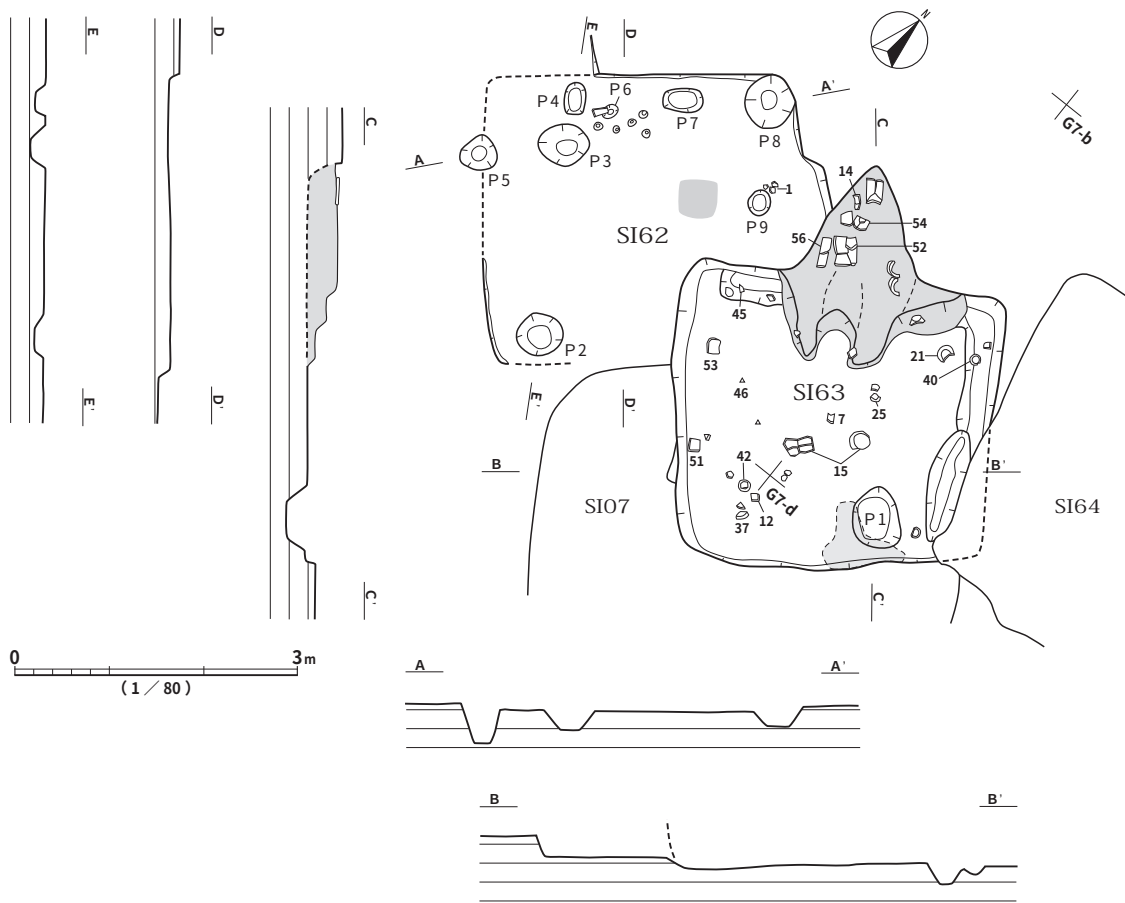
出土遺物は、総重量2,928.2gであり、このうち土器は1,061.9g、縄文土器をのぞく重さは1,041.9gであった。実測可能遺物は、1が土師器甕、2が土師器小形甕、3が土師器杯、4～6が須恵器杯である。土器以外では、7が鉄製刀子、8が鉄鏃である。他に磨石(Fig.187-29、188-38)が出土している。出土位置は、3が床面上5cmである。1については、上記のとおり現場写真が本遺構であればカマド煙道部からの出土である。その他カマド関係の遺物は所在が明らかではない。

SI65 (Fig.114～117・188、PL.27・78・91・103・121・123・133～135・140)

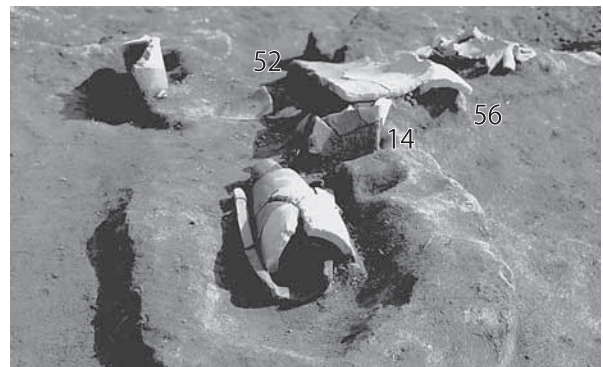
SI65は、G6区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は隅丸横長方形を呈し、竪穴全体規模は3.57m(主軸)×3.89m、カマド煙道部を含

SI62・SI63



ph.1 全景



ph.2 SI63 カマド、出土状況 14・52・56



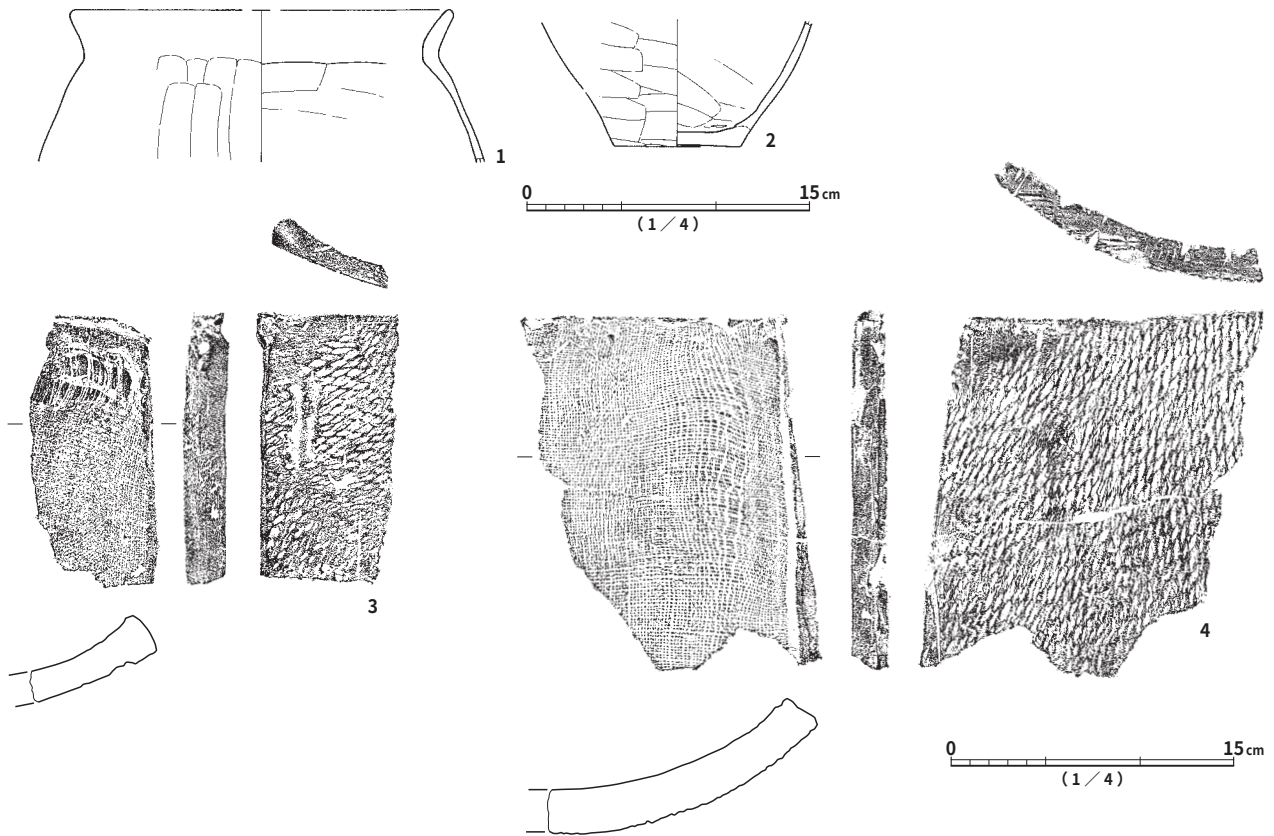
ph.3 SI63 カマド、出土状況 14・52・56



ph.4 SI63 カマド

Fig.107 SI62(1) 遺構・調査状況、SI63(1) 遺構・調査状況

SI62



SI63

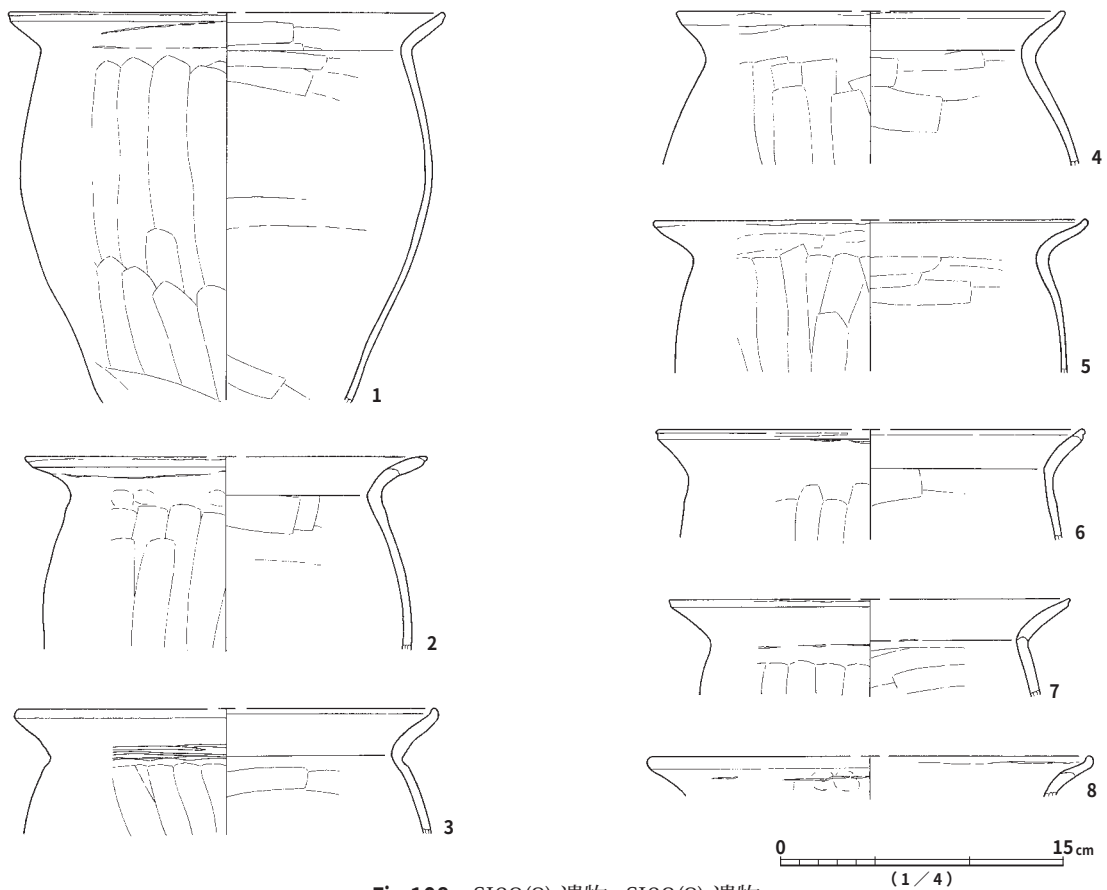


Fig.108 SI62(2) 遺物、SI63(2) 遺物

SI63

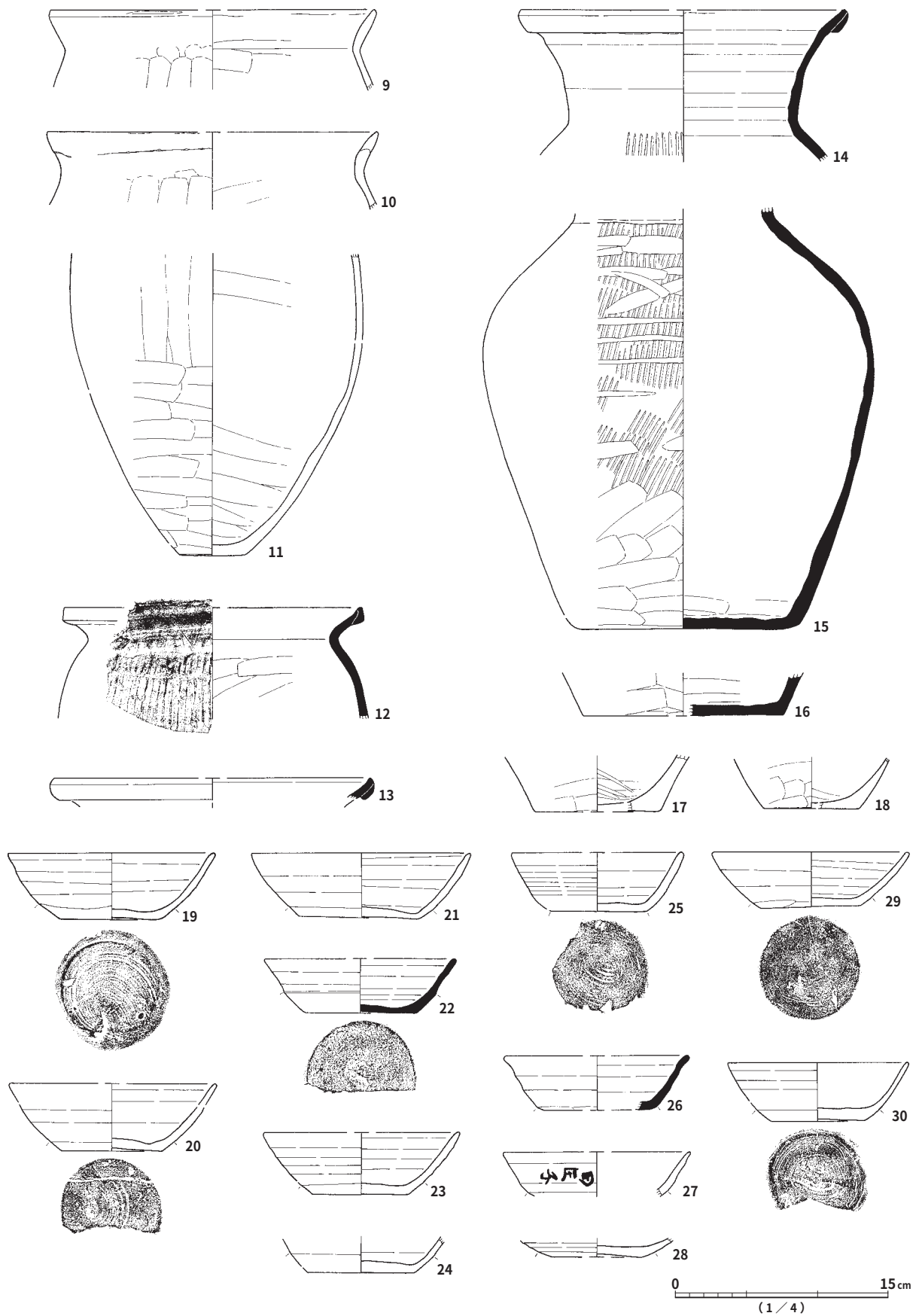


Fig.109 SI63(3) 遺物

SI63

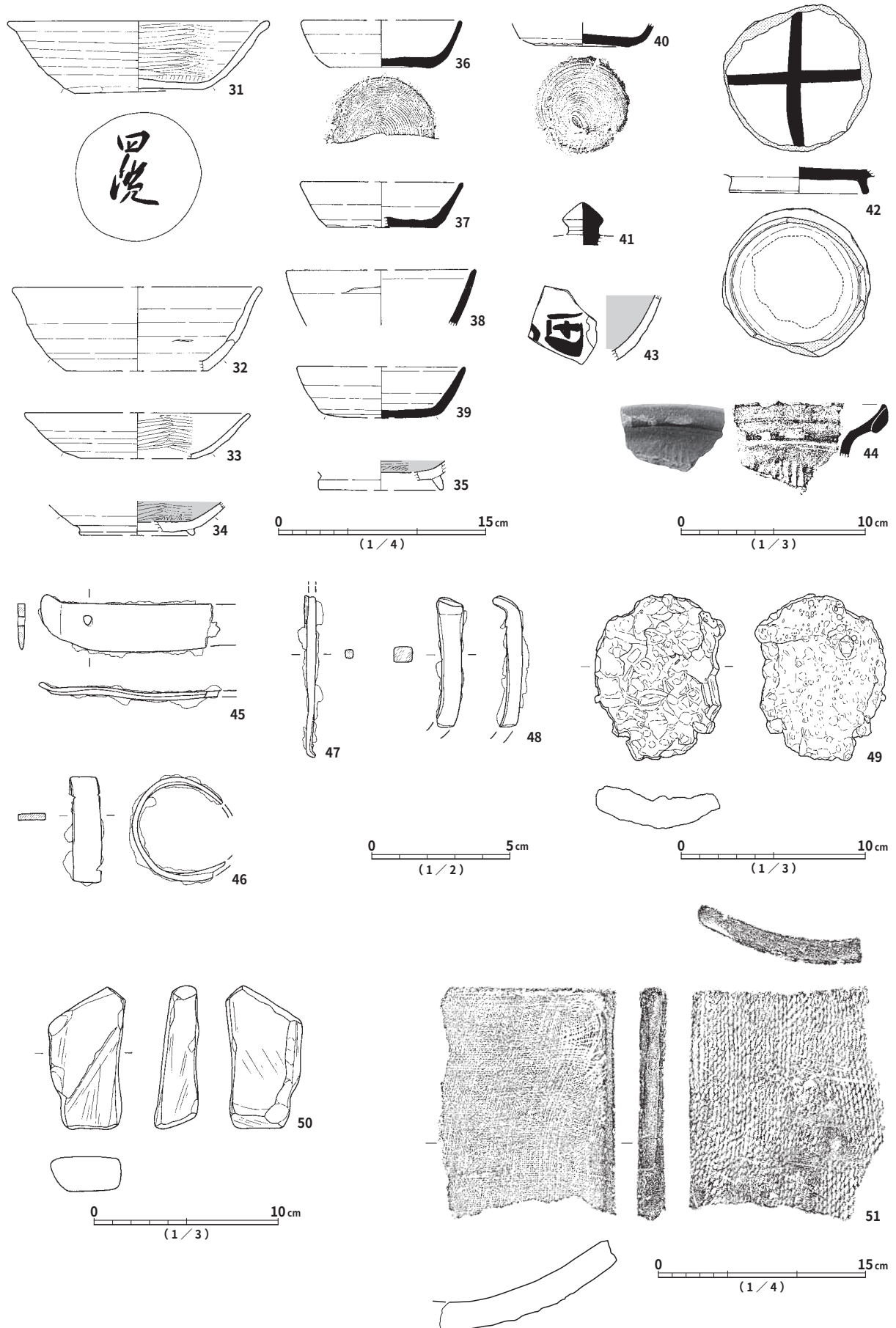


Fig.110 SI63(4) 遺物

SI63

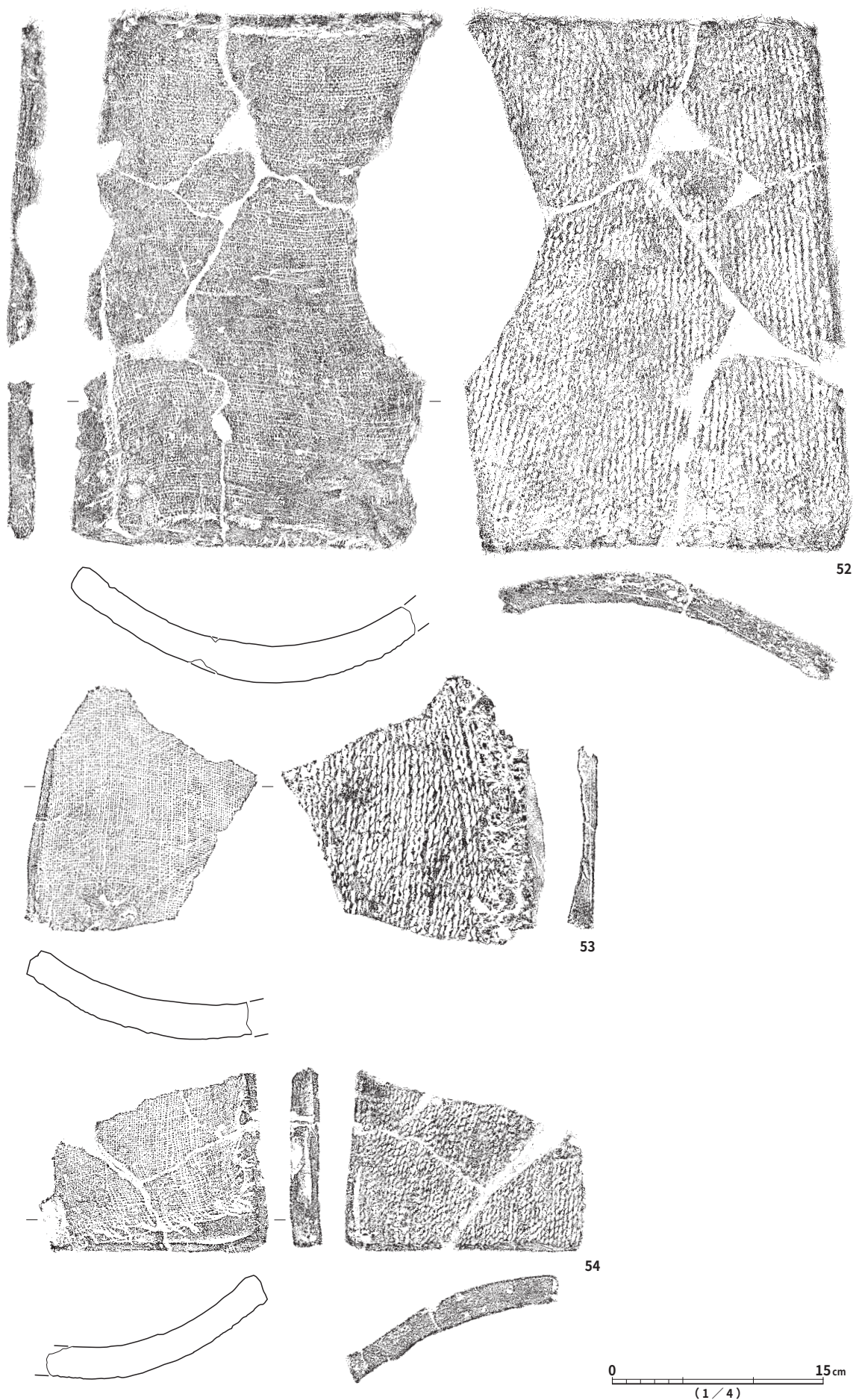
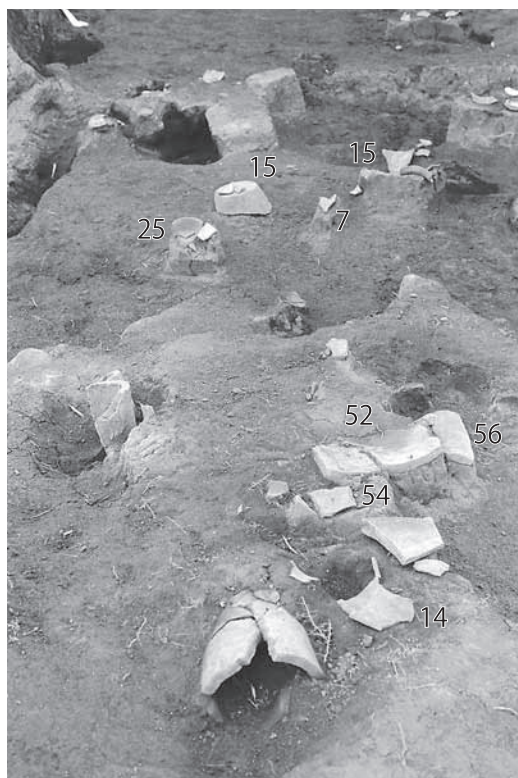
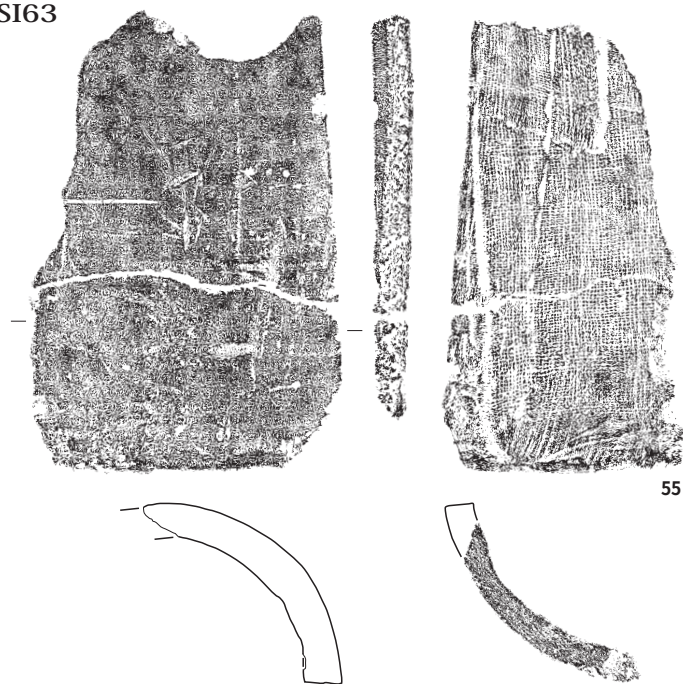


Fig.111 SI63(5) 遺物

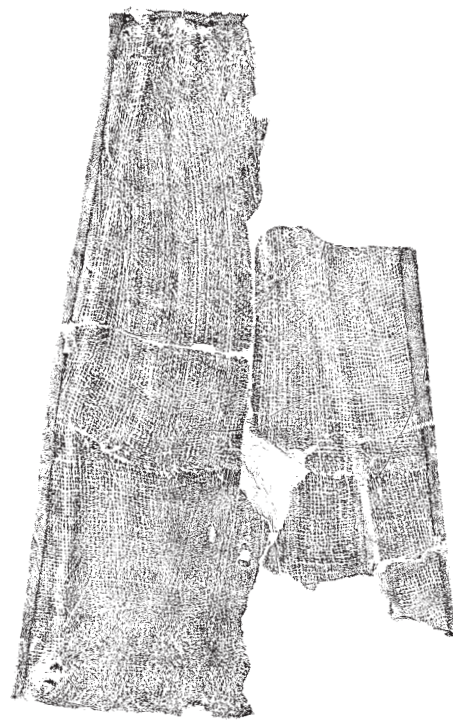
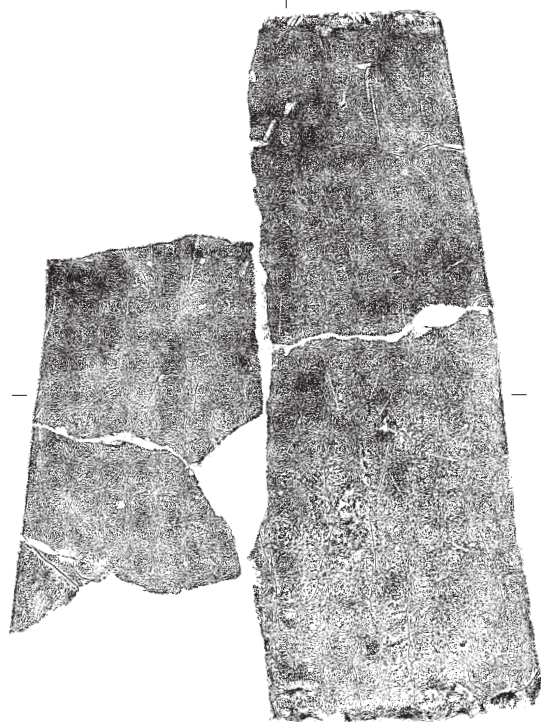
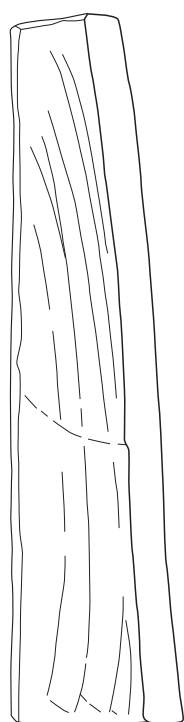


ph.1 カマド、出土状況 7・14・15・25・52・54・56

SI63



55



56

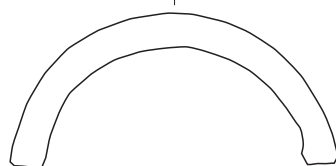
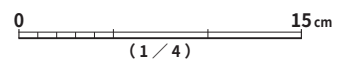


Fig.112 SI63(6) 遺物・調査状況



SI64

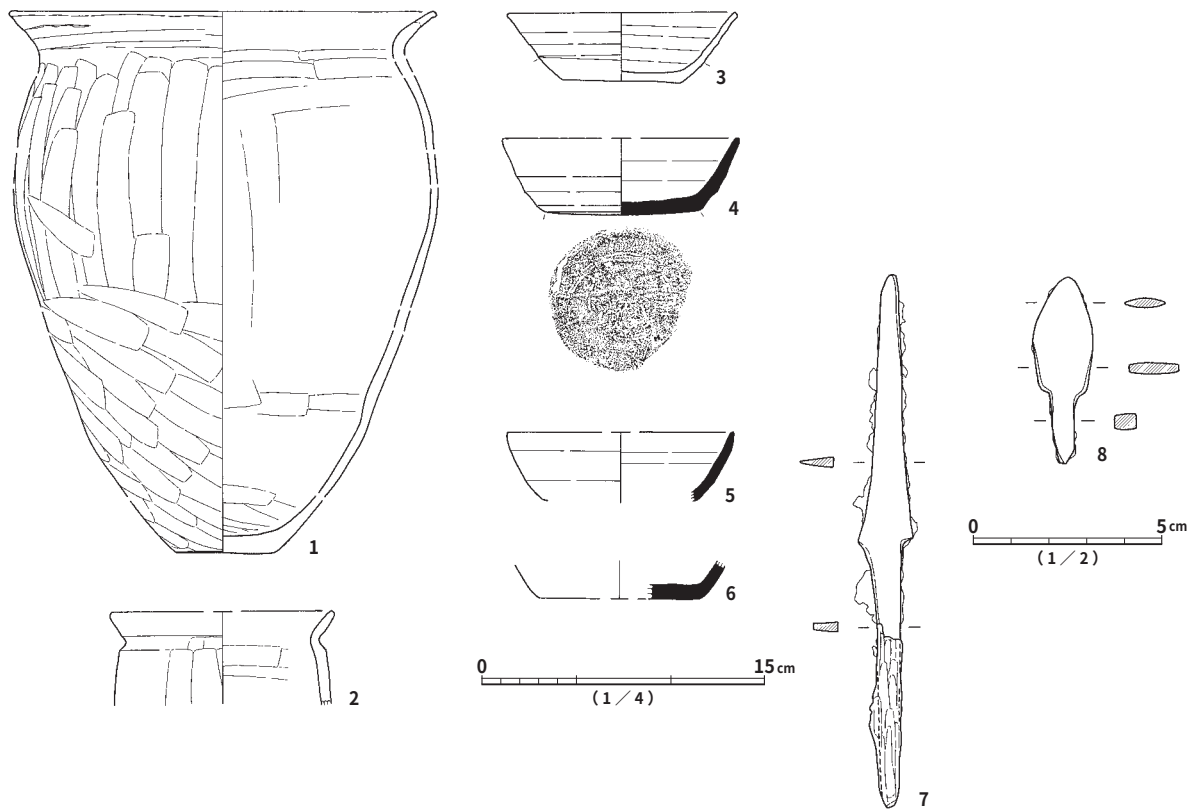
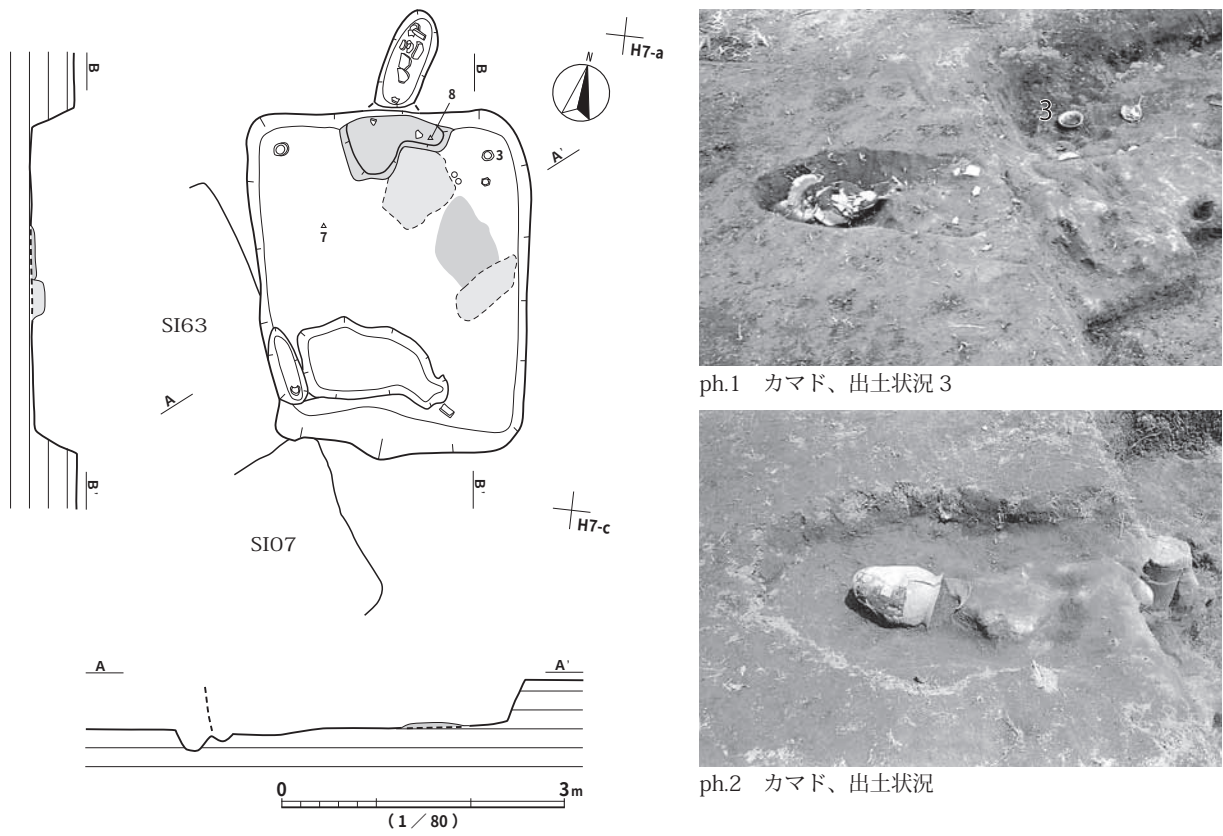
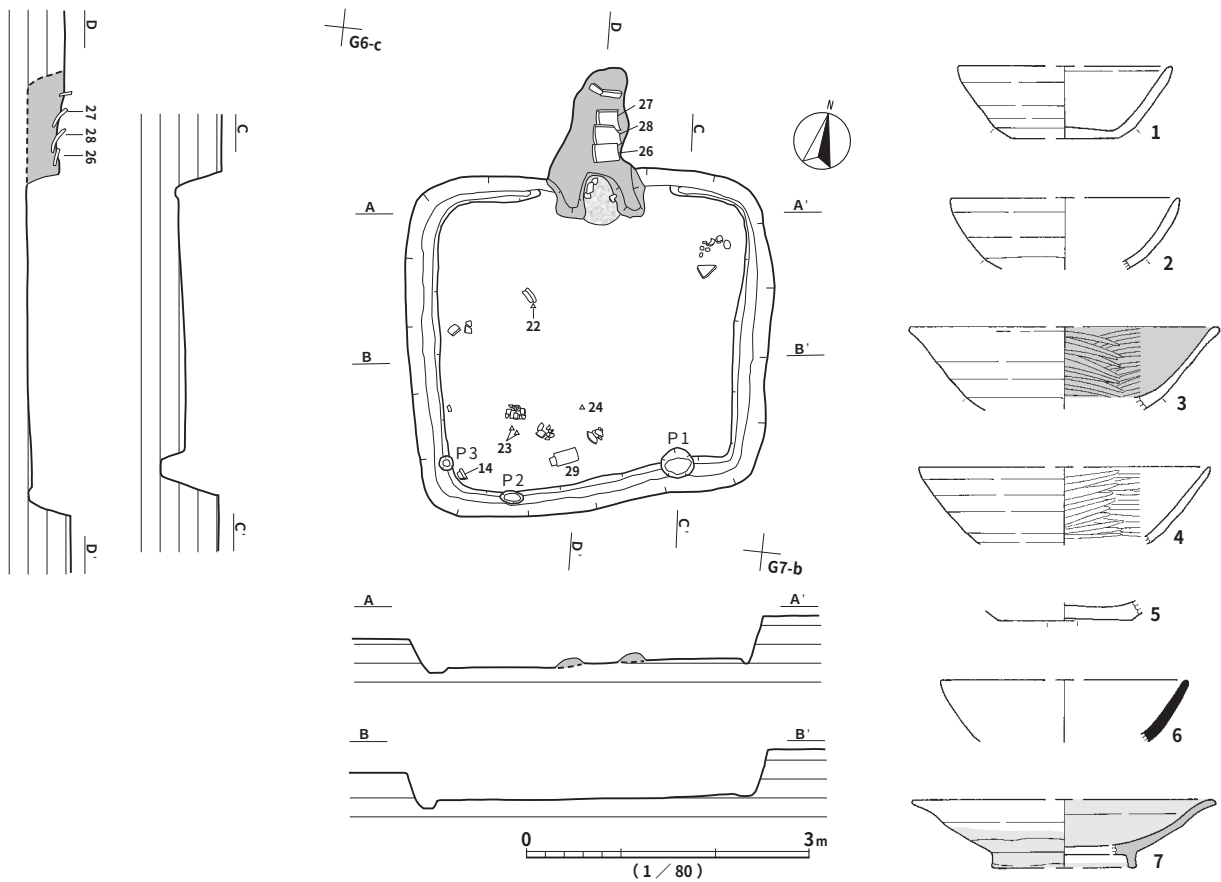


Fig.113 SI64 遺構遺物・調査状況

SI65



ph.1 カマド、出土状況 27・28



ph.2 カマド、出土状況 26・27・28

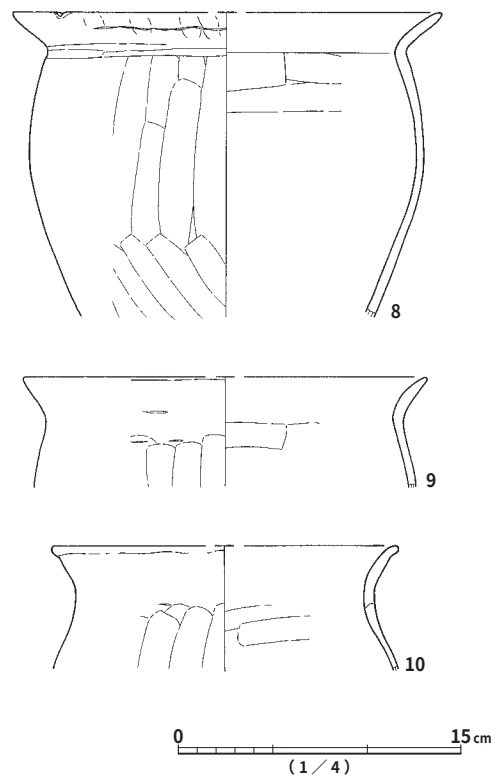


Fig.114 SI65(1) 遺構遺物・調査状況

SI65

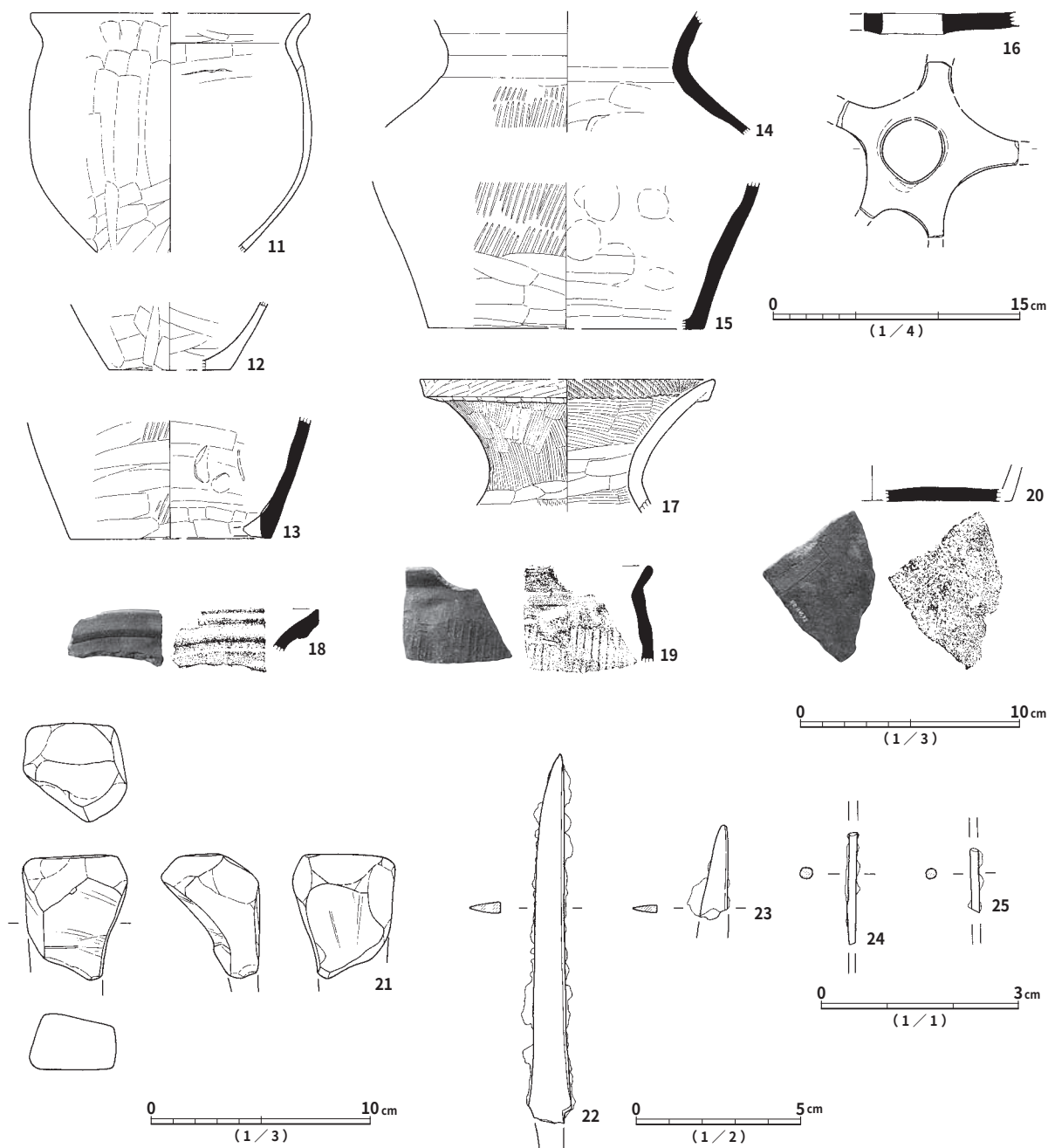


Fig.115 SI65(2) 遺物

む主軸長は4.63m、確認面掘形面積は13.38㎡、確認面からの深さは0.26～0.55m程度を測る。主軸方位はN-12.0°-Wである。カマドは北壁中央にあり、燃烧部付近まで掘り上げた状態で図化されている。煙道部は瓦で蓋をしていたとみられる。Pitはいずれも浅く、14～19cm程度である。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量21,791.0gであり、このうち土器は4,631.9g、縄文土器をのぞく重さは3,396.6gであった。実測可能遺物は、1～5が土師器杯、6が須恵器杯、7が緑釉段皿、8～12が土師器甕、13・16が須恵器甕、14が須恵器壺、15・18～20が須恵器甕である。17は、東海東部系の後期弥生土器である。土器以外では、26～28が平瓦、29が丸瓦、22・23が鉄製刀子、24・25が鉄製針、

SI65

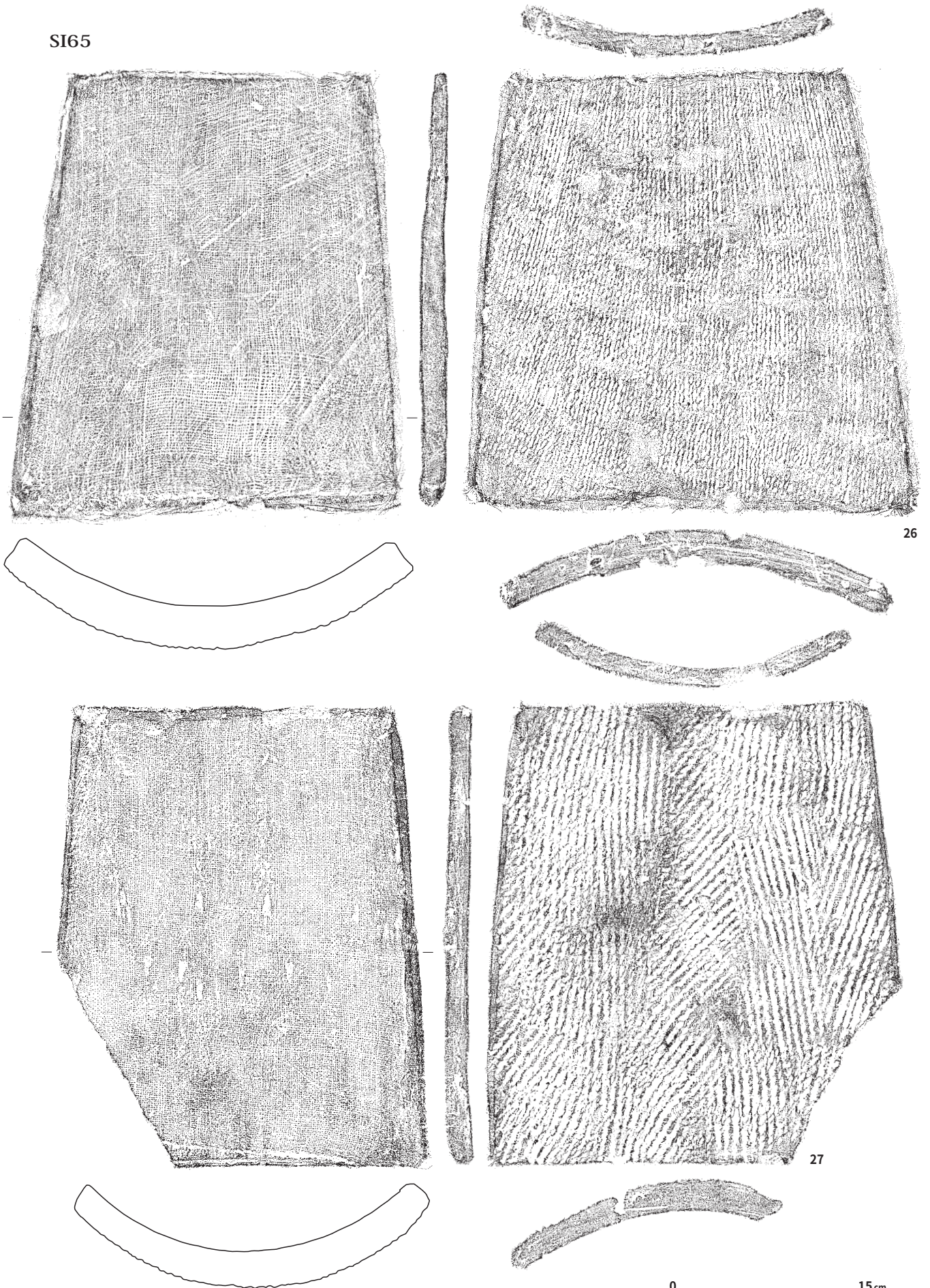
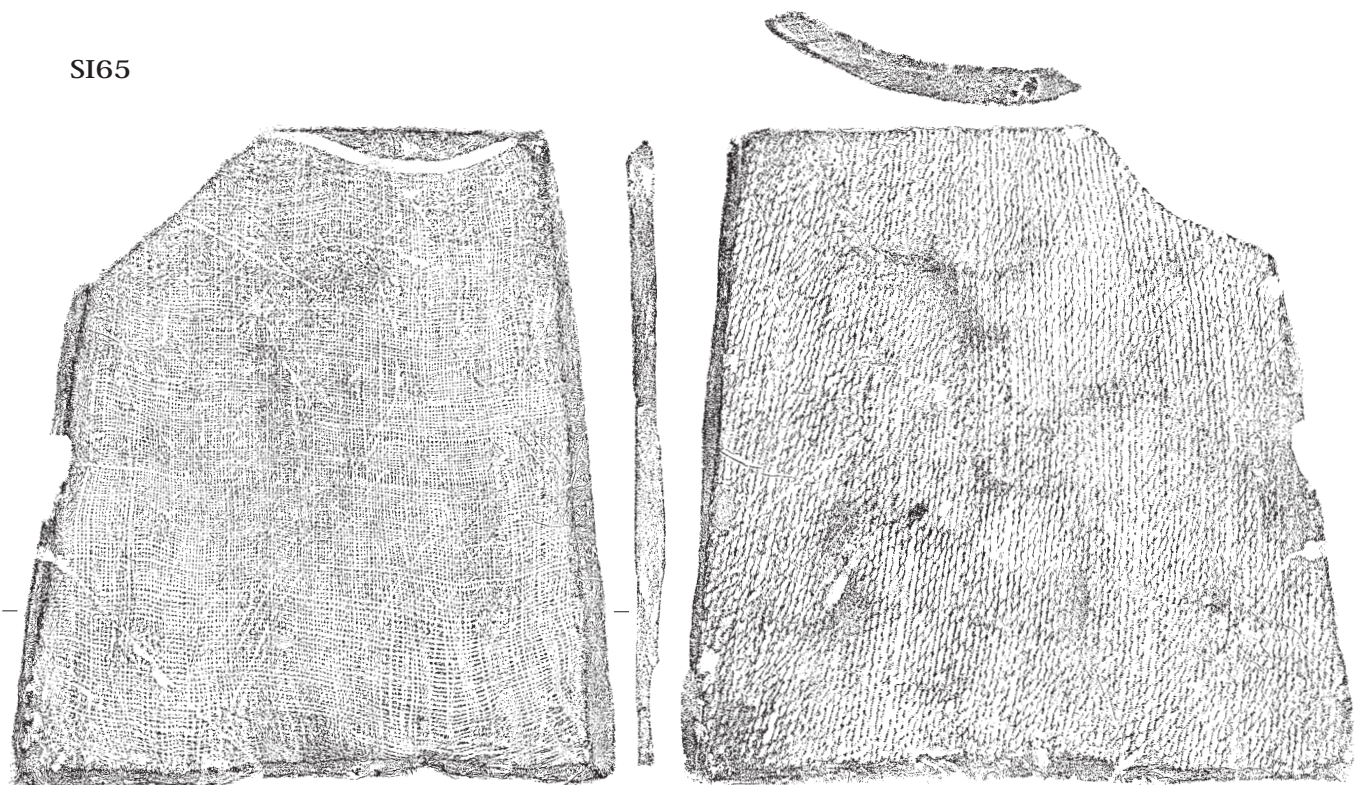
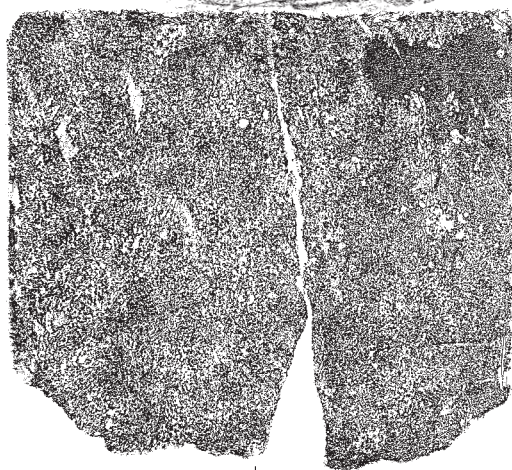
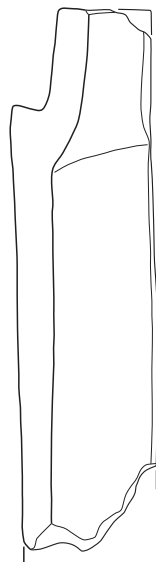


Fig.116 SI65(3) 遺物

SI65



28



29

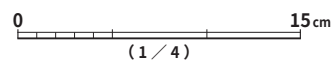
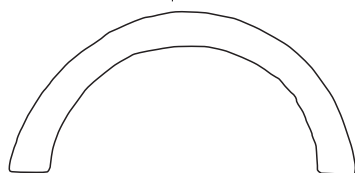


Fig.117 SI65(4) 遺物

21が砥石、他に磨石類 (Fig.188-33) が出土している。出土位置は、14・22・24が床面上20cm前後、26～28がカマド煙道部、29が床面上4cmであった。カマド部分の瓦には、所在が明らかでないものがある。非掲載資料として、軽石の小破片が出土している。

SI66 (Fig.118、PL.27・78・103)

SI66は、G6・H6区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はやや隅丸の横長方形を呈し、竪穴全体規模は2.45m(主軸)×2.73m、カマド煙道部を含む主軸長は3.34m、確認面掘形面積は6.44m²、確認面からの深さは0.16～0.26m程度を測る。主軸方位はN-18.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。ただし、カマド図面は輪郭の粘土・焼土範囲のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は明らかでない。カマド前面焼土下の状況も不明。支柱穴は検出されていない。Pitの深さは、P1が0.25mを測る。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量3,859.7gであり、このうち土器は3,846.7g、縄文土器をのぞく重さは1,238.5gであった。実測可能遺物は、1が土師器甕、2・8が須恵器甕、3～6が土師器杯、7が須恵器杯である。出土位置は、1・3・4・8が床面上、2が床面上20cmである。

SI67 (Fig.119、PL.27・28・78・103・135)

SI67は、H5・H6区に所在する。SD15が竪穴を横断する。調査写真から判断すると、SD15が本竪穴の床を抜いている。記録上の根拠はないが、SD15が新しいと考えておく。

竪穴平面形態はやや隅丸の方形を呈し、竪穴全体規模は3.23m(主軸)×3.13m、確認面掘形面積は9.57m²、確認面からの深さは0.10～0.22m程度を測る。主軸方位はN-14.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。カマド図面は輪郭の粘土・焼土範囲のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は明らかでない。また煙道部側も明確な範囲がしめされていない。Pitは検出されていない。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量7,356.2gであり、このうち土器は3,996.2g、縄文土器をのぞく重さは856.2gであった。実測可能遺物は、1・2・4・5が土師器杯、3が須恵器杯である。6・7は弥生時代後期久ヶ原式である。土器以外では8が丸瓦である。出土位置は、1がカマド内、8が床面である。カマド左側壁溝内の杯は、所在が明らかではない。

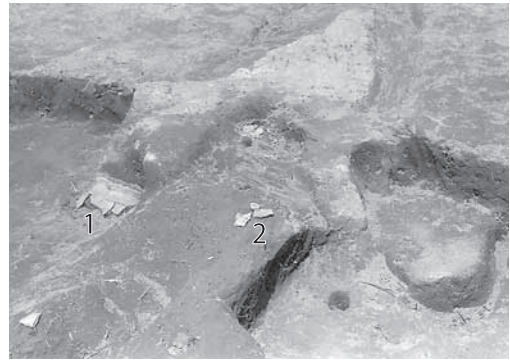
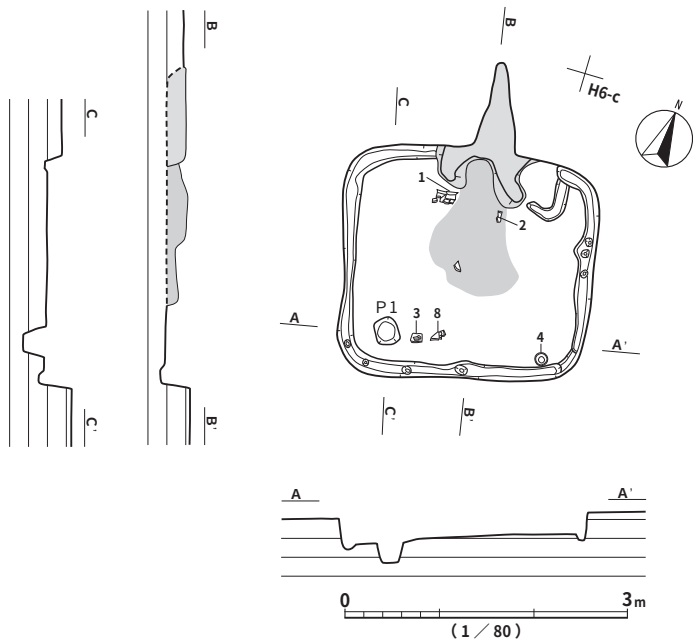
SI68 (Fig.120・121・191、PL.7・28・78・79・124・140)

SI68は、I4・I5区に所在する。竪穴北側でSI02と重複する。SI02内に本竪穴のカマドが遺存していることから、新旧関係は本遺構が新しい。床面高は、本竪穴が10cmほど深い。カマド部分が掘り残されているため、北辺部範囲は明確ではない。

竪穴平面形態は隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は推定で3.70m(主軸)×3.40m、カマド煙道部を含む主軸長は4.90m、確認面掘形面積は12.93m²、確認面からの深さは0.37～0.41m程度を測る。主軸方位はN-22.0°-Wである。カマドは北壁にあり、煙道部が2か所存在する。袖部分が遺存する東側のカマドが新しいと推定するが、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は明確ではない。竪穴四隅にあるP1～4は支柱穴の可能性もあるが、深度は浅く不揃いである。壁溝はほぼ全周する。竪穴中央床面付近数か所で焼土が認められるが、火災に遭ったかどうかは判断できない。

出土遺物は、総重量9,271.0gであり、このうち土器は8,289.2g、縄文土器をのぞく重さは7,110.5gであった。実測可能遺物は、1が土師器甕、2・3が土師器小形甕、5が土師器高台付杯、6・8～10が

SI66



ph.1 カマド、出土状況 1・2



ph.2 出土状況 1



ph.3 出土状況 4

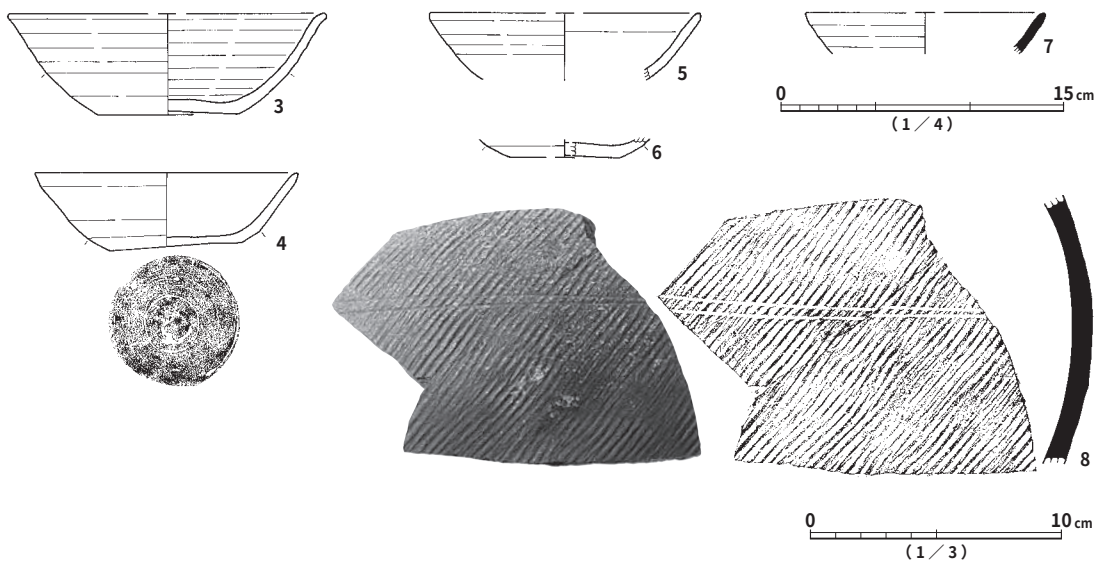
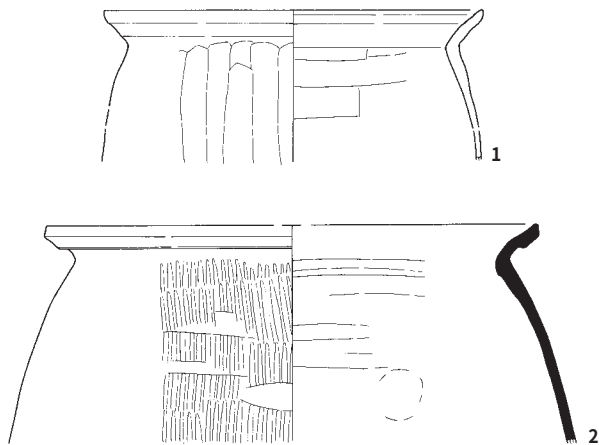
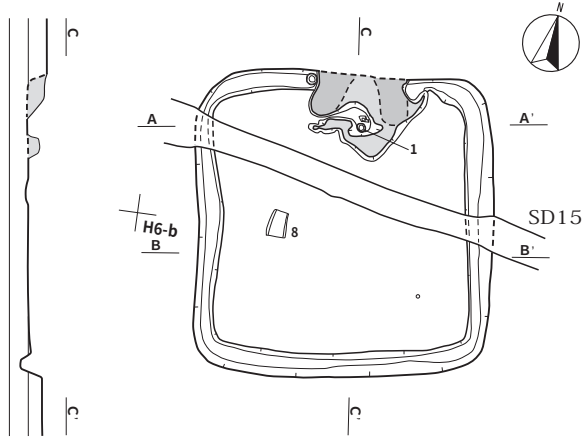


Fig.118 SI66 遺構遺物・調査状況

SI67



ph.1 カマド、出土状況 1・8

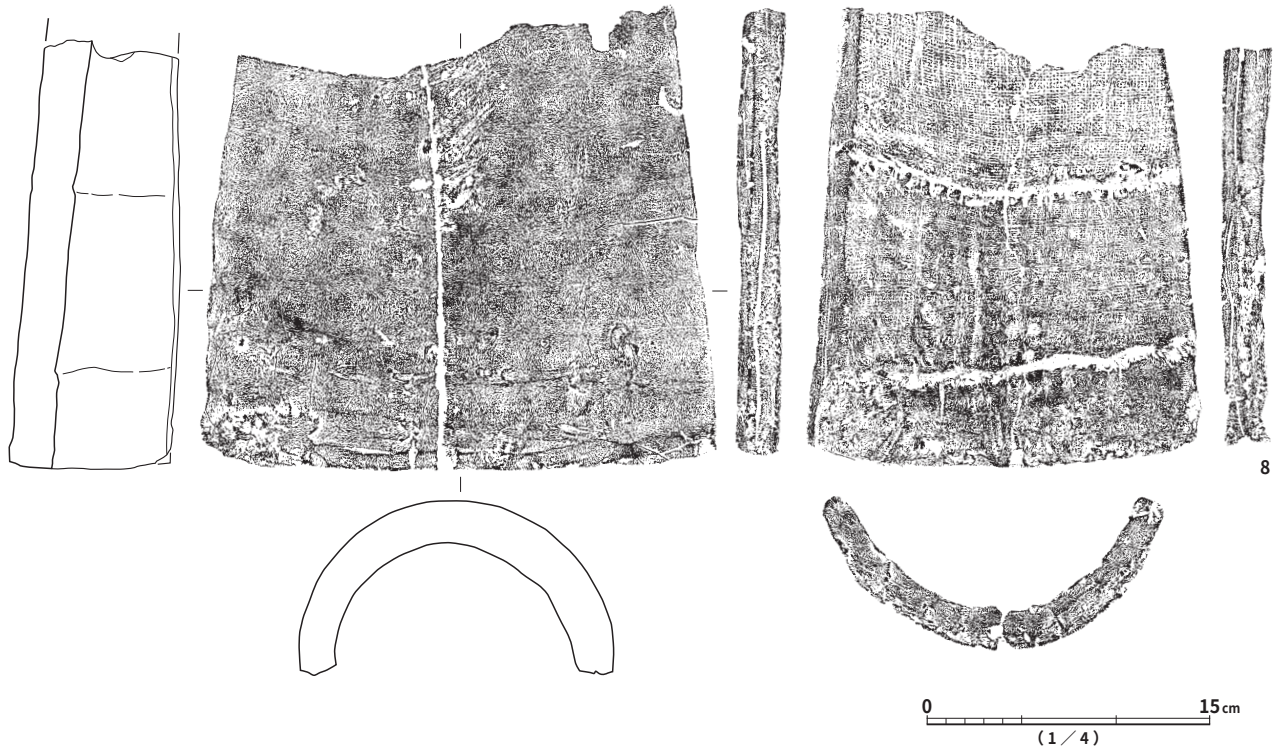
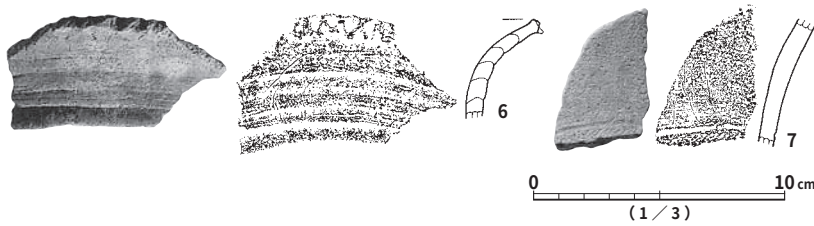
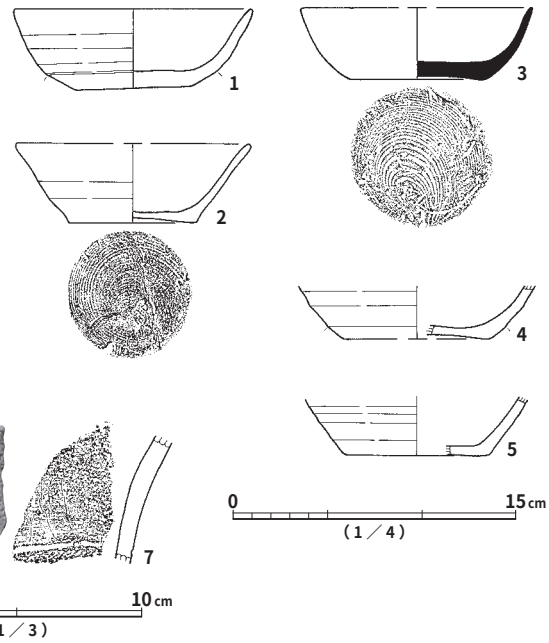
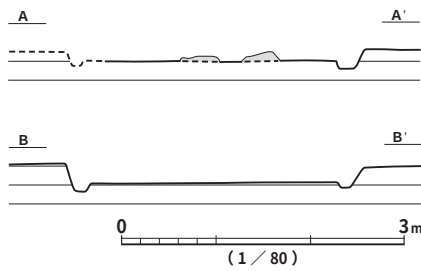
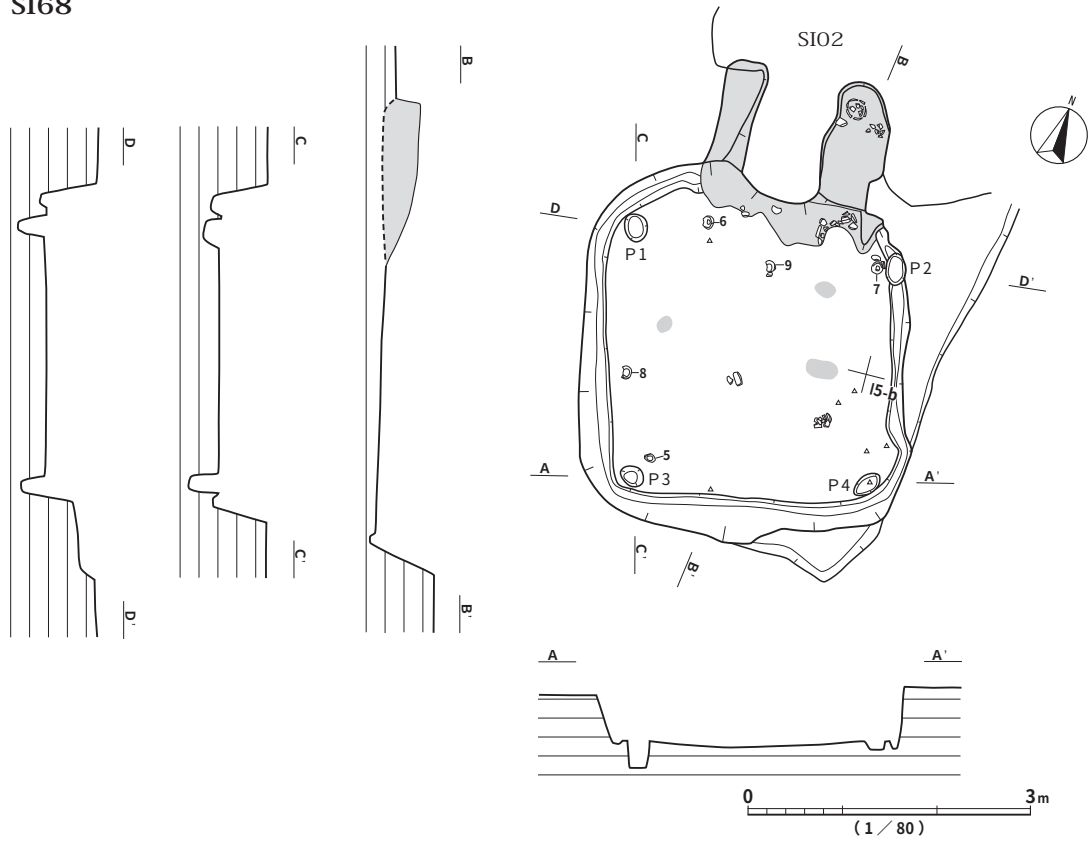


Fig.119 SI67 遺構遺物・調査状況

SI68



ph.1 出土状況 6・7・9



ph.2 カマド



ph.3 出土状況 不明鉄器



ph.4 出土状況 不明鉄器

Fig.120 SI68(1) 遺構遺物・調査状況

SI68

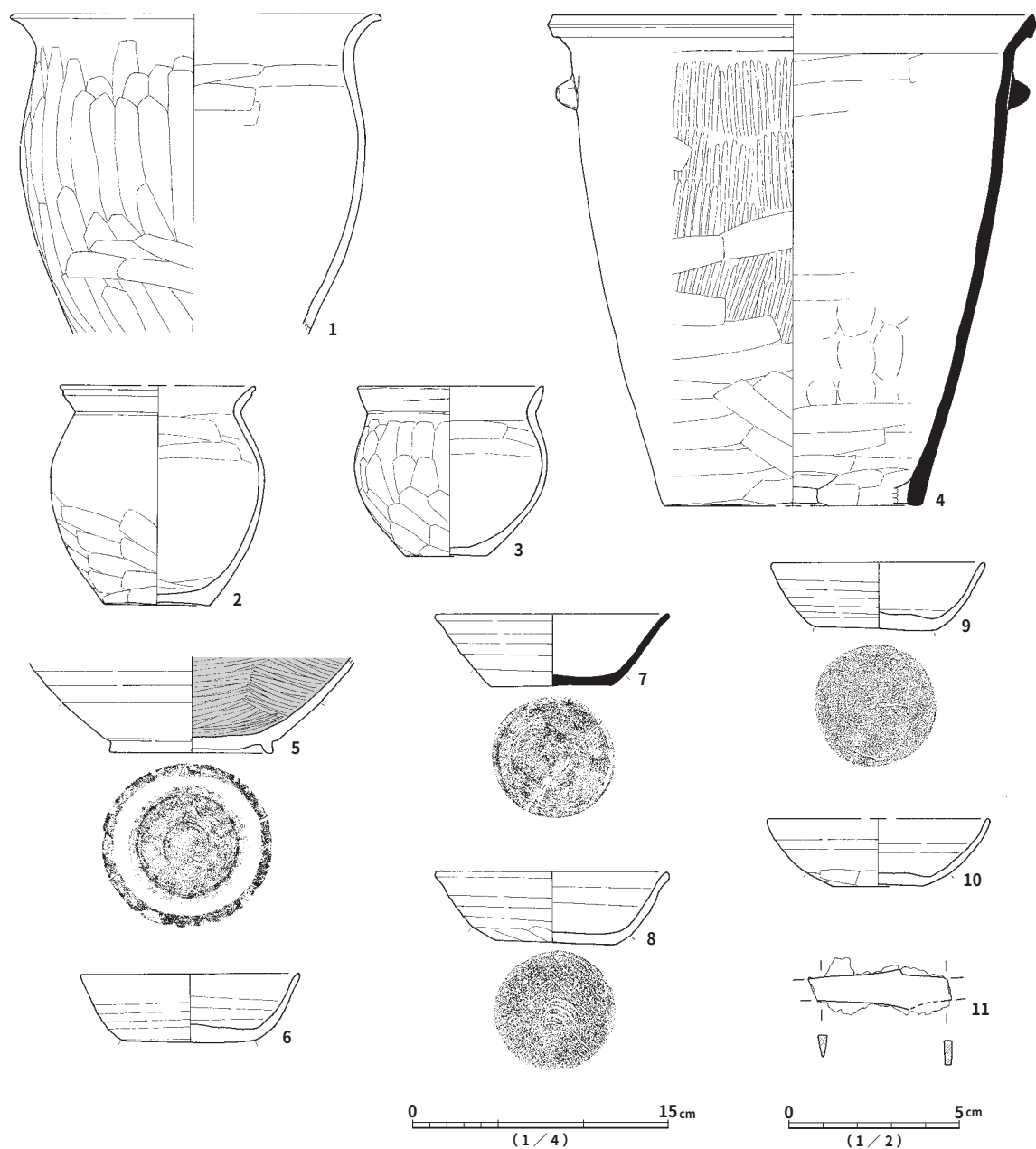


Fig.121 SI68(2) 遺物

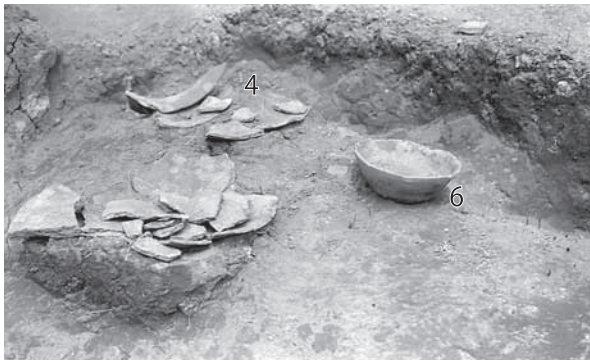
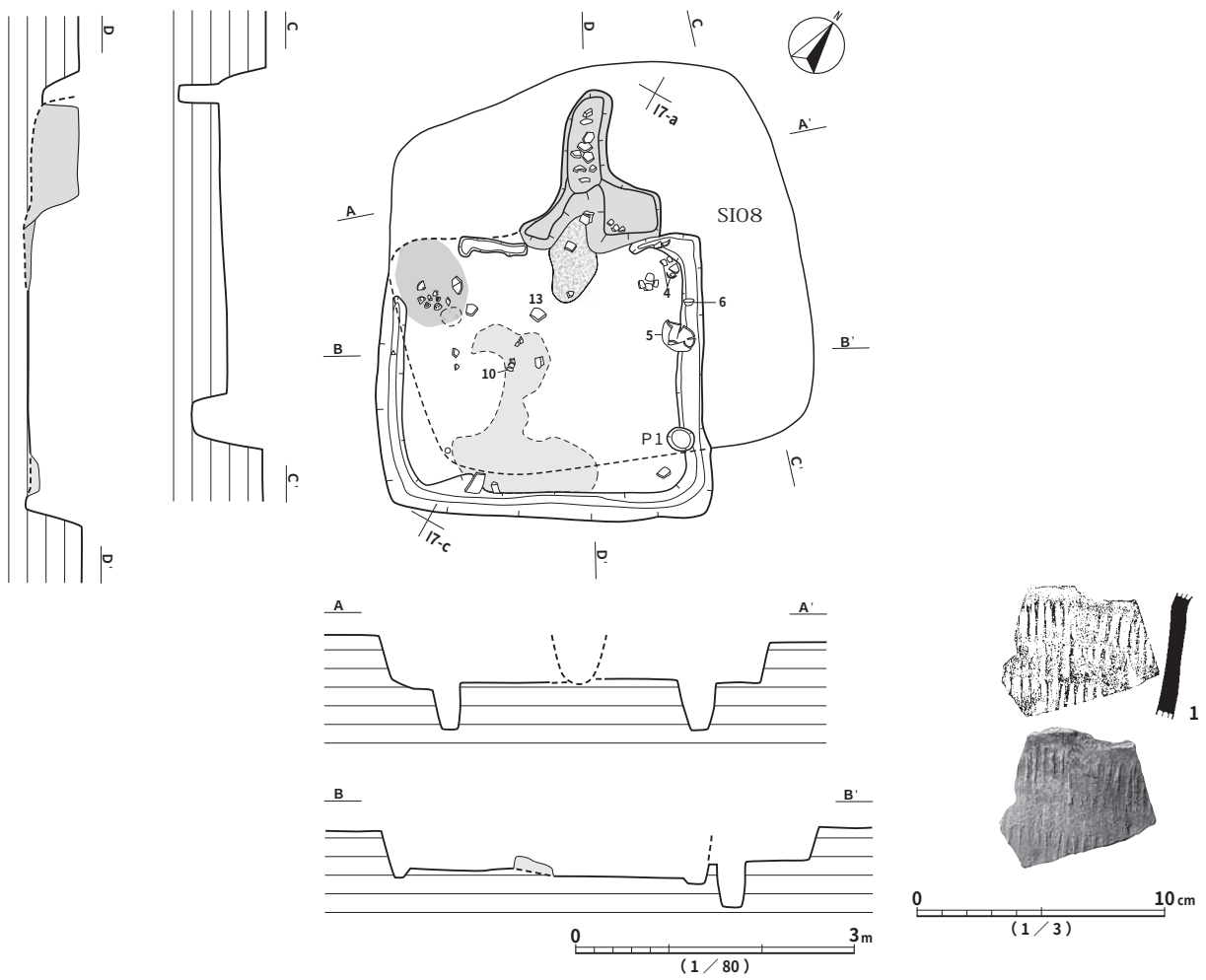
土師器杯、7が須恵器杯、4が須恵器甕である。土器以外では、11が鉄製刀子である。鉄器は遺構図面によると6か所から出土しているが、現物が確認できない。他に敲石類 (Fig.191-60) が出土している。出土位置は、7・9が床面上、5・6が覆土下層である。

SI69 (Fig.122・123・198、PL.28・79・103・121・127・135)

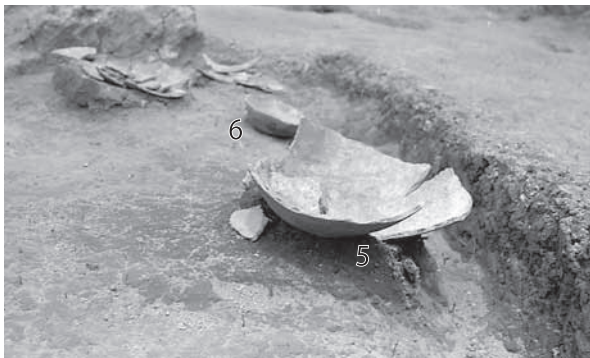
SI69は、H7・I7区に所在する。ほぼ同位置でSI08と重複する。新旧関係は本竪穴が新しい。床面高は、本竪穴が約0.08～0.13m程度深く、SI08竪穴範囲の1/2以上を破壊している。

竪穴平面形態は横長方形を呈し、竪穴全体規模は推定で3.02m(主軸)×3.50m、カマド煙道部を含む主軸長は4.60m、確認面掘形面積は11.50㎡、確認面からの深さは0.47～0.59m程度を測る。主

SI69



ph.1 出土状況 4・6



ph.2 出土状況 5・6

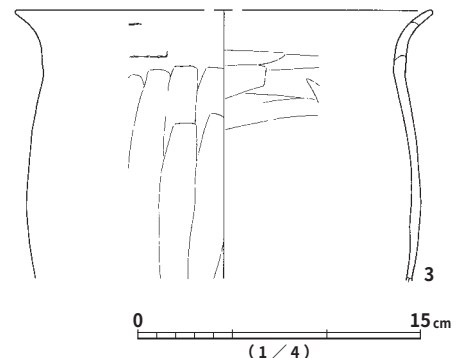
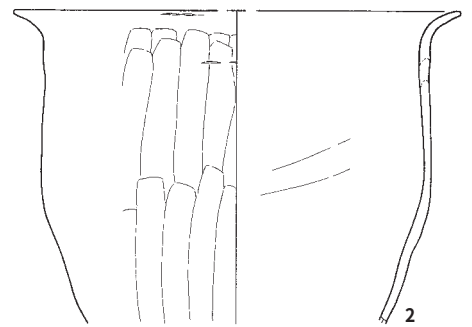


Fig.122 SI69(1) 遺構遺物・調査状況

SI69

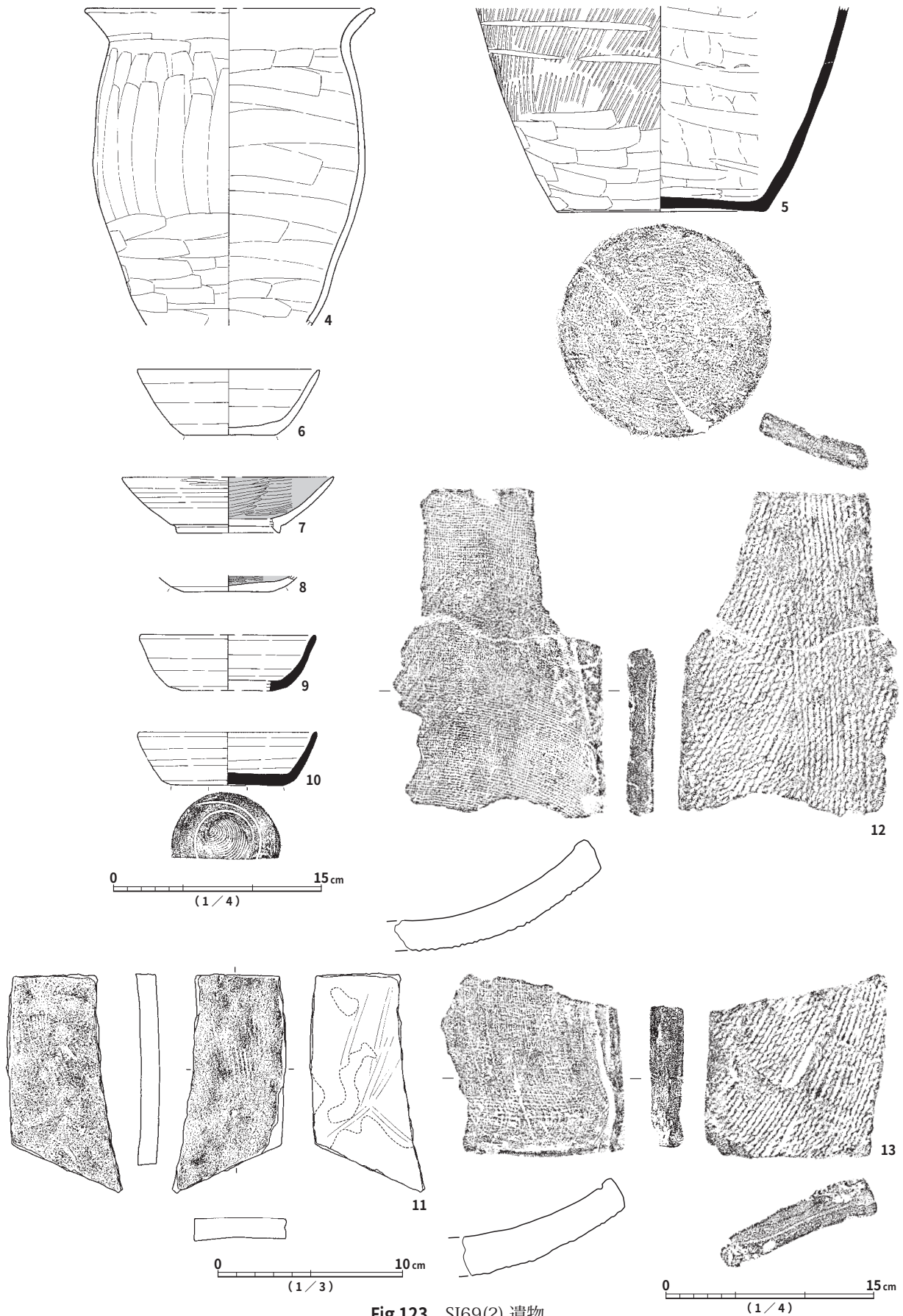


Fig.123 SI69(2) 遺物

軸方位はN-37.0°-Wである。カマドは北西壁中央にある。焚口部と左右袖内面はほぼ掘り上がっているとみられる。袖本体は壁外に張り出す構造をもつ。ただし、全体の掘り上がり状況の記録がないため、詳細は不明。主柱穴は検出されていない。P1は深さ0.17mを測る。壁溝はほぼ全周する。西隅部壁際で焼土、南東辺壁際で粘土・焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。他に、貝ブロックを西隅部焼土上で検出している。貝サンプルは残っていない。

出土遺物は、総重量9,460.7gであり、このうち土器は7,158.7g、縄文土器をのぞく重さは4,616.4gであった。実測可能遺物は、1が須恵器甕、2~4が土師器甕、5が須恵器甕、6・8が土師器杯、7が土師器高台付杯、9・10が須恵器杯、11が須恵器転用砥石である。土器以外では12・13が平瓦である。他に石棒(Fig.198-120)が出土している。出土位置は、6が床面、4が床面上5cm、5が床面上9cm、10が床面上21cm、13が床面上8cmである。

なお、SI08-6~13(Fig.25)は、本遺構に関連する可能性が高い。

SI70 (Fig.124・125、PL.29・79・91・103・135・136)

SI70は、I6区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。本竪穴は、調査時の写真がないため、図面以外での検討ができない。

竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は2.95m(主軸)×2.90m、カマド煙道部を含む主軸長は3.94m、確認面掘形面積は8.54m²、確認面からの深さは0.33~0.42m程度を測る。主軸方位はN-27.0°-Wである。カマドは北壁中央にあり、焚口から燃焼部と左右袖はほぼ掘り上がっているとみられる。袖には瓦が立てられている。主柱穴は検出されていない。P1は深さ0.08mと浅い。壁溝は検出されていない。南西側の落ち込みは、おそらく竪穴掘形面と推定する。竪穴各部床面付近で、灰混じりの粘土が検出されている。

出土遺物は、総重量7,714.2gであり、このうち土器は2,954.2g、縄文土器をのぞく重さは2,862.2gであった。実測可能遺物は、2~5が古墳時代終末期、1・6~8が弥生時代終末期から古墳時代前期であり、6はタタキ甕である。土器以外では、9~12が平瓦である。カマド構築材として瓦が使用されていることから、本竪穴が奈良時代前に遡ることないが、時期的に対応する土器は確認できない。10・12は床面から、9は床面上5cmから出土している。

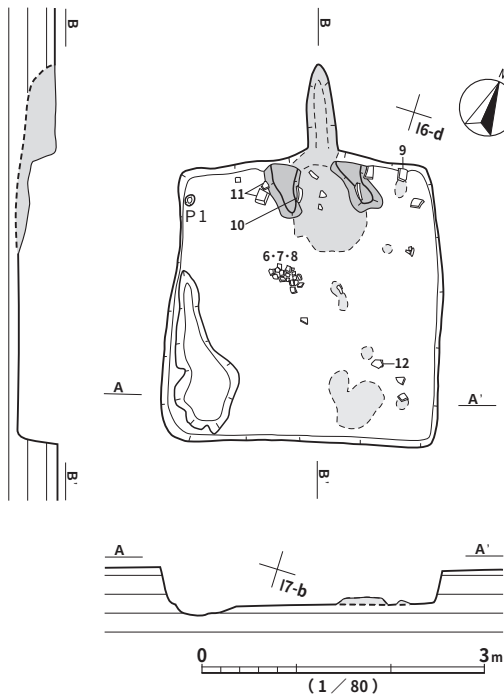
SI71 (Fig.126・127・188・191、PL.79・103・104・123・124)

SI71は、F12区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。本遺構の調査写真は、出土遺物の個別の出土状況のみであり、竪穴やカマドの全景を写真から検討することはできなかった。

竪穴平面形態はやや隅の丸い方形を呈し、竪穴全体規模は3.44m(主軸)×3.38m、カマド煙道部を含む主軸長は4.31m、確認面掘形面積は11.54m²、確認面からの深さは0.24~0.32m程度を測る。主軸方位はN-13.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。カマド図面は輪郭の粘土・焼土範囲のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は明らかでない。カマド前面には、粘土の分布がみられるが、これはカマド崩落にともなうものと推定しておく。挿図平面図の粘土分布の濃淡は調査図面のとおりであるが、断面図がないため詳細は不明。主柱穴は検出されていない。P1は、深さ0.18mを測る。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量10,178.3gであり、このうち土器は8,864.3g、縄文土器をのぞく重さは4,066.7gであった。実測可能遺物は、1~3が土師器甕、4・5・15が須恵器甕、6が須恵器小形甕、7

SI70



ph.1 カマド、出土状況 9・10・11

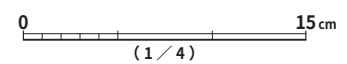
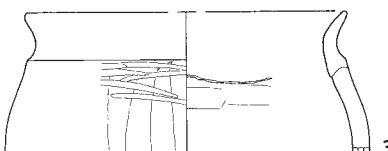
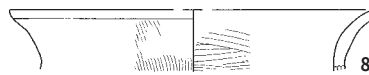
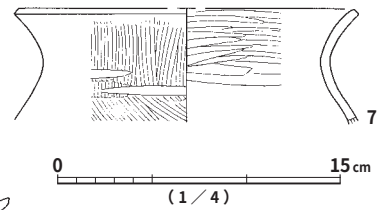
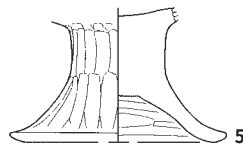
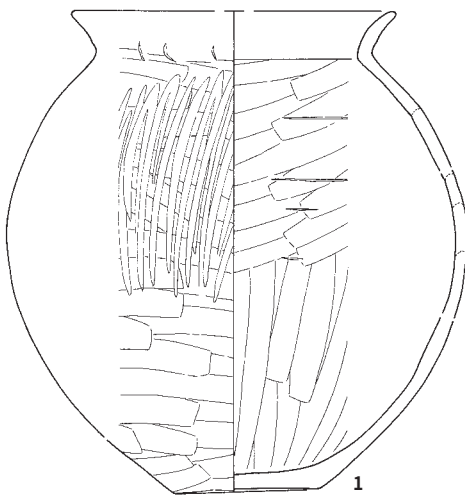
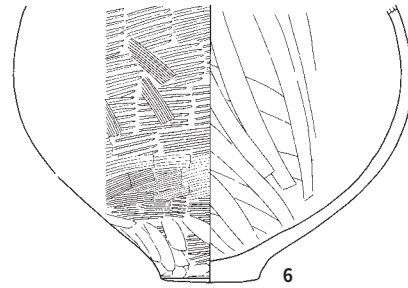


Fig.124 SI70(1) 遺構遺物・調査状況

SI70

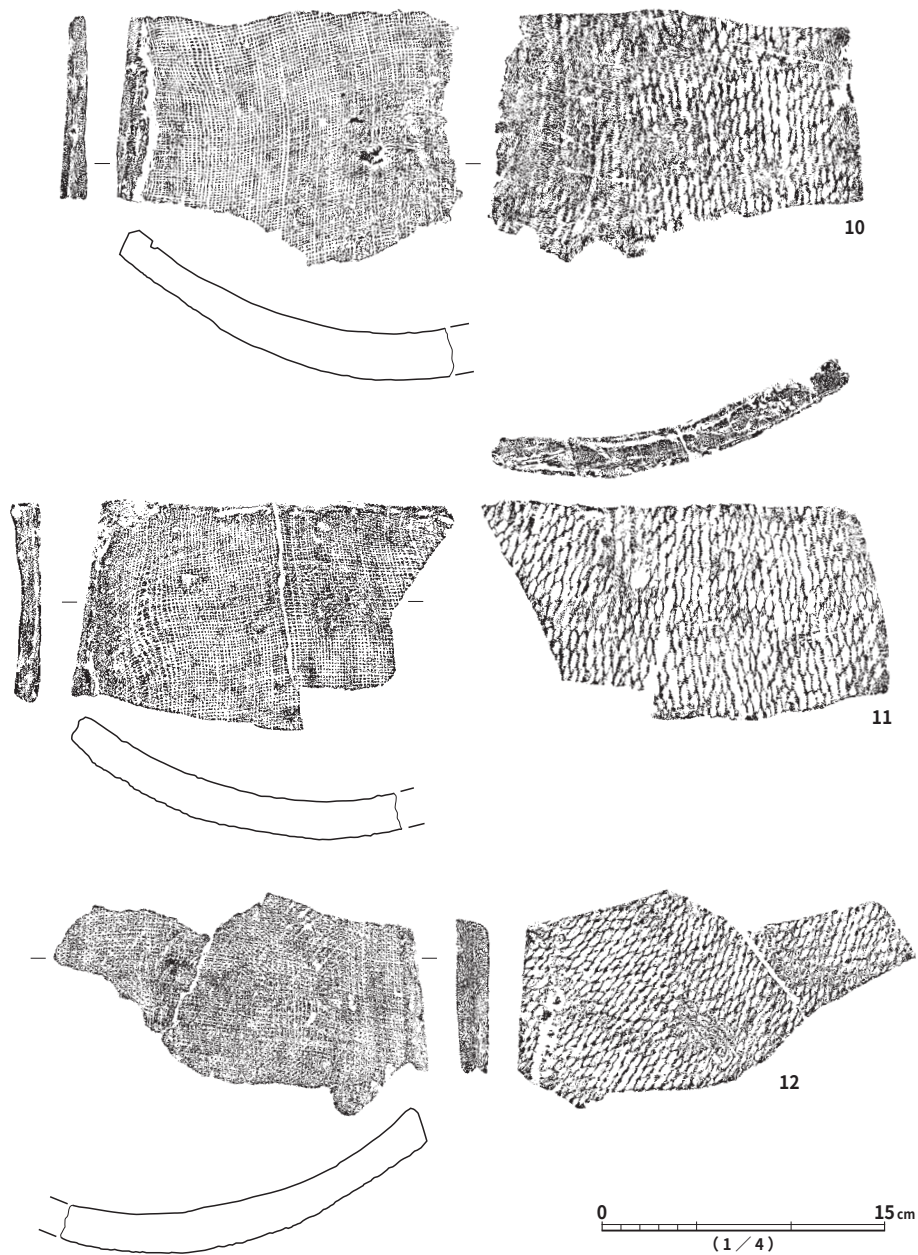


Fig.125 SI70(2) 遺物

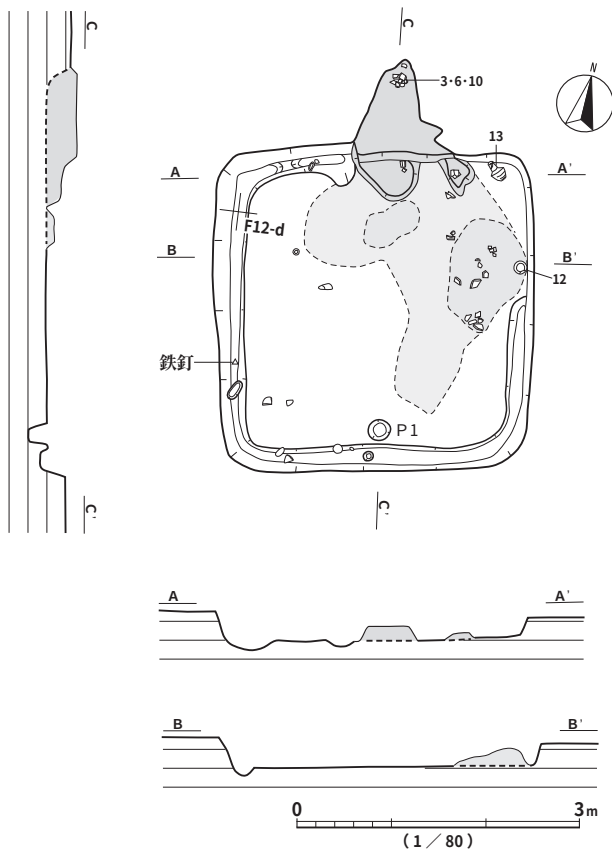
～10が土師器杯、11・12が須恵器杯、13が須恵器長頸壺である。14は後期弥生土器である。土器以外では、他に磨石 (Fig.188-36)・凹石 (Fig.191-67) が出土している。また、調査図面、メモでは、西側壁溝から鉄釘が出土したとの記載があるが、現物を確認することはできない。これとは別と思われる刀子状鉄製品の出土状況写真があるが (Fig.126-ph.2)、これも所在不明。出土位置は、13が床面上6cm、12が14cm、3・6・10が31cmである。

SI72 (Fig.128・129・187・188・196、PL.29・79・104・120・121・123・126・136・140・144)

SI72は、G13区に所在する。竪穴南西側でSD03と重複し、南辺部が破壊されている。

竪穴規模は東西軸で3.12m、南北遺存部現状で3.03m、確認面からの深さは0.10～0.20m程度を測る。南北を主軸とした場合の方位は、N-8.0°-Wである。カマドは明確ではない。ただし、東壁

SI71



ph.1 出土状況 13



ph.2 出土状況 不明鉄器

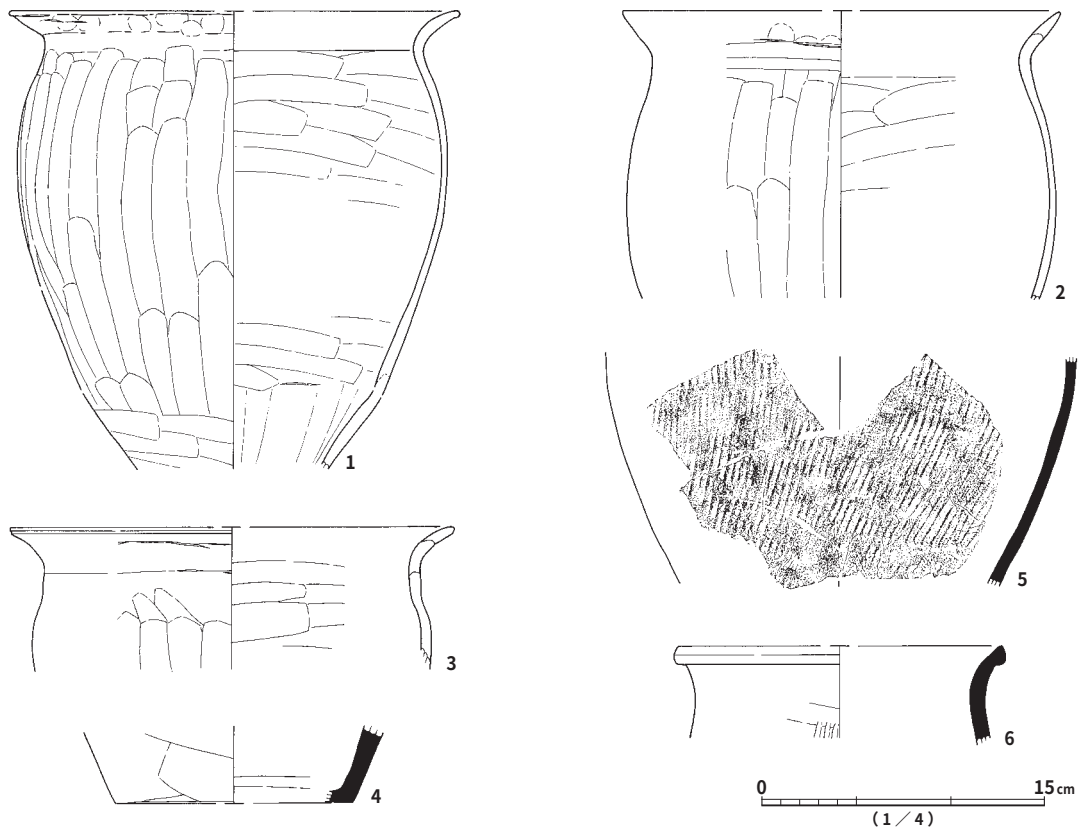


Fig.126 SI71(1) 遺構遺物・調査状況

SI71

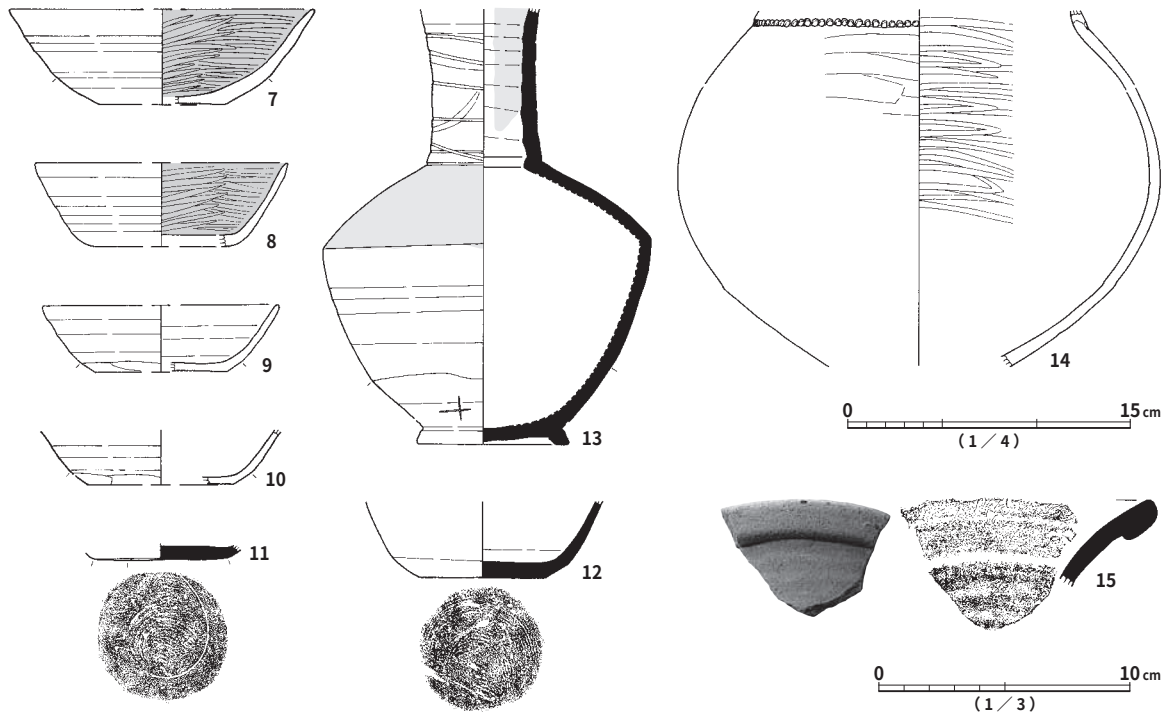


Fig.127 SI71(2) 遺物

中央に焼土があり、これをカマドの残存部と考えることもできる。焼土部分の壁張出部を煙道部とした場合の東西軸長は3.51mを測る。主柱穴は検出されていない。北東隅部P1の深さは0.18mである。壁溝は北・西辺部で検出している。粘土塊を北西隅部付近で検出している。調査メモでは、竪穴中央部にも粘土範囲がしめされているが、調査図面には記載がない。

出土遺物は、総重量15,601.1gであり、このうち土器は6,618.9g、縄文土器をのぞく重さは1,548.6gであった。実測可能遺物は、1～6・8が土師器杯、7が土師器高台付杯である。9の有孔椀形土製品は性格不明。土器以外では、11・13～15・17が不明鉄器、12・16が鉄製釘、18が砥石、19が瓦転用紡錘車、20が平瓦、21が丸瓦である。10は大刀拵の青銅製足金具か。方頭の鉄製吊手金具をともなう。足金具は吊手側上部が花卉状を呈し、4脚で鞘をつかむ。他に磨石 (Fig.187-26・31・32、188-34)・礫器 (Fig.196-98) が出土している。出土状況については、調査図面に遺物番号の記載がないため、実測遺物と対照することができない。ただし、調査メモの記載内容から、10・18は特定が可能であり、ともに床面付近から出土している。10の出土位置には、別に「鉄鎌」の記載もあるが、現物は不明。なお、調査写真から判断すると、竪穴南東部覆土の瓦片については、SD03側の遺物である可能性がある。

SI73 (Fig.130・131、PL.29・79・92・104・136)

SI73は、H13・H14区に所在する。SD01と重複し、竪穴中央部が破壊されている。

竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は3.58m(主軸)×3.73m、カマド煙道部を含む主軸長は4.73m、確認面掘形面積は推定で13.30㎡、確認面からの深さは0.34～0.55m程度を測る。主軸方位はN-16.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。焚口から燃焼部にかけて掘り進められてお

SI72

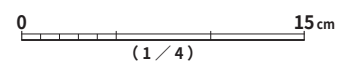
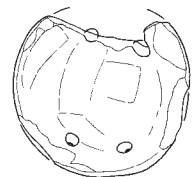
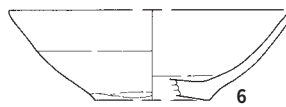
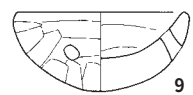
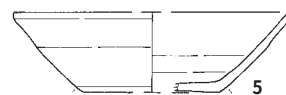
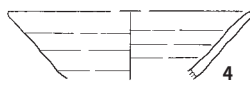
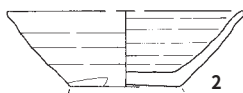
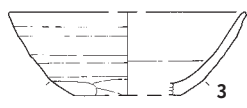
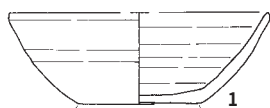
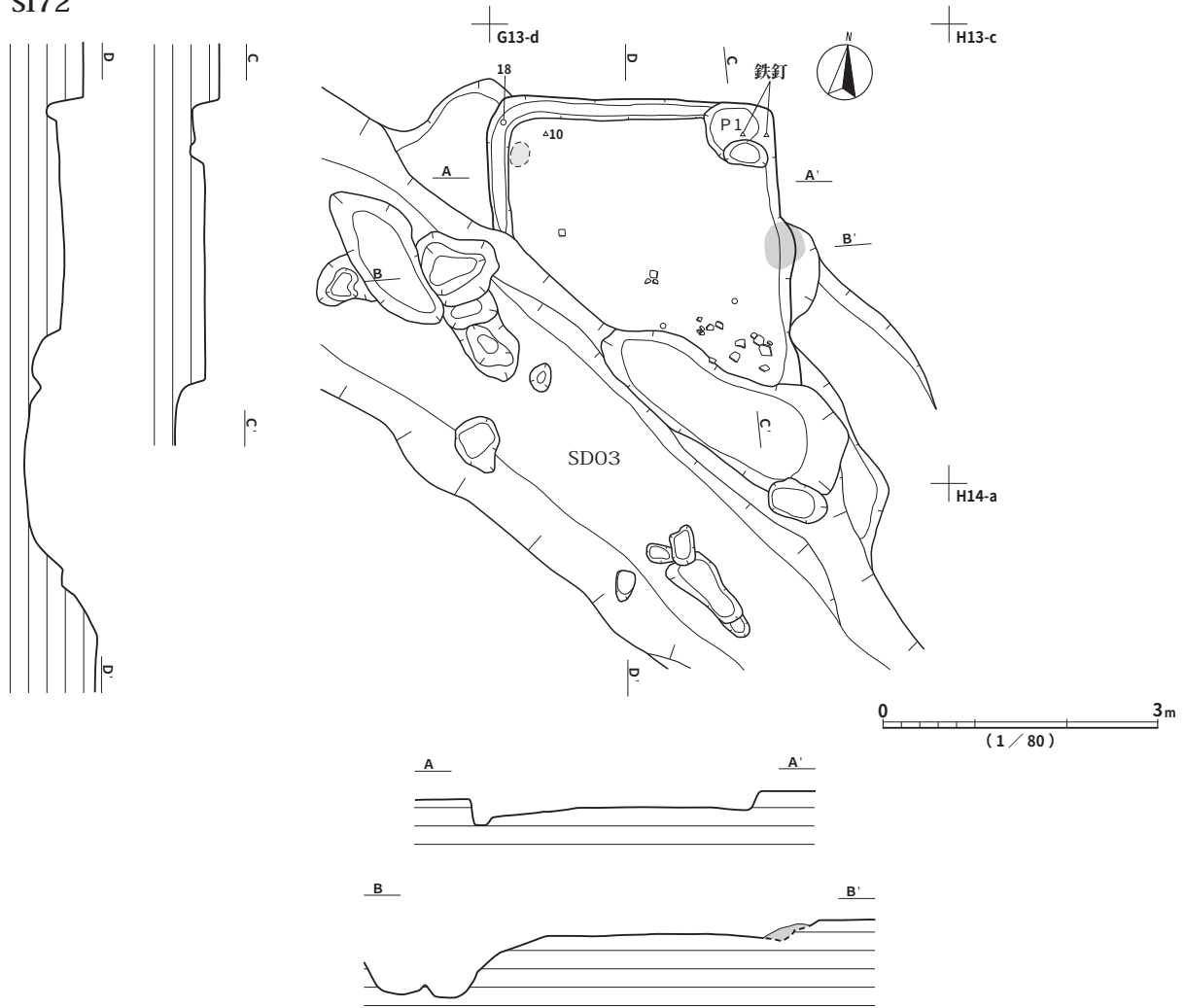


Fig.128 SI72(1) 遺構遺物・調査状況

SI72

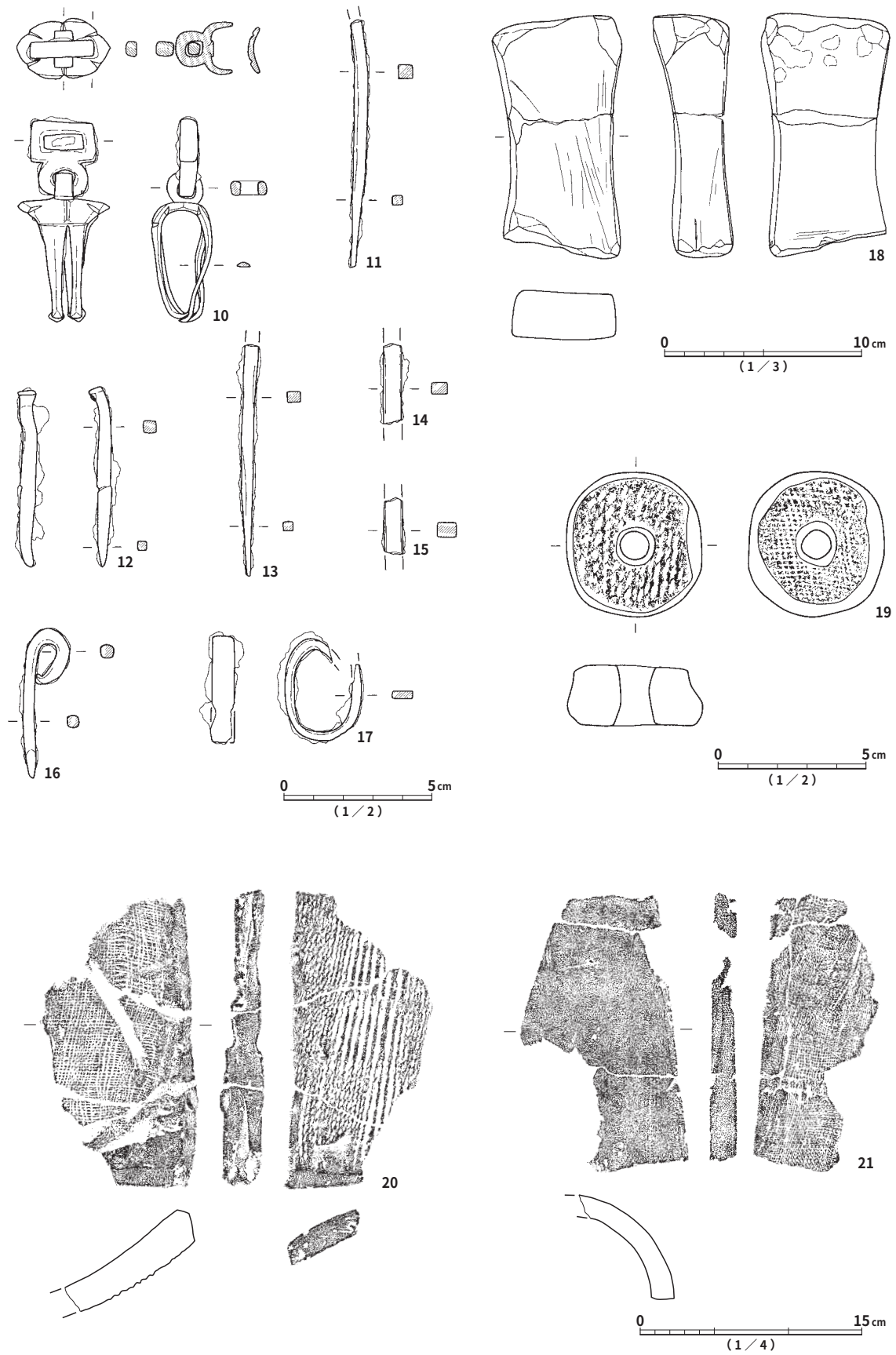


Fig.129 SI72(2) 遺物

り、須恵器3・4とカマド構築材の可能性のある丸瓦6などがまとまって出土している。右袖はSD01によって破壊されている。袖部分は壁外に張り出す構造のように見える。主柱穴は検出されていない。P1は深さ0.25mを測る。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量8,246.6gであり、このうち土器は2,394.5g、縄文土器をのぞく重さは1,569.5gであった。実測可能遺物は、1が土師器杯、2が須恵器杯であり、2の底部外面には「在」の墨書がある。3が須恵器甕、4が須恵器壺である。土器以外では、5・8が平瓦、6・7丸瓦である。出土位置は、3・4・6・7がカマド内、1・2が床面から出土している。カマド左袖西側から完形の杯が出土しているが(Fig.130-ph.2左端)、現物の所在が明らかではない。

SI74 (Fig.132、PL.79・80・104)

SI74は、G15区に所在する。SD01と重複し、竪穴西側が破壊されている。本竪穴は、調査時の写真がないため、図面以外での検討ができない。

竪穴平面形態は方形ないし長方形を呈し、竪穴規模は主軸方向で2.50m、東西方向遺存部で1.84m、確認面からの深さは0.36～0.42m程度を測る。主軸方位はN-3.0°-Wである。カマドは北壁中央にあり、右袖が遺存する。煙道部は確認できない。カマド前には粘土の分布がある。主柱穴は検出されていない。P1は深さ0.18m、P2は0.70mを測るが、本遺構にともなう可能性は低い。

出土遺物は、総重量2,422.6gであり、このうち土器は2,392.6g、縄文土器をのぞく重さは2,292.6gであった。実測可能遺物は、1が土師器甕、2・3が土師器杯、4が須恵器高台付杯である。他に、破片ではあるが、弥生時代中期宮ノ台式がまとまって出土している(6～13)。1～4は床面上8～9cmから出土している。

SI75 (Fig.133、PL.29・30・80・104)

SI75は、H15・H16区に所在する。竪穴東側でSD03と接している。竪穴東辺はSD03を避けているように見える。その場合本竪穴がSD03より新しいことになるが、それは疑わしい。

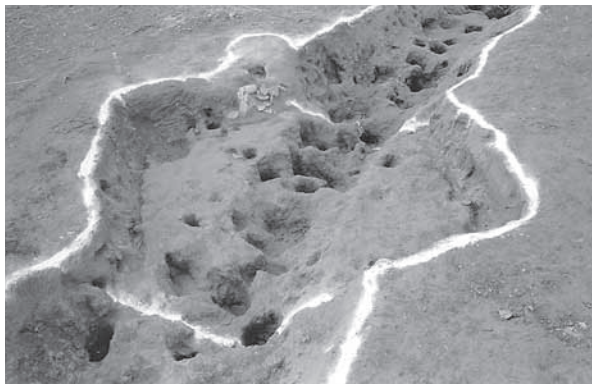
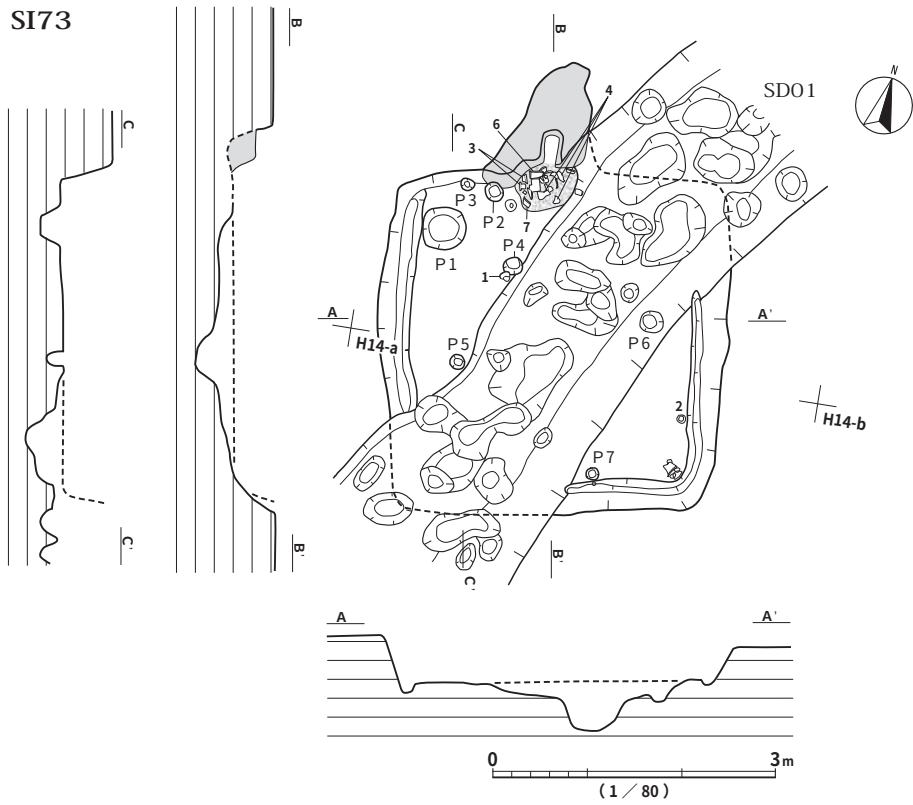
竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は3.54m(主軸)×3.45m、確認面掘形面積は11.54㎡、確認面からの深さは0.18～0.47m程度を測る。主軸方位はN-71.0°-Eである。カマドは東壁中央にあるが、煙道部は検出されていない。調査写真では袖基底部付近まで掘り下げられており、燃焼部が凹んでいる。主柱穴は検出されていない。深さは、P1が0.36m、P2が0.43m程度を測る。周溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量1,867.7gであり、このうち土器は1,567.7g、縄文土器をのぞく重さは1,037.7gであった。実測可能遺物は、1・2が土師器甕、3～8が土師器杯、9・10が須恵器杯、11が土師器小形壺である。出土位置は、3が床面上、4が床面上4cm、6・9が床面上13cmである。

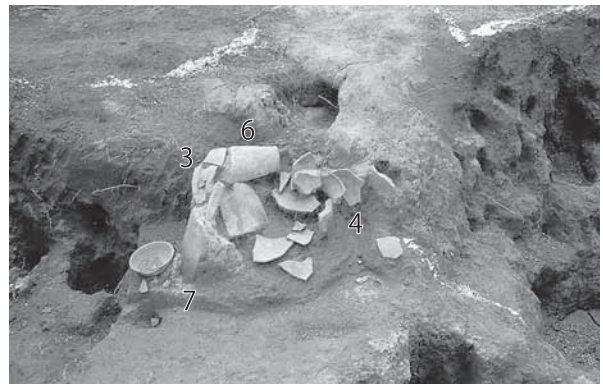
SI76 (Fig.134～136・188、PL.30・104・123・137・138)

SI76は、I12・I13区に所在する。竪穴北西隅でSD02と重複する。記録上の根拠はないが、SD02が新しいと考えておく。

竪穴平面形態は長方形を呈し、竪穴全体規模は推定で3.24m(主軸)×3.48m、カマド煙道部を含む主軸長は4.38m、確認面掘形面積は11.32㎡、確認面からの深さは0.39～0.55m程度を測る。主軸方位はN-21.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。カマド図面は輪郭の粘土・焼土範囲のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は明らかでない。主柱穴は検出されていない。Pitの深さは、



ph.1 全景



ph.2 カマド、出土状況 3・4・6・7

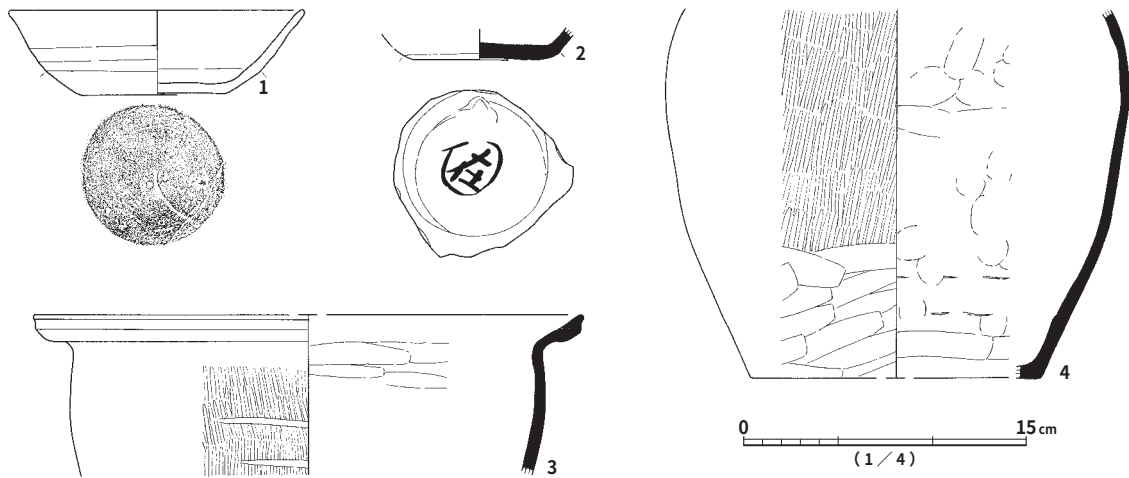


Fig.130 SI73(1) 遺構遺物・調査状況

SI73



Fig.131 SI73(2) 遺物

SI74

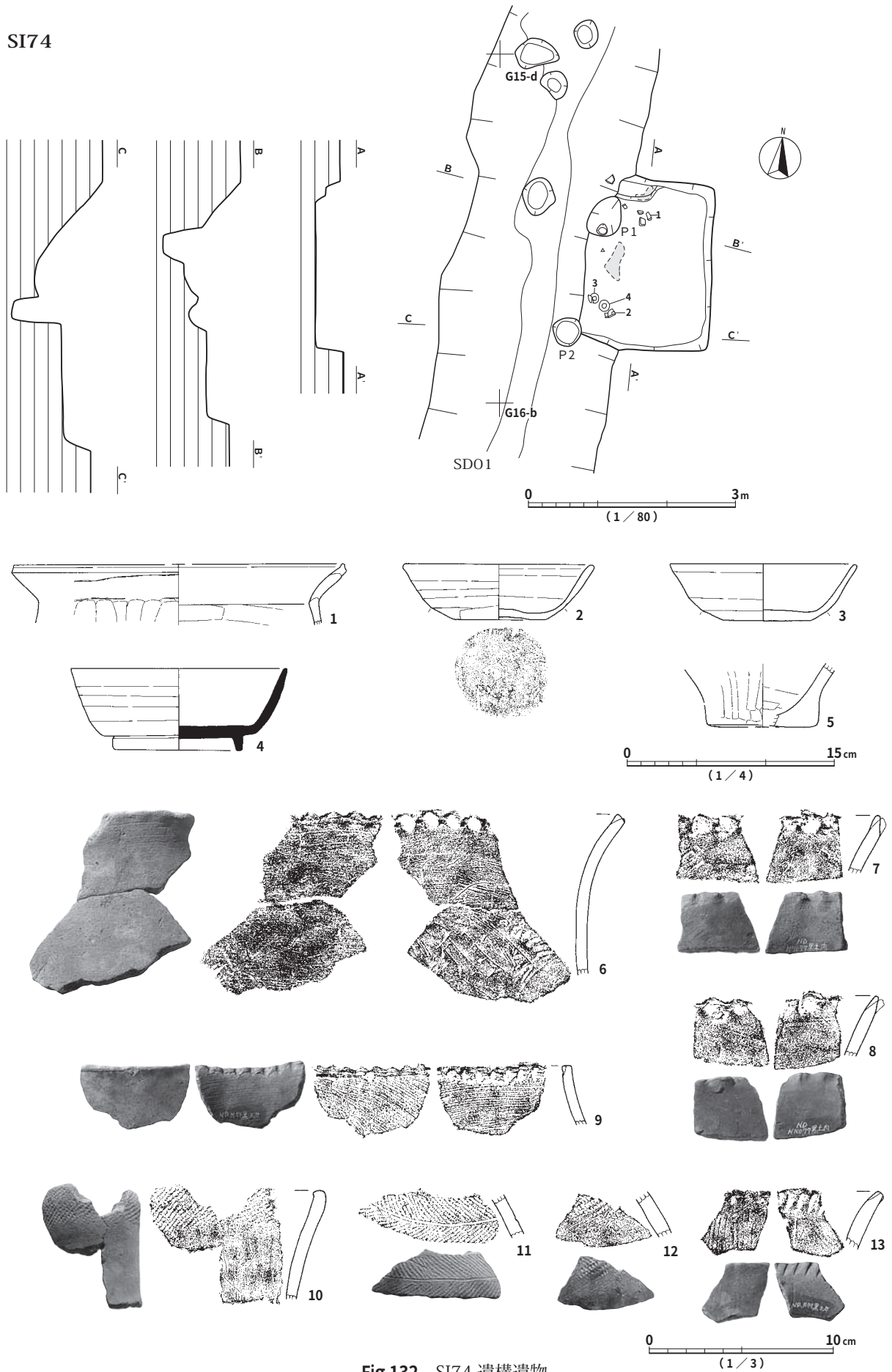


Fig.132 SI74 遺構遺物

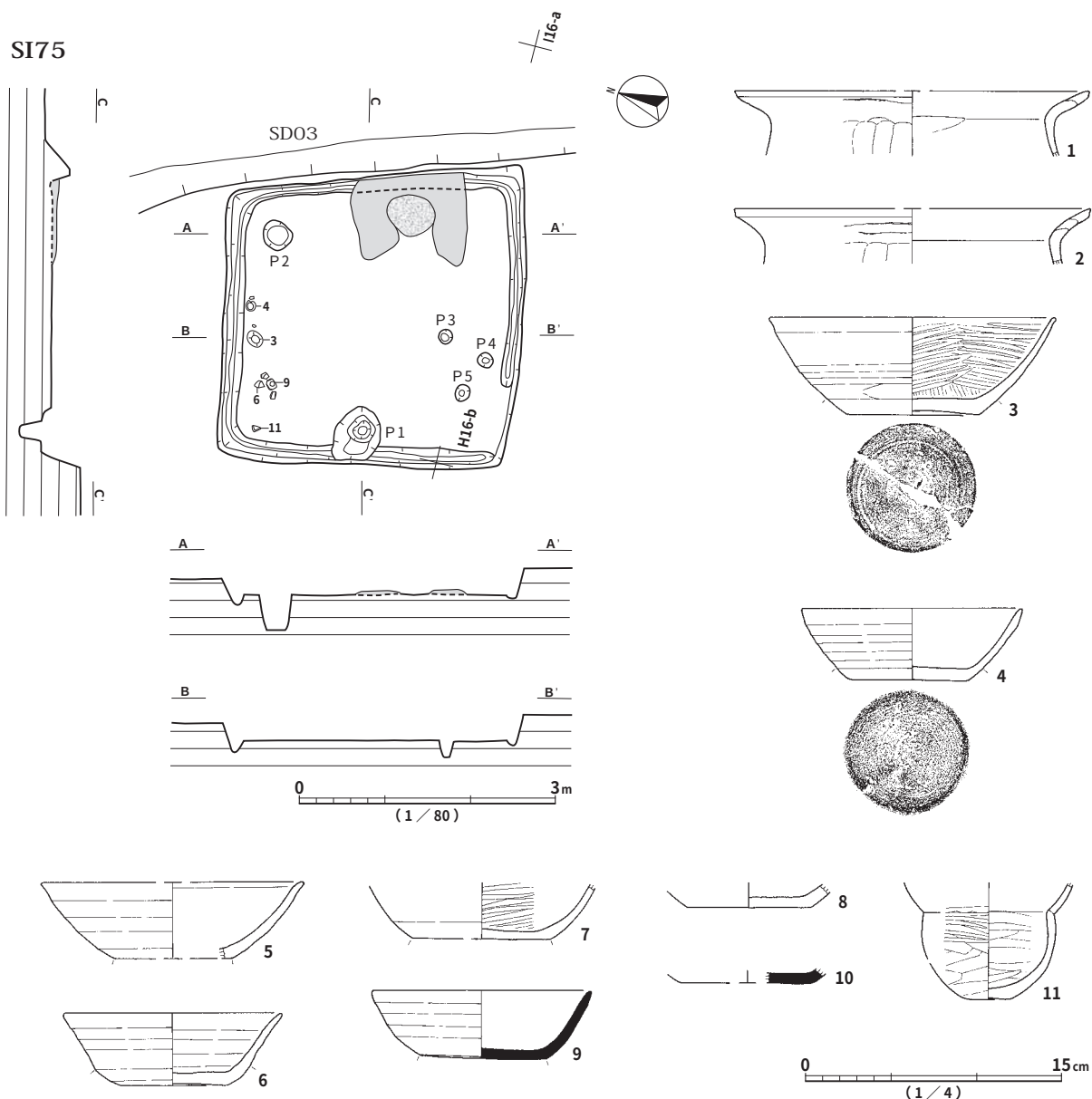


Fig.133 SI75 遺構遺物

P1が0.21m、P2が0.09m、P3が0.12m程度といずれも浅い。壁溝は北辺部以外で検出している。

出土遺物は、総重量37,507.9gであり、このうち土器は3,587.9g、縄文土器をのぞく重さは2,717.9gであった。実測可能遺物は、1～6が土師器甕、7が土師器台付甕、9・11～13が土師器杯、10・14・15が須恵器杯、8が須恵器甕である。土器以外では、16・18・19が平瓦、17・20が丸瓦、21・22が磚である。他に磨石 (Fig.188-35・37・40) が出土している。出土位置は、1が床面上15cm、15が22cm、16がカマド煙道部から出土している。

SI77 (Fig.137～139・188・189・193・198、PL.30・80・105・123・125・127・138・140・141)

SI77は、I9区に所在する。竪穴東側でSD14と重複する。重複関係は、調査状況、平面図とも曖昧であり、新旧関係はどちらともとれるが、一応SD14が新しいと考えておく。また、南東隅部でSD01と接している。

竪穴平面形態は胴張りの隅丸長方形を呈し、竪穴全体規模は現状で3.51m(主軸)×2.85m、確認面掘形面積は9.55㎡、確認面からの深さは0.20～0.26m程度を測る。主軸方位はN-73.0°-Eであ

SI76

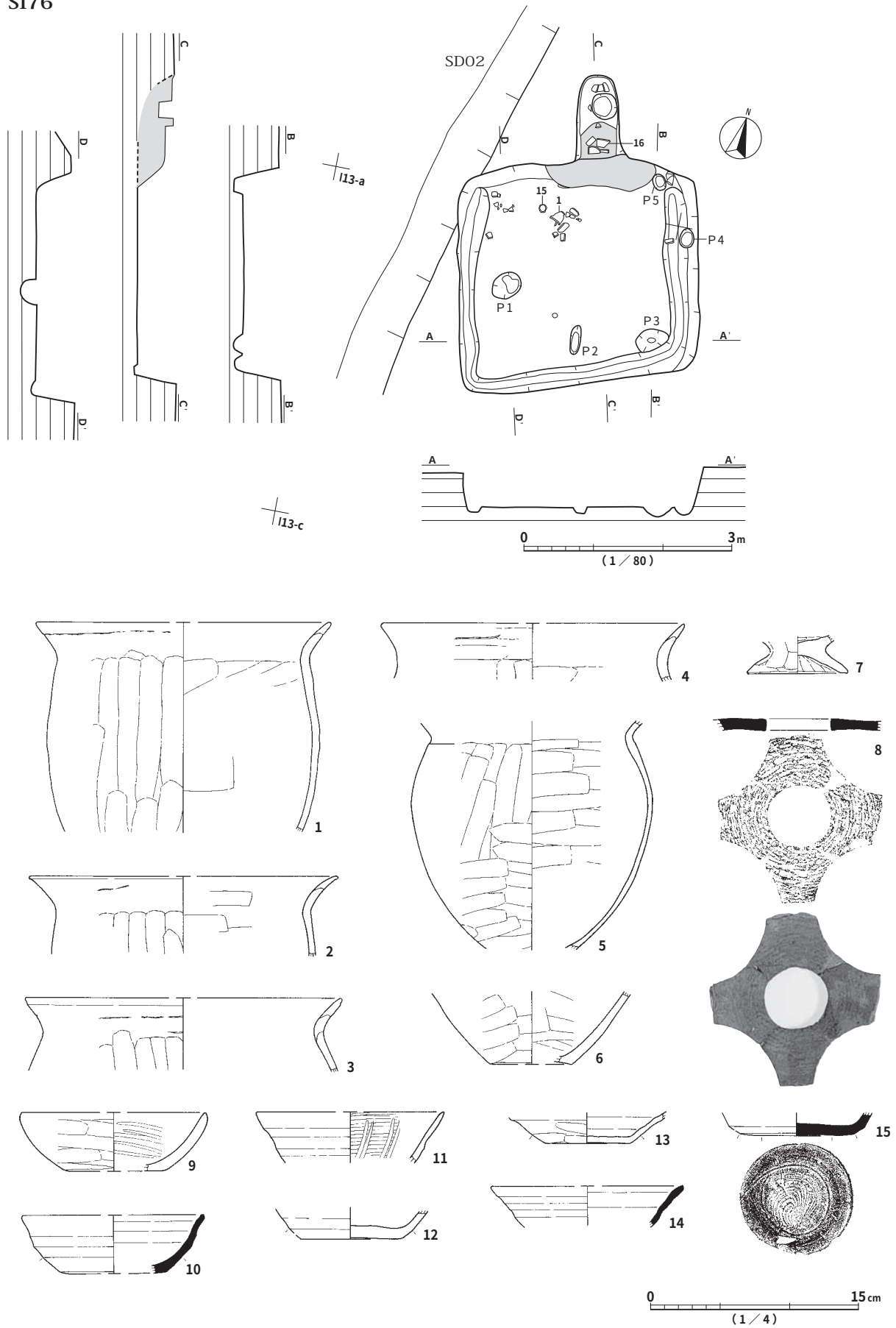


Fig.134 SI76(1) 遺構遺物

SI76

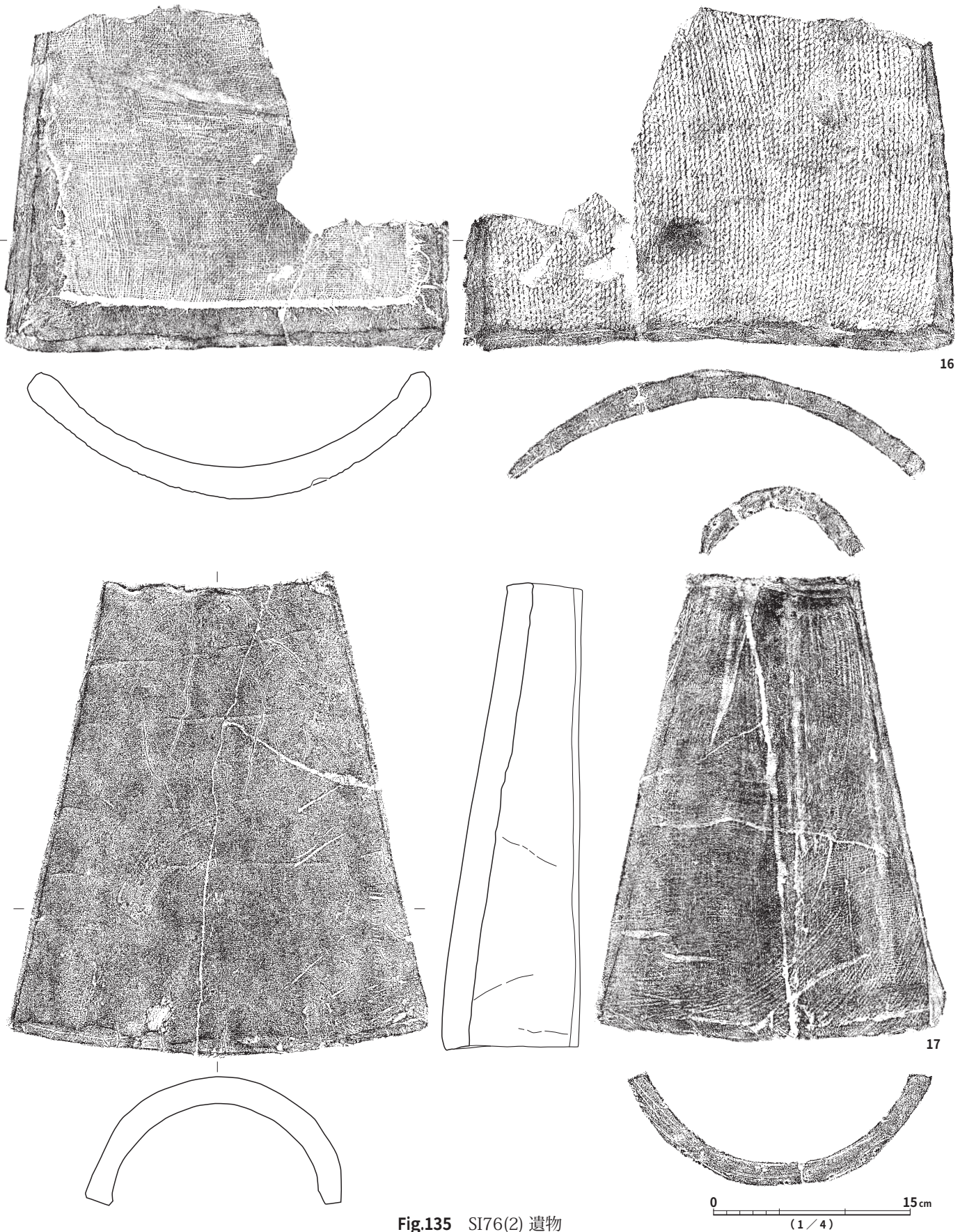


Fig.135 SI76(2) 遺物

SI76

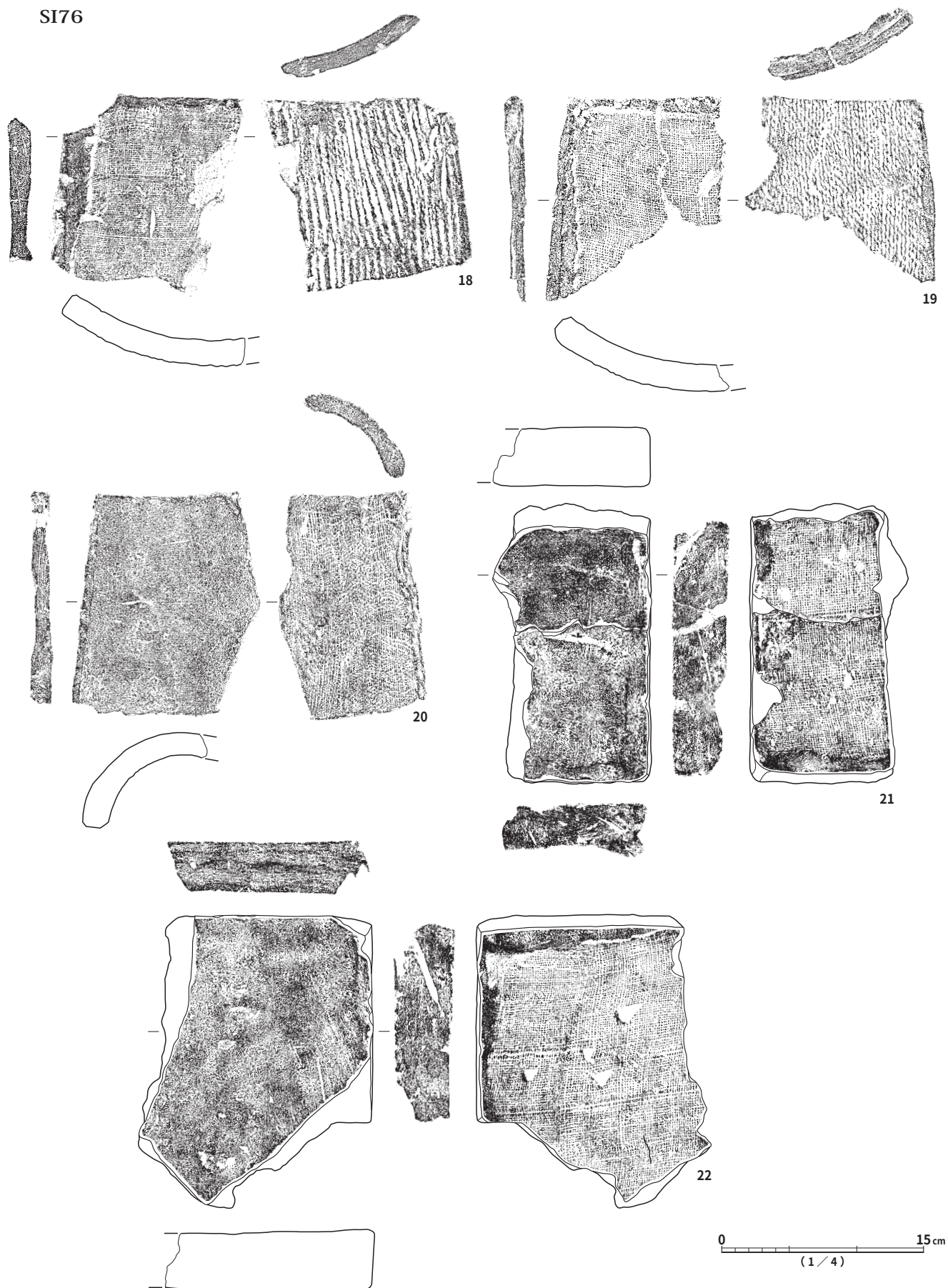


Fig.136 SI76(3) 遺物

る。なお、竪穴西辺部で長方形土坑と重複するが、壁溝の走行から判断すると、現状の西壁は長方形土坑掘形に影響されているようにも見える。この場合、本来の竪穴平面形態は、ほぼ方形であった可能性がある。カマドは西壁中央にある。ただし、カマド図面は竪穴内の粘土・焼土範囲輪郭のみであり、袖や燃焼部、煙道部、カマド掘形などの詳細は明らかでない。支柱穴は検出されていない。P1は深さ0.11mと浅い。竪穴西側の長方形土坑については、近年の芋穴状ではあるが、竪穴範囲と合致していることから、本竪穴に近接する時期の所産である可能性も考えられる。規模は、2.44m(主軸)×1.04m、竪穴床面からの深さは0.65mを測る。壁溝は南辺部で検出している。P1周辺で、粘土の分布が確認できる。

出土遺物は、総重量23,846.1gであり、このうち土器は15,587.7g、縄文土器をのぞく重さは6,287.9gであった。実測可能遺物は、1～4が土師器甕、5が須恵器壺、6が須恵器甕、7が灰釉長頸壺、8～16・19が土師器杯、17・18・20が土師器高台付杯である。土器以外では、21が鉄製刀子、22・23が不明鉄器、24が鉄滓、25～28が平瓦、29・30が丸瓦である。調査メモによると、鉄鏃2点の記載があるが、21～23に対応するものがあるかどうかは不明。他に磨石(Fig.188-39、189-41)・石皿(Fig.193-78)・石棒(Fig.198-121)が出土している。出土状況は、調査メモに記載があるが、平面図に図化されていない。調査写真によると、大半は床面よりやや上から出土しているが、カマド粘土もややもち上がっているようにも見えるため、現状床面が掘形面である可能性も考えられる。なお、長方形土坑の出土遺物に関する記載は一切ない。

SI78 (Fig.140、PL.80・91・105・141)

SI78は、I8・I9区に所在する。竪穴東側でSD01・14と重複するが、竪穴範囲はほぼ遺存する。本竪穴は、調査時の写真がないため、図面以外での検討ができない。

竪穴平面形態は横長方形を呈し、竪穴全体規模は2.52m(主軸)×3.13m、確認面掘形面積は7.32m²、確認面からの深さは0.22～0.36m程度を測る。主軸方位はN-46.0°-Wである。カマドは北西壁中央にある。ただし、カマド図面は粘土・焼土範囲輪郭のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は明らかでない。また、煙道部側は範囲が明示されていない。カマド前面には灰が分布する。Pitはいずれも浅く、P1が0.10m、P2が0.08m、P3が0.07m、P4が0.17m、P5が0.14m程度である。壁溝は検出されていない。

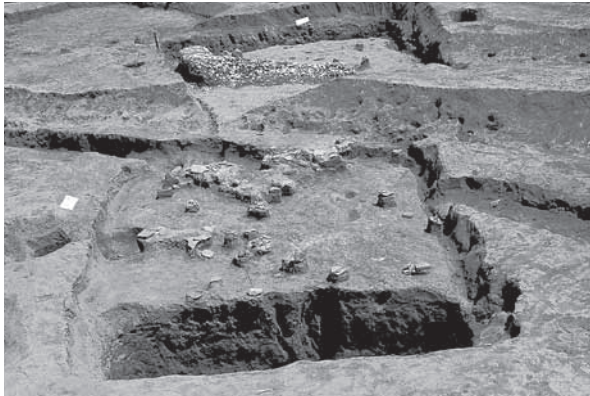
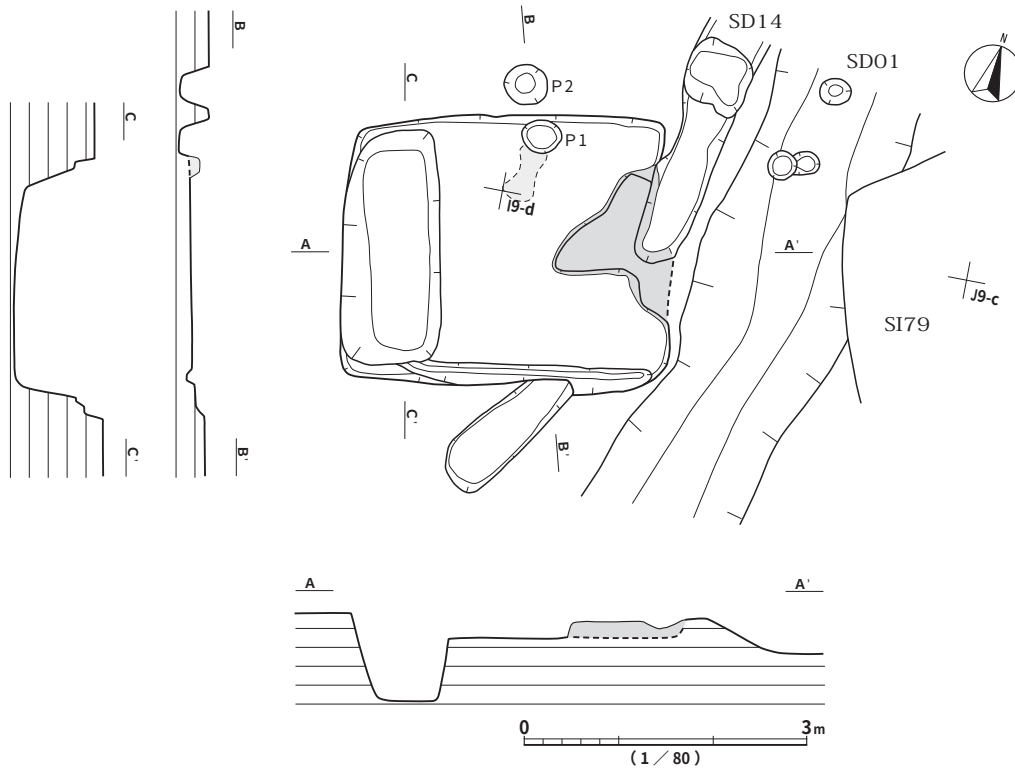
出土遺物は、総重量3,663.1gであり、このうち土器は3,547.4g、縄文土器をのぞく重さは3,047.4gであった。実測可能遺物は、1・5・6土師器杯、2・4が須恵器杯、3が土師器高台付杯である。土器以外では、8が不明鉄器である。平面図では、北隅部から瓦が出土しているが、特定できない。なお、7の壺形土器は、遺存状態が良いにもかかわらず、調査図面、メモに記載がない。注記の誤りである可能性がある。

SI79 (Fig.141・193・196、PL.30・31・80・105・125・126)

SI79は、I9・J9区に所在する。竪穴対角線南北方向にSD02が走行し、西隅部でSD01と重複するが、溝底面は竪穴床面に達していない。本竪穴に対して、SD01・02が新しいと考えておく。また、北隅部でSI80と接しているが、新旧関係は不明。本竪穴内には、調査時に「天平貝塚」と称していた貝層が存在する。

竪穴平面形態はやや横長方形を呈し、竪穴全体規模は3.91m(主軸)×4.29m、確認面掘形面積は

SI77



ph.1 全景



ph.2 カマド



ph.3 出土状況



ph.4 出土状況

Fig.137 SI77(1) 遺構遺物・調査状況

SI77

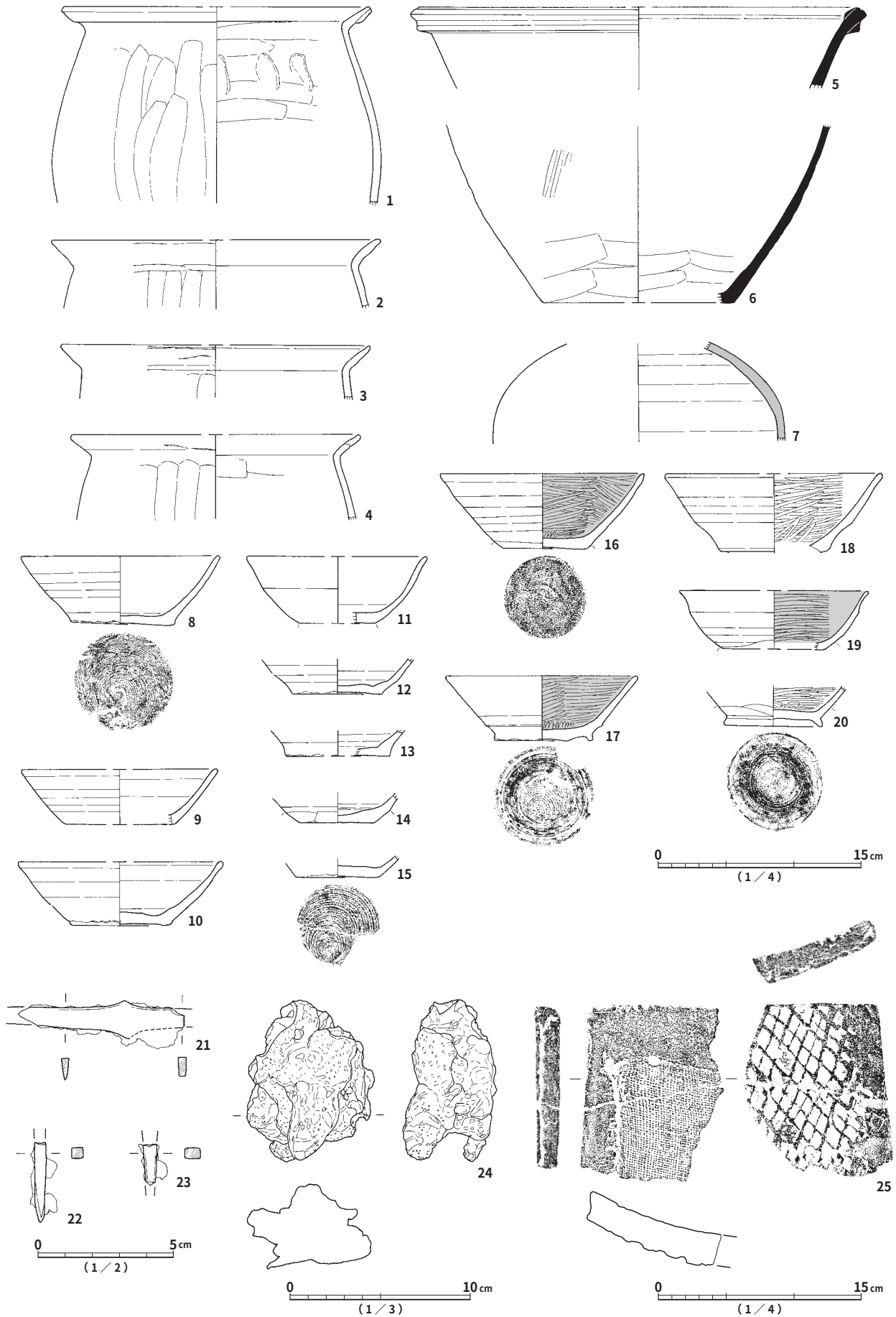


Fig.138 SI77(2) 遺物

SI77

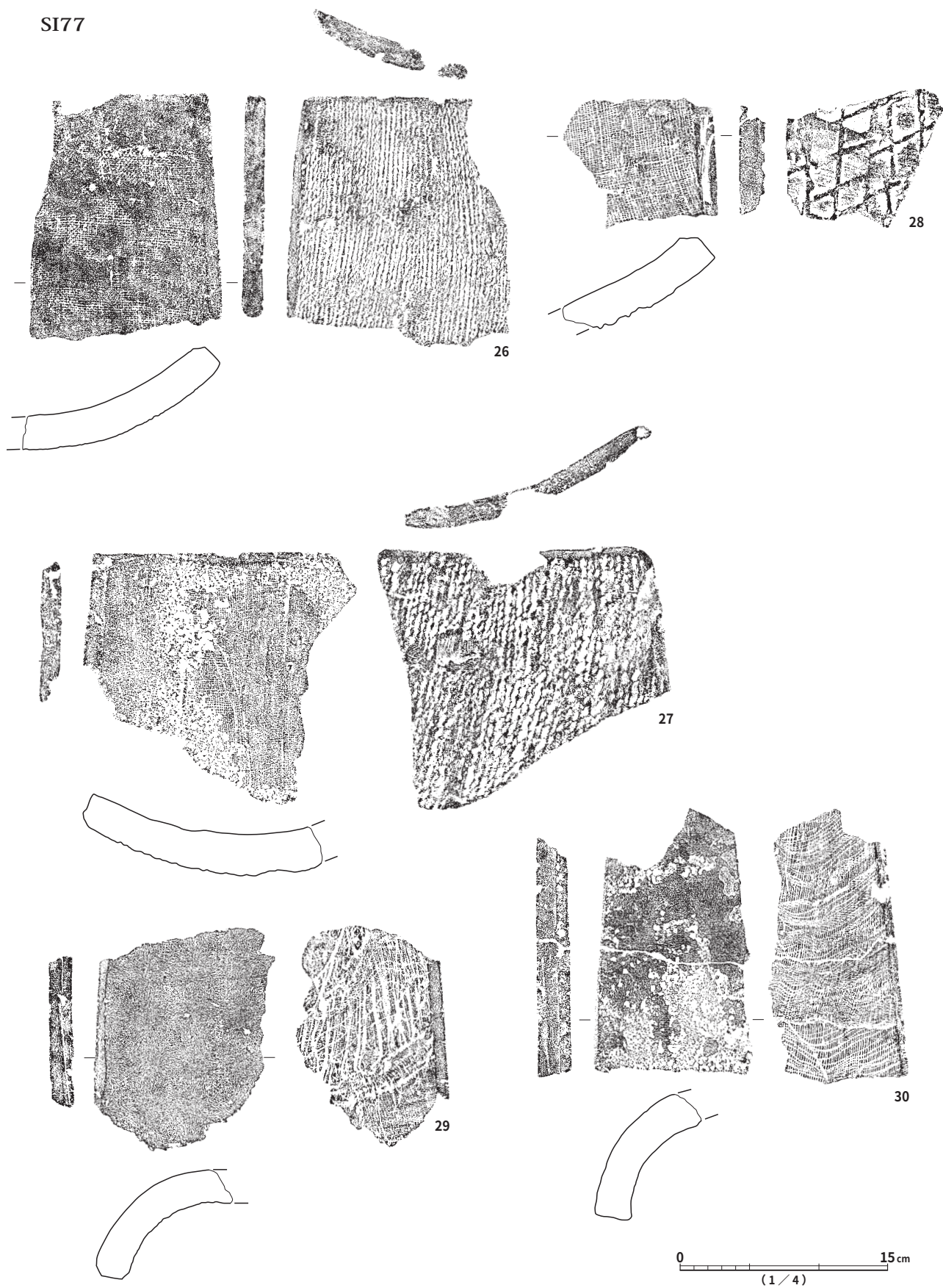


Fig.139 SI77(3) 遺物

SI78

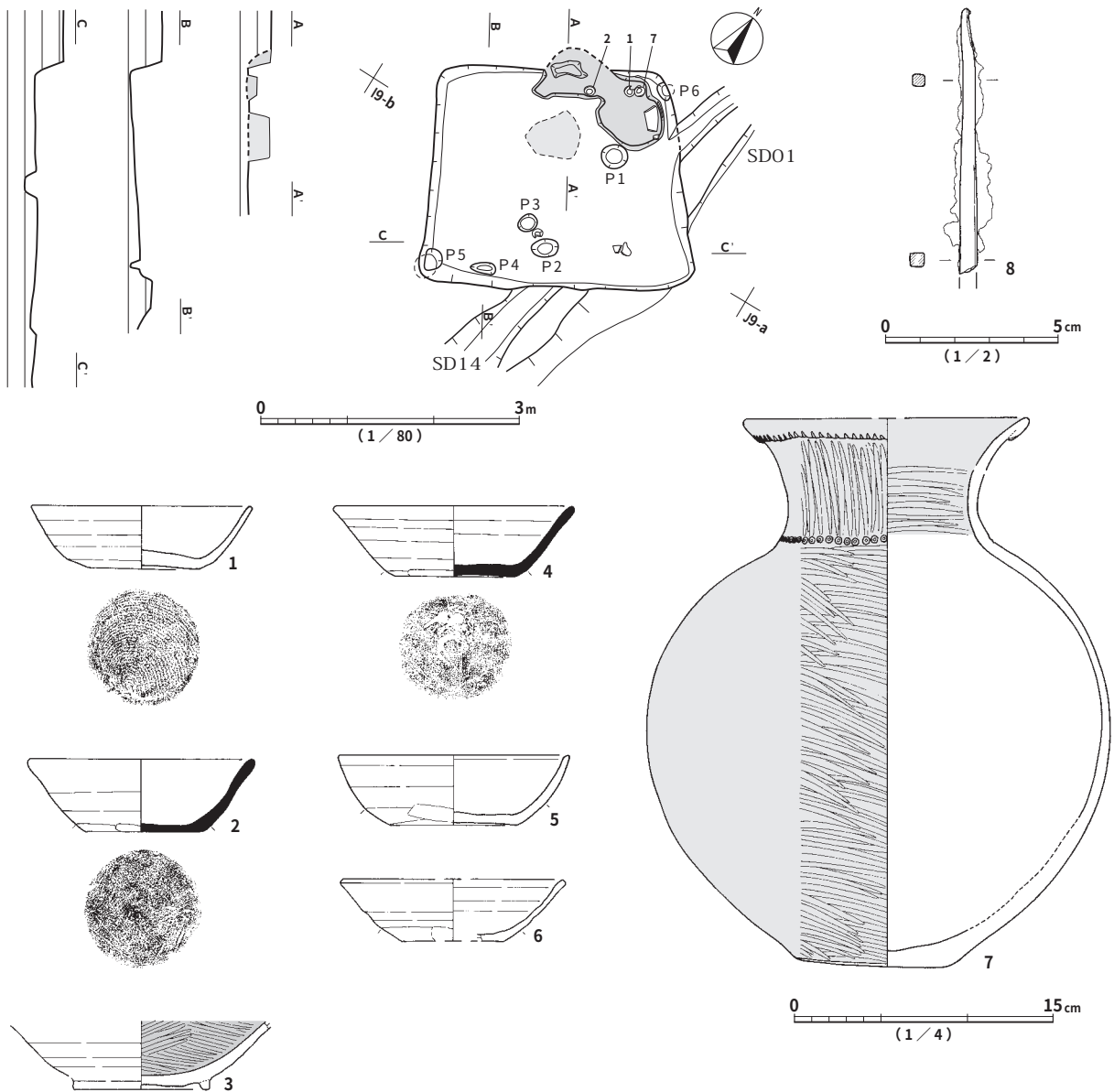


Fig.140 SI78 遺構遺物

14.26㎡、確認面からの深さは0.31～0.64m程度を測る。北西-南東方向を主軸とした場合の方位は、N-24.0°-Wである。カマドは検出されていない。壁溝はほぼ全周するが、支柱穴などの屋内施設は不明。竪穴内の貝層除去後の調査写真、図面が存在しない。

貝層は、ほぼ南北方向帯状に存在する。SD02の走行と一致しているが、調査写真から判断すると、貝層上面がほぼ溝底面にあたると思われる。この貝層については、断面略図がある。これによると、分層はなく、注記は「貝層には遺物を混入する。下位はローム面に接する。ハマグリ、アサリ、巻き貝、マテガイ」とある。ローム面はほぼ水平に描かれており、これが竪穴床面にあたると思われる。このことから、竪穴とは別の掘形の存在は可能性として低い。なお、本調査にともなう、貝層サンプルが残されている。遺跡名以外の情報がまったくないが、本遺構のものである可能性が高い(第2章第3節(2))。

SI79

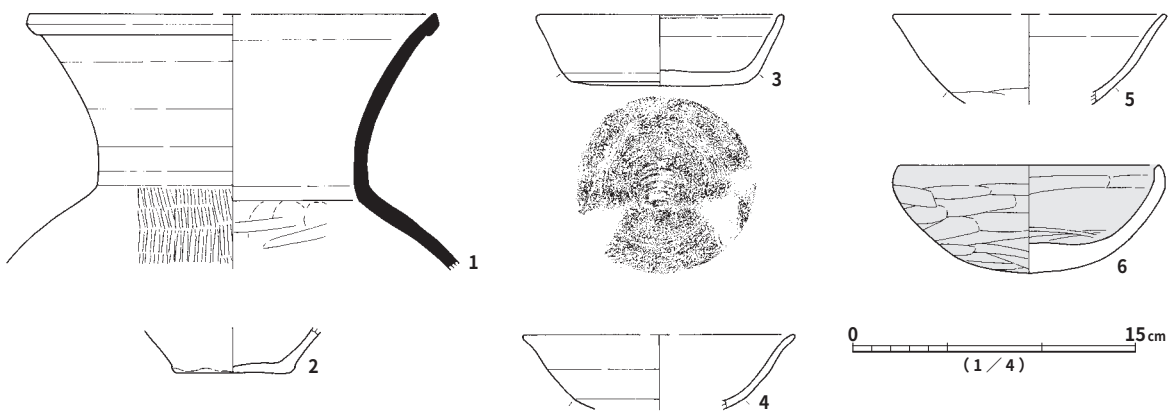
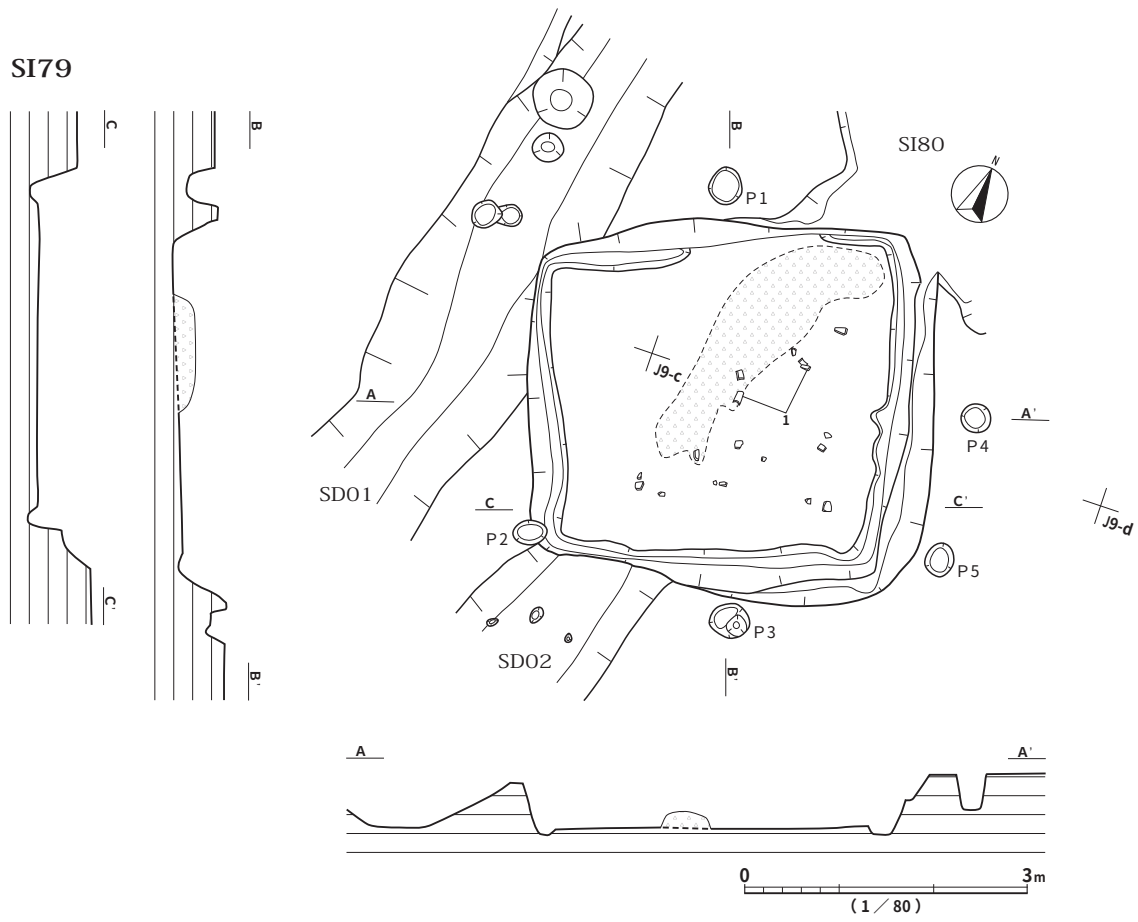


Fig.141 SI79 遺構遺物・調査状況

出土遺物は、総重量3,592.0gであり、このうち土器は2,984.6g、縄文土器をのぞく重さは1,114.1gであった。実測可能遺物は、1が須恵器甕、2～6が土師器杯である。土器以外では、他に石皿(Fig.193-77)・打製石斧(Fig.196-93)が出土している。このうち、1は貝層付近から出土しているが、出土レベルは不明。

本竪穴は、出土土器から奈良・平安時代の所産と判断した。ただし、これにも時期差がある。

SI80 (Fig.142・191、PL.31・80・105・124)

SI80は、J8・J9区に所在する。竪穴対角線南北方向にSD02が走行する。調査写真を参照すると、溝底面と竪穴床面はほぼ同レベルである。新旧関係については、SD02が新しいと考えておく。また、南隅部でSI79と接しているが、新旧関係は不明。

竪穴平面形態は隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は3.58m(主軸)×3.87m、確認面掘形面積は12.90m²、確認面からの深さは0.15～0.28m程度を測る。北西-南東方向を主軸とした場合の方位は、N-51.0°-Wである。カマドは検出されていない。SD02によって破壊された可能性もあるが、痕跡も認められない。柱穴、壁溝なども検出されていない。P1は、深さは0.45mを測る。

出土遺物は、総重量14,686.7gであり、このうち土器は13,757.2g、縄文土器をのぞく重さは311.2gであった。実測可能遺物は、1・2が土師器杯である。土器以外では、他に凹石(Fig.191-66)が出土している。

本竪穴は、カマドがないことから弥生・古墳時代の竪穴である可能性も考えられるが、出土土器から奈良時代の所産と判断しておく。

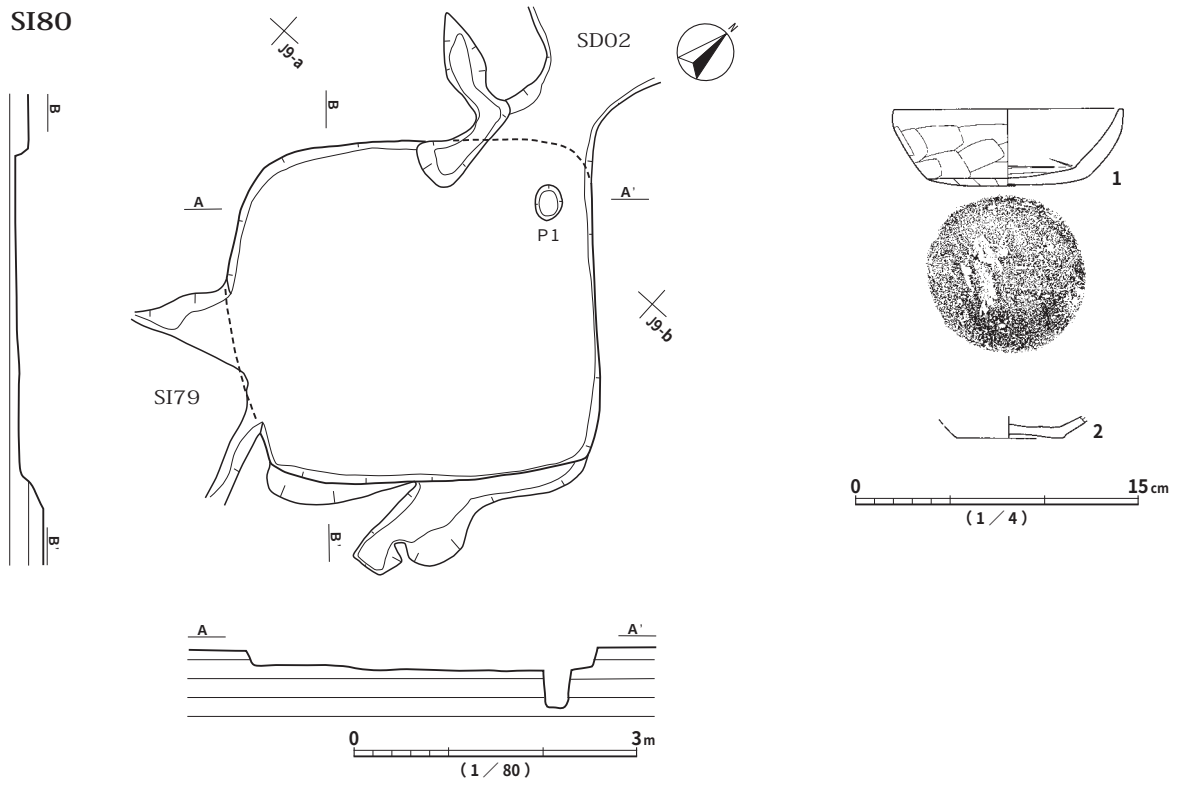
SI81 (Fig.142～146・193、PL.31・80・81・92・105・121・125・139・141)

SI81は、L15区に所在する。竪穴東側でSD20と重複するが、竪穴床面には達していない。新旧関係については、SD20が新しいと考えておく。

竪穴平面形態は長方形を呈し、竪穴全体規模は3.88m(主軸)×3.40m、カマド煙道部を含む主軸長は4.79m、確認面掘形面積は13.41m²、確認面からの深さは0.36～0.50m程度を測る。主軸方位はN-77.0°-Eである。カマドは西壁中央やや南にある。カマド図面は粘土範囲の輪郭のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は明らかでない。Pitはいずれも浅く、P1が0.11m、P3が0.27m、P6が0.17m、P7が0.14mである。壁溝はほぼ全周する。南東隅部の落ち込みは、竪穴掘形面と推定するが、明らかではない。北辺部中央で砂塊を検出しているが、詳細は不明。

出土遺物は、総重量17,736.9gであり、このうち土器は9,145.0g、縄文土器をのぞく重さは8,975.0gであった。実測可能遺物は、1～6・9～11が土師器甕、7・8・36・37が須恵器甕、12・14～22が土師器杯、13が土師器高台付杯、23が土師器盤、24が土師器皿、25～27が須恵器杯、29・30が灰釉長頸壺、31が須恵器甕、28が須恵器高台付杯である。土器以外では、38～41が平瓦、32が鉄製刀子、33が不明鉄器、34・35砥石である。他に石皿(Fig.193-80)が出土している。竪穴中央部床面近くから歯が出土している(Fig.143-ph.4)。調査メモでは「馬歯」としているが、現物が確認できない。出土状況は、23・25・29・30が床面レベルから、15も調査写真によると、床面やや上から出土していると思われる。遺物の多くは、カマド周辺東辺部から出土しており、多くは遺存遺物と推定する。ただし、本竪穴も、遺物番号がメモの略図にしか記載がないため、図面と調査メモ、遺物注記の対照が難しかった。

SI80



SI81

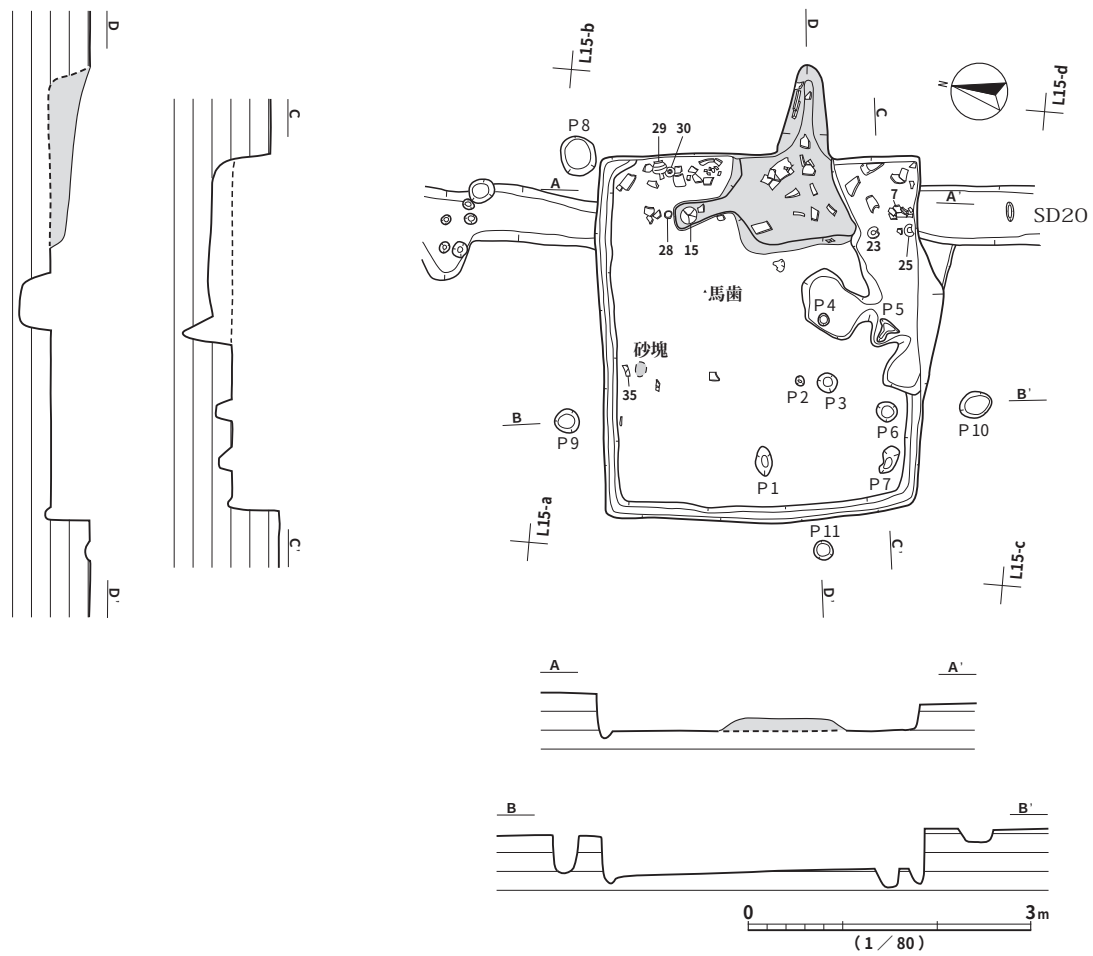
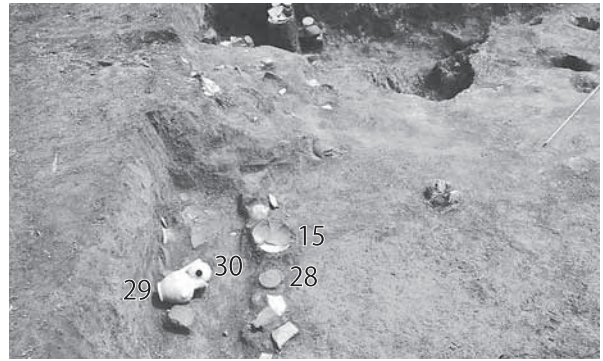


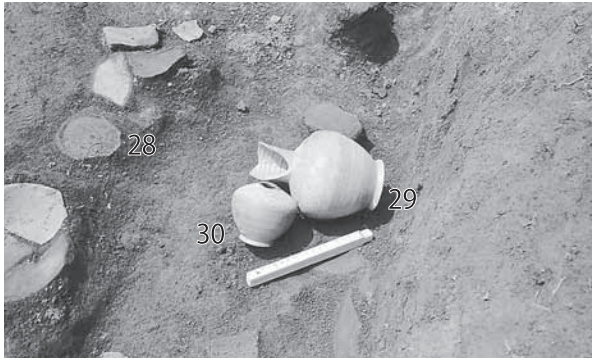
Fig.142 SI80 遺構遺物、SI81(1) 遺構



ph.1 カマド、出土状況



ph.2 カマド、出土状況 15・28・29・30



ph.3 出土状況 28・29・30



ph.4 出土状況 馬歯

SI81

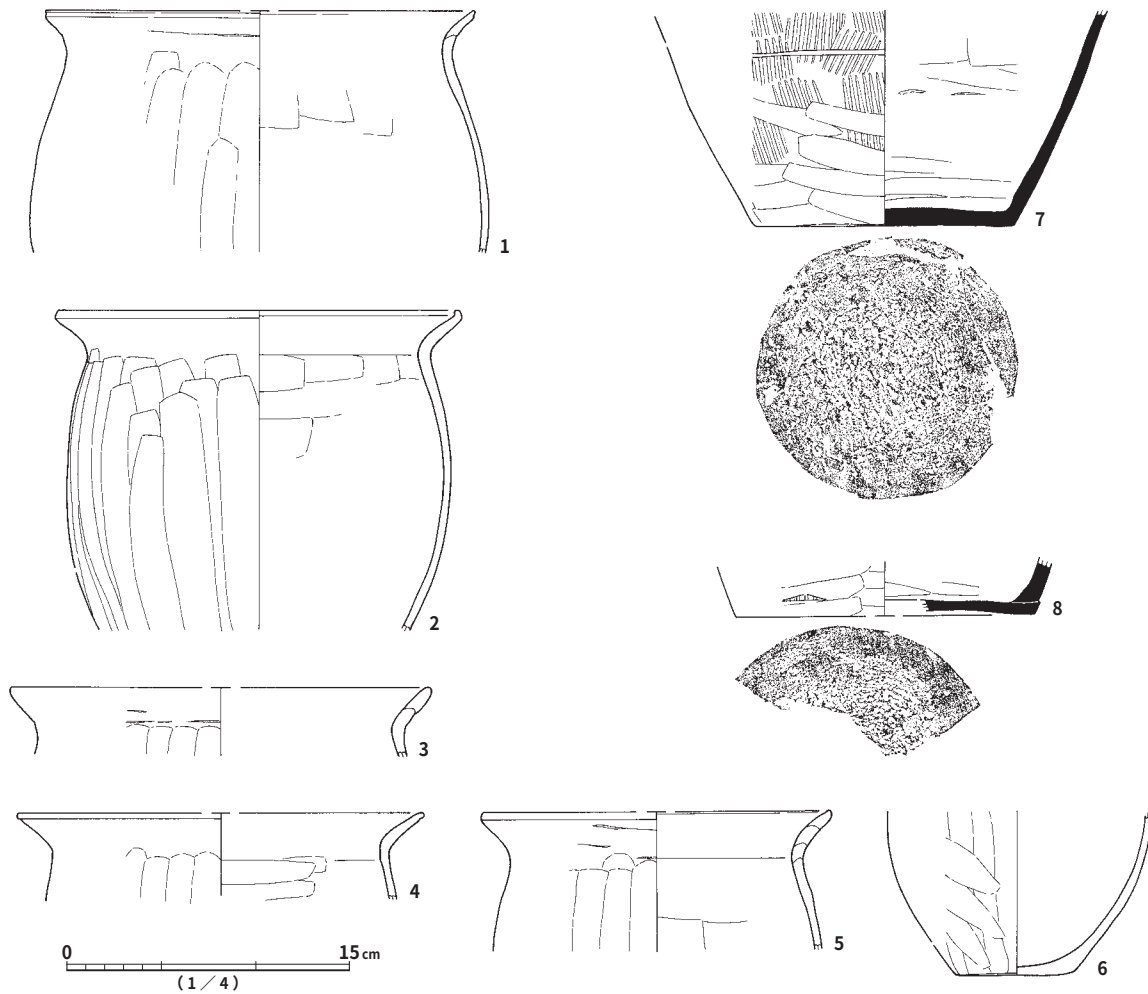


Fig.143 SI81(2) 遺物・出土状況

SI81

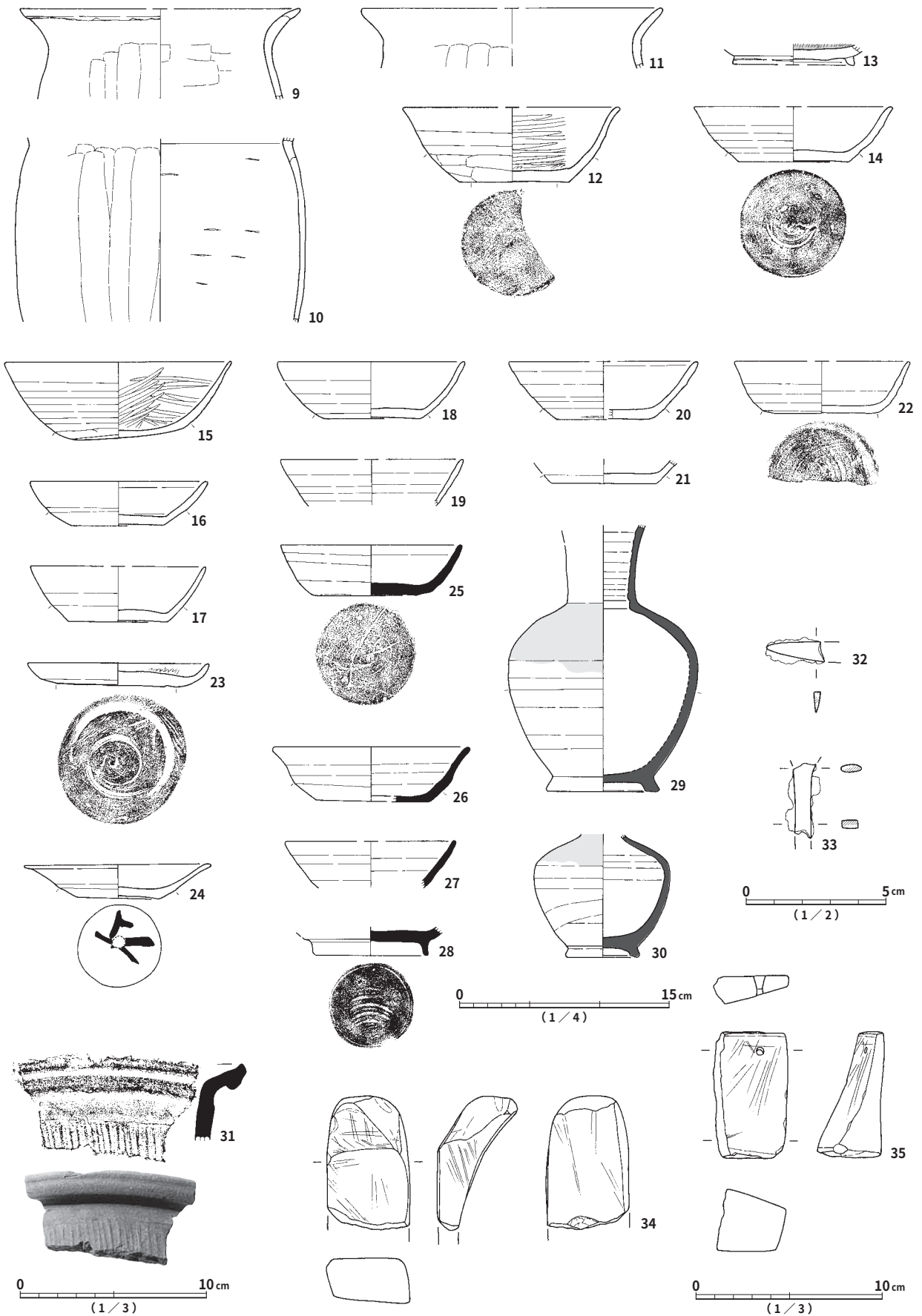


Fig.144 SI81(3) 遺物

SI81

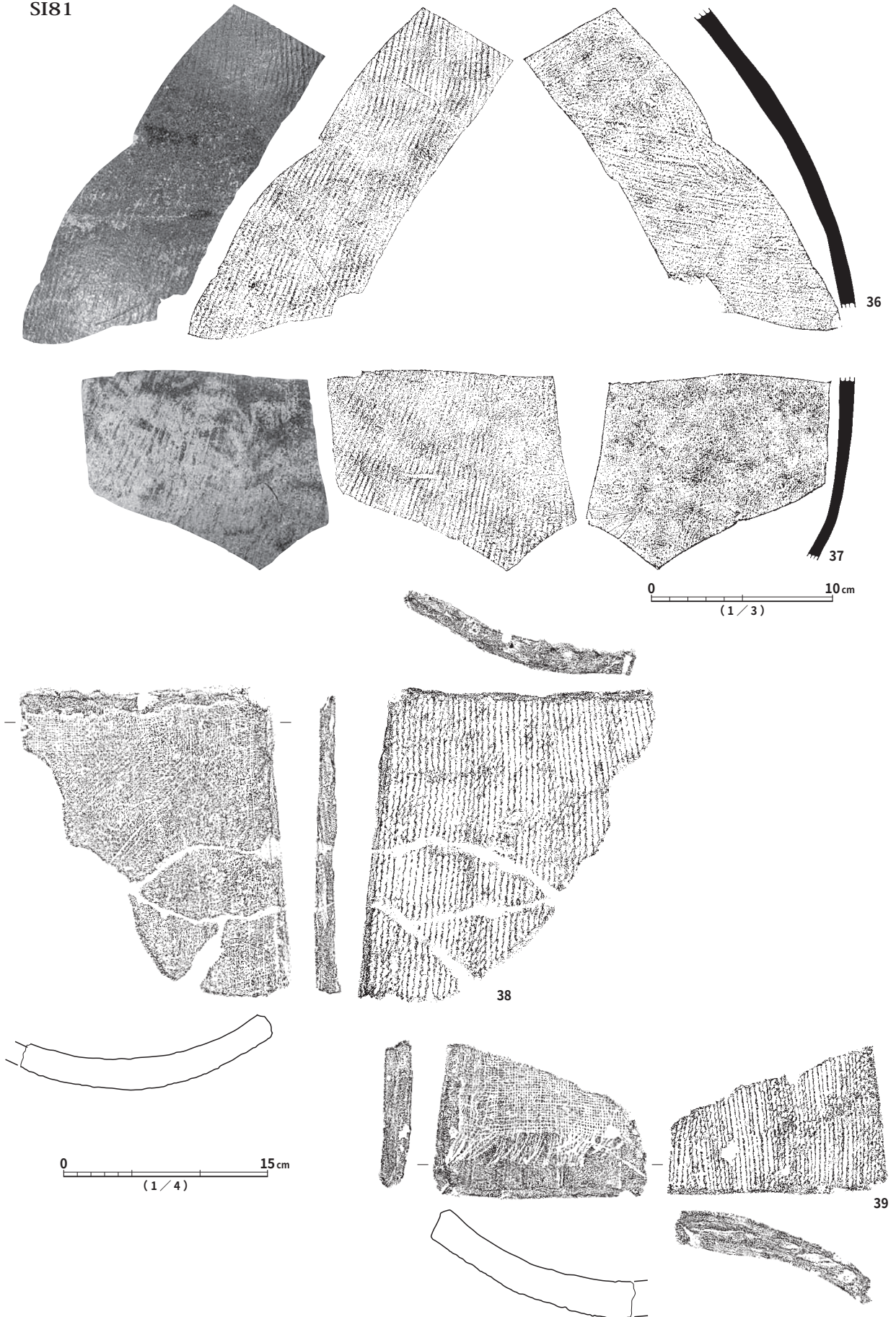
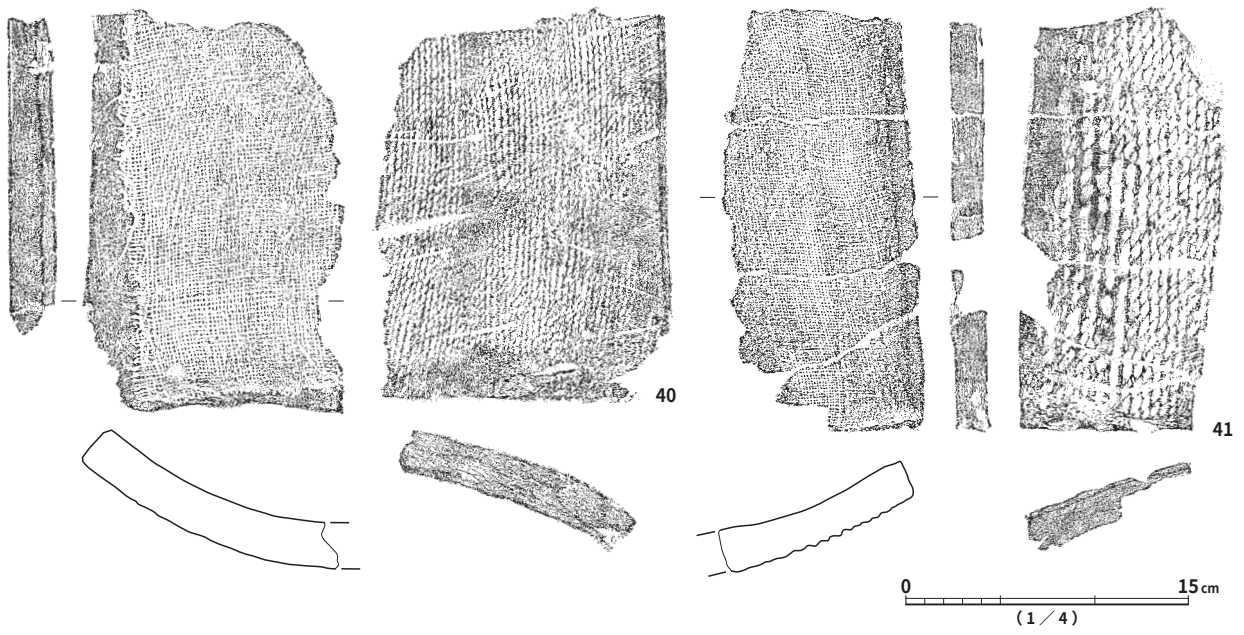


Fig.145 SI81(4) 遺物

SI81



SI82

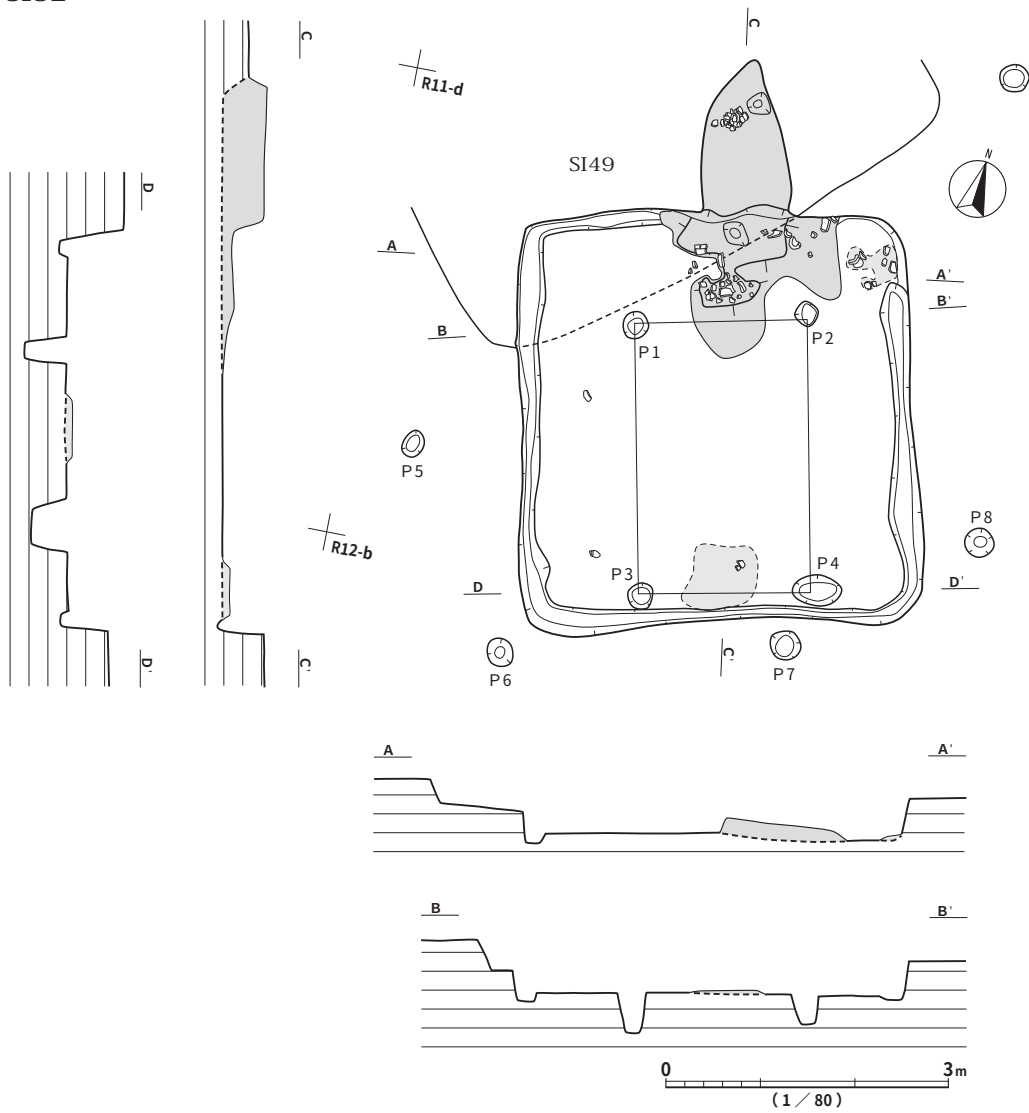
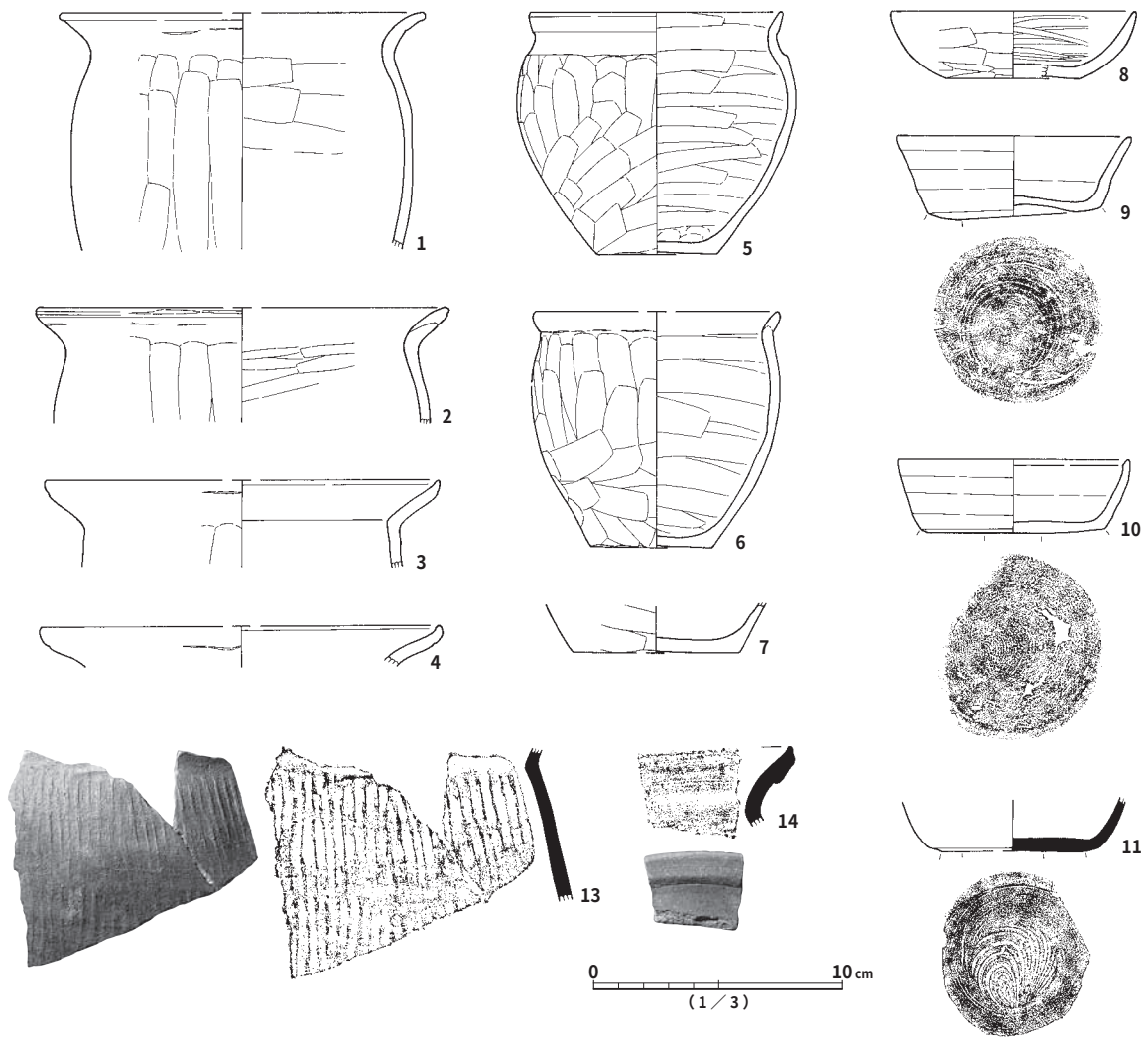


Fig.146 SI81(5) 遺物、SI82(1) 遺構

SI82



SI83

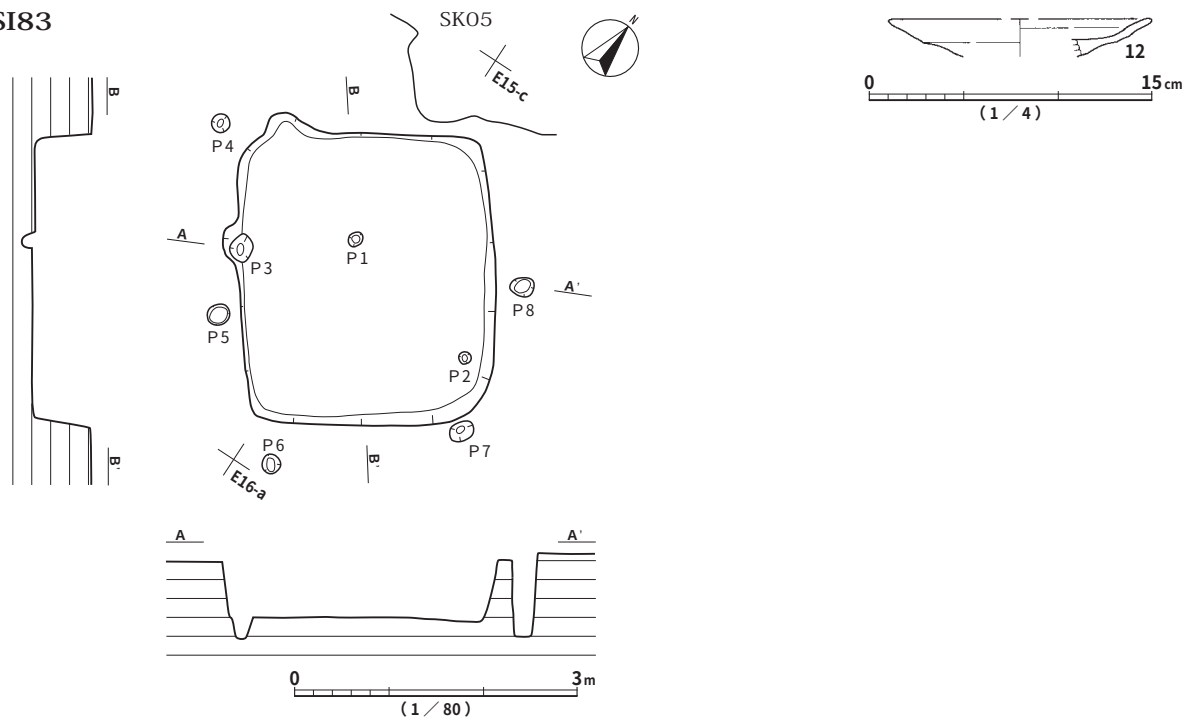
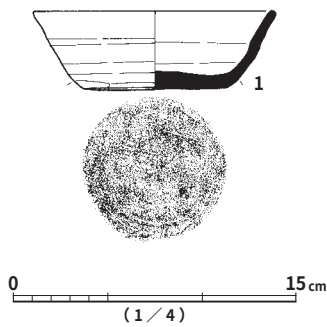
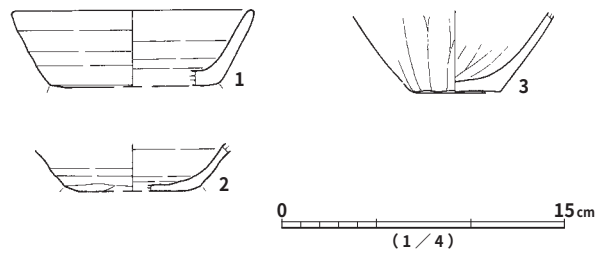


Fig.147 SI82(2) 遺物、SI83 遺構

SI84



SI86



SI85

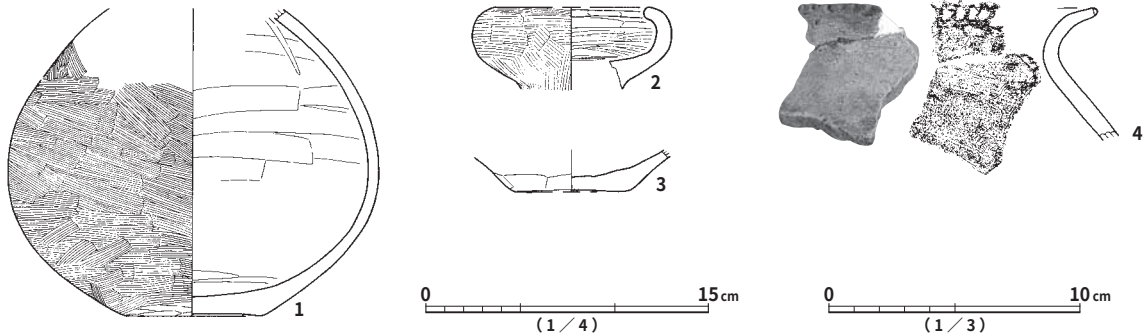


Fig.148 SI84 遺物、SI85 遺物、SI86 遺物

SI82 (Fig.146・147、PL.81・82・106)

SI82は、R11・R12・S11区に所在する。竪穴北側でSI49と重複する。新旧関係は本竪穴が新しい。床面は本竪穴が0.25m深い。本竪穴の調査写真は、着手前のもののみであり(PL.22)、掘り上がり状況を確認することができない。

竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は推定で4.38m(主軸)×4.27m、カマド煙道部を含む主軸長は5.87m、確認面掘形面積は19.07㎡、確認面からの深さは0.34～0.61m程度を測る。主軸方位はN-19.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。カマド図面は粘土範囲の輪郭のみであり、袖や燃焼部、カマド掘形などの詳細は明らかでない。カマドP1～4は主柱穴であり、主柱穴の柱間は2.87m(主軸長軸)×1.86m、深さは0.34～0.42mを測る。壁溝はほぼ全周する。北東隅部、カマド対面の南辺部では、粘土・焼土の分布が記録されている。

出土遺物は、総重量4,063.0gであり、このうち土器は3,813.0g、縄文土器をのぞく重さは2,930.8gであった。実測可能遺物は、1～4・7が土師器甕、5・6が土師器小形甕、8～10が土師器杯、11が須恵器杯、12が土師器皿、13・14が須恵器甕である。出土位置は特定できない。

(4) 時期不明

SI83 (Fig.147、PL.32)

SI83は、D15・E15区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は長方形を呈し、竪穴全体規模は3.07m(主軸)×2.69m、確認面掘形面積は8.00㎡を測る。主軸方位はN-41.0°-Wである。カマドや炉、その他屋内施設は検出されていない。竪穴外のPitは、掘形がしっかりしており、屋外柱穴の可能性はある。

出土遺物は一切存在しない。

竪穴に特徴がなく、出土遺物も確認できないことから、時期を明らかにすることができない。

SI84 (Fig.148、PL.82)

SI84(調査時番号H87)は、遺物のみ存在し、調査記録一切がなく、全体図上にも存在しない。遺物のみ掲載しておく。

SI85 (Fig.148、PL.106)

SI85(調査時番号H88)は、遺物のみ存在し、調査記録一切がなく、全体図上にも存在しない。遺物のみ掲載しておく。

SI86 (Fig.148)

SI86(調査時番号H89)は、遺物のみ存在し、調査記録一切がなく、全体図上にも存在しない。遺物のみ掲載しておく。

第2節 その他の遺構

SK01 (Fig.149)

SK01は、O10-b区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

土坑規模は、全体で2.98m×2.86m、確認面からの深さは0.18~0.30m程度を測る。

調査メモによると、堀之内式土器が出土し、竪穴住居跡として調査が行われたが、プラン未定となっている。ここでは、土坑として掲載しておく。

出土遺物の所在を明らかにすることができなかった。

SK02 (Fig.17)

SK02は、E15-a区に所在する。単独で存在し、他遺構との重複はない。

土坑平面形態は、ほぼ円形を呈し、規模は1.03m×0.98m、確認面からの深さは0.52m程度を測る。

SI04の調査図面に記載されているが、それ以外の記録は一切ない。

SK01

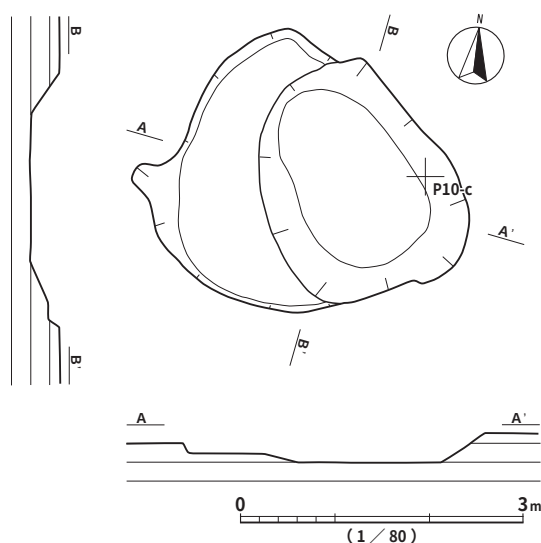


Fig.149 SK01 遺構

平面図には縄文土器が描かれているが、出土遺物の所在を明らかにすることができなかった。

SK03 (Fig.19、PL.8)

SK03は、G17-c区に所在する。SI05・06、SD01と重複する。縄文時代の竪穴住居跡であるSI05の炉を破壊している可能性が高いことから、SI05・06より新しく、SD01より古いと推定しておく。ただし、断面図などの遺構検出状況から検証できるわけではない。

土坑平面形態は、長方形を呈し、規模は3.95m×2.34m、確認面からの深さ0.73m、SI05床面からは0.70m程度を測る。主軸方位はN-46.0°-Eである。

調査時に、遺構番号が与えられているため掲載

SK04・05 SX01・02

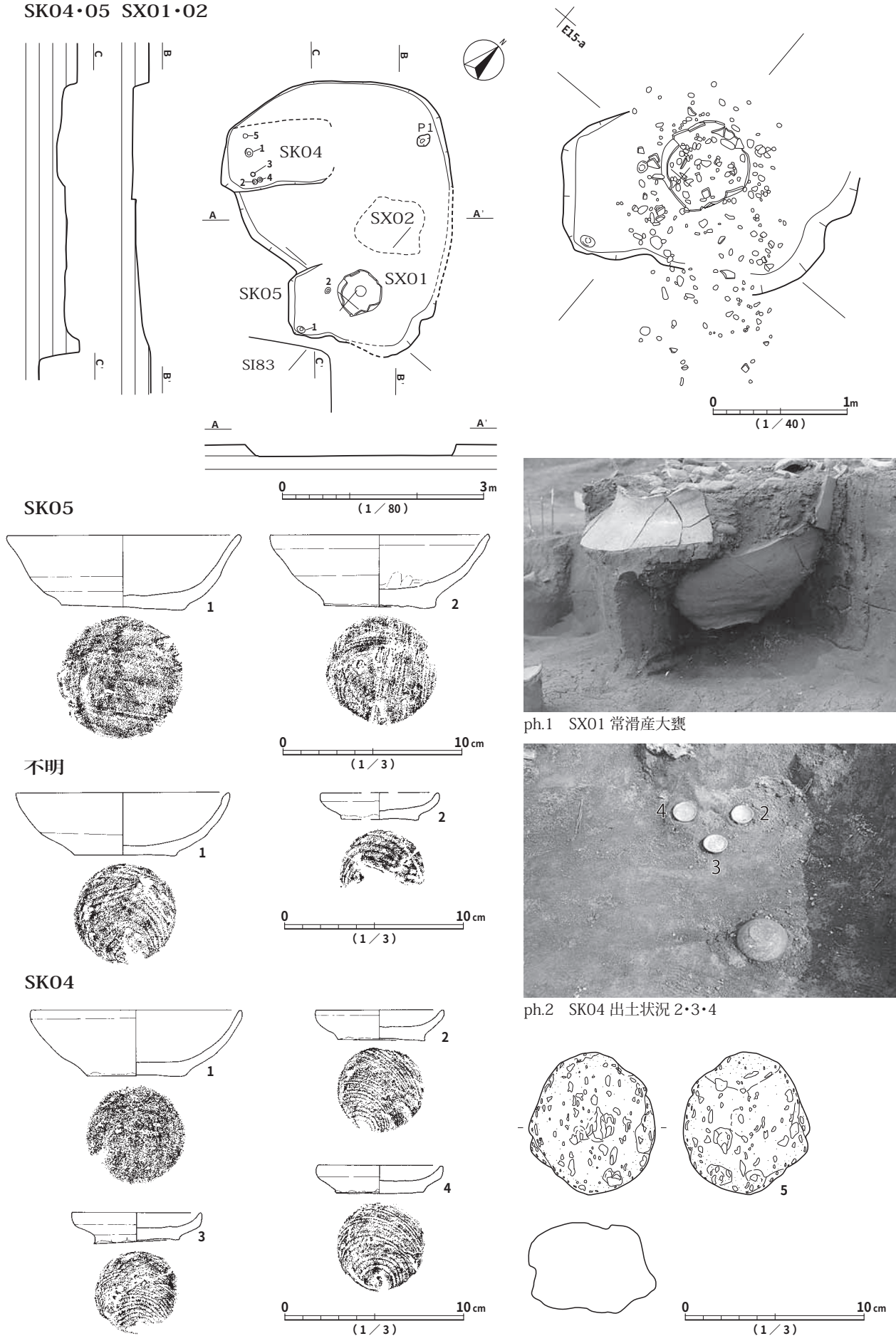


Fig.150 SK04 遺構遺物・調査状況、SK05 遺構遺物、SX01(1) 遺構・調査状況、SX02 遺構

SX01

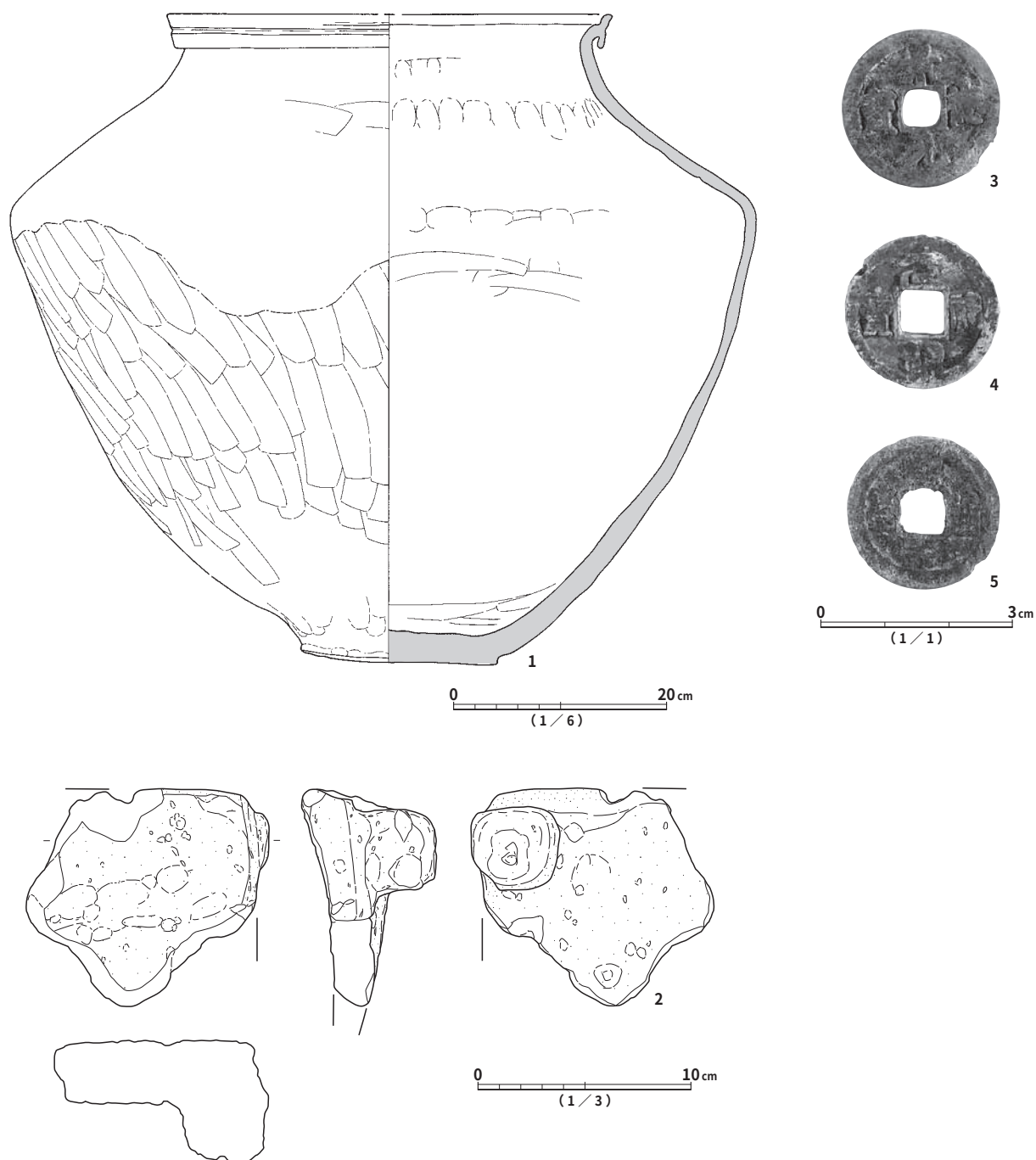


Fig.151 SX01(2) 遺物

するが、遺物は確認できない。

SK04 (Fig.150、PL.32・82・121)

SK04は、D15-b区に所在する。SK04は縄文時代竪穴住居跡であるSI04内にあり、SI04内には、別に常滑産大甕を棺ないし蔵骨器とするSX01が存在する。SK04は、調査時に識別されていたわけではないが、調査写真、カワラケの出土状況、SI04の縄文土器の出土位置などから、長方形の土坑を推定した。土坑墓の可能性はある。

規模は1.70m×0.95m、確認面からの深さは0.22m程度を測る。底面は、SI04床面より0.10m程

度低い。確認面からの深さは0.22mである。主軸方位はN-48.0°-Eである。

1~4のカワラケと軽石が南西辺側底面付近から出土している。Fig.150 不明1・2は、SI04内の一括出土品であり、SK04・05、SX01・02のいずれかに帰属する。

SK05 (Fig.150、PL.32・82)

SK05は、D15-d・E15-c区に所在する。SK04は縄文時代竪穴住居跡であるSI04内にあり、別に常滑産大甕を棺ないし蔵骨器とするSX01と重複するが、本遺構がSX01の掘形にあたる可能性もある。SK05は、調査時に区別されていたわけではないが、調査写真、カワラケの出土状況から、長方形の土坑を推定した。土坑墓の可能性はある。

規模は、短軸で1.02m、確認面からの深さは0.14m程度を測る。長軸長は、最大で2.16m程度になると推定する。SI04床面よりやや高く、SI04の範囲からはずれている可能性もある。主軸方位はN-31.0°-Eである。

1・2のカワラケが、底面やや上から出土している。Fig.150 不明1・2も本遺構にともなう可能性がある。

SX01 (Fig.150・151、PL.32・82・91・121・141)

SX01は、D15-b・E15-a区に所在する。SI04内にあり、SK05・SX02と重複する。

常滑産大甕の埋納遺構である。埋設状況は明確ではないが、棺ないし蔵骨器として再利用された常滑産大甕と、周辺に分布する円礫からなる。常滑産大甕は、口縁部径41.0cm、器高59.6cmを測る。上半部は厚い自然釉に覆われ、胴部下半にハケ状の擦痕を残す。周辺および内部から多量の円礫が出土している。大甕は、SK05を掘り込み範囲とする可能性もあるが、円礫の分布範囲は、SK05の推定主軸方向と直交するため、ここでは、別遺構と考えておく。掘り上がり状況が明らかではないため、判断は難しい。

断面図はないが、調査メモによると、遺存部から20cm下まで石が多数出土し、その下5cm付近に骨粉、その下10cm付近から古銭3点が出土している。古銭は、ほぼ甕底面近くと思われる。円礫には墨書などの痕跡はなく、経石ではない。骨粉は残されていない。

出土した宋銭3点は、3が「景德元宝」、4が「元祐通宝」、5は判読できない。2は、方形の皿部に脚をもつ石皿である。出土位置は不明。他に、調査メモでは鉄釘が1点出土しているが、これは所在が明らかではない。常滑産大甕から、13世紀後葉と推定しておく。

SX02 (Fig.150、PL.32)

SX02は、D15-b区に所在する。鉄釘の集中地点であり、SX01、SK04・05と近接する時期の棺など木箱の可能性はある。SI04内にありSX01と接している。SX01・02とも掘り込み範囲が明確ではないが、SX01にともなう円礫はSX02上部に達していない。重複関係があった場合、本遺構が新しい可能性がある。

調査メモによると、おおよそ0.80m×0.96mの範囲から、砥石1点と鉄釘が26点まとまって出土している。出土高は、「床面より+24cm」の記載があるが、現場写真などで掘り上がり状況を確認することができないため、「床面」がSI04の床面であるのか、本遺構にともなう掘り込みがあったのかは不明。

遺物は、現状において所在を確認することができない。調査メモに、「副葬品盗難」の書き込みがある。

第3節 貝塚

(1) 貝塚と出土土器

本遺跡は貝塚遺跡であり、SI01・03・79で竪穴内貝層が確認されている。このうち、SI01・03は堀之内1式期の竪穴住居跡である。この貝塚は、国分寺台土地区画整理事業にさいして行われた分布調査で発見されたものであり、その段階では「南中ノ台貝塚」と呼称されている。すでに指摘されているように(鷹野 1991)、具体的に調査が行われた形跡はなく、平面図・断面図などの記録類は一切残されていない。実際、一部竪穴内貝層以外の存在は皆目見当がつかない状態であった。市遺跡分布地図では、L7区からSI03周辺谷部側に貝層範囲がしめされているが、その根拠を確認することができない。唯一、調査時のメモにグリッドごとの概略図があり、そこに貝層範囲がしめされていた。Fig.152はこれを描き写したものである。これによると、貝層の分布は、B谷左又奥(Fig.4)を中心とする。これをもとに垂直写真を見ると、不明瞭ではあるがおおよそ対応する範囲を認めることができ

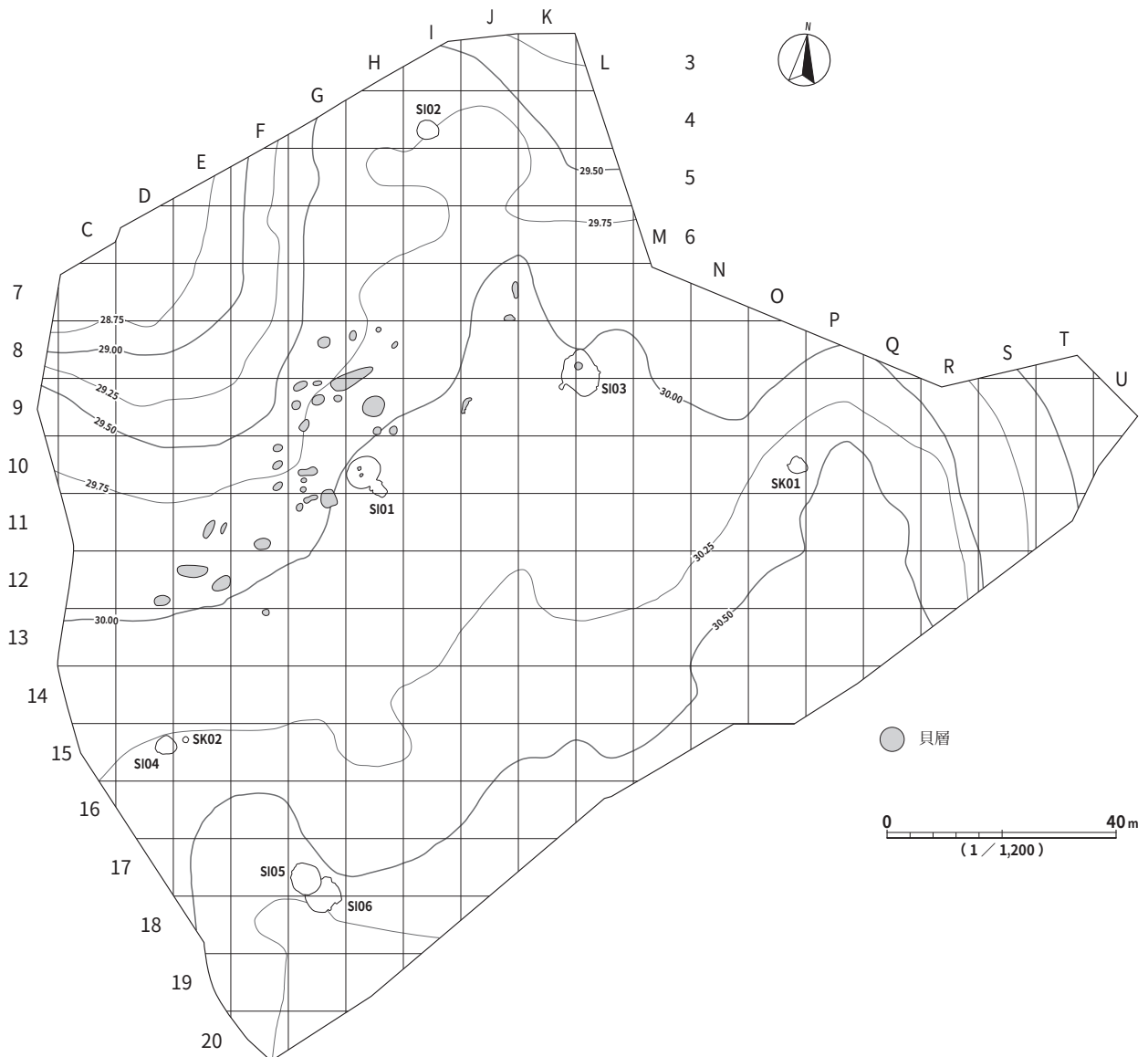


Fig.152 南中台遺跡縄文時代貝塚、遺構配置図

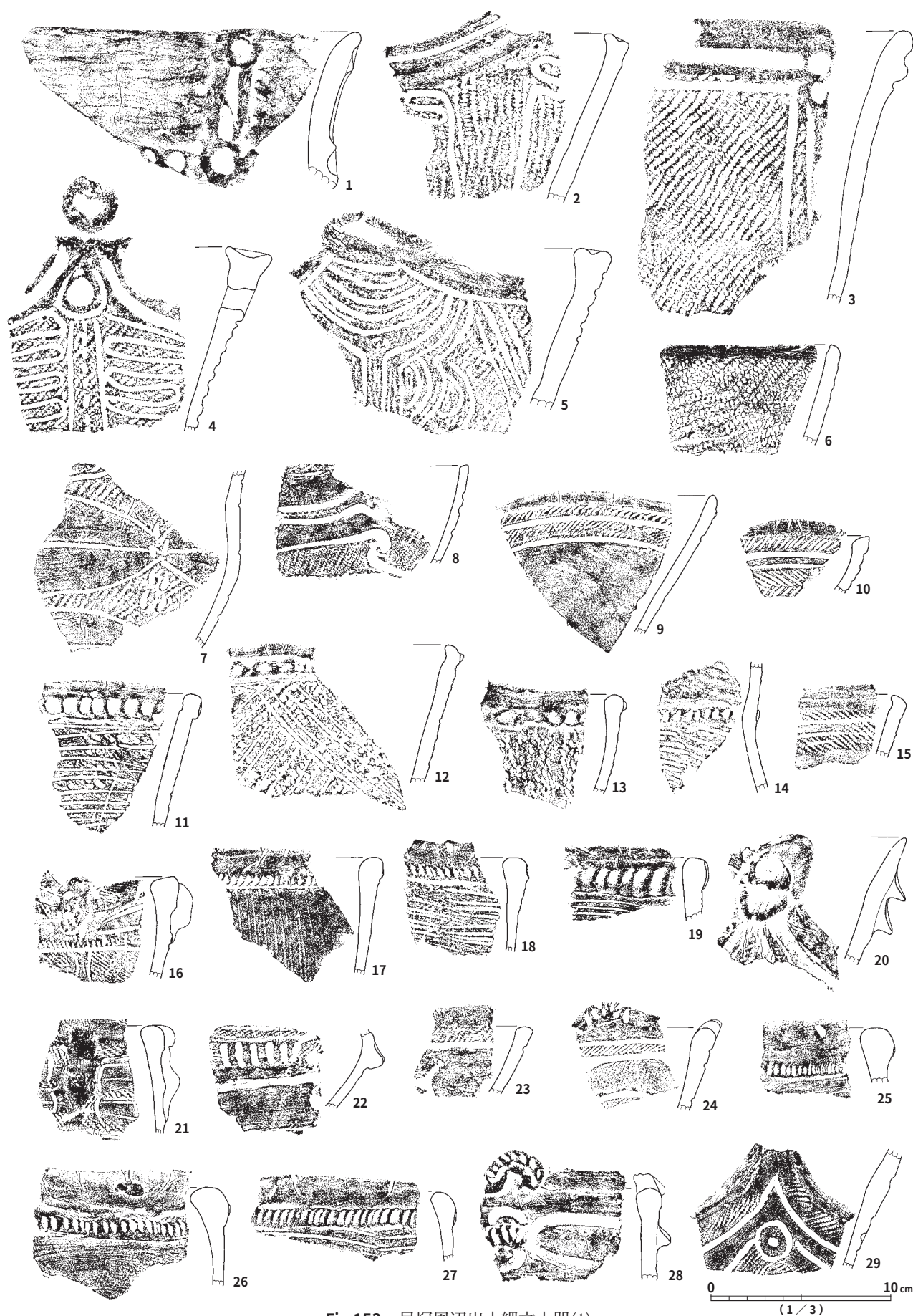


Fig.153 貝塚周辺出土縄文土器(1)

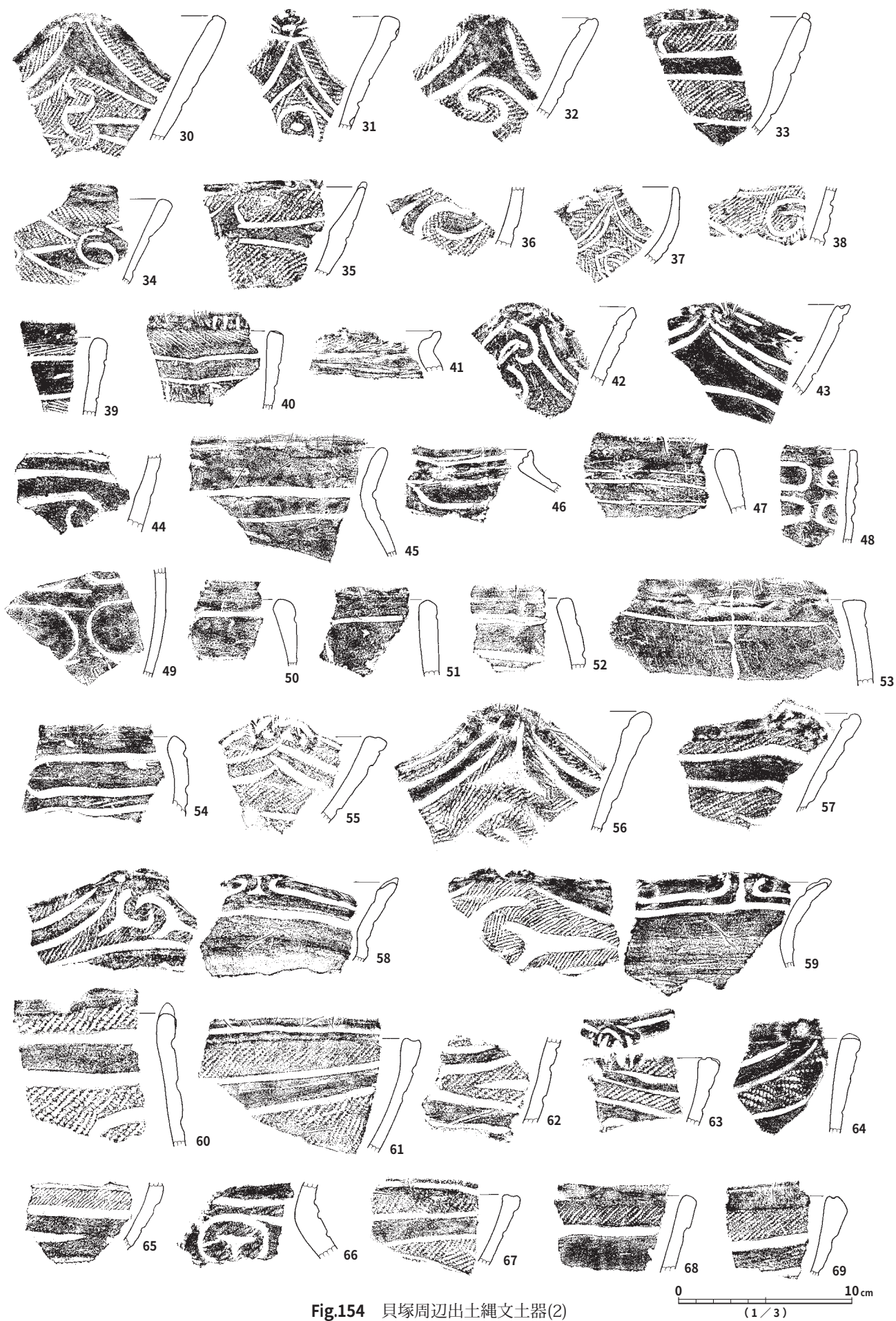


Fig.154 貝塚周辺出土縄文土器(2)

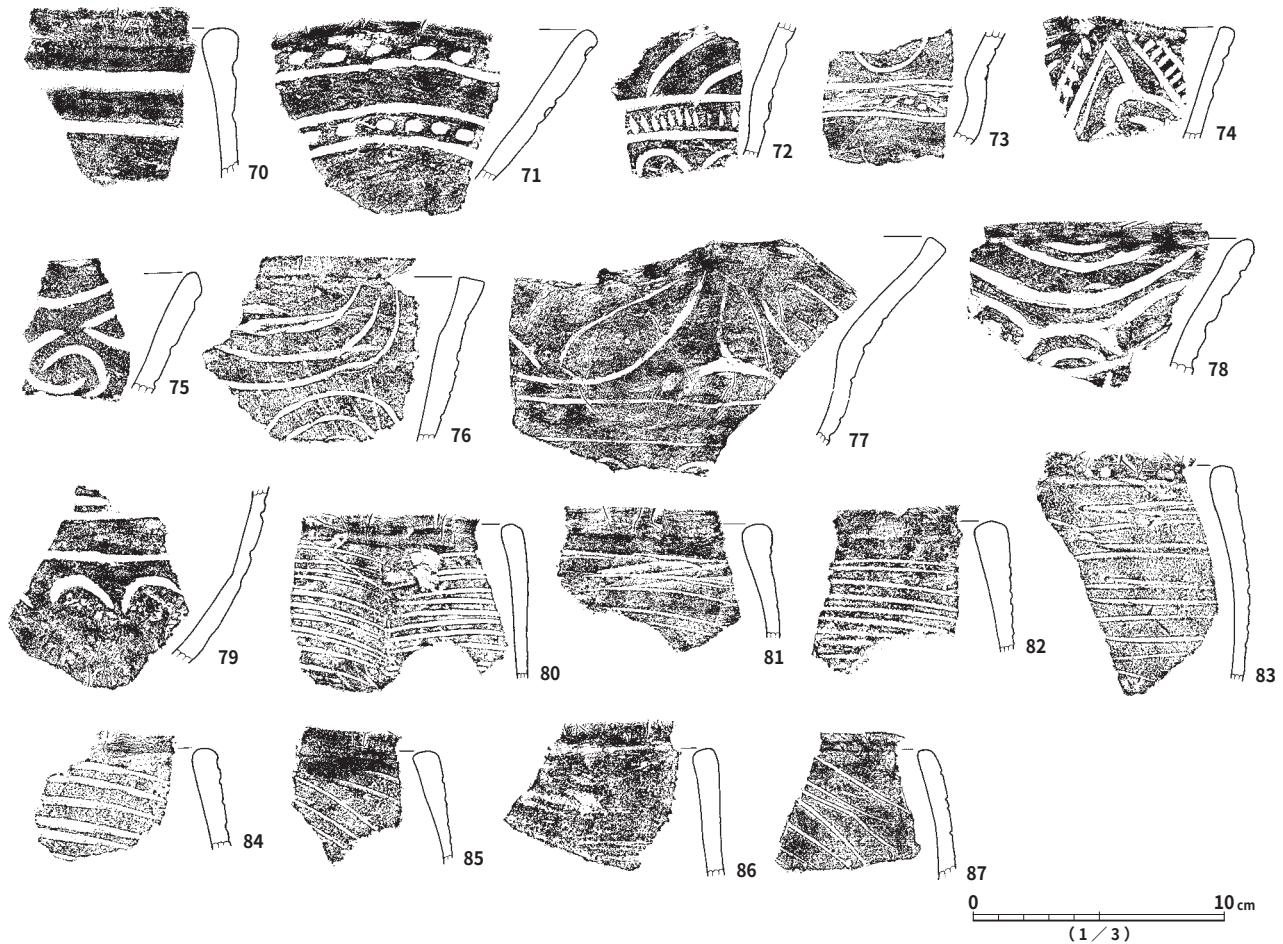


Fig.155 貝塚周辺出土縄文土器(3)

る。土器の出土状況も対応する。

貝層確認面がどの土層中であつたかは不明であるが、その下部に遺構が存在した可能性は否定できない。後述するように、貝サンプルが一部残されているが、遺構番号など基本的な情報を確認することができなかった。ただし、後述するように、その内容物からSI79の竪穴内貝層の可能性が高いと判断した。

Fig.153～155は、注記の「貝塚」および「貝塚の表採」である。これらのうち縄文時代晩期について、鷹野光行氏が公表している。そこでは、「晩期のものだけを選び分け」としているが、全体を見てもやはり晩期が主体であり、その多くは既に発表されている。グリッド出土土器では、貝塚周辺のG8区で前浦式主体として晩期全般があり (Fig.171・172)、これに対応する可能性もある。ただし、晩期の分布域に面的な広がりは認めにくい。周辺グリッドでは堀之内1・2式が主体となる状況があり、本節の掲載土器をもって、南中台貝塚を代表させることは難しいと思われる。

1～5は堀之内1式、6は堀之内2式であり、口唇部内面に沈線をもつ。7～15は後期中葉であり、7～10は加曽利B式、15は曾谷式である。11～14は紐線文土器であり、11・12・14は縄文地文に条線を加える。16は安行1式、20は安行2式である。17～19は条線文土器であり、17・18は刺突列に沈線を加える。後期後葉と考える。17・18は口唇部列点文に沈線を付加する。21～27は晩期初頭安行3a式および同段階と考える紐線文土器である。28は口唇部に横C字貼付文、横長貼瘤に縦刻目

を加えるものであり、杵状文には地文がない。29～40は姥山2式であり、菱形区画に入組文、円文などが認められる。39・40は細密条線をもつ。42～54は縄文地文を欠くものであり、姥山3式に比定しておく。48～54は杵状文土器である。55～70は前浦式である。56～59は、縄文地文に入組三叉文を描く。口縁端部ないし内面に沈線をもつものがあり、58・64などはB突起をもつ。71～74は安行3c式、75～79は安行3d式、80～87は、紐線や平行線文などの単位文様のない条線文のみのものである。

文 献

鷹野光行 1991「千葉県市原市西広貝塚・南中台貝塚採集の土器をめぐって」『縄文時代』第2号 縄文時代文化研究会

(2) 南中台遺跡出土の動物遺存体

貝層の概要と分析方法

南中台遺跡出土資料として、整理箱60箱分(整理箱サイズ:54×33×15cm)の貝サンプルが残されていた。しかし、整理箱には遺構番号等の出土地点を示すラベルが付属しておらず、採取地点が不明であった。一方、発掘調査時の図面からは、遺跡内には4ヶ所から貝層が検出されていたようである。このうち1ヶ所は縄文時代後期前葉堀之内式期と思われるSI01の中央付近、2ヶ所目は平安時代と思われるSI69の西側コーナー付近、3・4ヶ所目はいずれも奈良・平安時代と思われるSI79の北東側とグリッド不明のローム層上に堆積する。発掘調査当時を知る職員によれば、貝サンプルの採取は奈良・平安時代のものについてのみ行ったことを記憶しているとのことで、図面から判断される貝層の規模と貝サンプルの状況から判断すると、SI79から検出された貝層の可能性が高い。貝の保存状態はいずれも良好であった。

貝層は全量が一括して採取されているようであるが、いずれも土の付着が極めて少なく、土が混入する間もなく、ごく短期間のうちに消費・廃棄されたのであろうか。あるいはすでに何らかの選別作業が行われてしまっていた可能性もあるが、通常通り10mm・4mm・1mmの各メッシュ寸法の試験用フルイを用いて、水洗作業を実施した。なお、水洗選別にあたっては、便宜上1～60までの整理番号を箱ごとに付して行っている。水洗選別によって選別された資料の総重量は380kgである。

出土遺構や層位は判然としないものの、内容物や貝類組成、貝殻の計測値の検討からは、いくつか

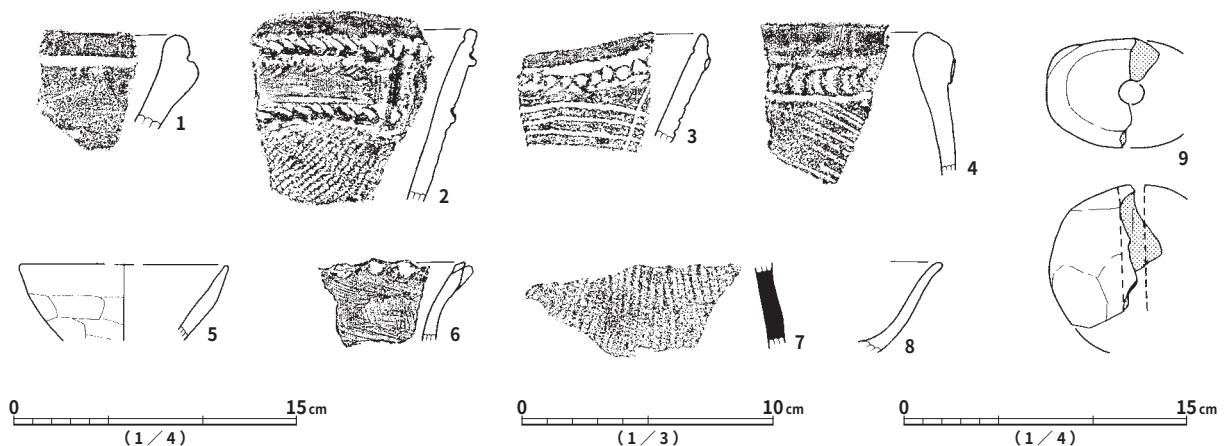


Fig.156 貝層サンプル出土遺物

Tab.3 出土動物遺存体種名表

陸産微小貝を除く

綱 Class	目 Order	科 Family	種 Species
腹足綱 Gastropoda	原始腹足目 Archaeogastropoda	ツタノハガイ科 Patellidae	<i>Cellana nigrolineata</i> (Reeve)
		ニシキウスガイ科 Trochidae	<i>Umbonium (Suchium) costatum</i> (Kiener)
		サザエ科 Turbinidae	<i>Lunella coronata coreensis</i> (Récluz)
		タニシ科 Vivipariidae	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i> (Martens)
		カワナナ科 Pleuroceridae	<i>Semisulcospira libertina</i> (Gould)
	中腹足目 Mesogastropoda	フトヘナタリ科 Potamididae	<i>Cerithidea cingulata</i> (Gmelin)
			<i>Cerithidea rhizophorarum</i> A. Adams
		ウミナナ科 Batillariidae	<i>Butillaria multiformis</i> (Lischke)
		タマガイ科 Naticidae	<i>Glossaulax didyma</i> (Röding)
		アッキガイ科 Muricidae	<i>Rapana verpsa</i> (Valenciennes)
掘足綱 Scaphopoda	ツノガイ目 Dentaliida	ムシロガイ科 Nassariidae	<i>Reticunassa festiva</i> (Powys)
		エソバイ科 Buccinidae	<i>Balytonia japonica</i> (Reeve)
		ツノガイ科 Dentaliidae	<i>Antalis weinkauffi</i> (Dunker)
		フネガイ科 Arcidae	<i>Scapharca kagoshimensis</i> (Tokunaga)
		イタボガキ科 Ostreidae	<i>Ostrea denselamellosa</i> Lischke
二枚貝綱 Bivalvia	ウグイスガイ目 Pteroida		<i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg)
		イシガイ目 Unionoida	<i>Inversidens japonensis</i> (Lea)
		マルスダレガイ目 Veneroida	<i>Mactra chinensis</i> Philippi
			<i>Mactra quadrangularis</i> Deshayes
		シオサザナミ科 Psammobiidae	<i>Soletellina diphos</i> (Linnaeus)
	マテガイ科 Solenidae		<i>Solen strictus</i> Gould
		シジミ科 Corbiculidae	<i>Corbicula japonica</i> Prime
		マルスダレガイ科 Veneridae	<i>Phacosoma japonicum</i> (Reeve)
			<i>Ruditapes philippinarum</i> (A.Adams et Reeve)
			<i>Gomphina (Macridiscus) aequilatera</i> (Sowerby)
甲殻綱 Crustacea	十脚目 Decapoda		<i>Meretrix lusoria</i> (Röding)
			<i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin)
			<i>Mya arenaria oonogai</i> Makiyama
爬虫綱 Reptilia	有鱗目 Squamata		
鳥綱 Aves	スズメ目 Passeriformes	カラス科? Corvidae?	カラス科種不明? Corvidae?
哺乳綱 Mammalia	ネコ目 Carnivora	イタチ科 Mustelidae	テン <i>Martes melampus</i> (Wagner)
		イノシシ科 Suidae	イノシシ <i>Sus scrofa</i> Linnaeus
		シカ科 Cervidae	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i> Temminck
軟骨魚綱 Chondrichthyes	ニシン目 Clupeiformes	ニシン科 Clupeidae	板鰐亜綱種不明 <i>Elasmobranchii</i> order Indet.
			マイワシ <i>Sardinops melanostictus</i> (Temminck et Schlegel)
			コノシロ? <i>Konoistius punctatus</i> (Temminck et Schlegel)
		カタクチイワシ科 Engraulidae	カタクチイワシ <i>Engraulis japonicus</i> (Houttuyn)
		ウナギ科 Anguillidae	ウナギ <i>Anguilla japonica</i> Temminck et Schlegel
硬骨魚綱 Osteichthyes	ウナギ目 Anguilliformes	コイ科 Cyprinidae	コイ科種不明 Cyprinidae gen. et sp. Indet.
		アユ科 Plecoglossidae	アユ? <i>Plecoglossus altivelis</i> (Temminck et Schlegel)
		スズキ科 Percichthyidae	スズキ属種不明 <i>Lateolabrax</i> sp.
		アジ科 Carangidae	ブリ属種不明 <i>Seriola</i> sp.
			アジ科種不明 Carangidae gen. et sp. Indet.
	カサゴ目 Scorpaeniformes	タイ科 Sparidae	クロダイ属種不明 <i>Acanthopagrus</i> sp.
		コチ科 Platycephalidae	コチ属種不明 <i>Platycephalus</i> sp.
		ヒラメ科 Paralichthyidae	ヒラメ科種不明 Paralichthyidae gen. et sp. Indet.
			ウシノシタ亜目種不明 Soleoidei fam. Indet.
		カレイ科 Pleuronectidae	<i>Kareius bicoloratus</i> (Basilevsky)
軟骨魚綱 Chondrichthyes	フグ目 Tetraodontiformes	フグ科? Tetraodontidae?	フグ科種不明? Tetraodontidae gen. et sp. indet.
硬骨魚綱 Osteichthyes	カサゴ目 Scorpaeniformes		
硬骨魚綱 Osteichthyes	カレイ目 Pleuronectiformes		
軟骨魚綱 Chondrichthyes	フグ目 Tetraodontiformes		

の特徴あるサンプルが認められることから、これらの貝サンプルが1つの遺構から採取されたものとするならば、発掘調査時には層位や平面観察等、何らかの基準によって整理箱単位で採取が行われた可能性がある。なお、貝サンプルからは土器破片も抽出されており、縄文時代後期・弥生時代後期の

ものを含むが、主体は土師器である。

分類作業により抽出された資料には、貝類、獣骨、魚骨、種子がある。このうち、陸産微小貝類は大まかな分類までの同定に止め、12点の炭化米を含む種子については分析を行っていない。

同定は、現生ならびに貝塚出土標本との比較により行った。貝類の集計は、腹足綱（巻貝）では軸部を完存するもの、二枚貝綱では殻頂部の残存するものを対象とした。二枚貝綱は左右殻の出土数量の多い方をもって出土個体数（最小個体数）とした。貝類のうち、ハマグリ・シオフキ・アサリの3種については殻長・殻高の計測を行い、2.5mm階級幅のヒストグラムで表示を行った。

分析結果

分析の結果、軟体動物の腹足綱13種、斧足綱1種、二枚貝綱15種の計29種（微小貝類を除く）、節足動物の甲殻綱1種、脊椎動物の爬虫綱1種、鳥綱1種、哺乳綱3種、軟骨魚綱1種、硬骨魚綱15種が同定された（Tab.3）。

a. 貝類

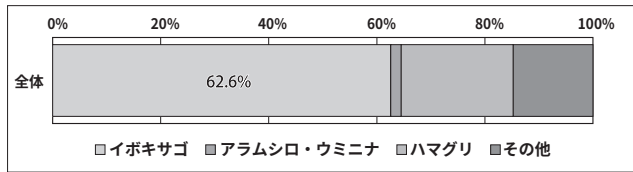
個体数ではイボキサゴが全体の62.6%を占めるが、これを除いた組成ではハマグリとシオフキの2種で82.7%に達し、全体的な傾向としてはハマグリとシオフキを主体に形成された貝層という印象である。これら3種以外に同定された貝類種はいずれもごく少量である。多くは内湾砂泥底の干潟に生息する種で構成されるが、タニシ類やカワニナといった淡水域に生息する種がわずかに含まれるほか、岩礁域からの搬入種であるマツバガイと、縄文期には管状垂飾品として利用されるツノガイが各1点出土している。

Tab.4 貝層サンプル一覧

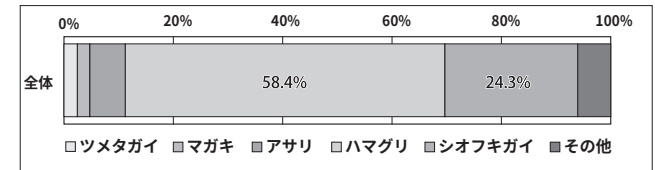
サンプル No.	フルイ水洗後残留物重量 (g)				集計対象貝 (g)	破砕率 (%)
	10mm	4mm	1mm	計		
1	6,761.0	53.0	30.5	6,844.5	5,745.7	16.1%
2	3,524.0	1,168.0	926.0	5,618.0	3,639.9	35.2%
3	6,249.0	213.1	101.1	6,563.2	5,134.7	21.8%
4	5,755.9	202.6	79.0	6,037.5	4,677.4	22.5%
5	5,092.0	149.0	89.0	5,330.0	4,493.2	15.7%
6	4,487.0	14.0	12.1	4,513.1	4,077.9	9.6%
7	7,385.0	146.0	75.0	7,606.0	6,058.4	20.3%
8	6,033.1	85.5	50.1	6,168.7	5,215.7	15.4%
9	6,344.2	38.4	14.4	6,397.0	5,373.4	16.0%
10	7,118.0	235.0	121.0	7,474.0	6,393.0	14.5%
11	5,405.1	271.1	135.0	5,811.2	4,509.1	22.4%
12	5,041.0	55.0	35.5	5,131.5	4,521.0	11.9%
13	5,360.2	97.5	53.5	5,511.2	4,570.3	17.1%
14	5,429.0	198.0	69.0	5,696.0	1,227.1	78.5%
15	6,436.2	271.1	167.5	6,874.8	431.0	93.7%
16	6,965.0	156.1	94.2	7,215.3	5,739.1	20.5%
17	5,860.6	112.1	90.5	6,063.2	5,105.3	15.8%
18	5,539.5	98.2	71.6	5,709.3	4,636.1	18.8%
19	5,762.0	85.2	55.2	5,902.4	5,007.6	15.2%
20	7,594.0	125.3	66.7	7,786.0	6,344.1	18.5%
21	9,233.5	88.2	48.3	9,370.0	6,616.8	29.4%
22	6,634.0	173.1	136.1	6,943.2	5,521.6	20.5%
23	5,779.0	123.8	65.0	5,967.8	4,714.7	21.0%
24	7,661.0	97.7	24.7	7,783.4	6,392.5	17.9%
25	5,388.6	87.7	37.3	5,513.6	5,220.8	5.3%
26	6,118.5	56.1	22.6	6,197.2	5,184.9	16.3%
27	4,611.9	222.6	180.9	5,015.4	3,158.7	37.0%
28	5,966.0	65.9	25.9	6,057.8	3,165.4	47.7%
29	5,892.0	316.4	184.0	6,392.4	5,900.1	7.7%
30	6,095.0	128.6	98.1	6,321.7	5,312.2	16.0%
31	4,590.0	38.0	14.4	4,642.4	3,863.7	16.8%
32	6,339.0	138.2	100.7	6,577.9	5,278.1	19.8%
33	4,946.0	127.6	56.8	5,130.4	4,905.8	4.4%
34	7,752.0	152.2	63.7	7,967.9	6,738.9	15.4%
35	6,365.2	422.3	101.6	6,889.1	6,104.4	11.4%
36	5,811.4	267.5	191.1	6,270.0	5,042.3	19.6%
37	5,933.0	191.5	64.5	6,189.0	4,710.3	23.9%
38	7,200.5	441.2	154.0	7,795.7	5,109.2	34.5%
39	7,847.0	396.2	164.9	8,408.1	6,292.1	25.2%
40	8,104.4	69.0	31.6	8,205.0	6,824.9	16.8%
41	5,322.0	82.5	22.0	5,426.5	4,801.5	11.5%
42	6,859.0	153.0	166.8	7,178.8	5,804.9	19.1%
43	5,897.0	166.4	75.5	6,138.9	5,285.9	13.9%
44	5,660.9	227.2	162.0	6,050.1	4,962.1	18.0%
45	4,299.0	78.6	56.4	4,434.0	4,287.2	3.3%
46	7,244.0	215.5	139.0	7,598.5	6,168.5	18.8%
47	6,825.0	698.3	411.5	7,934.8	6,581.5	17.1%
48	5,887.0	182.2	52.3	6,121.5	5,400.4	11.8%
49	6,450.0	46.1	21.6	6,517.7	5,684.3	12.8%
50	6,540.8	308.4	109.5	6,958.7	5,998.2	13.8%
51	6,217.0	274.1	103.1	6,594.2	6,004.2	8.9%
52	6,067.0	105.3	43.4	6,215.7	5,132.6	17.4%
53	4,790.2	75.9	32.4	4,898.5	4,214.5	14.0%
54	7,235.0	672.6	126.1	8,033.7	6,364.4	20.8%
55	8,305.0	247.5	116.8	8,669.3	7,019.6	19.0%
56	6,901.8	142.7	69.8	7,114.3	5,811.7	18.3%
57	6,235.0	122.1	58.0	6,415.1	5,233.5	18.4%
58	3,823.0	390.0	194.8	4,407.8	3,503.5	20.5%
59	4,675.8	428.9	103.7	5,208.4	4,280.5	17.8%
60	179.8	92.3	245.5	517.6	+	-
合計	361,824.1	12,087.6	6,413.3	380,325.0	301,496.4	20.7%

[illegible]

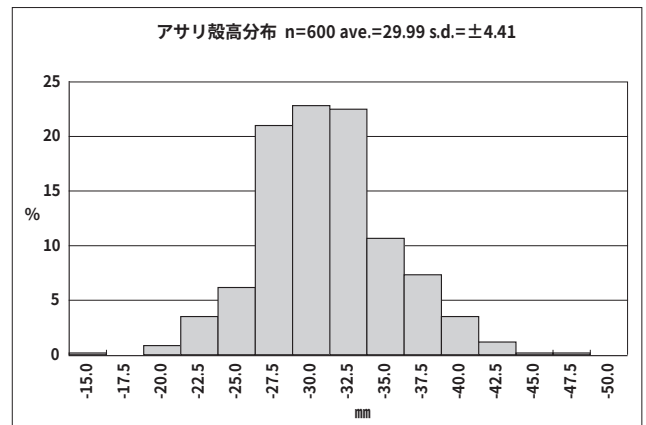
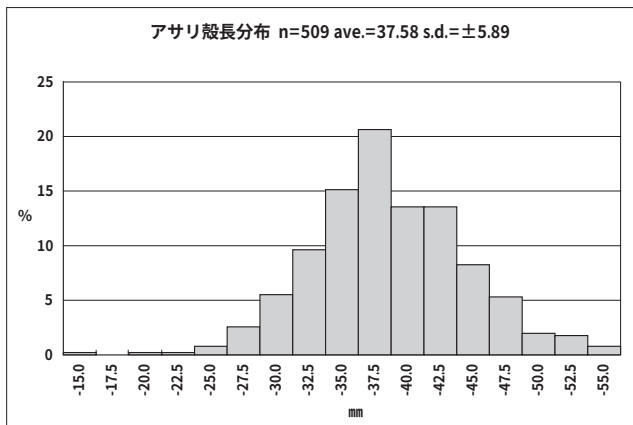
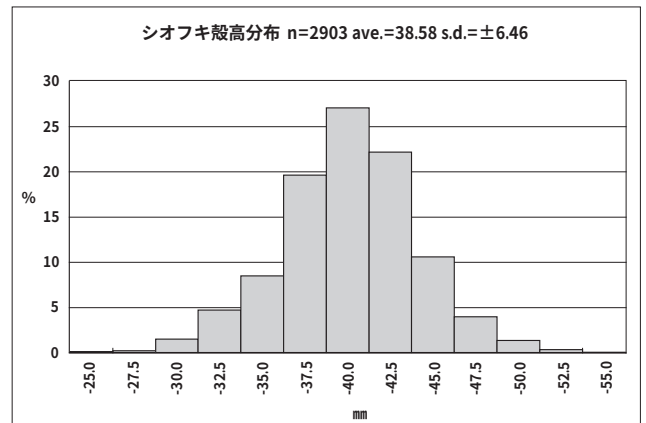
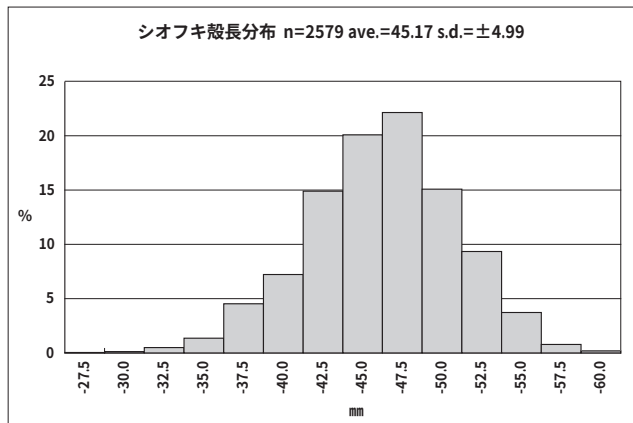
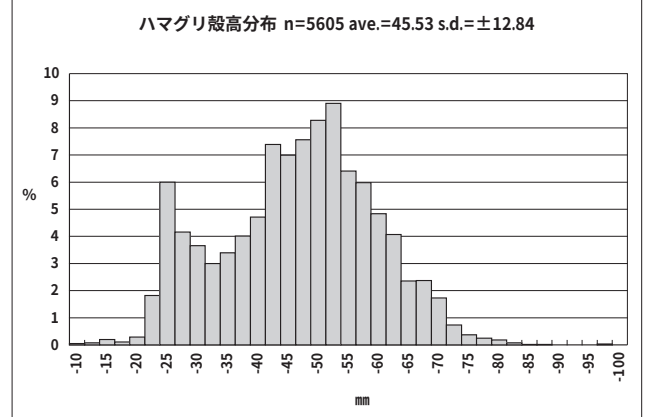
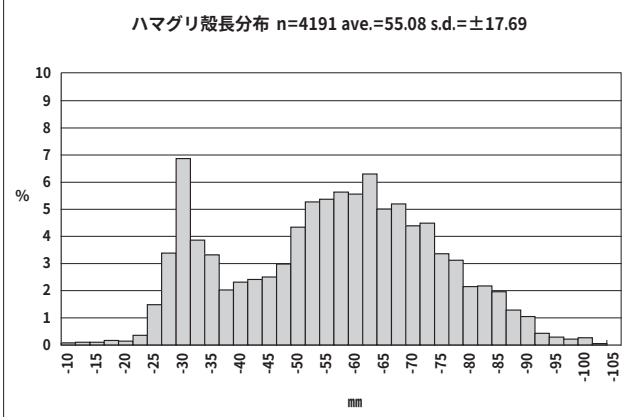
貝類組成
全体の組成



イボキサゴ、アラムシロガイ、ウミナを除いた組成



主要貝類計測値



微小貝類組成

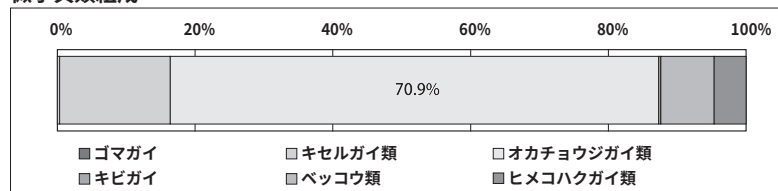


Fig.157 貝類組成と主要貝類計測値

貝類の殻長・殻高計測値

① ハマグリ

最小個体数 10,981 が検出され、殻長 4,191 点、殻高 5,605 点について計測を行った。この結果、殻長は 27.5～30.0mm と 60.1～62.5mm、殻高は 22.5～25.0mm と 50.1～52.5mm の 2 つの階級幅にピークを持つ二山型となった。出土数量自体は大型の個体が圧倒的に多い。このうち小型の個体についてはサンプル No.28・32・42 など、特定のサンプル中に多く含まれる傾向があるが、他の貝種の計測値ではほとんど変化が認められないことから、これらのサンプルの時期が異なっているとは考えにくい。一方、サンプル No.2 には殻長 15mm 前後の特に小型の個体が含まれるが、ここではイボキサゴの占める割合が高いことから、イボキサゴ採集時に混獲されたものと考えられる。殻長・殻高の平均値はそれぞれ 55.08mm と 45.53mm である。

② シオフキ

最小個体数 4,568 が検出され、殻長 2,579 点、殻高 2,903 点について計測を行った。この結果、殻長は 45.1～47.5mm、殻高は 37.6～40.0mm の階級幅にピークを持つ自然分布型となった。殻長・殻高の平均値はそれぞれ 45.17mm と 38.58mm である。

③ アサリ

最小個体数 1,219 が検出され、殻長 509 点、殻高 600 点について計測を行った。この結果、殻長は 35.1～37.5mm、殻高は 27.6mm～30.0mm にピークを持つ自然な分布形となった。殻長・殻高の平均値はそれぞれ 37.58mm と 29.99mm である。

Tab.6 微小貝類出土量一覧

サンプル No.	陸産貝類				
	ゴマガイ	キセルガイ類	オカチヨウジガイ類	キビガイ	ベッコウ類 ヒメコハクガイ類
2		41	207		1
8		1			
11			1		1
15		1	1		2
16		3	9		2
17			1		
20			2		
27			1		
36	1		1	1	2
38			1		2
40		1			
43					1
44					1
45		2	1		
47			2		2
49		1			
50			2		11
53					1
55		1			
58				1	1
59		1			
合計	1	52	229	1	25

b. 微小貝類

323 点が検出され、大きく 6 つの分類群に分けられた。このうち最も多いのはオカチヨウジガイ類で全体の 70% を占める。なお、オカチヨウジガイ類には、オカチヨウジガイとホソオカチヨウジガイが含まれる。これ以外ではキセルガイ類とベッコウ類が多く、これら 3 種で全体の 93.8% を占めている。

黒住 (1994) の分類によれば、オカチヨウジガイ類とベッコウ類は林縁生息種、キセルガイ類は林内生息種であることから、林縁という貝層の周辺環境が想定される。

c. 甲殻綱

サンプル No.37 から、カニ類と考えられるツメの先端 1 点が検出された。手持ちの標本も限られるため、種は不明である。食用にされたものか、貝類採集の際に混入したものかは不明である。

d. 魚類

不明確なものを含め、69 点・16 種が同定された。7 つのサンプルから検出されたが、サンプル No.2 と 60 からの出土が最も多く、特に No.60 からはアジ科やイワシ類などの小型魚に由来する資料が多数含まれている。

Tab.7 出土魚類骨一覧

ID No.	サンプル No.	フルイ目(mm)	種名	部位	L/R	数量	残存部位	備考
1	2	10	クロダイ属	前上顎骨	L	1	破片	IDNo.40とは別個体。
2	2	10	クロダイ属	主鰓蓋骨	R	1		
3	2	10	真骨類	鰭棘		1		
4	2	10	タイ科	尾椎		1		
5	2	4	イシガレイ	鱗		1		
6	2	4	カレイ科	尾椎		4		
7	2	4	カレイ科	歯骨	R	1		
8	2	4	カレイ科?	歯骨	R	1		
9	2	4	クロダイ属	歯骨	R	1		
10	2	4	クロダイ属	主上顎骨	R	1		
11	2	4	クロダイ属	角舌骨	L	1		
12	2	4	コチ属	第1脊椎		1		
13	2	4	コチ属	尾椎		1		
14	2	4	サメ類	椎骨		1		
15	2	4	シタビラメ類	尾椎		1		
16	2	4	真骨類	腹椎		4		
17	2	4	真骨類	鰭棘		9		
18	2	4	真骨類	尾椎		3		
19	2	4	ニシン科	尾椎		1		
20	2	4	ヒラメ科	尾椎		1		
21	2	4	フグ科?	尾椎		1	破片	
22	2	1	アジ科	稜鱗		1		
23	2	1	アジ科?	第2脊椎?		1		
24	2	1	アユ?	尾椎		1		
25	2	1	カレイ科?	尾椎		1		
26	2	1	サメ類	椎骨		2		
27	2	1	真骨類	尾部棒状骨		2		
28	2	1	真骨類	尾椎		8		
29	2	1	真骨類	腹椎		4		
30	2	1	スズキ属	擬鎖骨	R	1		
31	2	1	タイ類	切歯		5		
32	2	1	タイ類	白歯		19		
33	2	1	ニシン科	尾椎		2		
34	8	1	アジ科	稜鱗		1		
35	8	1	真骨類	腹椎		1		
36	16	4	シタビラメ類?	腹椎		1		
37	16	4	真骨類	胸鰭棘		1		
38	16	4	ヒラメ科	尾椎		1		
39	16	1	タイ類	切歯		2		
40	30	4	クロダイ属	前上顎骨	L	1		
41	30	1	真骨類	腹椎		1		
42	42	10	クロダイ属	歯骨	L	1		
43	42	1	真骨類	尾椎		1		
44	42	1	タイ類	切歯		1		
45	42	4	クロダイ属	歯骨	R	1		
46	42	4	ブリ属	角舌骨	R	1		
47	51	1	マイワシ	第1脊椎		1		
48	60	4	スズキ属	方骨	R	1		
49	60	1	アジ科	腹椎		2		
50	60	1	アジ科	角骨	L	2		
51	60	1	アジ科	腎鰭棘		1		
52	60	1	アジ科	前上顎骨	L	1		
53	60	1	アジ科	主上顎骨	L	1		
54	60	1	アジ科?	第1脊椎		2		
55	60	1	ウナギ属	腹椎		3		
56	60	1	ウナギ属	尾椎		6		
57	60	1	カタクチイワシ	尾椎		4		
58	60	1	カタクチイワシ	腹椎		2		
59	60	1	カレイ科	尾椎		1		
60	60	1	コイ科	尾椎		1		
61	60	1	コイ科	腹椎		1		
62	60	1	コノシロ?	第1脊椎		1		
63	60	1	サメ類	椎骨		1		
64	60	1	真骨類	腹椎		6		
65	60	1	真骨類	尾椎		28		
66	60	1	タイ科	切歯		1		
67	60	1	ニシン科	尾椎		12		小型。
68	60	1	ニシン科	腹椎		25		小型。
69	60	1	マイワシ	第1脊椎		1		

クロダイ属とマイワシは重複する部位があることから、少なくとも2個体が存在するが、そのほかの魚種はいずれも最小1個体の検出である。いずれも縄文時代の貝塚から出土する魚種と違いは認められず、東京湾の沿岸や内湾・河口域で普通に見られるものであることから、貝類同様に遺跡周辺に広がる水域での漁撈活動が行われていたものと考えられる。貝層中からは土玉が1点出土しており、魚網やヤスなどの内湾漁撈に特徴的な道具を用いて捕獲されたものと考えられる。

e. 両生綱

カエル類の右側上腕骨骨幹～遠位端が1点のみ検出された。1mmメッシュ面状から抽出されたもので、小型の個体に由来するものと思われる。遠位端幅は2.51mmを測る。斃死したものと思われる。

f. 爬虫綱

ヘビ類の上顎・下顎骨と椎骨27点が検出された。いずれも同一サンプルの1mmメッシュ面状から抽出されたもので、小型の同一個体に由来するものと思われる。斃死したものと思われる。

g. 鳥綱

同一サンプルの10mmメッシュ面状から、カラスに類似する右側上腕骨遠位端が1点と、種不明の右側尺骨骨幹部が1点出土したのみである。上腕骨遠位端幅は15.16mmを測る。尺骨はハトよりもやや小型で、まっすぐ伸びる骨幹部の直径は3.14mmを測る。

Tab.8 出土獣骨一覧

ID No.	サンプル No.	フルイ目(mm)	種名	部位	L/R	残存部位	備考
1	2	10	カラス?	上腕骨	R	遠位端	
2	2	10	テン	下顎骨	L	[() () P2 P3 P4 M1 ()]	
3	2	10	中型獣	肋骨	?	中間部	
4	2	10	不明鳥類	尺骨	R		ハトよりやや小型。骨体はまっすぐ伸びる。
5	2	1	カエル類	上腕骨	R	s ~ d	
6	2	1	ネズミ類	尺骨	L		
7	2	1	中小獣	上顎第1前臼歯	R		テンに由来か?
8	4	1	カエル類?	不明	?		
9	7	10	大型獣	四肢骨	?	細片	
10	7	10	大型獣	頭蓋骨	?		
11	7	1	ヘビ類	上顎骨	L		
12	7	1	ヘビ類	上顎骨	R		
13	7	1	ヘビ類	下顎骨	R		
14	7	1	ヘビ類	椎骨			27点。
15	8	10	大型獣	四肢骨	?	細片	
16	9	10	大型獣	四肢骨	?		
17	11	1	小型獣	肋骨	?		
18	18	10	シカ	上顎第3臼歯	R		
19	19	10	シカ?	橈骨?	?	細片	
20	20	10	シカ	角	?		切断・削痕?
21	21	10	哺乳類	頭骨?	?	細片	
22	25	10	大型獣	部位不明	?	細片	
23	26	10	哺乳類	頭骨?	?	細片	
24	28	4	大型獣	四肢骨	?	細片	
25	30	10	シカ	中心第4足根骨	L	一部破損	
26	40	10	不明獣	頭骨?	?		
27	43	10	シカ	角	?		分岐部付近。
28	47	10	大型獣	四肢骨片	?		
29	55	1	微小獣	四肢骨/指骨	?		
30	57	10	シカ	中心第4足根骨	R	破片	
31	60	10	イノシシ	下顎骨	L	[M3]	近心破損。
32	60	4	イノシシ	上顎第2前臼歯	L		歯根・咬耗なし。

h. 哺乳綱

各サンプルからごく少量が検出されている。種と部位が同定されたものは9点で、その内訳はシカが5点、イノシシが2点、テンとネズミ類が各1点である。

ネズミ類は尺骨のみの出土であった。小型の個体であることから、食用ではなく、斃死あるいは捕獲・遺棄されたものと考えられる。テンは左側下顎骨で、遊離する第3後臼歯が完出していたと考えられる個体である。これ以外の部位は見つかっていないが、同一サンプルから検出されている小型獣の上顎第1前臼歯は、この種に由来する可能性がある。テンは主に森林に生息し、市内の縄文期の貝塚においても出土数が多い動物ではない。良質な毛皮が利用された可能性も考えられる。

イノシシには重複する部位は認められないが、下顎第3後臼歯が完出する下顎骨、萌出直後と考えられる上顎第1後臼歯と上顎第2前臼歯があり、すべて萌出段階が異なることから、それぞれが別個体由来することが考えられる。下顎第3後臼歯の咬耗状況は、第4咬頭まで象牙質が表れる段階で、新美(1991)のV-4、Grant(1982)のe段階に相当する。残りの2点はいずれも咬耗は認められない。各歯種の計測値は、下顎第3後臼歯が歯冠長計測不能・歯冠幅16.03mm・歯冠高9.64mm、上顎第1後臼歯が歯冠長14.27mm・歯冠幅11.06mm・歯冠高6.07mm、上顎第2前臼歯が歯冠長12.54mm・歯冠幅7.74mm・歯冠高8.06mmを測る。イノシシに同定された四肢骨はなかったが、種不明大型獣に分類した四肢骨片にはこの種が含まれる可能性がある。

シカも重複部位は認められなかった。四肢骨片を含むが保存状態はあまりよくない。1点のみ検出された遊離歯は上顎第3後臼歯で、歯冠長19.23mm・歯冠幅18.05mm・歯冠高15.25mmを測る。

貝層と動物遺存体についての若干の検討

今回分析を行った資料は採取地点が記載されていなかったことから、貝層の形成時期を明確にすることができない。また、遺跡からは縄文時代後期の貝層も検出されていることから、共伴する遺物は土師器を主体とするものの、縄文貝層の2次堆積という可能性もある。しかし、これまでに分析を行ってきた縄文時代後期貝層との組成を比較すると、縄文期はイボキサゴの比率が80%を超えるのに対し、南中台遺跡では62.6%となる。また、イボキサゴ等の小型巻貝を除いた組成でも、縄文期ではハマグリ比率が70%近くに達するのに対し、南中台遺跡ではハマグリは58%で、シオフキの比率が24.3%と高いのが特徴的である。これまでに市内で行われた貝層の分析成果によれば、古代の東京湾岸地域の全体的な傾向としてシオフキの利用が増加することが明らかになっており、貝層の時期を推定するひとつの指標となる。

今回分析を行った貝サンプルを奈良・平安時代の所産と捉えるならば、市内では類例が少ない時期の貝層である。また、これまで分析を行った同時期の貝層からは、貝類以外の動物遺存体が検出されたことはほとんどなく、貴重な事例といえる。同時期の動物遺存体の出土事例としては、稲荷台遺跡のシカとイノシシの歯があるが、これは土器埋納遺構と集石遺構から検出されたもので祭祀儀礼に関連し、頭部のみが利用されたと考えられている（浅利編2003）。一方、南中台遺跡の獣骨は、貝層中から出土したもので、四肢骨が含まれることから 食用に捕獲・利用されることが考えられる。

検出された貝類や魚類は、いずれも東京湾の沿岸や内湾干潟で普通に見られる種で、饗宴などのためにわざわざ用意されたものとは想定しがたい。ただし、貝類の利用が著しく低調となるこの時期にあって、決して少なくない量の貝を集落までわざわざ持ち込み、短期間のうちに利用・廃棄している点は、非日常的な消費活動の結果とも考えられる。また、貝類はともかく、捕獲には道具と技術を要する魚や獣を、南中台遺跡に暮らした人々が自ら手に入れたのかという点も問題となるが、比較材料の乏しい現状では、これらの点について言及する術を持たない。いずれにせよ、市内の動物利用変遷の空白を埋める資料を提示できたことは貴重な成果であり、データの蓄積による新たな発見を期待したい。

参考・引用文献

- 浅利幸一編 2003『稲荷台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告書IX（財）市原市文化財センター
 黒住耐二 1994「柱状サンプルから得られた微小貝類遺存体」『上高津貝塚A地点』土浦市教育委員会
 新美倫子 1991「愛知県伊川津貝塚出土ニホンイノシシの年齢及び死亡時期について」『国立歴史民族博物館研究報告』29
 Annie Grant 1982「The use of tooth wear as a guide to the age of domestic ungulates」『Ageing and sexing Animal Bones from Archaeological Sites』

第4節 縄文土器

南中台遺跡出土の縄文土器は、後期堀之内1・2式を主体とし、それ以降晩期安行3d式、前浦式の間、ほぼ連続的に認められる。Fig.159～169は、出土位置不明の縄文土器である。堀之内式については若干省略しているものの、掲載資料はおおむね出土量は応じている。

1は早期の尖底土器であり、器面に擦痕を残す。早・前期は他に確認できない。2～5は阿玉台Ⅲ-

IV式である。5はキャリパー形の深鉢であり、隆帯にそった押捺文は認められない。突起は4単位であり、うち1単位が有孔となる。6～8は加曽利E式、18～20は曾利式系か。9～17は称名寺式である。称名寺式は基本的にII式であり、堀之内式と伴出する段階が主体となる。13～15は沈線区画に列点文が充填される。

21～123は堀之内式土器であり、このうち21～75は堀之内1式、76以降は2式と考える。34は三十稻場式であろうか。21は、3単位の波状口縁であり、無節縄文を地文として半裁竹管など2条沈線により交差する垂下文を描く。22・25は口縁部が無文となるものであり、頸部隆帯に大振りの刺突を加える。24・26・27は、無文部間をC字貼付文、連鎖状貼付文で繋ぐ。49～52は、単沈線による蕨手文である。63～73は朝顔形の深鉢であり、65・67・68など、集合沈線を充填するものが目立つ。63・64は同一個体である。81～86は、幾何学文様を描くものであり、口唇部内面に沈線をもつ。92～105は、口唇部ないし口縁部隆帯に細かい刺突を加えるものである。92・95・98～100・102などは、隆帯上に8字貼付文を加える。これらには、磨消しの幾何学文が目立つ。112・113・116・121は浅鉢形土器、114・115・117～119は注口土器である。122は吊り手であろうか。

124～158は、堀之内2式から加曽利B式の粗製土器をまとめた。124～134は、半裁竹管、櫛歯状工具による浅い条線の垂下文をもつものである。136以降は縄文を地文とするものであり、150以降は紐線文土器である。口唇部内面に沈線をもつものが多い。159～217は加曽利B式である。160・161は弧状の菱形縄文帯に対弧文を描く。162は鉤手状の沈線、163・171はの字文を描く。全体としては加曽利B3式が主体となる。200～204・206～210は条線文系土器である。200・204は頸部に無文帯をもつ。205～207は斜格子目文土器である。212～219は紐線文系土器である。いずれも縄文を地文とする。211は波状文を重ねる。

220～231は後期後葉である。220・221は曾谷式である。口唇部内面が蒲鉾状に肥厚し、沈線区画縄文帯を2帯、縦貼瘤の頂部は無文である。224は台付土器であり、刻目をともなう隆帯に条線をもつ。226は縦長貼瘤2連で下部は脱落する。頂部は無文。229は3連の波頭部であり、口縁部隆帯は縄文、下は刻みとなる。232以降は晩期である。232は、円錐状突起に縦刻目の横長貼瘤、微隆帯には刻みを加える。234は入組縄文帯に円形浮文をもつ。237～240は、幅広の紐線下端に指頭圧痕をもつ。条線はまばらであり、237は連弧文を加える。安行3a式期前後と推定する。241～253は姥山2式である。242は三頭突起に円文をもつ。243・244は波頂部に鉢巻状の貼付文をもつものであり、243は沈線区画に列点文を充填する。244は入組文を描く。246は菱形縄文帯である。250～252は細密条線を充填する。253は杵状文である。地文縄文のない254は姥山3式としておく。255は前浦式、257は安行3c式、258は安行3d式である。

Fig.170～184は、出土グリッドが分かるものであり、縄文時代以外の堅穴から出土したものを含む。掲載順は、北西方向からグリッドにそって配列し、堅穴についてもグリッド位置に合わせた。縄文土器の出土は、調査区全体におよび、調査区中央東西方向にやや集中する。

阿玉台式は、III式期の堅穴と考えるSI02とK5区にあり、量は少ないものの調査区北端部にまとまる。加曽利E式は、SI01・05の他は出土地点が明らかではない。出土量の最も多い堀之内1・2式は、Fig.158の出土状況をほぼ反映し、調査区中央東西方向とSI05・06付近にまとまる。堀之内2式は、1式に対してK14区などやや南東辺部に拡大する。後期中葉加曽利B式は、SI43、P9・S9・S11・T10区

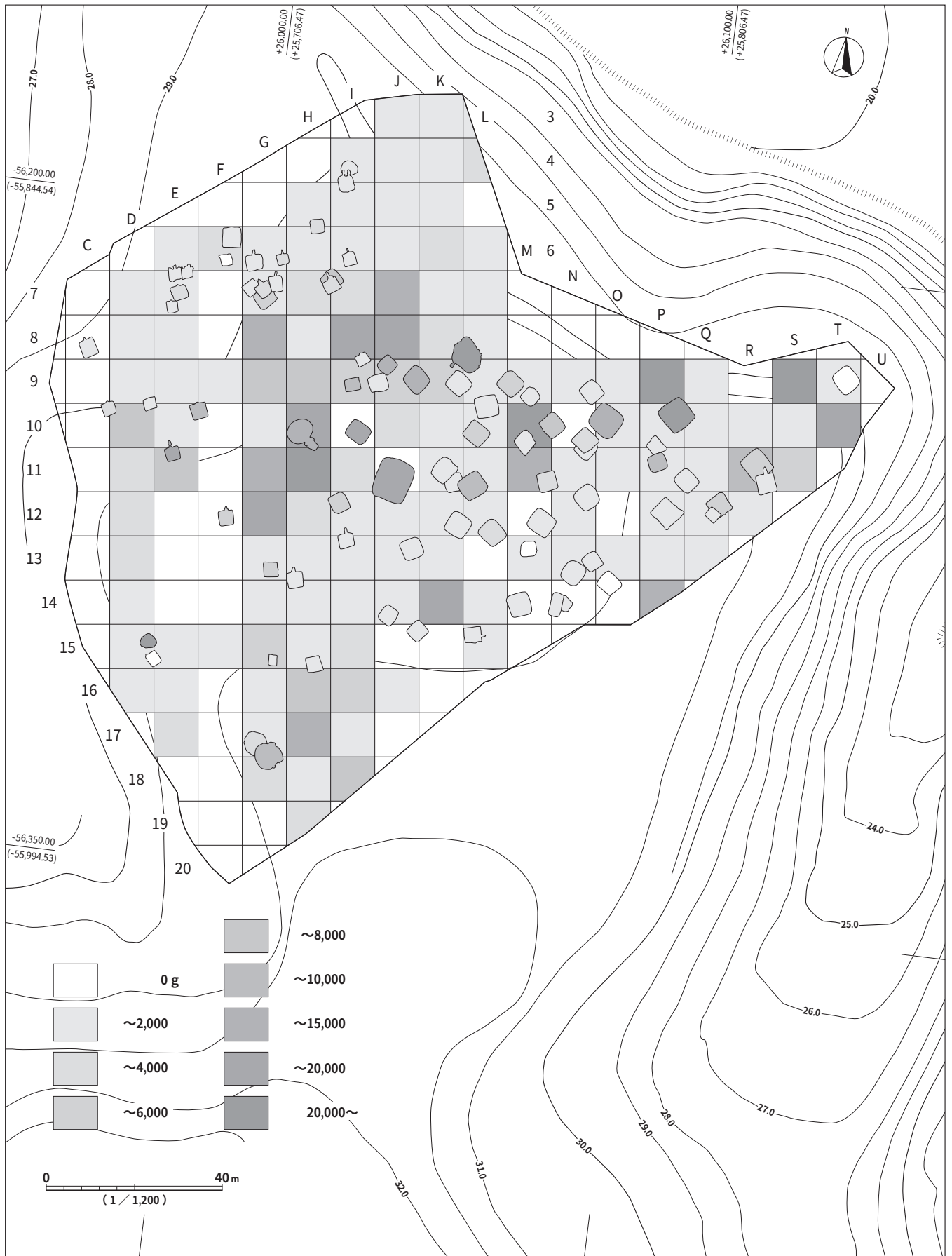


Fig.158 グリッド・竪穴別縄文土器出土重量

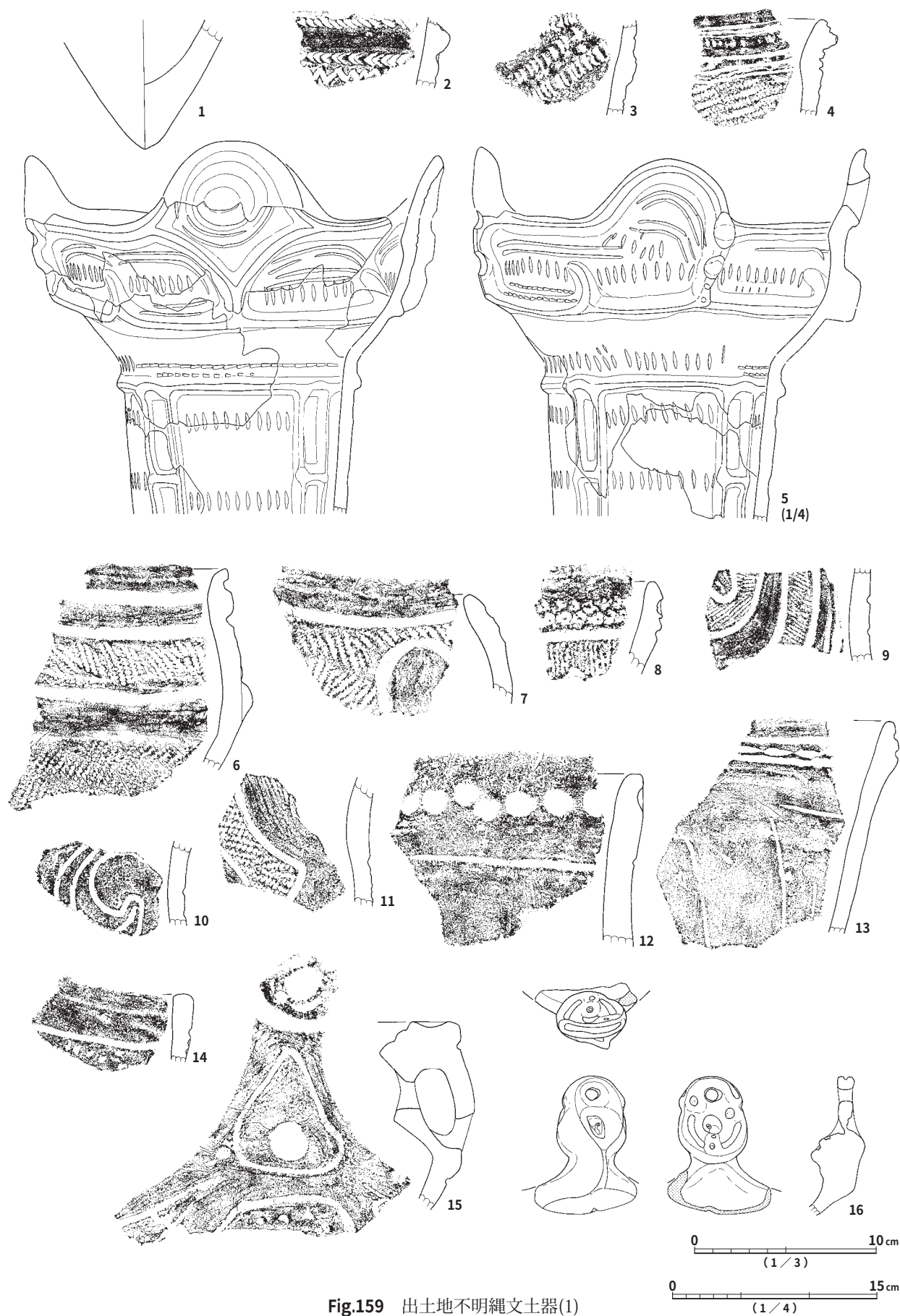
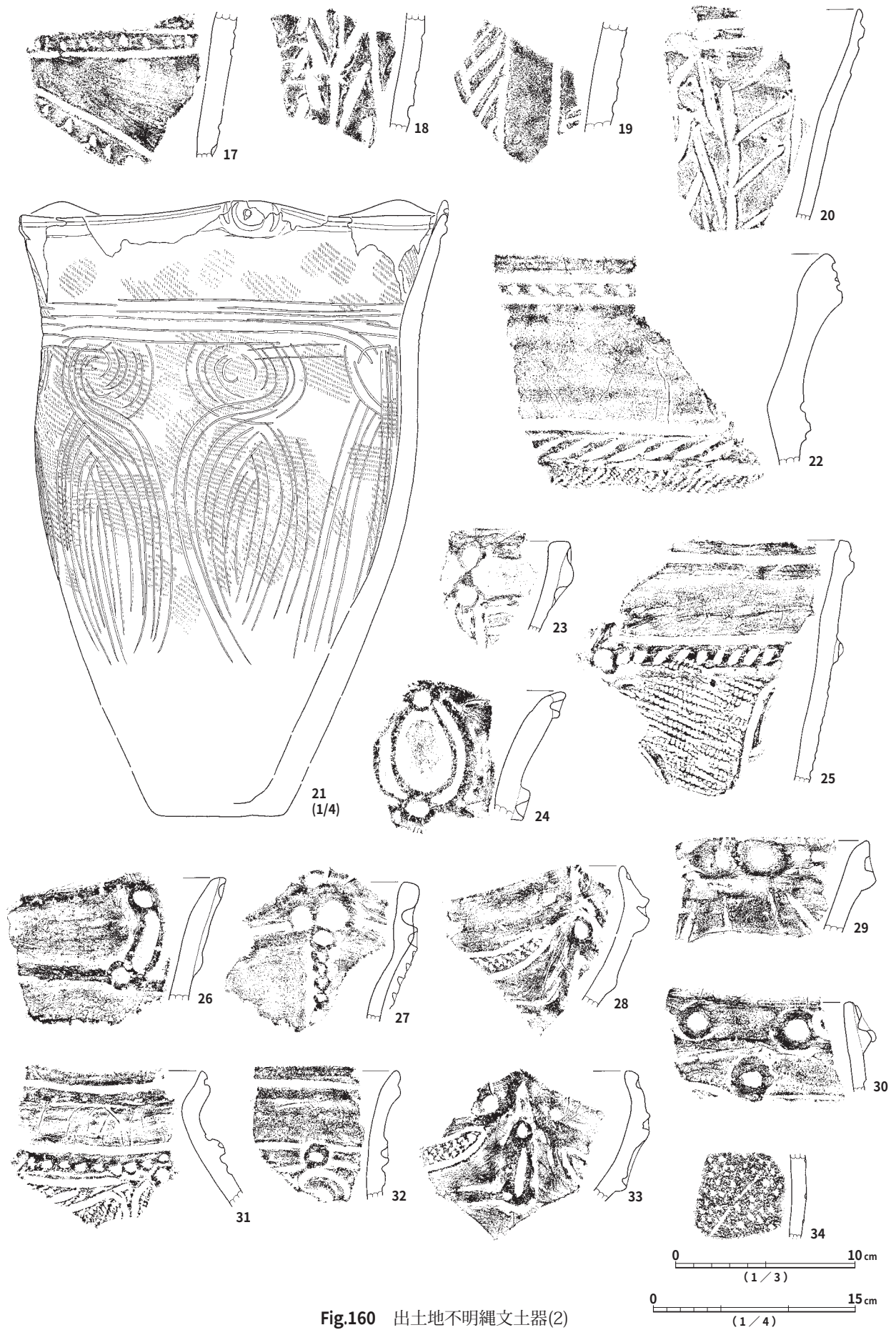


Fig.159 出土地不明縄文土器(1)



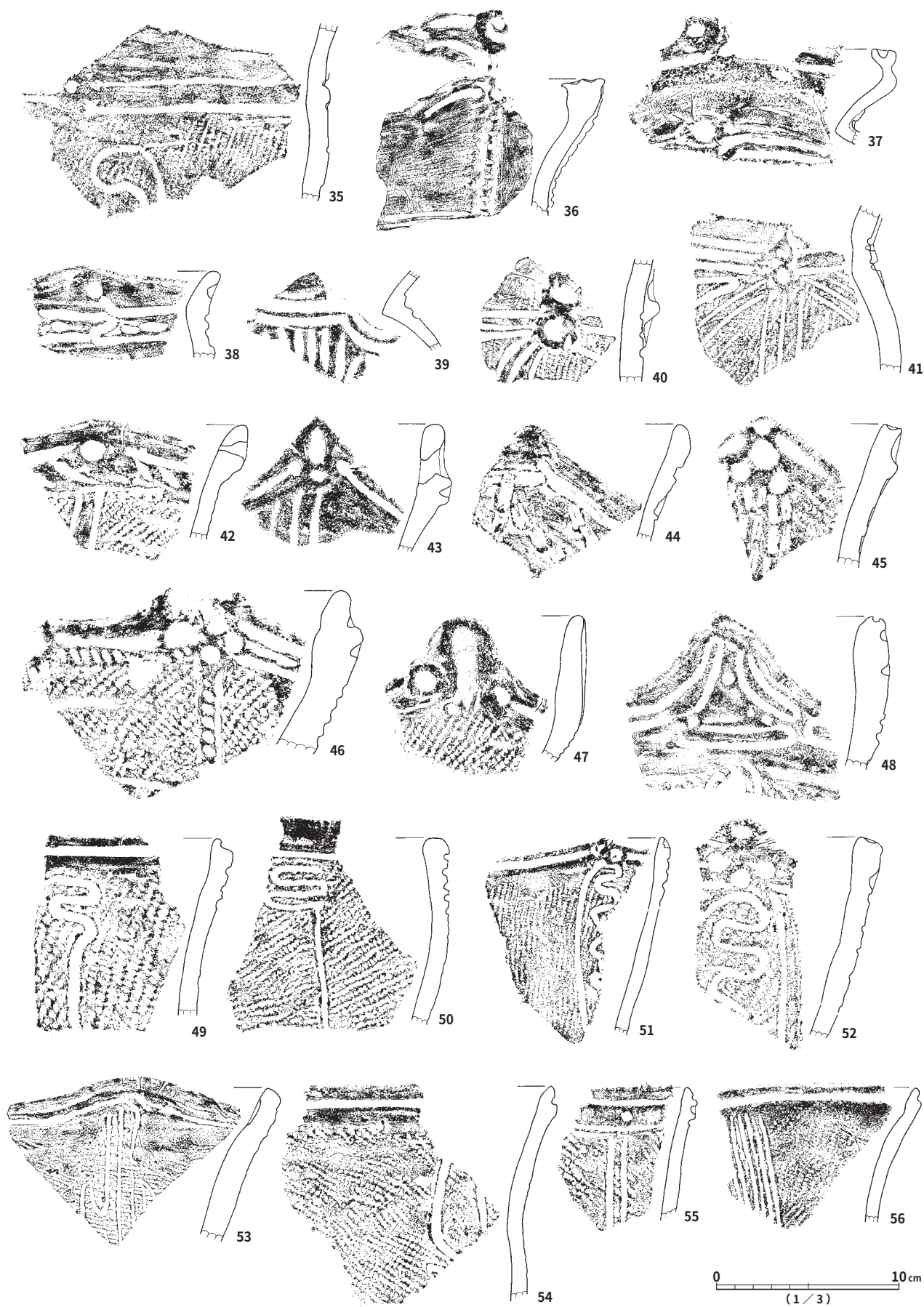


Fig.161 出土地不明縄文土器(3)

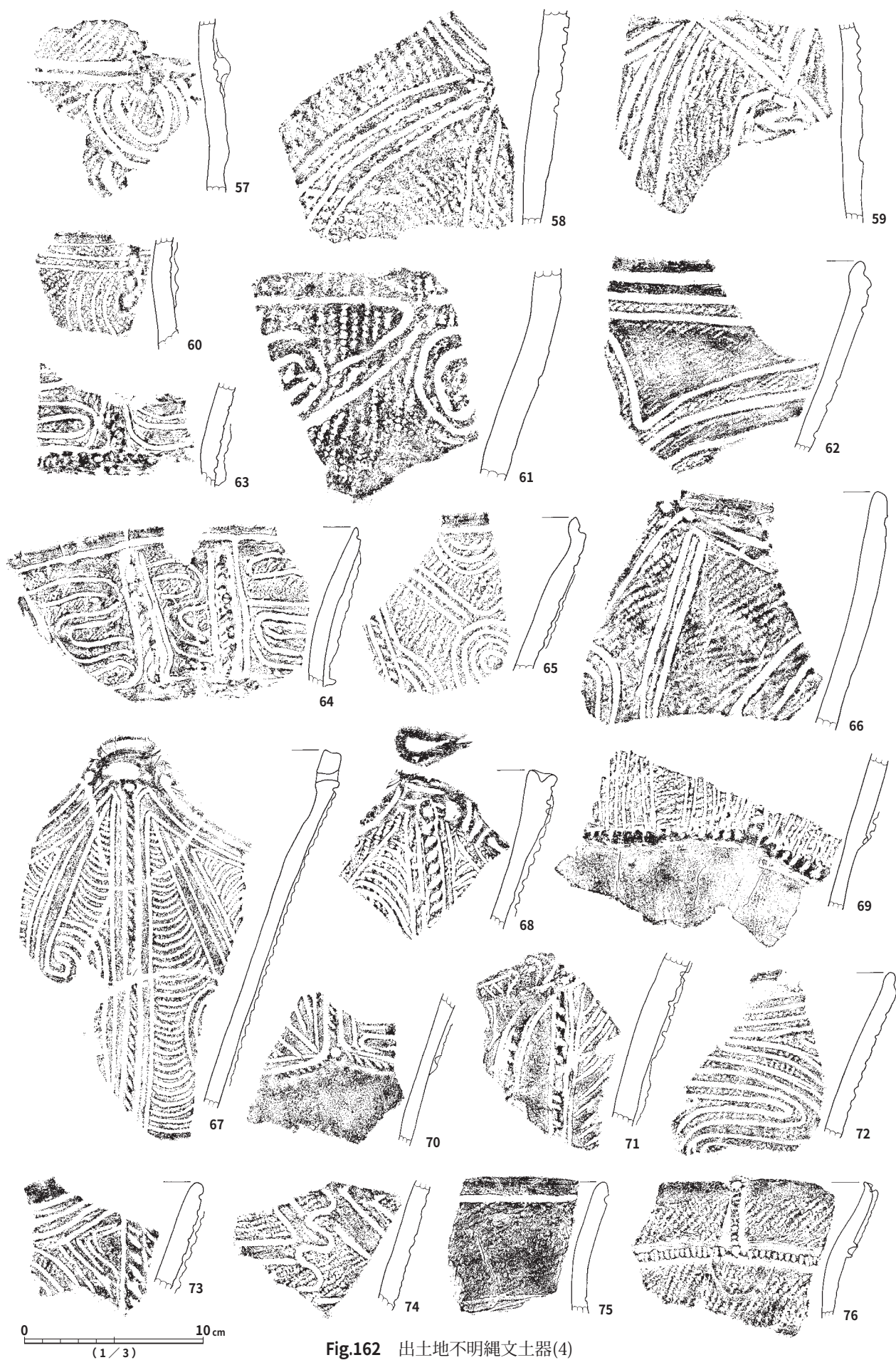


Fig.162 出土地不明縄文土器(4)

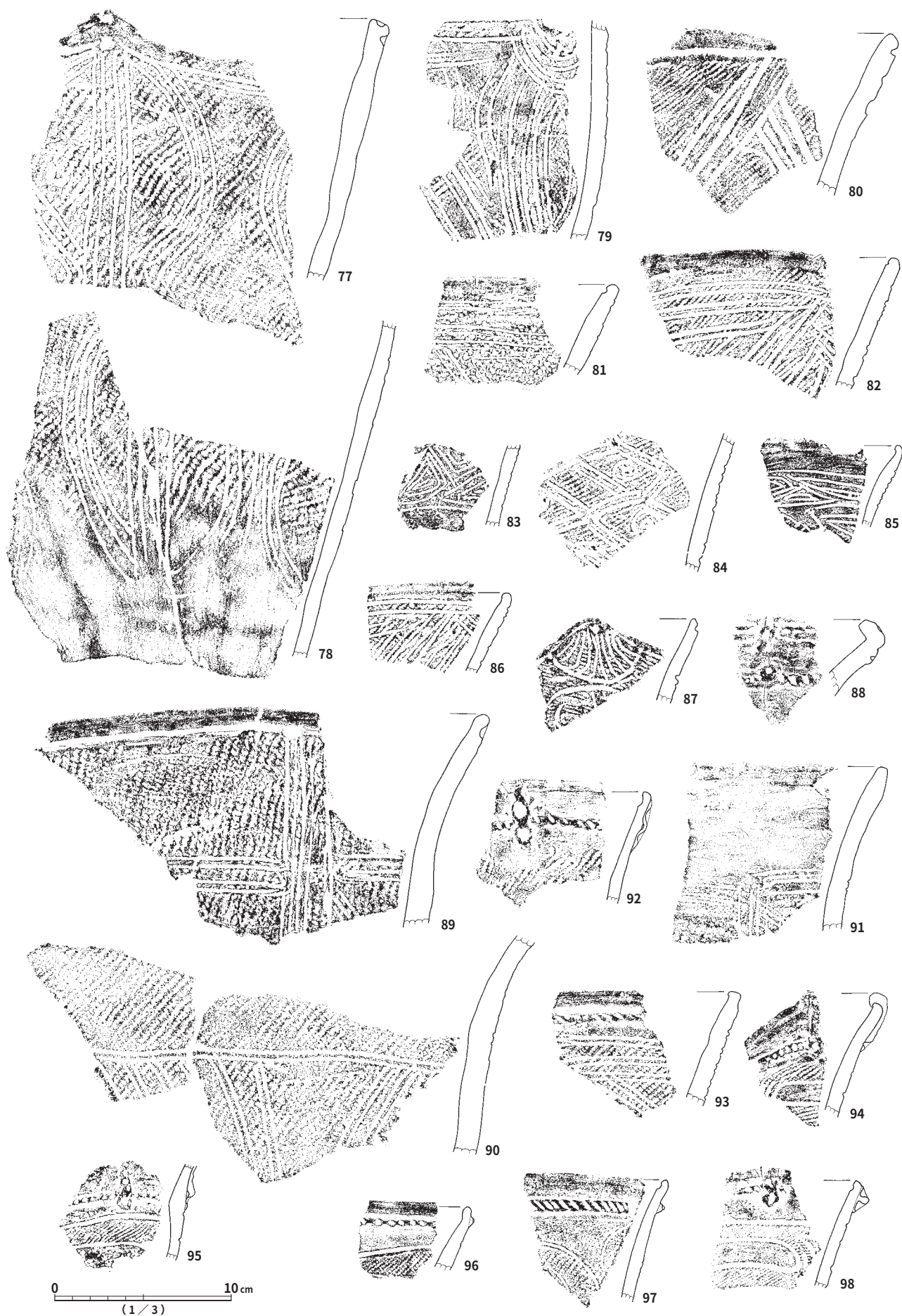


Fig.163 出土地不明縄文土器(5)

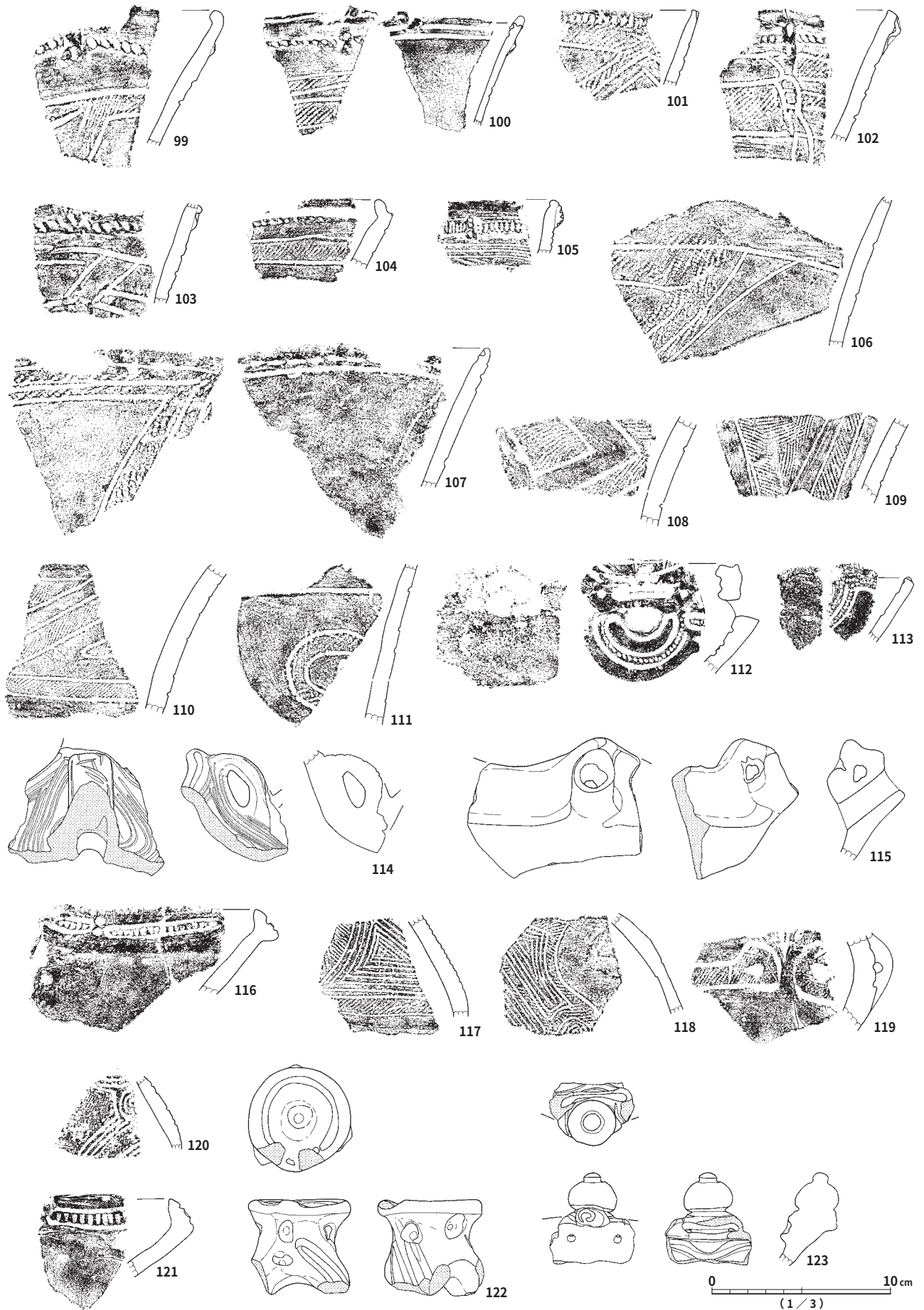


Fig.164 出土地不明縄文土器(6)

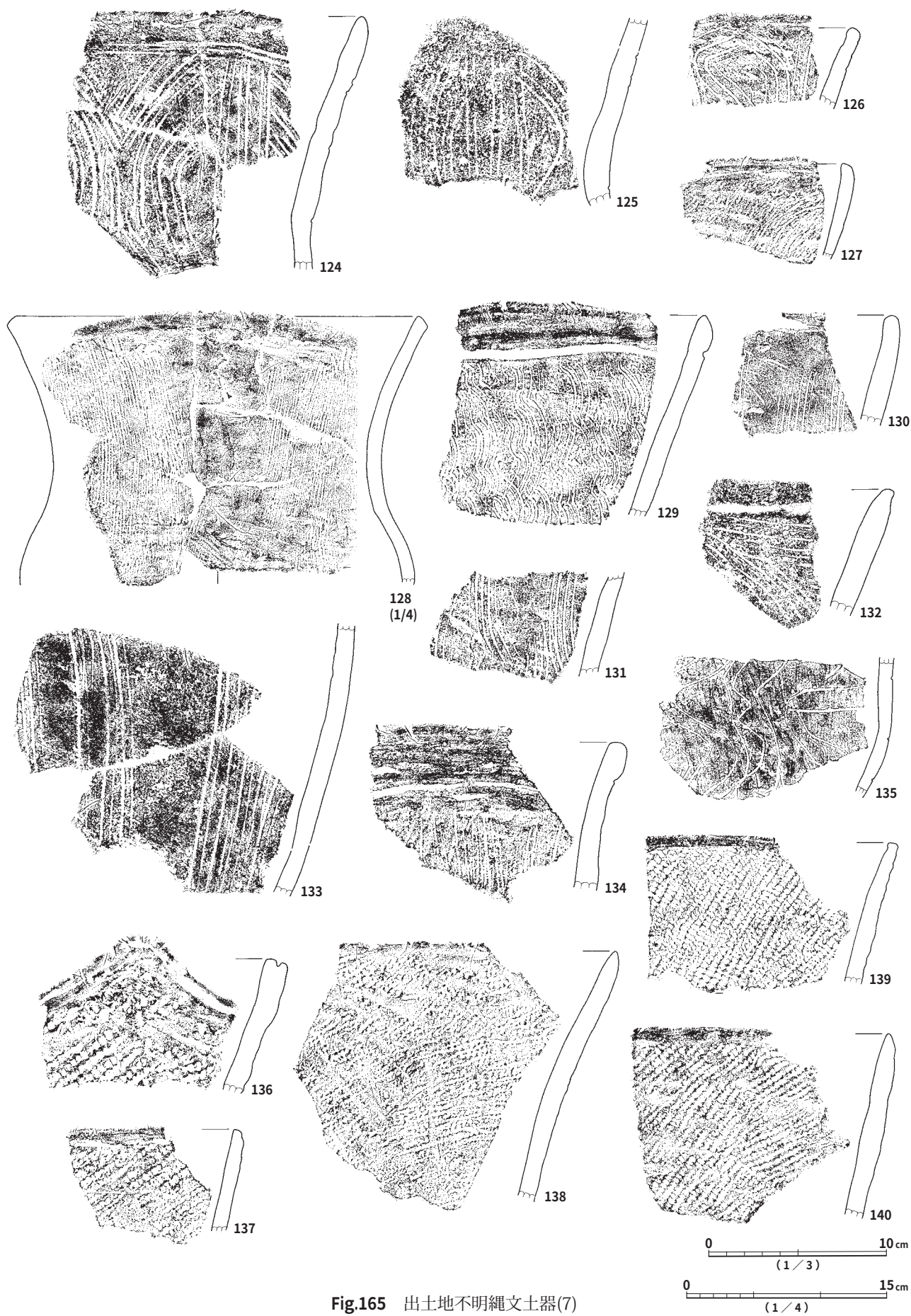


Fig.165 出土地不明縄文土器(7)

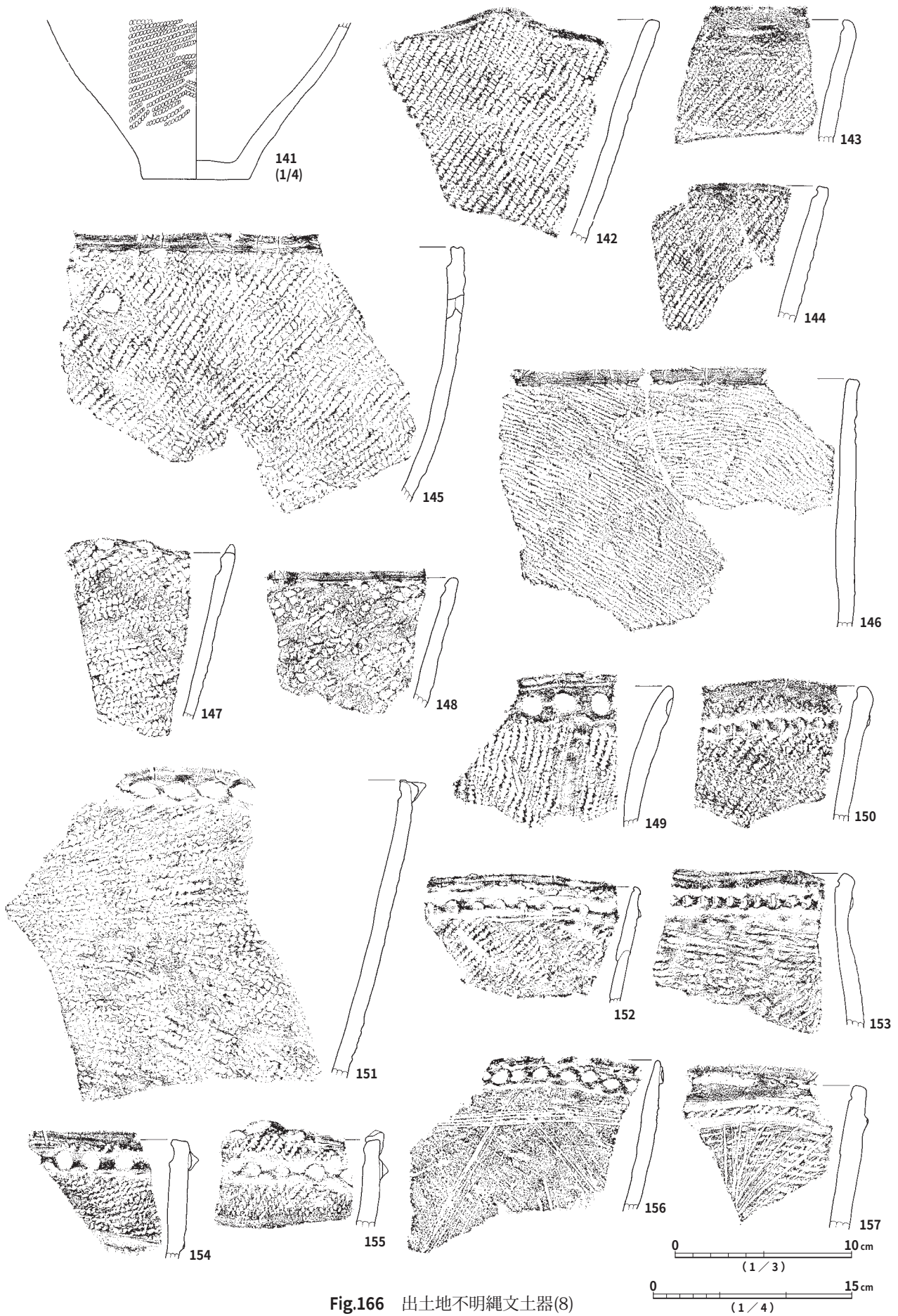


Fig.166 出土地不明縄文土器(8)

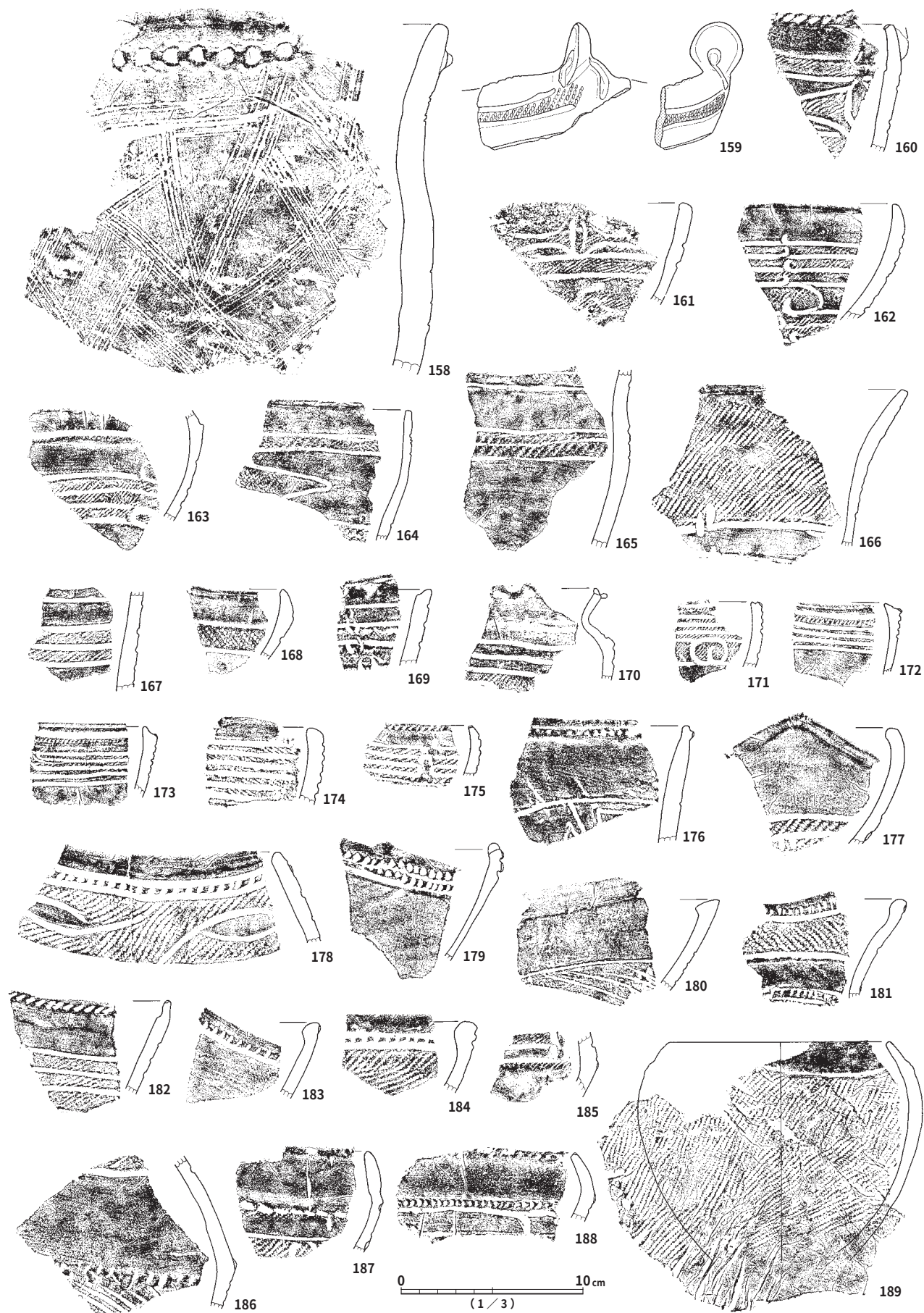


Fig.167 出土地不明繩文土器(9)



Fig.168 出土地不明縄文土器(10)

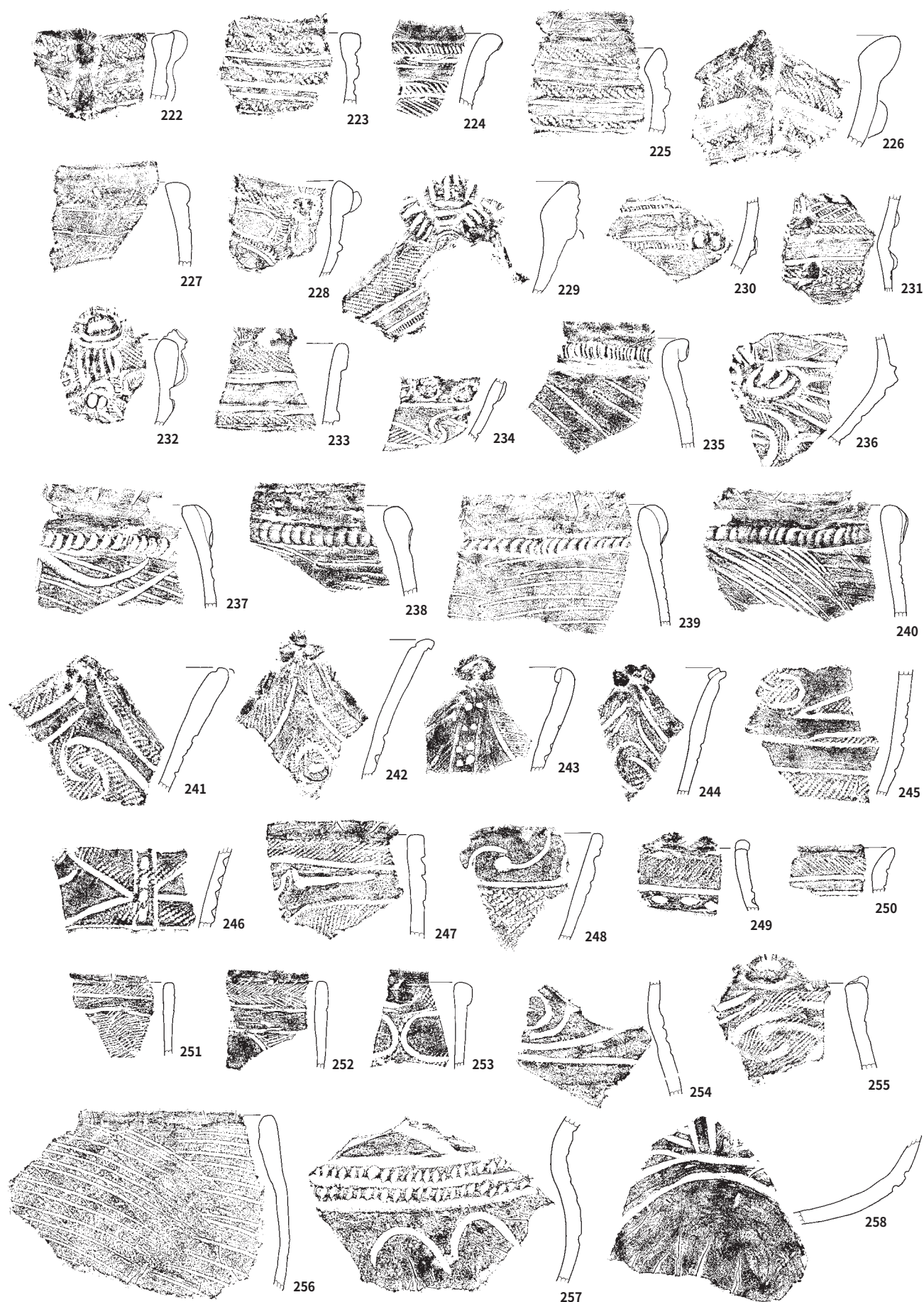


Fig.169 出土地不明縄文土器(11)

0 10 cm
(1/3)

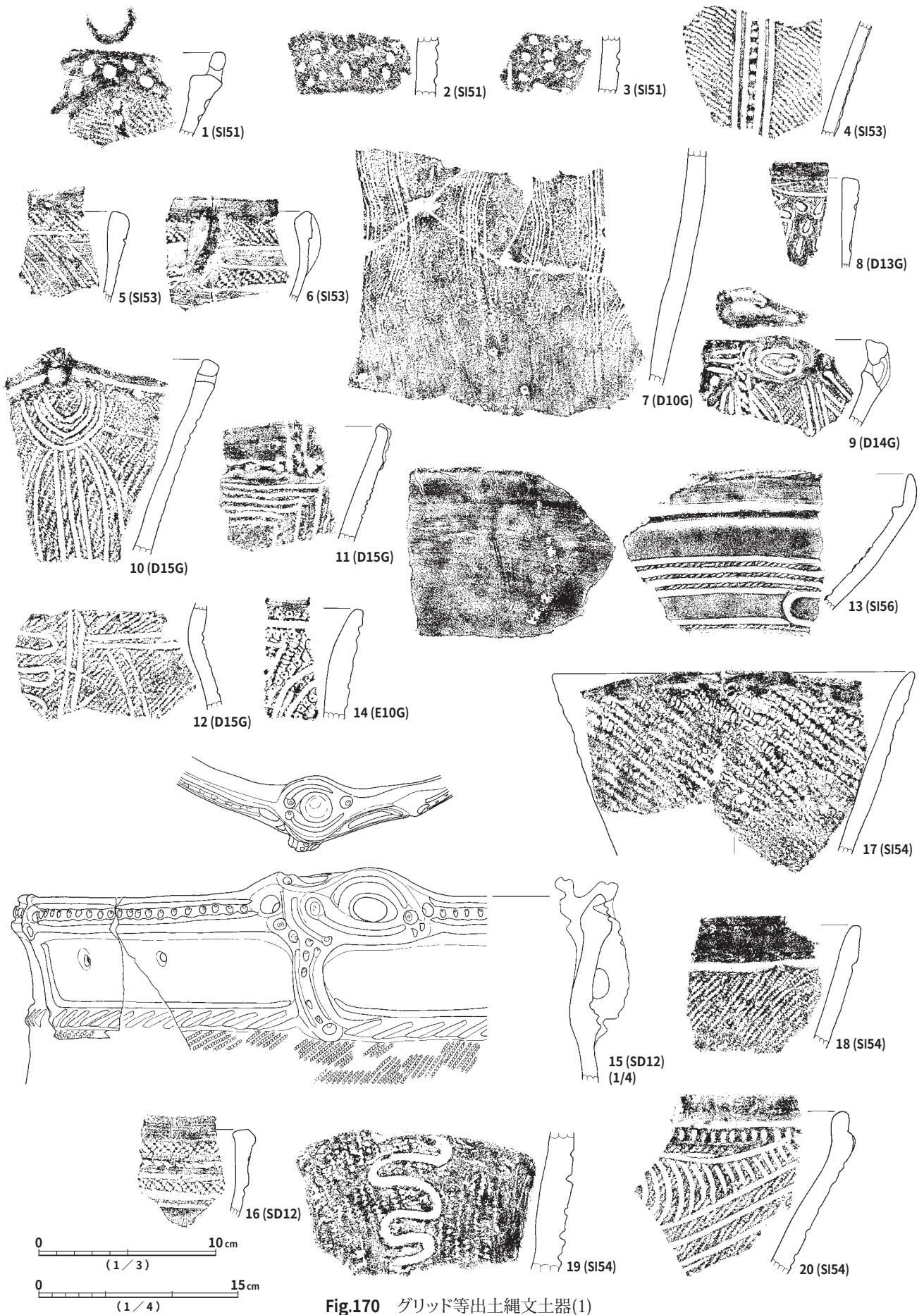


Fig.170 グリッド等出土縄文土器(1)

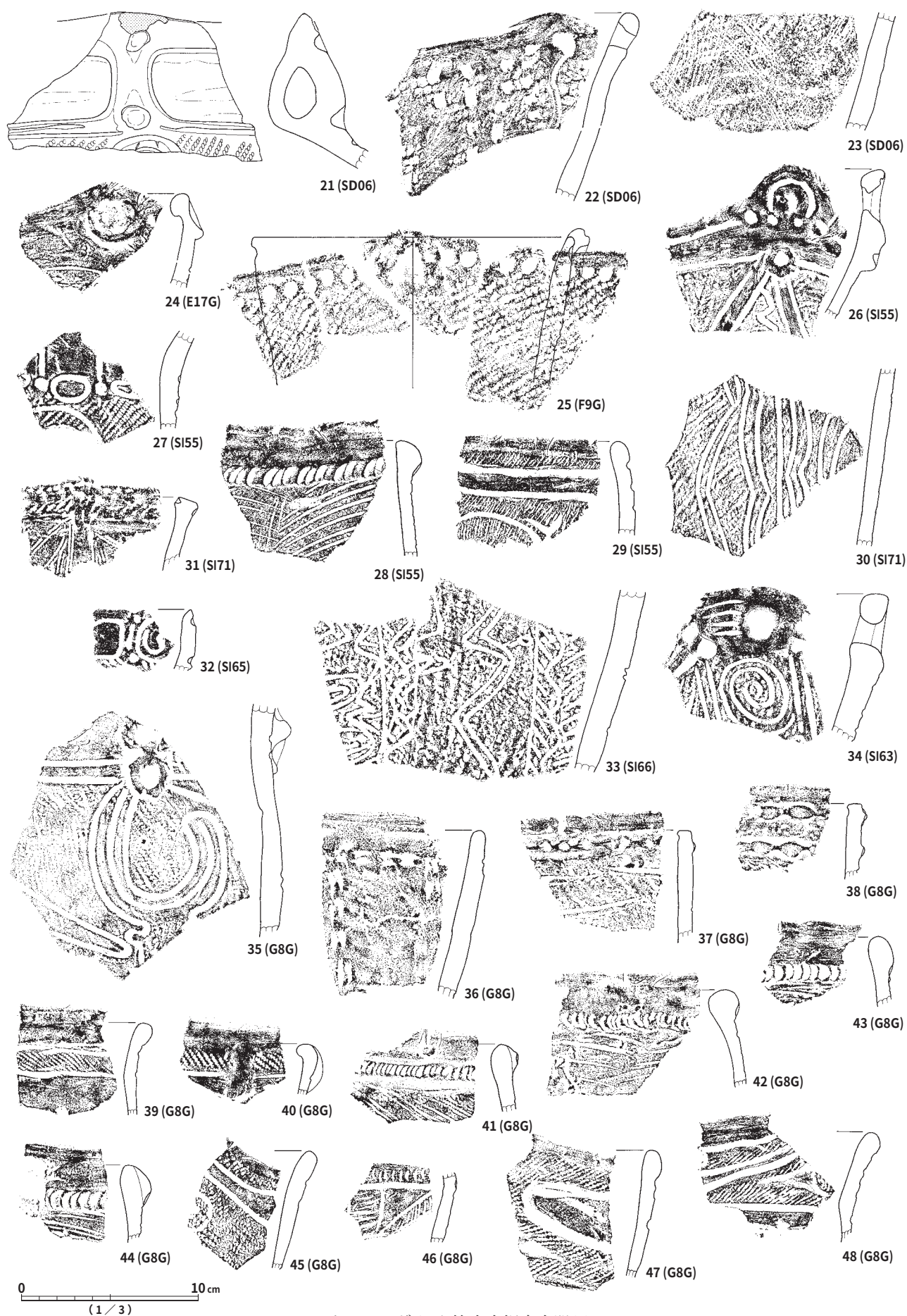


Fig.171 グリッド等出土縄文土器(2)

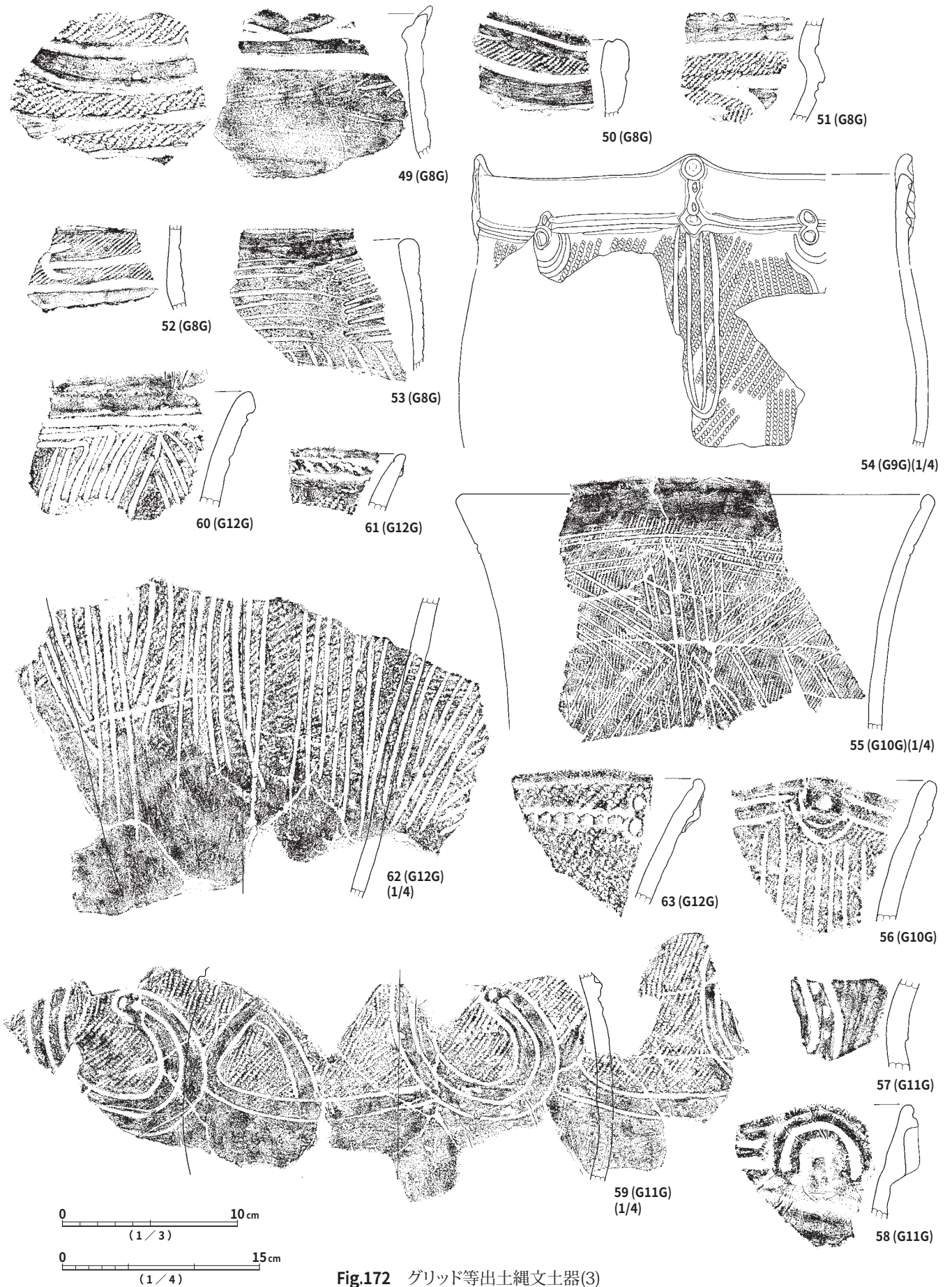


Fig.172 グリッド等出土縄文土器(3)

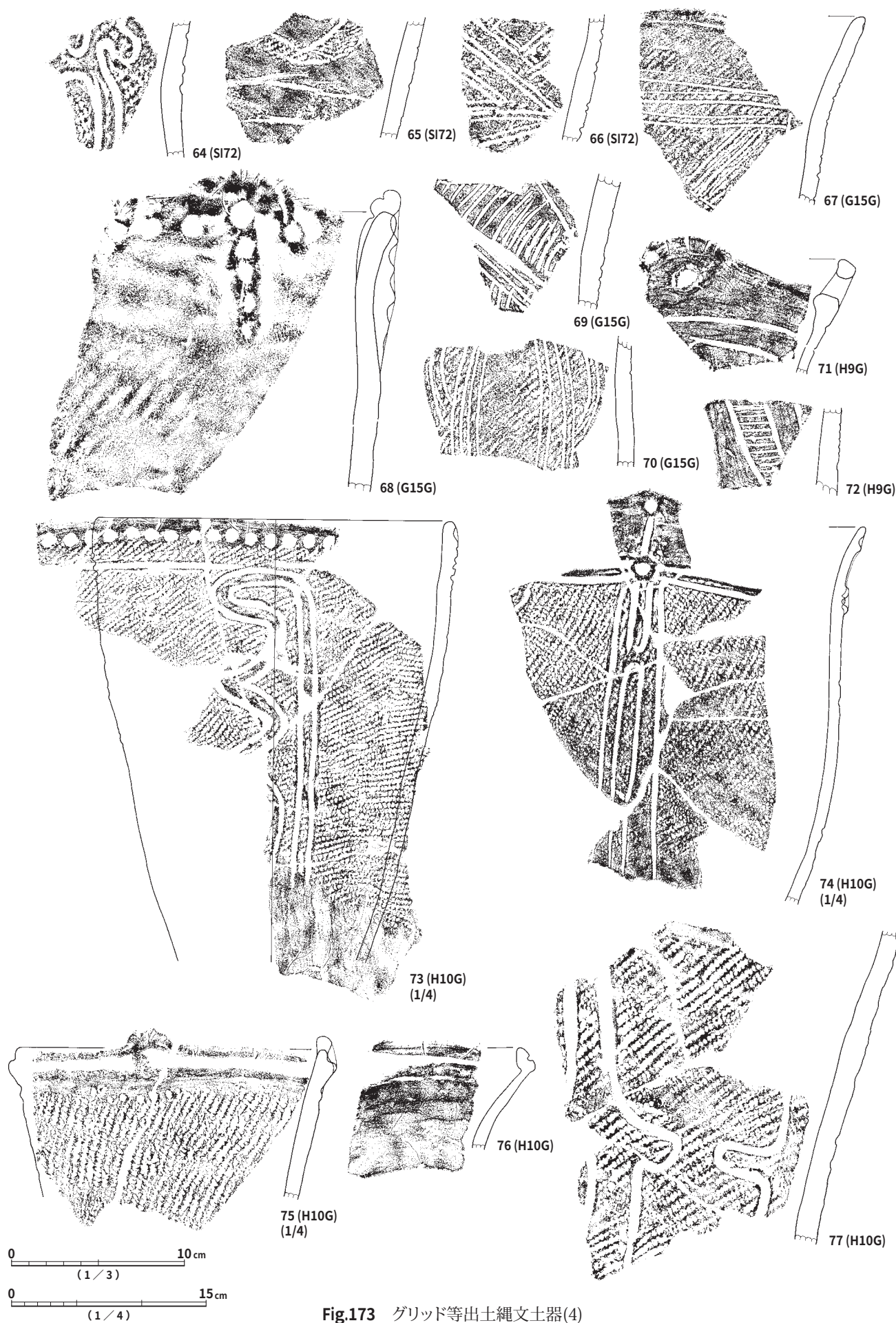


Fig.173 グリッド等出土縄文土器(4)

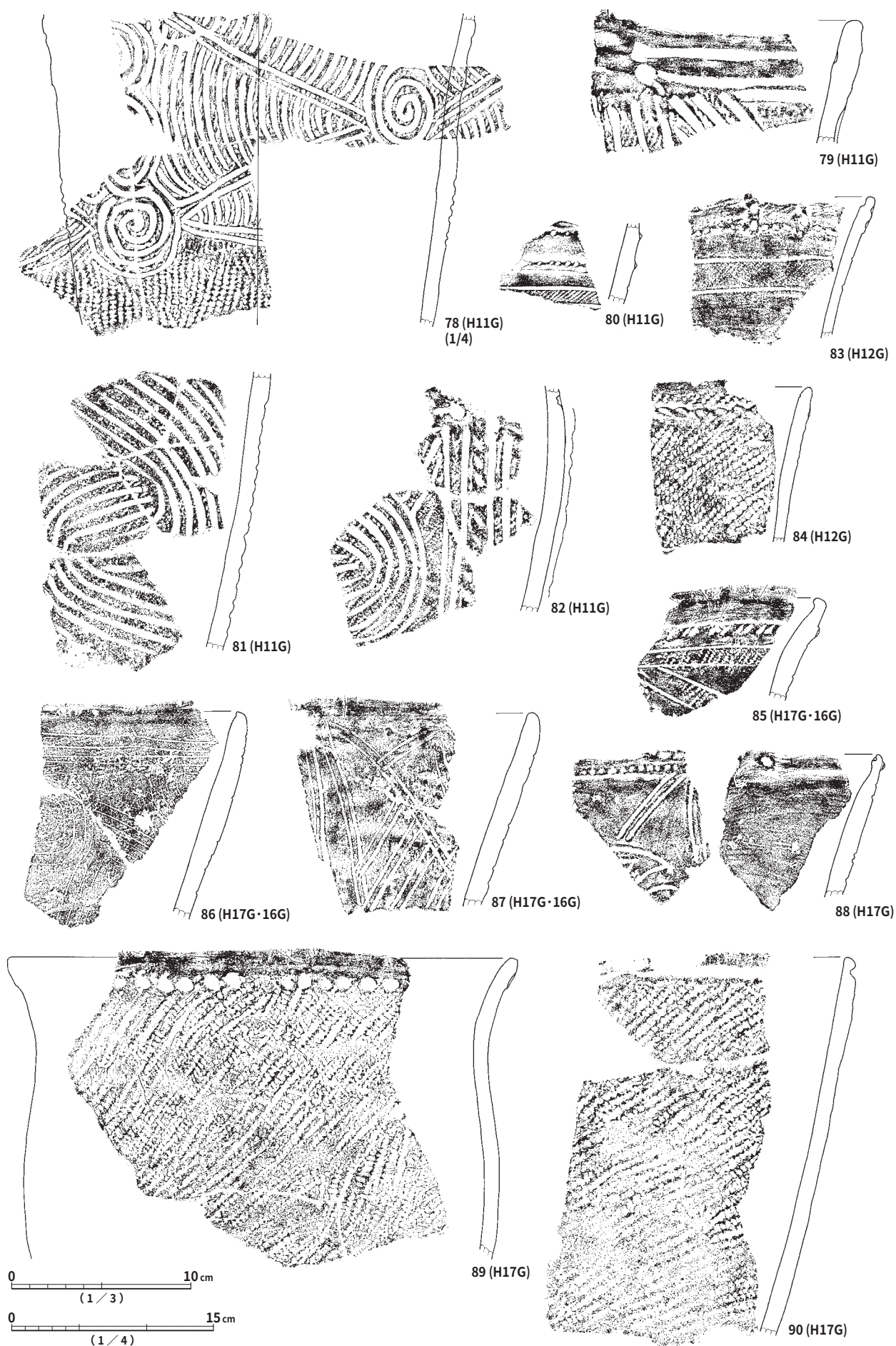


Fig.174 グリッド等出土縄文土器(5)



Fig.175 グリッド等出土縄文土器(6)

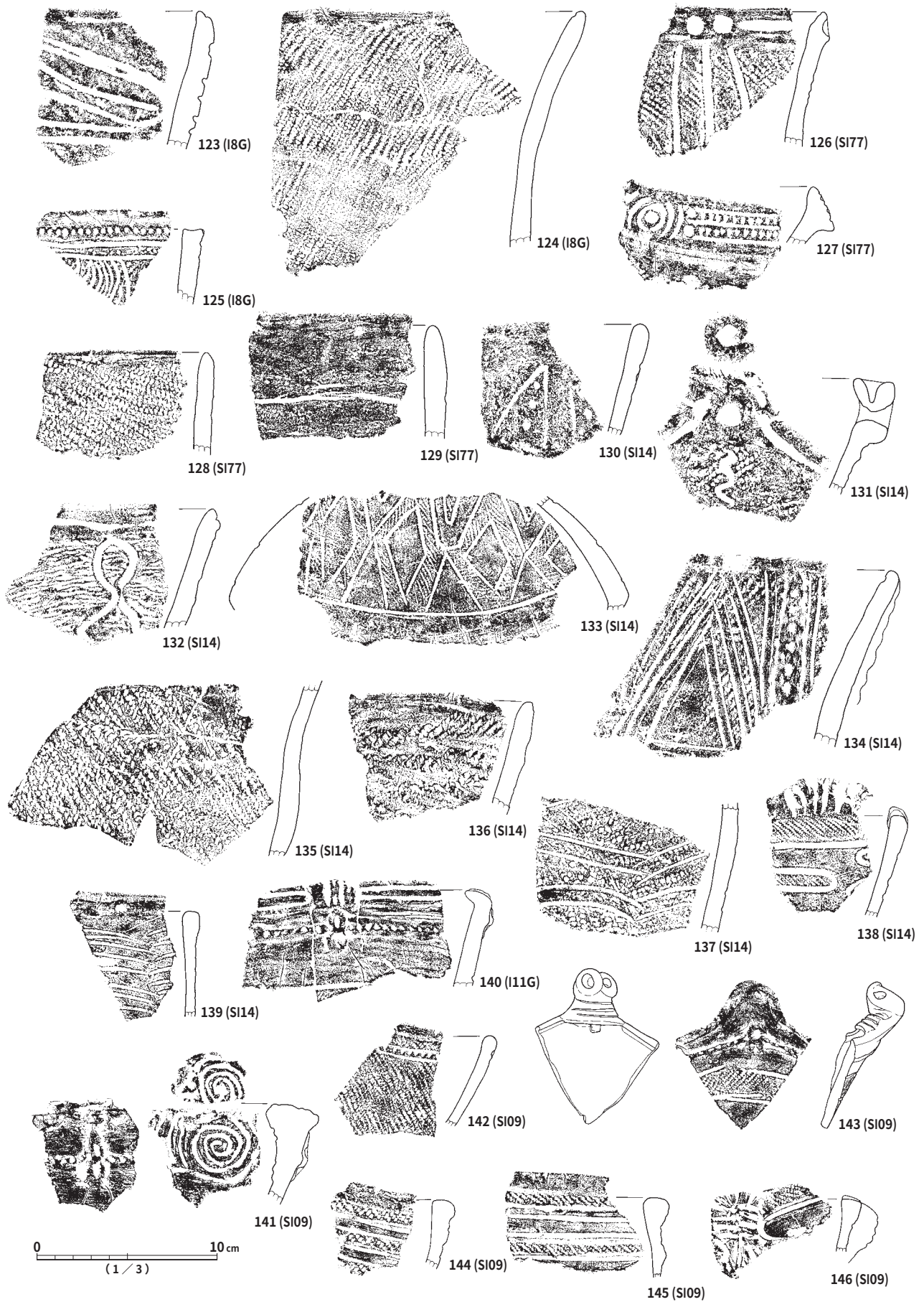


Fig.176 グリッド等出土縄文土器(7)

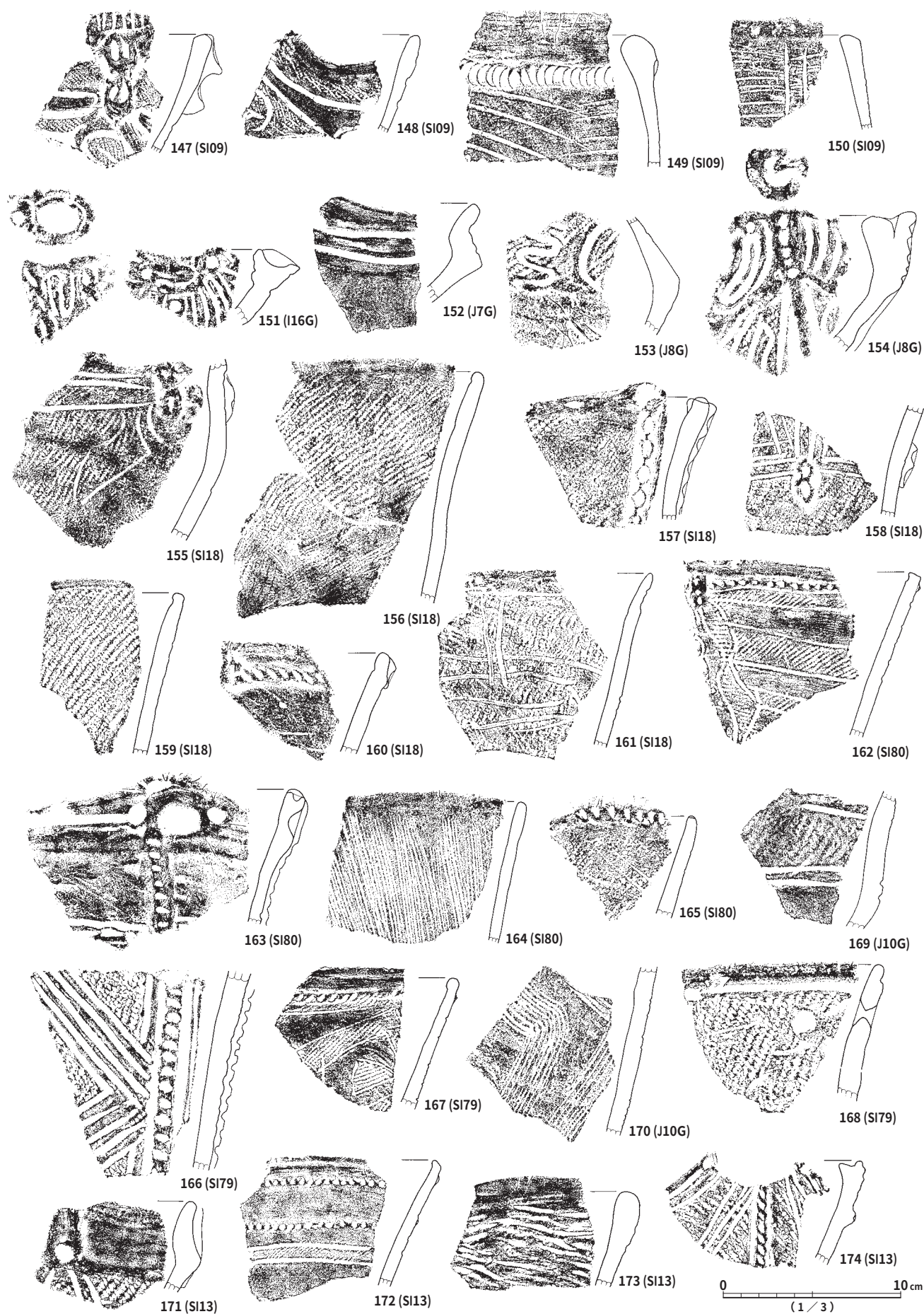


Fig.177 グリッド等出土縄文土器(8)

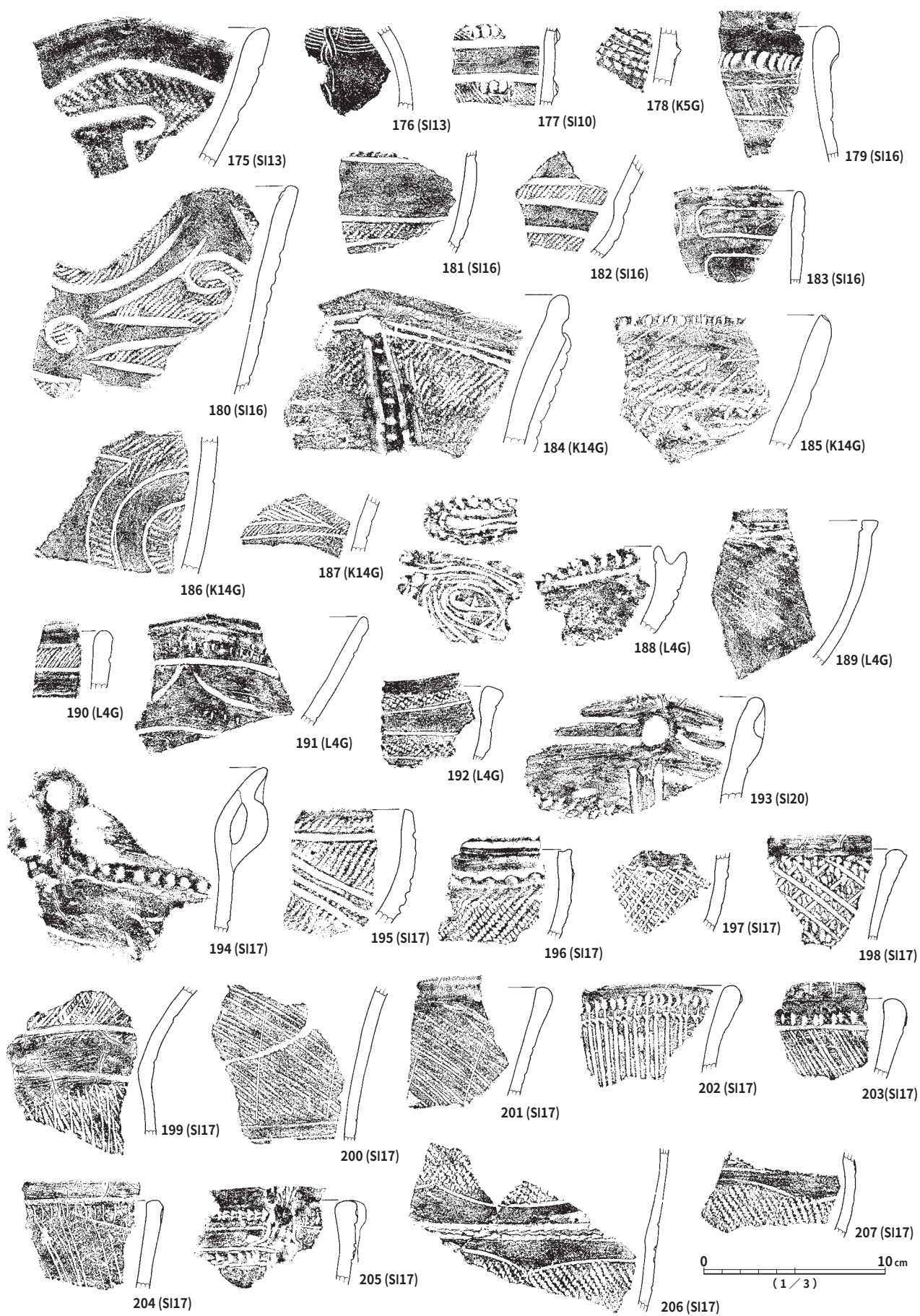


Fig.178 グリッド等出土縄文土器(9)

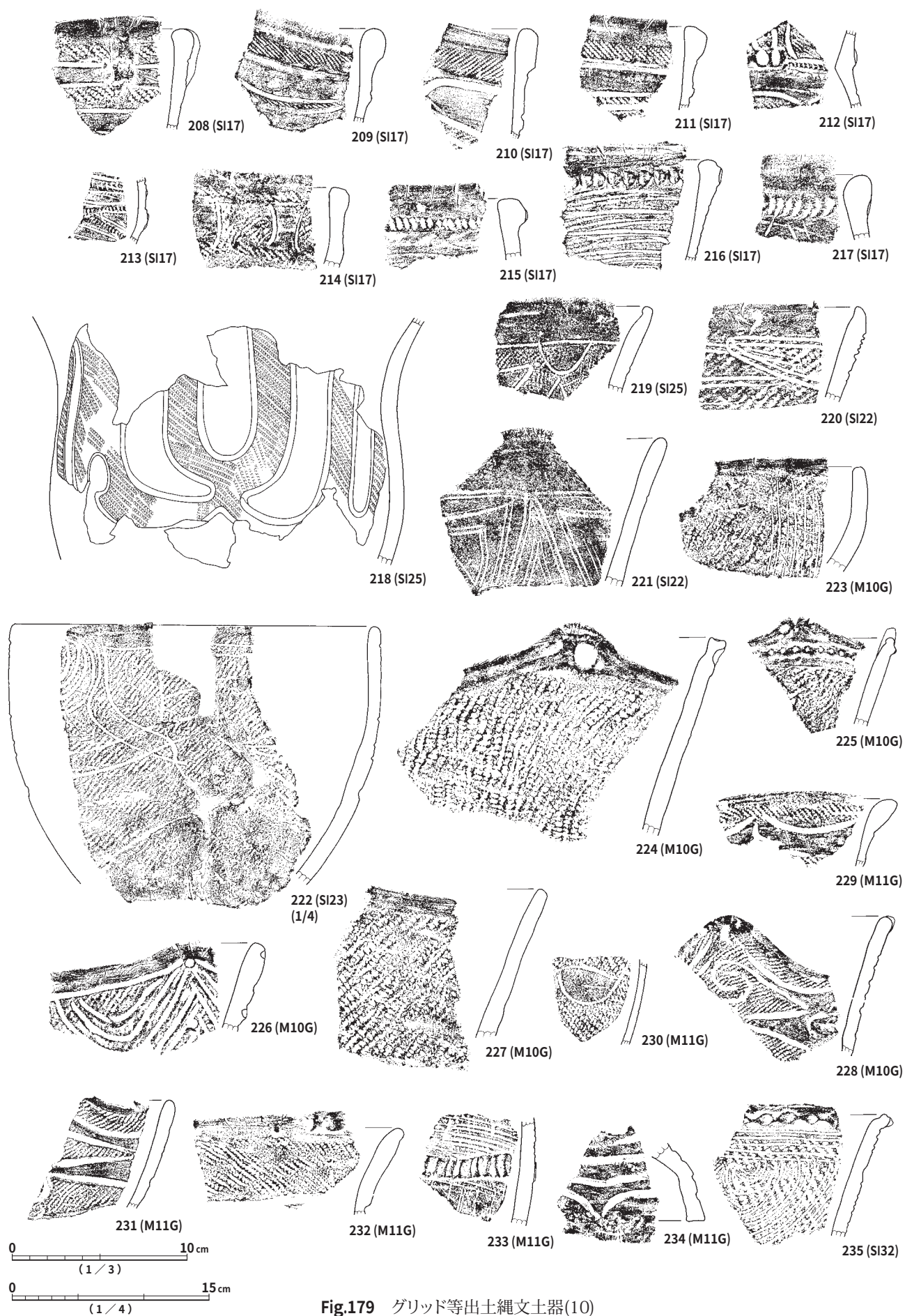


Fig.179 グリッド等出土縄文土器(10)

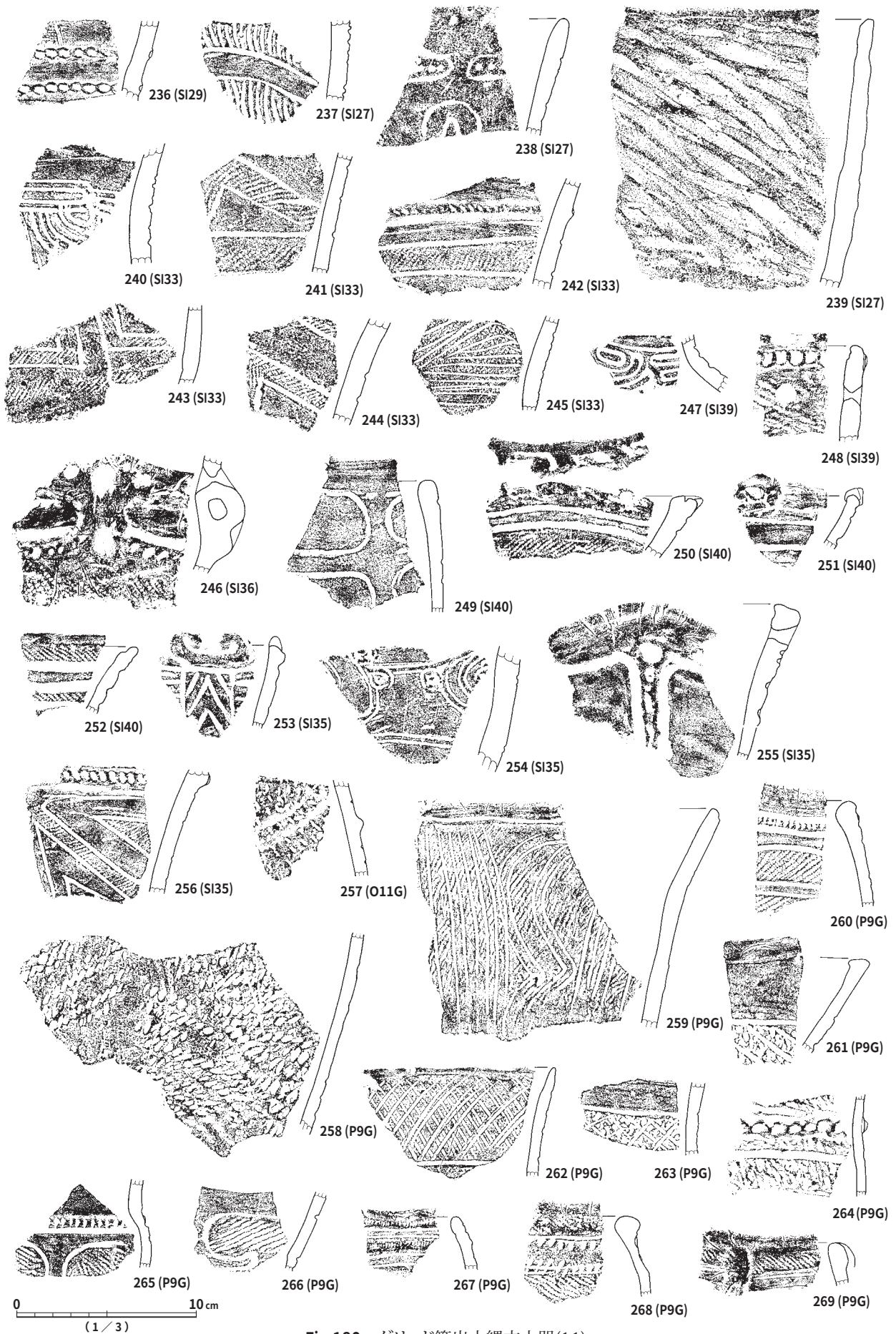


Fig.180 グリッド等出土縄文土器(11)

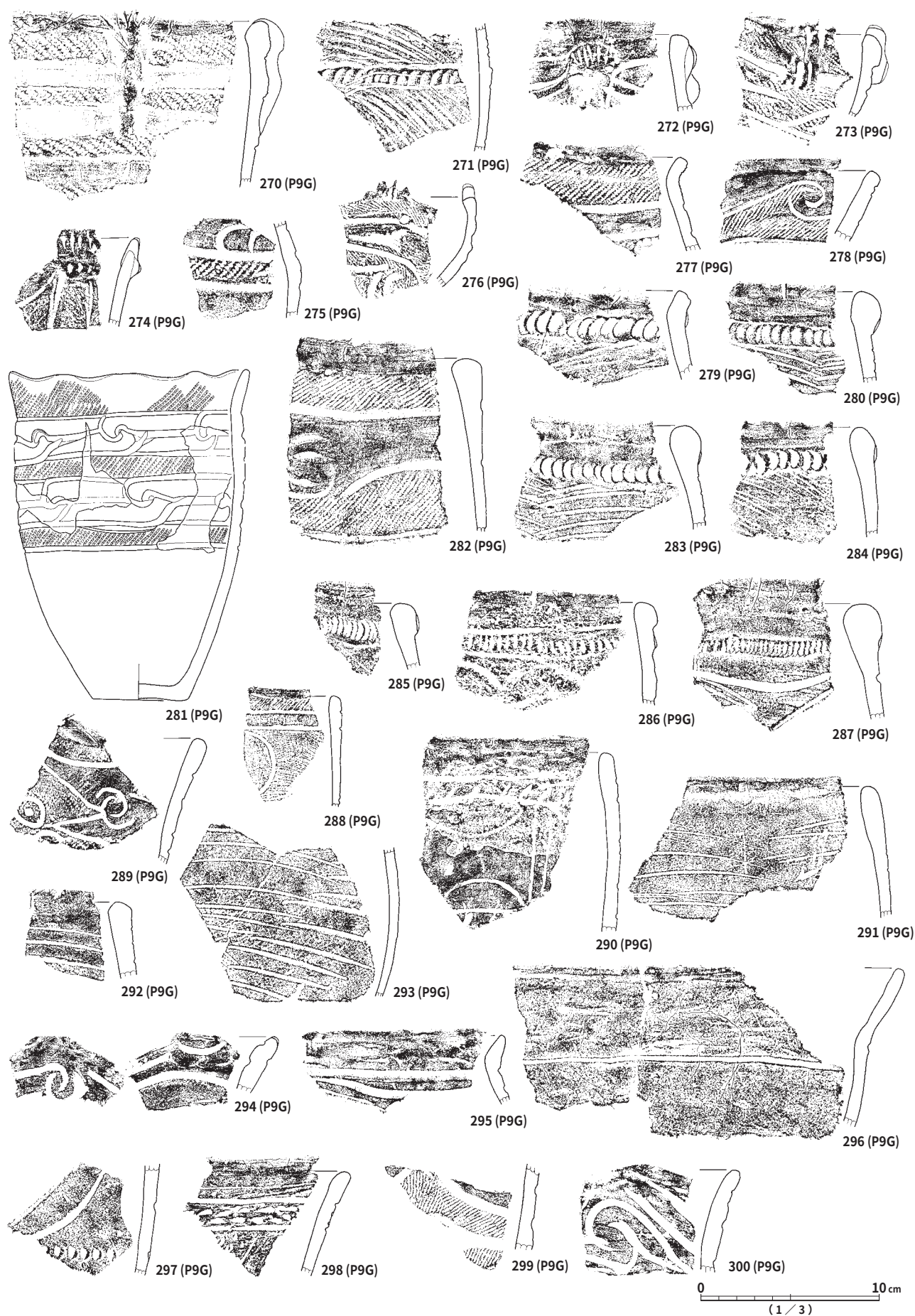


Fig.181 グリッド等出土縄文土器(12)

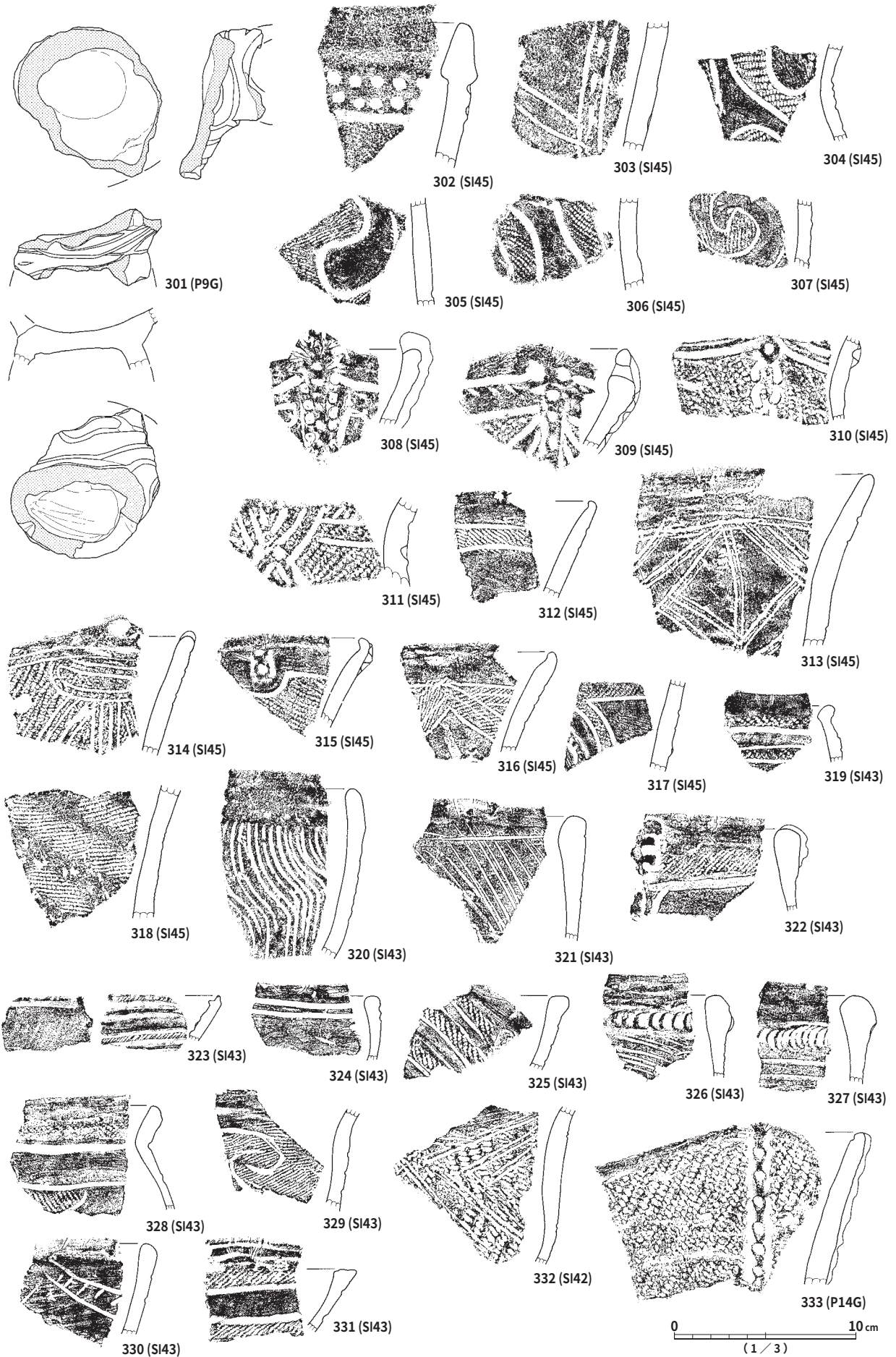


Fig.182 グリッド等出土縄文土器(13)

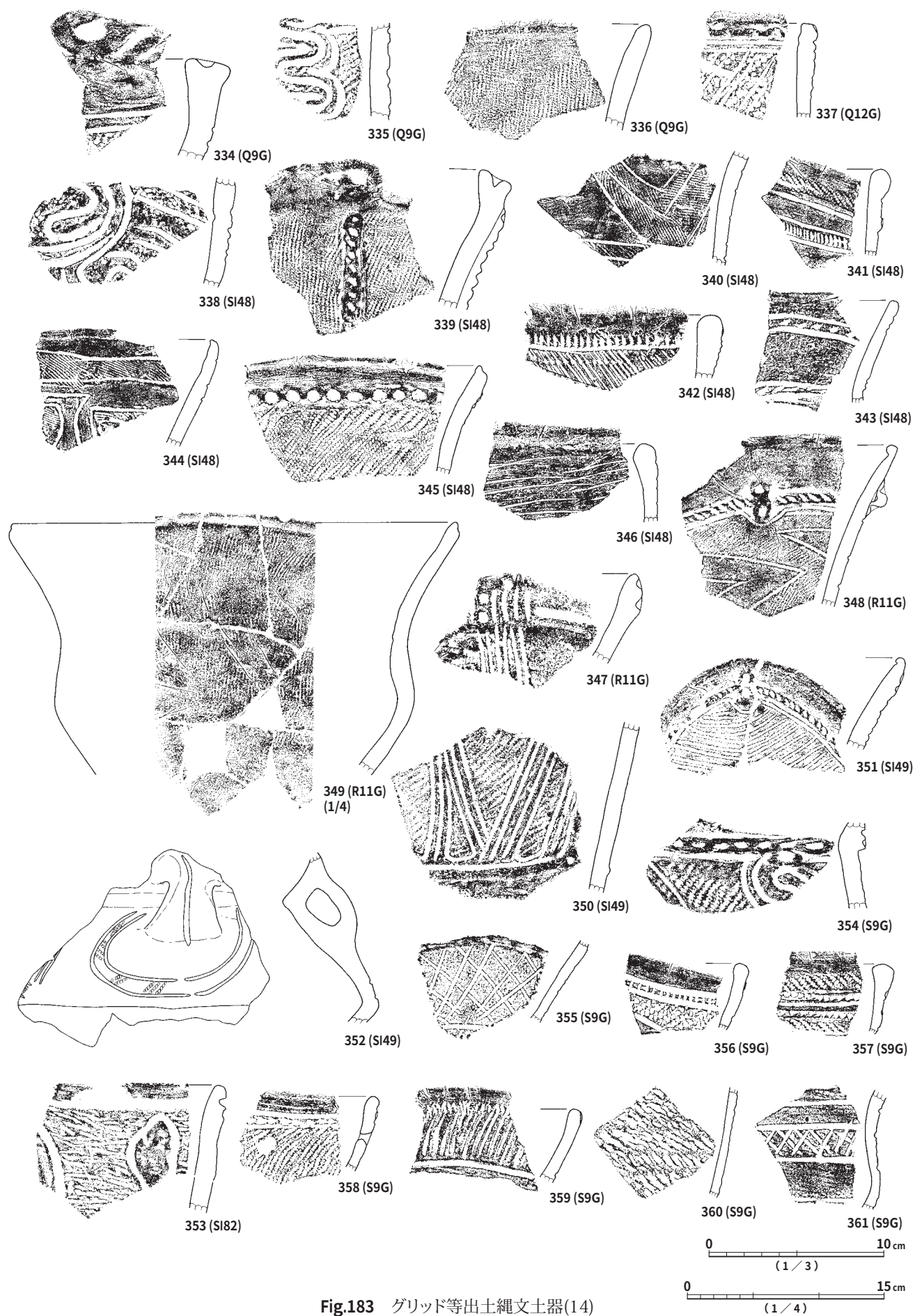


Fig.183 グリッド等出土縄文土器(14)

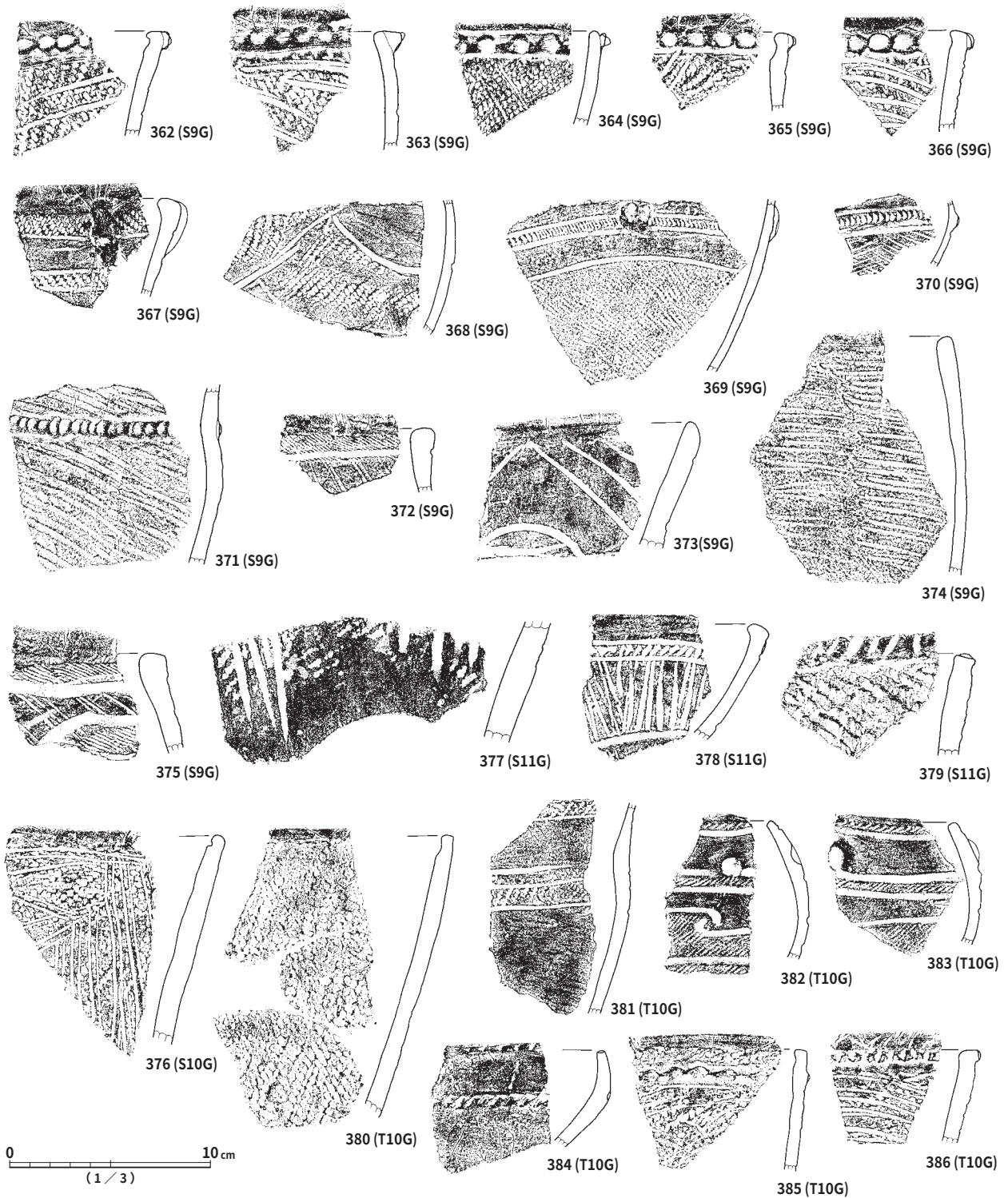
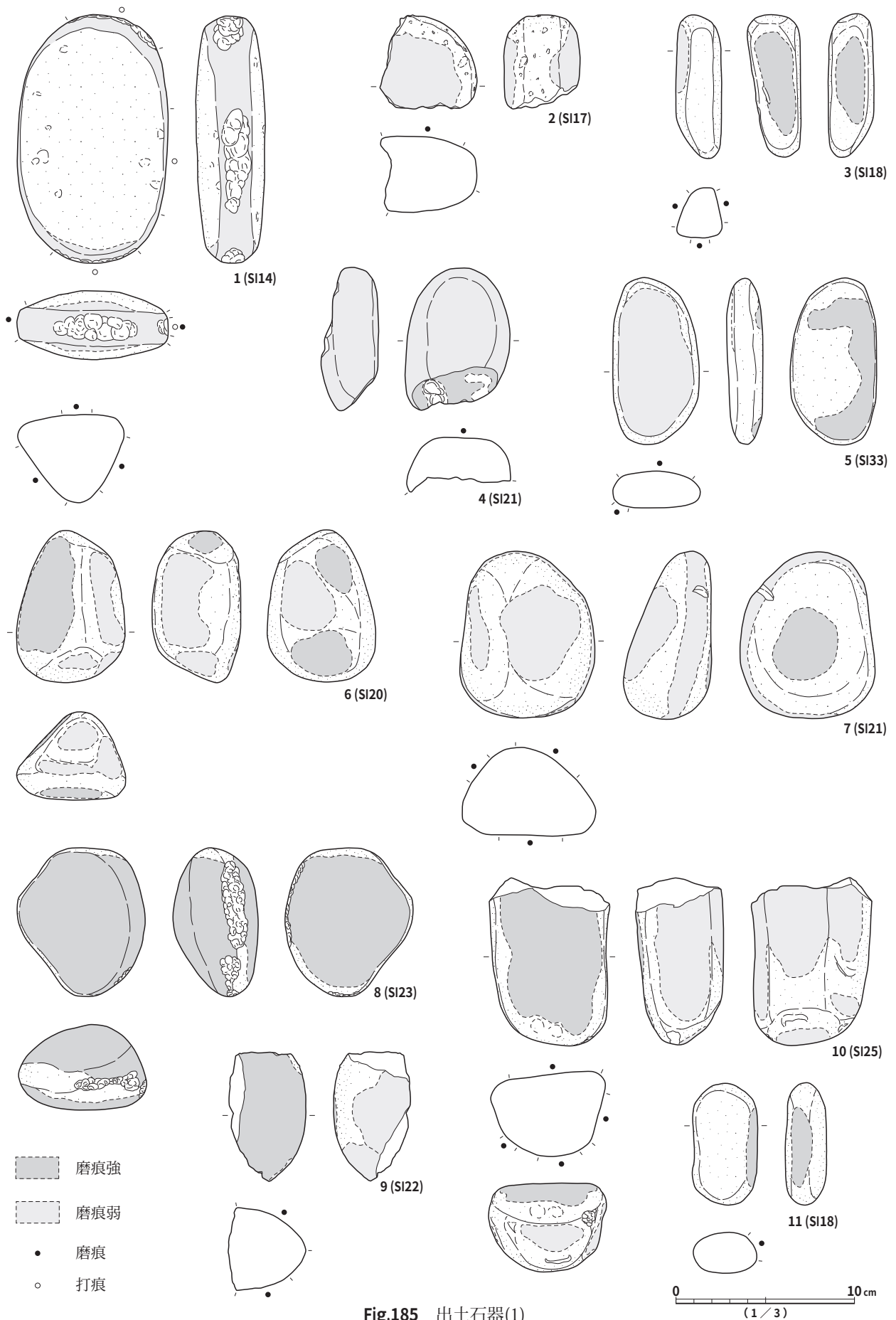


Fig.184 グリッド等出土縄文土器(15)

など、遺跡東端部に分布の中心をもつ。曾谷式から安行1・2式は、調査区中央部SI08・09・14・17などから、SI23・43・48、P9・S9区など、調査区東側に展開する。晩期前葉は、貝塚の分布するB谷左又奥のSI53・55、G8区、調査区中央部SI09・14・17、北東部のP9区などにある。安行3b式、姥山2・3式段階は、G8区から調査区中央部のSI01・08・14・16、東南部のSI40・43・48から出土している。前浦式を中心とする安行3c・d式段階は、貝塚のあるB谷右又奥のG8区からSI08付近と、SI40・43、P9・S9区など調査区東端部から出土している。ただし、個々の分布はやや散漫に見える。



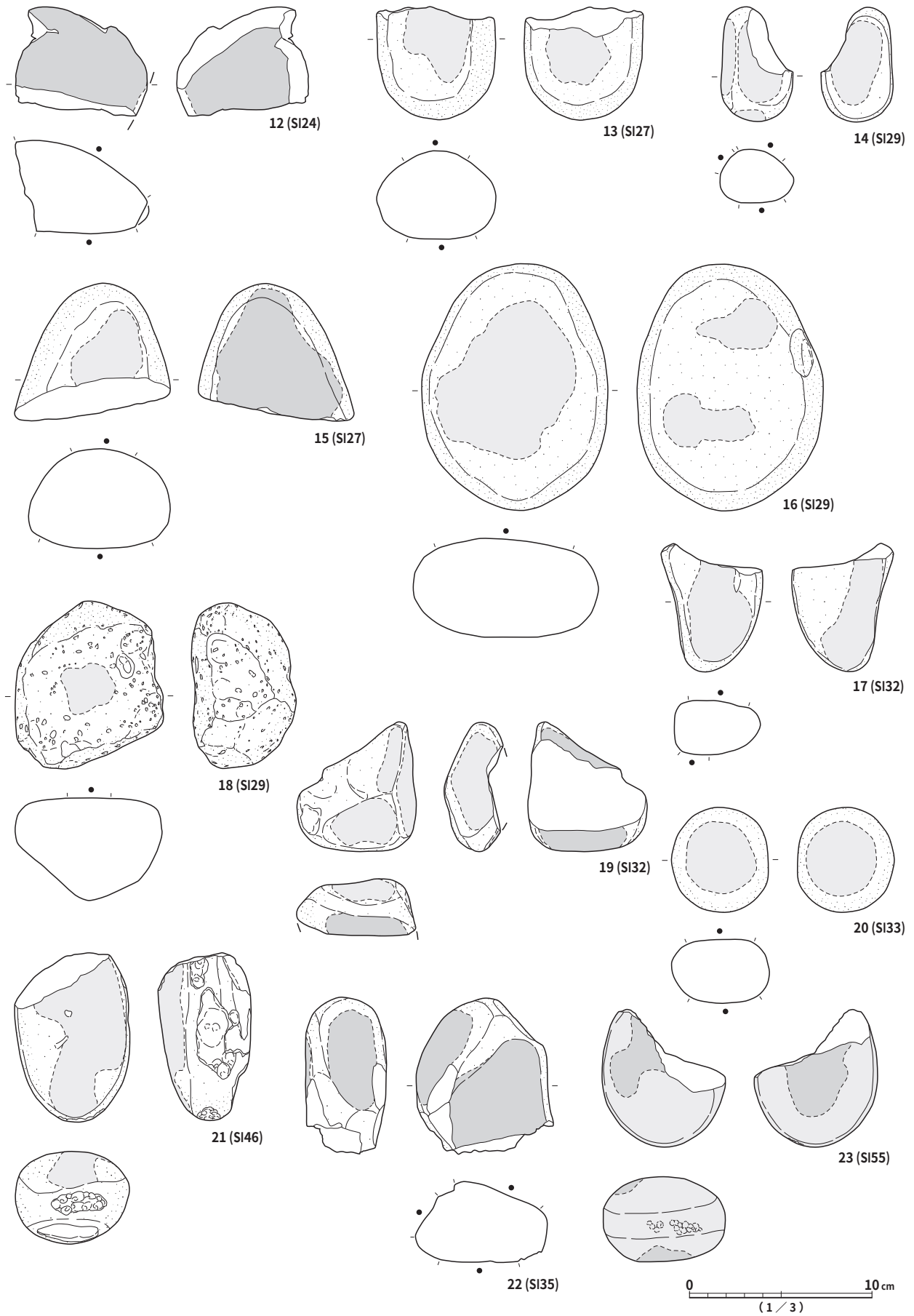


Fig.186 出土石器(2)

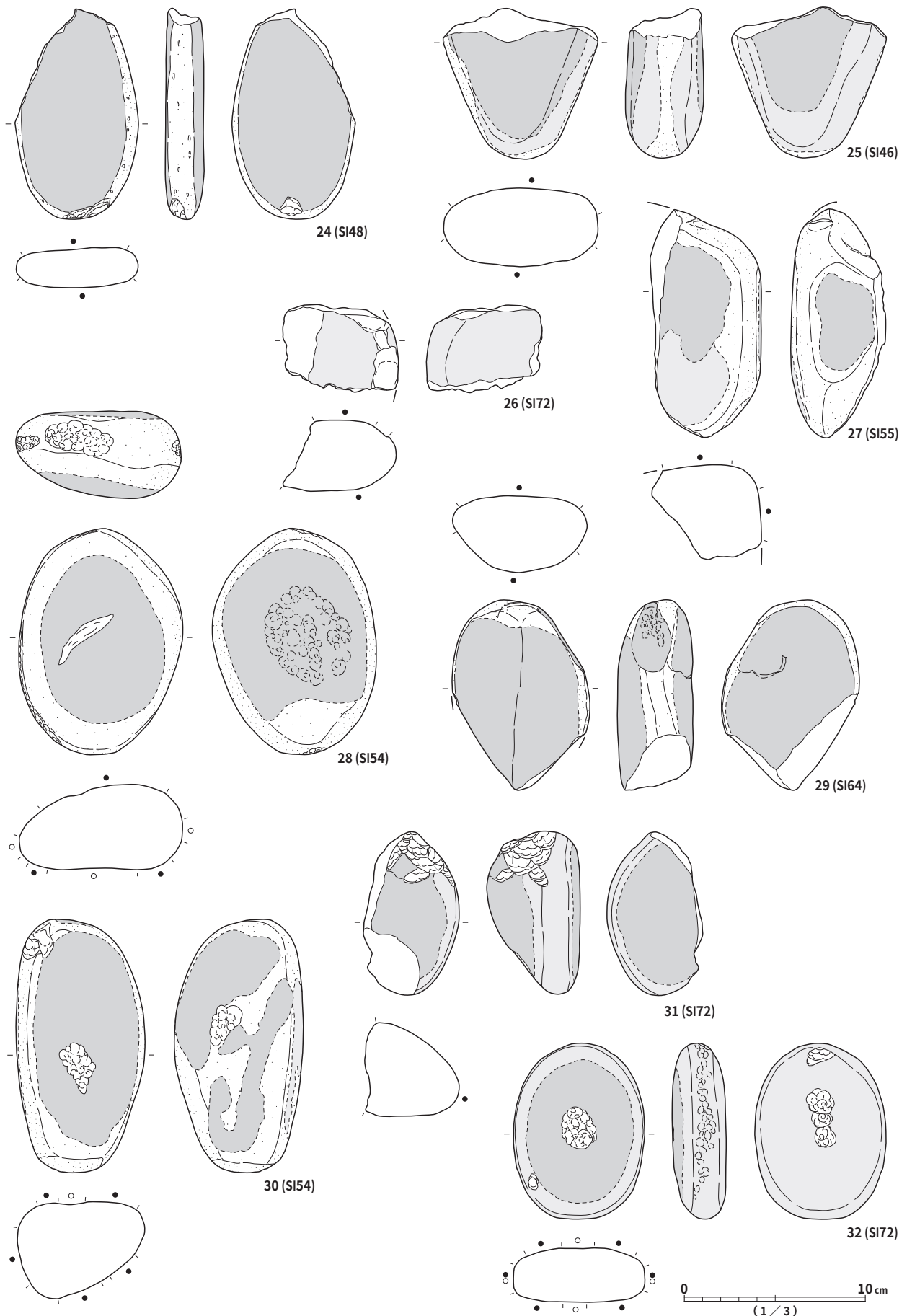


Fig.187 出土石器(3)

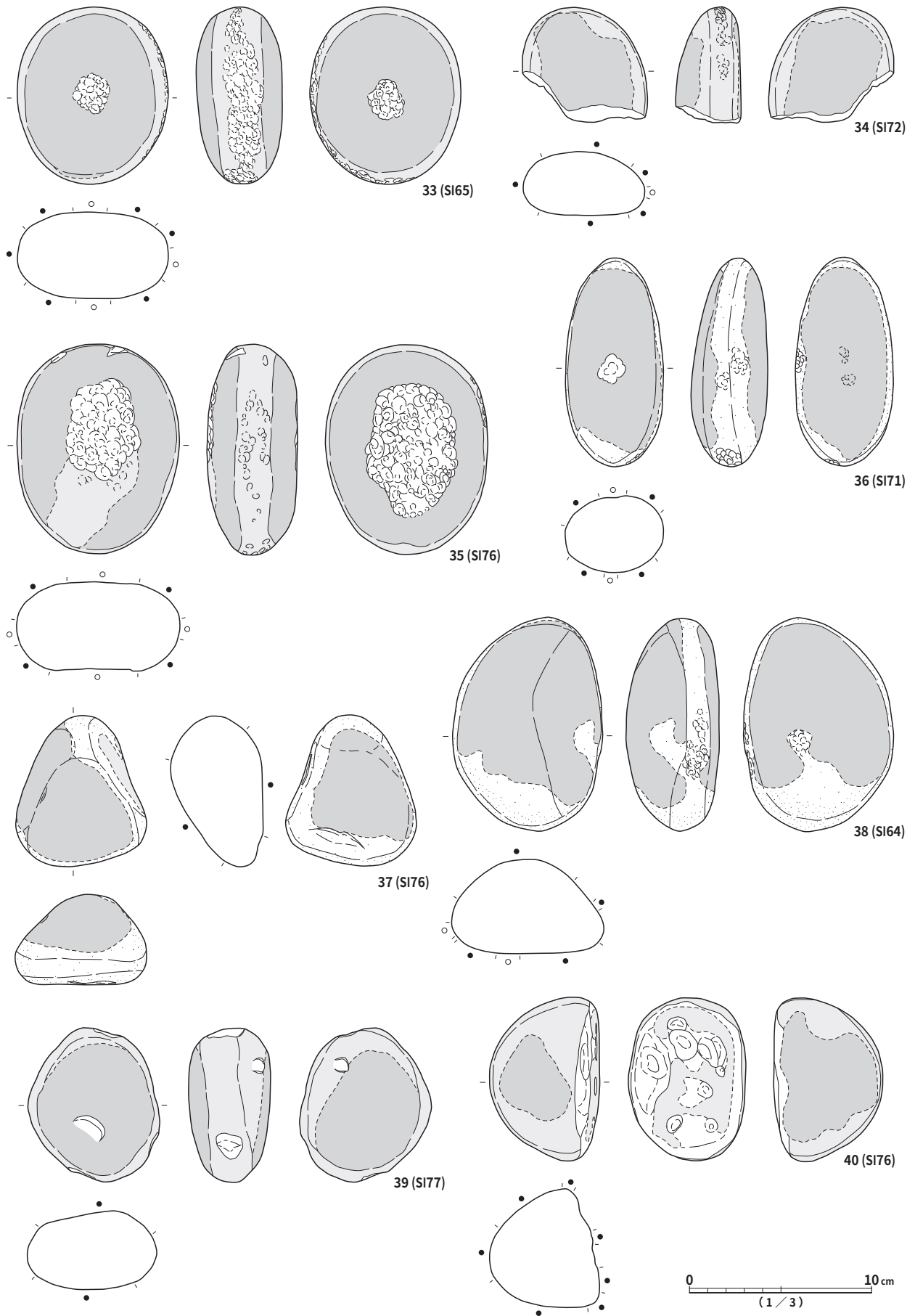


Fig.188 出土石器(4)

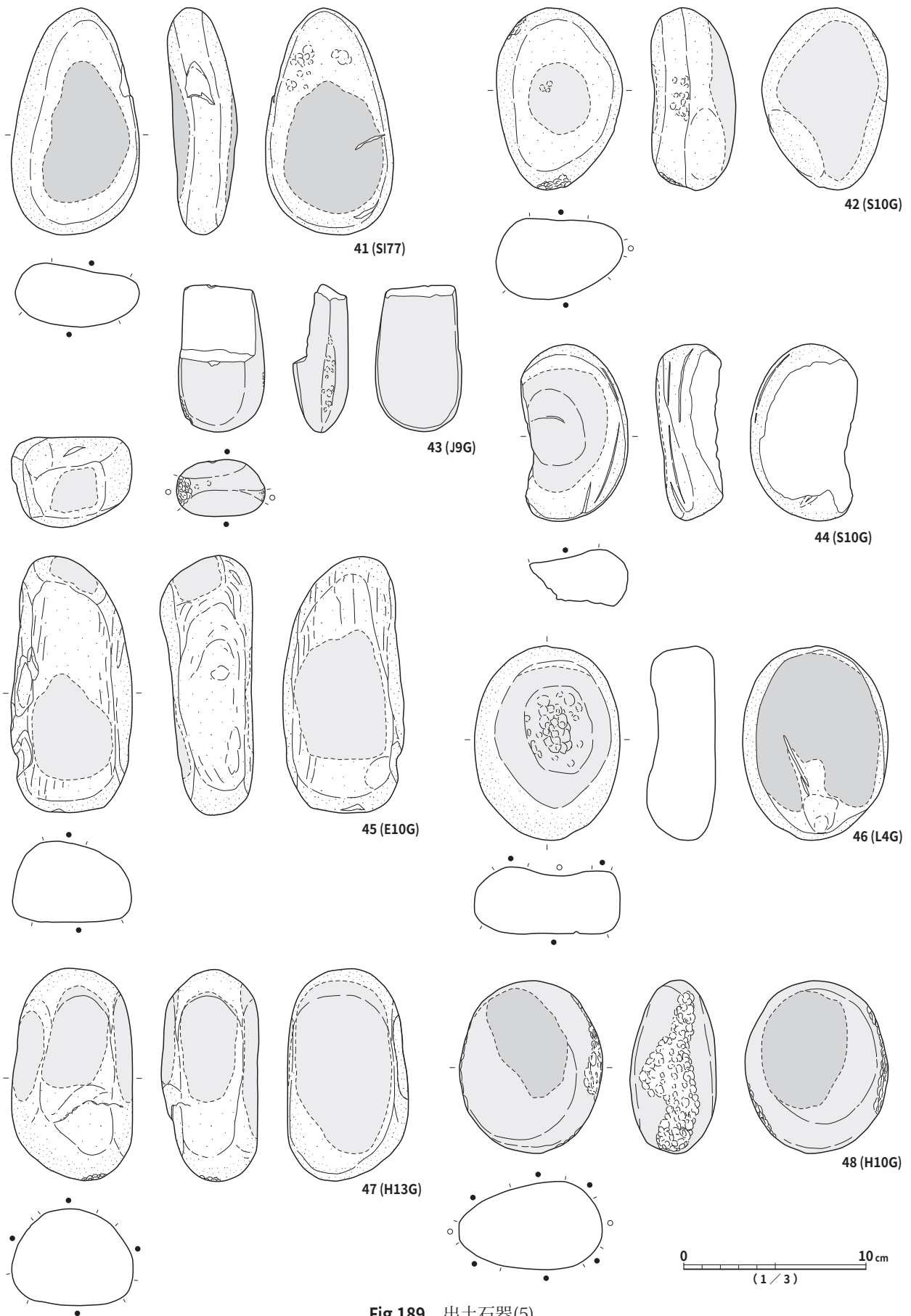


Fig.189 出土石器(5)

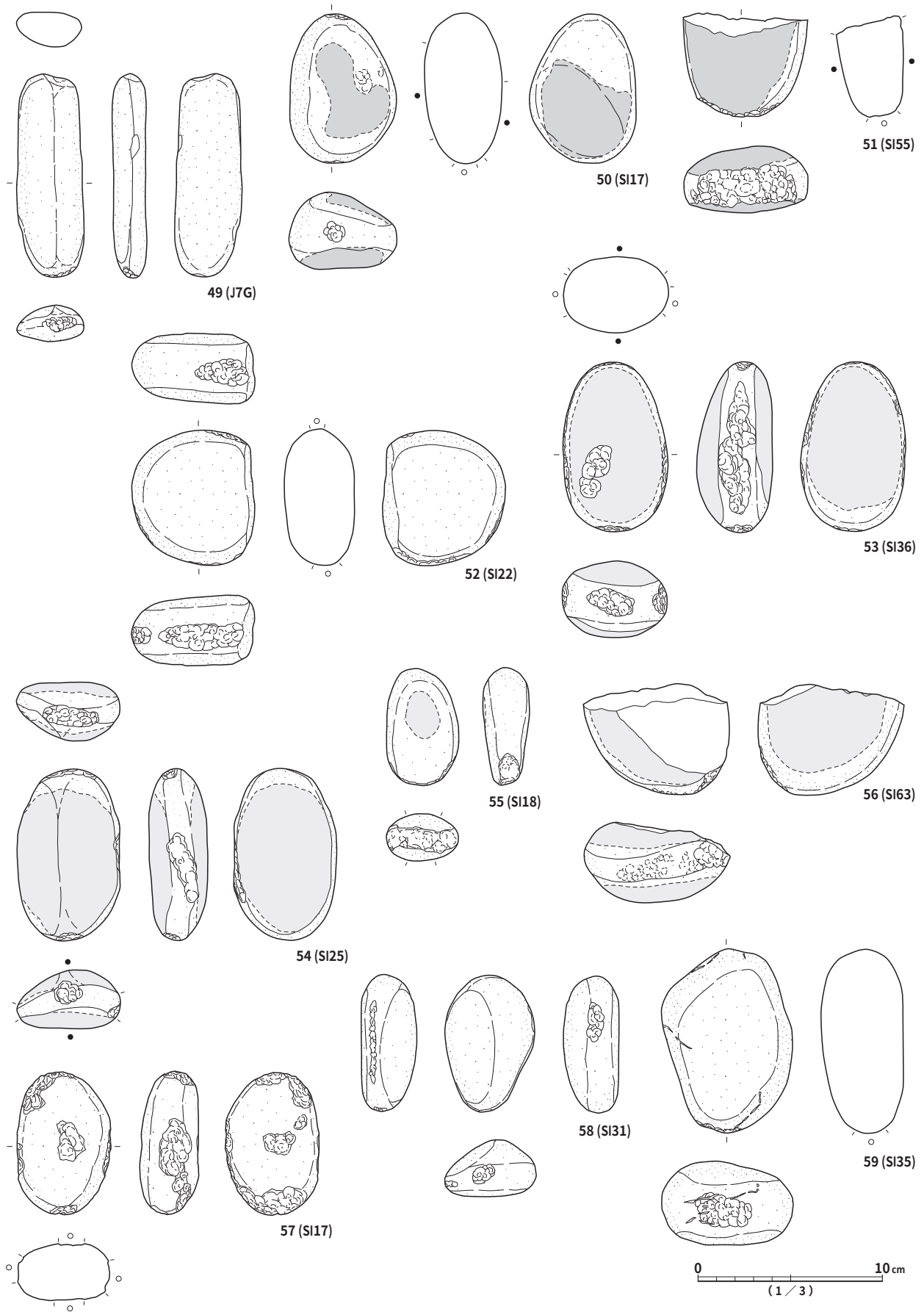


Fig.190 出土石器(6)

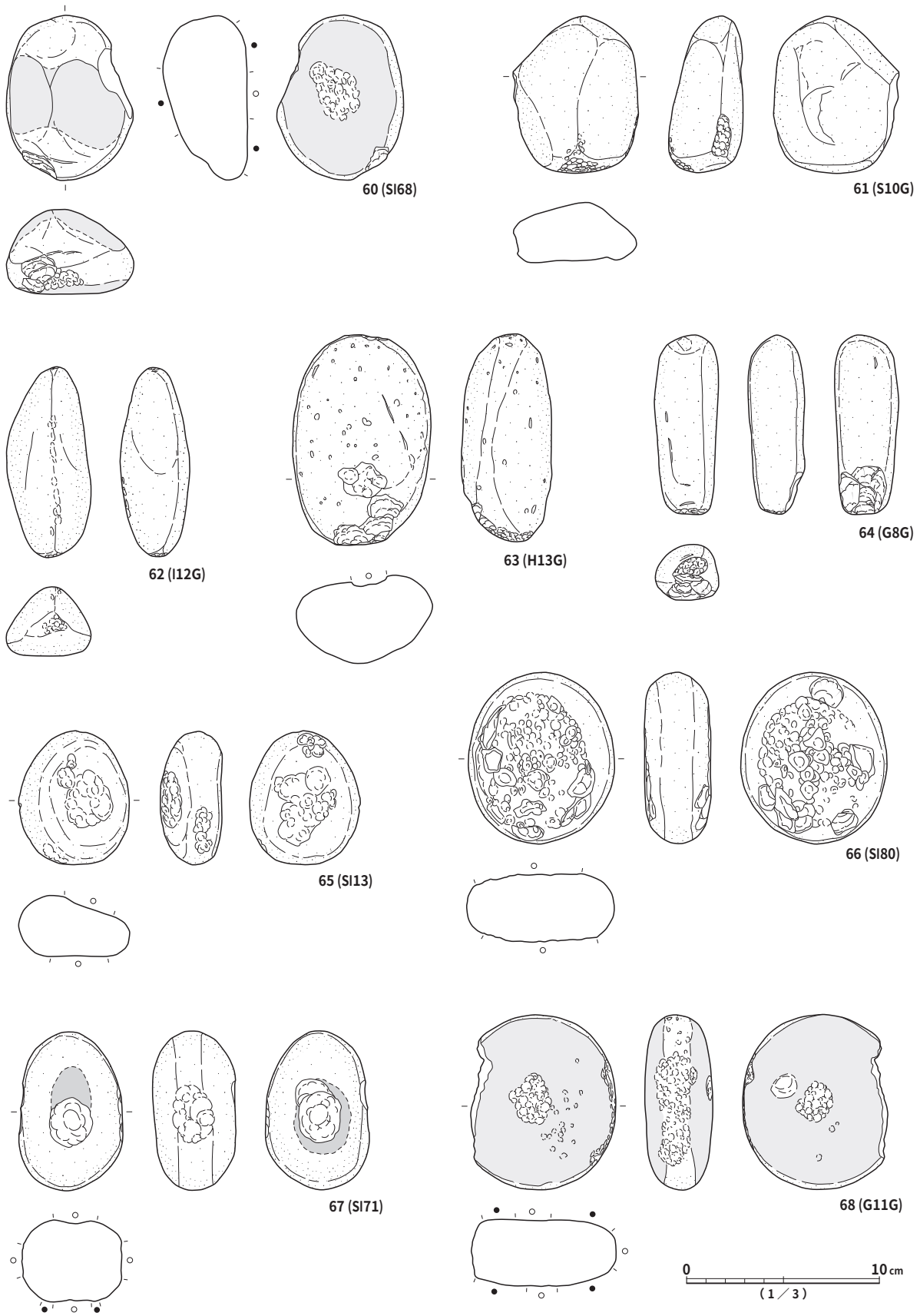


Fig.191 出土石器(7)

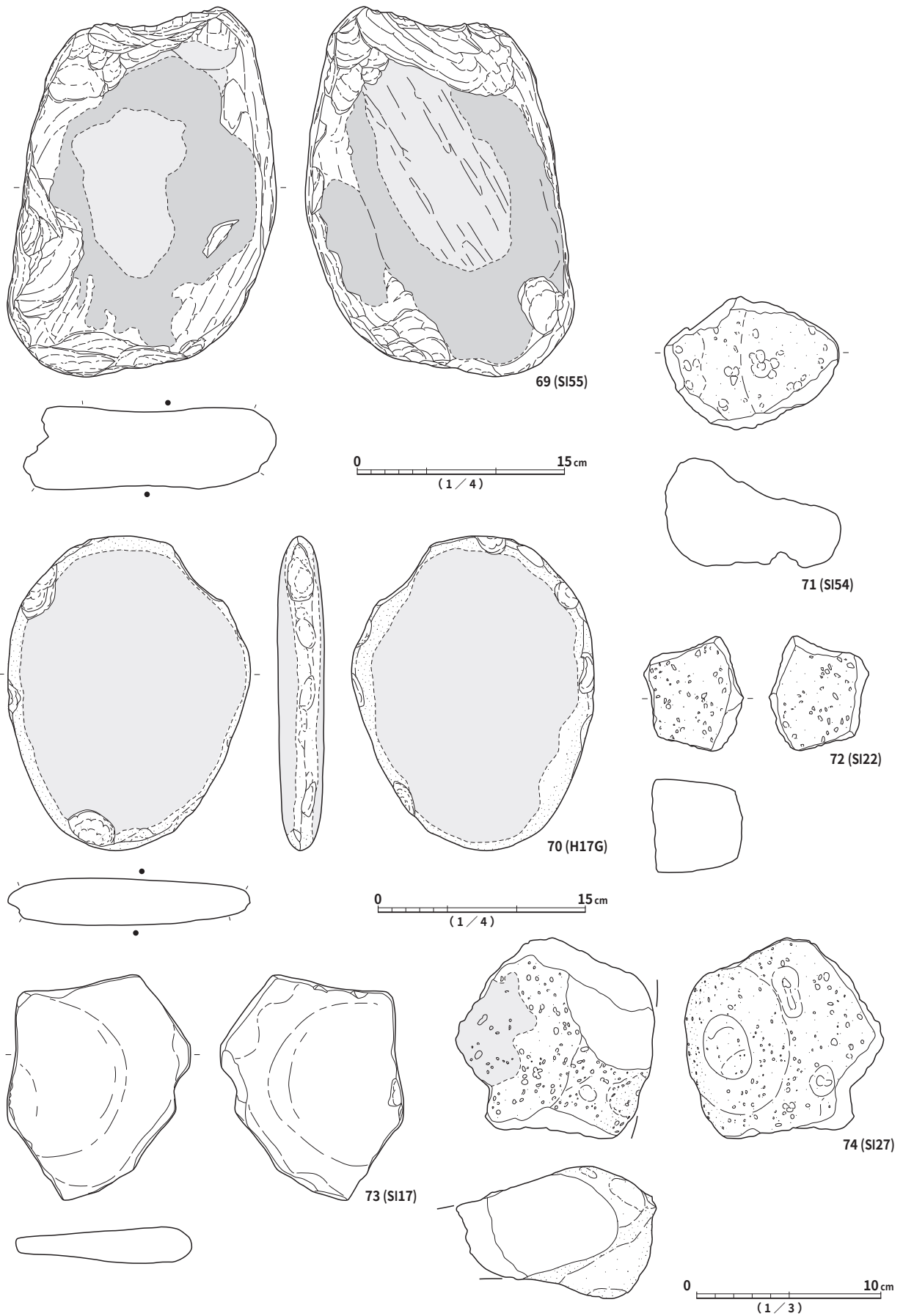


Fig.192 出土石器(8)

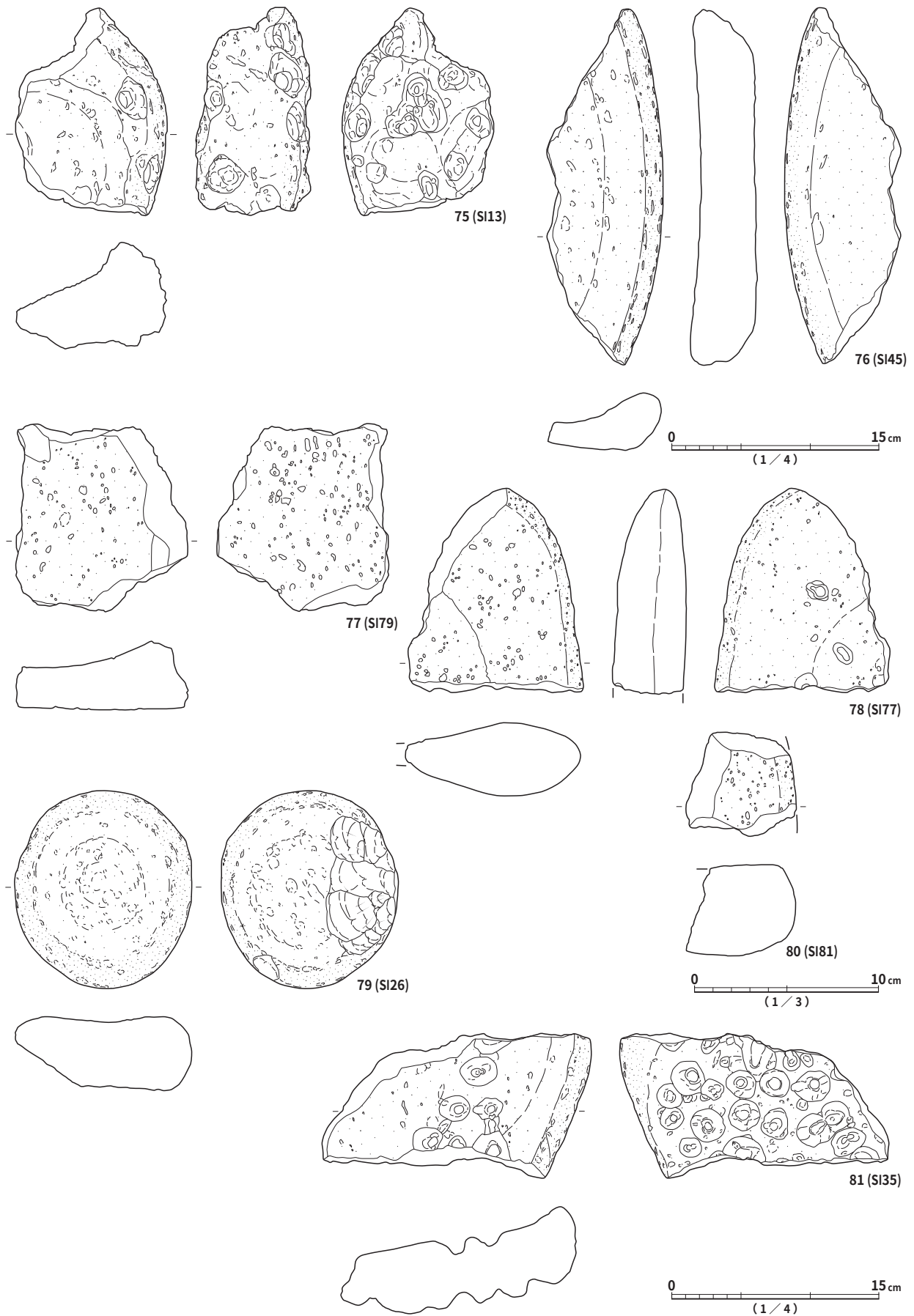


Fig.193 出土石器(9)

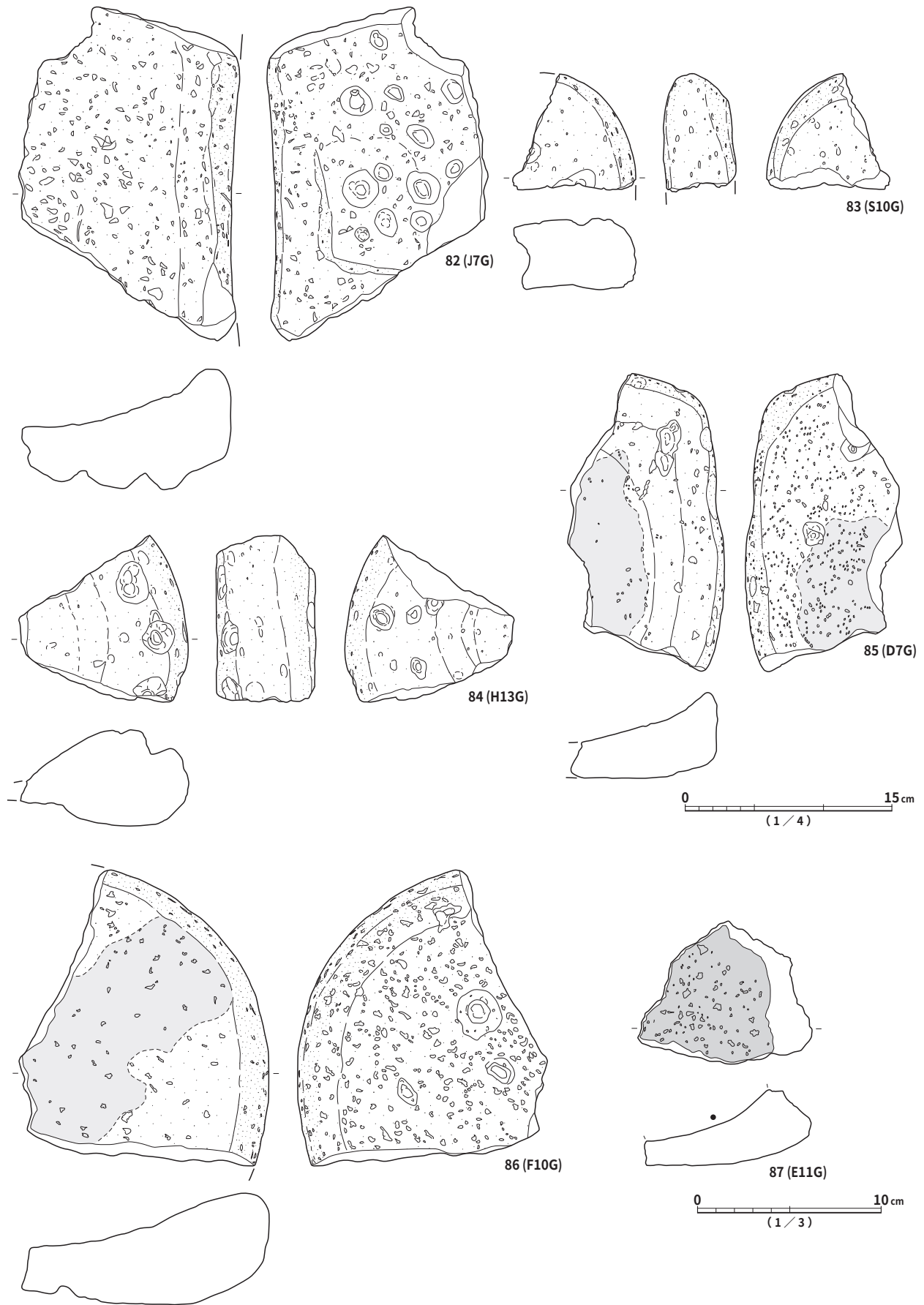


Fig.194 出土石器(10)

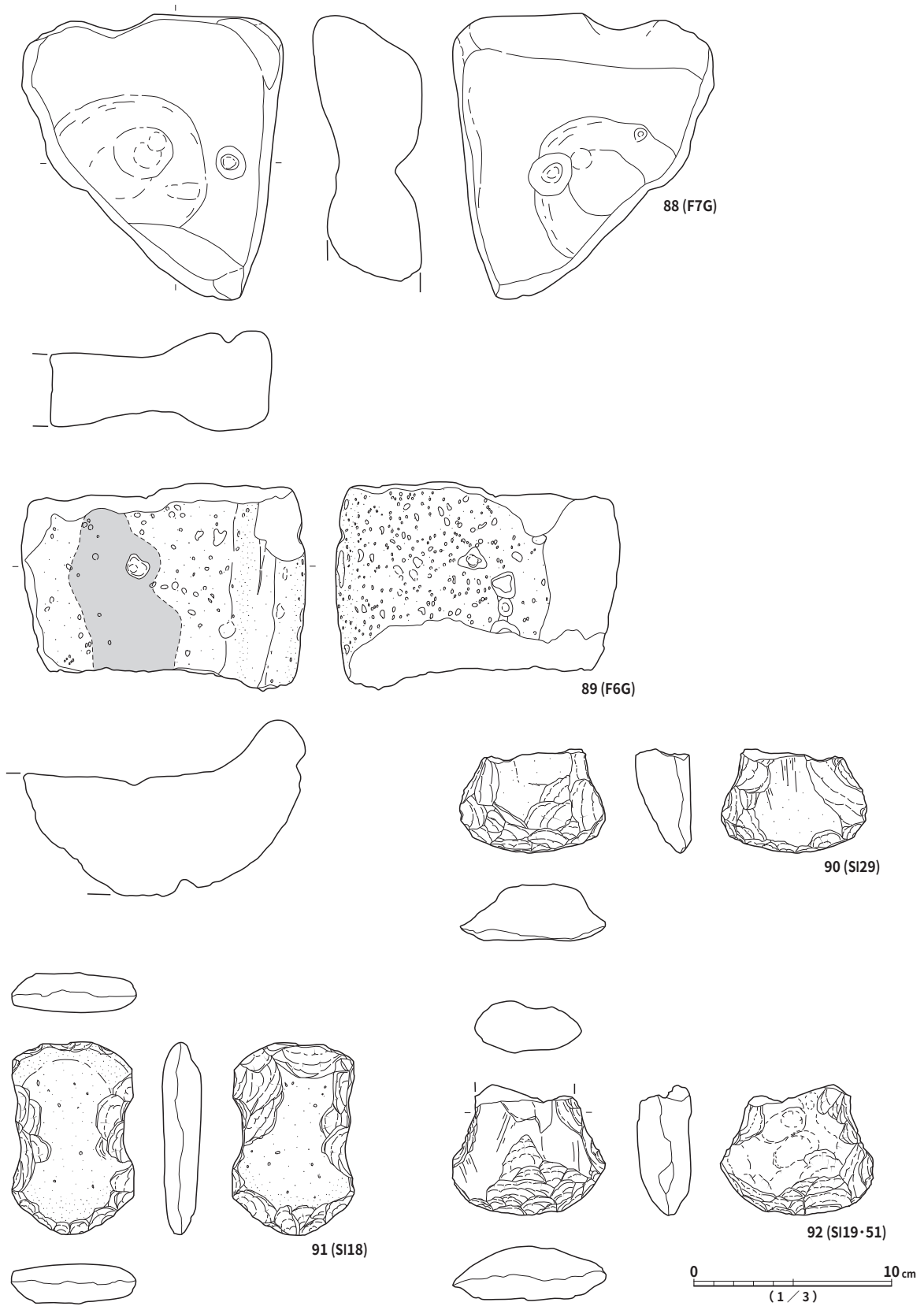


Fig.195 出土石器(11)

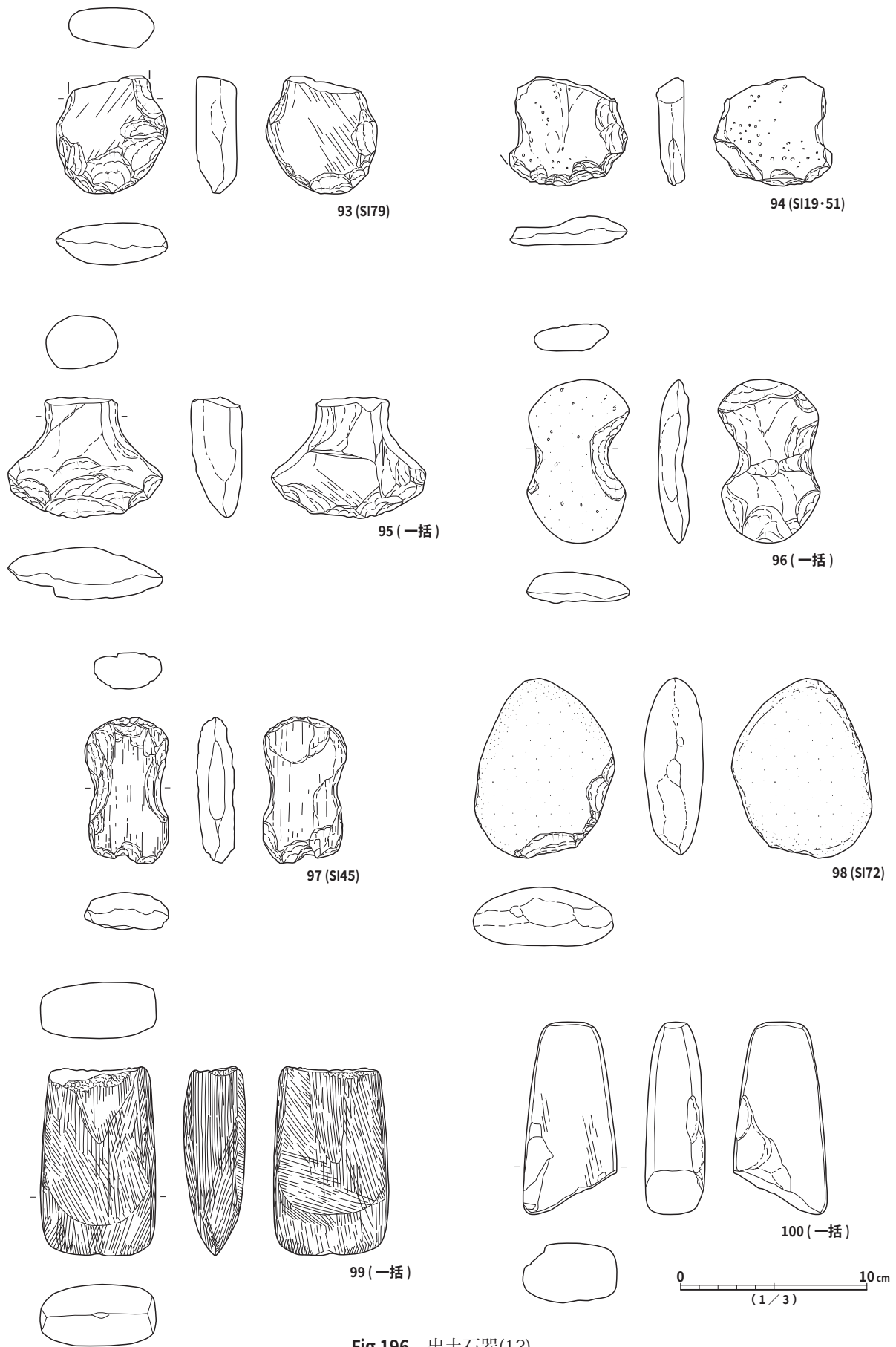


Fig.196 出土石器(12)

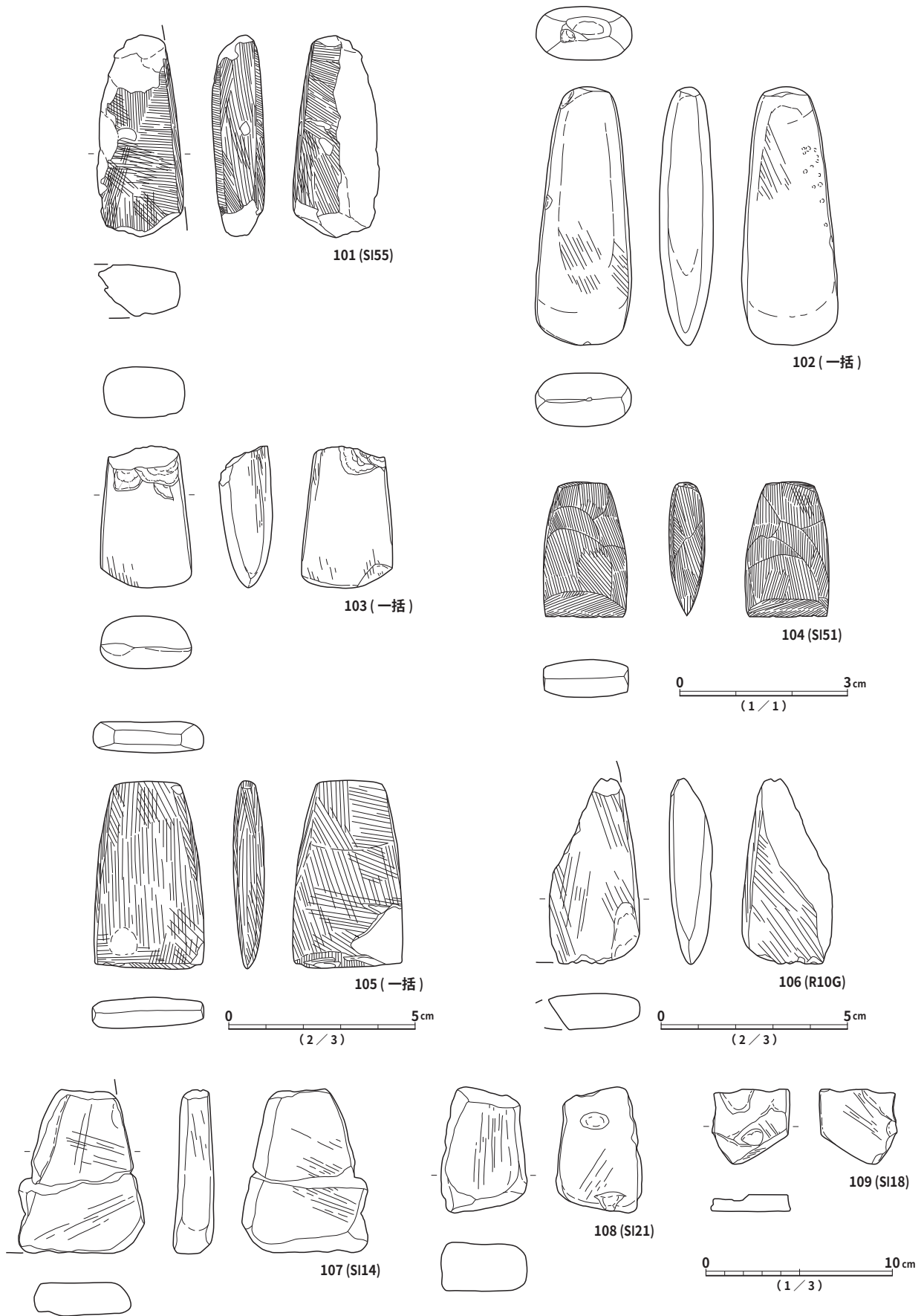


Fig.197 出土石器(13)

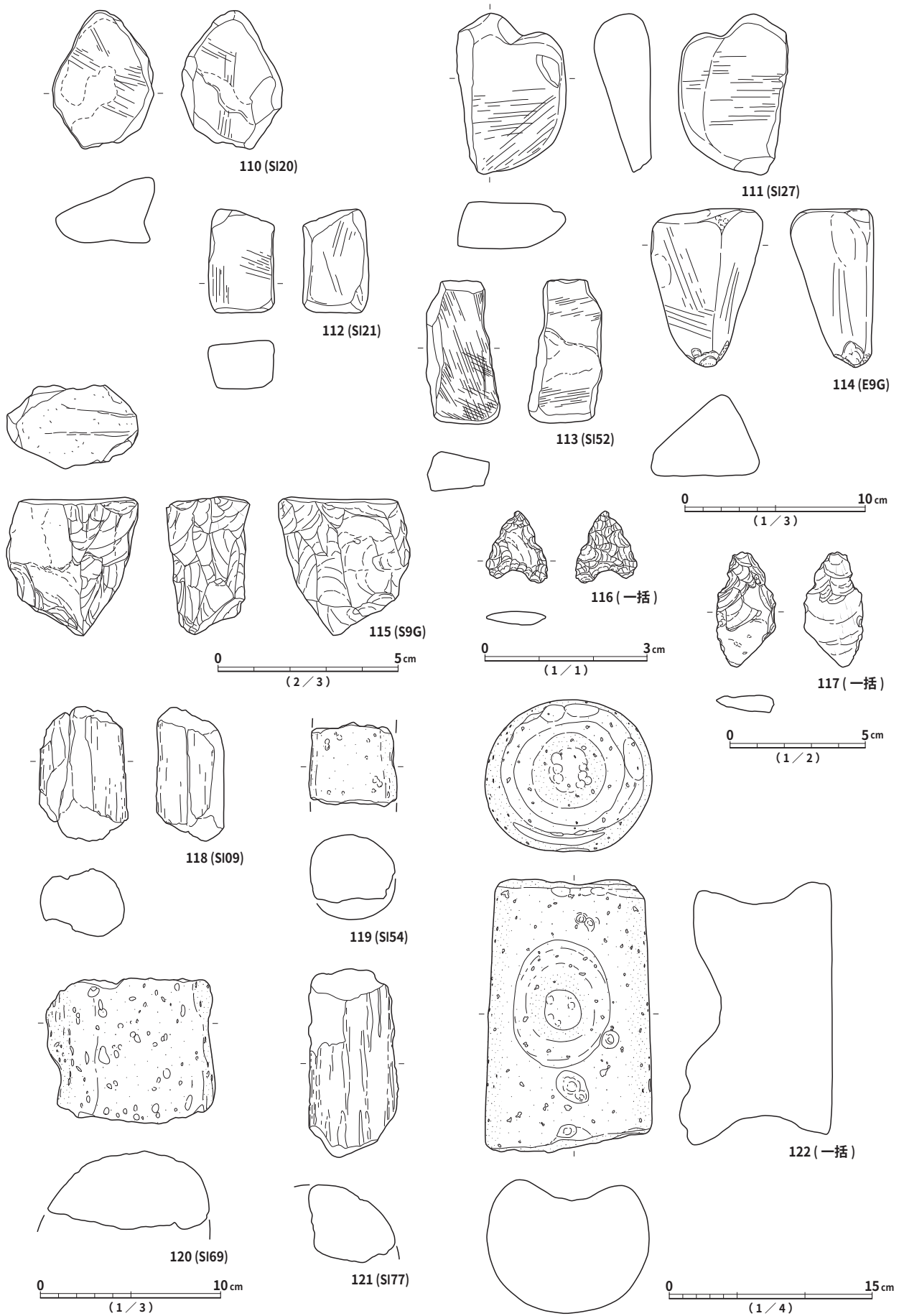


Fig.198 出土石器(14)

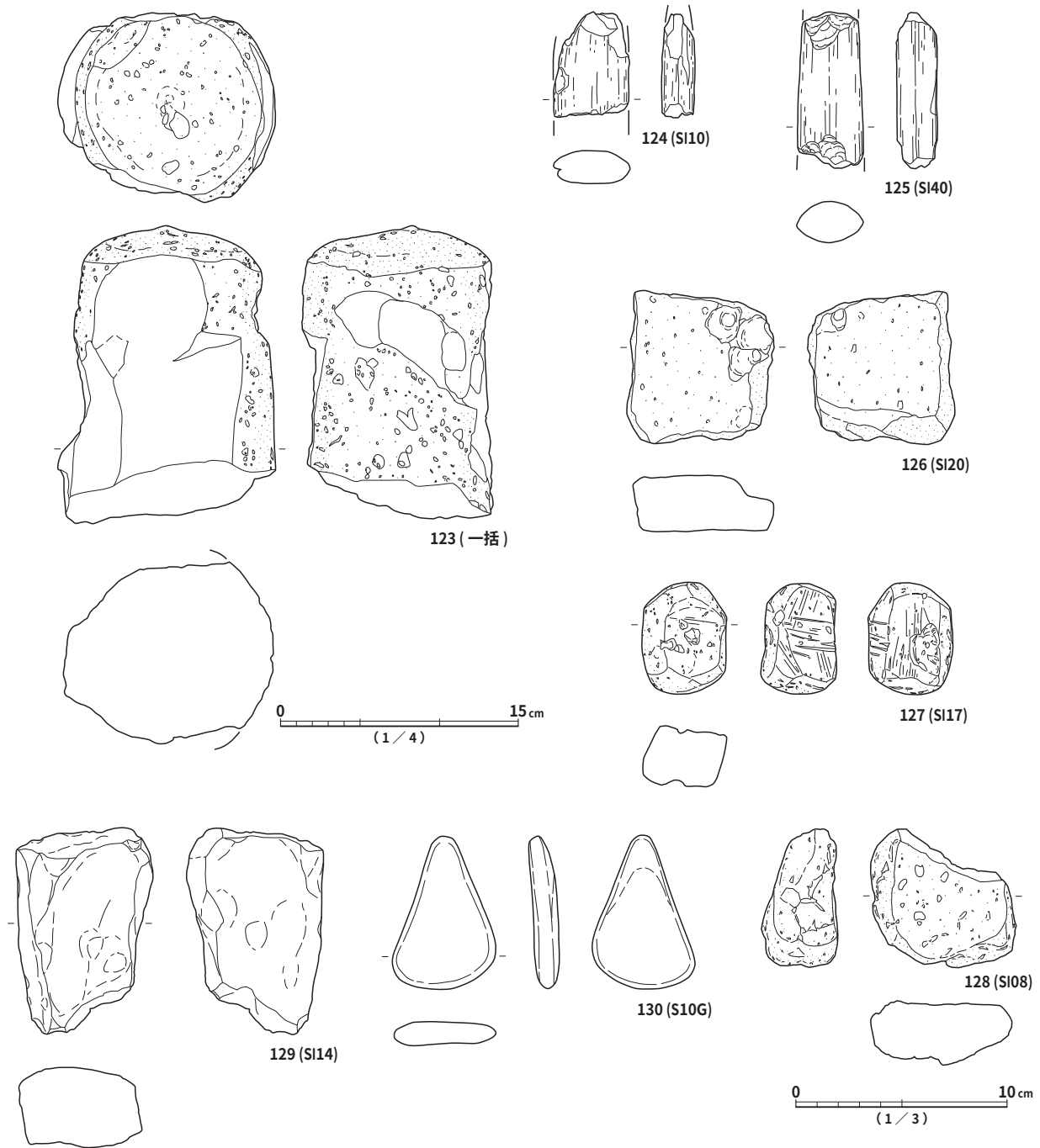


Fig.199 出土石器(15)

第5節 その他の遺物

ここでは、縄文土器以外の遺物を一括する。基本的に遺構外ないしは当該遺構に帰属しないものである。

弥生・古墳時代以降の竪穴出土の石器については、縄文時代の石器とは考えにくいもののみ竪穴単位で掲載し、磨石・敲石類など、その形状から時代時期の識別が基本的に難しいものは本節 Fig.185～199 に一括掲載した。

1～49は磨石類、50～64は敲石類、65～68は凹石、69・70は台石、71～89は石皿、90～96は打製石斧、97は石斧状石器、98は礫器、99～106は磨製石斧、107～114・129は砥石、115は石核、

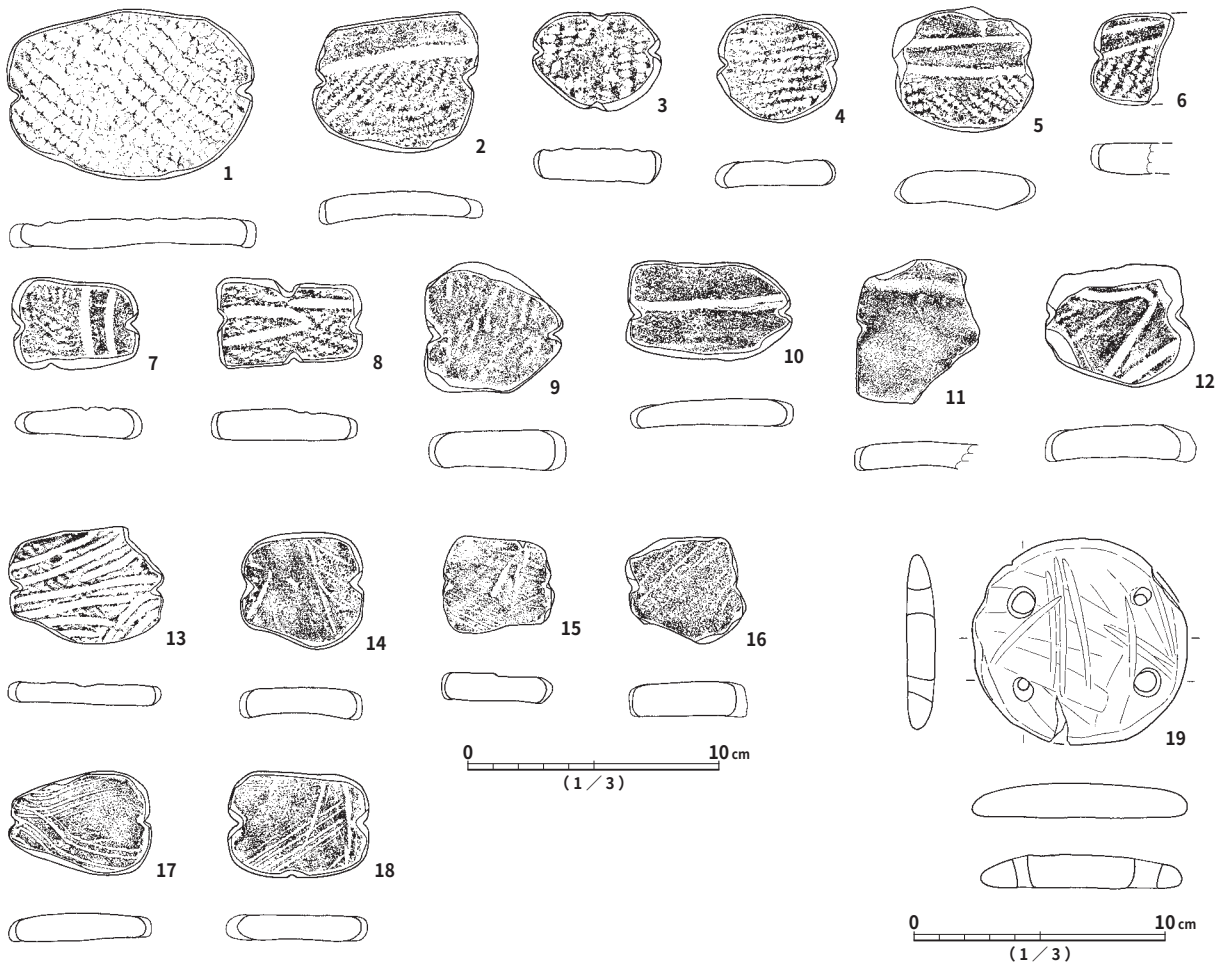


Fig.200 遺構外出土土製品

116は石鏃、117はUF、118～123は石棒、124・125石剣、126～128は軽石製品、130は篋状石器である。石質は、1・31・32・40・66が輝緑岩、2・24・35・36・42・49・51・62・67・68・70・91・92・122・129が輝石安山岩、3・38・99・100・102・103が緑色岩、4・23・43・64・69・106・130が頁岩、5・12・45・93～95が堇青石ホルンフェルス、6・7・11・29・37・47・57・79が火山礫凝灰岩、8・10・18～20・27・28・33・34・41・44・46・50・53・55・73・88・90・96・98・107～114が砂岩、9・13・15・17・25・26・48・54・56が石英斑岩、14・60・65が凝灰岩、16がはんれい岩、21が閃緑斑岩、22・63が流紋岩、30・71・72・74・75・77・78・80～87・89が多孔質輝石安山岩、39が砂質頁岩、52・59がチャート、58・115が珪質頁岩、61が赤色チャート、76・97・121・124・125が緑色片岩、101・104・105が蛇紋岩、116・117が黒曜石、118が黒雲母片岩、119・123・126が多孔質安山岩、120が多孔質玄武岩、127・128が軽石である。

Fig.200は土製品である。1～18は土器片錘、19は有孔の土製円盤である。いずれも、縄文時代の所産であろう。

Fig.201は、弥生土器、土師器である。1・2・11～29は宮ノ台式である。3・4・30は弥生時代終末期であり、30は大郭式の壺形土器と考える。特徴となる口唇部は遺存しないものの、複合部に縦微隆帯を貼り付ける。5～10は古墳時代終末期の土師器である。

Fig.202は、瓦、石製品、鉄器を一括した。

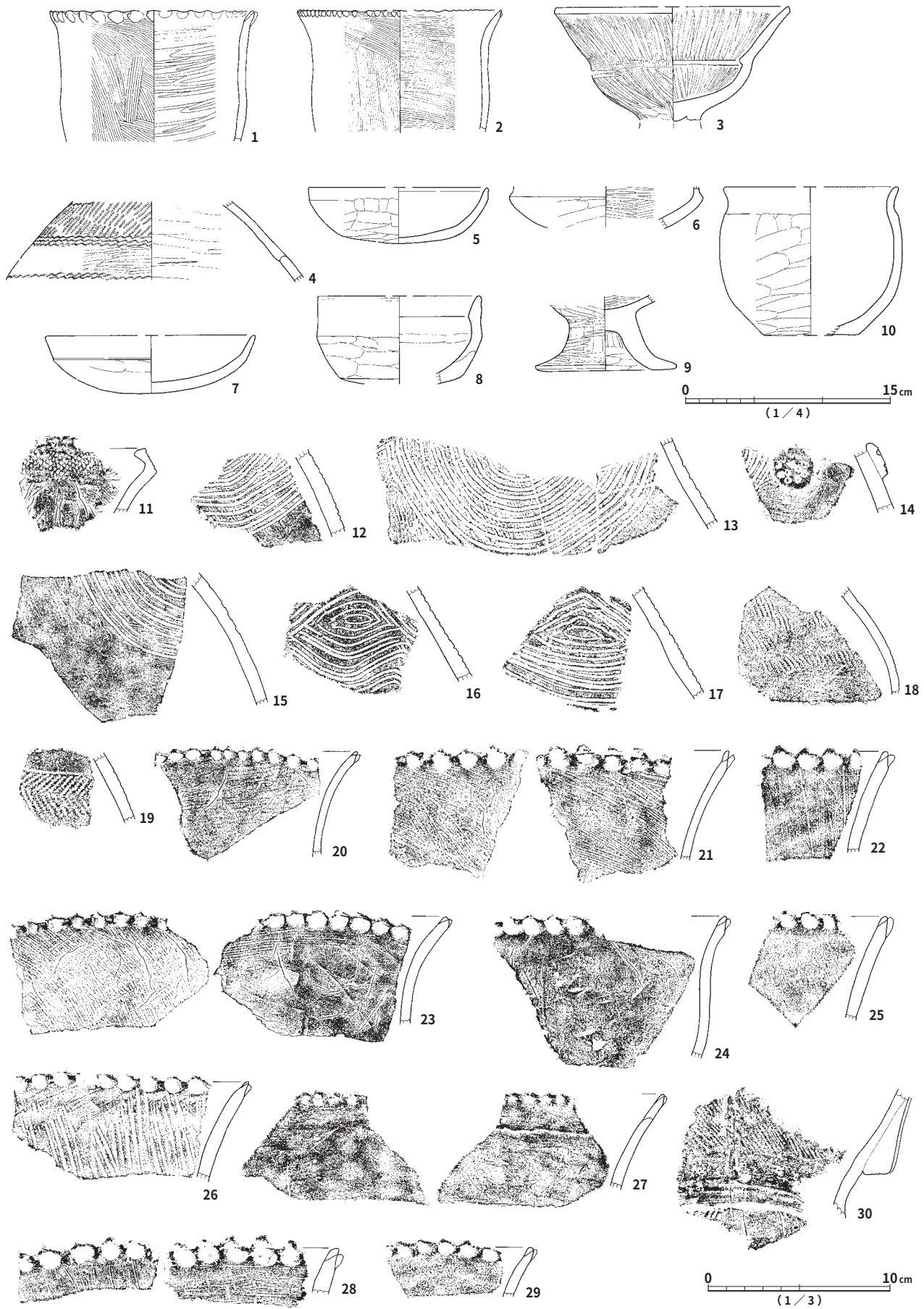


Fig.201 遺構外出土弥生土器・土師器

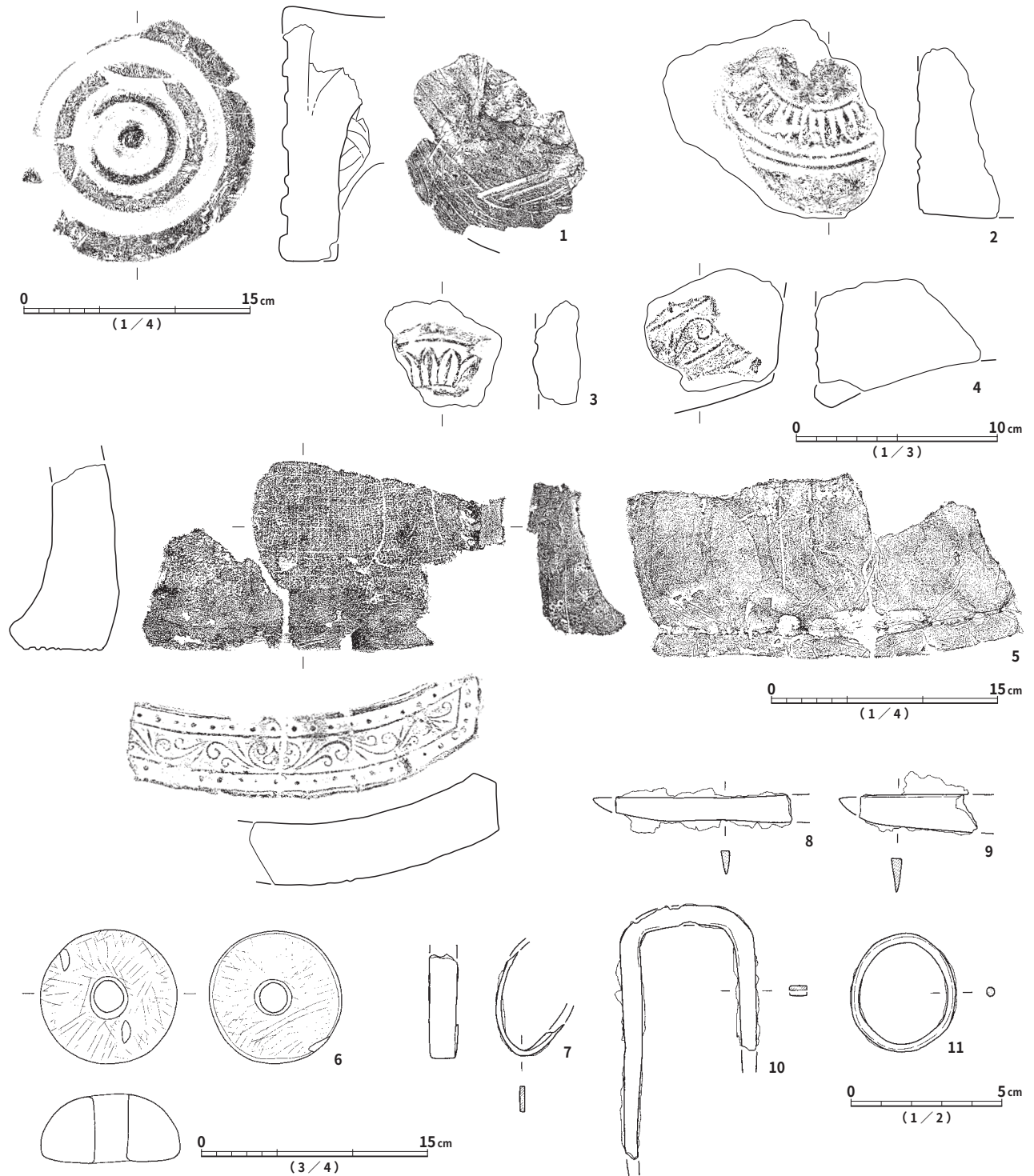


Fig.202 遺構外出土瓦類・石器類・金属器

1～3が軒丸瓦、4・5が軒平瓦、6が石製紡錘車、7が鉄製円環、8・9が鉄製刀子、10が鉤状鉄器、11が銅環である。

第3章 荒久遺跡A地点

荒久遺跡A地点の検出遺構数は、竪穴建物34棟（建て替えを含め35棟）、掘立柱建物4棟（建て替えを含め5棟以上）、溝5条、貝ブロックないし貝層をとまう土坑1基である。竪穴建物はすべて奈良・平安時代の所産であり、掘立柱建物についてもその可能性が高い。溝は、僧寺寺院地外郭溝2条、他は時期不明。貝土坑SX01については、記録、遺物が確認できなかったため、全体図上のみ掲載する。なお、竪穴建物については、遺物のみ存在し、遺構が特定できないものが2棟（SI26・27）あり、これを含めると36棟になる。遺物のみの掲載は、他に、SI06・12、SI06・13、不明掘立柱建物がある。SI06・12（調査時番号「5・7号住居址」）、SI06・13（調査時番号「5・8号住居址」）は、ともに重複関係もなく、一括出土となる理由が判然としない。遺構番号の混乱による可能性もある。SI06の項で掲載した。

今回、遺構番号については、重複関係をもつもの、重複関係がなくても、旧遺構番号が同一で、遺物が区分できないものについては、「A・B・C」の呼称とし、建て替えと考えるものについては「a・b」で区別した。

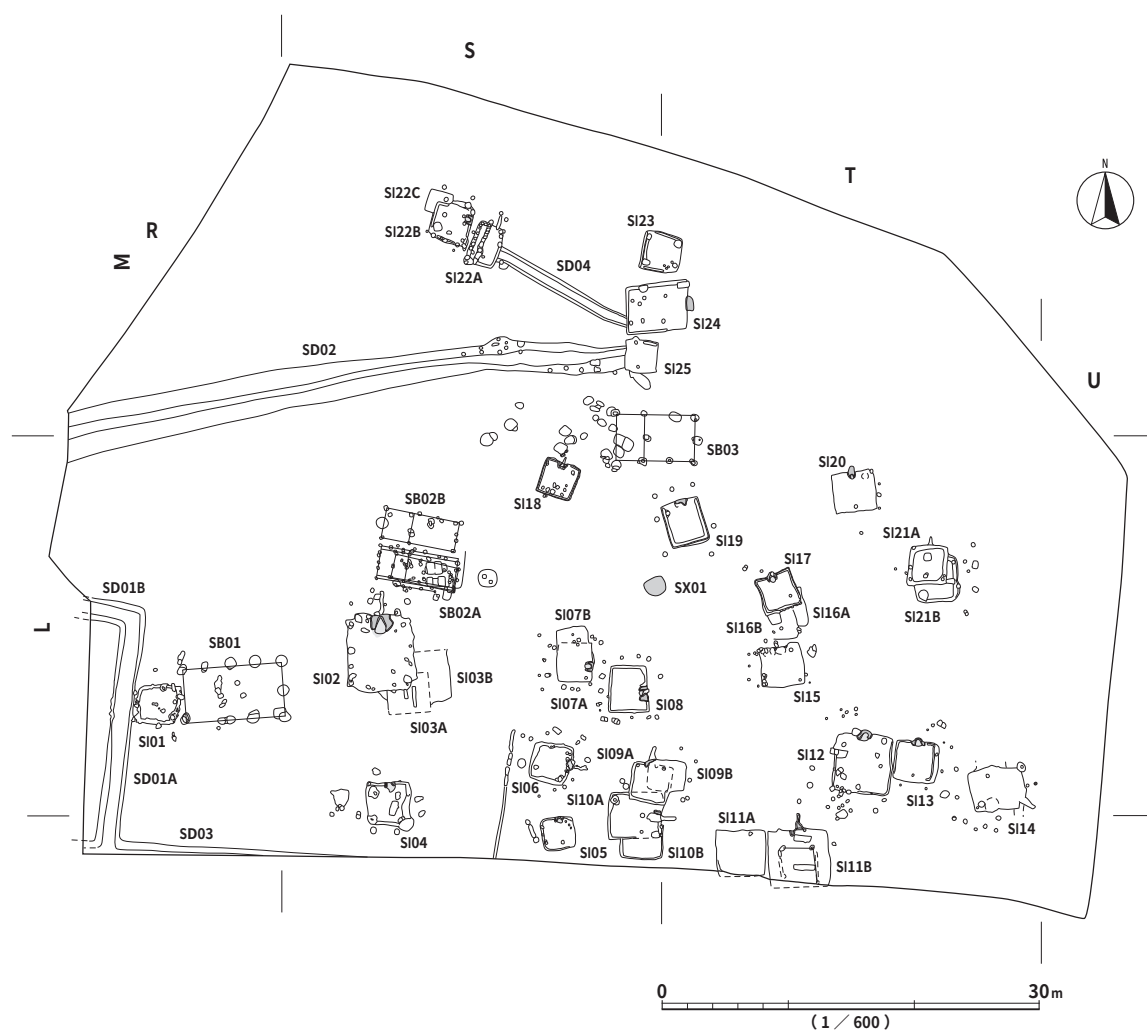


Fig.203 荒久遺跡A地点遺構配置図

第1節 竪穴建物

SI01 (Fig.204、PL.35・45・143・151・165)

SI01は、LR-77区他に所在する。本竪穴は、調査原図が存在する。平面図にレベルの記載はないが、断面図があり、それをそのまま掲載した。竪穴西側で僧寺外郭溝SD01と接し、東側でSB01と重複する。新旧関係は不明。

竪穴平面形態はややいびつな方形を呈し、竪穴全体規模は3.22m(主軸)×3.46m、確認面掘形面積は推定で10.00m²、確認面からの深さは最大で0.15mを測るが、ほとんど掘り込みはない。主軸方位はN-4.0°-Eである。カマドは北壁中央にある。検出は燃焼面のみであった。カマド前面に灰・粘土が分布する。また、竪穴中央部に床面が焼けた部分がある。主柱穴など、Pitに規則的な配列は認められない。平面図にレベルの記載がないため、深さは不明。断面図に沿うP4が0.14mを測る。壁溝はほぼ全周する。床面は凹凸が激しく、壁側に向かってやや深くなっており、掘形面のようにも見える。

出土遺物は、総重量5,912.3gであり、このうち土器は4,871.7g、瓦は1,018.0gであった。実測可能遺物は、1が土師器杯、2～5が土師器高台付杯、6が灰釉陶器、7が非ロクロの土師器杯である。土器以外では8が不明棒状鉄器である。遺物出土状況は、4が壁溝内から出土している他は特定できない。現場写真によると、いずれも床面からやや浮いた位置にある。

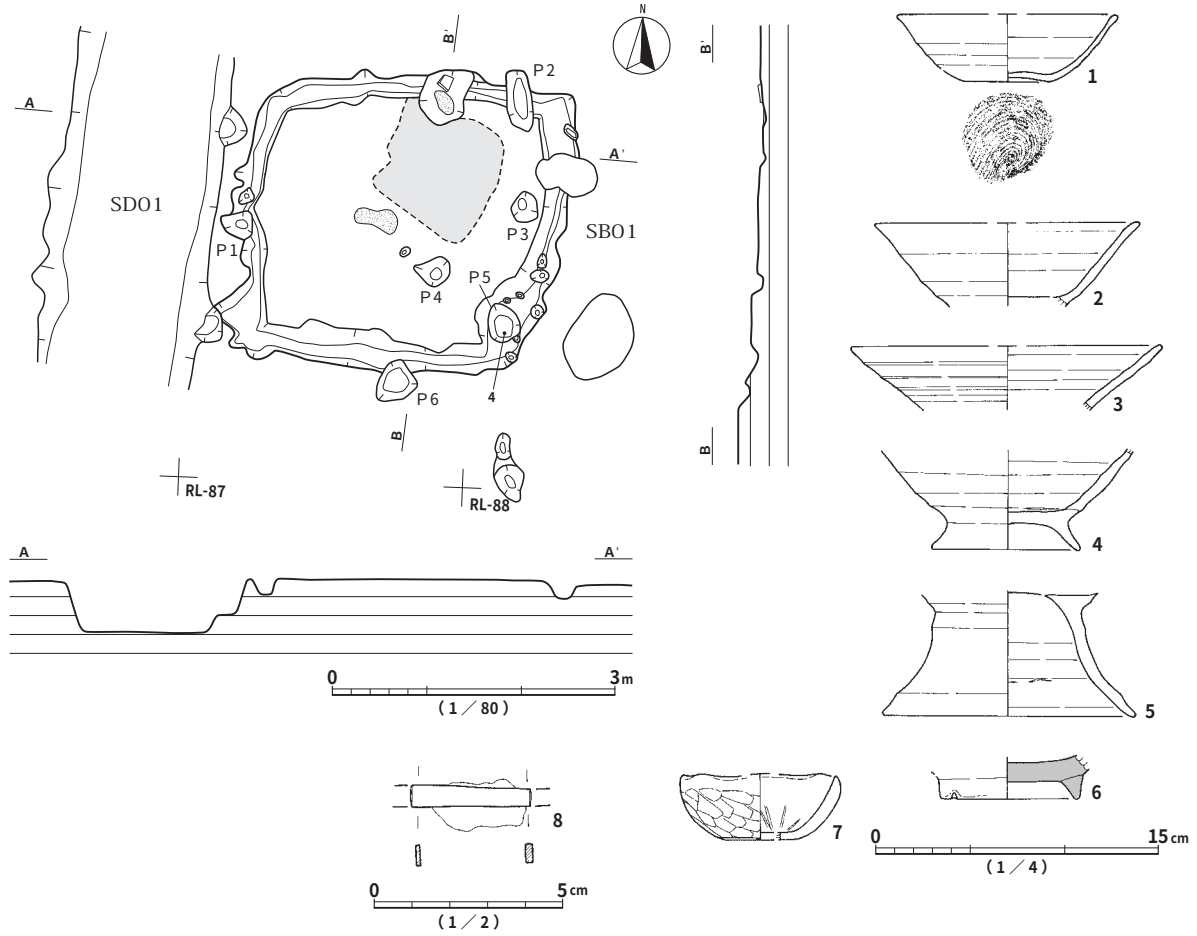
SI02 (Fig.205～208、PL.35・36・143・151・159・160・165)

SI02は、LS-53区他に所在する。本竪穴は、調査原図が存在する。レベルは、一線状十字に測点があり、これをもとに断面図が作成されている。それ以外、Pitなどの深さは不明。竪穴南東側でSI03と重複する。新旧関係は、断面図などの記録類がないため、改めて検討することはできない。出土遺物から見ると、SI03に先行するものを含むが、全体として混在する。SI03AのカマドをSI02が破壊したと考えれば、SI03Aに対してSI02が新しい。床面高は、測点がやや不確実であるが、本竪穴が0.50mほど深い。

竪穴平面形態は長方形を呈し、竪穴全体規模は6.01m(主軸)×5.37m、カマド煙道部を含む主軸長は7.85m、確認面掘形面積は30.40m²、確認面からの深さは0.42～0.60m程度を測る。主軸方位はN-1.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。左右両袖と燃焼部、煙道部が検出されている。Pitの配列に明確な規則性は認められないが、主に壁際付近で検出している。ただし、平面図にレベルの記載がないため、深さは不明。その他、壁溝などは検出していない。

出土遺物は、総重量19,897.2gであり、このうち土器は12,960.4g、瓦は6,462.0gであった。実測可能遺物は、1～11・13～15が土師器杯、12・16が土師器碗、17が土師器小皿、18・19がカワラケ、20～22が土師器高台付杯、23～27が土師器甕、28が灰釉碗、29が灰釉手付小瓶、30が灰釉壺、31が灰釉平瓶、32・35・36が須恵器甕、33が須恵器高杯、34が須恵器甗である。土器以外では37が丸瓦、38が平瓦、39が鉄製鎌、40～43が不明鉄器、44が鉄製刀子、45が石皿状、46が金床石、47～48・50が磨石、49が不明石器である。遺物出土位置は、29・30がカマド右袖外から出土している。調査写真によると、その脇袖上から完形の杯が出土しているが、所在が明らかではない。また、49が竪穴中央南西隅部側から出土しているが、一部破片がたりない。注記では、6・8・11・14・21・32・35が「柱穴」とあるが、どのPitからの出土かは不明。

SI01



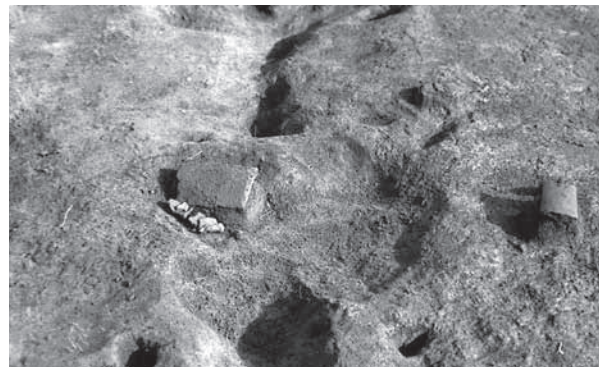
ph.1 全景



ph.2 調査状況



ph.3 調査状況



ph.4 カマド

Fig.204 SI01 遺構遺物・調査状況

SI03A・B (Fig.205・208・209、PL.36・144・151・152・159・165)

SI03は、LS-64区他に所在する。本竪穴は、SI02の平面図に範囲の一部の記録があるだけで、詳細は不明。調査時の写真から、SI03A・Bとしたが、確実とは言い難い。SI02との新旧関係は、断面図など記録類から検討することはできない。出土遺物から見ると、SI03に先行するものを含むが、全体として混在する。SI03AのカマドをSI02が破壊したと考えれば、SI03Aに対してSI02が新しい。床面高は、SI02が0.50mほど深い。SI03Bの新旧関係は不明。

竪穴全体規模は、SI03Aが3.15m(主軸)×3.35m、SI03Bが東西で4.10mを測る。SI03Aの確認面掘形面積は推定で10.40㎡、確認面からの深さは0.11m前後を測る。主軸方位は、A・BともN-4.0°-Wである。カマドは検出されていない。柱穴など他の屋内施設も確認されていない。SI03A内の長方形土坑は、近年の芋穴と推定する。

出土遺物は、総重量14,424.2gであり、このうち土器は13,191.3g、瓦は701.0gであった。出土状況についての記録がないため、A・Bの区別はできない。実測可能遺物は、1~4・6・7が土師器杯、5・13~19が須恵器杯、8が土師器高台付椀、9が土師器椀、10・11が土師器蓋、12が須恵器蓋、20が須恵器盤、21・22が須恵器壺、23~25が須恵器甑、34が土師器甑、26~33・35が土師器甕、36が土師質の内耳鍋、37が円面硯、土器以外では38が砥石、39が不明鉄器、40が鉄製刀子である。

SI04 (Fig.210・211、PL.36・144・149・152・159・166)

SI04は、LS-93区他に所在する。本竪穴は、調査原図が存在する。レベルは、一線上十字に測点があり、これをもとに断面図が作成されている。それ以外、Pitなどの深さは不明。本竪穴は、単独で存在し、他遺構との重複はない。竪穴中央部の方形土坑は攪乱坑である。南東隅部の円形土坑も、本竪穴にともなうものとは考えにくい。

竪穴平面形態はややいびつな方形を呈し、竪穴全体規模は3.54m(主軸)×3.60m、確認面掘形面積は11.60㎡、確認面からの深さは0.08~0.16m程度を測る。主軸方位はN-2.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。左右両袖と燃焼部が検出されている。カマド煙道部は確認されていない。

P1~4の配置は主柱穴状であるが、とくにP4は柱穴として不確実である。深さはすべて不明。壁溝は西辺部をのぞき確認できるが、調査写真によると、壁溝というよりは竪穴掘形に見える。

出土遺物は、総重量12,991.2gであり、このうち土器は8,234.4g、瓦は3,786.0gであった。実測可能遺物は、1~12・23・24が土師器杯、13が須恵器杯、14~16が土師器甕、17・19・22が須恵器甕、18が須恵器鉢、20・21が須恵器甑である。1の体部外面に「加」、8の体部外面に「毛」の墨書がある。24も「加」の可能性があるが、23は判読不明。土器以外では25が砥石、26が棒状鉄器、27・28が不明鉄器である。調査図面や調査写真に見えるカマド内の瓦は、所在が明らかではない。なお、16・20は北西隅竪穴外から出土している。一応ここで掲載しておく。他に、ほぼ完形の杯が調査写真にあるが、現物が確認できない(PL.36)。

SI05 (PL.37)

SI05は、KS-08区他に所在する。本竪穴は、図面が存在しないので、挿図平面図は全体図と斜め全景写真から描いた。本竪穴の調査時番号は「H竪穴」であり、一連のNo.が振られていない。理由は不明であるが、遺物も全く存在しない。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はやや隅の丸い方形を呈し、竪穴全体規模は2.60m(主軸)×2.70m、確認面掘形面

SI02・03

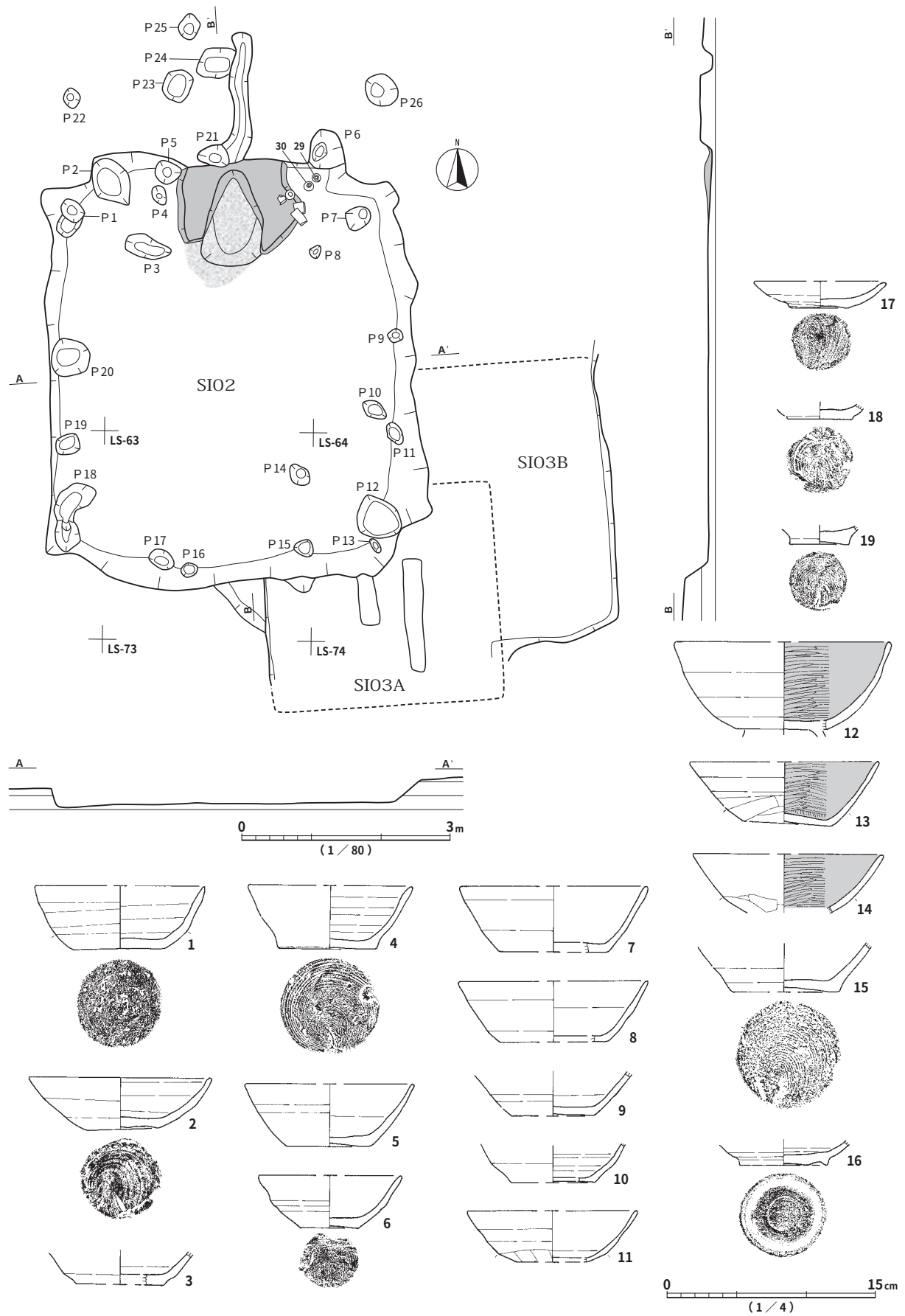
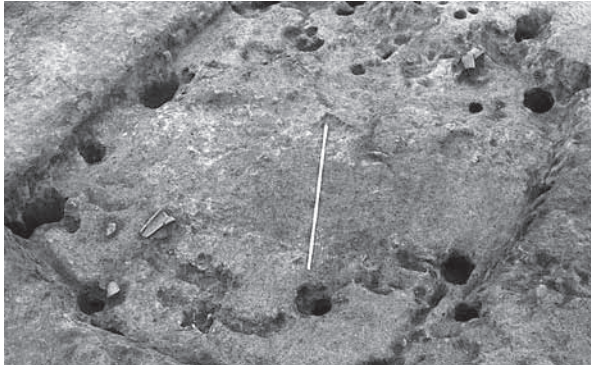


Fig.205 SI02(1) 遺構遺物、SI03(1) 遺構



ph.1 全景



ph.2 出土状況 37

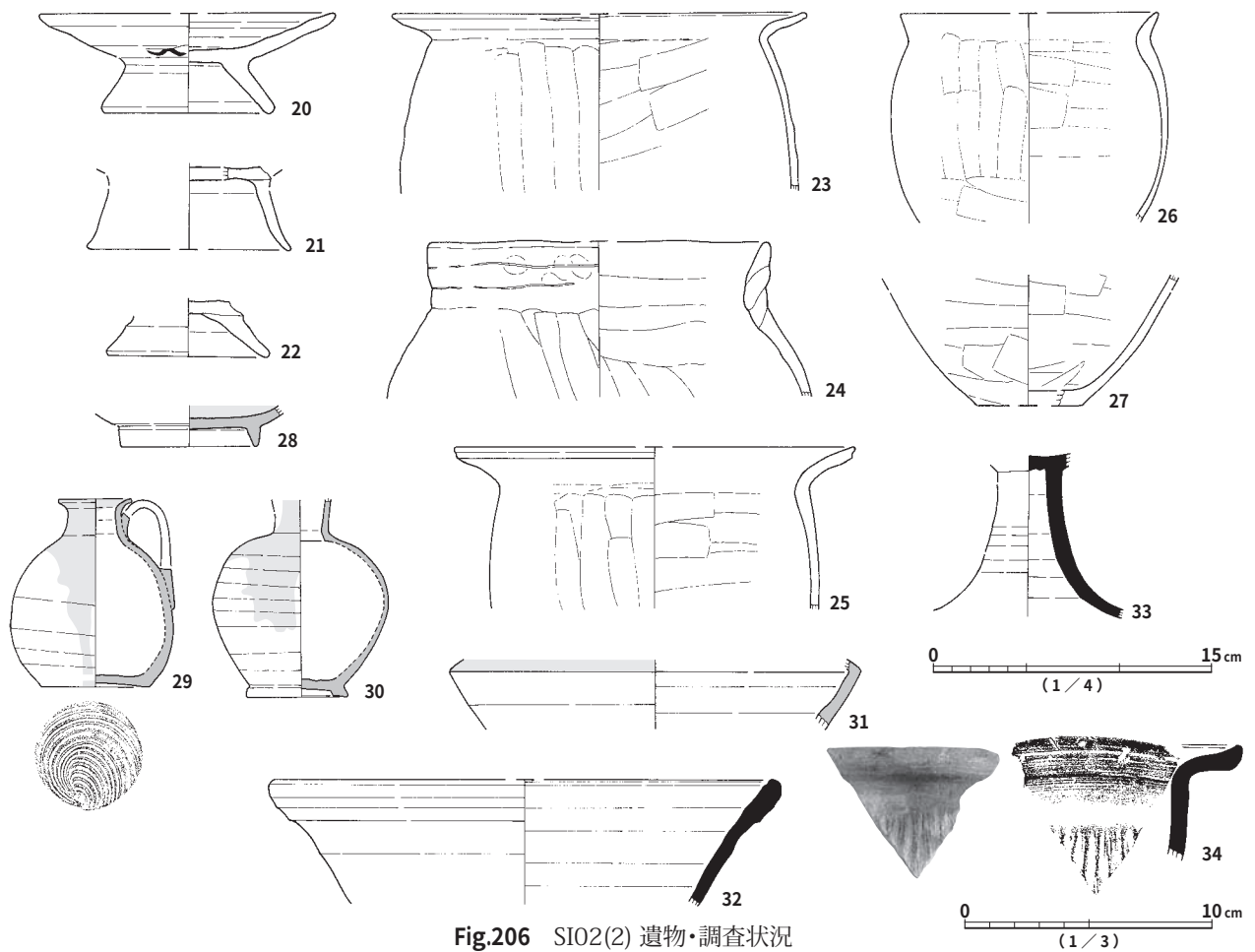


ph.3 出土状況 29・30



ph.4 出土状況 29・30

SI02



SI02

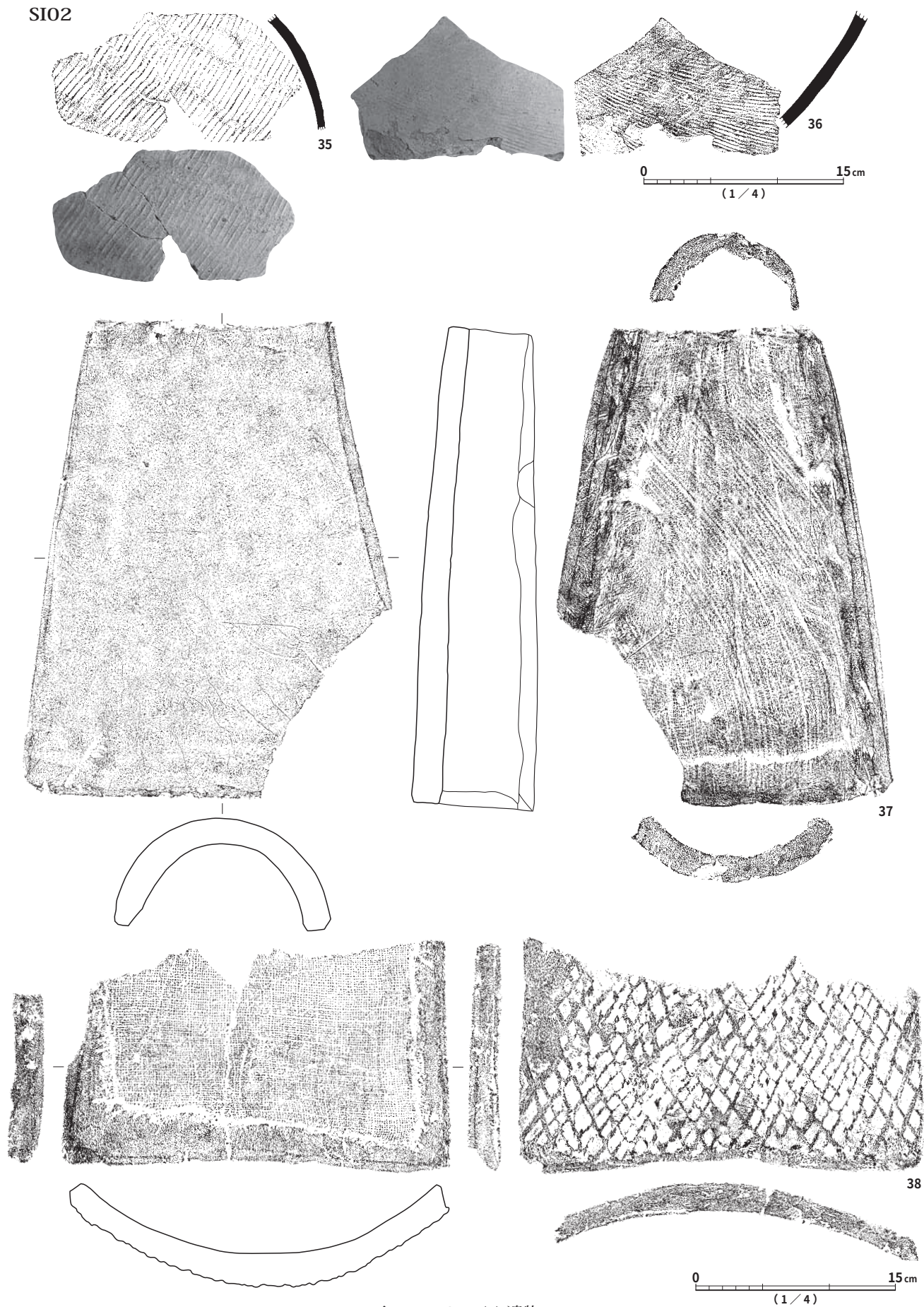
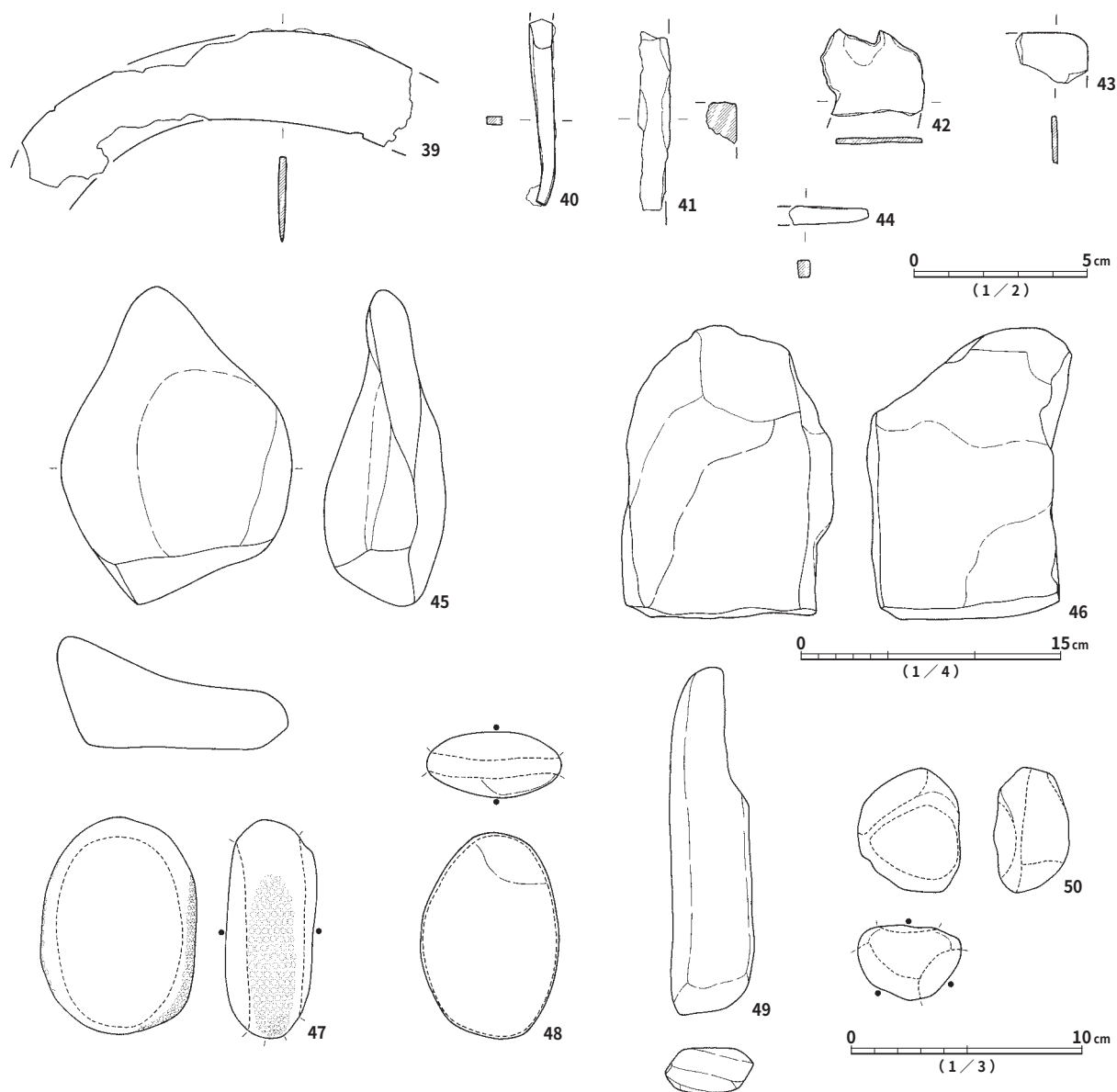


Fig.207 SI02(3) 遺物

SI02



SI03

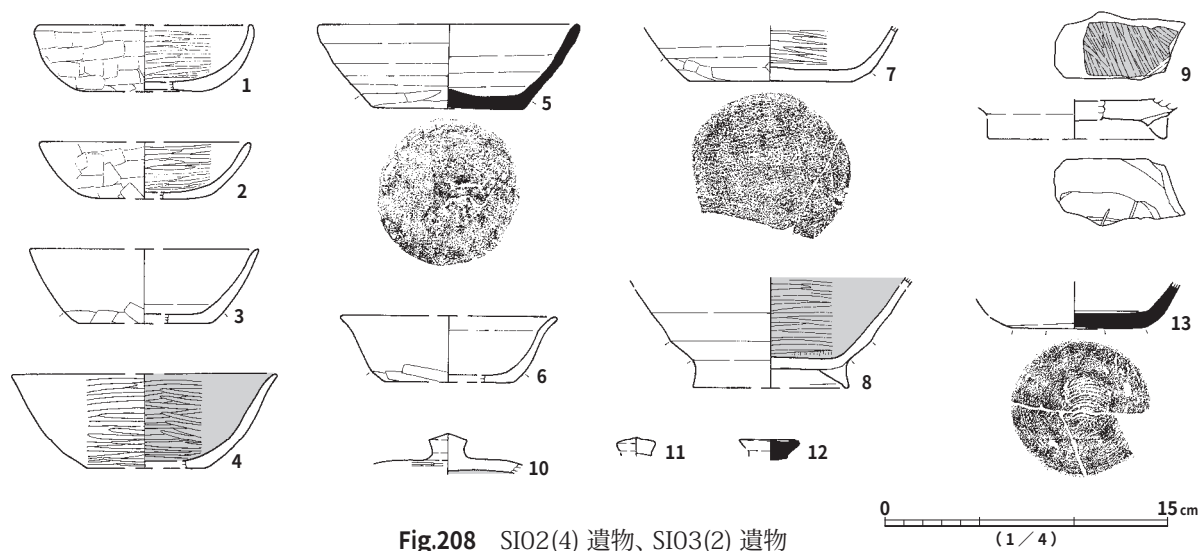


Fig.208 SI02(4) 遺物、SI03(2) 遺物

SI03

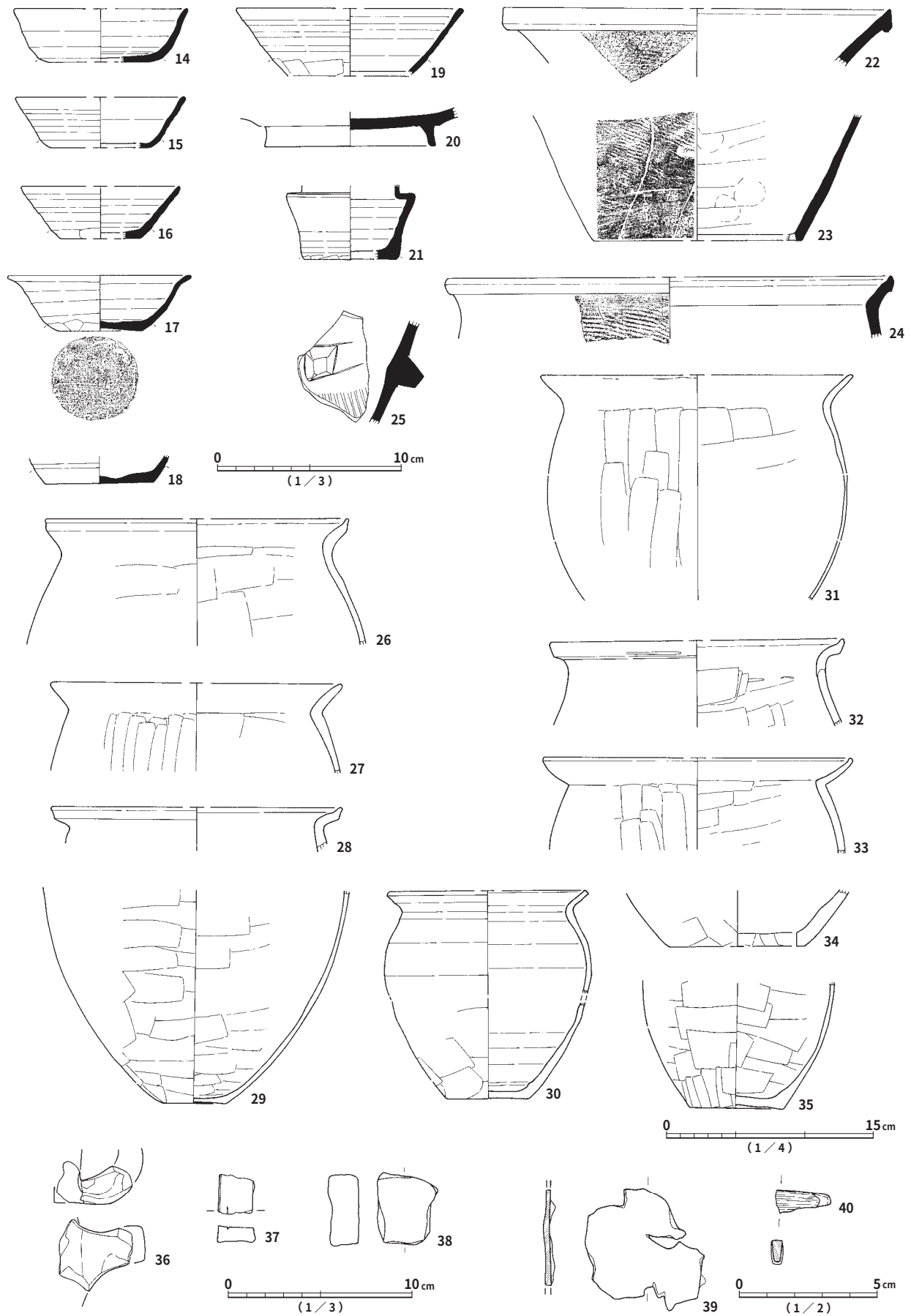


Fig.209 SI03(3) 遺物

積は6.50㎡、確認面からの深さは不明、主軸方位はN-7.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。左右両袖と燃焼部が検出されている。

主柱穴など、Pitに規則的な配列は認められない。壁溝はほぼ全周する。

SI06 (Fig.211~213, PL.37・144・149・152・160・161)

SI06は、LS-88区他に所在する。本竪穴は調査原図が存在する。レベルの記載はないが、断面図があり、それをそのまま掲載した。本竪穴は、単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はややいびつな隅丸方形を呈し、竪穴全体規模は3.15m(主軸)×3.33m、カマド煙道部を含む主軸長は4.51m、確認面掘形面積は9.50㎡、確認面からの深さは0.35m前後を測る。主軸方位はN-106.0°-Eである。カマドは北壁中央にある。左右両袖と燃焼部、煙道部が検出されている。右袖には瓦が直立する。主柱穴など、Pitに規則的な配列は認められない。平面図にレベルの記載がないため深さは不明。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量3,980.7gであり、このうち土器は2,912.7g、瓦は950.0gであった。実測可能遺物は、1・7が須恵器杯、2~4が土師器杯、5が土師器甕、6が土師器皿、8・9が須恵器甕、土器以外では10が丸瓦、11が平瓦である。調査時の遺構図面には、カマド付近、南西隅部、竪穴外P8内に瓦の記載がある。このうち、10・11はカマド構築材として使用されている。他に、調査写真によると(PL.37)、北辺部竪穴外から瓦が出土している。瓦以外の出土状況は全く記録がない。

本竪穴に関連し、SI06・12(調査時番号「5・7号住」)、SI06・13(調査時番号「5・8号住」)の遺物が存在する。ともに重複関係もなく、一括出土となる理由が判然としない。遺構番号の混乱による可能性もあるが、ここで掲載しておく。

SI06・12出土遺物は(Fig.213)、総重量4,672.0gであり、瓦などの混在はない。実測可能遺物は、1~3・5・6・8が土師器杯、4が土師器皿、7が土師器碗、9~12が土師器甕である。3の体部外面の墨書は判読できない。

SI06・13出土遺物は(Fig.213)、総重量1,229.8gであり、これも土器のみであった。実測可能遺物は、1~4が土師器杯、5が土師器碗、6が土師器甕、7が土師器皿、8が土師器鉢である。

SI07A・B (Fig.214・215, PL.37・144・145・152・161)

SI07A・Bは、LS-58区他に所在する。本竪穴は、全体図以外一切の図面記録が存在しないため、隣接するSI08と一緒に写っている写真をSI08の平面図に一致するように画像処理し、描き写したものであり、精度のある図ではない。

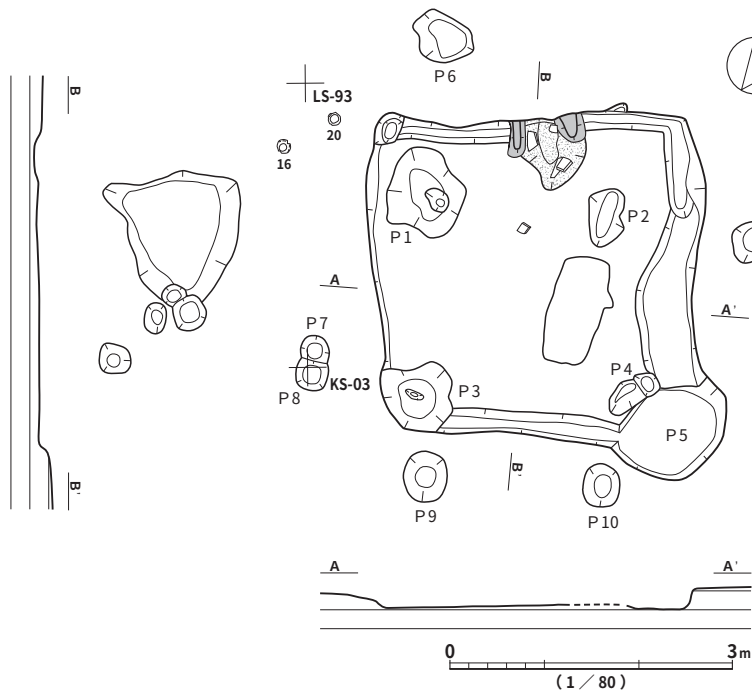
本遺構は、2軒の竪穴の重複によると推定する。調査写真では、床面高に明確な差はない。新旧関係は、カマドの遺存するSI07Aが新しいと考えておくと、SI07Bにカマドが存在した余地は乏しい。

SI07Aの竪穴平面形態は横長方形を呈し、竪穴全体規模は2.75m(主軸)×3.05m、カマド煙道部を含む主軸長は2.94m、確認面掘形面積は推定で8.50㎡を測る。主軸方位はN-92.0°-Eである。カマドは東壁中央にある。左右両袖と燃焼部、煙道部が検出されている。主柱穴などの屋内施設は認められないが、竪穴外にPit群がある。深さは不明。

SI07Bは、遺存部で2.50m、東西方向を主軸とした場合の方位はN-88.0°-Eである。

出土遺物はA・B分離できない。総重量7,946.7gであり、このうち土器は5,099.7g、瓦は2,838.0gであった。実測可能遺物は、1~9が土師器杯、10が土師器小皿、11が土師器鉢、12が灰釉碗、13

SI04



SI05

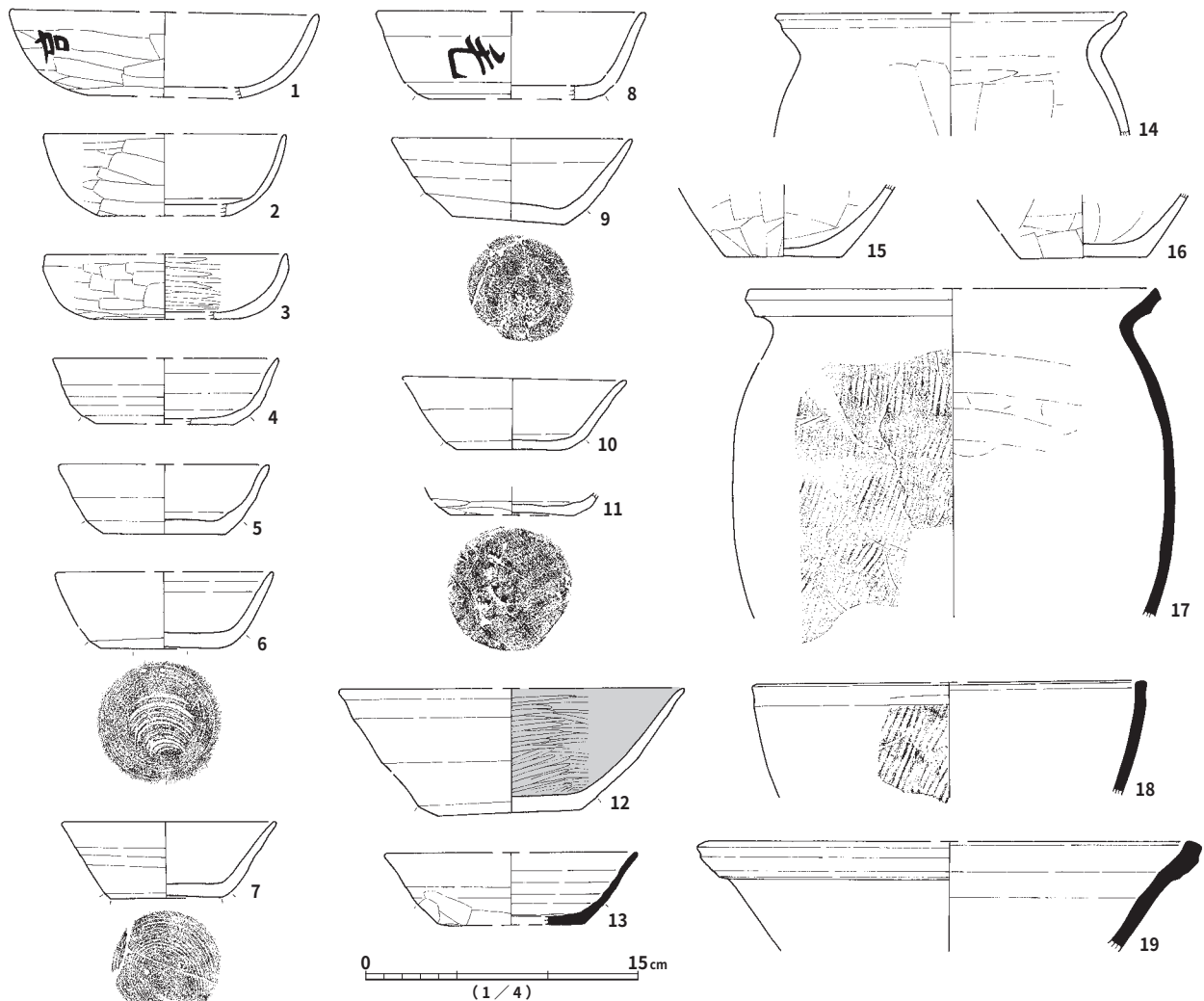
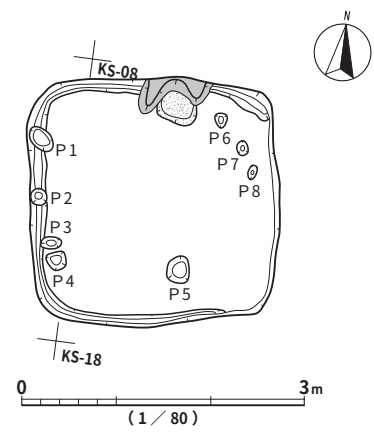
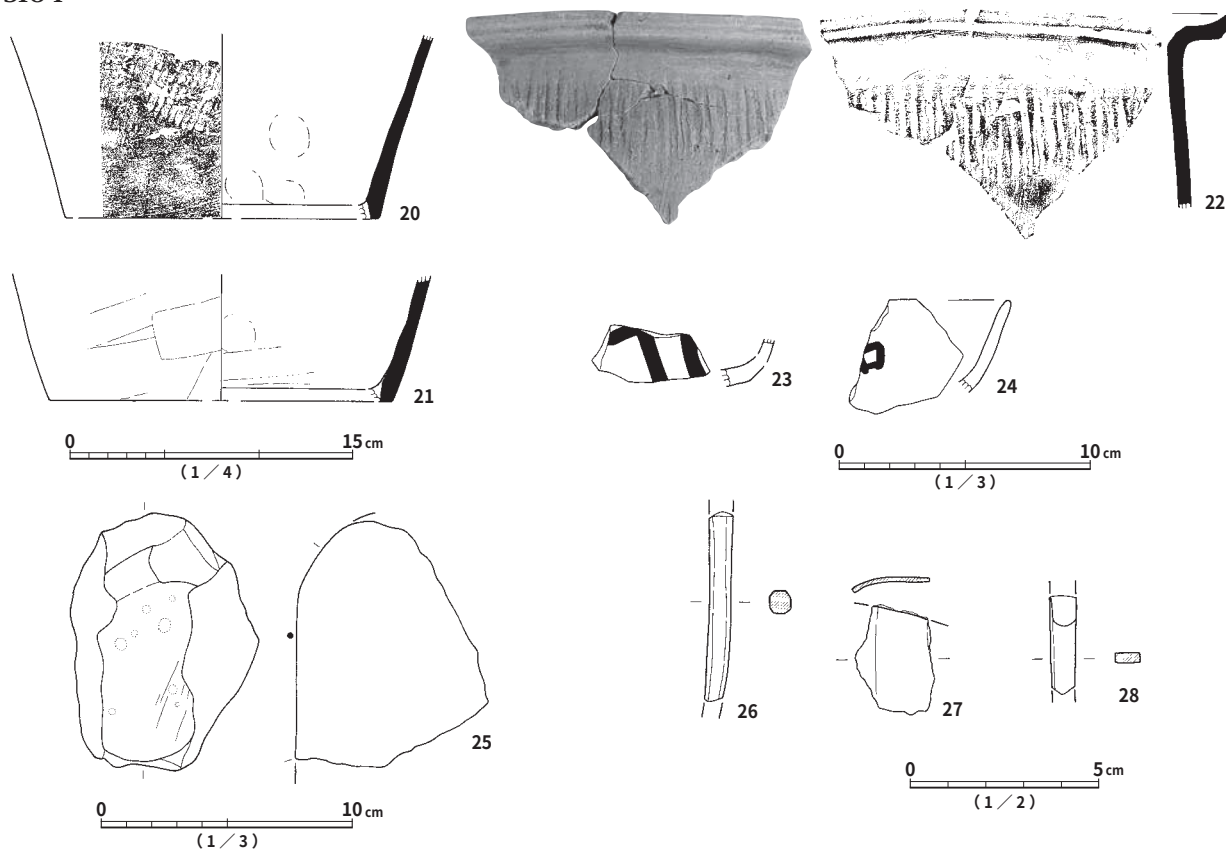


Fig.210 SI04(1) 遺構遺物、SI05 遺構

SI04



SI06

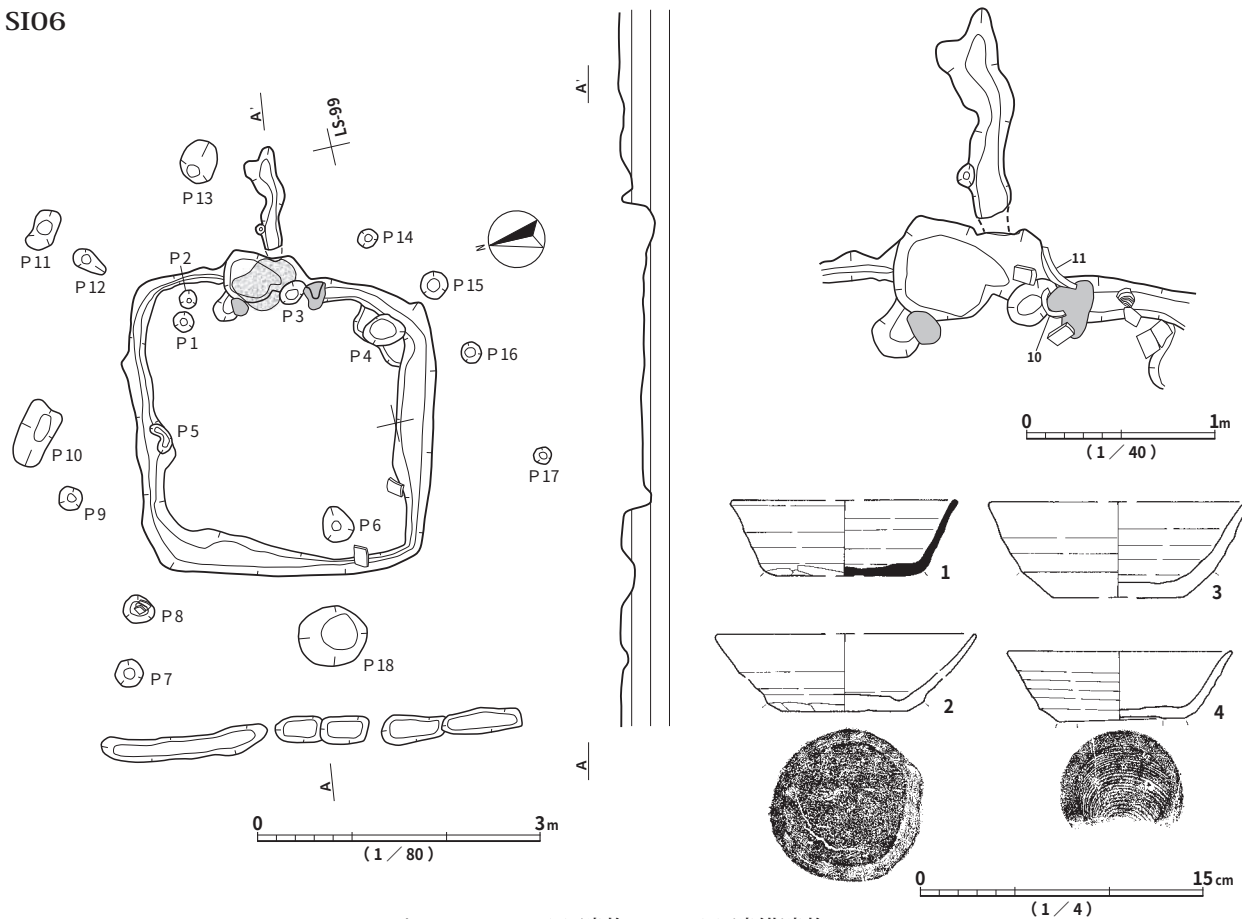


Fig.211 SI04(2) 遺物、SI06(1) 遺構遺物

SI06

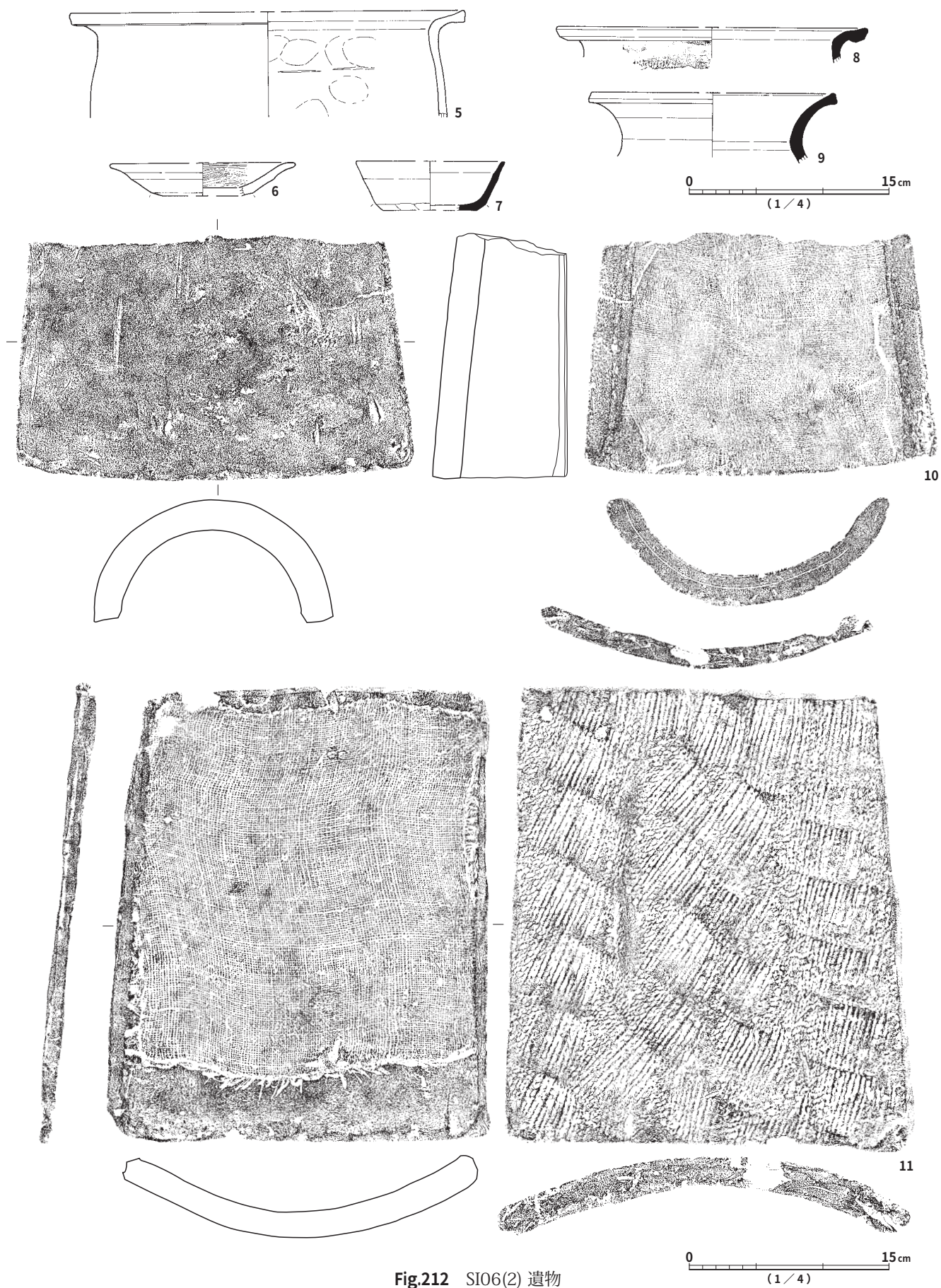
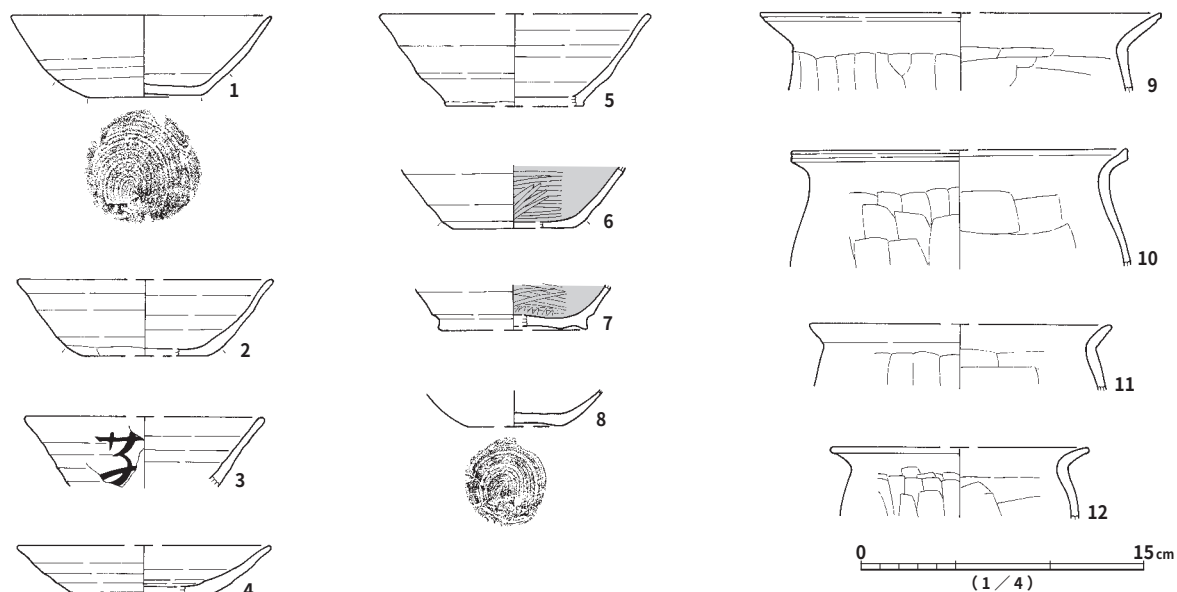


Fig.212 SI06(2) 遺物

SI06・12



SI06・13

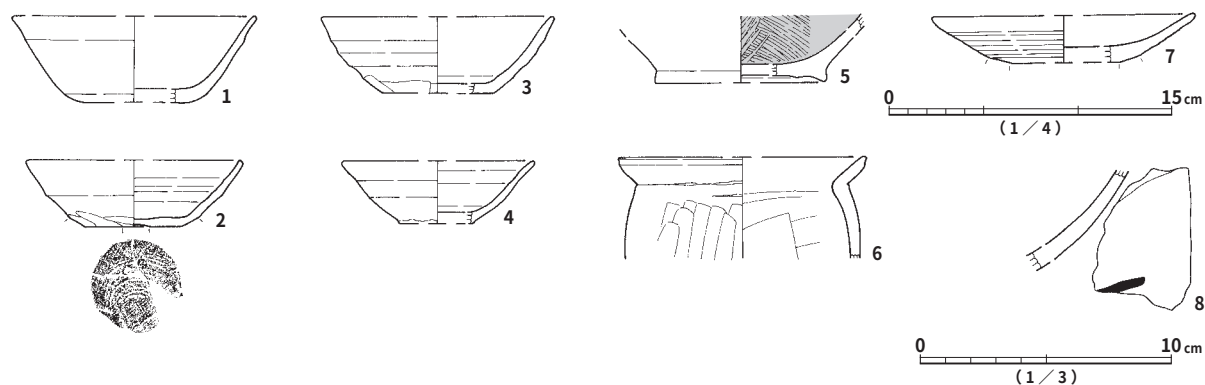


Fig.213 SI06・12 遺物、SI06・13 遺物

～15が土師器甕、16～18が須恵器甕、土器以外では19が丸瓦である。1の底部内面に焼成後の線刻がある。出土状況は明らかでない。

SI08 (Fig.216、PL.37・145・153・161)

SI08は、LS-70区他に所在する。本竪穴は、調査原図がなく、修正図のみ存在する。断面図はなく、レベル高の記載もない。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は横長方形を呈し、竪穴全体規模は3.13m(主軸)×3.69m、確認面掘形面積は11.20 m²を測る。調査写真によれば、確認面からの掘り込みは比較的深い。主軸方位はN-90.0°-Eである。カマドは東壁の中央やや南側にある。左右両袖と燃烧部、煙道部が検出されている。調査写真では、煙道部がより長く見える。

主柱穴などの屋内施設は認められないが、竪穴外にPit群があり、柱穴となる可能性がある。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量17,520.0gであり、このうち土器は1,473.0g、瓦は16,032.0gであった。実測

SI07

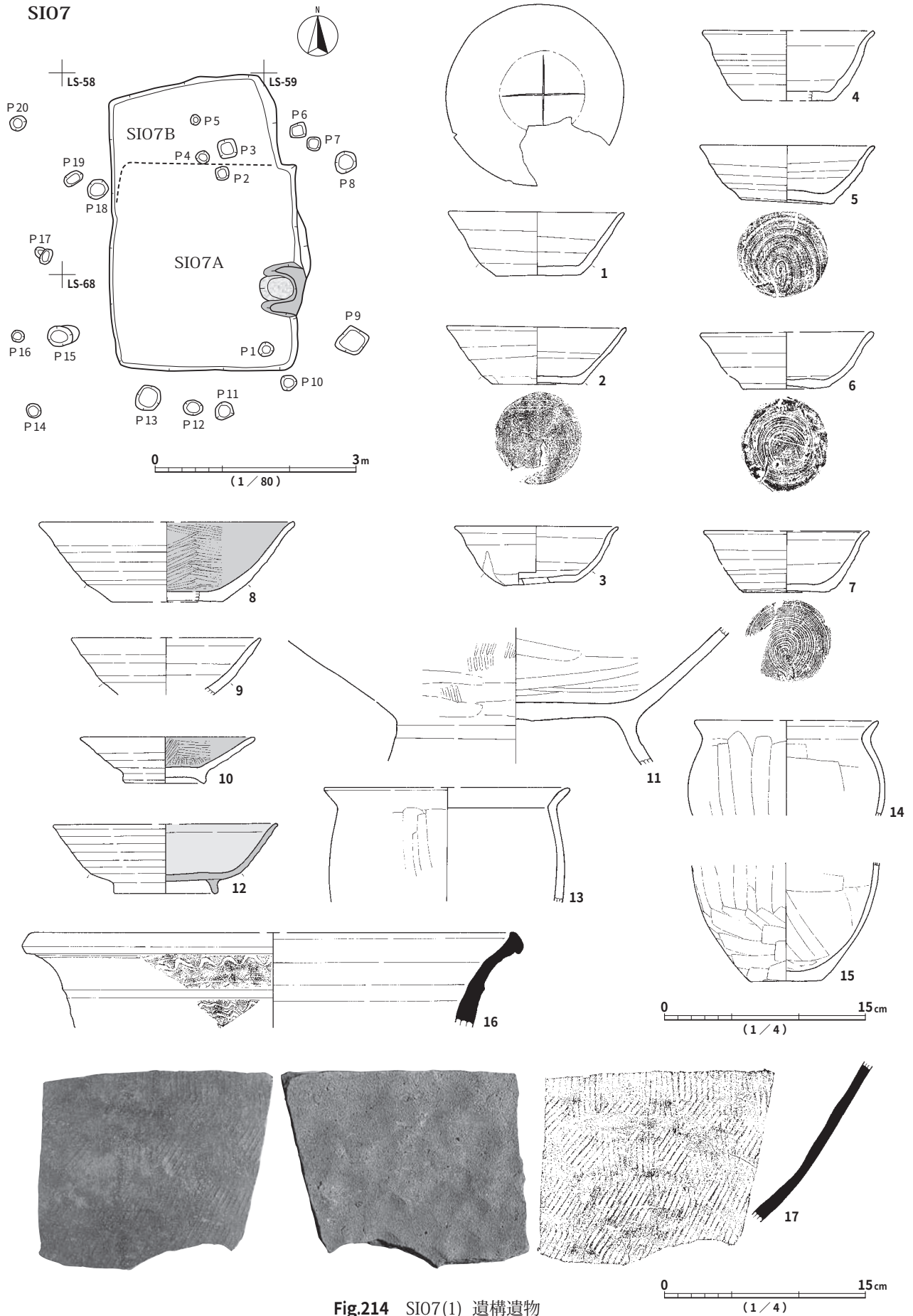


Fig.214 SI07(1) 遺構遺物

SI07

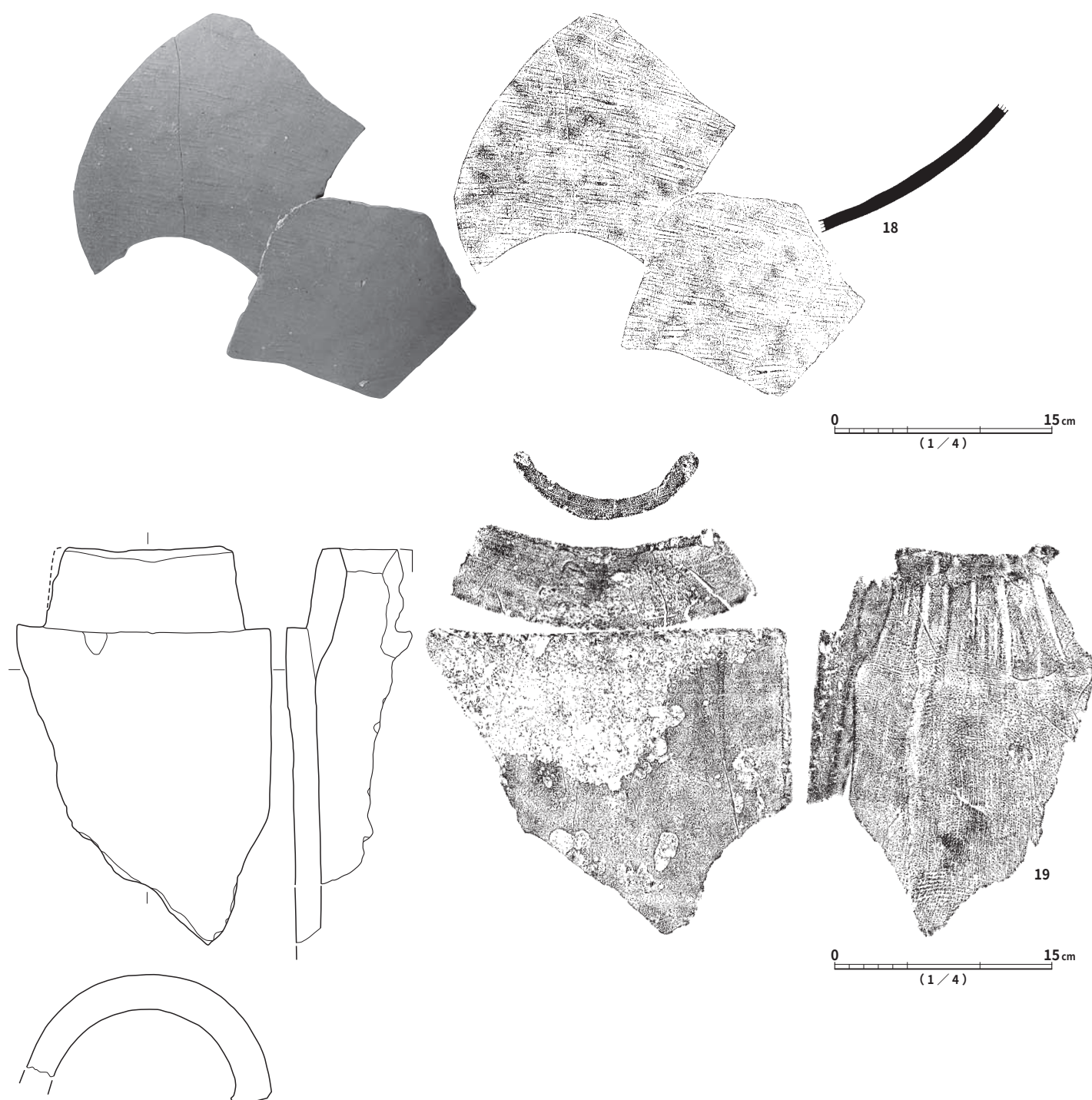


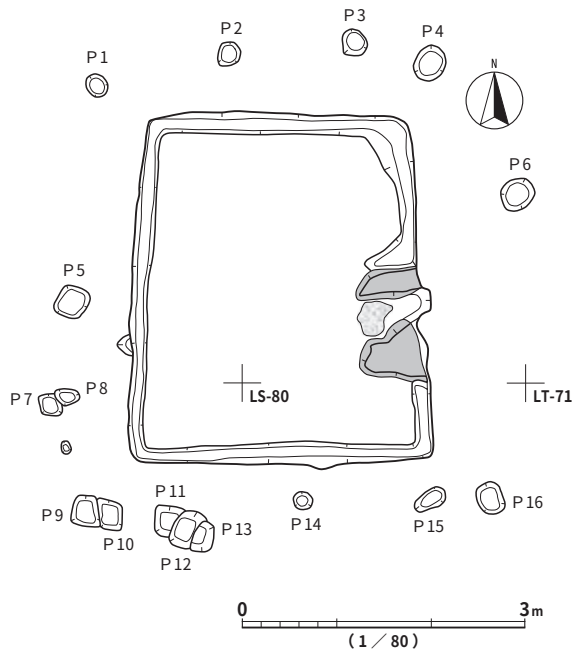
Fig.215 SI07(2) 遺物

可能遺物は、1・2が土師器杯、3が土師器高台付杯、4が土師器皿、5が土師器鉢、6・7が土師器甕、土器以外では8・9が平瓦である。出土状況は明らかでない。

SI09A・B (Fig.217、PL.38・145・153・166)

SI09A・Bは、LS-100区他に所在する。本竪穴は、調査原図が存在する。一線状にレベルの測点があり、これをもとに断面図が作成されている。ただし、他にレベルの記載はない。SI09A・Bは、

SI08



ph.1 全景

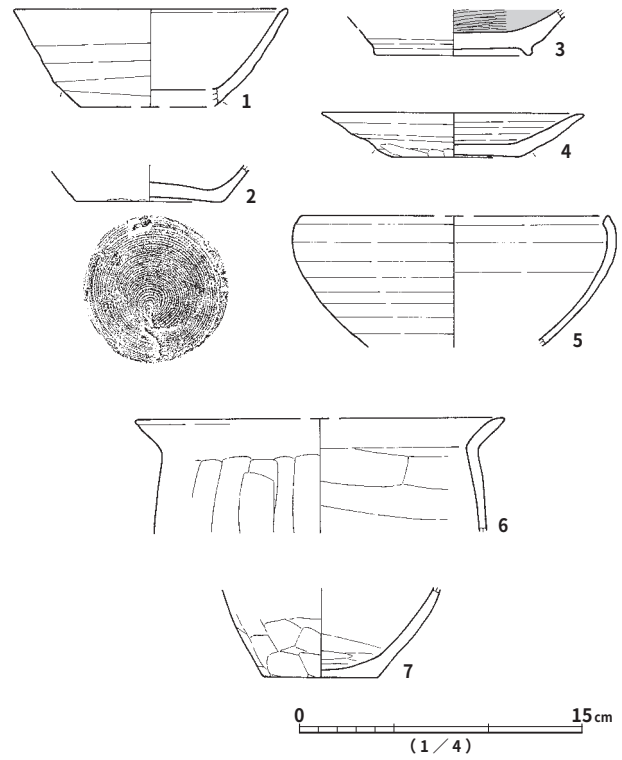


Fig.216 SI08 遺構遺物・調査状況

竪穴2軒の重複であり、さらにSI09Aは南側でSI10Aと重複する。SI09A・Bは、SI09BがSI09Aのカマド右袖を破壊していることから、SI09Bが新しいと推定する。ただし、この場合SI09Bにはカマドがない。逆に、SI09B南辺中央に粘土塊があることから、これをSI09Bのカマドとし、SI09Aに破壊されたとみることも不可能ではないが、本遺跡では、南方向にカマドをもつ竪穴の例はない。床面比高は、写真で見える限りSI09Aがやや深い。SI10Aとの新旧関係は、掘り上がり状態の平面図しかないため判断は難しい。SI09AとSI10Aの床面比高は、0.09mである。

SI09Aの竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は3.12m(主軸)×3.20m、カマド煙道部を含む主軸長は4.47m、確認面掘形面積は推定で10.40㎡、確認面からの深さは0.17m程度を測る。主軸方位はN-10.0°-Eである。カマドは北壁中央にある。袖は壁外に張り出し、長い煙道部をもつ。Pitに規則的な配列は認められない。壁溝はほぼ全周する。西辺部壁際で焼土の堆積が確認されているが、火災によるものかどうかは判断できない。

SI09Bの竪穴平面形態はややいびつな長方形を呈し、竪穴全体規模は2.48m(主軸)×3.08m、確認面掘形面積は推定で6.50㎡を測る。南北方向を主軸とした場合の方位は、N-2.0°-Eである。カマド他の屋内施設は確認されていない。南壁中央で粘土塊が検出されている。

出土遺物の大半はA・B分離できない。総重量3,675.0gであり、このうち土器は3,105.3g、瓦は117.0gであった。実測可能遺物は、1~5・7・9が土師器杯、6が土師器鉢、8が土師器皿、10~12が土師器甕、13が灰釉壺、14・15が須恵器壺、16・17が須恵器甕、土器以外では18が不明鉄器である。遺物出土状況は、一部図面上にもあるが、遺物No.の記載がない。調査写真との照合によると、3が南辺部覆土、9が床面付近、14がカマド煙道部、18が床面付近出土の瓦上から出土している。

SI10A・B (Fig.218・219、PL.38・144・145・153・159・162・166)

SI10A・Bは、LS-100区他に所在する。本竪穴は、調査原図が存在する。一線状にレベルの測点があり、これをもとに断面図が作成されている。ただし、他にレベルの記載はない。SI10A・Bは、竪穴2軒の重複であり、さらにSI10Aは西側でSI09Aと重複する。SI10A・Bは、SI09AがSI09Bのカマドを破壊していることから、SI10Aが新しい。SI10A・Bの床面高は、SI10Aが0.03~0.05mほど深い。SI09Aとの新旧関係は、掘り上がり状態の平面図しかないため判断は難しい。SI09AとSI10Aの床面比高は、0.09mである。

SI10Aの竪穴平面形態は長方形を呈し、竪穴全体規模は4.25m(主軸)×3.71m、カマド煙道部を含む主軸長は5.37m、確認面掘形面積は推定で15.00㎡、確認面からの深さは0.06~0.17m程度を測る。主軸方位はN-90.0°-Eである。カマドは東壁中央にある。左袖と燃焼部、煙道部が検出されている。調査原図では、煙道部北脇に焼土範囲が示されているが、詳細は不明。主柱穴など、Pitに規則的な配列は認められない。P1は貯蔵穴状であるが、深さは不明。壁溝は検出部でほぼ全周する。

SI10Bの竪穴平面形態はほぼ長方形を呈し、竪穴全体規模は3.40m(主軸)×2.84m、確認面掘形面積は推定で9.20㎡、確認面からの深さは0.10m程度を測る。主軸方位はN-91.0°-Eである。カマドはSI10A南東隅部の掘り込みが焚口燃焼部にあたると推定する。

壁溝はほぼ全周するが、他に屋内施設は確認されていない。

出土遺物は、一部をのぞきA・B分離できない。総重量13,929.1gであり、このうち土器は7,242.2g、瓦は6,633.0gであった。実測可能遺物は、1~9・13~18が土師器杯、10が土師器皿、11が土師器高

SI09

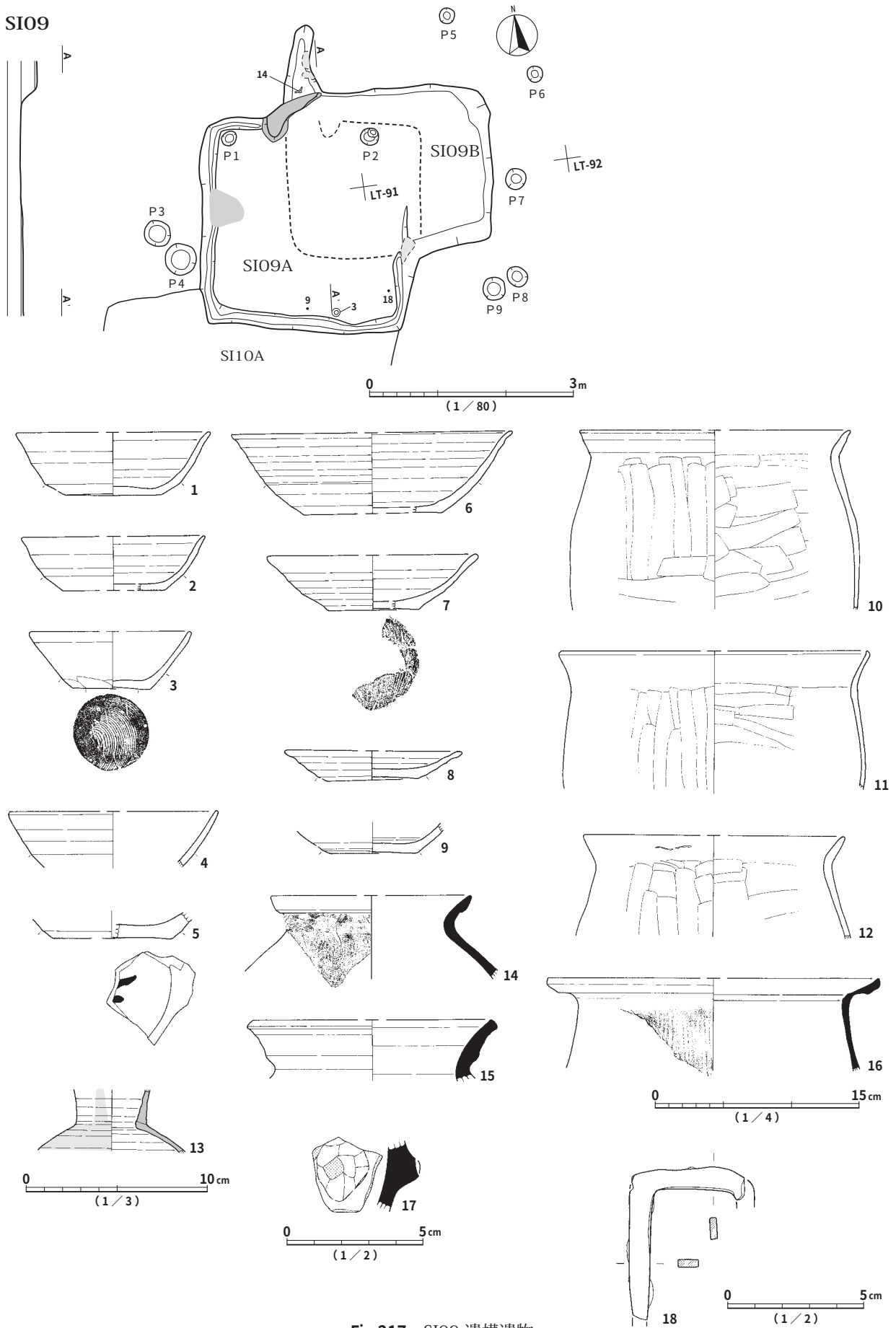


Fig.217 SI09 遺構遺物

SI10

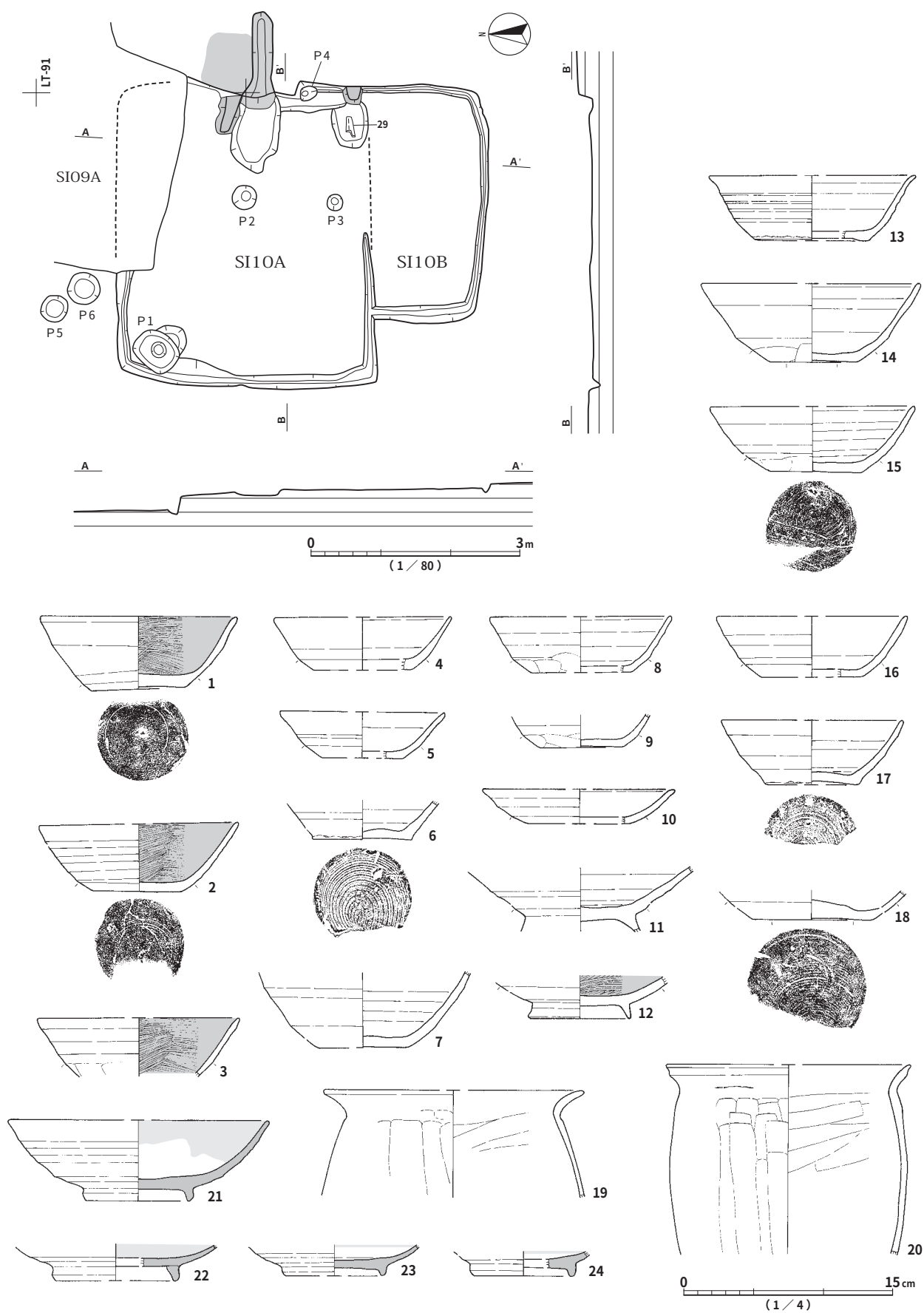


Fig.218 SI10(1) 遺構遺物

SI10

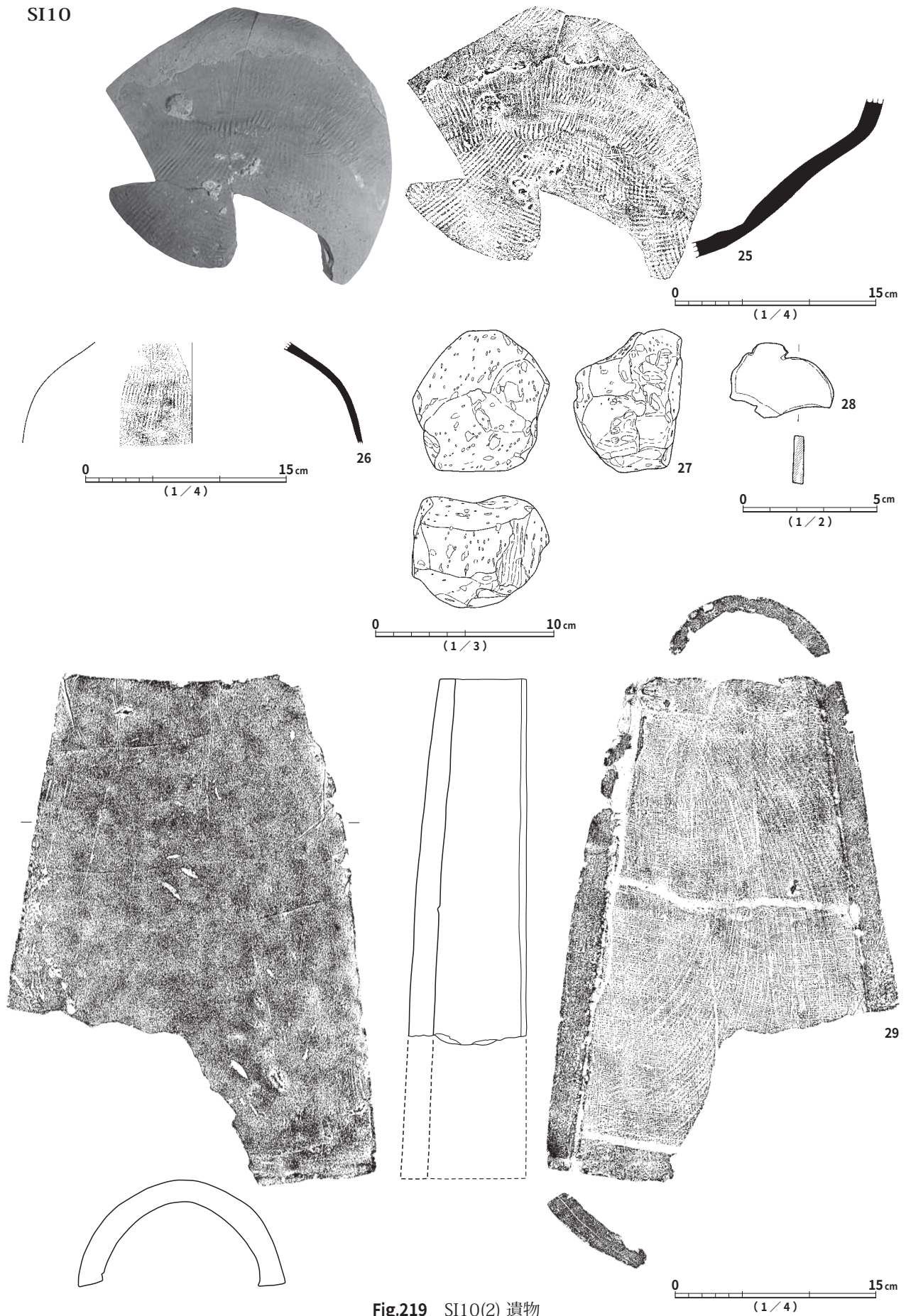


Fig.219 SI10(2) 遺物

台付杯、12が土師器高台付椀、19・20が土師器甕、21が灰釉高台付椀、22～24が灰釉椀、25・26が須恵器甕、土器以外では27が軽石、28が不明鉄器、29が丸瓦である。遺物出土状況について、調査写真ではA・Bカマド周辺に遺物が遺存し、一部は図面上図化されているが、遺物No.の記載がない。ただし、29丸瓦については、調査写真から特定が可能であった。

SI11A・B (Fig.220～222, PL.38・39・145・146・154・162・163)

SI11A・Bは、KT-03区他、調査区南端にあり、竪穴範囲の一部は調査区外となる。SI11A・Bは、現状範囲において重複関係のない単独の竪穴であるが、確認時に一連の遺構としてとらえられたことによるためか、同じ遺構番号が与えられ、出土遺物も区分されていない。したがってここでもA・Bとしておく。本竪穴は、調査原図が存在する。レベルの記載はないが、断面図があり、それをそのまま掲載する。

SI11Aは、南辺から南西隅部が調査区外となる。竪穴平面形態はややいびつな方形を呈し、竪穴全体規模は3.58m(主軸)×3.96m、確認面掘形面積は推定で13.90㎡、確認面からの深さは0.11～0.14m程度を測る。主軸方位はN-1.0°-Eである。カマド、支柱穴などの屋内施設は検出されていない。

SI11Bは、SI11Aの東側に隣接する。南辺部が調査区外となる。竪穴中央部に長方形の攪乱坑がある。竪穴平面形態はややいびつな方形を呈し、竪穴全体規模は、東西方向4.90m、主軸方向現存部で4.40m、カマド煙道部を含む主軸長は5.50m以上を測る。確認面からの深さは0.15～0.33mほど、主軸方位はN-3.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。左右両袖と燃焼部、煙道部が検出されている。両袖には、丸瓦が埋置されている。

P1・2は支柱穴である。平面図に記載はないが、調査写真を見ると南北方向の畝状攪乱溝の南端に、P1・2に対応する可能性のあるP4がある。深さは不明。これは、攪乱溝の一部を掘り抜いたものかもしれない。壁溝は検出していない。

出土遺物はA・B分離できない。

出土遺物は、総重量で21,256.8gであり、このうち、土器は9,397.8g、瓦は11,850.0gであった。実測可能遺物は、1・2・4・6～10が土師器杯、3が須恵器杯、5・12が土師器高台付椀、11・13が土師器鉢、14～17が土師器甕、18・19が須恵器甕、20が灰釉浄瓶、21が灰釉壺、22～24が灰釉椀、土器以外では25～27が平瓦、28～30が丸瓦である。図面では、SI11Bカマド周辺に遺物の記載があるが、遺物No.がないため特定できない。29・30の丸瓦については、おそらくSI11Bカマド袖部に埋置されていたものと思われる。

SI12 (Fig.213・223～225, PL.39・144・146・152・154・163・166)

SI12は、LT-86区他に所在する。本竪穴は、調査原図が存在する。レベルは、一線状十字に測点があり、これをもとに断面図が作成されている。それ以外、Pitなどの深さは不明。単独で存在し、他遺構との重複はない。西辺部長方形土坑は攪乱の可能性はある。

竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は4.78m(主軸)×4.60m、カマド部を含む主軸長は5.00m、確認面掘形面積は20.90㎡、確認面からの深さは0.17m程度を測る。主軸方位はN-6.0°-Eである。カマドは北壁中央にあり、袖がやや竪穴外に張り出す構造と推定する。左右両袖と燃焼部が検出されている。左袖部には丸瓦が埋置されている。

Pitは多数検出されているが、規則的な配列は認められない。平面図にレベルの記載がないため深

SI11

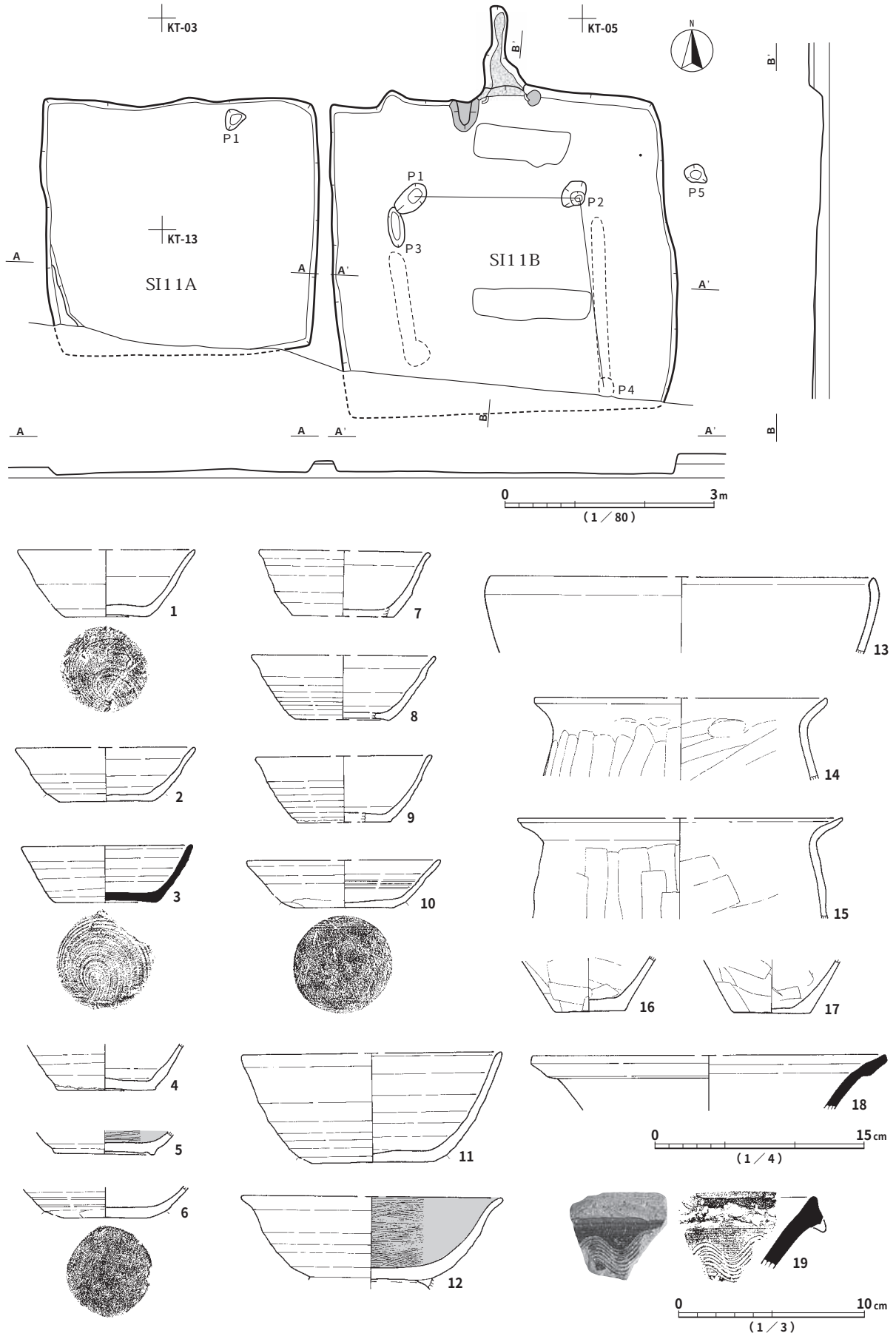


Fig.220 SI11(1) 遺構遺物

SI11

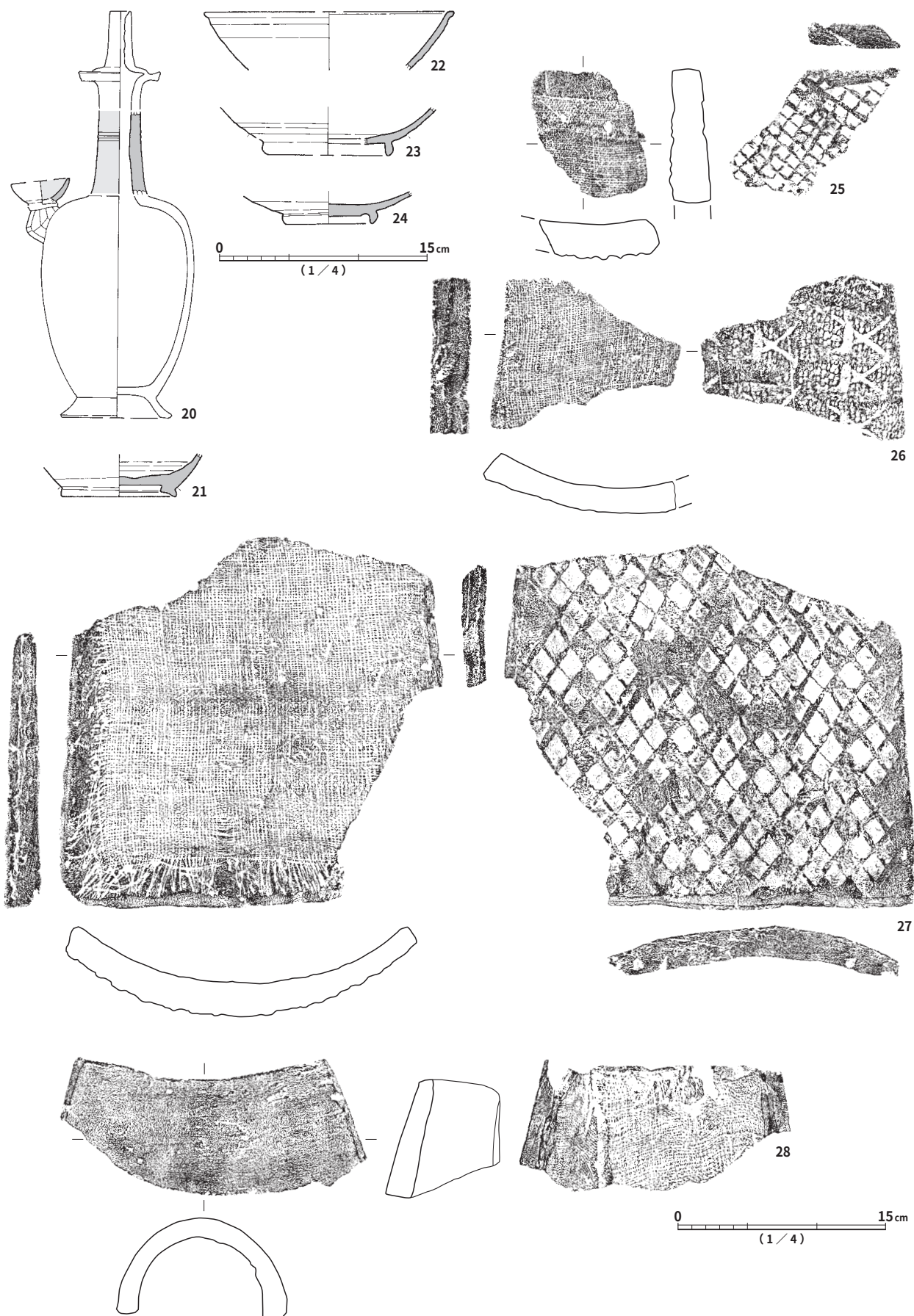


Fig.221 SI11(2) 遺物

SI11

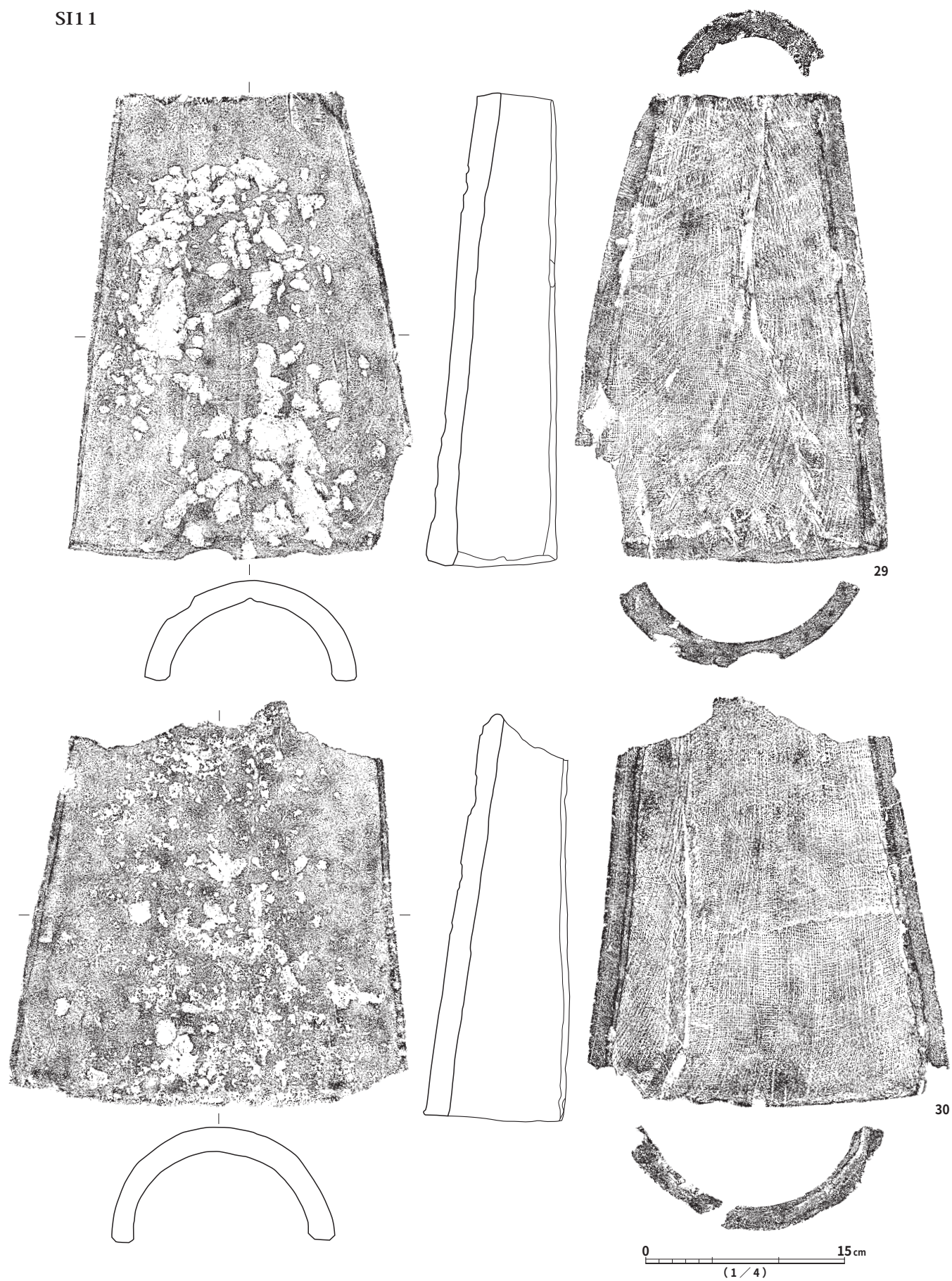


Fig.222 SI11(3) 遺物

さは不明。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量14,403.3gであり、このうち土器は4,616.9g、瓦は9,258.0gであった。実測可能遺物は、1～4・6が土師器杯、5が土師器小皿、7が土師器高台付椀、8が土師器皿、9が灰釉皿、10・12・16・17が灰釉壺、11・15が灰釉長頸壺、13・14が土師器鉢、18・20が須恵器壺、19が灰釉平瓶、21が須恵器甕、土器以外では22が椀状鉄滓、23～25が不明鉄器、26～29が平瓦、30が丸瓦である。遺物出土状況は、一部が図面上に記載されているが、遺物No.がないため特定できない。調査写真から、カマド袖部の瓦は30の可能性が高い。

本竪穴に関連し、SI06・12一括の遺物が存在する(Fig.213)。ともに重複関係はなく、一括出土の理由が判然としない。

SI13a・b (Fig.213・225、PL.39・144・152・154)

SI13は、LT-87区他に所在する。本竪穴は、調査原図が存在する。レベルは、一線状十字に測点があり、これをもとに断面図が作成されている。それ以外、Pitなどの深さも不明。単独で存在し、他遺構との重複はない。ただし、壁溝から建て替えをとまう可能性が高い。内側をSI13a、外側をSI13bとする。確証はないが、拡張と推定しておく。

SI13aの竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴規模は主軸方向で2.98m(主軸)×3.15m、カマド部を含め3.26m、確認面掘形面積は推定で9.10m²である。SI13bの竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴規模は主軸方向で3.23m(主軸)×3.53m、カマド部を含め3.51m、確認面掘形面積は11.10m²である。a・b床面高さはほぼ同じで、確認面からの深さは0.05～0.27m程度を測る。主軸方位はN-6.0°-Eである。カマドは北壁中央にある。これには重複が認められない。袖がやや竪穴外に張り出す構造と推定する。

出土遺物は、総重量188.3gであり、土器のみであった。a・bの区別はできない。実測可能遺物は、1が土師器高台付杯である。

本竪穴に関連し、SI06・13一括の遺物が存在する(Fig.213)。ともに重複関係もなく、一括出土の理由が判然としない。

SI14 (Fig.226、PL.40・146・154)

SI14は、LT-99区他に所在する。本竪穴は、スケッチに近い粗い平面図しか存在せず、不明の部位は遺構写真から描き写した。断面図はなく、レベル高の記録もない。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はやや横長の不整形であり、本来の形状とは考えにくい。調査写真を見ると、北壁側中央やや西寄りと南東部で地山のない部分があり、おそらく攪乱によって遺構範囲の把握が難しかったと思われる。2軒の重複の可能性もあるが、調査写真では床面高に明らかな変化は認められない。竪穴全体規模は3.57m(主軸)×4.27m、確認面掘形面積は14.06m²を測る。南北方向を主軸とした場合の方位は、N-7.0°-Wである。カマドは検出されていない。炉も確認ではない。主柱穴など、Pitに規則的な配列は認められない。調査写真では、南辺部に円形の落ち込みが確認できるが、詳細は明らかでない。

出土遺物は、総重量449.0gであり、土器のみであった。実測可能遺物は、1・2が土師器小皿、3が土師器高台付椀、4が緑釉段皿である。遺物出土状況は不明。

SI12

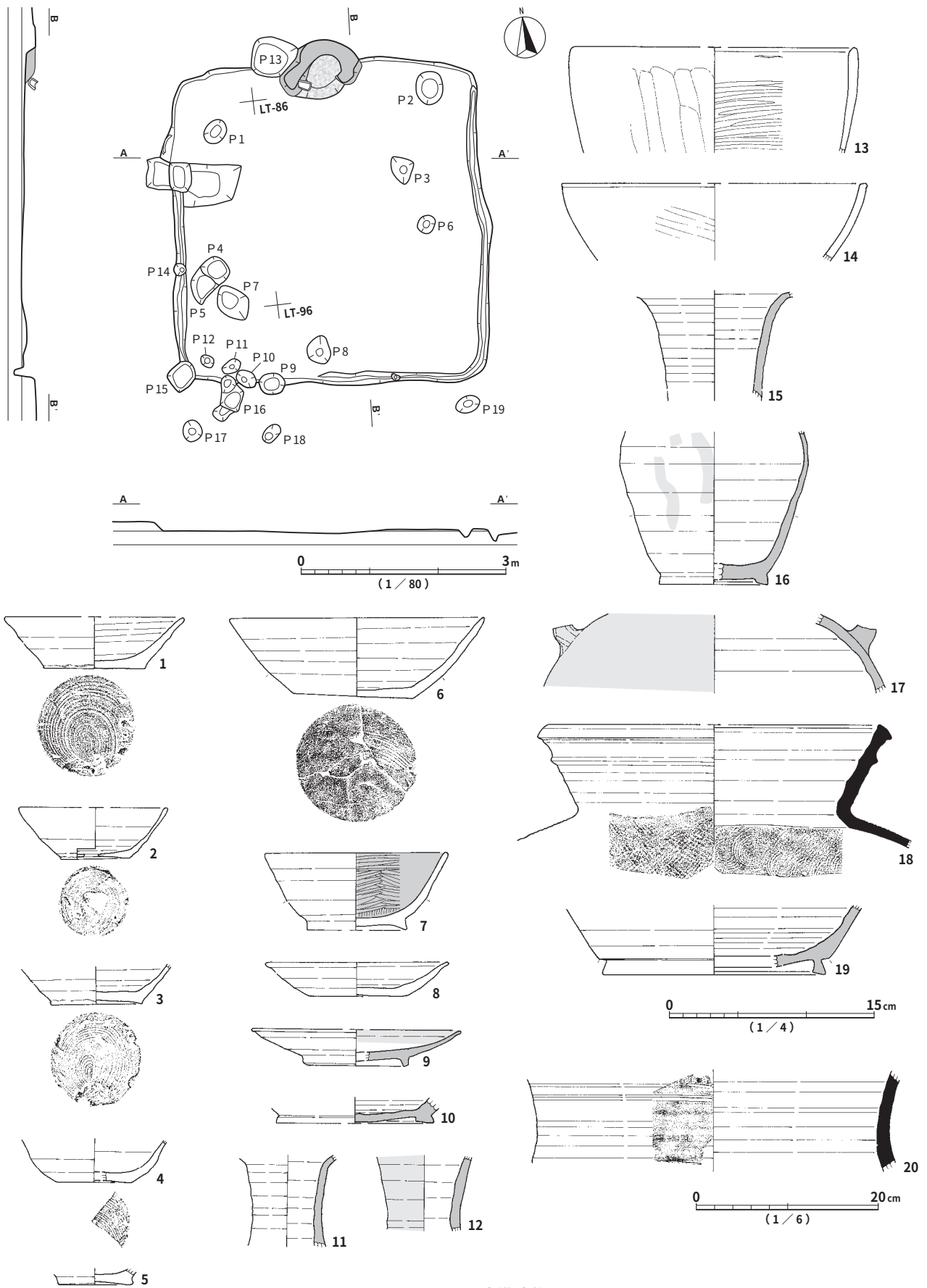


Fig.223 SI12(1) 遺構遺物

SI12

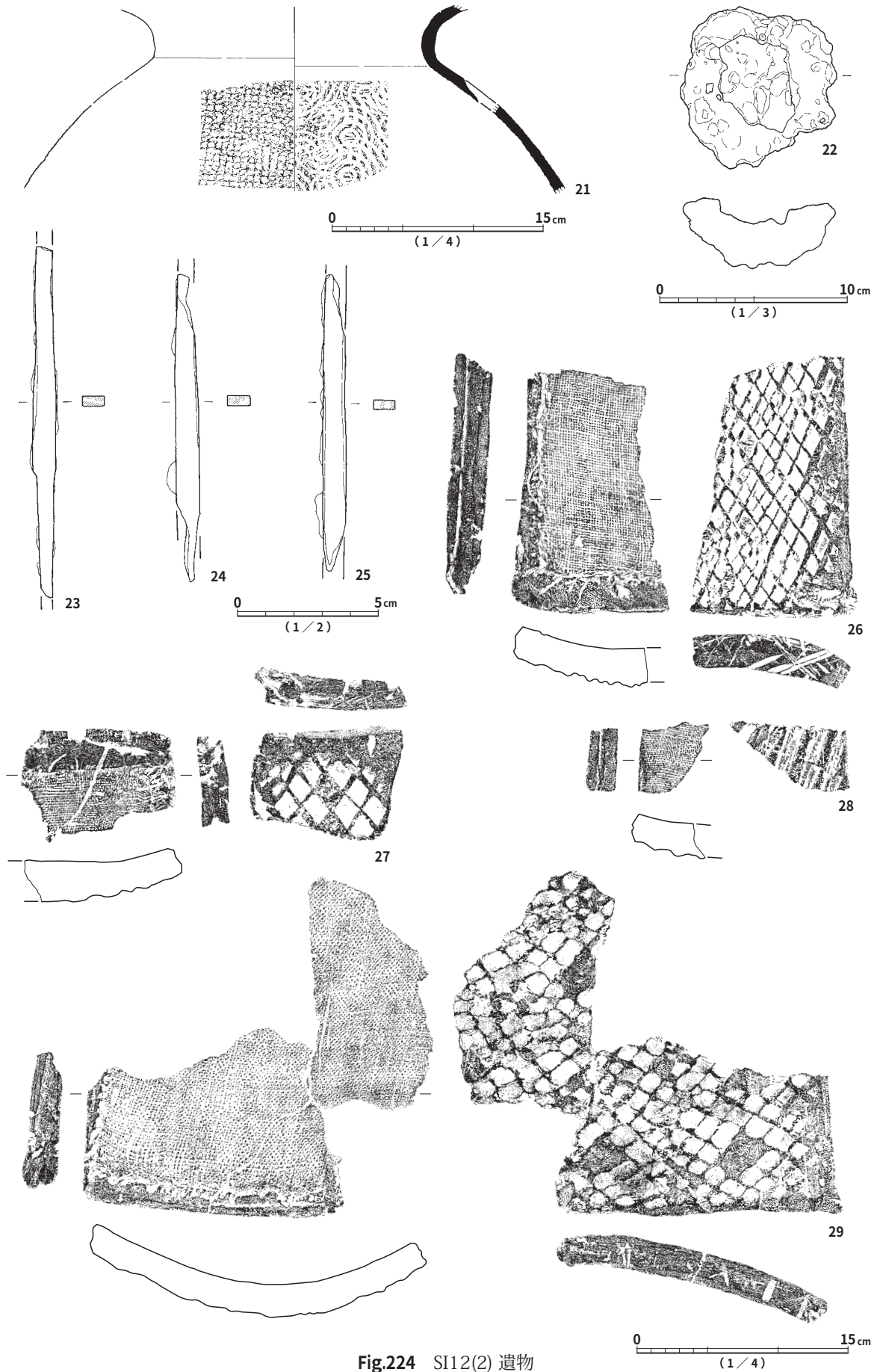
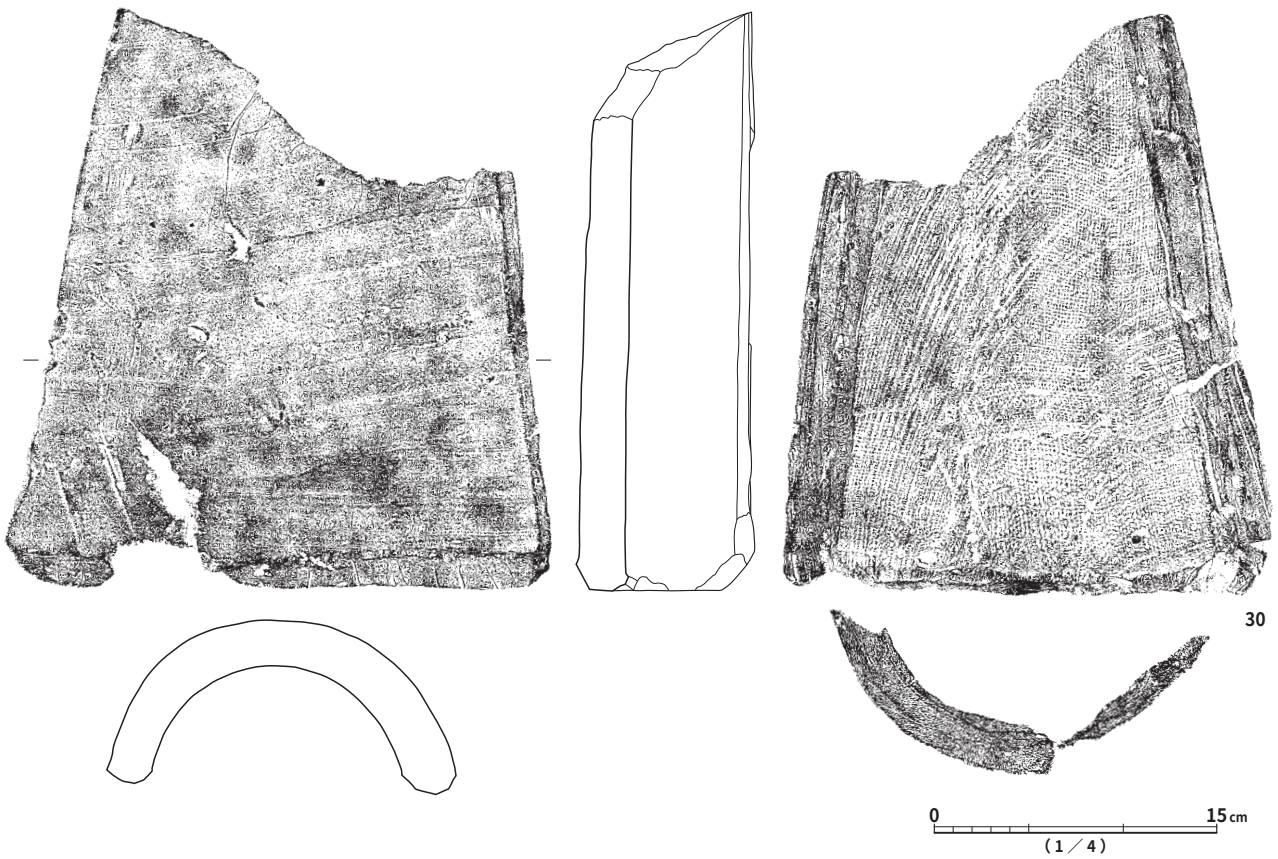


Fig.224 SI12(2) 遺物

SI12



SI13

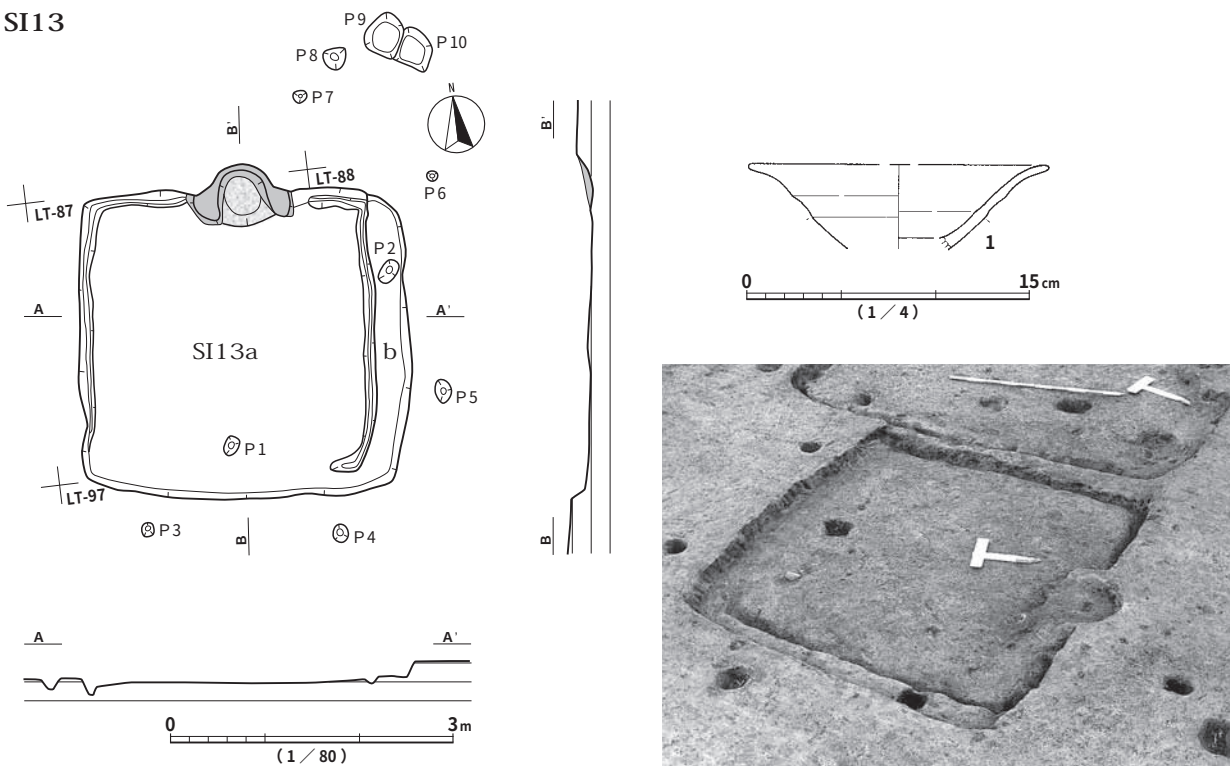


Fig.225 SI12(3) 遺物、SI13 遺構遺物・調査状況

SI14

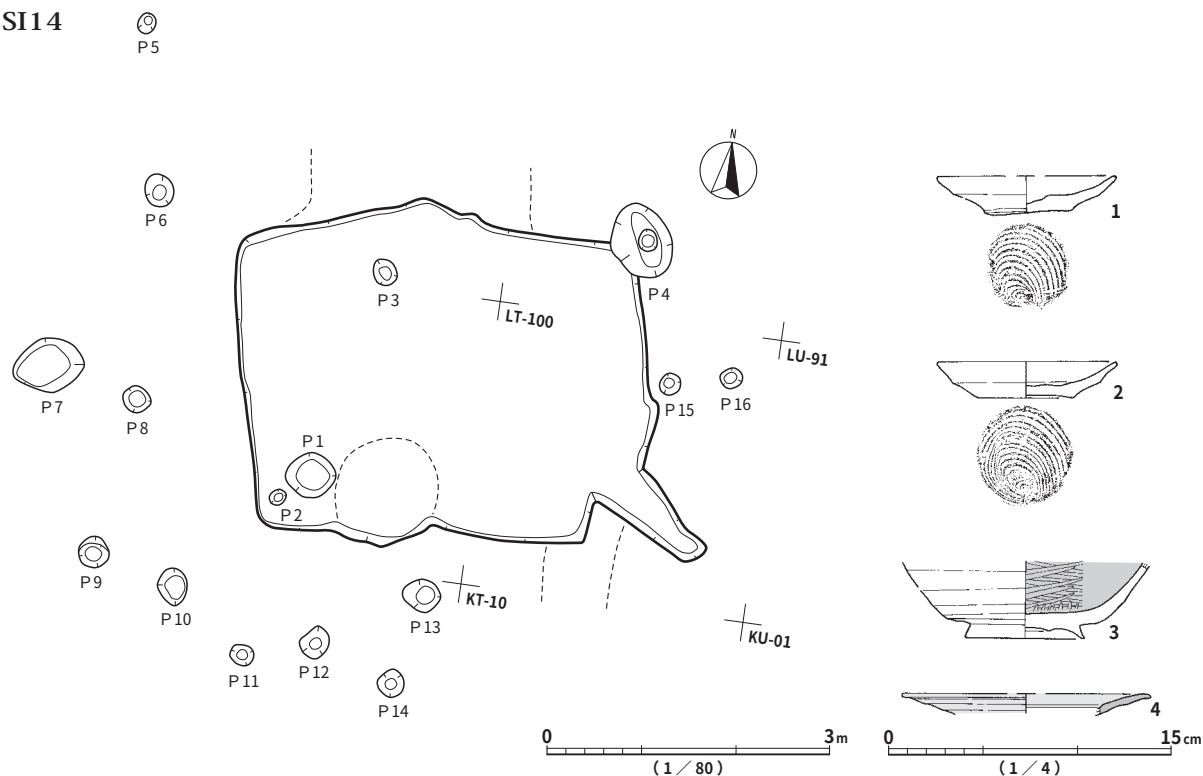


Fig.226 SI14 遺構遺物

SI15 (Fig.227・228、PL.40・146・147・154・159・163・164)

SI15は、LT-64区他に所在する。本竪穴は、スケッチに近い粗い平面図しか存在せず、不明の部位は遺構写真から描き写した。断面図はなく、レベル高の記録もない。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は3.36m(主軸)×3.45m、確認面掘形面積は10.40㎡、主軸方位はN-6.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。西辺部を中心にPit群があり、図面にはないが、調査写真ではカマド前面にも攪乱とみられる落ち込みがある。おそらくこれによって袖から燃焼部の大半は破壊されたと推定しておく。Pitに規則的な配列は認められない。破線Pitは、調査写真から描いたものである。深さは不明。壁溝は検出されていない。

出土遺物は、総重量10,702.8gであり、このうち土器は7,232.8g、瓦は3,381.0gであった。実測可能遺物は、1～7・9～11・13が土師器杯、8がカワラケ、12が土師器皿、14・15が土師器高台付杯、16～20が土師器甕、21・22が須恵器甕、土器以外では23・24が平瓦、25が磨製石斧である。遺物出土状況は、記録類が残されていない。

SI16A・B (Fig.229、PL.40・147・154・166)

SI16A・Bは、LT-44区他に所在する。SI16A・Bは調査図面がなく、SI17とともに写真から挿図を起こした。したがって、正確な図ではない。本竪穴は、掘り上がり状況から2軒の竪穴建物の重複と判断したが、遺物は区分されていない。SI17とも重複するが、新旧関係は、本竪穴のカマドがSI17によって破壊されたとすれば、SI17が新しい。SI16A・Bの新旧は不明。床面高は、調査写真によるとSI16Bがやや深い。

SI15

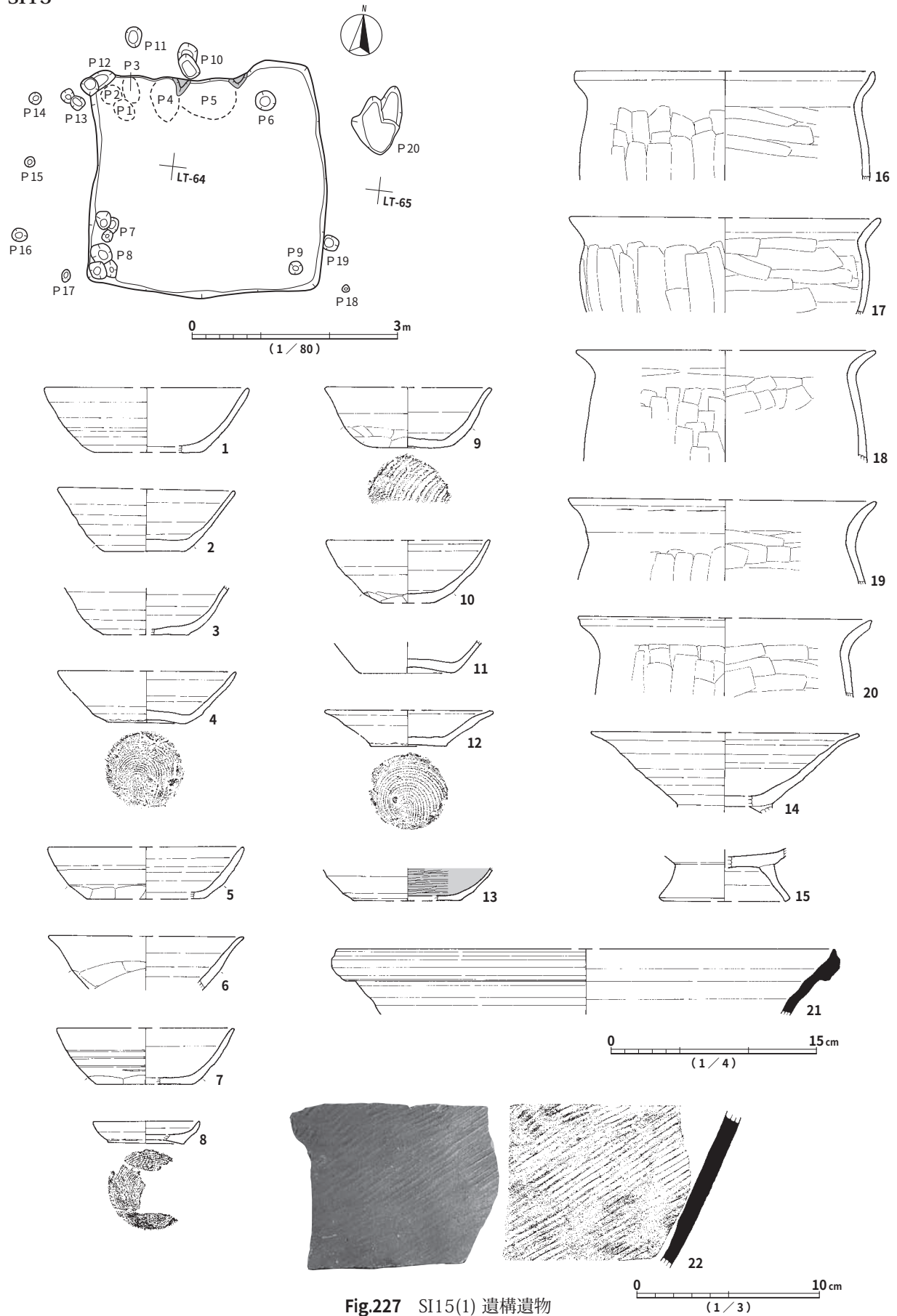


Fig.227 SI15(1) 遺構遺物

SI15

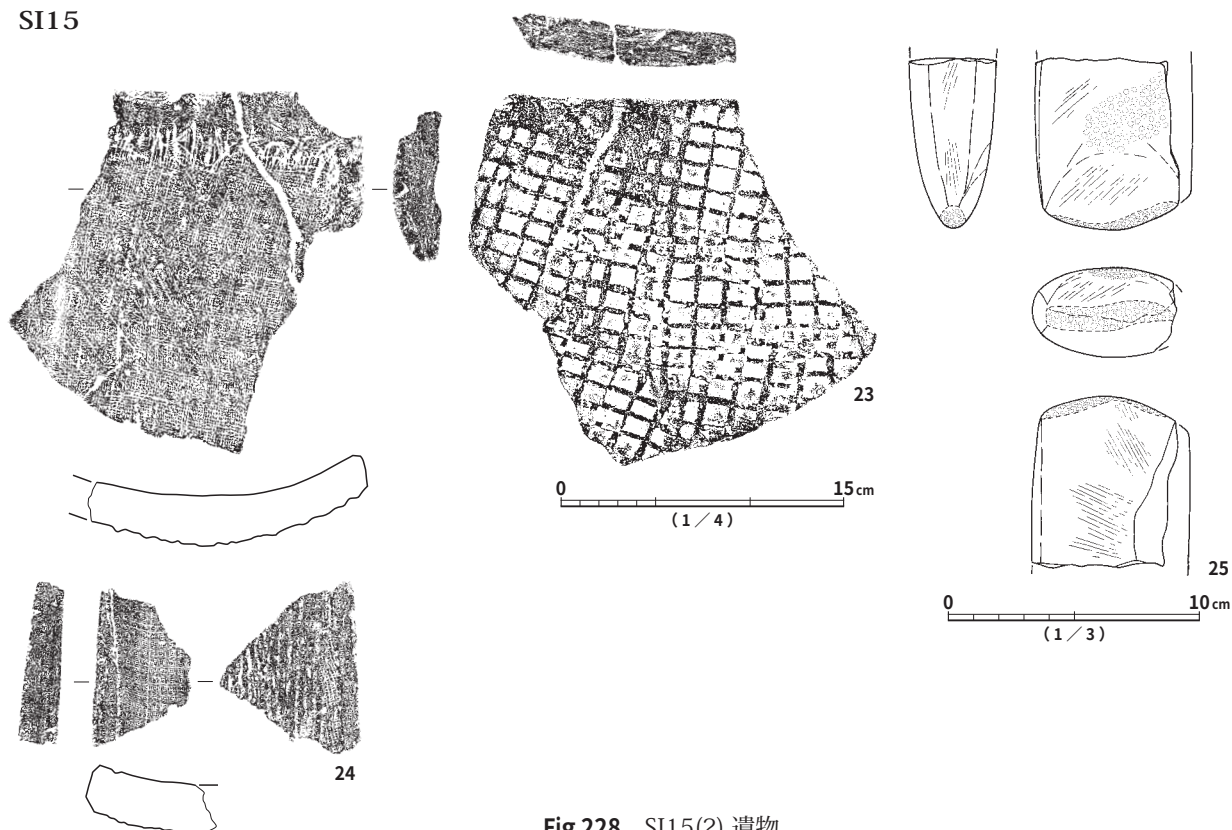


Fig.228 SI15(2) 遺物

SI16Aは、西辺部南北隅部が遺存する。竪穴規模は南北方向で3.12mを測る。南北方向を主軸とした場合の方位は、N-10.0°-Wである。カマドは検出されていない。その他屋内施設も認められない。

SI16Bは、南東隅部のみの検出であり、竪穴全体規模は明らかでない。南北方向を主軸とした場合の方位は、N-12.0°-Wである。カマドは検出されていない。その他屋内施設も認められない。中央の長方形土坑は性格など不明。

出土遺物は、総重量1,055.5gであり、このうち土器は1,049.3gであった。実測可能遺物は、1~4が土師器杯、5が土師器高台付杯、6が土師器皿、7が須恵器甕、土器以外では8が不明鉄器、9が鉄製刀子である。遺物出土状況は不明。

SI17 (Fig.229、PL.40・41・155)

SI17は、LT-44区他に所在する。本竪穴は調査図面がなく、SI16とともに写真から挿図を起こした。したがって、正確な図ではない。SI16と重複するが、新旧関係は、SI16のカマドを本竪穴が破壊したとすれば、SI17が新しい。床面高は本竪穴が最も深い。

竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は3.10m(主軸)×3.20m、カマド部を含む主軸長は3.25m、確認面掘形面積は推定で8.40㎡を測る。主軸方位はN-21.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。左右両袖と燃焼部が確認できる。袖がやや竪穴外に張り出す構造と推定する。カマド中央のPitは性格不明。支柱穴など、Pitに規則的な配列は認められない。壁溝は全周する。

出土遺物は、総重量304.0gであり、このうち土器は287.0gであった。実測可能遺物は、1が土師器甕である。調査写真によると、カマド内から出土している。

SI18 (Fig.229、PL.41・155)

SI18は、LS-18区他に所在する。本竪穴は調査図面がなく、全体図に見える概略図のみであった。挿図はこれを拡大し、写真を見ながら形状細部を描き写したものであり、記録として正確なものではない。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は2.85m(主軸)×3.00m、カマド煙道部を含む主軸長は3.25m、確認面掘形面積は8.00m²、主軸方位はN-21.0°-Eである。カマドは北壁中央にある。左右両袖と煙道部が検出されている。

竪穴内に複数のPitが存在するが、規則性は認められない。深さは不明。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量1,403.2gであり、すべて土器であった。実測可能遺物は、1が土師器碗、2～4が土師器杯である。2・3の墨書は判読できない。4は体部外面に線刻「未」をもつ。遺物出土状況は不明。

SI19 (Fig.230、PL.41・147・155)

SI19は、LT-21区他に所在する。本竪穴は調査図面がなく、全体図に見える概略図のみであった。挿図はこれを拡大し、写真を見ながら形状細部を描き写したものであり、記録として正確なものではない。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態は長方形を呈し、竪穴全体規模は3.75m(主軸)×3.10m、確認面掘形面積は11.00m²、主軸方位はN-2.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。調査写真によると、カマド前面には平瓦があり、竪穴中央には灰・粘土が分布する。Pitは竪穴外を中心に検出されているが、深さも明らかではなく、規則性を認めることはできない。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量6,590.6gであり、このうち土器は4,195.6g、瓦は2,385.0gであった。実測可能遺物は、1～9・13～15が土師器杯、10・11が土師器皿、12が土師器高台付杯、16・17が土師器小皿、18・19が土師器甕、20～22が須恵器甕である。遺物出土状況は不明。

SI20 (Fig.231、PL.41・42・147・155)

SI20は、LT-16区他に所在する。本竪穴は調査図面がないため、挿図は写真を画像処理して写した。不明の部位は遺構写真から描いたものであり、記録として正確なものではない。単独で存在し、他遺構との重複はない。

調査写真によると、本竪穴は、調査当初、竪穴東辺部付近を中心に、土器・瓦が多量に出土している。しかし、完掘時の調査写真には遺物がなく、現状で確認できる遺物も限られている。

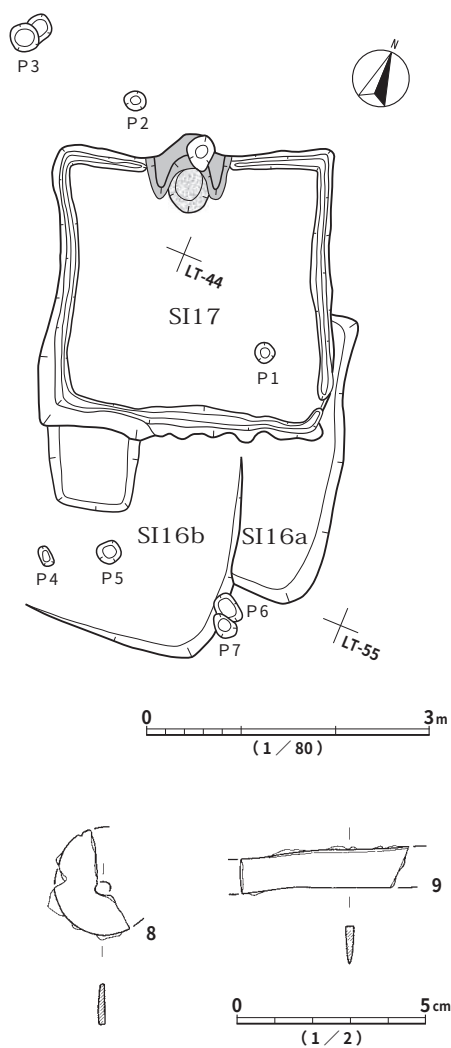
竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は3.20m(主軸)×3.40m、カマド煙道部を含む主軸長は3.60m、確認面掘形面積は10.30m²、主軸方位はN-7.0°-Wである。カマドは北壁中央にある。主柱穴など、Pitに規則的な配列は認められない。平面図にレベルの記載がないため、深さは不明。調査写真によると、北西隅部に円形の落ち込みが認められるが、詳細は不明。

出土遺物は、総重量811.6gであり、このうち土器は482.6g、瓦は235.0gであった。実測可能遺物は、1が土師器杯、2・3が土師器皿、4が土師器甕である。遺物出土状況は不明。

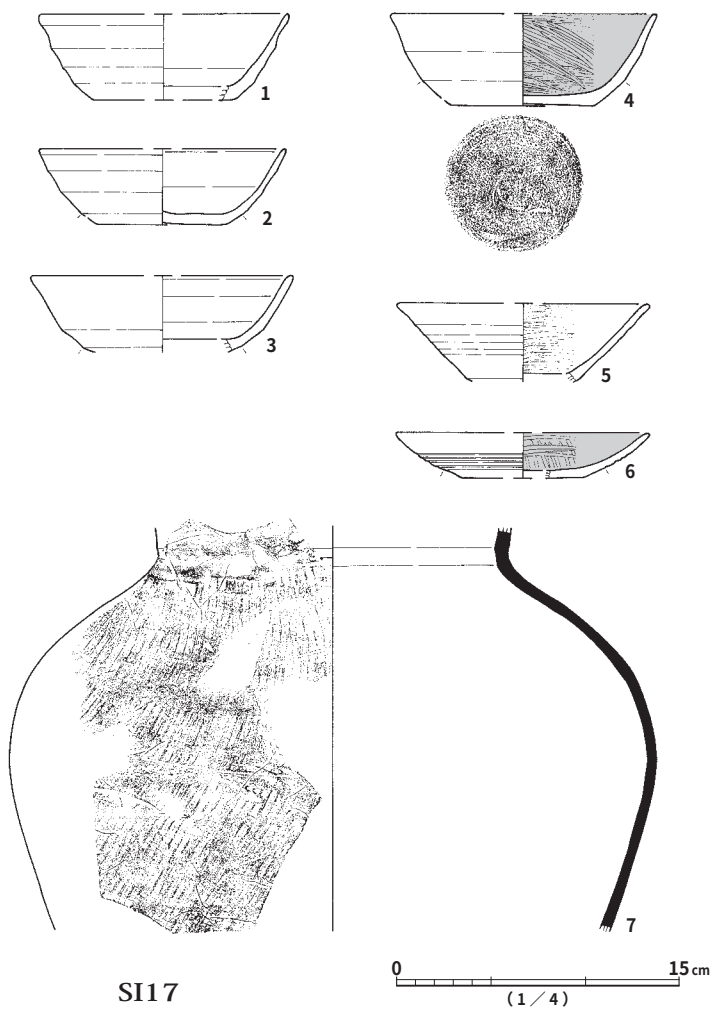
SI21A・B (Fig.231、PL.42・43・147)

SI21A・Bは、LT-38区他に所在する。本竪穴は、調査原図が存在する。レベルは、一線状十字に測点があり、これをもとに断面図が作成されている。それ以外、Pitなどの深さも不明。本遺構は、

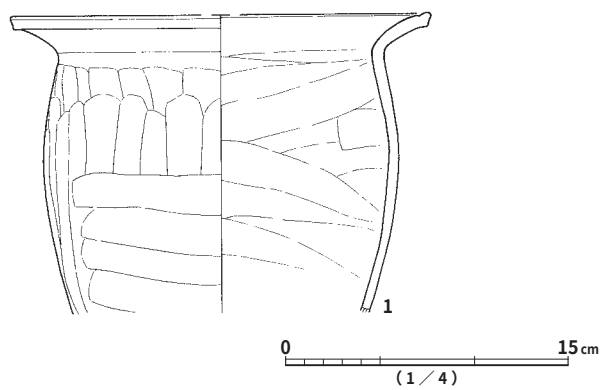
SI16・17



SI16



SI17



SI18

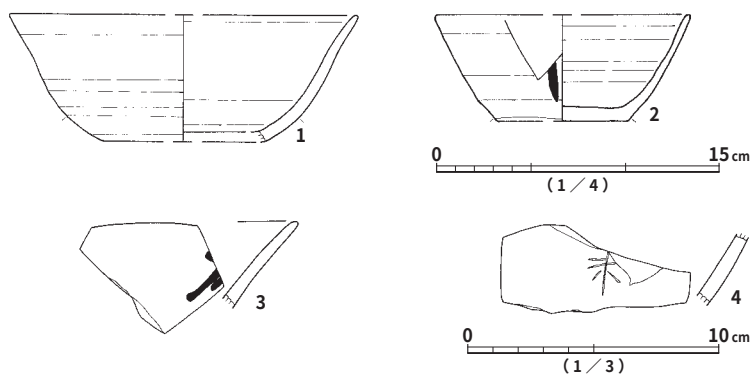
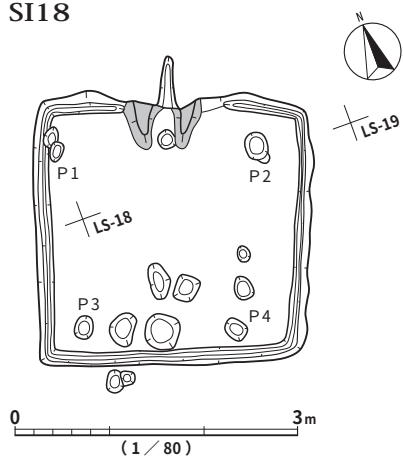
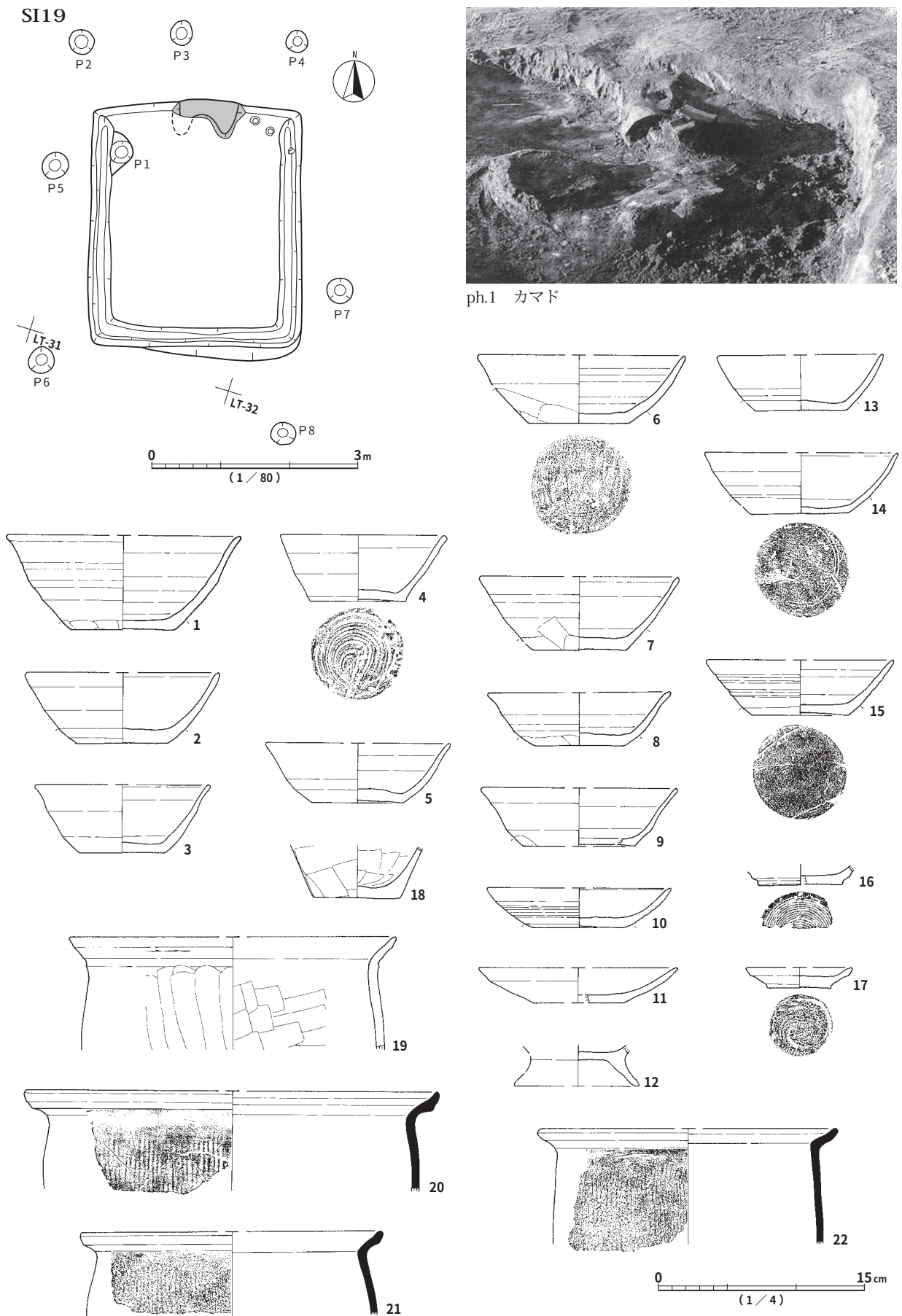


Fig.229 SI16 遺構遺物、SI17 遺構遺物、SI18 遺構遺物



2棟の竪穴の重複からなる。A・Bの新旧関係は、SI21BのカマドをAが破壊したとみればSI21Aが新しい。ただし、全景写真は、掘形面まで下げられており判然としない。A・Bの床面（掘形面）比高は、SI21Aが0.15mほど深い。P1は、SI21Bのカマド燃焼部の掘形と思われるが、P10・15などを含め、捕捉されていない掘立柱建物跡の一部の柱穴である可能性もある。

SI21Aの竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は3.07m（主軸）×3.03m、カマド煙道部を含む主軸長は3.17m、確認面掘形面積は9.10m²、確認面からの深さは0.17～0.23m程度を測る。主軸方位はN-3.0°-Eである。カマドは北壁中央にある。調査写真によると、カマド煙道部先端に瓦が埋置されている。Pitは無数検出されているが、各隅部にあるP3・5・6は、主柱穴の可能性はある。未検出の北東隅部は、調査写真によると遺物が置かれており不明。竪穴周囲の掘り込みは、壁溝というよりも掘形面であろう。

SI21Bの竪穴平面形態はやや隅の丸い方形を呈し、竪穴全体規模は3.67m（主軸）×3.58m、確認面掘形面積は推定で12.47m²、確認面からの深さは0.05～0.12m程度を測る。主軸方位はN-2.0°-Wである。カマドは、P1が燃焼部掘形の可能性がある。P10は貯蔵穴であろうか。竪穴周囲の掘り込みは、壁溝というよりも掘形面であろう。

出土遺物は、総重量1,051.5gであり、すべて土器であった。調査写真にある瓦は所在が明らかではない。実測可能遺物は、1が土師器甕、2・3が土師器小杯である。調査写真では、土師器小杯とともに軒平瓦が出土しているが（PL42）、現物を確認することができない。杯も2・3とは異なる可能性が高い。遺物出土状況は不明。

SI22A・B・C（Fig.232、PL.43・44・147・148・155・164）

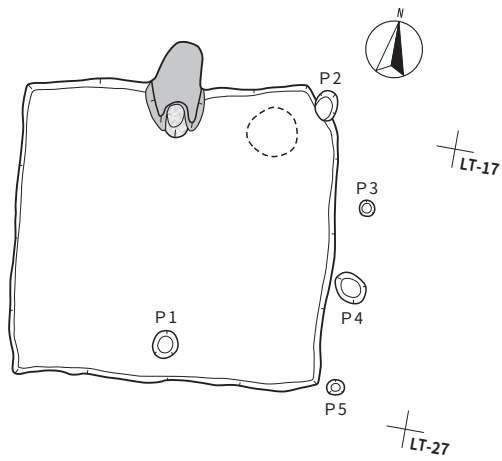
SI22A・B・Cは、MS-56区他に所在する。本竪穴は、スケッチに近い粗い平面図しか存在せず、不明の部位は遺構写真から描き写した。SI22A・B・Cは、重複する2棟の竪穴SI22B・Cと、単独のSI22Aからなる。確認時に一連の遺構としてとらえたことによるためか、同じ遺構番号が与えられ、出土遺物も区分されていない。したがって、ここでもA・B・Cとしておく。SI22B・Cの新旧関係は不明。SI22Cにカマドがなく、SI22Bに破壊された可能性もあるが、SI22Cは、一般的な竪穴建物としては明らかに規模が小さい。別に、SI22Aは、SD04と重複する。SI22A床面は、溝底面とほぼ同レベルである。新旧関係は不明。

SI22Aの竪穴平面形態は長方形を呈し、竪穴全体規模は3.33m（主軸）×2.40m、確認面掘形面積は推定で7.40m²を測る。南北方向の主軸とした場合の方位は、N-21.0°-Eである。カマドは検出されていない。本竪穴には、おそらく耕作痕とみられる攪乱が竪穴主軸方向に認められる。図では西側2列であるが、調査写真によると、ほぼ全面にわたると思われる。竪穴範囲、とくに東西壁溝は不確実である。

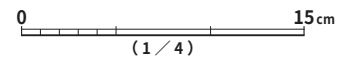
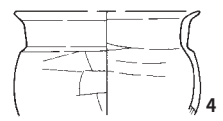
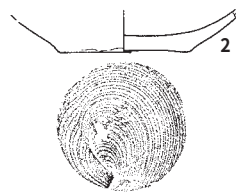
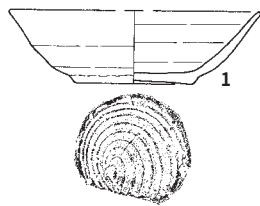
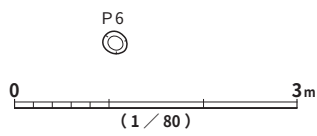
SI22Bの竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は3.13m（主軸）×3.43m、確認面掘形面積は9.60m²を測る。主軸方位はN-106.0°-Eである。カマドは東壁北側にある。左右両袖と燃焼部が検出されている。多数のPitがあり、P1・7・11・14は主柱穴の可能性はある。ただし、すべて深さは不明。壁溝はほぼ全周する。

SI22Cの竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は1.80m（主軸）×1.95m、確認面掘形面積は推定で3.50m²を測る。南北方向を主軸とした場合の方位は、N-16.0°-Eである。カマドは検出さ

SI20



ph.1 調査状況



SI21

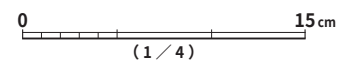
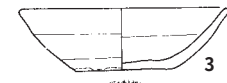
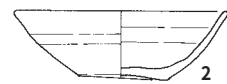
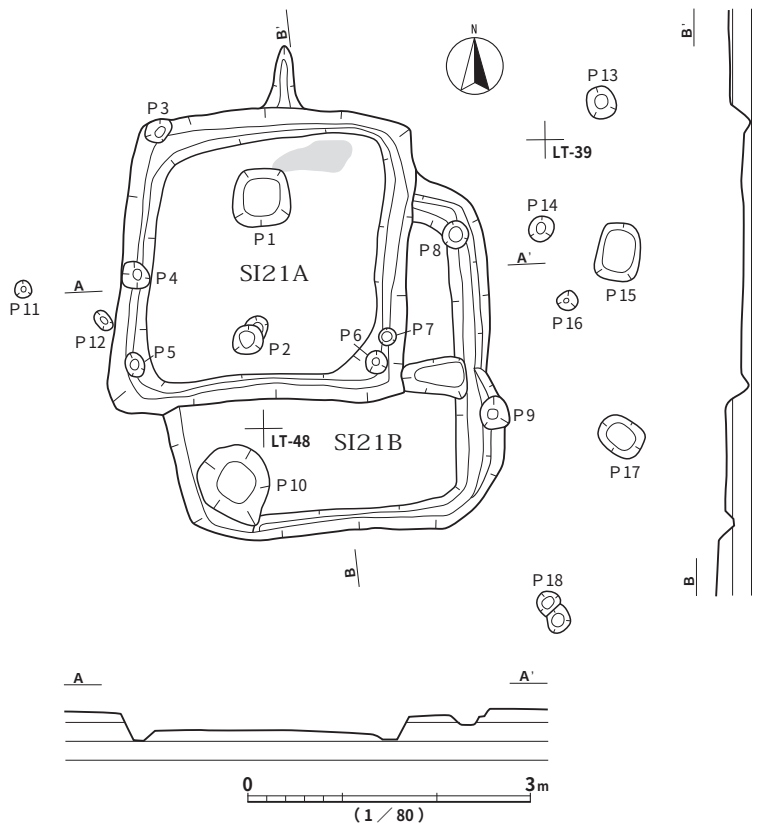


Fig.231 SI20 遺構遺物・調査状況、SI21 遺構遺物

SI22

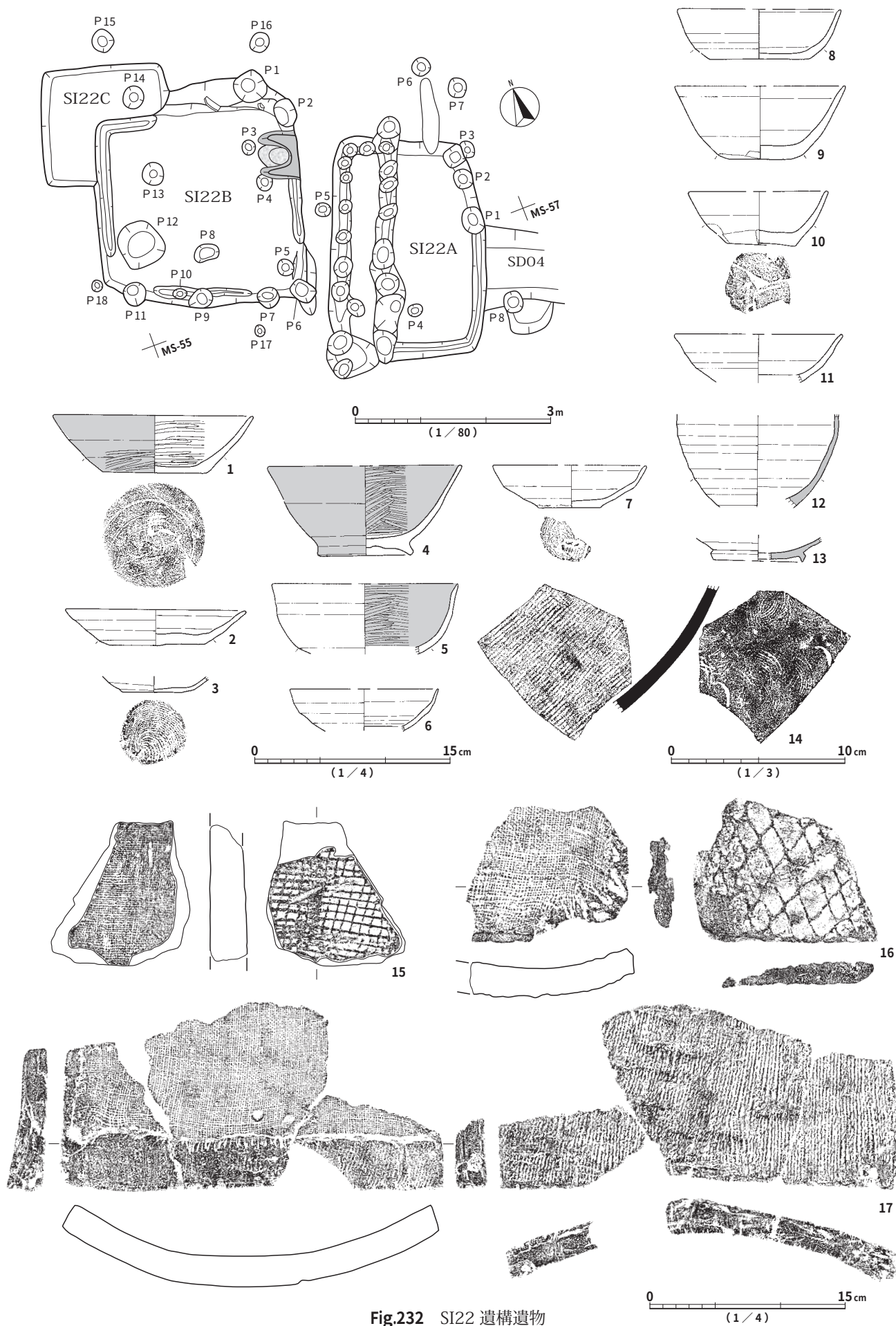


Fig.232 SI22 遺構遺物

れていない。

出土遺物はA・B・C分離できない。総重量27,629.4gであり、土器は1,917.4g、瓦は25,602.0gであった。実測可能遺物は、1・3・6～11が土師器杯、2が土師器皿、4が土師器高台付椀、5が土師器碗、12が灰釉壺、13が灰釉高台付椀、14が須恵器甕、土器以外では15～17が平瓦である。出土状況は不明。調査写真では、SI22A北東側とSI22C北辺部に瓦がみられるが、特定することはできない。

SI23 (Fig.233、PL.44・166)

SI23は、MS-60区他に所在する。本竪穴は調査図面が存在せず、全体図に見える概略図のみであった。不明の部位は一部遺構写真から描き写した。単独で存在し、他遺構との重複はない。

竪穴平面形態はややいびつな台形を呈し、竪穴全体規模は3.15m(主軸)×3.10m、確認面掘形面積は9.00㎡を測る。南北方向を主軸とした場合の方位は、N-24.0°-Eである。スケッチ略図に近い全測図では、西壁にカマドを1基もつようであるが、詳細は明らかでない。主柱穴など、Pitに規則的な配列は認められない。四隅が深くなるが、これは竪穴掘形面と思われる。

出土遺物は、総重量92.5gであり、このうち土器は90.0gであった。実測可能遺物は、1の環状不明鉄器のみである。

SI24 (Fig.233、PL.44・148・155)

SI24は、MS-70区他に所在する。本竪穴は調査原図がなく、修正図のみ存在する。断面図はなく、レベル高の記載もない。竪穴西側でSD04と重複する。床面は、SD04溝底面はほぼ同レベルである。新旧関係は不明。北東隅部の長方形土坑は、近年の芋穴であろう。

竪穴平面形態はややいびつな長方形を呈し、竪穴全体規模は4.93m(主軸)×3.85m、カマド煙道部を含む主軸長は5.31m、確認面掘形面積は18.40㎡を測る。主軸方位はN-84.0°-Eである。カマドは東壁中央にある。図面では竪穴外の粘土範囲のみであり、詳細は不明。

主柱穴など、Pitに規則的な配列は認められない。深さは不明。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、総重量1,619.9gであり、すべて土器であった。実測可能遺物は、1・2が土師器甕、3が土師器高台付椀である。遺物出土状況は不明。

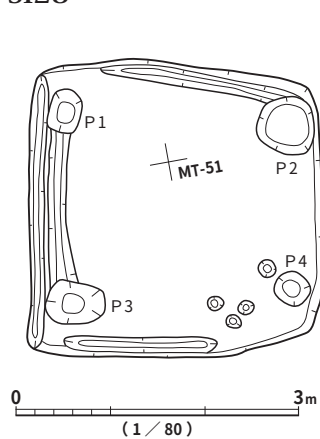
SI25 (Fig.233、PL.44・148・149・155・166)

SI25は、MS-80区他に所在する。本竪穴は調査原図がなく、修正図のみ存在する。断面図はなく、レベル高の記載もない。竪穴西側でSD02と重複する。床面はSD02溝底面よりやや深い。新旧関係は不明。南側にも溝状の土坑が接続するが、その性格、新旧関係は明らかでない。図面では、本竪穴の方が深く表現されているが、調査写真では、溝状の土坑が深い。

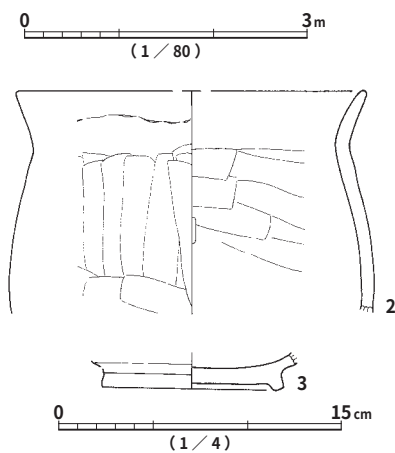
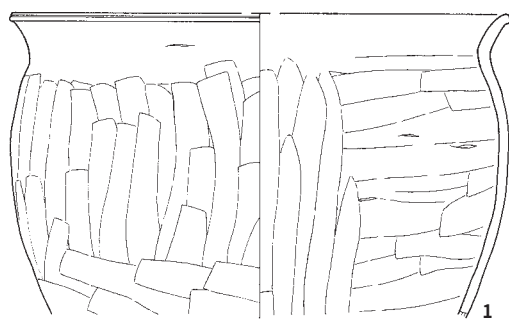
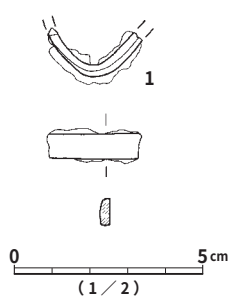
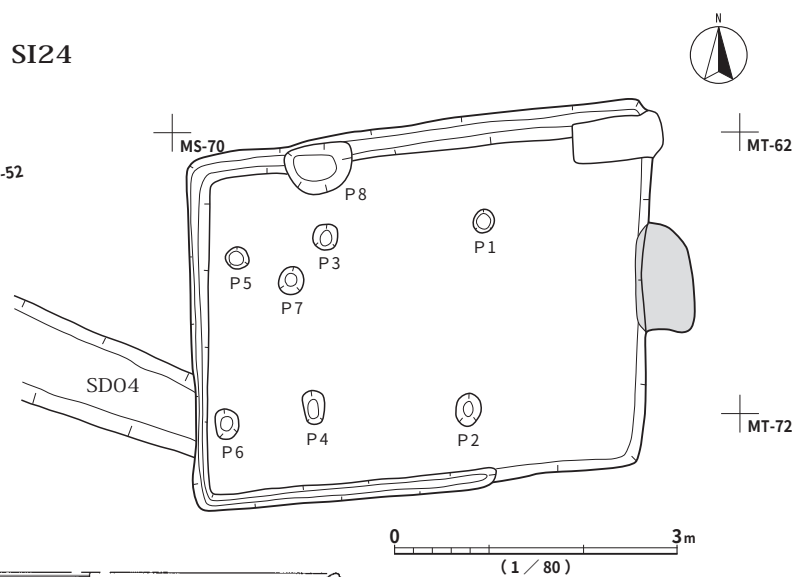
竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴全体規模は2.62m(主軸)×2.54m、確認面掘形面積は推定で6.30㎡を測る。南北方向を主軸とした場合の方位は、N-3.0°-Eである。カマドは検出されていない。調査写真によると、本竪穴内には無数のPitがあるが、これは、ハードルーム上面の竪穴掘形面と思わせる。床面検出時の状況が明らかではないため、屋内施設などの詳細は不明。

出土遺物は、総重量1,878.9gであり、このうち土器は1,291.0gであった。実測可能遺物は、1～3が土師器杯、4が土師器碗、5が土師器小杯、6が土師器高台付杯、7が瀬戸美濃播鉢である。1は体部外面に「経所」、2は底部外面に「丈」の墨書をもつ。3は判読できない。土器以外では8が鉄製紡錘車、9が不明鉄器である。遺物出土状況は不明。

SI23



SI24



SI25

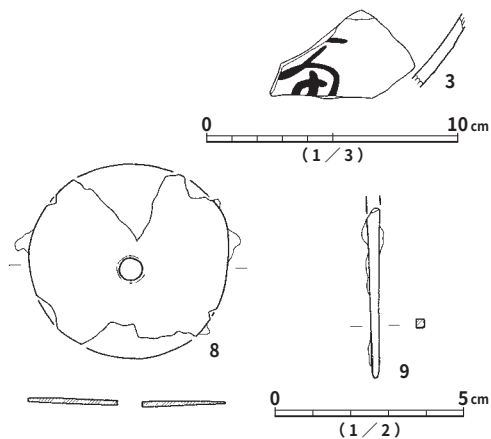
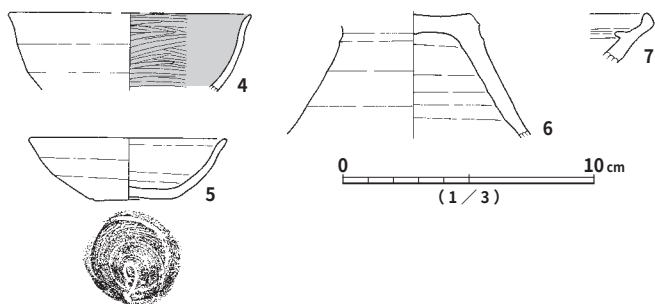
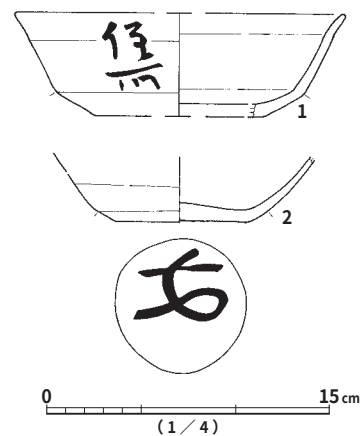
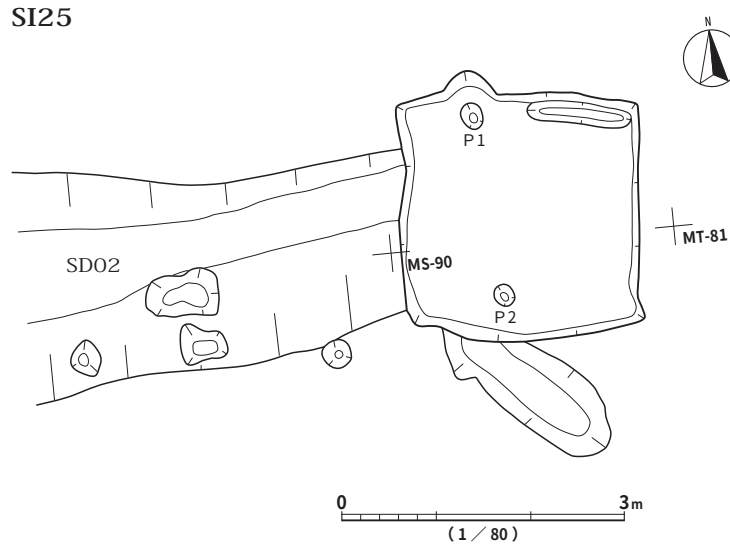


Fig.233 SI23 遺構遺物、SI24 遺構遺物、SI25 遺構遺物

SI26

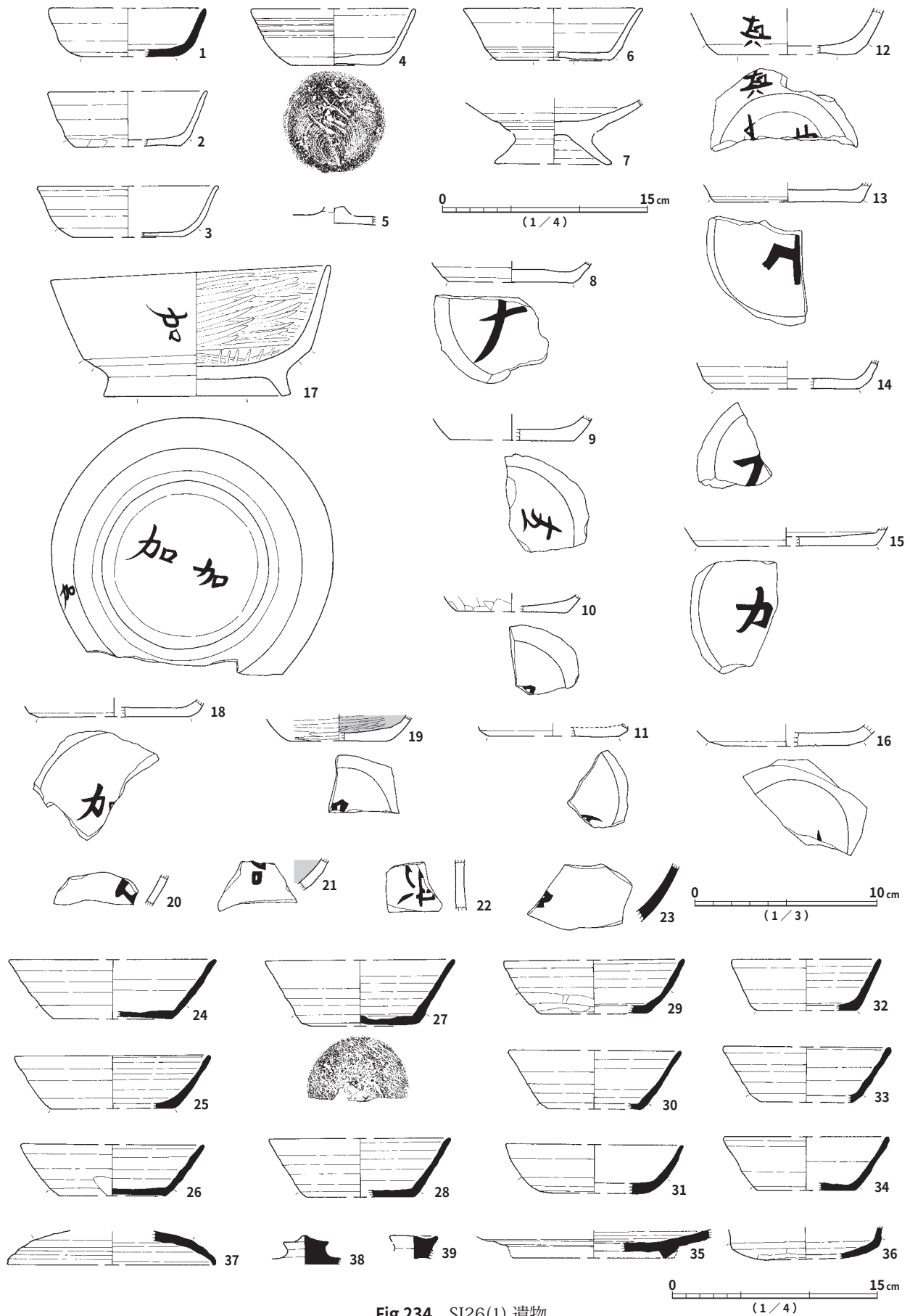


Fig.234 SI26(1) 遺物

SI26

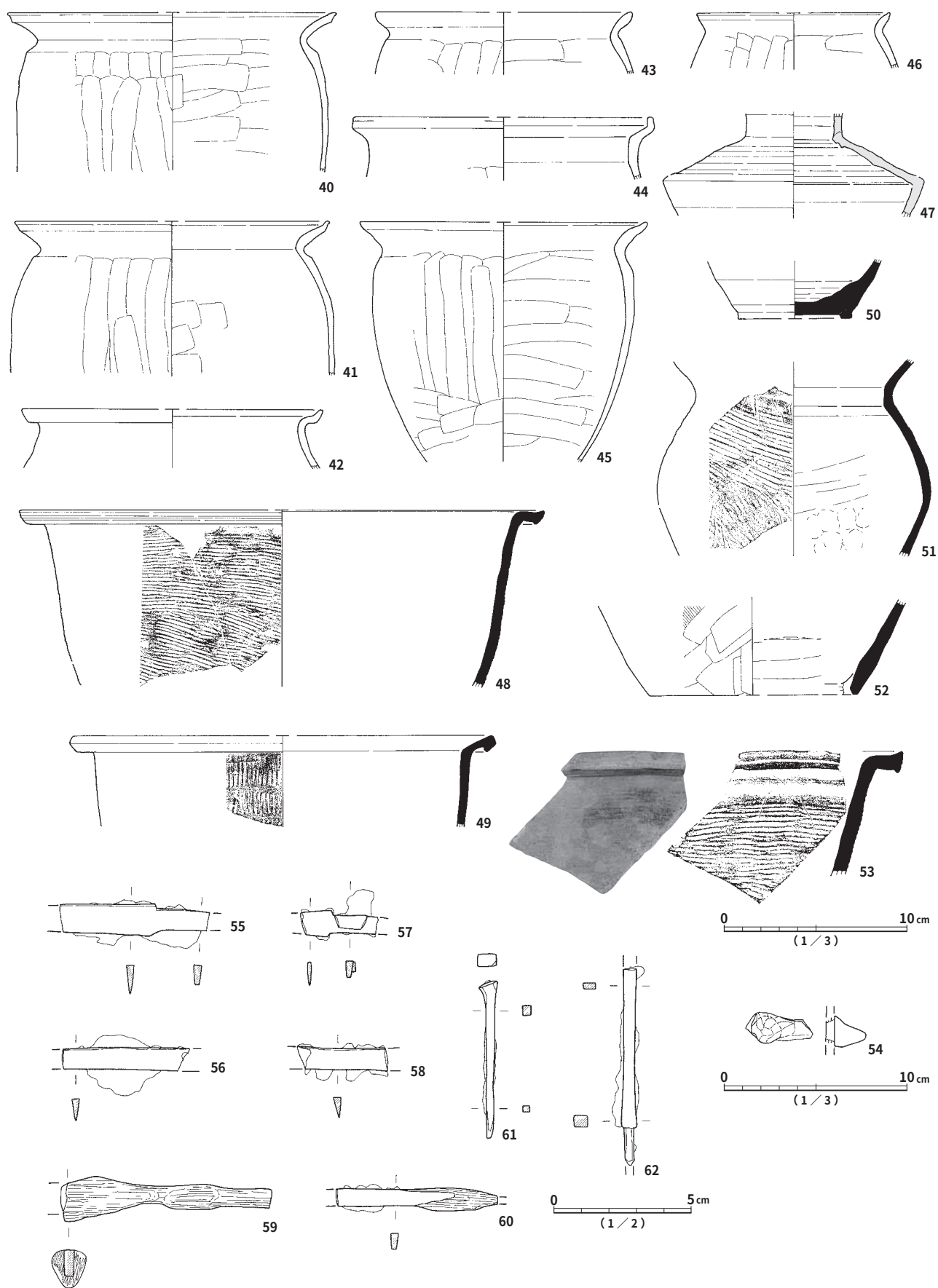


Fig.235 SI26(2) 遺物

SI27

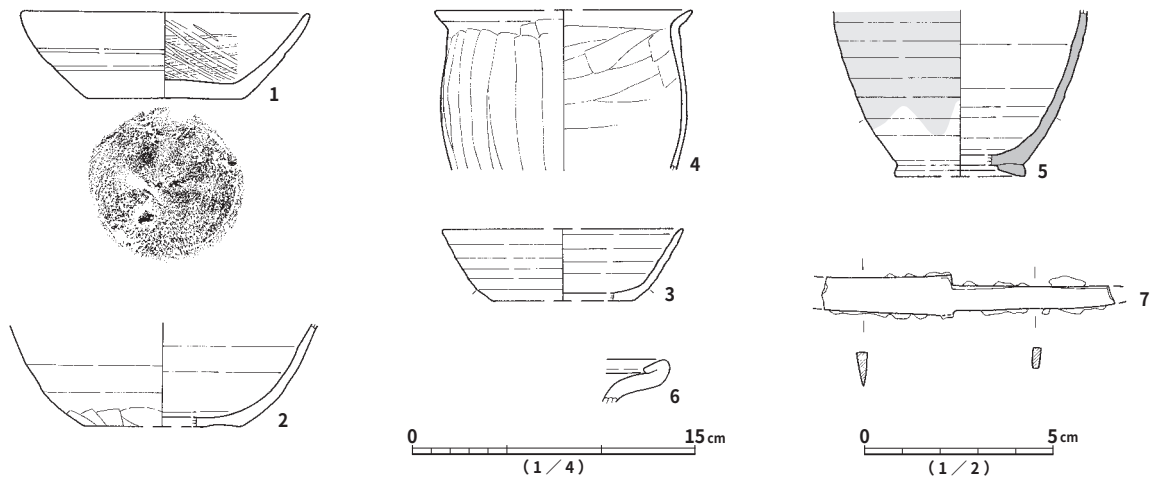


Fig.236 SI27 遺物

SI26 (Fig.234・235、PL.148・150・155・156・166)

調査時遺構番号は第2号住居址である。しかし、調査図面が一切存在せず、全体図上にもない。

出土遺物は、総重量41,530.3gであり、このうち土器は39,849.2g、瓦は86.0gであった。実測可能遺物は、1・23～34・36が須恵器杯、2～4・6・8～16・18～20・22が土師器杯、5が土師器杯蓋、7・17が土師器高台付杯、21が土師器皿、35が須恵器盤、37が須恵器杯蓋、38・39が須恵器蓋、40～46が土師器甕、47が灰釉広口壺、48・49・52・53が須恵器甕、50が須恵器壺、51が須恵器甕、54が土師器甕である。墨書が多数ある。12は体部外面に「真」、底部は不明。13は則天文字か。10・14・15・17～21は「加」であり、17は体部外面と底部外面の3か所にある。8・9・11・16・22・23は判読できない。土器以外では55～58が鉄製刀子、59・60が不明鉄器、61が鉄製釘、62が鉄鏃である。

SI27 (Fig.236、PL.148・156・166)

調査時遺構番号は第26号住居址である。しかし、調査図面が一切存在せず、全体図上にもない。

出土遺物は、総重量625.8gであり、このうち土器は568.0gであった。実測可能遺物は、1～3が土師器杯、4が土師器甕、5が灰釉長頸壺、6が伊勢型鍋、土器以外では7が鉄製刀子である。

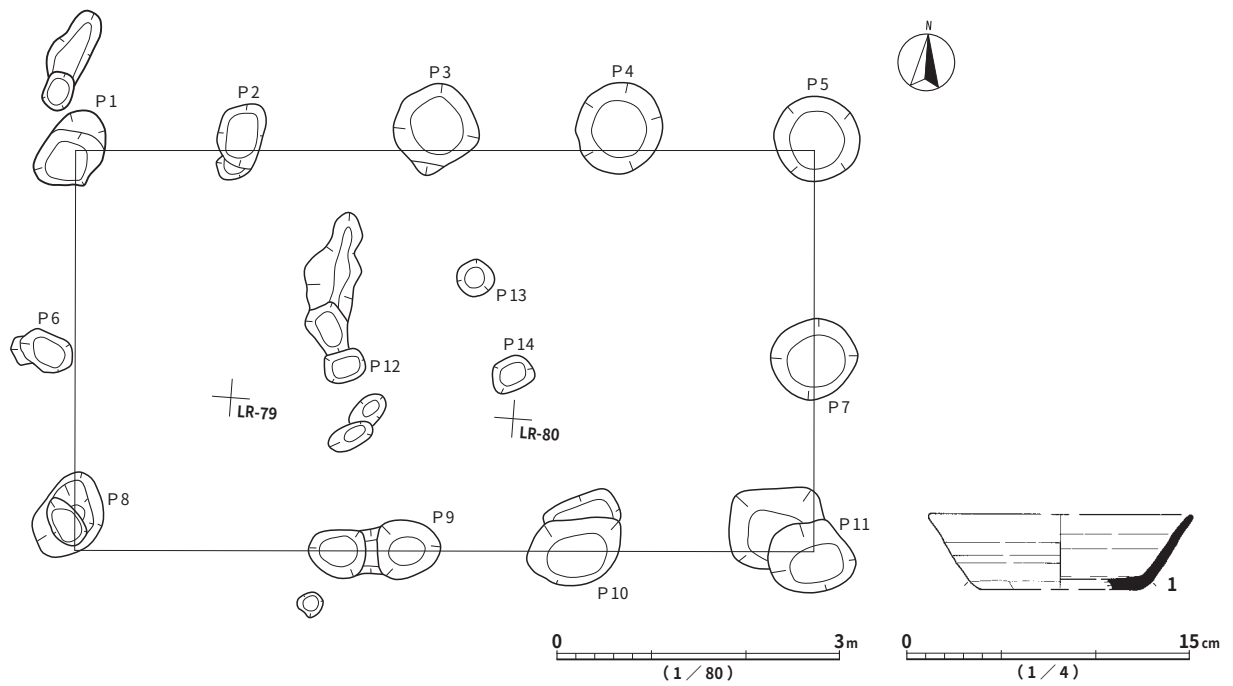
第2節 掘立柱建物

SB01 (Fig.237、PL.35・36・45・157)

SB01は、LR-69区他に所在する。本遺構は、スケッチに近い粗い平面図しか存在せず、写真と見比べ明らかに形状が異なるため、西側に接するSI01を基準として、斜め写真を画像処理し作図した。輪郭以外の細部の表現については、写真を見ながら描き写しているの、正確ではない。断面図はなく、レベル高の記載もない。SI01と重複するが、新旧関係は不明。

建物は、桁行4間×梁行2間の東西棟である。主軸方位はN-86.0°-Eである。規模は、7.80m×4.20m、面積は33.00㎡を測る。P1・2・6・8～11は柱抜き取り痕が認められる。側柱建物跡で、中央部に浅い小Pitと溝が桁行方向に認められることから、間仕切りが存在した可能性がある。

SB01



SB02

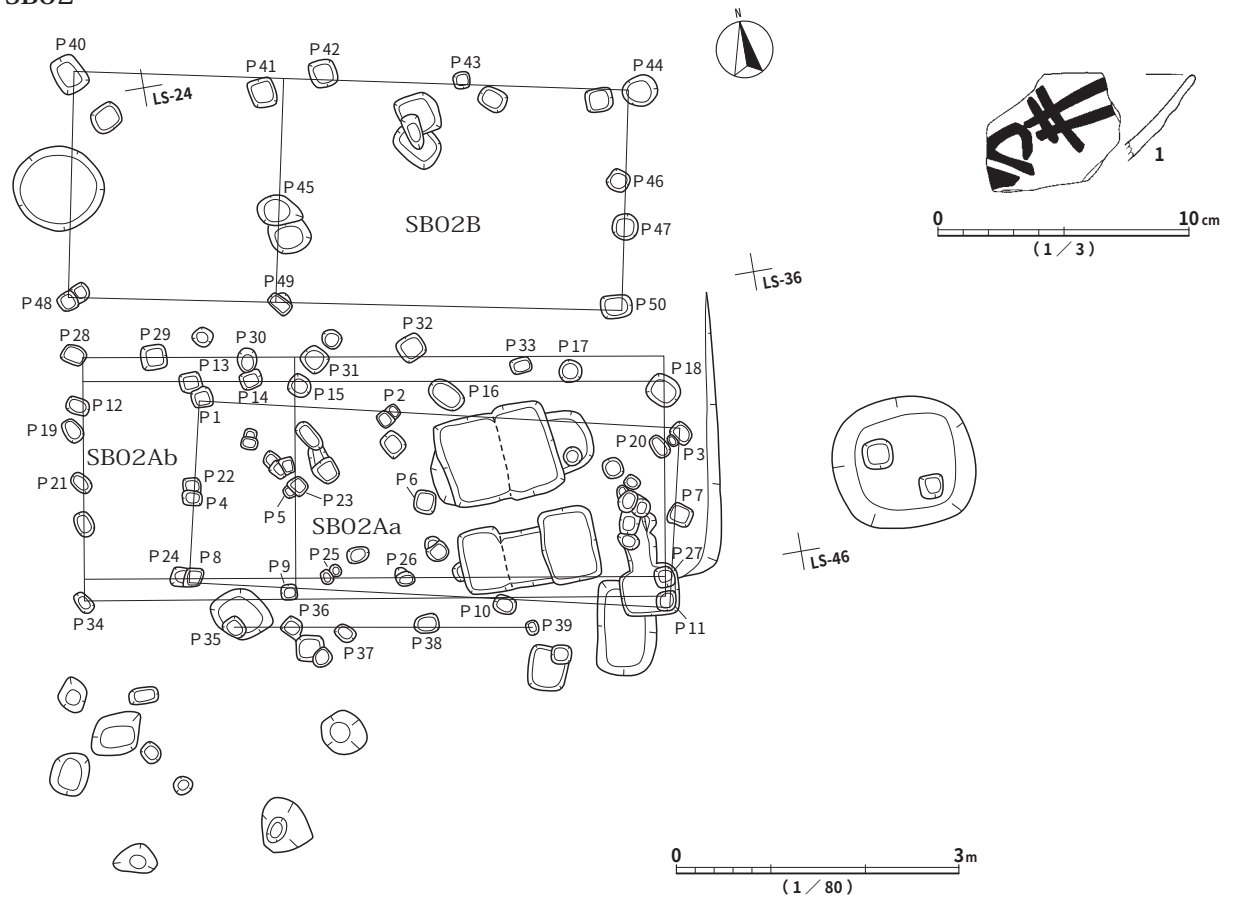


Fig.237 SB01 遺構遺物、SB02 遺構遺物

SB03

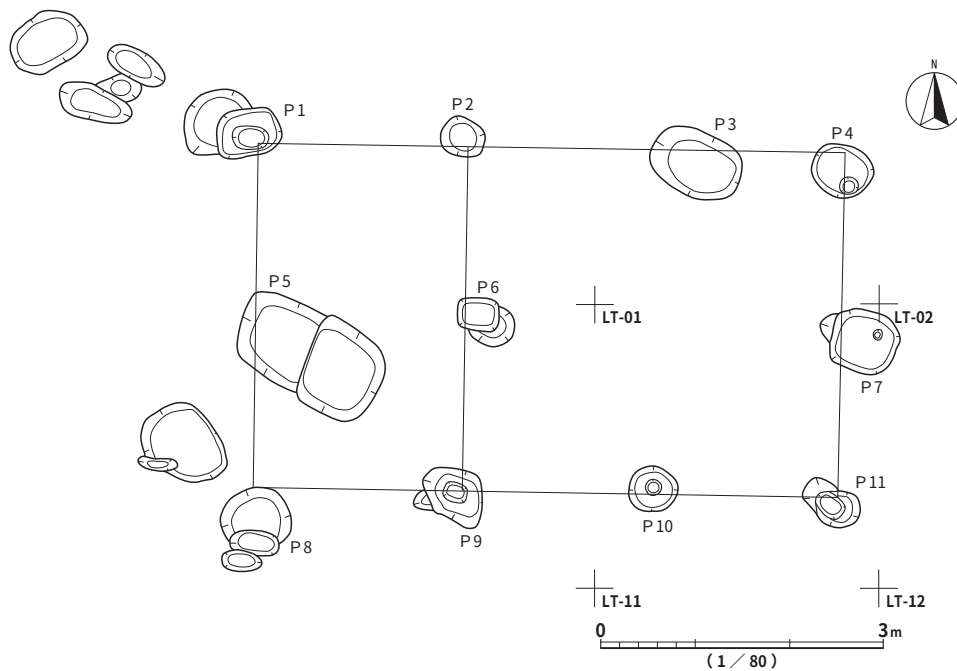


Fig.238 SB03 遺構

出土遺物は、1が須恵器杯である。注記が「南床面」とあり、おそらく確認面での出土であろう。

SB02A・B (Fig.237, PL.45・150・157)

SB02は、LS-24区他に所在する。SI02の北側に展開するPit群で、最低3棟の掘立柱建物跡が存在する。一部の掘立柱掘形が全体図にある以外、調査原図は存在しない。挿図は、隣接するSI02を基準として、斜め写真を画像処理し作図した。輪郭以外の細部の表現については、写真を見ながら描き写しているため、正確ではない。断面図はなく、レベル高の記載もない。

調査写真によると、建物群は、切り土による浅いテラスの上に展開していたと考えられる。柱穴群は、南北二群に大別でき、南側は建物A・B、北側は建物Cを復原した。

SB02Aaは、切り土整地跡と若干方位を異にするので、本格的な整地を実施しない当初の建物跡と推測する。方形土坑は建物にともなうか否か不明。規模は、5.10m×1.90m、面積は9.40㎡、建物方向はN-77.0°-Wである。

SB02Abは、切り土整地後の建物である。方形土坑は本遺構にともなう可能性が高い。ただし、建物機能時に土坑群が開口していたか否かは定かでない。規模は、6.15m×2.55m、面積は15.60㎡、建物方向はN-81.0°-Wである。

SB02Bは、北側に単独で存在する。規模は、5.85m×2.40m、面積は14.00㎡、建物方向はN-78.0°-Wである。桁行方向がSI02Abと一致し、西側の梁行はSI02Abからの延長に位置することから、SI02Abと同時期と思われ、建物が繋がっていた可能性がある。

出土遺物は、1が土師器杯である。墨書は「□井」か。出土状況は不明。

SB03 (Fig.238, PL.41・45)

SB03は、LS-10区他に所在する。スケッチに近い粗い平面図しか存在しない。調査写真と見比べ

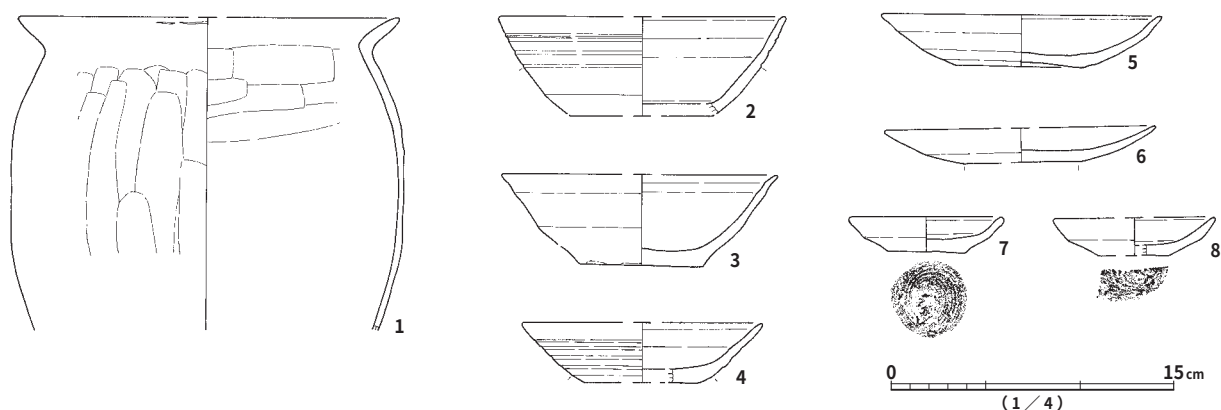


Fig.239 不明掘立柱建物跡 遺物

明らかに形状が異なる部分は描き直している。断面図はなく、レベル高の記載もない。単独で存在し、他遺構との重複はない。

建物は、桁行3間×梁行2間の東西棟である。主軸方位はN-89.0°-Wである。規模は、6.20m×3.65m、面積は22.50㎡を測る。SI01と同じ側柱建物で、棟行方向がほぼ一致する。また、SI01で間仕切り状に認められた桁行方向の小ピット列が本遺構では明瞭に残っている(P6)。P5を含む長方形土坑も、本遺構にともなう可能性がある。

出土遺物は確認できない。

不明掘立柱建物 (Fig.239、PL.148・156・157)

出土遺物で、注記に遺構番号のない「掘立」がある。SB01～03のいずれかに対応する可能性もあるが特定できない。一括掲載しておく。

第3節 溝

溝については、個別図面が一切ない。調査写真では、一部に土層観察用のベルトが残されているが、図面は確認できない。

SD01A・B (Fig.240、PL.35・45・46・157・159・166)

上総国分僧寺跡の寺院地外郭溝である。南北溝をSD01A、東西溝をSD01Bとしておく。これは、本遺跡での遺構番号である。

本調査では、公共座標にもとづく測量を行ってはおらず、公共座標との照合は、土地区画整理事業現況図(1/500)を基本図とし、調査区南側の隣接道路と南側僧寺跡調査区の外郭溝との接続をおおよその基準としたものであり、SD01を含む本調査区には絶対的な精度はない。

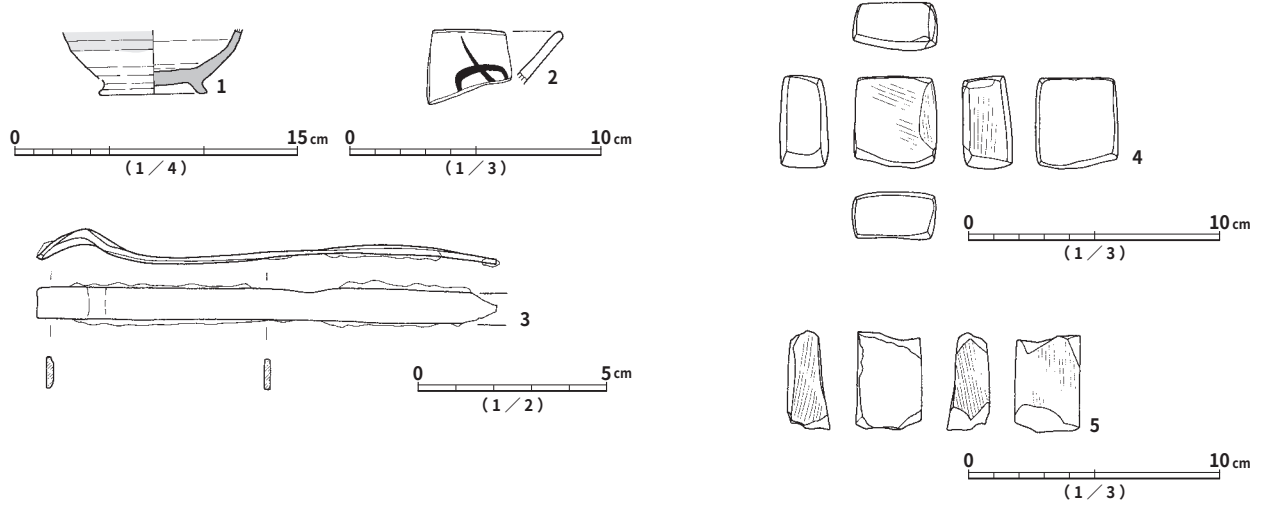
SD01A・Bは、LR-46～KR-06区他に所在する。SD01Aの検出距離は19.8m、SD01Bは4.5mであり、SD01Aの走行方向は、N-6.0°-Eである。幅は1.9m程度で、断面は逆台形を呈する。深さは不明。

現状で確認できる出土遺物は、総重量97.0gにすぎない。実測可能遺物は、1が三彩小壺、2が土師器杯である。2の墨書は判読できない。土器以外では3が不明鉄器、4・5砥石である。

SD02 (Fig.240～242、PL.46・148・149・157・159・166)

SD02は、LR-05～MS-79区他に所在する。ゆるやかな弧状を呈し、底面はわずかに蛇行する。検出距離は44.6m、幅は1.8～3.6m、走行方向はN-82.0°-Eである。深さは不明。道路跡の可能性

SD01



SD02

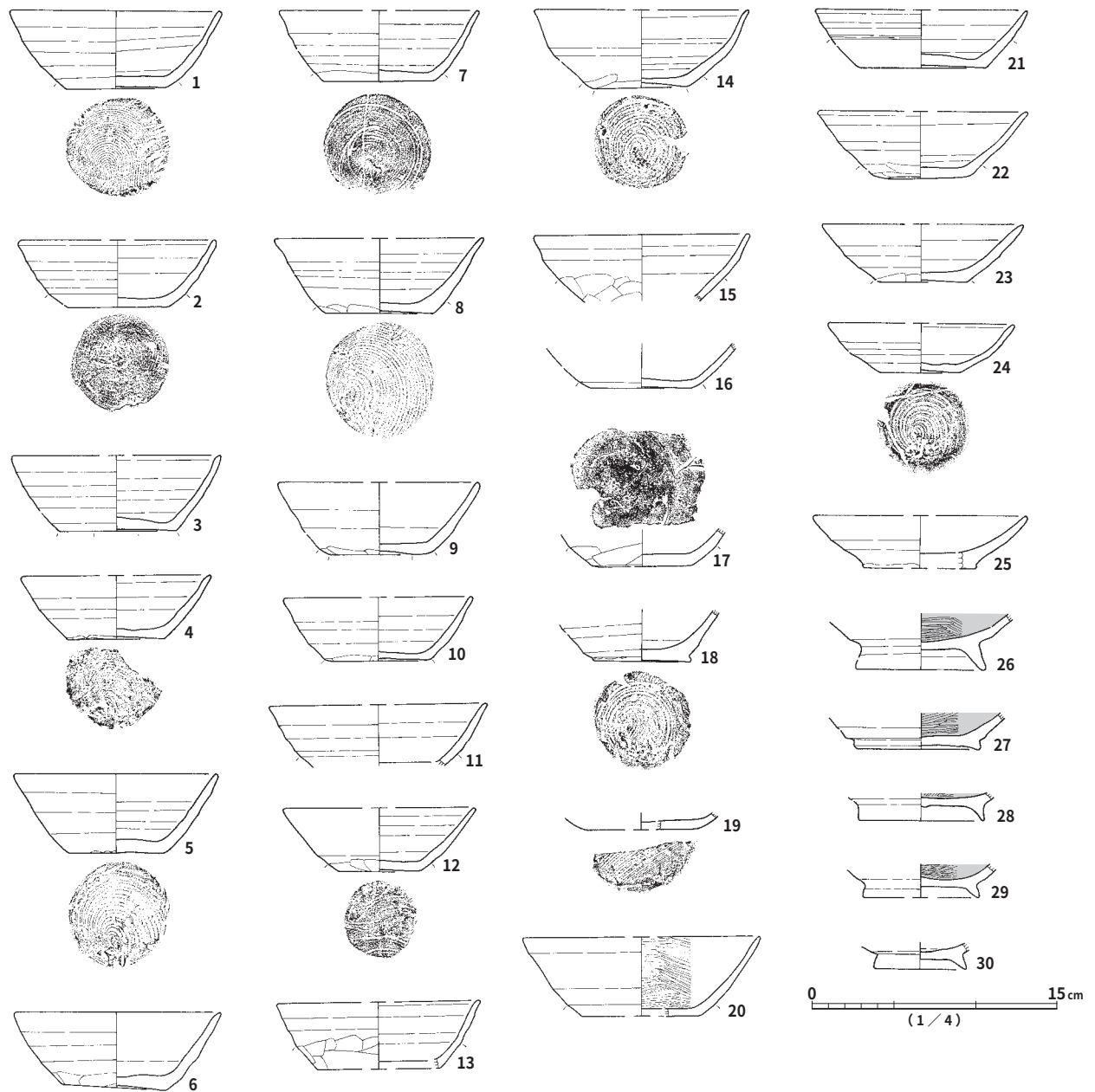


Fig.240 SD01 遺物、SD02(1) 遺物

SD02

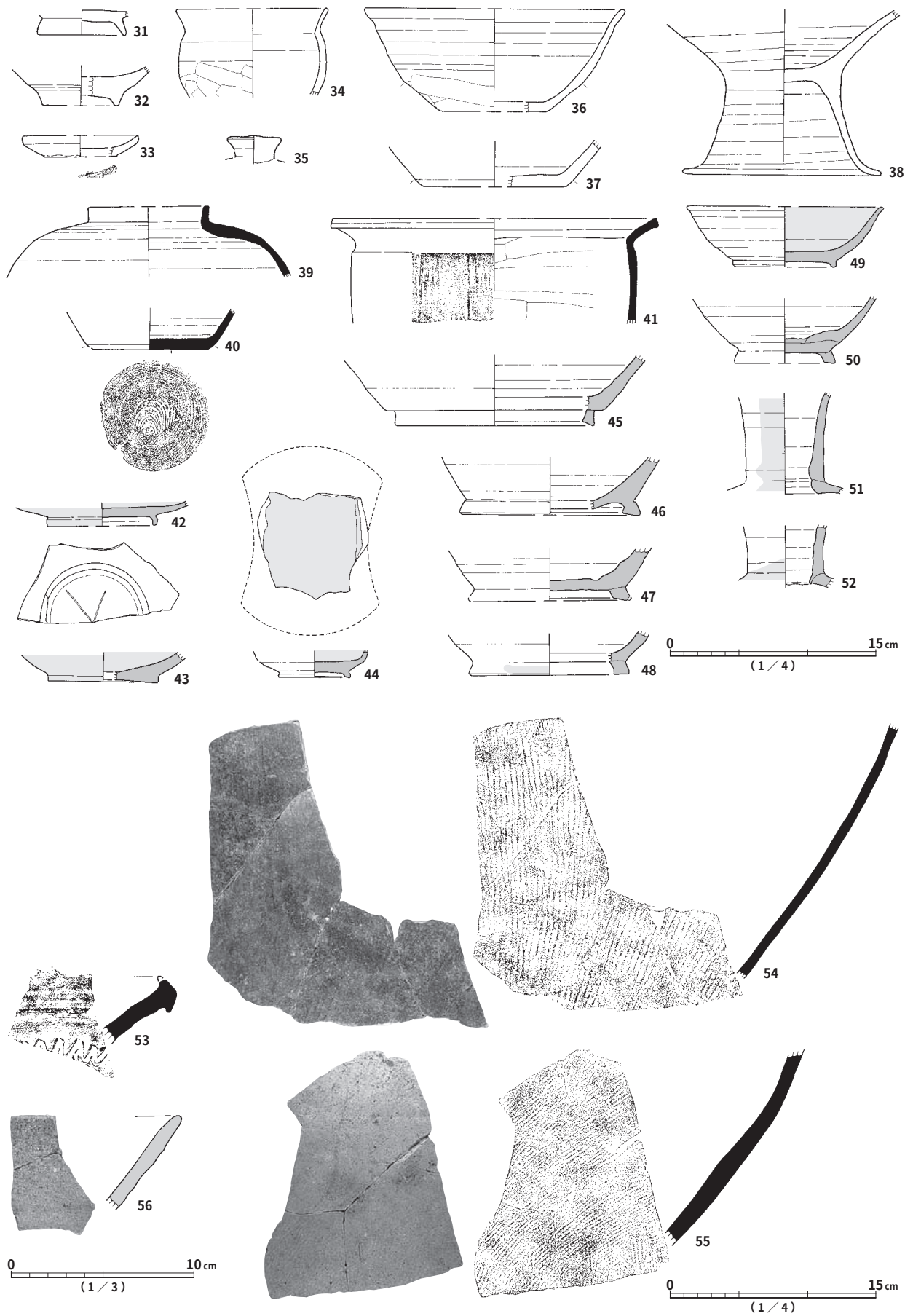


Fig.241 SD02(2) 遺物

SD02

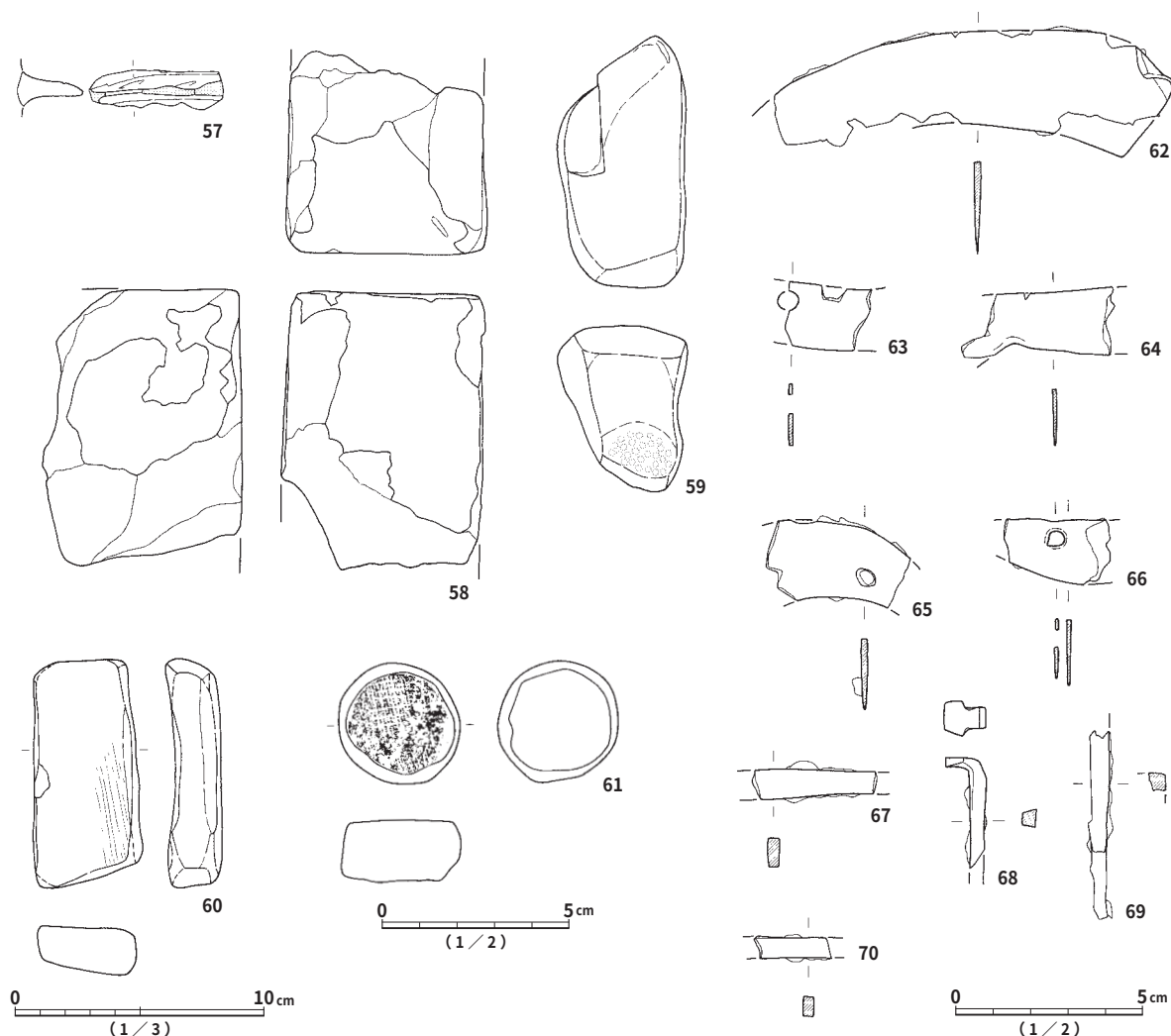


Fig.242 SD02(3) 遺物

が考えられるが、硬化面など不明。

出土遺物は、総重量7,046.2gであり、このうち土器は5,565.7gであった。釈然としないが、瓦は存在しない。実測可能遺物は、1～23が土師器杯、24・25が土師器皿、26・28・30～32が土師器碗、27・29が土師器高台付碗、34が土師器甕、36・37が土師器鉢、38が土師器高台付杯、33がカワラケ、35が土師器杯蓋、39が須恵器短頸壺、40が須恵器杯、41・53～55が須恵器甕、42が緑釉陶器高台付碗、43が緑釉陶器碗、44が灰釉陶器耳皿、45が灰釉陶器平瓶、46～48・50～52が灰釉陶器壺、49が灰釉陶器高台付碗、56が渥美産陶器片口鉢、57が置きカマド、土器以外では59が敲石、60が砥石、58が埴、61が円盤状製品、62が鉄製鎌、63・64・67・69・70が不明鉄器、65・66が鉄製穂摘鎌、68が鉄製釘である。

本遺構には、「東西溝」、「EW溝」などの注記がある。SD03はまったく遺物が確認できないことから、一部SD03が混じる可能性もあると思われる。

SD03 (PL.46)

SD03は、KR-06～KS-02区他に所在する。調査区南西側でSD01Aと直交する。調査写真によると、

SD03がわずかに深い。検出距離は約22.0m、走行方向はN-86.0°-Wである。

出土遺物は、確認できない。

SD04 (PL.43・44・46)

SD04は、MS-56～MS-80区他に所在する。ほぼ直線的で、SI22AとSI24を繋ぐように検出されている。検出距離は11.8m、幅は1.1m、走行方向はN-60.0°-Wである。深さは不明。断面はゆるやかな皿状を呈している。

出土遺物は確認できない。調査直後の概要報告に、検出遺構として「集落内通路」がある（平野元三郎 1973「下あらく遺跡」『日本考古学年報24(1971年度)』日本考古学協会）。本遺構をさしている可能性が高いが、詳細は不明。

第4節 その他の遺物

Fig.243は、奈良・平安時代以外の土器を一括した。確認できる奈良・平安時代以前の遺物はきわめて少ない。

1～7は縄文時代早期井草式、8・9は中期阿玉台式、10～12は加曽利E式である。13は、単節LR縄文に単沈線施文による集合沈線文を描く。判然としませんが、弥生時代中期宮ノ台式に比定しておく。Fig.245-34の小形磨製石斧も弥生時代中期の可能性もある。

Fig.244-1が土師器甕、2が伊勢型鍋、3・4・10～17が土師器杯、5が土師器皿、6・7が土師器碗、8・9が土師器脚高高台付杯、18～20・22・24が須恵器杯、21が須恵器杯蓋、23が須恵器甕、25が緑釉段皿、26・29が灰釉陶器碗、27が灰釉陶器壺、28が灰釉陶器長頸壺、30・31が青磁碗、32が陶器広口壺、33が常滑産陶器片口鉢である。墨書は、12～14・16・17が「加」であり、底部外面ないし体部外面にある。15は判読できない。11は「綱所」か。

石器は、34が小形磨製石斧、35・38が金床石、37が不明石器、39が凹石、40が砥石、41が磨石である。小形磨製石斧は、宮ノ台式期の所産と考えられる。42～45・47～49は不明鉄器、46は鉄製釘、

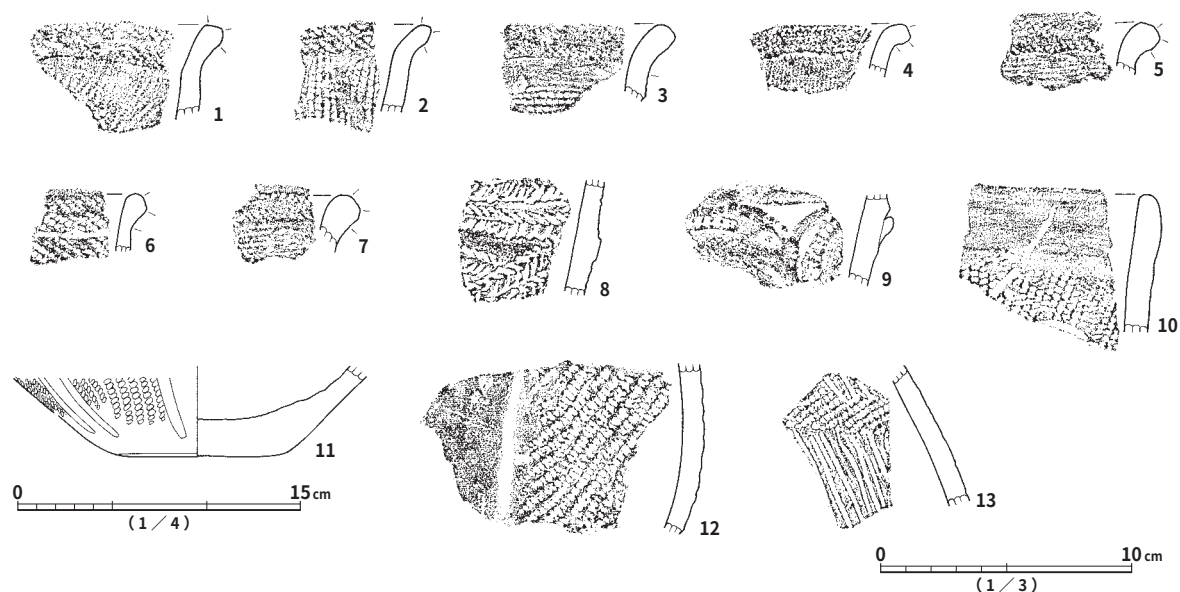


Fig.243 遺構外出土弥生土器・縄文土器

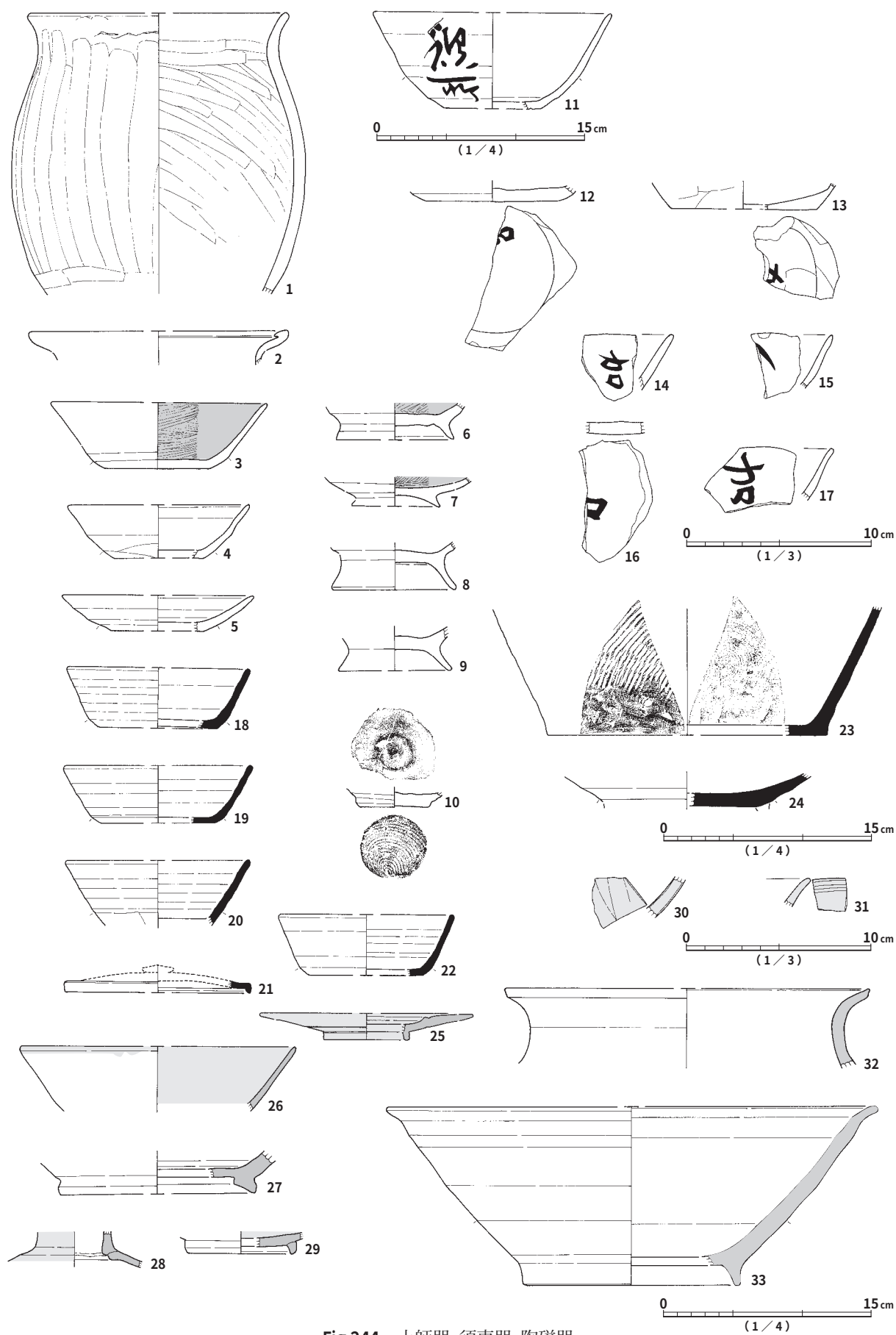


Fig.244 土師器・須恵器・陶磁器

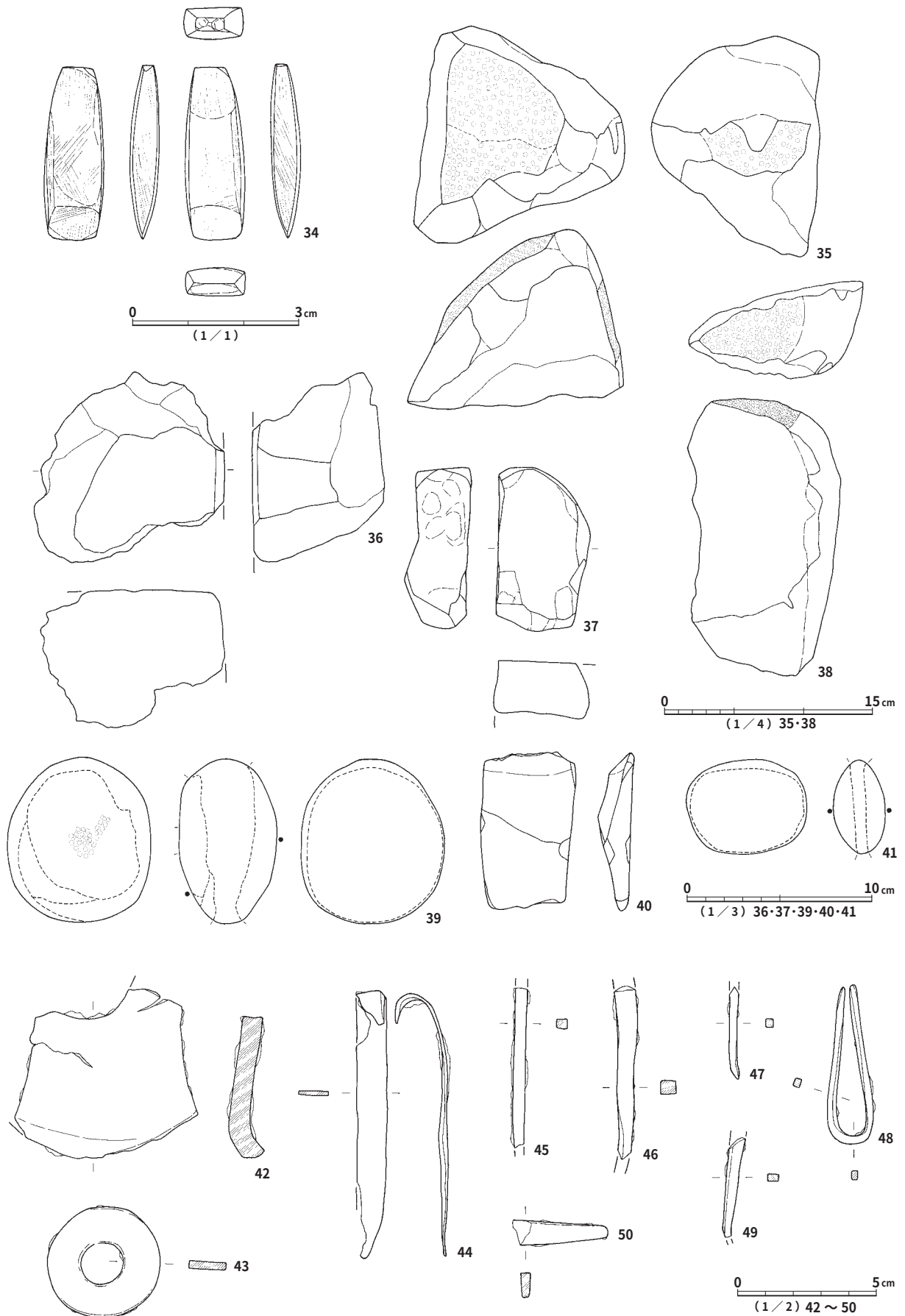


Fig.245 遺構外出土石器類・金属品・土製品

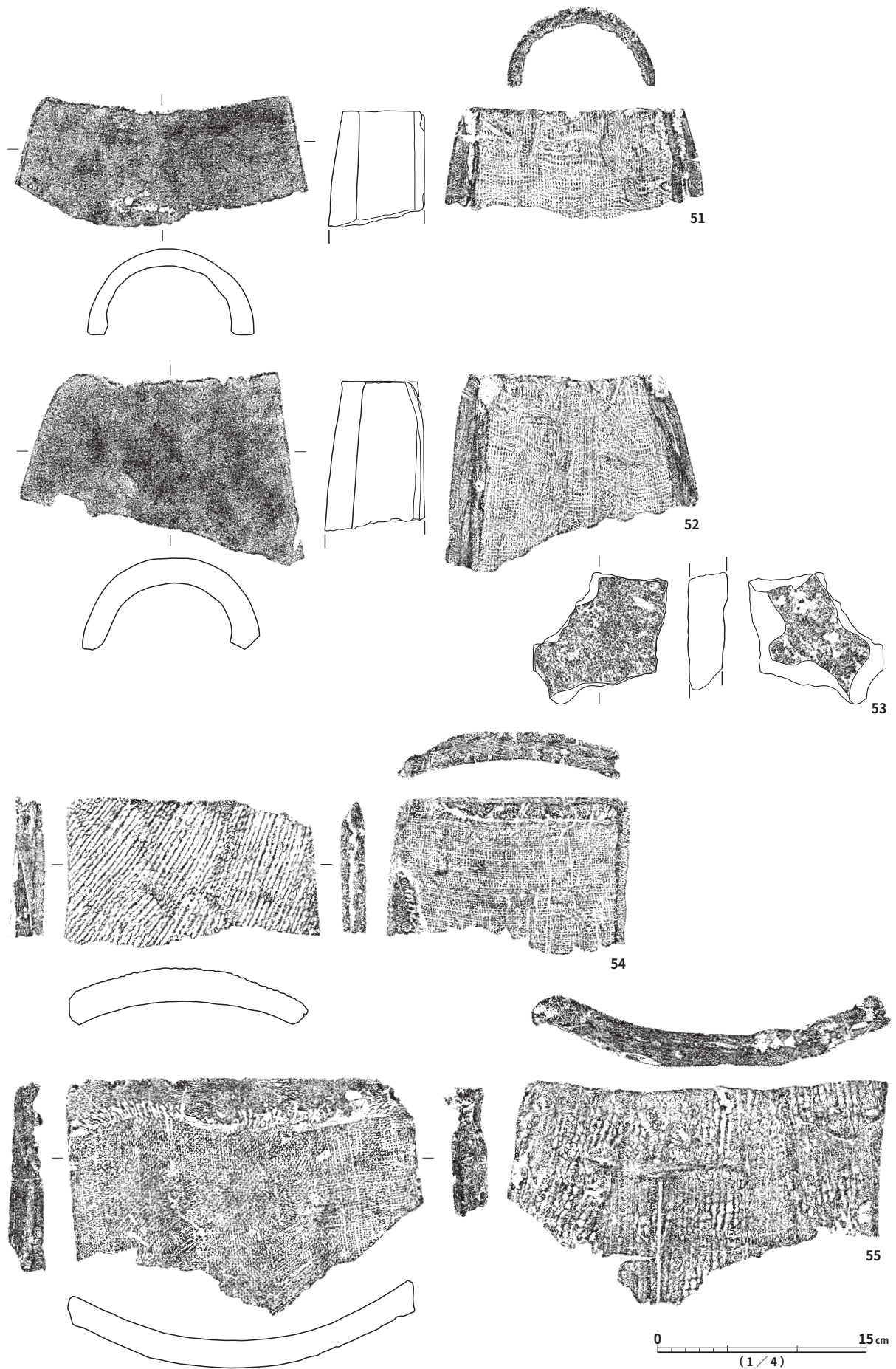


Fig.246 遺構外出土瓦類(1)

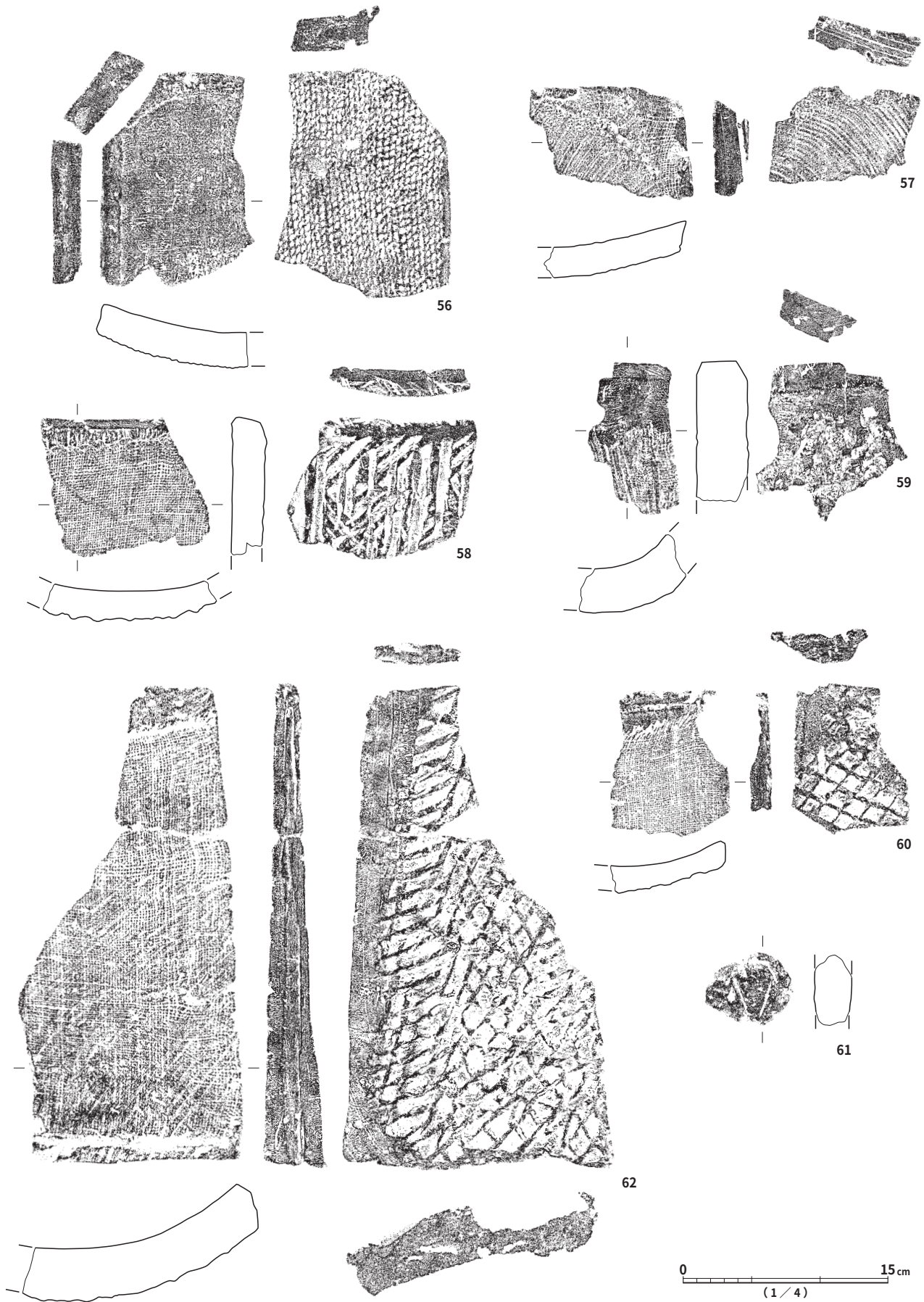


Fig.247 遺構外出土瓦類(2)

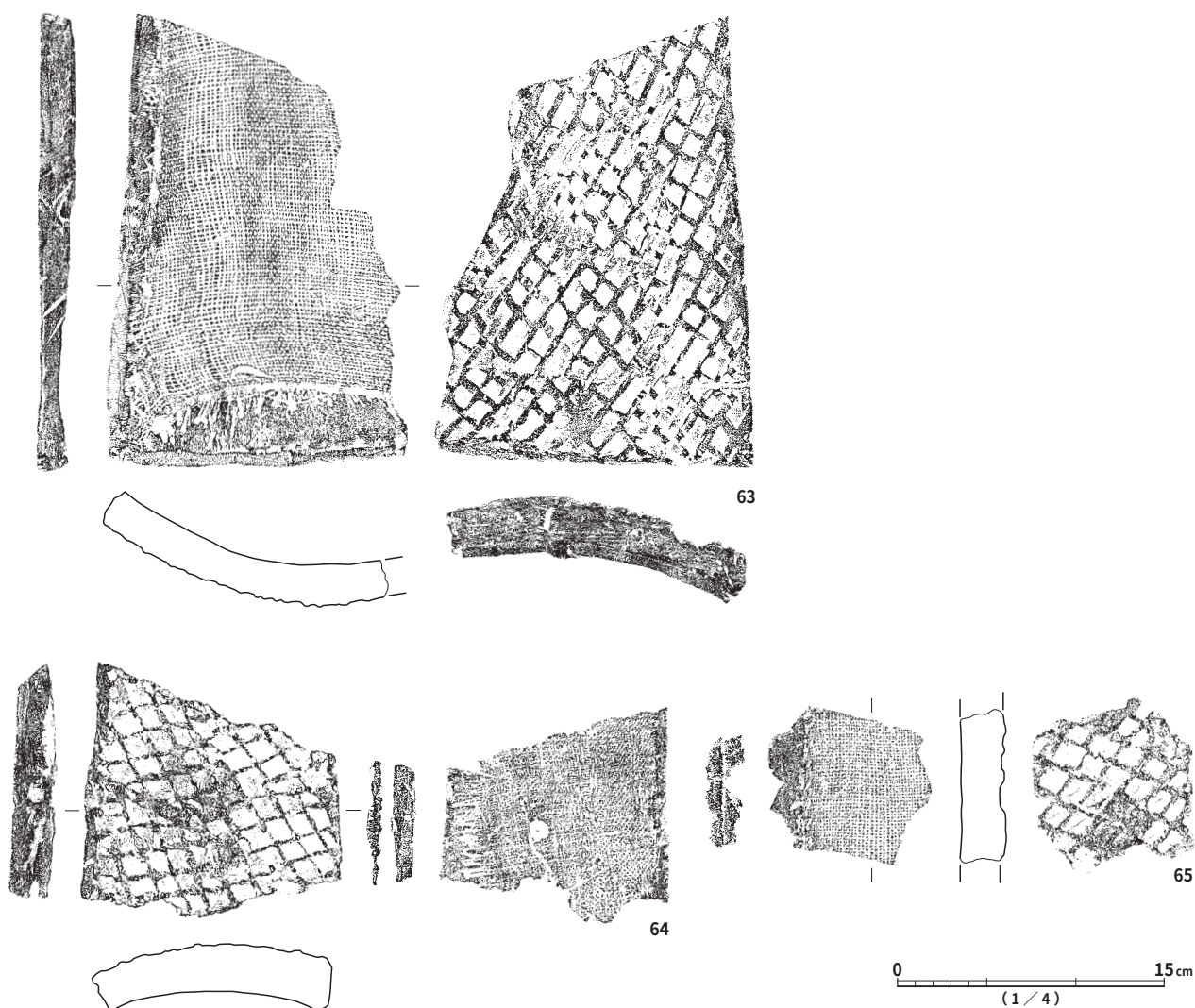


Fig.248 遺構外出土瓦類(3)

50は鉄製刀子であるが、いずれも遺存状態が非常に悪い。また、近現代のものを含む可能性がある。
36は土製品である。51・52は丸瓦、53・55・57・58・60・63・65は平瓦、54・64は熨斗瓦、56は隅切瓦、59・62は軒平瓦、61は軒丸瓦である。

第4章 総 括

第1節 南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年

南中台遺跡を含む国分寺台地区は、東日本における定型的前方後円墳成立前夜の拠点地域のひとつであり、遠距離間交流の結節点として周知されている。南中台遺跡については、かつて比田井克仁が北陸系土器を公表し、その重要性を喚起しているが（比田井1987）、今回、発掘調査から35年余を経過し、ようやく本報告に至ることとなった。近年、長平台遺跡（小橋2006）や御林跡遺跡（木對2004・2008）^{（註1）}などの隣接遺跡の報告書が刊行され、さらに、当該時期、地域の中でも中核になると思われる上総国分僧寺跡下層の中台遺跡や天神台遺跡の整理作業も着手されており、その全貌の一端がようやく明らかになりつつある。その実態解明のためには時間軸としての土器編年の編成が急がれるが、南関東地方では、他地域編年に依拠し、在地編年の整備が停滞している。

今回、南中台遺跡と隣接する蛇谷遺跡（市毛・須田・新田1977）、中台遺跡（白井1981、比田井1987、菊池1990）、村田川右岸において圧倒的な出土量を誇る草刈遺跡D・E区（小林・大谷2006）、K区（小林・麻生2007）を主な対象とし、弥生時代終末期から古墳時代前期土器編年についての基礎的な整理を行っておく。南中台遺跡と蛇谷遺跡、草刈遺跡D・E・K区は、それぞれ时期的な接点を持ちながら盛期を異にしており、3遺跡を繋ぐことによって、山田橋式から和泉式の間をほぼ充当することが可能となる。

（1）形式・型式分類

甕形土器

在来・定着系の甕を対象とする。容量的な区分も問題となるが、ここでは、遺存度の関係から便宜的に口径15cm未満を小形甕とする。南中台遺跡では、非定着形の外来系土器をのぞく口縁部遺存甕76個体のうち、口径15cm以上が59個体、口径15cm未満が17個体である。

形式A・B 口頸部から胴肩部に段部をもつ「段甕」である。Ia・b類は、久ヶ原・山田橋式系列の甕であり、ここでは、多段の粘土紐積み上げ痕（輪積み痕）を残すIa類を形式A、頸部から胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕（輪積み痕）を残すIb類を形式Bとする。山田橋式段階には、東京湾西岸地域でも明確な地域性があり、当該地域では平底（IIIa類）の形式Bが主体となる。山田橋2式段階の形式Bは、段部を胴部上半にもつIb1類であり、段部から口縁部は明確な屈折点をもたずゆるやかに移行する。口縁端部はIIa類の交互押捺であり、段部下端には布目痕を残す押捺を加える。南中台遺跡でこれに類するものにSI23-2があるが、山田橋式直統段階の基本型は、段部下端の押捺を省略し、段部位置も口頸部の収縮にともない口縁部周辺に移るIb2・3・4類である。この段階に形式Aの再波及がある。SI39-13や祇園原貝塚18号住居3・4（Fig.250-1）などIa1類例も散見できるが、形式AもIa2・3・4類が基本型となる。南中台遺跡では、口縁部を遺存する甕76個体のうち、形式Aが11個体、形式Bが17個体と拮抗する。全体器形がわかるものは少ないが、脚台部を遺存する18個体のうち13個体がヘラナデ調整であることから、脚台部をもつIIIb類の一次的な波及は、形式Aによると考える。山田橋2式段階の形式Aは、基本的に段部下端の押捺を欠くが、南中台遺跡SI24-12は押捺をもち、交錯した状況が認められる。

Tab.9 形態分類一覧

甕形土器			
形態Ⅰ	口頸部装飾。		
a	口頸部から胴肩部に多段の粘土紐積み上げ痕（輪積み痕）を残すもの。	形式A	
1	段部が胴部上半にあり、口径、最下段部径がほぼ同じもの。		
2	口径が最下段部径より大きいもの。段部中位ないし上部に屈曲部（最小径位置）をもつもの。		
3	段部が口縁部にほぼ限定されるもの。		
4	段部が口縁部に限定され、頸部内面がく字状に屈折するもの。		
b	頸部から胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕（輪積み痕）を残すもの。	形式B	
1	段部が胴部上半にあり、口径、段部径がほぼ同じもの。		
2	口径が段部径より大きいもの。段部中位ないし上部に屈折部（最小径位置）をもつもの。		
3	段部が口縁部にほぼ限定されるもの。		
4	段部が口縁部に限定され、頸部内面がく字状に屈折するもの。		
c	段部を残さないもの。		
1	口縁部から胴部へ緩やかに移行するもの。	形式C	
2	頸部が屈折し、頸部内面にのみ稜をもつもの。	形式F	
3	頸部屈折点から、緩やかに外反する口縁部をもつもの。頸部直上は直立気味となり、内面稜を頸部最小径位置からやや胴部側にもつものもある。	形式F	
4	頸部がく字状に強く屈折し、頸部内外面に稜をもつもの。ヨコナデが徹底されることによって、口唇部側がややうすつくられる。	形式F	
形態Ⅱ	口唇部形状。		
a	口縁端部に施文するもの。		
1	交互押捺ないし押捺を加えるもの。		
2	ハケ工具による刻みを加えるもの。		
b	口縁端部に面をもつもの。		
1	口縁部に対して直角の端面をもつもの。下部に拡張面をもつものを含む。		
2	直角端面上部に拡張面をもつもの。		
3	口縁端部上角が鋭角となるもの。		
4	口縁端部上角が鋭角となり、上部に拡張面をもつもの。		
c	口唇部が丸く収まるもの。		
形態Ⅲ	底部形状。		
a	平底となるもの。		
1	底部が突出しないもの。		
2	底部が突出するもの。		
b	脚台部をもつもの。		
形態Ⅳ	器面整形。		
a	ヘラナデ整形を基本とし、ミガキを加えるものを含む。		
b	ハケ整形を基本とするもの。		
壺形土器			
形態Ⅰ	口縁部形状。		
a	口唇部外面に粘土紐を貼り合わせた折返し状の二重口縁。		
1	複合部幅が狭く、口縁部全体の1/4程度のもの。	形式Aa	
2	複合部幅が、口縁部全体の1/3以上のもの。	形式Ab	
3	2類の複合段部接合痕が消され、稜状となるもの。	形式Ac	
4	2・3類の内面に屈折稜をもつもの。	形式Ad	
b	擬口縁端部に粘土紐を重ね、上下方向へ突出する複合部をつくるもの。	形式B	
1	複合部の拡張が上下同程度のもの。		
2	複合部の拡張が上部に長いもの。		
3	2類の複合面が外反するもの。		
4	3類の内面に屈折稜をもち、頸部が筒状になるもの。		
c	口縁部が2段に外反するもの。	形式C	
d	筒状の頸部、水平面から外反する口縁複合部をもつもの。	形式D	
e	複合部をもたない、直口縁壺。		
1	緩やかに外反ないし直線的に開く口縁部をもつもの。	形式Ea	
2	内湾する口縁部をもつもの。	形式Eb	
形態Ⅱ	口唇部形状。		
a	口唇部断面形状が三角形を呈し、口縁端面を欠くもの。		
b	口縁端部に面をもつもの。		
c	口縁端部に拡張面をもつもの。		
d	口唇部が丸く収まるもの。		

形態Ⅲ	頸部形状。		
a	口縁部から胴部へ緩やかに移行するもの。		
b	頸部に稜をもち、明確に屈折するもの。		
形態Ⅳ	口縁部施文。		
a	複合部に施文するもの。		
1	縄文帯をもつもの。		
2	櫛描文をもつもの。		
b	複合部下端に押捺ないし刻みをもつもの。		
c	無文のもの。		
形態Ⅴ	胴部施文。		
a	縄文帯をもつもの。		
b	櫛描文をもつもの。		
広口壺形土器			
形態Ⅰ	口縁部形状。		
a	口縁部が折り返し状の二重口縁になるもの。	形式A	
b	口縁部が単口縁となるもの。	形式B	
形態Ⅱ	頸部装飾。		
a	頸部有段となるもの。		
b	頸部無段のもの。		
形態Ⅲ	頸部形状。		
a	口縁部から胴部へ緩やかに移行するもの。		
b	頸部に稜をもち、明確に屈折するもの。		
直口縁壺形土器			
形態Ⅰ	口頸部形状。		
a	やや外反する口縁部をもつもの。	形式A	
1	頸部の屈折角が弱く、口縁部から胴部へ緩やかに移行するもの。		
2	頸部に稜をもち、明確に屈折し、ほぼ球形の胴部をもつもの。		
b	やや内湾する口縁部をもつもの。頸部は強く屈折し、球形ないしやや下膨れの胴部をもつもの。	形式B	
1	口縁上半部がほぼ直立するもの。口唇部内面に面をもつものがある。		
2	口唇部は尖り気味に丸く収まり、口縁部は全体が緩やかに内湾するもの。		
c	球形胴部から、ほぼ直線的に開く口縁部をもつもの。		
1	胴部高とほぼ同高となる大振りの口縁部をもつもの。	形式Ca	
2	口縁部高が胴部高の1/2程度のもの。	形式Cb	
3	口縁部高が胴部高の1/2未満のもの。	形式Cc	
小形丸底系鉢形土器			
形態Ⅰ	口縁部形状。		
a	単口縁のもの。	形式A	
b	口縁部が有段になるもの。	形式B	
形態Ⅱ	口縁部高、胴部高比。		
a	口縁部高に対して胴部高が大きいもの。		
b	口縁部高、胴部高がほぼ同じもの。		
形態Ⅲ	口頸部形状。		
a	頸部の屈折角が弱く、口縁部が直立気味に上がりやや内湾するもの。		
b	頸部の屈折が強く、口縁部が直線的ないしやや内湾気味に開くもの。		
c	頸部の屈折が強く、口縁部がやや外反するもの。		
小形丸底系壺形土器			
形態Ⅰ	全体器形。		
a	胴部径に対して口径が大きいもの。		
1	口縁部高、胴部高がほぼ同じもの。	形式Aa	
2	口縁部高が胴部高を凌ぐもの。	形式Ab	
b	胴部径、口径がほぼ同じか、胴径が凌ぐもの。	形式B	
1	胴部径、口径がほぼ同じもの。		
2	胴部径が口径を凌ぐもの。		
形態Ⅱ	口頸部形状。		
a	頸部の屈折角が弱く、胴部最大径位置から口縁部がほぼ一直線上にあるもの。		
b	頸部の屈折が強く、胴部に張りがあるもの。		
小形短頸壺形土器			
形態Ⅰ	全体器形。		
a	短頸短頸で頸部の収縮が大きいもの。	形式A	
b	広口で口径、胴部径がほぼ同じもの。	形式B	
形態Ⅱ	口縁部形状。		
a	口縁部が有段ないし多段となるもの。		
b	口縁部に段部をもたないもの。		
形態Ⅲ	頸部形状。		

a	頸部の屈折角が弱く、口縁部から胴部へ緩やかに移行するもの。	
b	頸部の屈折が強く収縮し、頸部に稜をもつもの。	
大形碗形土器		
形態Ⅰ		
a	口縁部に最大径をもつもの。	形式A
b	強い内湾器形をとり、最大径を胴部にもつもの。	形式B
形態Ⅱ		
a	口縁部に折り返し状の段部をもつもの。	
1	段部に縄文帯をもつもの。	
2	段部が無文になるもの。	
b	無段のもの。	
小形碗形土器		
形態Ⅰ		
a	強い内湾器形をとり、胴部に最大径をもつ無頸壺状の器形をとるもの。	形式A
b	内湾器形をとり、胴部に最大径をもつもの。	形式B
c	口縁部に最大径をもつ半球状の器形をもつもの。	形式C
d	やや内湾するが、皿状の浅い器形をもつもの。	形式D
形態Ⅱ		
a	口縁口唇部形状。	
b	口縁部が有段ないし粘土紐積み上げ痕を残すもの。	
c	口唇部が短く屈折するもの。	
d	口唇部に変化をもたないもの。	
大形鉢形土器		
形態Ⅰ		
a	最大径を口縁部にもつもの。	形式A
b	最大径を胴部にもつもの。	形式B
形態Ⅱ		
a	頸部の屈曲角が弱く、口縁部から胴部へ緩やかに移行するもの。	
b	頸部の屈折、収縮が強く、頸部に稜をもつもの。	
小形鉢形土器		
形態Ⅰ		
a	最大径を口縁部にもつもの。	形式A
b	最大径を胴部にもつもの。	形式B
高杯形土器		
形態Ⅰ		
a	杯底部下端形状。	
b	杯部下端に稜をもたないもの。無稜高杯。	形式A
c	杯部下端に稜をもつもの。有稜高杯。	形式B
形態Ⅱ		
a	口縁部形状。	
b	口縁部に折り返し状の段部をもつもの。	
1	口縁端部に面をもつもの。	
2	口唇部内面に面をもつもの。	
3	口唇部が丸く収まるもの。	
形態Ⅲ		
a	杯部内面底部形状。	
b	全体に丸みをもつもの。	
c	平底ないし、杯部外面下端の稜部にあわせ屈折するもの。	
形態Ⅳ		
a	脚部形状。	
b	全体が内湾気味に開くもの。	
c	脚下半部が内湾気味に開くもの。	
d	直線的に開くもの。	
e	緩やかに外反するもの。	
f	柱状脚部から緩やかに外反する脚裾部をもつもの。	形式C

f	柱状脚部から屈折し開く脚裾部をもつもの。	形式C
g	中空の柱状脚部から屈折し開く脚裾部をもつもの。	形式C
開脚高杯形土器		
形態Ⅰ		
a	杯底部下端形状。	
b	有稜の杯部をもつもの。	形式A
c	碗状無稜の杯部をもつもの。	形式B
小形器台形土器		
形態Ⅰ		
a	器受部口径。	
b	器受部口径が脚部径より大きいもの。	形式A
c	器受部口径が脚部径より小さいもの。	
形態Ⅱ		
a	器受部形状。	
1	ほぼ直線的に開き、屈折稜をもたないもの。	形式B
2	緩やかに外反するもの。	
3	直線的に開くもの。	
b	内湾する器受部をもつもの。	
1	器受部下端に稜をもち、屈折する器受部をもつもの。	形式Ca
2	緩やかに内湾し、皿状の器受部をもつもの。	形式Cb
3	皿状の器受部から、短く直立ないし外反する口唇部をもつもの。	形式Cb
4	器受部下端に稜をもつものをもち、口唇部が短く直立ないし外反するもの。	形式Cc
形態Ⅲ		
a	口唇部形状。	
1	器受部口径端面に面をもつもの。	
2	粘土紐付加による拡張面をもつもの。	
3	口縁部に対して直角端面をもつもの。	
4	口縁端部上角が鋭角に面取りされるもの。	
b	口縁端部上角が鋭角となり、上部に拡張面をもつもの。	
c	器受部口唇部が丸く収まるもの。	
形態Ⅳ		
a	脚部形状。	
b	内湾するもの。	
c	ほぼ直線的に開くもの。	
d	外反するもの。	
e	ほぼ直線的に開き、脚裾のみ外反するもの。	
形態Ⅴ		
a	脚接合部外面形状。	
b	器受部から脚部が緩やかに移行するもの。	
c	器受部から脚部が明確に屈折するもの。	
形態Ⅵ		
a	脚接合部内面形状。	
b	脚接合部がく字状に屈折するもの。	
c	器受部から脚部へ緩やかに移行するもの。	
d	底部に稜をもち、底部中央に筒状の貫通孔を穿つもの。	
e	無孔。	
形態Ⅶ		
a	脚部小孔。	
b	無孔。	
c	有孔。	
炬器台形土器		
a	器受部が外反するもの。	形式A
b	器受部が受口状になるもの。	形式B
甔形土器		
形態Ⅰ		
a	全体器形。	
b	碗状器形をもつもの。基本的に口縁部は折り返し状の二重口縁となる。	形式A
c	屈曲口縁をもつ鉢形器形をとるもの。	形式B
形態Ⅱ		
a	器高、口径比。	
b	器高に対して口縁部が小さい、深い器形をとるもの。	
c	器高に対して口縁部が大きい、浅い器形をとるもの。	

口縁部から段部下端まで遺存する甕のうち、小形甕をのぞく23個体の口縁段部高指数（口縁段部高／口径×100、口径100に対する口縁から最下段までの高さ）は、SI18-2、SI24-14、SI27-8、SI39-15が30以上、指数23以上の12個体は、SI39-13がI a1類、SI36-4がI a2類、SI12-5、SI13-10、SI18-2、SI27-8、SI39-12がI b2類であり、口頸部形態と口縁段部高指数はおおむね対応する。また、指数23以上の12個体はすべてが口唇部に押捺をもつ。これに対して、指数23未満11個体のうちで口唇部に押捺をもつものは、SI09-2、SI33-21・22のみとなる。口縁端部押捺を省略したII b類には、SI15-1、SI15-4、SI36-1など、口縁端部に明瞭な面をもつものが目立つ。指数23未満の段部は口縁部にほぼ限定され、SI32-26がI a4類、SI15-1、SI24-31、SI36-2がI b4類であり、頸部内面に屈折稜をもつ。このうち、SI24-31、SI32-26の胴部整形はハケに

よる。I a4類は、叶台遺跡31号遺構9(Fig.250-6)、下鈴野遺跡05号住居跡1・2(Fig.250-7・8)、草刈遺跡K012-9などがあり、限定的ではあるが草刈遺跡K012例は定型の小形丸底系土器を伴出する。I a4類段階の段部はほとんど厚みがない。このように、口頸部の収縮にともなう段部の口縁部への限定化を基本的な変化とし、その過程で、口縁部押捺が省略される。小形甕については、SI07-4、SI25-1など、口縁段部高指数23以上のものでも押捺が省略されるものがある。

ここでは、I a1~4類、I b1~4類を基準とし、A1~4型、B1~4型を設置しておく。A3・4型、B3・4型は、基本的に口縁端部の押捺が省略される。

形式C I c類の無段甕については、複数の系譜が交錯する。ここでは、I c1類を形式Cとしておく。南中台遺跡SI23・27、草刈遺跡D040-14などでB1型との伴出例があり、山田橋式直後の段階には出現する。

南中台遺跡では、IVa類ナデ甕で口縁端部に押捺をもつ26個体のうち、無段甕I c類は10個体ある。形式Cの器形変化を基準化することは難しいが、押捺の省略は基本的に段甕と連動すると思われる。ただし、無段押捺甕には、SI23-1、SI27-7・9など、口縁端部1方向押捺がやや目立つ傾向がある。また、口縁端部押捺を省略したものには、SI12-12のように拡張端面をもつものがあり、II c類についても口唇部に厚みを残すものが多い。これは段甕も同様である。

南中台遺跡では、SI22-1など頸部の屈曲の弱いものに対して、SI27-7、SI33-12など大振りの口縁部をもつものは新しい要素と考えるが、これらにもハケ整形痕は認められない。しかし、蛇谷遺跡では、第74号住居跡11・12など一般化する傾向がある。ハケ整形の採用について、明確な段階区分はできないが、蛇谷遺跡の形式Cは、口縁端部押捺II a類の頻度が低く、頸部の収縮にみられる器形変化についても、南中台遺跡に対して段階的な傾斜が認められる。

ここでは、口縁端部押捺の有無を基準として、C1・2型を設置しておく。

形式D 蛇谷遺跡では、方形周溝墓、第11A・61号住居跡などで、口縁端面をもち、頸部が鋭角に屈折するハケ甕が多数出土し、B3・4型、形式CII a1・II b1類などと伴出する。口縁端部は、第61号住居跡第69図1、方形周溝墓第114図7・8・12・16が口縁に対して直角の端面をもつII b1類、方形周溝墓第114図9(Fig.251-3)・10・14・15が直角端面の上角が肥厚するII b2類、第61号住居跡第69図2が口縁端部を斜面とするII b3類、第48号住居跡22、第79号住居跡3、第81A号住居跡第86図4が斜面の上角が肥厚するII b4類である(Fig.249)。方形周溝墓では、タタキ甕が多数出土しており、口頸部の特徴など共通点が多い。これらは、「戸張形」甕であり(大村1994)、ハケ甕として定着する過程での変容は認められるものの、庄内式甕影響のタタキ調整弥生形甕を祖型とすると考える。西広貝塚39号住居跡15(Fig.250-24)など、形式Cの口縁端部押捺省略後の面取り面形成についても、戸張形の成立と関連する可能性がある。形式Dのうち、蛇谷遺跡第26B号住居跡9(Fig.251-4)は小形丸底鉢Aa1型と伴出するが、これは、口縁端面、頸部とも鈍化している。

形式E II a2類の刻みをともなうハケ甕を形式Eとする。南中台遺跡では、SI13-8、SI17-1、SI18-4など類例は少ない。ハケ整形の定着は漸次進行するが、その一般的な定着は、蛇谷遺跡によるかぎり、戸張形の成立段階にある。当該地域における台付甕は、小形丸底系土器成立期まで混在する状況が認められるものの、その後は明らかに減少する。

なお、当該地域のハケ整形は、基本的に甕の外表面整形技法として採用され、他器種のミガキなどの

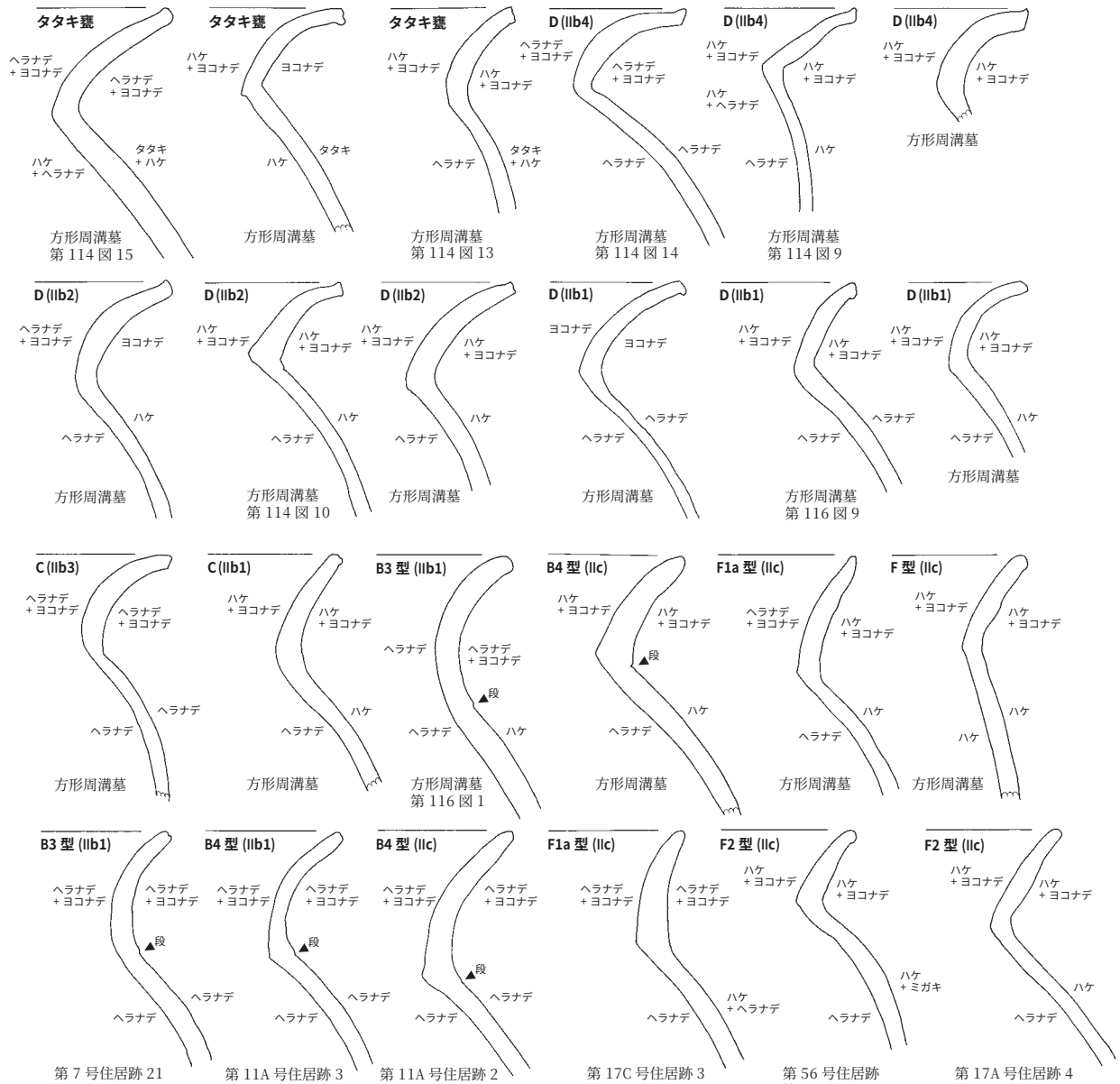


Fig.249 蛇谷遺跡甕形土器口縁部

前整形としては定着しない。

形式F Ic2・3・4類を形式Fとする。当該地域の甕は、宮ノ台式の深鉢器形から、口頸部径の収縮にともなう胴部の球形化を基本的な変化とし、段部の省略、口頸部のく字化をもって一連の変化を一旦終える。

形式Fは、形式A・B・C・D・Eの型式変化、形式的な統合として成立する。ただし、その完成期には、Ic2・3類など若干の変化を認めることができる。Ic2類は、蛇谷遺跡第17C号住居跡3(Fig.249)・4・5(Fig.250-19)・6・9・11などを典型例とし、頸部にやや厚みをもち、内面にのみ屈折稜を形成するものであり、南中台遺跡SI09-1、SI15-1、SI36-2、蛇谷遺跡第11A号住居跡2(Fig.250-25)・3(Fig.249)、第51号住居跡6などIa4・Ib4類の段部省略形としてとらえることができる。これは、台遺跡B地点175号住居跡18・19など定型的小形丸底系壺を伴出する段階まで一部遺存する。Ic3類は、口縁部にゆるやかな外反器形を残すものであり、Ic1類のうち、蛇谷遺

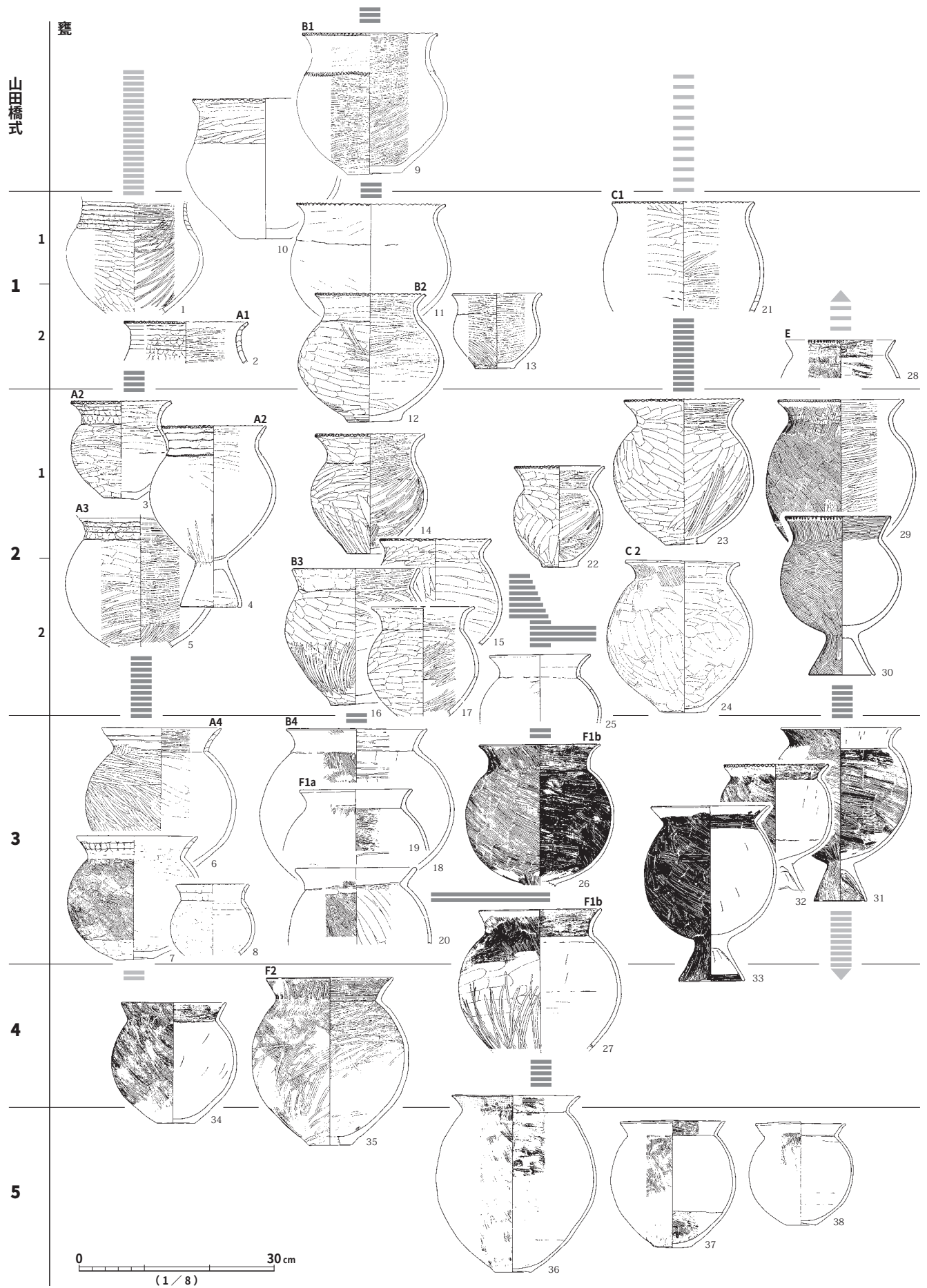


Fig.250 編年略図(1)

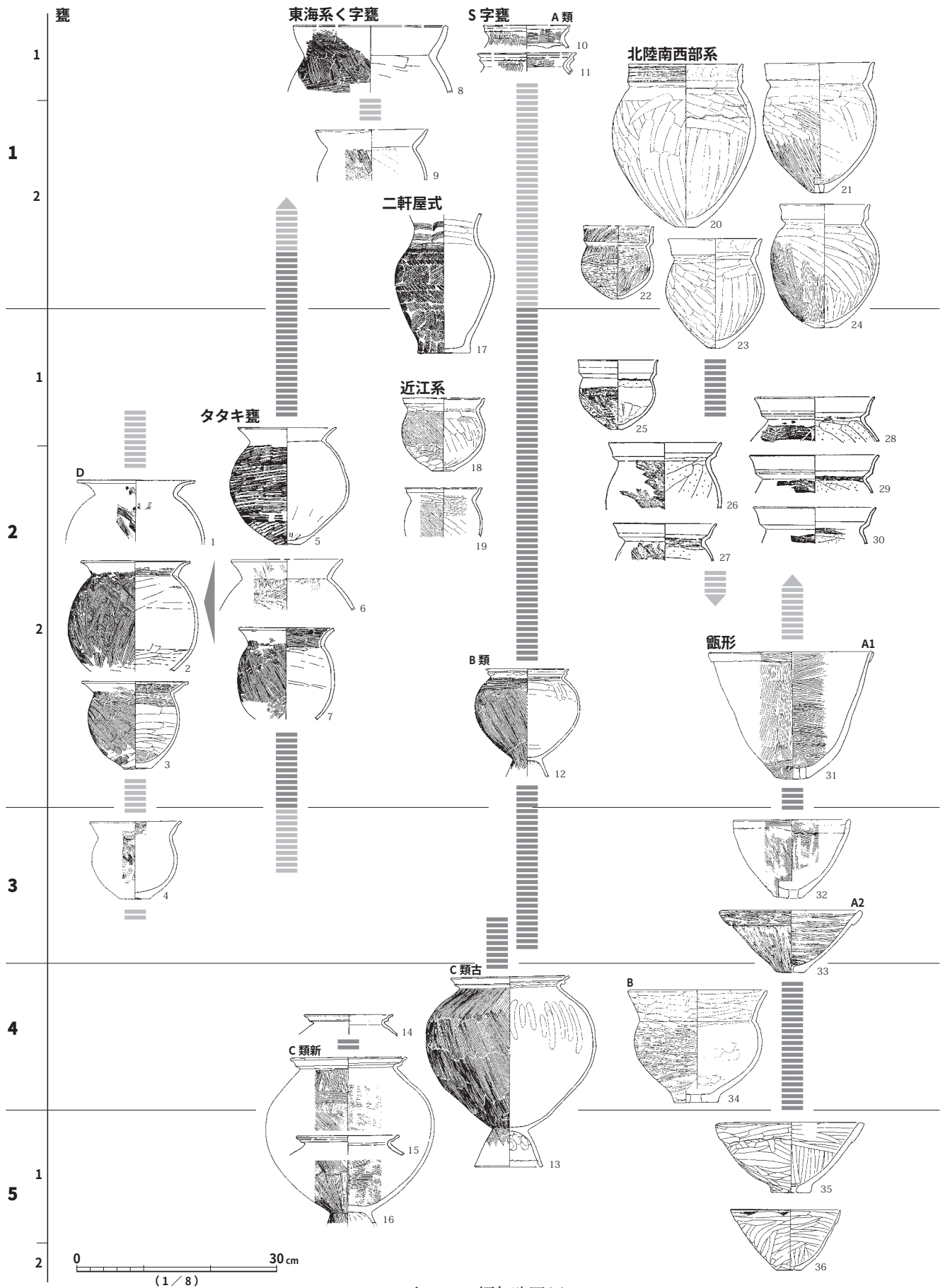


Fig.251 編年略図(2)

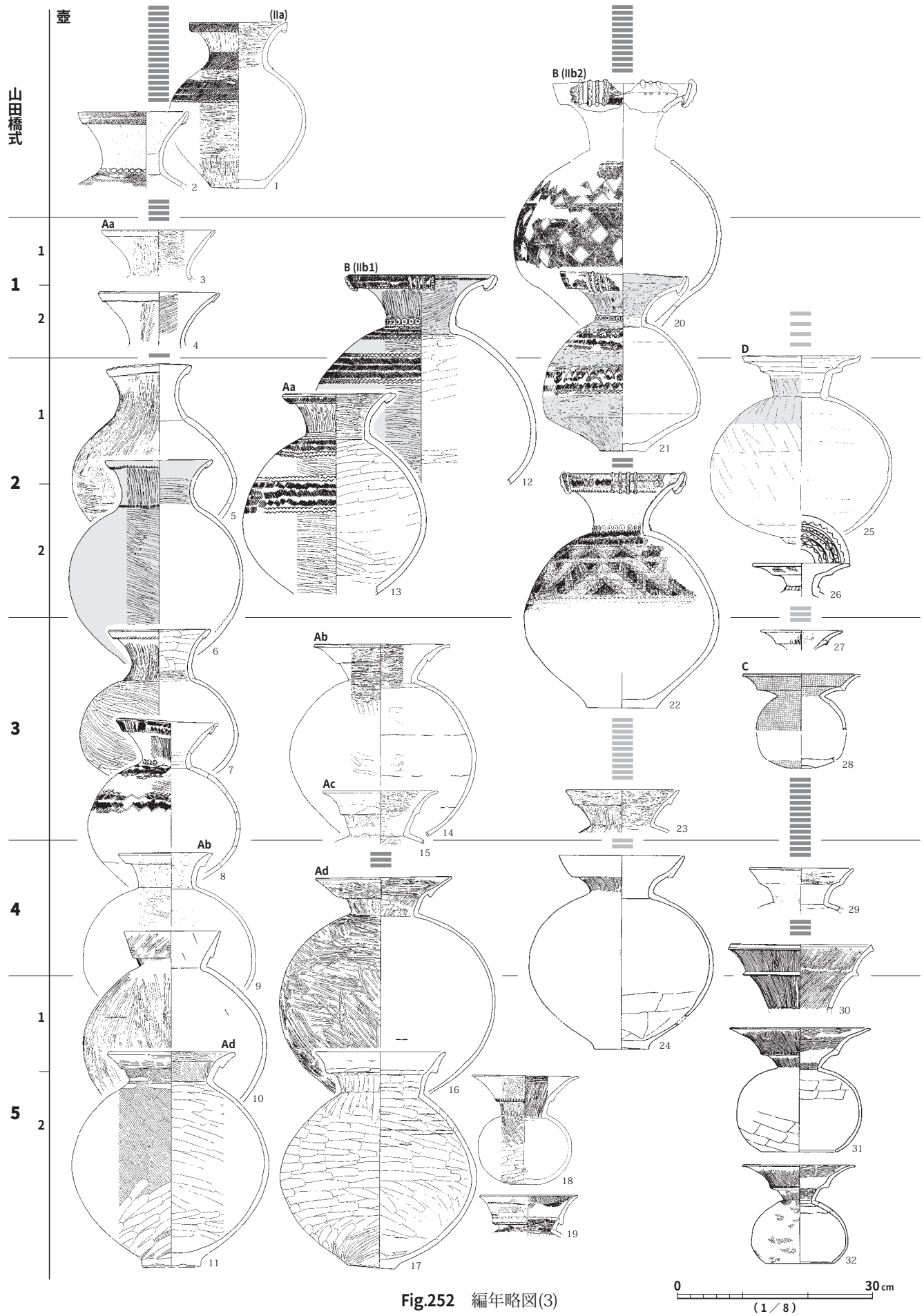


Fig.252 編年略図(3)

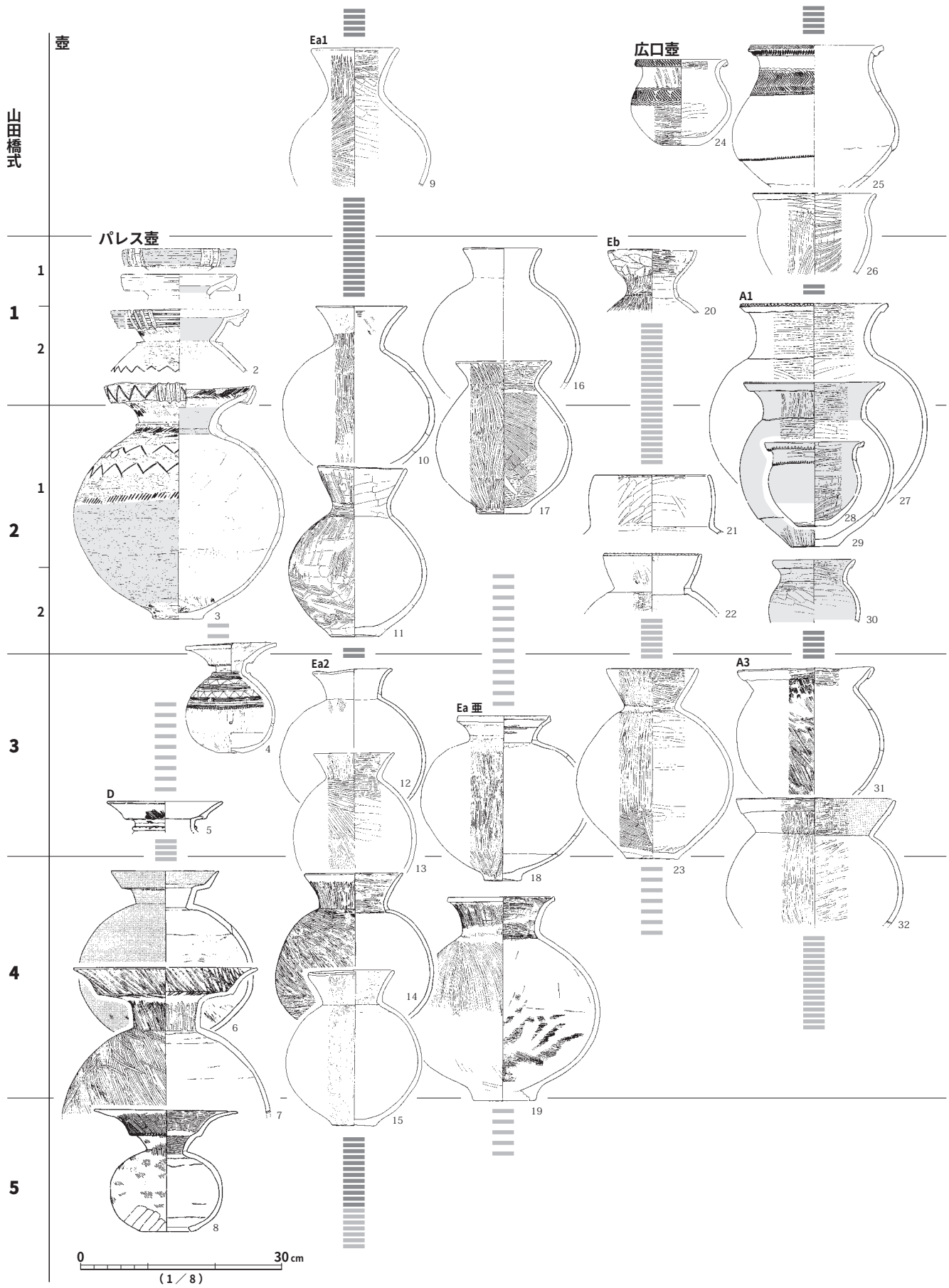


Fig.253 編年略図(4)

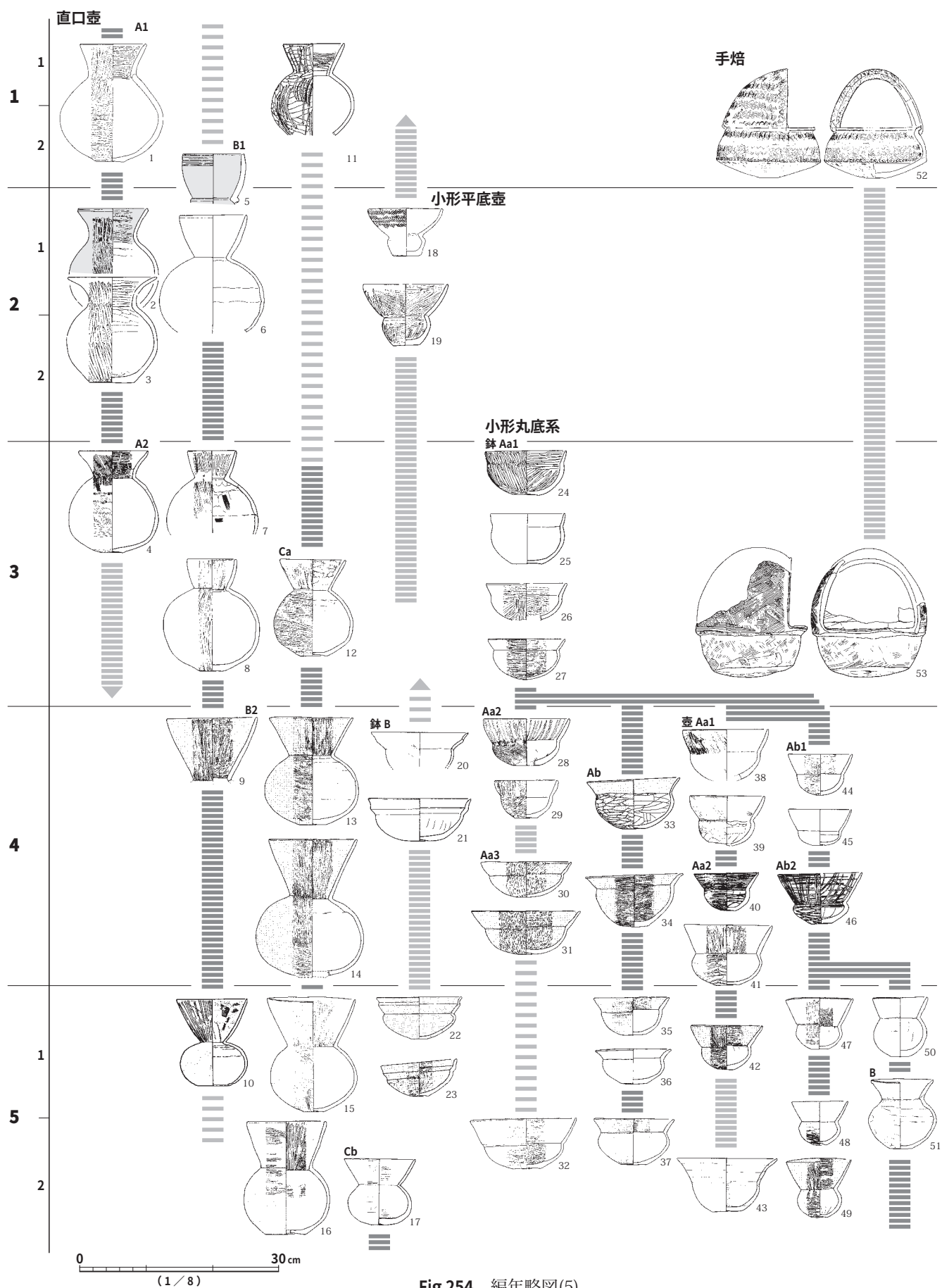


Fig.254 編年略図(5)

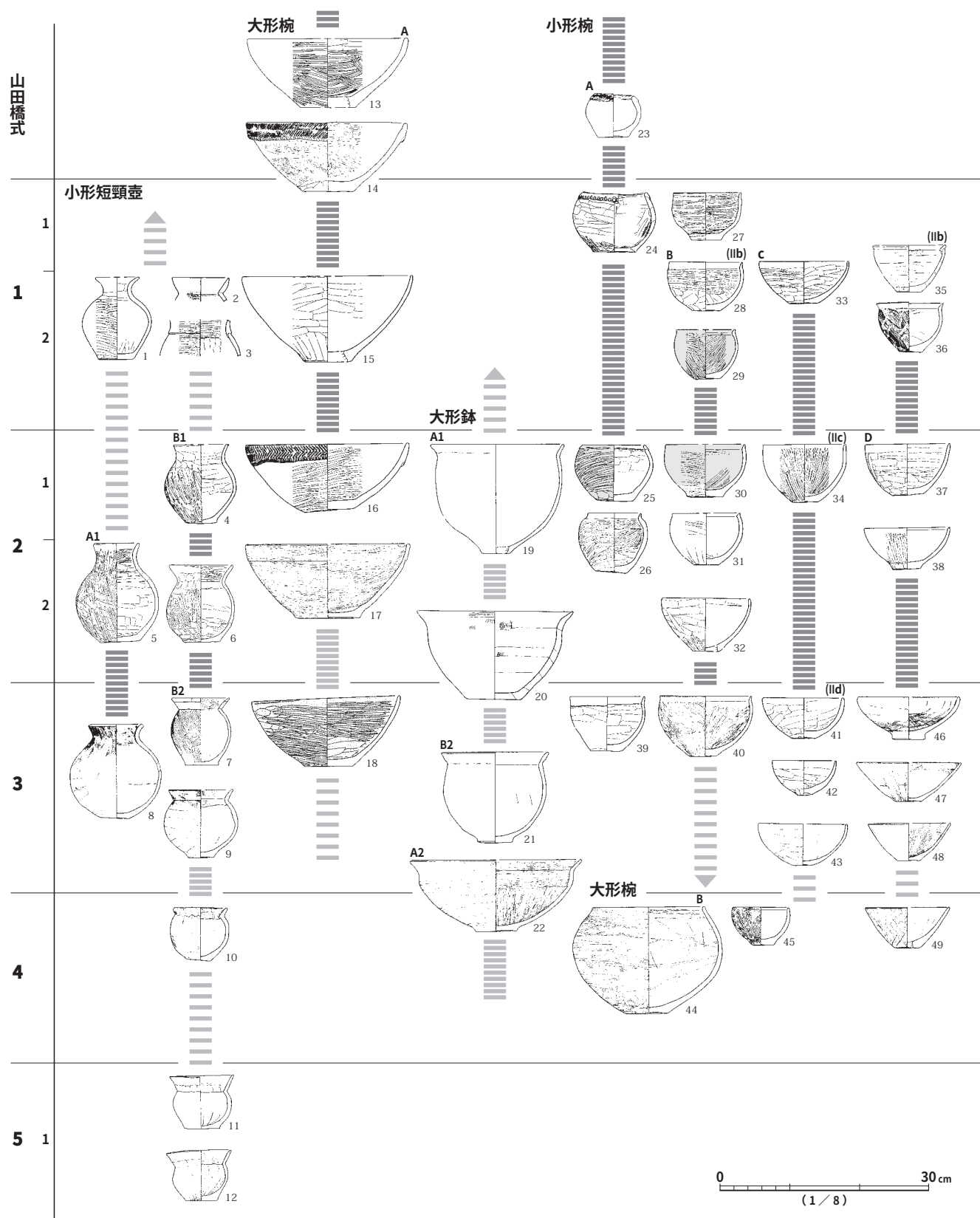


Fig.255 編年略図(6)

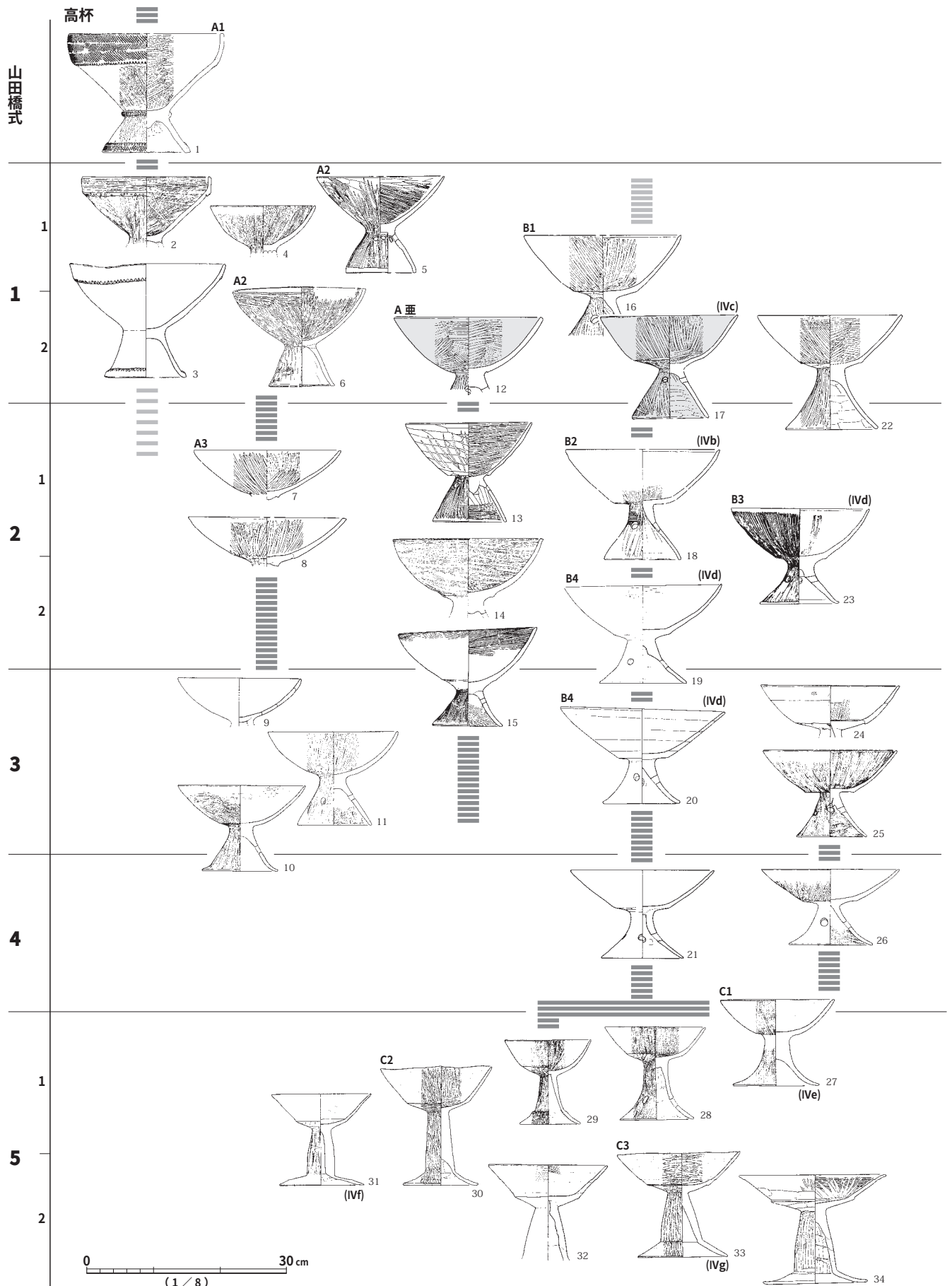


Fig.256 編年略図(7)

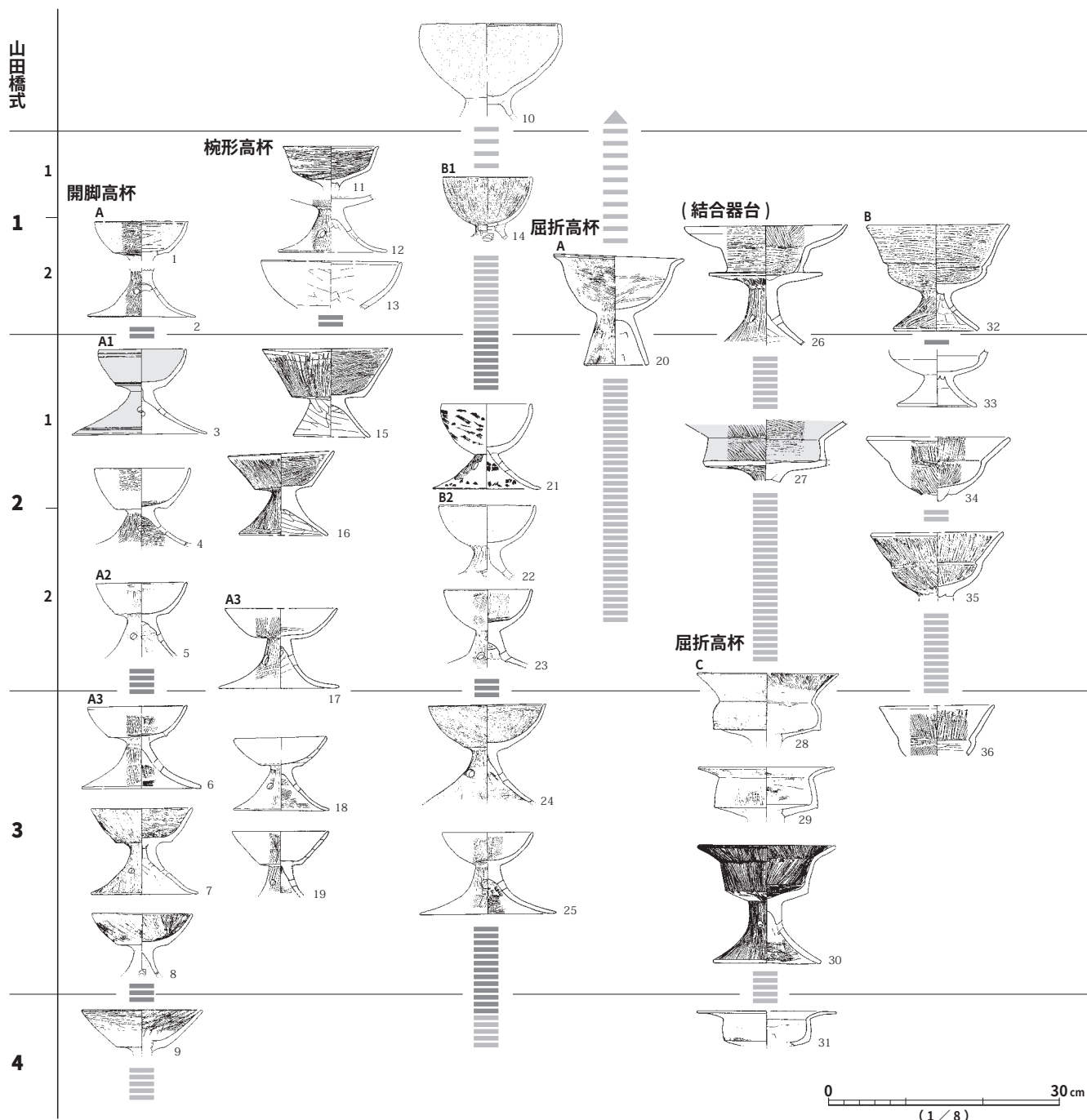


Fig.257 編年略図(8)

Fig.256 1山田橋大山台遺跡031号竪穴、2・4草刈遺跡D040、3南祇園原遺跡201号住居跡、5御林跡遺跡II317号遺構、6長平台遺跡288号方形周溝墓、7南中台遺跡SI09、8南中台遺跡SI27、9蛇谷遺跡第23号住居跡、10草刈遺跡E155、11叶台遺跡31号遺構、13御林跡遺跡II222号遺構、12・22南中台遺跡SI39、14草刈遺跡D051、15草刈遺跡A66、16南中台遺跡SI14、17南中台遺跡SI45、18南中台遺跡SI17、19蛇谷遺跡方形周溝墓、20蛇谷遺跡第91号住居跡、21番後台遺跡029E号住居跡、23中台遺跡59号住居跡、24蛇谷遺跡第26B号住居跡、25草刈遺跡D021、26草刈遺跡D005、27草刈遺跡K674、28草刈遺跡K177、29草刈遺跡K052、30草刈遺跡K032、31草刈遺跡D028、32蛇谷遺跡第37B号住居跡、33草刈遺跡K013、34南岩崎遺跡SI46

Fig.257 1・2・13長平台遺跡288号方形周溝墓、3・33中台遺跡8号住居跡、4草刈遺跡K364、5蛇谷遺跡方形周溝墓、6蛇谷遺跡第26B号住居跡、7・8・28・29草刈遺跡D024A、9草刈遺跡D046、10唐崎台遺跡第41号住居跡、11草刈遺跡D040、12祇園原貝塚34号住居、14長平台遺跡9号竪穴住居跡、15・16御林跡遺跡II80号遺構、17南中台遺跡SI42、18蛇谷遺跡

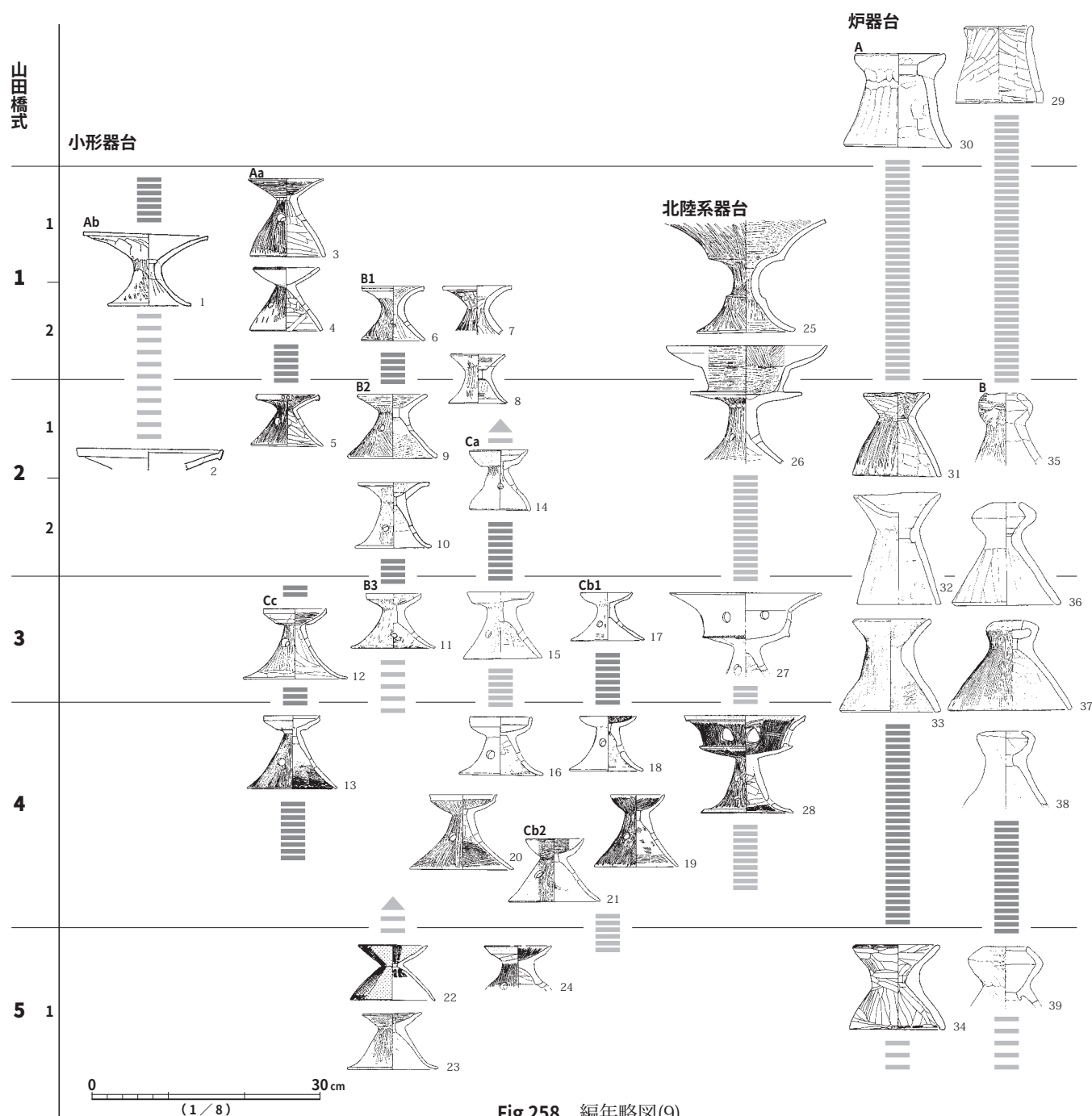


Fig.258 編年略図(9)

跡第56号住居跡、19蛇谷遺跡第49号住居跡、20草刈遺跡E121B、21土字遺跡第4号住居跡、22唐崎台遺跡第3号住居跡、23蛇谷遺跡第81A号住居跡、24草刈遺跡D252、25蛇谷遺跡第50C号住居跡、26南中台遺跡SI45、27南中台遺跡SI27、30草刈遺跡D076、31草刈遺跡E118、32南中台遺跡SI35、34南中台遺跡SI24、35南中台遺跡一括、36南中台遺跡SI32

Fig.258 1中台遺跡表土層中、2中台遺跡37号住居跡、3御林跡遺跡II 239号遺構、4御林跡遺跡II 317号遺構、5御林跡遺跡II 80号遺構、6・25南中台遺跡SI13、7南中台遺跡SI12、8蛇谷遺跡第96号住居跡、9南中台遺跡SI17、10蛇谷遺跡方形周溝墓、11下鈴野遺跡09号住居跡、12御林跡遺跡II 139号遺構、13・16・18草刈遺跡D416、14唐崎台遺跡第3号住居跡、15叶台遺跡85号遺構、17蛇谷遺跡第27B号住居跡、19下鈴野遺跡03号住居跡、20南岩崎遺跡SI58、21・38草刈遺跡K041、22土字遺跡第43号住居跡、23草刈遺跡K032、24・34御林跡遺跡II 53号遺構、26南中台遺跡SI45、27草刈遺跡D035A、28御林跡遺跡II 130号遺構、29山田橋大山台遺跡112号竪穴、30草刈遺跡B116、31南中台遺跡SI33、32・36草刈遺跡K337、33草刈遺跡D032、35唐崎台遺跡第13号住居跡、37下鈴野遺跡16号住居跡、39草刈遺跡K001

Fig.250 1 祇園原貝塚18号住居、2 南中台遺跡SI39、3・23・29 南中台遺跡SI33、4・20 南中台遺跡SI24、5・14 南中台遺跡SI09、6 叶台遺跡31号遺構、7・8 下鈴野遺跡05号住居跡、9 山田橋表通遺跡046号跡、10 唐崎台遺跡第41号住居跡、11 草刈遺跡D040、12 南中台遺跡SI12、13 南中台遺跡SI07、15・16 南中台遺跡SI36、17 南中台遺跡SI15、18 草刈遺跡K674、19 蛇谷遺跡第17C号住居跡、21 南中台遺跡SI23、22 南中台遺跡SI27、24 西広貝塚39号住居跡、25 蛇谷遺跡第11A号住居跡、26・31 草刈遺跡D024A、27 草刈遺跡D060、28 南中台遺跡SI13、30 草刈遺跡A26、32 草刈遺跡D021、33 草刈遺跡D206、34・35 草刈遺跡D008、36・37・38 草刈遺跡K186

Fig.251 1・2・3・7 蛇谷遺跡方形周溝墓、4 蛇谷遺跡第26B号住居跡、5 中台遺跡571号住居跡、6 南中台遺跡SI36、8・10・11 長平台遺跡10号竪穴住居跡、9 南中台遺跡SI14、12 蛇谷遺跡第79号住居跡、13 御林跡遺跡I 119号遺構、14 草刈六之台遺跡128号住居、15 草刈六之台遺跡20号住居、16 草刈遺跡K488、17 南中台遺跡SI45、18・19 南中台遺跡SI41、20・22・23 南中台遺跡SI13、21・24 南中台遺跡SI12、25・28・29・30 中台遺跡15号住居跡、26・27 中台遺跡37号住居跡、31 蛇谷遺跡第31号住居跡、32 草刈遺跡K667、33 草刈遺跡E178、34 下鈴野遺跡03号住居跡、35・36 御林跡遺跡II 53号遺構

Fig.252 1 山田橋表通遺跡046号跡、2 唐崎台遺跡第41号住居跡、3 祇園原貝塚18号住居、4 蛇谷遺跡第96号住居跡、5 西広貝塚50号住居跡、6 南中台遺跡SI78、7 御林跡遺跡II 9号遺構、8・14 草刈遺跡(市調査)26号方形周溝墓、9 草刈遺跡K041、10 草刈遺跡D247、11・17 南岩崎遺跡SI46、12 南中台遺跡SI35、13 南中台遺跡SI33、15 草刈遺跡K056、16 草刈遺跡D060、18 祇園原貝塚38号住居、19 台遺跡B地点170号住居跡、20 南祇園原遺跡203号住居跡、21 長平台遺跡288号方形周溝墓、22 大厩遺跡5号墳内、23 下鈴野遺跡16号住居跡、24 草刈遺跡B139、25 長平台遺跡289号方形周溝墓、26 中台遺跡仁王門脇、27 蛇谷遺跡第12号住居跡、28 番後台遺跡003号住居跡、29 草刈遺跡E155、30 草刈遺跡E022、31・32 草刈遺跡B138A

Fig.253 1 長平台遺跡10号竪穴住居跡、2 長平台遺跡288号方形周溝墓、3 長平台遺跡289号方形周溝墓、4 草刈遺跡D252、5 蛇谷遺跡第46号住居跡、6 東間部多2号墓、7 草刈遺跡D060、8 草刈遺跡B138A、9 山田橋大山台遺跡114号竪穴、10 蛇谷遺跡第96号住居跡、11 西広貝塚50号住居跡、12 蛇谷遺跡第26B号住居跡、13・23 叶台遺跡31号遺構、14 下鈴野遺跡03号住居跡、15 草刈遺跡K041、16 南祇園原遺跡201号住居跡、17 南中台遺跡SI14、18 蛇谷遺跡第48号住居跡、19 草刈遺跡D031、20 長平台遺跡68号竪穴住居跡、21 南中台遺跡SI24、22 蛇谷遺跡第3号住居跡、24 山田橋大山台遺跡093号竪穴、25 土宇遺跡第17号住居跡、26 山田橋大山台遺跡112号竪穴、27 南中台遺跡SI39、28 南中台遺跡SI33、29 南中台遺跡SI45、30 南中台遺跡SI15、31 蛇谷遺跡第56号住居跡、32 草刈遺跡K399

Fig.254 1 祇園原貝塚18号住居、2 南中台遺跡SI17、3 南中台遺跡SI33、4 蛇谷遺跡第8号住居跡、5・6 中台遺跡8号住居跡、7 蛇谷遺跡第17A号住居跡、8 下鈴野遺跡21号住居跡、9 草刈遺跡K428、10 草刈遺跡B136、11 御林跡遺跡II 317号遺構、12 下鈴野遺跡08号住居跡、13 草刈遺跡K452、14・44 草刈遺跡K041、15・51 草刈遺跡K151、16・32・48 草刈遺跡K336、17・43 蛇谷遺跡第37B号住居跡、18 唐崎台遺跡第13号住居跡、19 南中台遺跡SI27、20 蛇谷遺跡第102B号住居跡、21 草刈遺跡A14、22 台遺跡B地点170号住居跡、23 草刈遺跡K507、24 蛇谷遺跡第26B号住居跡、25 蛇谷遺跡第55号住居跡、26 南中台遺跡SI32、27 草刈遺跡K399、28 草刈遺跡D416、29 草刈遺跡D077、30・31 草刈遺跡K012、33 御林跡遺跡II 322号遺構、34 草刈遺跡K341、35 草刈遺跡K235、36・49 草刈遺跡K335、37 草刈遺跡K463、38 草刈遺跡D005、39 草刈遺跡D060、40・46 草刈遺跡D092、41 草刈遺跡K456、42 草刈遺跡K028、45 草刈遺跡E179、47・50 草刈遺跡K001、52 長平台遺跡288号方形周溝墓、53 草刈遺跡D206

Fig.255 1 南中台遺跡SI35、2・3・15・33 南中台遺跡SI45、4・37・38 南中台遺跡SI24、5・6 南岩崎遺跡SX01、7 下鈴野遺跡16号住居跡、8・9・22・43・47・48 草刈遺跡D035A、10 草刈遺跡E187、11・12 草刈遺跡K151、13 山田橋大山台遺跡093号竪穴、14 山田橋表通遺跡046号跡、16 南中台遺跡SI33、17 草刈遺跡D042B、18 御林跡遺跡I 55号遺構、19 草刈遺跡E189B、20 蛇谷遺跡方形周溝墓、21 草刈遺跡K399、23 山田橋表通遺跡030号跡、24 西広貝塚48号住居跡、25・26・34 南中台遺跡SI17、27 草刈遺跡D040、28 南中台遺跡SI18、29 南中台遺跡SI25、30・31 南中台遺跡SI27、32 南中台遺跡SI22、35・36 長平台遺跡288号方形周溝墓、39・42 南中台遺跡SI32、40・46 草刈遺跡D024A、41 南中台遺跡SI21、44・45・49 草刈遺跡D077

跡第7号住居跡22、第74号住居跡12などを過渡期段階とし、第46号住居跡7、草刈遺跡D024A-44(Fig.250-31)・46(Fig.250-26)・56、D060-32(Fig.250-27)、D077-32・33などを典型例とする。これらには、内面稜を最小径位置からやや胴部側にもつものもある。また、Ic2・3類には、蛇谷遺跡第46号住居跡7など一部に口縁端面を残すものもあるが、端面は薄い。基本はIIc類である。段階としては、小形丸底系土器成立期の鉢Aa1型を伴出する段階を中心とし、定型的小形丸底系土器

成立期にはI c4類が一般化する。段甕からI c2・3類、I c4類は、当該地域在来甕の基軸的な変化と考えることができる。ここでは、一応I c2類をFla型、I c3類をFlb型、I c4類をF2型とする。ただし、分類外も多く、再度検討する必要がある。

東海系台付甕形土器

S字甕については、別項で触れる。赤塚分類(赤塚1990・1997)によるA類以降散見することはできるが、隣接地域と比較して出土量はかならずしも多いとは言えない。これとは別に、東海系の単口縁甕は、南中台遺跡SI14-3、長平台遺跡10号竪穴住居跡5・6(Fig.251-10・11)がある。これらは、内湾する口縁部をもち、南中台遺跡例は口唇部に強いヨコナデが施される。

近江系受口状口縁甕形土器

南中台遺跡SI41-1・2がある。復元径がやや一致しないが、同一個体の可能性がある。口縁端部は外方へ突出し、口唇部内面に平坦面をもつ。ヘラ描文などの施文は認められない。在地産の可能性が高いが、胴部内面に下方からの強いヘラケズリ痕をもつなど、その特徴を残している^(註2)。

北陸系有段口縁甕形土器

北陸南西部系の有段口縁甕が南中台遺跡SI12・13および中台遺跡からまとまって出土している。南中台遺跡例についてはすべて在地産の可能性が高い。本遺跡では、北陸北東部系の存在は確実ではないが、中台遺跡では、15・150号住居跡から口縁端部に面取り面をもつ甕が出土している。これらは、胴部内面にケズリをもつものが目立つ。北陸北東部系は、茂原市国府関遺跡や千葉市荒久遺跡などにあり、遺跡単位で系譜を異にする傾向がある^(註3)。

畿内系甕形土器

タタキ甕は、南中台遺跡SI21-2、SI27-34、SI32-24、SI36-11、SI70-6などがある。国分寺台地区で最も多い外来系甕がタタキ甕であり、とくに、中台遺跡西辺部周辺からまとまって出土している。ただし、庄内式甕は現状で確認できない。中台遺跡571号住居跡5(Fig.251-5)など、口縁端部が丸くなるものもあるが、蛇谷遺跡方形周溝墓では、口縁端部上角が鋭角となるII b2類、口縁端部上端が肥厚するII b3類、タタキ調整にハケを加えるものが目立つ^(註4)。底部は輪台状のものがあ、丸底ないし丸底傾向のものは認められない。

布留式甕は、南岩崎遺跡SI40-1がある。口唇部肥厚面は平坦化しており、柱状脚の高杯が伴出する。

北関東系甕形土器

南中台遺跡SI45-18は二軒屋式、SI45-73~75は十王台式である。SI45例の胴部縄文は、軸縄が確認できない。千葉県域では、他に上稲吉式を散見することができる。

壺形土器

山田橋式段階と比較して、集落跡から出土する壺の頻度は明らかに低下する。しかし、葬制の中で特化したものもあり、系譜も多様である。集落出土の壺は、口縁部の収縮、直線化を基本的な傾向とするが、とくに墳墓出土壺には、これと相反する方向性も認められる。また、墳墓出土壺は、非定着的な外来的要素が交錯し、限定した地域編年ではこれらを網羅的に対象とすることができない。ここでは、定着的要素を対象とし、分類も最低限度にとどめる。形式設定は、I類を基準とする。

形式A I a類を基準とする。I a1類は久ヶ原・山田橋式系譜の壺であり、山田橋式では、口縁部に対して垂下する複合面を加飾部とする。

複合部に横帯縄文をもつ南中台遺跡SI33-1・2、SI35-2は口唇部Ⅱa類であり、口縁部端が鋭角となり、複合部断面形状は三角形を呈す。この断面形状をもつものは、草刈遺跡E152-5、E187-11など、一部は小形丸底系土器定型期初期まで認められるが、この段階には客体化する。南中台遺跡SI24-7、SI32-3、SI33-3、SI35-3・4、SI42-7は、複合部の粘土紐の貼り合わせが薄く、口唇部はⅡb・d類となる。複合面の縄文施文はないが、SI35-3・4、SI42-7、SI78-7など複合部下端に押捺をもつものがある。このⅠa1類は、南中台遺跡、蛇谷遺跡において最も一般的な壺形式である。南中台遺跡SI78-7は、全体的な特徴が神門4号墓出土例と酷似する。

無文化とともに、複合部幅は広くなる傾向がある。Ⅰa2類は五領式をとおして一般的に認められ、和泉式に連続する。Ⅰa1類に対し口縁部は直線化し、頸部はⅢb類が一般化する。蛇谷遺跡第46号住居跡3、御林跡遺跡Ⅱ293号遺構1、草刈遺跡D033-2、D046-6、D248-1など類例は多い。これらは、直線的ないしやや外反する口縁部をもつ。複合面は直線的で複合部の貼り合わせは薄く、器壁厚はほぼ一定である。これに対して、複合部段部側に厚みをもつものには、下鈴野遺跡22号住居跡1などの複合段部下端の押捺や、草刈遺跡(市調査)26号方形周溝墓1(Fig.252-14)、御林跡遺跡Ⅱ126号遺構18、草刈遺跡K041-10・13(Fig.252-9)など複合面の外反が認められるものがある。とくに祇園原貝塚38号住居1(Fig.252-18)、台遺跡B地点170号住居跡9(Fig.252-19)、草刈遺跡K056-2などは、口縁複合部が著しく誇張される。祇園原貝塚、台遺跡例は、柱状脚の高杯と伴出する。Ⅰa3類には草刈遺跡K056-34などが、内面に屈折稜をもつⅠa4類には草刈遺跡A103-1・2・13・14、D060-27(Fig.252-16)などがある。Ⅰa3類の蛇谷遺跡方形周溝墓第114図1などは、形式C系譜の可能性がある。Ⅰa4類の草刈遺跡B137-8・9などは有段口縁壺形式Dと一体的である。

口縁複合部の誇張は、小形丸底系土器定型期から高杯柱状脚Ⅳf類段階を中心とし、おもに葬制の中で特化する傾向が認められる。これに対して、柱状脚出現以降の基本的な変化は、口縁部高の収縮と、頸部径の拡大傾向にある。和泉式直前段の南岩崎遺跡SI46ではⅠb2・3・4類があり、広口壺化、甕化が認められる。

ここでは、Ⅰa1類を形式Aa、Ⅰa2類を形式Ab、Ⅰa3類を形式Ac、Ⅰa4類を形式Adとし、形式Aaについて、Ⅲa・b類をもとにAa1型・Aa2型を設置しておく。

形式B Ⅰb類を基準とする。在地系の有段口縁壺であり、山田橋式段階に一般化する。当該地域における複合部の拡張は上下同程度のⅠb1類が多い。山田橋2式新段階前後には、唐崎台遺跡第41号住居跡1など、複合部を口唇部外面に直接重ねる屈曲の弱いものもあるが、当該段階には、南中台遺跡SI35-1など、口縁複合部の張り出しが強いものが現れる。南中台遺跡SI24-4、SI35-1、SI43-5は、いずれも複合部に帯縄文、複合部下端と複合部内面に押捺文をもつ。ただし、Ⅰb1類には時期的な伸長が認められない。南祇園原遺跡203号住居跡1(Fig.252-20)、長平台遺跡288号方形周溝墓第127図21・22(Fig.252-21)、草刈遺跡K364-2など、複合部上部拡張例Ⅰb2類が漸次主体化する。

この形式Bには、伝統的な結節区画帯縄文を遺存するものが目立つ。山田橋表通遺跡046号跡6・9、南祇園原遺跡203号住居跡4など、山田橋2式新段階前後には、胴部帯縄文単帯化が進行するが、南中台遺跡では、一部が加飾壺として限定的に特化される状況が認められる。竹管押捺など口縁複合部内面の加飾は、山田橋式では類例が少ない。南中台遺跡SI33-1、SI35-1は、結節区画帯縄文2帯をもち、長平台遺跡288号方形周溝墓第127図22、草刈遺跡(市調査)26号方形周溝墓2は、帯

縄文2帯に沈線山形文を加える。帯縄文2帯下部に山形縄文帯をもつものには草刈遺跡A71-1があり、大厩遺跡5号墳内1(Fig.252-22)は「東京湾岸形」の幾何学文様土器である。草刈六之台遺跡4E-85-5は、沈線区画の網目状文3帯に縦区画文を加えるものであり、「安房形」(大村2007)系列と考える。これらは、無文の壺と比較して頸部屈折が明確なIIIb類となるものが多い。

無文化とともに、形式Bとしての独自性は曖昧化する。草刈遺跡B139-41(Fig.252-24)は伝統的な形状を残すが、草刈遺跡E055-8、K399-21、K519-4などは、複合部を口唇部外面に直接重ね、形式Aと同化する。形式Abのうち、草刈遺跡B138A-21など複合部の段部側に厚みがあるものには、複合部の貼り合わせを擬口唇部から上部にずらしているものがある。また、I b3・4類の蛇谷遺跡第46号住居跡4、御林跡遺跡II 327号遺構2、草刈遺跡D028-5などは、有段口縁壺形式Dの複合部下端拡張例とみることできる。

形式C Ic類を基準とする。蛇谷遺跡第12号住居跡12(Fig.252-27)、番後台遺跡003号住居跡3(Fig.252-28)などが当該地域における初現例となる。辺田1号墳24~27、親皇塚古墳などの古墳出土例ををのぞくと、草刈遺跡E022-5(Fig.252-30)など比較的類例は乏しい。形式Cは、南岩崎遺跡SI64-2など、和泉式に系譜を保つ。

形式D Id類を基準とする。当該地域における初現例としては、パレス模倣壺と伴出する長平台遺跡289号方形周溝墓第136図8(Fig.252-25)、中台遺跡仁王門脇住居跡例(Fig.252-26)などがある。長平台遺跡289号方形周溝墓例は、3段に屈曲する口縁部をもつ。複合部は水平方向に開き、口縁端部は上方へ肥厚する。これらは東海系譜と考える。この段階は、神門3号墓墳頂部出土例を含め、複合部の水平方向への拡張を基本とし、中台遺跡仁王門脇例は、口縁複合部内面に櫛描直線文と山形文を描く。長平台遺跡289号方形周溝墓例の系列には、草刈遺跡D060-19~24がある。

小形丸底鉢Aa1型を伴出する東間部多2号墓第21図1(Fig.253-6)は、複合部が直線的に開く。これに対して、御林跡遺跡II 284号遺構1、草刈遺跡D060-26(Fig.253-7)、K041-14などは、水平面が張り出し、口縁複合部も大きく外反する。草刈遺跡B138A-23(Fig.252-32)・24(Fig.253-8)、海士遺跡群三入道地区7号跡8はさらに複合部が誇張されるが、これは、形式Bの祇園原貝塚、台遺跡例同様小形壺が目立つ。口縁複合部の拡張は、柱状脚の高杯IVf類段階を盛期とし、複合部内面の屈曲に形式差は存在するものの、複合部下端の押捺など共通点がみられる。なお、御林跡遺跡II 284号遺構1は、甕F1a型、小形丸底鉢Aa1型と伴出し、他例に対して先行する。

形式Ea Ie1類を基準とする。山田橋式系譜の壺である。本形式は、山田橋2式段階ですでに文様施文が省略される場合があり、南中台遺跡では文様をもつものはない。南中台遺跡SI14-1、SI32-1、SI39-2は頸部がIIIa類であり、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。類例には、蛇谷遺跡第96号住居跡4(Fig.253-10)、草刈遺跡K103A-5、D223-4、西広貝塚50号住居跡6・9(Fig.253-11)、南祇園原遺跡201号住居跡1(Fig.253-16)などがある。これに対して、南中台遺跡SI32-5・6、叶台遺跡31号遺構8(Fig.253-13)、草刈遺跡B138A-34、D021-7、K041-12(Fig.253-15)は、IIIb類の屈折頸部であり、口縁部の直線化、短頸化が認められる。IIIa類からIIIb類の転換点は、蛇谷遺跡第26B号住居跡1(Fig.253-12)、IIIa・b類が伴出する蛇谷遺跡第12号住居跡例などから、甕形式F成立期、小形丸底鉢Aa1型段階と考えておく。なお、口縁端面については、IIIa類とIIa類、IIIb類とIIb類の関係が認められるものの、明確に区分できない。ここでは、IIIa・b類をもとにEa1型

・Ea2型を設置しておく。

組成比について云々するデータは現状においてないが、壺の比重が低下していく過程、とくに高杯柱状脚段階以降の壺は複合口縁を特徴とし、単口縁壺は減少する傾向が認められる。

なお、蛇谷遺跡第9A号住居跡12、第48号住居跡20(Fig.253-18)、第71号住居跡1、祇園原貝塚17号住居1、草刈遺跡D031-2(Fig.253-19)は、IIIb類の屈折頸部で、口縁端部に拡張面をもつ。口縁部は他例に対して外反が強い。これらは、形式Ea垂式としておく。相模湾沿岸地域にいたる東海系を含む可能性がある。蛇谷遺跡例は小形丸底系土器定型期前段を中心とする。また、南中台遺跡SI12-14については、他の伴出土器からみて北陸系の可能性が高い。類例は、福井県長泉寺遺跡SK046などにある。

形式Eb Ie2類を基準とする。口縁部内湾器形をとるものは、南中台遺跡SI15-5、SI24-13、長平台遺跡68号竪穴住居跡1(Fig.253-20)、蛇谷遺跡第3号住居跡9(Fig.253-22)、叶台遺跡31号遺構7(Fig.253-23)などがあり、長平台遺跡例をのぞきIIIb類の屈折頸部である。このうち南中台遺跡SI24-13、蛇谷遺跡第3号住居跡9はやや広口となる。段階的には小形丸底系土器定型期前段より以前にほぼ限定できる。

広口壺形土器

久ヶ原・山田橋式系列の広口壺形土器であり、基本的に口縁部は折り返し状の二重口縁となる。大・中形品と小形品の区分は明確である。口縁部、頸部段、胴部下半段、段部押捺、頸部屈折などに変化を認めることができる。

形式A 折り返し状二重口縁のIa類を基準とする。IIa・IIIa類には、南中台遺跡SI15-3、SI33-10、SI39-1、SI45-1、祇園原貝塚36号住居1などがあり、SI33-10は口縁複合部、胴部段に、SI39-1は口縁端部に押捺をもつ。IIa・IIIb類は認められない。IIb・IIIa類には、蛇谷遺跡第12号住居跡第16図1、第31号住居跡2、祇園原貝塚34号住居4、草刈遺跡D095-7などがあり、蛇谷遺跡第12号住居跡例は口縁複合部下端に押捺をもつ。IIb・IIIb類には、蛇谷遺跡第50A号住居跡18、第56号住居跡第66図2(Fig.253-31)、草刈遺跡E136-19、K399-23(Fig.253-32)などがあり、蛇谷遺跡第50A号住居跡18、草刈遺跡E136-19は口縁段部下端に押捺をもつ。なお、南中台遺跡SI45-1、草刈遺跡D095-7は胴部下位に段部をもつ。

南中台遺跡例は、有段のIIa・IIIa類が主体となり、SI15-3、SI33-10、SI45-1は赤彩される。これらは壺としての独自性をもつが、IIb類には、赤彩、ミガキを省略したものもあり、甕と機能的、形式的な一体化を指向する。IIb・IIIb類の草刈遺跡K399-23が、小形丸底鉢Aa1型、小形短頸粗製壺と伴出することから、おおむね定型的小形丸底系土器成立期前後を下限とする。ここでは、IIa・IIIa類をA1型、IIb・IIIa類をA2型、IIb・IIIb類をA3型としておく。

形式B 口縁部が単素縁となるIb類を基準とする。形式Aに対して客体的である。南中台遺跡SI33-9は、頸部が有段押捺となる。下鈴野遺跡03号住居跡1は、胴部下半に段部をもち、口縁部は甕に類する多段となる。

直口縁壺形土器

器高20cm前後以下の中形の直口壺。

形式A Ia類を基準とする。Ia1類は、南中台遺跡SI17-8、SI33-7、草刈遺跡D219-2、D279-4、

E178-8、祇園原貝塚18号住居2(Fig.254-1)、唐崎台遺跡第24号住居跡-7などがある。下膨れの胴部に突出底部をもつ伝統的な器形をとるものが多い。I a2類は、蛇谷遺跡第8号住居跡1(Fig.254-4)、御林跡遺跡II 73号遺構3、草刈遺跡D095-8、K001-14などがある。口縁部がやや短い蛇谷遺跡第23号住居跡1、草刈遺跡D057-11、E055-7などは、器形的に小形短頸壺に似る。

これらは、基本的に甕形式F、小形丸底鉢Aa1型出現期前後以前であり、直口壺形式Cの一般化にともない淘汰ないし機能的・形式的な統合をとげる。ここでは、I a1・2類を基準として、A1・A2型を設置しておく。

形式B I b類を基準とする。瓢形壺を祖型とするものであり、中台遺跡8号住居跡35(Fig.254-5)がある。ただし、パレス壺を多数出土している長平台遺跡を含め、類例は思いの外乏しく、安定的な定着は遅れる。I b1類の増加は、甕形式F、小形丸底鉢Aa1型出現前後期であり、蛇谷遺跡第17A号住居跡第21図18(Fig.254-7)、下鈴野遺跡16号住居跡3、21号住居跡2(Fig.254-8)、草刈遺跡E144-4などがある。下鈴野遺跡21号住居跡2は口唇部内面に面をもつ。

口径を増し口縁部が大振りとなるI b2類は、蛇谷遺跡第46号住居跡1、長平台遺跡205号方形周溝墓11、草刈遺跡K001-15、K041-8、K058C-4、K103B-1などがある。胴部はほぼ球形であり、算盤玉状の扁平なものは認められない。これらは、畿内系直口壺形式Cの波及以降、その影響下にあると考えられる。ここでは、I b2類を基準として、B1・B2型を設置しておく。

形式C I c類を基準とする。南中台遺跡では認められない。甕B1型と共伴する御林跡遺跡II 317号遺構8・9(Fig.254-11)を初現例とする。317号遺構8は口縁端部に面をもつ。しかし、一般化するのは下鈴野遺跡08号住居跡1(Fig.254-12)、草刈遺跡D219-4など小形丸底鉢Aa1型と伴出する段階以降であり、草刈遺跡D・E・K区では一般的に認められる。これらの口唇部は、薄くやや尖り気味となる。とくにI c1類は、草刈遺跡D133-4、D060-16~17、K012-7、K041-7(Fig.254-14)、K151-6(Fig.254-15)・7、K428-6、K449-3、K452-2(Fig.254-13)・3、K456-4など類例が多い。口縁部高が収縮するI c2・3類は、I c1類に対して類例は少ないものの、下鈴野遺跡25号住居跡5、御林跡遺跡II 53号遺構9、草刈遺跡K013-3・4、K041-6などがあり、柱状脚の高杯の出現以降に増加する傾向が認められる。蛇谷遺跡第37B号住居跡13(Fig.254-17)・14など、小形丸底系壺形式Bと一体化し、和泉式へ移行する。型式設定は行わない。ここでは、I c1・2・3類を分化する形式とし、それぞれ形式Ca・b・cとしておく。

小形丸底系鉢形土器

口径に対して器高が1/2程度のものを小形丸底系鉢(丸底鉢)、口径、器高がほぼ同程度ないしやや器高が凌ぐものを小形丸底系壺(丸底壺)とする。

形式A I a類を基準とする。II a・IIIa類には、南中台遺跡SI32-33、蛇谷遺跡第26B号住居跡7(Fig.254-24)、第55号住居跡18(Fig.254-25)、第81B号住居跡17、第88号住居跡17、東間部多2号墓第22図9、東間部多16号墓13、叶台遺跡31号遺構4、台遺跡B地点013号住居跡、番後台遺跡003号住居跡1、草刈遺跡D077-3、D219-2・3などがある。口縁部は、直立気味に上がりやや内湾する。頸部の収縮は弱く、箱形器形をとる。底部は凹底になるものが多い。東間部多2号墓、草刈遺跡D077で丸底鉢II b・IIIa類と伴出する以外、他の小形丸底系土器と伴出することはない。II a・IIIb類には、南中台遺跡SI32-33、草刈遺跡K399-14(Fig.254-27)があり、脚部をもつSI29-9も、

本類の器台結合形と考える。他の小形丸底系土器との伴出例はない。Ⅱa・Ⅲc類は、鋭く外反する短い口縁部をもつものであり、御林跡遺跡Ⅱ322号遺構14・15(Fig.254-33)、蛇谷遺跡第102B号住居跡18、草刈遺跡K001-10、K041-4、K335-1(Fig.254-36)、K341-1(Fig.254-34)、K399-14、K463-2(Fig.254-37)、K488-1など類例は多い。小形丸底系壺、柱状脚の高杯とも伴出する。Ⅱb・Ⅲa類には、蛇谷遺跡第26A号住居跡14、東間部多2号墓第22図2、下鈴野遺跡25号住居跡10、草刈遺跡D005-7、D077-13(Fig.254-29)、D416-12(Fig.254-28)、E152-2などがある。本類は、下鈴野遺跡25号住居跡で丸底鉢Ⅱa・Ⅲa・c類、直口壺形式Cと、草刈遺跡E152で小形丸底系壺と伴出するが、小形丸底系土器との伴出例は限られる。Ⅱb・Ⅲb類には、草刈遺跡K012-3・4(Fig.254-30・31)、K041-1、K336-2(Fig.254-32)など、Ⅱb・Ⅲc類には、台遺跡B地点175号住居跡12、草刈遺跡K001-3などがあるが、類例は少ない。

小形丸底系土器は、鉢形を祖型とし、大和地域などでは庄内式を通じた系譜を想定しているが(青木2006)、当該地域では、丸底鉢Ⅱa・Ⅲa類が端緒となる。Ⅱa・Ⅲa類、Ⅱb・Ⅲa類は、口縁部がやや内湾し、頸部の収縮、屈折が弱い。また、叶台遺跡31号遺構4などやや突出する底部をもつものもあり、安定的ではない。内湾口縁については、東海地方西部の影響も無視できないが、鉢形祖型の型式変化に、壺形器形を基本とする東海系内湾精製土器群(赤塚2002)を積極的に介在させることはできない。Ⅱb・Ⅲa類は、口縁部高の拡大にともない全体高も増し、壺形への転化が認められる。一方、Ⅱa・Ⅲc類は、短く外反する口縁部を特徴とし、鉢形へ特化する。

ここでは、1次分類を再編し、Ⅱa・Ⅲa・b類をAa1型、Ⅱb・Ⅲa類をAa2型、Ⅱb・Ⅲb類をAa3型、Ⅱa・Ⅲc類をAb型とし、Ⅱb・Ⅲc類については、形式Abに含めておく。Aa1型は、定型前段の小形丸底系土器である。

形式B Ⅰb類を基準とする。有段鉢である。蛇谷遺跡第102B号住居跡19(Fig.254-20)、台遺跡B地点第170号住居跡8、草刈遺跡A14-5(Fig.254-21)、K507-1(Fig.254-23)、辺田1号墳151・156などがあるが、全体として類例は少ない。辺田1号墳例は、突出底部をもつ。

小形丸底系壺形土器

形式A Ⅰa類を基準とする。Ⅰa類は、定型的な小形丸底系土器であるが、小形丸底系壺の典型をⅠa2・b類とすれば、Ⅰa1類は小形丸底鉢との中間的な形式である。とくに、頸部の収縮の弱いⅠa1・Ⅱa類には、草刈遺跡D005-7(Fig.254-38)、D060-8(Fig.254-39)、K359B-1など、口縁部がやや内湾するものがあり、鉢Aa2型との関連性が認められる。これに対して、Ⅰa1・Ⅱb類には、御林跡遺跡Ⅱ126号遺構7、草刈遺跡D092-3(Fig.254-40)、K028-1(Fig.254-42)、K456-2(Fig.254-41)などがあり、口縁部は直線的ないしやや外反するものが目立つ。口縁部がさらに拡大したⅠa2類にも、草刈遺跡E179-1(Fig.254-45)、K012-1、K041-2(Fig.254-44)など、Ⅱa類で口縁部がやや内湾するものがあるが、御林跡遺跡Ⅱ322号遺構13、草刈遺跡D092-4(Fig.254-46)、K001-8(Fig.254-47)、K335-3(Fig.254-49)、K336-1(Fig.254-48)などⅡb類が主体化し、口縁部は直線的ないしやや外反する。とくに柱状脚の高杯と伴出段階には、頸部の収縮、胴部の球形化が進む。

ここでは、Ⅰa1・Ⅰa2類をそれぞれ形式Aa・Abとし、Ⅱa・Ⅱb類をもって、1・2型を設置する。

形式B Ⅰb類を基準とする。蛇谷遺跡第37B号住居跡13(Fig.254-17)・14、御林跡遺跡Ⅱ126号

遺構6、草刈遺跡D247-1、K001-7(Fig.254-50)・12、K151-5(Fig.254-51)などがある。

小形丸底系壺は、鉢Aa1型を起点とし、成立期には鉢形との中間形式である壺形式Aaが主体となる。丸底系壺の型式変化は、口縁部の拡大と頸部の収縮を基本とするが、この変化はかならずしも同方向ではない。頸部収縮の強化は一方で球形胴部の発達を促し、形式Bが派生する。形式Bは、柱状脚高杯伴出段階に一般化し、直口壺形式Cと一体化して和泉式へ移行する。

小形平底壺形土器

大振りの内湾口縁と、小形平底の胴部をもつ。南中台遺跡SI27-23、唐崎台遺跡第13号住居跡6(Fig.254-18)がある。南関東地方では一定の定着を認めることが可能であり、東海系内湾精製土器群の影響下に成立したものとする。

小形短頸壺形土器

特定の堅穴から複数個体がまとまって出土することに特徴がある。ハケ整形痕を残す粗製品であり、東京湾西岸のハケ台付甕形土器地域では、山田橋2式併行期に出現する。南中台遺跡では、SI24-11、SI29-7がIb・IIb・IIIa類、SI35-13・14がIa・IIb・IIIa類である。いずれもミガキが施され、赤彩品を含む。東京湾西岸系とは別系譜の可能性もある。南中台遺跡では小形碗形式Aに近似するものもあり、その系譜はかならずしも一元的にとらえられない。

南岩崎遺跡SX01は、6・7(Fig.255-5)がIa・IIb・IIIa類、12(Fig.255-6)・14・15がIb・IIb・IIIa類、8・9・10・11・13がIb・IIb・IIIb類である。南岩崎遺跡例は口頸部などにハケを残すが、胴部にはミガキが施される。Ia類は、他に蛇谷遺跡第86号住居跡1・3などがある。草刈遺跡D024Aでは、Ia・b類、IIIa・b類が混在するが、粗略化が認められる。下鈴野遺跡10・16号住居跡、草刈遺跡D035A(Fig.255-8・9)、E187、K337、K399、草刈六之台遺跡175号住居では、Ib・IIIb類にほぼ限定され、下鈴野遺跡10号住居跡、草刈遺跡E187、K399などでは小形丸底系土器が伴出する。Ib類には、下鈴野遺跡第16号住居跡4・5(Fig.255-7)・6、草刈遺跡D024A-28・32・34、E187-13・16・17など、口縁部が多段ないし有段となるIIa類を含む。

小形短頸壺は、小形丸底系土器成立期を含むそれ以前の段階を主体とするが、現状では、山田橋式に近接する段階の存在は明確ではない。また、草刈遺跡K151-1~4(Fig.255-11・12)など、柱状脚高杯伴出期の諸例との関係も明らかではない。ここでは、Ia・b類を基準として形式A・Bを認め、IIIa・b類をもとに1・2型を設置しておく。

大形碗形土器

屈曲外反口縁をもたないものを碗形土器とする。口径25cm前後の久ヶ原・山田橋式系列の碗である。前段の山田橋2式の碗形土器は、口縁部に最大径をもつ内湾器形をとる。口縁部は貼付けによる段部をつくり、口縁端部と段部に単節羽状縄文、段部下端に布目圧痕を残す押捺を施す。

形式A Ia類を基準とする。久ヶ原・山田橋式系列の碗形土器である。山田橋2式に対して、口縁端部、段部縄文施文の無文化、段部下端押捺の省略、無段化が進む。基本的な変化は、高杯形式Aと連動する。IIa1類の南中台遺跡SI33-14は、山田橋式と区別することができないが、出土状況からみて混在とは考えにくい。類例は草刈遺跡K337-5にある。同様の施文例には、無頸壺形の小形碗SI36-20がある。IIa2類は、草刈遺跡D042B-1(Fig.255-17)、片又木遺跡II35号遺構4などがある。大形碗で主体となるのは無段化したIIb類であり、南中台遺跡SI16-3、SI31-1、SI45-10、蛇谷遺跡第98号住

居跡10、御林跡遺跡I 55号遺構2(Fig.255-18)、西広貝塚48号住居跡10、草刈遺跡D249-4などがある。ここでは、IIa・b類を基準として1・2型を設置しておく。

形式B IIb類を基準とする。南中台遺跡SI09-3、蛇谷遺跡第56号住居跡第66図3、草刈遺跡D077-17(Fig.255-44)、E178-3などがある。いずれも、口唇部が短く屈折する。このうち、南中台遺跡SI09-3は、単沈線による縦沈線充填横帯文、縦区画綾杉文をもつが、文様の系譜は明らかではない。その消長は小形碗と対応するが、小形碗衰退期に類例が多い。

小形碗形土器

最大径12cm前後の小形碗。小形丸底系土器出現前に、小形器台と組み合わせる。

形式A IIa類を基準とする。類例こそ少ないものの、久ヶ原・山田橋式系列の碗形土器であり、IIa類は南中台遺跡SI36-20、西広貝塚48号住居跡11(Fig.255-24)がある。西広貝塚例は段部押捺のみで縄文施文がない。南中台遺跡SI17-15は、粘土紐積み上げ痕を段部の痕跡として残す。無段のものは南中台遺跡SI08-1がある。口唇部が短く屈折するIIb類は、南中台遺跡SI17-16、SI27-18、SI32-32、SI35-16、SI38-1、御林跡遺跡II 80号遺構10、II 126号遺構19などがある。このうち、南中台遺跡SI35-16、SI38-1は、口縁部が折り返し状の二重口縁となる。SI32-34もこれに類する。南中台遺跡SI17-16、SI27-18、御林跡遺跡II 126号遺構19など、小形短頸壺に近似するものもある。

形式B・C・D IIb・c・d類をそれぞれ基準とする。形式B・C・Dは、基本的に体部器形の内湾度によって区別する。このうち、形式B・Cは、口唇部が短く屈折するIIb類が主体となる。形式BIIb類は南中台遺跡SI18-9、SI25-3、SI27-20、SI29-8、形式BIIc類はSI27-19、形式CIIb類はSI24-27、形式CII d類はSI17-14、SI24-28がある。この小形碗形式B・Cは、開脚碗形高杯形式Bを基点として形式転化したものであり、形式BIIc類が器形的には祖型に近い。ただし、口縁部径が収縮し、口唇部が短く屈折する形式BIIb類の成立をもって独自化すると考える。南中台遺跡では、SI25-3、SI27-19など赤彩ないしミガキを施した精製品が多い。とくに、形式BはIIb・c類が主体となりII d類は少ない。これに対して、形式Cには、SI21-4、SI24-26、SI32-29、SI45-11などII d類が一定量認められ、小形丸底系土器との共伴例もある。ただし粗製品が目立つ。さらに体部が傾斜する形式Dは、南中台遺跡では客体的である。IIc類はSI32-31、II d類はSI33-17、SI42-7などがある。基本的に口唇部に変化をもつIIb・c類は、他遺跡でも類例が少なく、II d類が一般化する。形式Dは、草刈遺跡D035A-4、叶台遺跡31号遺構31など突出底部をもつものもあり、粗略化とともに定型が崩れる。叶台遺跡31号遺構では伴出する形式Bも突出底部をもつ。下鈴野遺跡10号住居跡、御林跡遺跡II 238・333号遺構、草刈遺跡E187などで定型小形丸底系土器と伴出する。

形式B・C・Dは、形式BIIb類>形式CII d類>形式DII d類を基軸的な変化とするが、長平台遺跡288号方形周溝墓(Fig.255-35・36)や草刈遺跡D040(Fig.255-27)などには非典型例もあり、形式Dも散見できる。派生する変化も多いため、ここでは、型式変化は設置しない。

大形鉢形土器

屈曲外反口縁をもつものであり、最大径20cm前後以上のものを大形鉢とする。大形鉢は、南中台遺跡では類例が乏しく、SI13-12、SI47-11が指摘できるのみである。SI13-12は、口縁部が多段となる。

形式A IIa類を基準とする。口縁部の屈折がゆるやかなIIa類は、蛇谷遺跡方形周溝墓第117図

28(Fig.255-20)、草刈遺跡E189B-10(Fig.255-19)など、頸部がく字状に屈折するⅡb類には蛇谷遺跡第17号住居跡7、草刈遺跡D035A-5(Fig.255-22)、D417-1、K399-19・20(Fig.255-21)がある。

形式B Ⅰb類を基準とし、Ⅱb類に限定される。蛇谷遺跡第27B号住居跡17、御林跡遺跡Ⅱ10号遺構6などがある。これらは、やや扁平ではあるが、甕の亜種にも見える。草刈遺跡K103-14・15は、短い口縁部が折り返し状になるが、全体器形は大形鉢形式Bに似る。

大形鉢は、甕形式F、小形丸底鉢Aa1型出現期およびその前段を中心とする。大形鉢に類似するものもあることから、大形鉢と機能的に関連するが、頸部収縮にともない甕形土器と同化していくと考える。やや後出する草刈遺跡K001-13は、小形丸底系鉢形式Abの大形品である。ここでは、形式A・BともⅡa・b類をもとに1・2型を設置しておく。

小形鉢形土器

屈曲外反口縁をもつ鉢のうち、最大径12cm前後の小形鉢。短い口縁部と底部がやや突出することによって、小形丸底系と区別する。

形式A Ⅰa類を基準とする。蛇谷遺跡第53号住居跡13、第81A号住居跡第86図5、東間部多16号墓14、御林跡遺跡Ⅱ77号遺構8、草刈遺跡D024A-34・36、D249-1、K151-1・2・3などがある。小形鉢や小形短頸壺との関連性が認められるものもあり、安定的な特徴を欠く。草刈遺跡K001などにみられる手捏ね状の小形品にも、器形的に似るものがある。

形式B Ⅰb類を基準とする。蛇谷遺跡第46号住居跡6、第48号住居跡12、第49号住居跡9、第75A号住居跡6、唐崎台遺跡第24号住居跡10などがある。これらのうち蛇谷遺跡例は、小形丸底系土器出現期を中心とする。小形丸底系鉢Aa1・2型と関連する可能性がある。

高杯形土器

ここでは、やや内湾ないし直線的に開く杯部をもち、口縁部に最大径をもつものを対象とする。

形式A Ⅰa・Ⅲa類を基本とする。無稜高杯であり、口縁部有段のⅡa類は本類に限定できる。これには、長平台遺跡288号方形周溝墓第125図25、南祇園原遺跡201号住居跡2(Fig.256-3)、草刈遺跡D040-4(Fig.256-2)などがある。南祇園原遺跡201号住居跡2は脚裾部にも段部をもつ。山田橋式系列の高杯であり、段部の縄文施文は省略されるが、段部下端の押捺を残すものがある。杯内面底部はやや尖り気味に丸くなる(Ⅲa類)。また、脚部は直線的に開くⅣc類である。

山田橋式以後基本的に段部は省略されるが、杯内面底部はⅢa類を維持する。碗状器形をとるものには、長平台遺跡288号方形周溝墓第123図10(Fig.256-6)、草刈遺跡D040-5(Fig.256-4)、E189B-2などがあり、杯部全体ないし上半部が直線的に開く深い杯部をもつものには、御林跡遺跡Ⅱ80号遺構20、Ⅱ317号遺構17(Fig.256-5)、草刈遺跡D045-1、D223-1、K103A-12などがある。口唇部は、長平台遺跡288号例など面をもつⅡb1類が多いが、Ⅱb3類についても、有稜高杯がやや尖り気味になるのに対して、厚みをもつものが多い。脚部は、直線的に開くⅣc類が基本形であり、脚部小孔を穿つものは少ない。南中台遺跡SI09-5、蛇谷遺跡第23号住居跡4(Fig.256-9)などは、浅く直線的に開く杯部をもち、全体器形は有稜高杯に類するが、杯内面底部はⅢa類が維持される。

ここでは、Ⅱa類をA1型とし、Ⅱb類のうち杯部高指数(杯部高/口径×100、口径100に対する杯部内面高)30以上未満を基準とし、指数30以上のものをA2型、30未満をA3型としておく。

形式B IIb類の有稜高杯であり、このうち、脚部IVa・b・c・d類を本類とする。東海系高杯を祖型とする。南中台遺跡SI17-21は、口唇部がIIb2類、杯底部がIIIb類、脚部がIVb類であり、脚部上半には櫛描き横直線文を描く。口唇部はIIb3類が主体となるが、口唇部内面に面をもつIIb2類は、蛇谷遺跡第26B号住居跡12・13など、小形丸底鉢Aa1型を伴出する段階まで認めることができる。

基本的な器形変化は、箱形の深い杯部が漸次浅く、底部径が小さくなる点にある。杯部高指数に一般的な傾向をみる事が可能であり、南中台遺跡SI07-5、SI14-9、SI17-21、SI39-18、SI45-14は35前後をしめす。これらの脚部は、IVb・c類を基本とする。器高も高く、器高指数(器高/口径×100、口径100に対する器高)は、SI39-18、SI45-14が75前後をしめす。これに対して、蛇谷遺跡第91号住居跡8(Fig.256-20)、方形周溝墓第118図1(Fig.256-19)、草刈遺跡D024A-6、E155-3(Fig.256-10)や、定型化した小形丸底系土器伴出段階の草刈遺跡D060-6、K411-4は、口縁部高指数27前後から29、器高指数60前後から67であり、草刈遺跡D005-6(Fig.256-26)は、口縁部高指数21.4、器高指数54.3となる。これらの脚部はIVd類が一般的であり、IVd類の支配化とともに、全体器形の扁平化が進む状況が認められる。口唇部はIIb3類、杯底部はIIIb類である。

ここでは、杯部高指数30以上未満、杯部底部径指数(底部径/口径×100、口径100に対する杯部底部径)40以上未満、脚部IV類を基準とし、杯部高指数30以上、杯部底部径指数40以上でIVa・c類のものをB1型、杯部高指数30以上、杯部底部径指数40未満でIVa・b・c類のものをB2型、杯部高指数30以上、杯部底部径指数40未満でIVd類のものをB3型、杯部高指数30未満をB4型としておく。B4型はIVd類に限定できる。ただし、当該地域では、IVa・b類は類例が少なく、IVc類からIVd類を基軸的な変化とする可能性が高い。

形式Bは杯底部IIIb類を基本とするが、南中台遺跡SI27-24、SI39-19、蛇谷遺跡第1号住居跡7、第23号住居跡5、第100号住居跡10、方形周溝墓第118図2、草刈遺跡D051-1(Fig.256-14)、D279-2などIIIa類が一定量存在する。南中台遺跡SI39-19、蛇谷遺跡第23号住居跡5、草刈遺跡D051-1などは、脚接合部付近にわずかな稜をつくるものの、底部の張り出しは弱い。口唇部はIIb1類でやや椀状の器形をとる。これは、形式B影響の形式Aであり、ここでは、形式A垂式としてとらえておく。その消長は形式Aと対応する。

形式C Ib類の有稜高杯であり、このうち、脚部IVe・f・g類を本類とする。脚部IVe類には、草刈遺跡K177-6(Fig.256-28)、土宇遺跡第43号住居跡6、脚部IVf類には、下鈴野遺跡22号住居跡4、草刈遺跡D028-1(Fig.256-31)・2、D133-1、K001-27、K032-4(Fig.256-30)、K235-6、K507-3、脚部IVg類には、蛇谷遺跡第37B号住居跡22(Fig.256-32)・23、草刈遺跡K013-5(Fig.256-33)・6、K335-4、K336-4、K463-6などがある。祇園原貝塚38号住居、土宇遺跡第43号住居跡でIVe・f類が伴出するものの、各類の共伴例は乏しく、脚柱状化(IVe類)、脚裾部の屈折(IVf類)、柱状部の筒状化(IVg類)をおおむね一系的にとらえることが可能である。IVe・f・g類は、基本的に開脚高杯や小形・大形椀、小形短頸粗製壺などとは伴出せず、いわゆる食膳形式の形式的統合以降に限定できる。また、形式Bの口径が、21cm前後であるのに対して、IVe・f類は14cm台まで極端に縮小する。ただし、脚部IVg類の蛇谷遺跡第37B号住居跡、草刈遺跡K013例、南岩崎遺跡塚越地区SI46-4(Fig.256-34)などは、大形化に転じる傾向が明らかであり、これらは和泉式直前段に比定できる。ここでは、IVe類をC1型、IVf類をC2型、IVg類をC3型としておく。

椀形高杯形土器

東海西部地域において、定型的開脚高杯に先行する椀形高杯は、国府関遺跡自然流路391にあり、パレス文様をもつ。祇園原貝塚34号住居9(Fig.257-12)、長平台遺跡288号方形周溝墓第129図5(Fig.257-13)・6、あるいは御林跡遺跡II77号遺構11なども、これに連なる可能性がある。

開脚高杯形土器

脚裾部に最大径をもつ開脚高杯は、杯部形状を基準とし、椀状の杯部をもつものと、杯部下端に稜をもつものに大別することができる。

形式A Ia類を基準とする。東海系の有稜開脚高杯であり、小田部向原遺跡01号遺構(小田部墳丘墓)では、杯部および脚部に集合沈線による横直線文と山形文が施文される。その杯部は、平坦な底部から内湾気味に立ち上がる箱形器形をとる。これに類する深い器形をとるものには、中台遺跡8号住居跡34(Fig.257-3)、草刈遺跡D007-2、D032-3、K364-6(Fig.257-4)があり、草刈遺跡D032-3は屈曲して開く脚部をもつ。これに対して、蛇谷遺跡方形周溝墓第118図9・10(Fig.257-5)、さらに南中台遺跡SI24-23・24、SI27-28は逆台形となり、南中台遺跡SI42-2は浅く扁平化する。箱形杯部の外開扁平化、口縁部の直線化に基本的な型式変化を認めることが可能であり、直線的に開く杯口縁部をもつ蛇谷遺跡第102B号住居跡12、草刈遺跡D046-2(Fig.257-9)は、小形丸底系土器を伴出する。

ここでは、杯部高指数(杯部高/口径×100、口径100に対する杯部内面高)を基準とし、指数35以上のものをA1型、35未満30以上をA2型、30未満をA3型としておく。A1型は、ほぼ直線的に開く脚部をもつものに対して、A2・3型は脚上半部を絞った、外反ないし屈曲する脚部をもつ。

形式B Ib類を基準とする。当該地域では、形式Aに対してやや類例が少ない。ただし、脚部を欠くものについては、小形椀との識別が困難である。小形椀との対比では、南中台遺跡SI15-7、長平台遺跡9号竪穴住居跡25(Fig.257-14)、土宇遺跡第4号住居跡5(Fig.257-21)が形式BIIc類である。長平台遺跡、土宇遺跡例は相対的に大形の杯部をもち、脚部は扁平で脚部小孔位置が杯部際に寄っている。南中台遺跡SI32-47、蛇谷遺跡第48号住居跡15、第81A号住居跡第86図7(Fig.257-23)、唐崎台遺跡第3号住居跡4(Fig.257-22)、草刈遺跡D252-3(Fig.257-24)は形式Cであり、草刈遺跡D252-3は口唇部内面に面をもつ。また、蛇谷遺跡第81A号住居跡第86図7は屈曲脚となる。南中台遺跡SI47-12、蛇谷遺跡第50C号住居跡32(Fig.257-25)は形式Dであり、全体器形も扁平化する。蛇谷遺跡第50C号住居跡32は小形器台形式Cbと伴出する。

形式Bは、南関東において小形椀の祖型となるが、当該地域では思いの外類例が少なく口唇部の変化も乏しい。ここでは半球形の杯部にほぼ直線的に開く脚部をもつものをB1型、杯部が浅く外反ないし屈曲する脚部をもつものをB2型としておく。なお、山田橋2式新段階の山田橋表通遺跡046号跡4、唐崎台遺跡第41号住居跡3(Fig.257-10)では、半球状無文の椀形高杯が出土している。本形式に連なる可能性もあるが即断できない。

屈折高杯形土器

屈折口縁をもつ高杯形土器には、いくつかの系譜を認めることができる。

形式A 山田橋式併行期では、東京湾西岸地域に類例があり、東岸地域でも中部高地系の変形と考えられるものが若干認められる。当該時期では、草刈遺跡A10-7、E121B-1(Fig.257-20)があるが、

類例は乏しい。

形式B 浅い椀状の体部から屈折外反する有段鉢形の杯部をもつものである。南中台遺跡SI35-19、中台遺跡8号住居跡30(Fig.257-33)は北陸系であり、杯部が深く口径が収縮した段階のものである。類例は、国府関遺跡住居跡008-12、自然流路390などにある。

南中台遺跡SI24-21、SI32-30、一括3(Fig.201-3)、長平台遺跡14号竪穴住居跡11は、外面屈折部に段部をもたないが、周辺遺跡では類例があまりないことから、SI35-19を祖型とした定着形式の可能性もある。ただし、口縁端部や頸部内面に鋭い屈折稜をもつ点は、愛知県桜林遺跡、中狭間遺跡溝状遺構などの出土例に近似する。これらは「三河型」とも呼称されている(北島1998・2000)。

形式C 箱形の胴部から屈折外反する鉢形の杯部をもつものである。草刈遺跡D024A-12・13(Fig.257-28・29)、D076-6(Fig.257-30)などがある。草刈遺跡D024A-12・13は、底部外端に鐙の痕跡を残すことから、結合器台の派生定着形式と考える。ただし、草刈遺跡D076-6については、畿内系屈折高杯の可能性もある。これら屈折高杯の総体的な系譜関係は、現状において簡単に整理できない。

小形器台形土器

当該地域の器台形土器は、器高10cm程度の小形器台である。これに先行する中空器台系の定着は基本的に認められないが、小形器台定型期前段と考えられるものは散見できる。畿内系のX字形小形器台は、土宇遺跡第43号住居跡3・4(Fig.258-22)がある。他に類例は少ない。

形式Aa Ia類の御林跡遺跡II239号遺構5(Fig.258-3)を基準とする。本例は、単口縁で脚接合部Vb・VIa類、脚部が内湾するIVa類であり、定型的小形器台前段の東海系器台と考える。南関東では一般的に認知されていないが、一定の定着を認めることは可能である。ただし、本例は器高において形式Bと明確な差違はなく、形式的な一体化が認められる。御林跡遺跡II80号遺構7(Fig.258-5)・8はIb類であるが、脚接合部はVb・VIa類であり、口縁端部拡張面に円形浮文、刺突列をもつ。愛知県勝川遺跡上屋敷地区SZ22-11などに例があり、形式Aaに連なる可能性がある。また、口縁端部に垂下拡張面をもつ蛇谷遺跡第49号住居跡2は、東海系の可能性があり、本類に含めておく。

形式Ab Ia類、VIIb類を基本とする。中台遺跡表土層中47(Fig.258-1)がある。これ自体で系譜を限定することは難しいが、口縁端部に上部拡張面をもつ中台遺跡37号住居跡85(Fig.258-2)、周辺地域の国府関遺跡自然流路416・417は北陸系と考える。

形式B Ia・IIa類を基本とし、IIa類は、Va・b類、VIIb・c類と関係する。口縁端部は、面をもつIIIa2~4類が基本となるが、IIIb類も若干例認められる。

南中台遺跡の小形器台の口縁端部は、IIIa2類とIIIb類にほぼ限定できる。口縁端部IIIa2類と脚接合部V・VI類との関係は、SI12-11、SI13-22がVa・VIIb類、SI17-17がVa・VIc類、SI17-18・19がVb・VIc類。蛇谷遺跡では方形周溝墓第118図21・24がVa・VIIb類、第42号住居跡13、第96号住居跡10・11(Fig.258-8)がVa・VIc類、第24B号住居跡17・18、方形周溝墓第118図23(Fig.258-10)・25がVb・VIIb類、第7号住居跡28、第12号住居跡第17図6、中台遺跡では571号住居跡11がVb・VIc類である。その組み合わせは多様であるが、口縁端部他類との比較では、IIIa2類はVa・VIIb類との関連が目立つ。Va・VIIb類例は、器受部高、脚部高がほぼ同じであるのに対し、筒状の貫通孔の形成にともない器受部が浅くなる。端面が斜めに面取りされるIIIa3類、端面が上部に拡張するIIIa4類は、南中台遺跡では認められない。IIIa3類の蛇谷遺跡第48号住居跡13、方形周溝墓第118図

Tab.10 小形器台形態素組み合わせ

遺跡名	遺構名	No.	形式	段階	Ⅱ類 器受部						Ⅲ類 口唇部				Ⅳ類 脚部				Ⅴ類		Ⅵ類 脚接合部内面					Ⅶ類		
					a		b				a				b		a	c	b	d	a	b	a	b	c	d	a	b
					1	2	1	2	3	4	1	2	3	4														
御林跡遺跡Ⅱ	317号遺構	18	(A系列)	1-1		○						○						○		○					○		○	
南中台遺跡	S112	11	B1	1-2	○							○						○		○			○		△			
南中台遺跡	S113	22	B1	1-2	○							○						○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第96号住居跡	10	B2	1-2		○						○						○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第96号住居跡	11	B2	1-2		○						○						○		○			○			○		
南中台遺跡	S145	16	B2	1-2		○									○				○			○			○			
南中台遺跡	S117	17	B2	2-1		○						○						○					○			○		
南中台遺跡	S117	18	B2	2-1		○									○				○				○			○		
南中台遺跡	S117	19	B2	2-1	○							○						○		○			○			○		
御林跡遺跡Ⅱ	80号遺構	7	(A系列)	2-1	○							○						○		○	○					○		
御林跡遺跡Ⅱ	80号遺構	8	(A系列)	2-1	○							○						○		○	○					○		
唐崎台遺跡	第3号住居跡	2	Ca	2-1			○										○			○			○			○		
蛇谷遺跡	第12号住居跡第17図	6	B2	2-2		○						○						○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第12号住居跡第17図	7	B2	2-2		○									○			○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第7号住居跡	27	B2	2-2		○									○			○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第7号住居跡	28	B2	2-2	○							○						○		○			○			○		
蛇谷遺跡	方形周溝墓第118図	21	B2	2-2		○						○						○		○			○			○		
蛇谷遺跡	方形周溝墓第118図	22	B2	2-2		○							○					○		○			○			○		
蛇谷遺跡	方形周溝墓第118図	23	B2	2-2	○							○						○		○			○			○		
蛇谷遺跡	方形周溝墓第118図	24	B2	2-2	○							○						○		○			○			○		
蛇谷遺跡	方形周溝墓第118図	25	B2	2-2	○							○						○		○			○			○		
蛇谷遺跡	方形周溝墓第119図	8	(B2)	2-2		○									○			○		○			○			○		
中台遺跡	571号住居跡	11	B2	2-2		○						○						○		○			○			○		
中台遺跡	571号住居跡	12	B3	2-2		○								○			○		○		○		○			○		
西広貝塚	42号住居跡	5	B2	2-2	○							○						○		○			○			○		
西広貝塚	42号住居跡	6	B3	2-2		○								○				○		○			○			○		
御林跡遺跡Ⅱ	139号遺構	33	Cc	3						○								○		○			○			○		
叶台遺跡	31号遺構	26	B3	3		○								○				○		○			○			○		
叶台遺跡	31号遺構	27	B3	3		○								○				○		○			○			○		
叶台遺跡	31号遺構	28	B2	3		○								○				○		○			○			○		
叶台遺跡	31号遺構	29	B3	3		○								○				○		○			○			○		
草刈遺跡	D024A	5	B3	3		○								○				○		○			○			○		
草刈遺跡	D057	2	B3	3		○								○				○		○			○			○		
草刈遺跡	D076	3	B3	3		○								○				○		○			○			○		
草刈遺跡	D206	4	Cb2	3				○										○					○			○		
草刈遺跡	K455	5	B2	3		○								○				○		○			○			○		
草刈遺跡	K455	6	B3	3		○								○				○		○			○			○		
草刈六之台遺跡	14号住居	1	B2	3		○							○					○		○			○					
草刈六之台遺跡	14号住居	2	B3	3		○							○					○		○			○					
草刈六之台遺跡	14号住居	3	Ca	3				○						○				○		○			○					
下鈴野遺跡	09号住居跡	11	B3	3		○								○				○		○			○			○		
下鈴野遺跡	09号住居跡	12	B3	3		○								○				○		○			○			○		
下鈴野遺跡	09号住居跡	13	Ca	3														○		○			○	○		○		
蛇谷遺跡	第14号住居跡	24	B3	3		○								○				○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第18B号住居跡	19	B2	3		○								○				○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第18B号住居跡	20	B3	3		○								○				○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第24B号住居跡	17	B2	3		○								○				○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第24B号住居跡	18	B2	3		○								○				○		○			○		○	○		
蛇谷遺跡	第27B号住居跡	19	Cb1	3					○						○			○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第48号住居跡	13	B2	3		○								○				○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第50C号住居跡	31	Cb1	3					○						○			○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第56号住居跡第66図	13	B2	3		○								○				○		○			○			○		
蛇谷遺跡	第62号住居跡	9	B3	3		○								○				○		○			○			○		
御林跡遺跡Ⅱ	322号遺構	24	Ca	4				○							○			○		○			○	○		○		
御林跡遺跡Ⅱ	322号遺構	25	Ca	4				○							○			○		○			○			○		
御林跡遺跡Ⅱ	333号遺構	6	Cb1	4					○						○			○		○			○			○		
下鈴野遺跡	03号住居跡	17	Cb1	4				○							○			○		○			○			○		
下鈴野遺跡	03号住居跡	18	B2	4		○									○			○		○			○			○		
草刈遺跡	D005	3	Cb1	4					○									○		○			○			○		
草刈遺跡	D060	3	Ca	4				○							○			○		○			○			○		
草刈遺跡	D060	5	B2	4		○								○				○		○			○			○		
草刈遺跡	D077	4	Cb1	4					○						○			○		○			○			○		
草刈遺跡	D077	4	Cb1	4					○						△			○		○			○			○		
草刈遺跡	D416	2	Cb1	4						○								○		○			○			○		
草刈遺跡	D416	3	Cb1	4						○								○		○			○			○		
草刈遺跡	D416	4	Cb1	4					○									○		○			○			○		
草刈遺跡	D416	5	Cc	4							○							○		○			○			○		
草刈遺跡	D416	6	Ca	4					○									○		○			○			○		
草刈遺跡	D417	3	Cc	4											○			○		○			○			○		
草刈遺跡	E187	3	Cb1	4						○								○		○			○			○		
草刈遺跡	K041	17	Cb2	4														○		○			○			○		
草刈遺跡	K359B	3	Cb2	4				△							○			○		○			○			○		
草刈遺跡	K359B	4	Cb	4											○			○		○			○			○		
草刈遺跡	K411	2	Cb1	4					○						△			○		○			○			○		
草刈遺跡	K456	6	Cb	4					○									○		○			<					

22がVb・Vlb類、第56号住居跡第66図14、第86号住居跡14がVb・Vlc類、IIIa4類は蛇谷遺跡第14号住居跡24、第62号住居跡9、下鈴野遺跡09号住居跡11(Fig.258-11)・12、西広貝塚42号住居跡6、草刈六之台遺跡14号住居1・2など、基本的にVb・Vlc類と対応する。

形式Bは、IIIa2類が脚接合部Va・Vlb類、IIIa4類がVb・Vlc類と基本的に対応し、IIIa2類からIIIa3・4類は段階的な傾斜をもつ可能性が高い。IIIa4類のうち蛇谷遺跡第14号住居跡24、第62号住居跡9、御林跡遺跡II301号遺構6、西広貝塚42号住居跡6、草刈遺跡D077-4・5などは、立ち上がり拡張部が上部に肥厚して器受部内面が内湾化し、形式CIIb類と分離しがたいものもある。この形式Bは、口縁端部に面をもち上下漏斗状の)(形を呈するIIa1・(2)類、IIIa2類、Va類、Vlb類が最も古く(B1型)、脚接合部屈折が明確化(Vb類)にともない器受部が独立し、脚接合部内面が筒状の貫通孔(Vlc類)となり(B2型)、さらに、器受部口縁端部が肥厚直立化(IIIa4類)する変化(B3型)を基本的な方向とする。このうち、B3型は形式Cbと接点をもち、B1・2型はこれに先行する。

形式Ca Ia・IIb類を基本とし、IIIb類、Vb類、Vlc・d類にほぼ限定される。南中台遺跡では確認できない。このうち、形式CaはIIb1類に対応する。

IIb1類は、器受部下端に稜をもつものであるが、器受部形状は多様であり、平坦底部から内外面屈折し、逆台形を呈するものには唐崎台遺跡第3号住居跡2(Fig.258-14)、叶台遺跡85号遺構9(Fig.258-15)、草刈六之台遺跡14号住居3が、また周辺地域では、袖ヶ浦市大竹遺跡SI005-4、SI050-2、SI053-2などがあり、このうち、大竹遺跡SI005-4、SI050-2、SI053-2は口縁部が外反する。口縁部が直立するものには、御林跡遺跡II322号遺構24、草刈遺跡D416-6(Fig.258-16)などがある。これらには、平坦底部を形成することによって、底部を無孔とするものもある。器受部内面が直線ないしゆるやかに内湾するものには、御林跡遺跡II322号遺構25、下鈴野遺跡09号住居跡13、草刈遺跡D060-3などがある。脚部は、ゆるやかに外反するIVc類が基本となるが、唐崎台遺跡第3号住居跡2は、脚部が内湾するIVa類である。

これら器受部形状は多様であり、本来複数の系列を含む可能性があるが、唐崎台遺跡第3号住居跡2にみられるように、おおむね形式Cbに先行し、形式Bと並列する。

形式Cb IIb2・3類を基本とし、最も安定的に認められる。形式Cbの変化は、脚部と貫通孔の有無にある。脚部がゆるやかに外反するIVc類が主体となり、これには蛇谷遺跡第27B号住居跡19(Fig.258-17)、第50C号住居跡31、下鈴野遺跡03号住居跡17(Fig.258-19)、御林跡遺跡II28号遺構24、II333号遺構6、草刈遺跡D005-3、D077-45、D416-2・3・4(Fig.258-18)などがある。脚部IVb・d類には、草刈遺跡D206-4、D252-1、K041-17(Fig.258-21)などがある。

IIb3類は類例が少ない。御林跡遺跡II126号遺構27、草刈遺跡E187-3は短く直立し、草刈遺跡K440-5、台遺跡B地点175号住居跡6、南岩崎遺跡SI58-1(Fig.258-20)は、屈折稜から短く外反する。

この形式Cbは、IIb2類が主体的であり、IIb3類が派生形式としてやや後出する。いずれも脚接合部はVb・Vlc類であり、屈折部の明確化にともない、脚部は長い柱状部をもち裾部がゆるやかに開く器形から、直線化する傾向がある。これにともない、脚接合部内面貫通孔は短くなりVIa類が再度現れる。これは、X字形小形器台に関連する変化といえよう。また、器受部の独立化にともない、御林跡遺跡II293号遺構6、II328号遺構8、草刈遺跡K354-3など器受部貫通孔を穿たないものも増加するが、当該地域では一般化しない。

ここでは、脚部IV類を基準とし、IVc類をCb1型、IVb・d類をCb2型とするが、Cb2型は類例が乏しい。形式Cbは、定型化した小形丸底系土器出現期以降の支配的な形式である。形式Bの型式変化も、形式Cbへの形式的統合を指向する。

形式Cc IIb4類を基本とする。器受部下端に稜をもち、上部でさらに直立ないし外反し、全体として内湾器形をとるが、口唇部はIIIa4類に関係する。御林跡遺跡I 130号遺構4、II 139号遺構33(Fig.258-12)、草刈遺跡D416-5(Fig.258-13)、D417-3、E136-1、南岩崎遺跡SI40-3などがあり、脚接合部はすべてVb・VIc類である。きわめて定型的であり、ここでは形式Ccとして区分しておく。その消長は小形丸底系土器出現期にほぼ限定できる。

北陸系器台形土器

北陸系器台形土器には、器受部と脚部に段部をもつものと(形式A)、結合表現をもつ装飾器台の2者がある(形式B)。前者には、南中台遺跡SI13-21がある。当該地域における定着は基本的に認められないが、小形器台形式Abはその派生形式を含む。なお、有段の脚部は、唐崎台遺跡第26号住居跡1にあるが、これには貫通孔がない。

北陸系形式Bについては、一定の定着が認められる。佐倉市大崎台遺跡13号方形周溝墓61は、結合上部の透かし、器受部垂下口縁、脚段部など、最も本来の形状を残している。結合上部の透かしをもつものとしては、御林跡遺跡I 130号遺構5(Fig.258-28)、草刈遺跡D035A-9(Fig.258-27)、国府関遺跡包含層42、自然流路418などがある。南中台遺跡SI27-27、SI45-15は、ともに鏢状の器受部口縁をもつが、SI45-15は器受部口縁垂下部をもたない。結合上部口縁部は、ともに屈折外反する。形式Bは前述したように、高杯形として派生定着する。

炉器台(支脚)形土器

3基1組となる支脚であり、宮ノ台式以降の甕形土器の小形扁平化にともない出現する。确实には、山田橋大山台遺跡112号竪穴3(Fig.258-29)、袖ヶ浦市文協遺跡200号住居跡6例など、山田橋式期に認められる。これらは、屈折部の収縮の弱い円筒状を呈する。草刈遺跡B116-18~20(Fig.258-30)は、短く外反する受部を付ける。

形式A 受部が外反するIa類を基準とする。南中台遺跡ではSI33-18・19、SI28-6がある。SI28-6は折り返し状の二重口縁となり、受部に挟りをもつ。蛇谷遺跡第26B号住居跡11、第62号住居跡11・12、草刈遺跡D032-8~10(Fig.258-33)、K337-19・20・21・24(Fig.258-32・36)などがあり、蛇谷遺跡第26B号住居跡11、第62号住居跡12、草刈遺跡K337-24は受部に挟りをもつ。

形式B 受部が受口状になるIb類を基準とする。蛇谷遺跡第12号住居跡第17図10・11、第66号住居跡5・6、第94号住居跡4・5、下鈴野遺跡第16号住居跡13~15(Fig.258-37)、唐崎台遺跡第13号住居跡9(Fig.258-35)、K674-99~101などがある。

形式Aは、山田橋式からの組列を認めることができるのに対して、形式Bは唐崎台遺跡第13号住居跡9を現状での初現例とする。小形丸底系土器出現期前後を盛期として、御林跡遺跡II 53号遺構18、草刈遺跡K001-30(Fig.258-39)など、柱状脚の高杯が伴出する段階まで認められる。その消長は、甕の容量変化に対応する。形状変化に乏しく、型式設定は行わない。

甕形土器

久ヶ原・山田橋式段階では、専用甕は基本的に認められないが、甕の底部を焼成後に穿孔した転用

甗が一定量認められる。唐崎台遺跡第41号住居跡の出土状況からは、濾過器としての用途が想定できるが(鈴木・田中1981)、ここでは甗形としておく。

南中台遺跡では、専用甗は認められない。転用甗とした焼成後底部穿孔土器は、SI15-4、SI33-21があり、SI12-1も可能性がある。蛇谷遺跡では、第71号住居跡9、第74号住居跡14、第96号住居跡5などがあるが、甗形式Fの成立以降減少する。ここでは、専用甗を対象とする。

形式A Ia類を基準とする。蛇谷遺跡第31号住居跡7(Fig.251-31)、草刈遺跡K667-12(Fig.251-32)、K674-98は深い椀状器形IIa類であり、蛇谷遺跡第31号住居跡7は、口縁部が折り返し状の二重口縁となる。草刈遺跡K667-12は、口縁部内外面に粘土紐積み上げ痕を残す。二重口縁の叶台遺跡31号遺構22もその可能性がある。これらは、甗形式F、小形丸底鉢Aa1型出現期前後に比定できる。IIb類には、御林跡遺跡II53号遺構10・11(Fig.251-35・36)、草刈遺跡E178-18(Fig.251-33)があり、草刈遺跡D060-1もその可能性がある。御林跡遺跡II53号遺構例は、柱状脚の高杯と伴出する。類例は少ないが、IIa・b類を基準とし、A1・A2型を設置する。

形式B Ib類を基準とする。下鈴野遺跡03号住居跡8(Fig.251-34)がある。

手焙形土器

市原市内では、小破片を含め10個体以上を数えることができる。南中台遺跡ではSI26-2がある。その中では、長平台遺跡288号方形周溝墓第121図7(Fig.254-52)が最も古相をしめす。御林跡遺跡II13号遺構では、神門3号墓墳頂部例と酷似する覆部片が出土しているが、伴出土器がない。最も後出する草刈遺跡D206-9は、台付甗形式F、粗製の小形椀を伴出する。

(2) 段階区分

ここでは、山田橋式と和泉式の間を大別5段階に区分しておく。南中台遺跡、蛇谷遺跡、草刈遺跡他の標準資料はTab.12のとおりである。

1 段階 細別2段階からなる。甗は、段甗の形式A・Bを基本とし、形式Cも存在する。当該地域では、多段甗形式Aの再波及を画期とする。山田橋2式段階に対して頸部の収縮は急速に進み、1-1段階でA1・2型、B1・2型が混在する状況がある。とくに形式Aに頸部の収縮にともなう器形変化が強く認められる。口唇部の交互押捺は遺存するが、段部下端の布目圧痕を残す押捺は基本的に省略され、一部に指頭状圧痕などがみられる。壺は、A1型、Ea1型と形式Bがある。基本的に無文化が進行するが、形式Bは、装飾壺として特化する傾向が認められる。これは、1・2段階を通した特徴となる。広口壺は、胴部帯縄文が省略される。高杯は、伝統的なA1・2型とB1型、形式A垂式がある。形式B1型は杯部底部径指数40以上で、杯底部の張り出しが強く、脚部はIVa・c類を基本とする。ただし、椀形高杯および低脚には外反するIVd類がある。欠山式の内湾長脚は確認できないものの、杯部高指数40以上の箱形杯部をもつものは中台遺跡にある。開脚高杯は、富津市岩坂大台遺跡の状況を参考にすると、無稜の形式Bの定着が先行し、1-1段階に遡る可能性がある。形式Aは1-2段階に出現する。小形器台は、定型前段の形式AとB1型にほぼ限定される^(註5)。上下漏斗状の)(形を呈するB1型は、愛知県能田旭遺跡溝状遺構や北陸などでも類例があり、現状で特定地域に系譜を限定できないものの、小形器台成立期に認められる。椀は、伝統的な大形椀を主とし、1-2段階には小形椀の定型化が認められる。

Tab.11 主要形式・型式の消長

		山田橋式	中 台 式				草 刈 式			
			1-1	1-2	2-1	2-2	1	2	3-1	3-2
甕	A1									
	A2									
	A3									
	A4									
	B1									
	B2									
	B3									
	B4									
	C									
	D									
	E									
	F1a									
	F1b									
	F2									
	II a									
	II b									
	II c									
壺	Aa1									
	Aa2									
	Ab									
	Ac									
	Ad									
	B									
	C									
	D									
	Ea1									
	Ea2									
	Eb									
広口壺	A1									
	A2									
	A3									
直口壺	A1									
	A2									
	B1									
	B2									
	Ca									
	Cb									
	Cd									
丸底鉢	Aa1									
	Aa2									
	Aa3									
	Ab									
	B									
丸底壺	Aa1									
	Aa2									
	B									
平底壺										
小形短頸壺	A1									
	A2									
	B1									
	B2									
大形碗	A1									
	A2									
小形碗	A									
	B									
	C									
	D									
大形鉢	1									
	2									
高杯	A1									
	A2									
	A3									
	A垂									
	B1									
	B2									
	B3									
	B4									
	C1									
	C2									
	C3									

		山田橋式	中 台 式				草 刈 式			
			1-1	1-2	2-1	2-2	1	2	3-1	3-2
椀形高杯										
開脚高杯	A1									
	A2									
	A3									
	B1									
	B2									
屈折高杯	C									
器台	Aa									
	Ab									
	B1									
	B2									
	B3									
	Ca									
	Cb1									
	Cb2									
	Cc									
炉器台	A									
	B									
甌	A1									
	A2									
手焙										

1-1段階については、現状の公開資料では安定した内容を提示できないが、段甕、無文化した壺A1型・Ea1型、形式Bと大形椀を主要形式とする比較的単純な構成を基本とし、東海系譜の高杯と小形椀などが非定型的に混在する。

2段階 細別2段階からなる。甕は、A2・3型、B2・3型、C1・2型、形式E、形式Dからなる。口唇部は基本的に押捺が施されるが、2-2段階には、B3型、C2型が主体となり、口唇部の押捺が省略され、面取り面をもつものが増加する。戸張形の形式Dについては、現状において分布が限られるが、戸張形の成立期にハケ整形甕が増加する。ただし、東京湾東岸域全体では、東京湾西岸地域との関係から、ハケ整形甕の普及時期に若干の時期差がある可能性もある。小形椀は、各形式が認められ、支配的な形式となる。伝統的な大形椀とともに、2-2段階には大形鉢が出現する。小形短頸粗製壺の一般化は、2-2段階と考える。高杯は、A3型、A垂式、B2・3・4型があり、2-1段階はB2型からB3型を、2-2段階はB3型からB4型を主体とする。開脚高杯のA・B1型からA・B2型への移行は、2-1段階から2-2段階におおむね対応する。小形器台は、筒状の貫通孔が一般化する。B2型を基本として、2-2段階はB3型と形式Caが混在する。専用甌A1型が2-2段階には認められる。

なお、南中台遺跡2-2段階に対して、蛇谷遺跡2-2段階基準資料は、段甕における頸部の収縮と胴部の球形化、ハケ整形の一般化、形式Dの卓越化が認められる。他器種における明確な変化がとらえられないが、ここでは、蛇谷遺跡方形周溝墓などを2-2段階新相としておく。

3段階 この段階において、甕形式F、壺Aa2型、Ea2型、広口壺A3型、直口壺A2型など、伝統的器種形式は、これらを横断した頸部のく字屈折化をとげる。甕A4型、B4型はこの段階まで認められるが、頸部のく字屈折化にともない、段部を痕跡として遺存するF1a型が出現する。F1a・b型は、形式F成立期を特徴付けるものである。壺は、前段まで支配的であった形式Aaにかわり、形式Abが増加し、形式Dも集落内で散見できるようになる。縄文施文の装飾壺については、この段階まで遺存する。

形式的再編期にあたり、直口壺形式A・B、小形椀、小形短頸壺などこの段階まで存在するものの、とくに小形椀は粗略化が進む。小形短頸壺はB2型が主体となる。同時に、直口壺形式C、小形丸底鉢Aa1型が出現、定着する。直口壺形式Bも、この段階に増加する。高杯は、形式A垂式とB4型がある。2-2段階から3段階において、杯部口径は最大となる。開脚高杯はA2型、B3型を基本とする。

Tab.12 編年対照表

型式	段階	南中台遺跡	中台遺跡	蛇谷遺跡	草刈遺跡	国分寺台地区	市原市周辺	
中 台 式	1-1	1-1		(59 竪穴)		D040(竪)	長平台 10 号竪穴住居跡 西広 48 号住居跡 祇園原 18 号住居 御林跡Ⅱ 317 号遺構(竪) 南祇園原 201 号住居跡	
	1-2	1-2	SI12、SI13 SI14、SI18 SI35、SI39 SI45	(1581 竪穴)	第 96 号住居跡	A10(竪) 六之台 867 号住居	長平台 288 号方形周溝墓	
	2-1	2-1	SI09、SI17 SI24、SI27 SI33	8 号住居跡 150 号住居跡		A75(竪)、E055(竪) E106(竪)	御林跡Ⅱ 80 号遺構(竪) 西広 50 号住居跡 長平台 289 号方形周溝墓	
	2-2	2-2 (新相)	SI11、SI15 SI36 SI42、SI47	15 号住居跡 37 号住居跡 571 号住居跡	第 51 号住居跡 第 3 号住居跡 第 7 号住居跡 第 11A 号住居跡 第 79 号住居跡 方形周溝墓	A28(竪)、D013(竪) D223(竪) A66(竪)、D013(竪) D225(竪)	番後台 073B 号住居跡 大厩 Y-4 号跡(竪) 西広 39 号住居跡 西広 42 号住居跡	
草 刈 式	1	3	SI21、SI29 SI32		第 1 号住居跡 第 17C 号住居跡 第 26B 号住居跡 第 46 号住居跡 第 56 号住居跡 第 86 号住居跡 第 100 号住居跡	D021(竪)、D024A(竪) D032(竪)、D035A(竪) D057(竪)、D076(竪) D206(竪)、E035(竪) E178(竪)、K056(竪) K399(竪)、K455(竪) 六之台 14 号住居	御林跡Ⅱ 139 号遺構(竪) 御林跡Ⅱ 284 号遺構(竪) 台 B 地点 013 号住居跡	下鈴野 05 号住居跡 下鈴野 08 号住居跡 下鈴野 25 号住居跡 叶台 31 号遺構(竪)
	2	4			第 26A 号住居跡 第 71 号住居跡 第 102B 号住居跡	B137(方)、D005(竪) D008(竪)、D046(方) D060(方)、D077(竪) D092(竪)、D219(竪) D416(竪)、E179(竪) K012(竪)、K041(竪) K341(竪)、K411(竪)	御林跡Ⅱ 322 号遺構(竪) 御林跡Ⅰ 119 号遺構(竪) 祇園原 35 号住居 台 B 地点 175 号住居跡	下鈴野 03 号住居跡 下鈴野 10 号住居跡 番後台 029E 号住居跡
	3-1	5-1				B138A(方)、D028(方) D133(竪)、E022(竪) K001(方)、K032(Pit) K177(竪)、K186(竪) K235(竪)、K449(竪) K507(竪) 六之台 55 号住居	祇園原 38 号住居 御林跡Ⅱ 53 号遺構(竪) 御林跡Ⅱ 126 号遺構(竪) 台 B 地点 170 号住居跡	土宇第 43 号住居跡 下鈴野 22 号住居跡
	3-2	5-2			第 37B 号住居跡	K013(竪)、K335(竪) K336(竪)、K463(竪) 六之台 24 号住居		南岩崎 SI46

他に、屈折高杯形式 C は、この段階を中心とする。小形器台は、形式 Cb・Cc が成立し、形式 B・Ca と混在する。手焙は、この段階まで認められる。専用甗は A2 型がある。転用甗は減少傾向が認められるものの、専用甗の類例は少ない。

甗形式 F は「千葉形五領式甗」(大村 1994) であるが、五領式甗と、定型的小形丸底系土器の出現には段階差が認められる。

4 段階 3 段階の形式的再編の完成期にあたる。伝統的多段甗は基本的に認められない。広口壺や大形鉢も、甗に統合される傾向がある。壺は、形式 Ab・Ea が一般的であるが、伝統的な形式 B がこの段階まで散見できる。形式 D を含め、口縁複合部の拡張が認められるが、これはおもに墳墓での変化となる。直口壺は形式 B・C が認められる。形式 B は B2 型に限定できる。小形碗、小形短頸壺はほぼ淘汰され、小形丸底系土器が一般化する。小形丸底系土器は、鉢 Aa2 型、壺形式 Aa が支配的であり、

口縁部はやや内湾するものが多い。鉢形式Ab・B、壺形式Abへの鉢・壺の分化も認められる。高杯は、B4型に統一される。杯部口径はやや小形化する。開脚高杯、屈折高杯は、散見できる程度で主たる形式とはならない。小形器台は、形式Cb・Cdが主体化する。

5段階 甕は、長胴化するものがあり、炉器台は5-1段階まで認められるものの不明確化する。特徴的な変化は、柱状脚の高杯形式Cの出現であり、5-1段階はC1・2型を、5-2段階はC3型を基準とする。杯部口径は縮小し、15cm以下となるものもあるが、5-2段階には大形化に転じる。直口壺形式Bは5-1段階までであり、形式Cは、口縁部が縮小した形式Cb・Ccが現れ、小形壺形式Bと同化し和泉式へ移行する。小形丸底系土器は、小形鉢形式Ab・B、小形壺形式Abへの分化が進み、5-1段階には小形壺形式Bが出現する。小形器台は、形式Cbが5-1段階まで遺存するが、絶対量は明らかに減少する。脚接合部の屈曲が進み、脚部は直線化する。

本編年にもとづく、当該地域型式名としては、1・2段階を中台式、3～5段階を草刈式とすることが妥当であると考え。ここでは、各段階を中台1・2式、草刈1・2・3式としておく。中台遺跡は、いまだ未報告ではあるが、南中台遺跡、蛇谷遺跡を含めることとし、当該時期、地域の中核遺跡である「中台（なかで）」を冠しておくことが適当と判断した。草刈遺跡については、加藤修司によって、編年案がしめされているが（加藤2000）、ここでの草刈Ⅰ期は中台1・2式、草刈Ⅱ期前半が草刈1式、草刈Ⅱ期後半が草刈2式、草刈Ⅲ期が草刈3式におおむね対応すると考えておく（註6）。

（3）他地域との併行関係

南中台遺跡および中台遺跡では、北陸南西部系がまとまって出土している。南中台遺跡例についてはすべて在地産の可能性が高い。有段口縁甕は、口縁複合部が直立気味ないしやや外傾し、口唇部は薄く若干外反する。中台遺跡例を含め擬凹線文をもつものはごく限られる。SI13-2は不揃いの多条からなる擦痕状の浅い条線であり、SI12-3、SI13-1・5は複合部下部に条線を残す。複合部下端は明瞭な稜を残さず丸くつくられ、段部はやや曖昧化している。SI13-2は、複合部内面に連続指頭圧痕をもつ。指頭圧痕は他例にも確認できるが、連続的な押捺痕を明瞭に残すものは本例のみである。頸部内面は比較的明確に屈折するが、SI12-3、SI13-1・5はケズリ残し面があり、SI13-5はハケを残している。胴部器形は、SI12-1、SI13-3が底部側に絞りのある倒卵形を呈するが、SI12-2、SI13-2はより球形となる。これらの特徴は、典型的な月影式甕に対してやや後出する内容と考える。中台遺跡150号住居跡例の特徴も近似する。これに対して、中台遺跡15・37号住居跡例（Fig.251-25～30）は、口縁複合部の外傾が進み、胴肩部の張りは弱い。中台遺跡未発表資料には、複合部の幅が狭く、口唇部は厚みをもったまま直立ないし短く外反するものも目立つ。当該地域においても、ある程度の組列を認めることが可能である。中台遺跡15・37号住居跡例については、漆6群（田嶋1986・2006）、長泉寺1期（赤澤・青木1995）を含むと考えるが、問題は南中台遺跡SI12・13出土例である。川村浩司は、漆6群とするが（川村1994）、擬凹線文の省略をもって漆6群まで下げることは同意できない。頸部の収縮や口縁複合部の外反は弱く、伴出するSI13-21の器台を含め、漆4・5群新相（田嶋2006）、様相10（堀2002）との対応を想定しておく。段階案との対比では、中台1-2式から中台2-1式が漆4・5群新相、中台2-2式が漆6群と接点をもつと考えておく。ただし、在地系土器との整合性にはなお問題を残している。中台遺跡については本報告で再度検討すべき必要が

ある。

赤塚編年(赤塚1990・1997)によるS字甕A類は、長平台遺跡10号竪穴住居跡第29図5・6(Fig.251-10・11)があり、同じく東海系の内湾単口縁甕(Fig.251-8)、擬似パレス壺(Fig.253-1)と伴出する。在地系土器が認められないことから段階比定は難しいが、おおむね中台1式の上限を画すると考える。搬入品のパレス壺は288号方形周溝墓第127図23(Fig.253-2)がある。屈折する口縁部をもつが、複合面はやや外傾し、口縁部内面の文様面は内湾する。また、胴部櫛刺突山形文の振幅は比較細かいが、横直線文はやや曖昧である。10号竪穴住居跡第29図1(Fig.253-1)、289号方形周溝墓第135図12(Fig.253-3)との比較は難しいが、複合面の外傾度と胴部櫛刺突山形文の振幅から、10号>288号>289号の序列を想定し、289号方形周溝墓例については、中台2-1式段階にあてておく。S字甕B類は蛇谷遺跡79号住居跡9(Fig.251-12)がある、口縁部の屈曲が明確であり、各部に屈折稜が認められる。端部内面にはやや凹む明瞭な面取り面をもつ。胴部ヨコハケはほぼ頸部付近まで施される。B類古段階と考える。伴出土器には、甕形式D「戸張形」と壺形式Eaがあり、壺形式Ea例は、やや曖昧ではあるが頸部の屈折化が認められる。中台2-2式新相と推定する。御林跡遺跡I119号遺構1(Fig.251-13)は、やや粗製品であり胴部ヨコハケは省略されるが、口縁部の屈曲は明確であり、口唇部内面には沈線状の面をもつ。C類古段階である。同遺構は、甕F2型、直口壺B2型・C、小形丸底鉢Aa1型、小形器台形式Ccなどからなり、草刈2式前半期と考える。草刈2式期の草刈六之台遺跡128号住居6(Fig.251-14)はC類古段階、草刈遺跡K488-3(Fig.251-16)、草刈六之台遺跡20号住居3(Fig.251-15)は、口唇部がやや肥厚するC類新段階であり、草刈六之台遺跡20号住居は草刈3-1式期に降る。C類は、草刈2式を中心としてその前後に若干の幅をもつと考える。ここでは中台1式と廻間I式後半期、中台2式と同II式、草刈2式と同III式に基本点における対応を想定し、草刈1式については、廻間II式後半からIII-1式の間に接点を認めておきたい。草刈3式については、松河戸I式と対応する。

畿内地方との関係は、弥生形タタキ甕が問題となるが、その対比は難しい。タタキ甕は、中台1式段階から認められるものの、中台2-2式段階に増加する傾向がある。蛇谷遺跡方形周溝墓では、口縁端部が肥厚し、外面ハケ整形を加える例が多い。ただし、内面ヘラケズリ、丸底化を指向するものは認められず、ハケ再調整をもって布留式甕の影響とすることはできない。ここでは、小形丸底系土器の組列を前提とし、3段階におけるAa1型の定着をもって、奈良県纏向遺跡辻土坑4下層から下田III式最古相の間に接点を想定しておく。なお、中台3式は東京湾西岸地域の神谷原III式に対応する(大村1982)。神谷原III式期のSB85の布留式甕は搬入品であり、口唇部は寺沢薫による口縁f手法にあたる(寺沢1986)。奈良県和田廃寺下層例に近似する。奈良県平城宮下層佐紀遺跡SD6030下層は、小形丸底壺の器形およびS字甕C類新段階の伴出から、草刈2式後半期を中心とする。

草刈式は広域型式としての五領式であり、当該地域では、和泉式最古段階の南岩崎遺跡5a期が接続する(大村2006)。南岩崎遺跡では、伴出関係が確実ではないが、5a期にTG232型式段階の須恵器高杯形器台が出土している。ここでは、大阪府長原遺跡NG98-19次SX701(松本2001)などを基準資料とするTG232型式期、辻美紀による2段階新(辻1999・2002)と南岩崎遺跡5a期の対応を想定しておく。

当該地域は、竪穴住居跡を基準資料とすることによって、同時性に対する精度は高いものの、遺構

単位の出土量は限られており、個体差すなわち規格性の限界がより前面に顔を出してしまう。本編年は、型式組列の抽出といった点でなお不十分である。広域編年についても、齟齬を生じている部分があり、編年の精度の向上とともに今後再調整すべき必要がある。

第2節 国分寺台地区における弥生時代後期から古墳時代前期の動態

(1) 集落の変遷

国分寺台地区では、弥生時代後期から古墳時代前期の中核的な集落と目される中台遺跡、天神台遺跡の整理作業が開始されているが、報告書刊行までにはなお時間を要するため、ここでは、南中台遺跡の成果をもとに、現状での知見を簡単にまとめておく。

市原市は、房総半島のほぼ中央部から東京湾岸に至る南北約35kmの細長い市域をもち、その中央を養老川が貫流する。東京湾岸低地に接する台地は、養老川流域を境界とし、養老川右岸（東岸）から千葉市域境の村田川までが「市原台地」、養老川左岸（西岸）から袖ヶ浦市小櫃川までが「袖ヶ浦台地」と呼称される。下総台地の一角を占める市原台地は、東京湾岸の低地をのぞむ北東-南西方向の

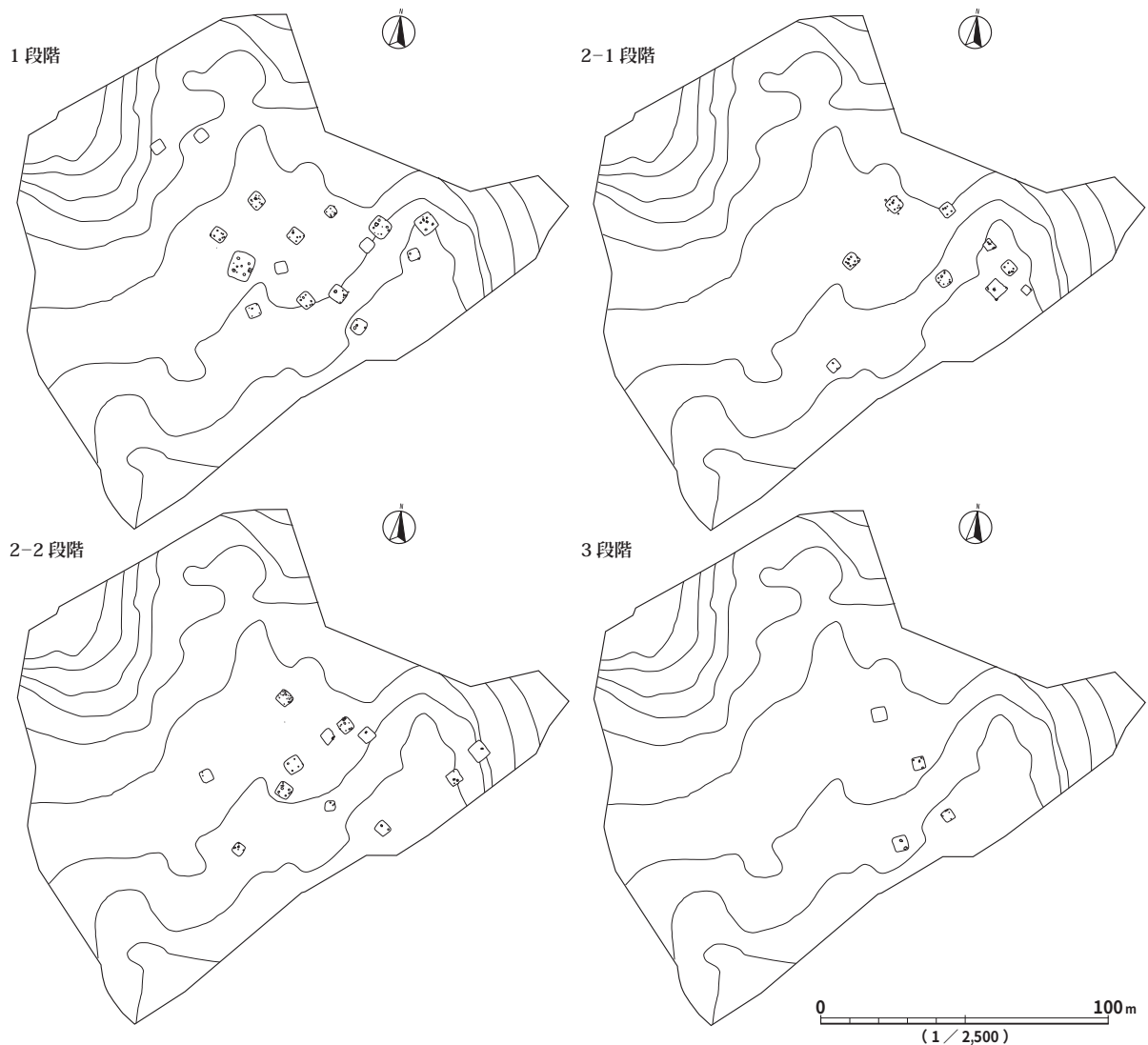


Fig.259 南中台遺跡の変遷

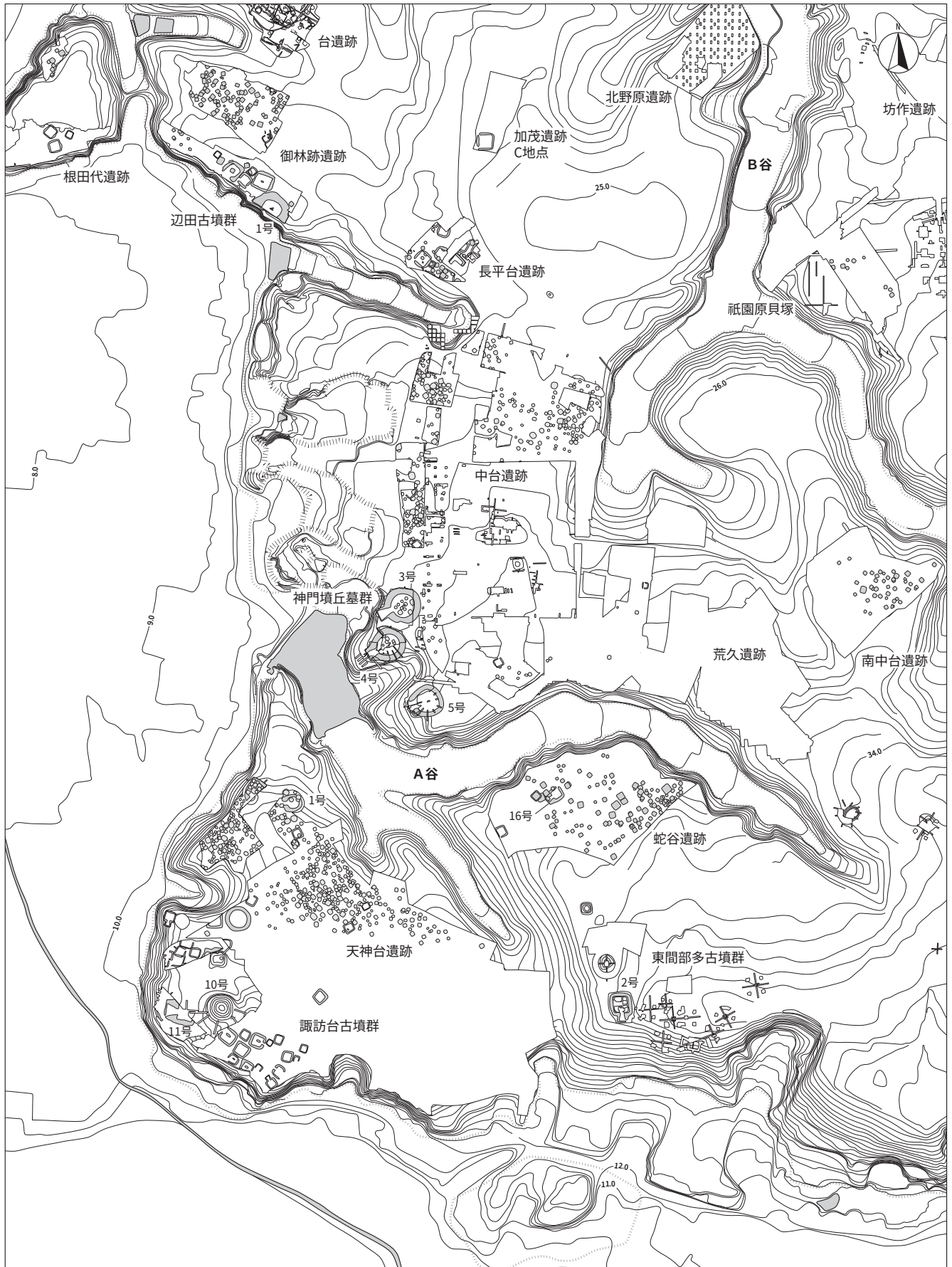


Fig.260 南中台遺跡周辺の遺跡群(1)



土地区画整理事業現況図 (1:500) 昭和44年3月測図より作成

Fig.261 南中台遺跡周辺の遺跡群(2)

0 150m
(1/3,000)

海食崖でおわり、台地内部は養老川、村田川の支流および直接東京湾に流入する小河川によって樹枝状に開析されるが、台地上には広範囲にわたる平坦面を残している。国分寺台は、その西端隅部にあたる。

市原市域では、中期後半の宮ノ台式期に遺跡数が増大し遺跡分布も変容する。この段階において、東京湾岸平野部に直接面する台地縁辺部への集落の進出が認められ、環濠集落群を形成する。国分寺台では、根田代遺跡、台遺跡C地点、向原台遺跡、祇園原貝塚で環濠ないし断面V字溝が検出されているが、これらはすべて宮ノ台式期の間に機能を停止する。根田代遺跡では、環濠中・上層に宮ノ台式最終末段階から久ヶ原1式期の土器の多量投棄が認められる。久ヶ原1式期には、御林跡遺跡やA谷奥の蛇谷遺跡、B谷筋の南向原遺跡、加茂遺跡D地点、B谷奥の山田橋大山台遺跡、新田川水系の千草山遺跡などで数軒程度の小規模な集落が出現し、宮ノ台式期の集住から一転谷奥へ向かっての拡散が進行する。これは、海水準の上昇による海岸線の前進を要因とする可能性が高い。これらの集落の中では、御林跡遺跡が、宮ノ台式最終末段階から継続し、久ヶ原1式期を中心する竪穴住居跡が比較的広範囲に展開する。久ヶ原2式期になると、長平台遺跡やB谷筋の坊作遺跡、加茂遺跡A・B地点でもやや規模の大きな集落が出現するが、これらには継続性が認められない。さらに、山田橋1式になるとC谷奥の山田橋遺跡群が集落規模を拡大し、おそらく天神台遺跡なども、竪穴平面形態から判断すると、この段階には広範囲にわたる集落を形成していた可能性が高い。また、台遺跡や向原台遺跡など、再度東京湾岸側の台地縁辺へ進出する状況も認められる。これらの集落は、台地平坦面に広く竪穴住居群が展開し、開放的で居住域の拡大を指向するように、継続的な基点を欠き竪穴住居が更新される傾向があり、同心円状の拡張、小範囲で累積化する宮ノ台式期の竪穴住居とは異なる状況が認められる。こうした状況は、市原市域全体をみると、古墳時代前期前半草刈2式期まで認められ、終末期中台式期になると、ある程度地域的なまとまりをみせるようになる。山田橋遺跡群は、現状調査範囲では希薄化する。中台1式期には、B谷奥に南中台遺跡が占地し、周辺に祇園原貝塚上層遺跡、南祇園原遺跡が点在する。そして、中核となる中台遺跡は、この時期B谷左岸を中心とする。また、御林跡遺跡、長平台遺跡にもこの段階の竪穴住居跡が認められるが、このうち長平台遺跡も、B谷側に展開する可能性がある。しかし、中台2-1式から2-2式古相期になると、中台遺跡の中心は養老川右岸側に中心を移し、2-2式新相期には、A谷左岸の蛇谷遺跡が集落規模を拡大する。現状では、天神台遺跡の状況が明らかではないが、おそらくこの段階には、養老川右岸側台地縁辺からA谷周辺の中台遺跡、天神台遺跡、蛇谷遺跡が中核を形成していた可能性が高く、神門墳丘墓群は、おおむね中台2式期の間に相次いで造墓されたと思われる。小規模な集落としては、西広貝塚、加茂遺跡D地点などがある。

天神台遺跡に隣接する諏訪台古墳群では 諏訪台1号墓が神門墳丘墓群系譜の円丘墓である。国分寺台地区の円墳・円丘墓で最大規模をもつ諏訪台10号墳も、前期に遡る可能性を残している。南西側に接して造墓された前方後方形の11号墓（全長38.3m）が、傾斜面地に立地することを考慮するならば、これに先行して造墓された可能性があると思われる。この場合、10号墳北側にも前方後方形の9号墓（全長36m）があり、これらに従えた群構成が考えられる。なお前方後方形墓は、諏訪台古墳群で4基、周溝一辺中央開口形を含めると計6基が検出されており、他に東間部多2・16号墓がある。このうち、東間部多2・16号墓は、小形丸底系鉢Aa2型をとまなうことから、草刈1式期古相段階と

考える。東京湾東岸地域では、木更津市高部32号墓が中台1式期に遡り、神門墳丘墓群に先行する可能性が高いが、市原市域では、円丘墓が上位にあり、現状資料による限り出現時期もこれに遅れる(註7)。

蛇谷遺跡は、草刈2式期に集落規模を極端に縮小する。この時期の中心は御林跡遺跡周辺に移動し、辺田1号墳が造墓される。辺田1号墳は、木棺の長大化が認められるものの、神門系譜の円丘系墓と考える。御林跡遺跡は和泉式期に集落規模を拡大するが、草刈3式期には一端規模を縮小させる(註8)。この時期、市原市域の遺跡分布には際だった変化が認められ、国分寺台地区では、膨張をとげた集落が極端に縮小し散在化する。これに対して集落分布の中心は、袖ヶ浦台地東京湾岸地域、村田川流域に移動し、袖ヶ浦台地東京湾岸では、前期において姉崎天神山古墳(全長130m)、今富塚山古墳(全長110m)、釈迦山古墳(全長93m)の定型的前方後円墳が造営される。また、村田川左岸では、前期において前方後円墳である大厩二子塚古墳(全長70m)、方墳(辺40m)ないし前方後方墳である親皇塚古墳、円墳の大厩浅間様古墳(径50m)が分布する。首長墓と集落分布がきわめて密接な関係をもって推移する状況を見ることができる。

(2) 地域間交流

後期環濠集落は、相模湾岸から東京湾西岸の荒川流域、大宮台地に濃密な分布が認められるが、相模湾沿岸地域、武蔵野台地における環濠集落の形成は、東海地方からの集団移住という具体的な事実をもって検証されつつある。一方、東京湾東岸地域の久ヶ原式・山田橋式土器は、外部からの影響に対して閉鎖的で、とくに山田橋式は、内部に段階的かつ交錯した地域色をみせる。土器地域性の発現形態は、情報の伝達をもたらす移住や流通の範囲、形態によると考えるが、当該地域における弥生時代後期の状況は、環濠形成の主因となる大規模な集団移住、また交易においては遠隔地との直接的な交渉を欠く、限定された日常的交通にもとづくものと推定する。この時期、方形周溝墓の副葬品は多様化し、前代の碧玉製・鉄石英製管玉とともに、多量のガラス玉、円環形の鉄釧・銅釧、鉄剣などがある。また、久ヶ原1式期を下限として磨製石斧は姿を消し、替わって鉄製工具類の普及が想定できる。しかし、管玉や円環形釧には破損品が数多くみられることから、遠隔地との直接的な交渉というよりも、接触的な伝播の累積によるものと考えられる。

しかし、山田橋式の閉鎖性は、列島規模の遠隔地交流の急速な拡大によって打破される。土器にみる多様な「系」の混在は、東海西部系を中心として、南中台遺跡では、北陸南西部系、近江系、大廓式(Fig.201-30)、二軒屋式、十王台式が確認できる。また、近接地域でもハケ整形台付甕や、房総半島南部から三浦半島を中心とする多段甕の再流入が認められる。多様な「系」の波及にともなう土器変化は、従来の器種構成に欠落する高杯、器台などの食膳形態の借用にはじまり、壺・甕においては無文化、胴部球形化を基本的な型式変化として同化、収束していく過程をとる。その型式内容は明らかに選択的かつ在来的であり、外来系の関与が即ち在地系の断絶的ではない。また、多様な系の混在は、弥生時代後期の相模湾沿岸地域、武蔵野台地における大規模な集団移住とは明らかに異なる背景によるものと考えられる。

しかし、国分寺台地区では、特定の系の継起的な出現が遺跡、地点単位で比較的鮮明に認められる。まず、中台1-1式から2-1式期には、長平台遺跡において東海地方西部系が、中台1-2式から2式

期には南中台遺跡、中台遺跡北辺部において北陸南西部系が、2-2式期には中台遺跡西辺部、蛇谷遺跡において畿内系があり、これらが継起する。畿内系については、弥生形のタタキ甕のみが目立つ状況があり、畿内中枢からの直接的な流入によるものとは即断できないが、少なくとも、東海地方西部系、北陸南西部系は、ほぼ全器種的な波及が認められる。

これら外来系の関与は、それぞれ排他的ではないが、北陸南西部系土器を多量に出土した南中台遺跡SI13は、竪穴形態も北陸地方とものと酷似する。北陸地方の竪穴で特徴的な蓋受け状の掘形をもつ貯蔵穴は、石川県塚崎遺跡、高橋セボネ遺跡などによると、おおむね月影式成立前後期に、竪穴内のやや中央部寄りから壁際に設置されるようになり、石川県宿東山遺跡15~18号住などは高島式段階に比定できる。比田井克仁が、「直接的に人々が移民してきたことをしめす有力な証拠」(比田井1987)とするように、おそらく、個人あるいは少人数の来訪者による定住を想定すべきであろう^(註9)。こうした事例は、長平台遺跡にもある。中台1-1式期の10号住居跡は、出土土器が東海西部系に限定され、その竪穴形態は、当該地域のこの時期のものとしては方形で、竪穴中央部に炉をもつ。とくに、南中台遺跡SI13は、集落内最大規模であることから、首長居宅と考えることができる。遠隔地からの来訪者が容易に定着し、首長に「共立」される状況は、この段階の集団原理と首長の特質を復元する上で重要な視点を提供してくれる。

弥生時代終末期における「交通」の拡大、その契機にかかわる要因は、少なくとも東国内部には認められない。しかし、中心地域における改革は、情報として拡散し、それに対する在地の積極的な受容姿勢の一端としてとらえられるのである。そして、当該地域は東日本におけるひとつの結節点となり、さらに連鎖的な波及をとげる。とくに段甕は、広範囲にわたる分布を認めることが可能であり、こうした動態を明らかにするためにも、地域編年の整備が不可欠と言えよう。

註

- (1) 御林跡遺跡については、2004年報告分を御林跡遺跡「I」、2008年報告分を御林跡遺跡「II」として表記しておく。
- (2) 中台遺跡150号住居跡90は、「長浜型」の可能性がある。中台遺跡8号住居跡40・41のく字甕は、口縁端部は鋭く尖り、40は沈線状の条線が巡る。口縁部はハケ整形ののち丁寧にヨコナデが施される。胴部はハケ整形によるが、40はタタキを前整形とする。ただし、弥生形タタキ甕や当該地域の形式Dとは考えにくい。一般的な長浜型の特徴とも異なるが、近江を含む畿内周辺地域に出自をもつ可能性が考えられる。なお、40は、口唇部に細かい刺突が巡る。
- (3) 蛇谷遺跡方形周溝墓報告資料をすべて実見することはできなかったが、報告第114図11・15はタタキ甕である。報告第114図11は再実測した(Fig.251-7)。編年図では、別に方形周溝墓第114図9(Fig.251-3)、第79号住居跡9(Fig.251-12)、第26B号住居跡7(Fig.254-24)を再実測している。
- (4) 北陸系土器については、赤澤徳明氏にご教示を頂いている。
- (5) 形式Aaは、御林跡遺跡II 239号遺構5(Fig.258-3)を基準とするが、同遺構自体はやや後出する。御林跡遺跡II 317号遺構18(Fig.258-4)より先行する器形的特徴をもつことから、編年表では便宜的に最古段階に置いておく。
- (6) 中台式は、基本的に鴨居上ノ台式を再構成したものである。「鴨居上ノ台」については、中台式・草刈式の多段の粘土紐積み上げ痕(輪積み痕)を残す甕形式Aについて、鴨居上ノ台形甕を限定的に呼称することとしたい。
- (7) 周溝一辺中央開口形の東1号墓(持塚6号墳)(田中1984)については、中台1式期に遡る。
- (8) 御林跡遺跡は、報告刊行前、国分寺台地区では唯一五領式から和泉式に継続する集落跡と考えていたが、草刈3-2式から南岩崎5a期の間は明確ではない。
- (9) 神奈川県伊勢原市坪ノ内久門寺遺跡では、玉造工房から北陸系土器が出土している。南中台遺跡の移住者もこうした技術をもっていた可能性があるが、現状資料では確たる証拠はない。
- (10) Fig.260・261の周辺遺跡群全体図は、弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構を抽出した。作成にあたっては、各報告書お

よび田中新史（田中2000）、浅利幸一（浅利1985・1994・2003ab）作成による掲載図を参考としている。神門墳丘墓群（古墳群）の突出部復原は田中新史の案による（田中1991）。なお、中台遺跡、天神台遺跡については、全体図での竪穴平面形態をもとにしており、弥生時代後期を含んでいる。整理途上のため、確定的なものではない。

文 献

- 青木勘時 2006 「大和地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 赤澤徳明・青木元邦 1995 『長泉寺遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第29集
- 赤澤徳明・青木元邦・坪田聡子 2000 「福井県の弥生時代後期を中心とする土器編年の概要」『東日本弥生時代後期の土器編年』第9回東日本埋蔵文化財研究会
- 赤塚次郎 1990 「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
- 赤塚次郎 1994 「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
- 赤塚次郎 1997 「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集
- 赤塚次郎・早野浩二 2001 「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2002 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集
- 浅利幸一 1985 「天神台遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和57・58年度』
- 浅利幸一 1989 「神門三号墳」『市原市文化財センター年報 昭和62年度』
- 浅利幸一 1994 「諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和63年度』
- 浅利幸一 1997 『市原市大厩浅間様古墳』財団法人市原市文化財センター調査報告書第42集
- 浅利幸一 2002 『市原市稲荷台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅸ 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 浅利幸一 2003a 「市原台遺跡群」『千葉県の歴史』資料編 考古2（弥生・古墳時代） 千葉県
- 浅利幸一 2003b 「諏訪台古墳群」『千葉県の歴史』資料編 考古2（弥生・古墳時代） 千葉県
- 安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号 日本考古学会
- 石川県考古学研究会 1986 『シンポジウム「月影式」土器について』報告編・資料編
- 石野博信・関川尚功 1976 『纏向』橿原考古学研究所
- 市毛勲・須田勉他 1974 『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ 上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 市毛勲・須田勉・新田栄治 1977 『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅳ 上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 伊藤基之他 1998 『桜林遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- 稲葉昭智 1993 『大竹遺跡群Ⅱ 二又堀遺跡・大竹古墳群』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第83集
- 大原正義・川島利道 1983 『富津市岩坂大台遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 大村直 1982 「前野町式・五領式の再評価」『神谷原Ⅲ』八王子市教育委員会
- 大村直 1987 『下鈴野遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第16集
- 大村直 1991 『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡 不特定遺跡発掘調査報告（1）』財団法人市原市文化財センター調査報告書第40集
- 大村直 1992 『市原市叶台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第44集
- 大村直 1994 「戸張一番割遺跡の甕形」『史館』第25号 史館同人
- 大村直 2006 『市原市南岩崎遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第1集
- 大村直 2007 「山田橋式補遺」『西相模考古』第16号 西相模考古学研究会
- 小川浩一 2008 『市原市海土遺跡群（三入道地区）』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第6集
- 小久貫隆史 1983 『千原台ニュータウンⅡ 草刈遺跡A区（第1次調査）・鶴牧古墳群・人形塚』財団法人千葉県文化財センター
- 小久貫隆史 1996 『市原市釈迦山古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会
- 忍澤成視 1999 『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 柿沼修平他 1979 『土宇』日本文化財研究所文化財調査報告6
- 柿沼修平・千田利明・青木幸一 1987 『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅲ』佐倉市大崎台遺跡B地区遺跡調査会
- 加藤修司 2000 「土器編年案」『千葉県文化財センター研究紀要』21
- 川崎みどり他 1999 『中狭間遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
- 川村浩司 1994 「関東南部における北陸系土器の様相について」『庄内式土器研究』Ⅵ 庄内式土器研究会
- 菊池健一 1990 「一つの甕から」『史館』第22号 史館同人
- 北島大輔 1998 「桜林遺跡出土古式土師器をめぐる諸問題」『桜林遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

- 北島大輔 2000「古墳出現期の広域編年 尾張低地部編年の提示、近畿・北陸地方との併行関係を中心に」『S字甕を考える』
第7回東海考古学フォーラム三重大会
- 北野博司 1987『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 木對和紀 2004『市原市御林跡遺跡・辺田古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告XII 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 木對和紀 2008『市原市御林跡遺跡II』上総国分寺台遺跡調査報告XVIII 市原市教育委員会
- 小出紳夫 2002『坊作遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告VI 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 小橋健司 2000『市原市片又木遺跡II』財団法人市原市文化財センター調査報告書第70集
- 小橋健司 2002『市原市加茂遺跡D地点』財団法人市原市文化財センター調査報告書第82集
- 小橋健司 2006『市原市長平台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告XVI 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 小林清隆・大谷弘幸 2006『千原台ニュータウンXIV 市原市草刈遺跡(D区・E区)』千葉県教育振興財団調査報告第535集
- 小林清隆・麻生正信 2007『千原台ニュータウンXVII 市原市草刈遺跡(K区)』千葉県教育振興財団調査報告第565集
- 斉木勝・種田齊吾・菊池真太郎 1974『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社
- 三森俊彦・阪田正一 1974『市原市大厩遺跡』財団法人千葉県都市公社
- 白井久美子 1981「市原市上総国分寺台出土の東海系有段口縁甕形土器」『古代』第71号 早稲田大学考古学会
- 白井久美子・田島新他 1994『千原台ニュータウンVI 草刈六之台遺跡』千葉県文化財センター調査報告第241集
- 菅谷通保 1993『千葉県茂原市国府関遺跡』(財)長生郡市文化財センター調査報告第15集
- 高田博 1986『千原台ニュータウンIII 草刈遺跡(B区)』財団法人千葉県文化財センター
- 高橋康男 1985『草刈遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第6集
- 高橋康男 2002『市原市向原台遺跡・東向原遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告VII 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 高橋康男・櫻井敦史 2002『市原市南祇園原遺跡・持塚5号墳・上神台塚群』上総国分寺台遺跡調査報告VIII 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 田嶋明人 1986『漆町遺跡出土土器の編年の考察』『漆町遺跡I』石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2006「『白江式』再考」『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集 桂書房
- 田中清美 1989『千草山遺跡・東千草山遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第29集
- 田中新史 1976『南向原遺跡』『南向原 古墳・方形周溝墓・住居址の調査』上総国分寺台遺跡調査報告II 上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 田中新史 1977「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会
- 田中新史 1980「古墳の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 田中新史 1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号 早稲田大学考古学会
- 田中新史 1991「神門3・4・5号墳と古墳の出現」『歴博フォーラム 邪馬台国時代の東日本』六興出版
- 田中新史 2000『上総市原台の光芒 市原古墳群調査と上総国分寺台遺跡調査団』市原古墳群刊行会
- 田中清美・鈴木英啓 1981『唐崎台遺跡 千葉県市原市能満唐崎台における弥生時代後期の集落址の発掘』唐崎台遺跡発掘調査団・市原市教育委員会
- 田中信夫・赤塚次郎他 1984『勝川』愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書第1集
- 辻美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学 大阪大学考古学研究室10周年記念論集』大阪大学考古学研究室
- 辻美紀 2002「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告IX』財団法人大阪市文化財協会
- 寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊
- 寺沢薫 2002「布留0式土器の新・古相と二・三の問題」『箸墓古墳周辺の調査』奈良県立橿原考古学研究所
- 豊岡卓之 1999『纏向 第5版 補遺篇』奈良県立橿原考古学研究所
- 永沼律朗 1992『市原市今富塚山古墳確認調査報告書』千葉県文化財センター調査報告書第221集
- 西原崇浩 2002『高部古墳群I 前期古墳の調査』千束台遺跡群発掘調査報告書VI 木更津市教育委員会
- 西村歩・池峯龍彦 2006「和泉地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 蜂屋孝之・小橋健司 1999『市原市山田橋表通遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第28集
- 半田堅三 2004『市原市台遺跡B地点』上総国分寺台遺跡調査報告X 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 樋上昇 2002『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集

比田井克仁 1987「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号 早稲田大学考古学会
比田井克仁 1993「小さな壺から 西方社会へのささやかな抵抗」『史館』第24号 史館同人
平野元三郎・対馬郁夫・谷島一馬・菊池義次 1975『天神台遺跡発掘調査概報』上総国分寺台遺跡発掘調査団・市原市教育委員会
藤崎芳樹 1982『市原市番後台・神明台遺跡』財団法人千葉県文化財センター
堀大介 2002「古墳成立期の土器編年 北陸南西部を中心に」『朝日山』朝日町文化財調査報告書第3集
松本百合子 2002『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅳ』財団法人大阪市文化財協会
安井健一・鶴岡英一 2005『西広貝塚Ⅰ』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅳ 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
山口典子 1989『千葉市荒久遺跡(1)』千葉県文化財センター第153集
山本哲也 1992『文協遺跡』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第69集
吉岡康暢・小嶋芳孝・田嶋明人他 1976「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』石川県教育委員会
吉廻純・大村直 1981『神谷原Ⅰ』八王子市教育委員会

印刷制作仕様

使用ソフト・ファイル形式

OS Microsoft WindowsXP SP2
編集・レイアウト Adobe InDesign CS2 (4.0.5)
挿図レイアウト・トレース Adobe IllustratorCS2 (12.0.1) AI 形式
全体図作成 PlugX-Shape 3.0 (Adobe Illustrator プラグイン)
画像・レタッチ Adobe Photoshop CS2 (9.0.2)・CS3 (10.0.1) PSD 形式

データ内容(画像解像度等)

挿図(遺構図・南中台遺跡石器等) デジタルトレース
挿図(遺物図) アナログトレース(モノクロ2階調 1200 ppi)
写真図版 350～400ppi(グレースケール・CMYK カラー)

使用フォント 小塚 Open Type Pro

印刷仕様

本文 AM スクリーン 175 線(本文内挿図、写真を含む)
写真図版 FM スクリーン 20 μ

用紙

表紙 紀州の色上質(肌色)、表面マット PP 加工 四六判超厚口
見返し ニューパールカラー RE(クリーム) A判 64.0kg
扉・中身 琥珀 A判 46.5kg
写真図版 ニューエイジ A判 70.5kg

PDF

印刷分のPDF(1.4)は、Adobe Acrobat 7.0によるPDF設定の「標準」を基本。写真図版遺物RGB版PDF(1.4)については、画像をバイキュービックダウンサンプル300ppi、圧縮自動(JPEG)、画質最高とし、撮影時のICCプロファイル(Adobe RGB 1998)を埋め込む。アンシャープマスク処理は行っていない。制作時モニタ設定は、色温度5000K、ガンマ値2.0である。閲覧環境によって、色調は変化する。

閲覧のためには、Adobe Acrobat Reader5.0以降(無償版)、ないしはAdobe Acrobat(製品版)が必要である。

本報告書の作成は、以下の補助員が担当した(五十音順)。

阿部信代(遺構・遺物・実測)、安藤真由美(実測・DTP)、川原麻恵(実測・DTP)、河面登美枝(挿図)、河野美佐子(遺物・実測)、栗須裕子(実測)、鈴木麻美(実測・DTP)、鈴木由紀子(遺構・遺物・実測)、清宮きよ子(遺構・実測・挿図・DTP)、田中和美(DTP)、中尾百合子(挿図)、中根和子(挿図)、半沢敏子(トレース)、松本明子(実測)、松本松代(遺構・遺物・実測)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いちはらしみなみなこんだいいせき・あらくいせきえーちてん							
書 名	市原市南中台遺跡・荒久遺跡A地点							
副書名	上総国分寺台遺跡調査報告							
巻 次	XX							
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	大村直・鶴岡英一							
編集機関	市原市教育委員会（市原市埋蔵文化財調査センター）							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436(41)9000							
発行年月日	2009年（平成21年）3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みなみなこんだいいせき 南中台遺跡	ちばけんいちほらしこくぶんじだい 千葉県市原市国分寺台 ちゅうおう 中央1丁目5・6番地他	12219	754	35° 29′ 45″	140° 7′ 2″	197305～ 197312	18,250	土地区画整理 事業
あらくいせき 荒久遺跡A地点	ちばけんいちほらしそうじゃ 千葉県市原市惣社 1丁目1番地	12219	751	35° 29′ 48″	140° 6′ 51″	19711201～ 19720320	4,380	土地区画整理 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南中台遺跡	包蔵地 集落跡 貝塚	縄文時代	竪穴建物6棟 土坑2基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、カラワケ、石器、鉄器（穂摘具・刀子・鏃・紡錘車・鏃状他）、銅腕、銭、刀装具、土器片錘、石製紡錘車、瓦類、埴等		縄文時代後期から晩期の貝塚をともしなう集落。北陸系土器を多量に出土した、弥生時代終末期を中心とする集落。		
		弥生時代終末期～古墳時代前期	竪穴建物44棟					
		奈良・平安時代	竪穴建物32棟					
		中世	土坑2基 常滑大甕埋納遺構1基 鉄釘集中地点1基					
		各時代総数	竪穴建物83棟 土坑5基 常滑大甕埋納遺構1基 鉄釘集中地点1基 溝22条					
荒久遺跡A地点	包蔵地 集落跡 寺院	奈良・平安時代	竪穴建物34棟 掘立柱建物4棟 溝5条 土坑1基	縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄器（穂摘具・刀子・鏃・紡錘車他）、瓦類、埴等		上総国分僧寺跡関連遺跡であり、僧寺跡東側に隣接。僧寺寺院地外郭溝の北東隅部を検出。		

緯度経度は、世界測地系。

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第 10 集

上総国分寺台遺跡調査報告 XX

市原市南中台遺跡・荒久遺跡 A 地点

平成 21 年 3 月 26 日 発行

編集発行 市原市教育委員会
埋蔵文化財調査センター
市原市能満 1489 番地
TEL 0436(41) 9000

印刷 三陽工業株式会社
市原市五井 5510 番地 1
TEL 0436(22) 4348